THE CENTRAL REVIEW

中央公論

9—1929

九月號

第四十四年 第九號 第五百號

昭和四年九月一日發行（毎月一回一日發行）

44


頭痛と歯痛に
ブラミン
本剤特有の鎮静作用により
二・三錠にて忽ち＝快癒
價 二十錢 三十錢 五十錢 一円 ●各藥店にあり
【主効】
頭痛、歯痛、船車の暈
不眠症、神經痛、感冒
リウマチス、慢性關節炎
東京 大阪 丹平商會

新刊

マルサス人口論の研究

長崎高商教授 伊藤久秋著

讀まれざるマルサス！歎聲は既に彼が生前にあつた。今、果して幾何を變じたか。ネオ・マルサス主義の勃興により彼の名はまた唇頭を往來す、併しそれはボナーが適切にも言つた如く磨滅したる通貨の轉々流通するが如きものではなからうか。マルサス再讀は果して閑事である乎

時代は、かの人口論のマルサスに關心すること依然頻りである。蓋し人口論全體に關する解說はなほ大に要求せらるべきで、その爲めには必然時代の反響を一瞥するの要がある。それが最肝要事である。從つて本書の主調はマルサス人口論を主として其の時代の反映に於て見んとする所に在る。故に本書の內容は人口論の解釋と當時の反響とに二分される。マルサス人口論に對する批評は、本書當來の目的でないが、然し解釋は既に或る。程度に於て問題の批評である限り、また批評家の批評を取扱ふに當つて必要なる限り、ただに著者自身の光つた批評が隨所に介在して心讀を要求するばかりでなく、近時のマルサス批評家に就ても、論述の途、しばしば引用又は援用されて居るから、いろいろに學者を嘉惠する。その材料は著者が英國滯在中聚め得たるもの、世に現はれざる批評家を多く紹介されたのは、分けて貴重される。

菊判クロース裝 定價三圓卅錢
四一五頁 索引六頁 送料十八錢

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋 横濱 福岡 仙臺 札幌
東京＝神田・三田・早稻田・丸ビル

フィルム界の花形

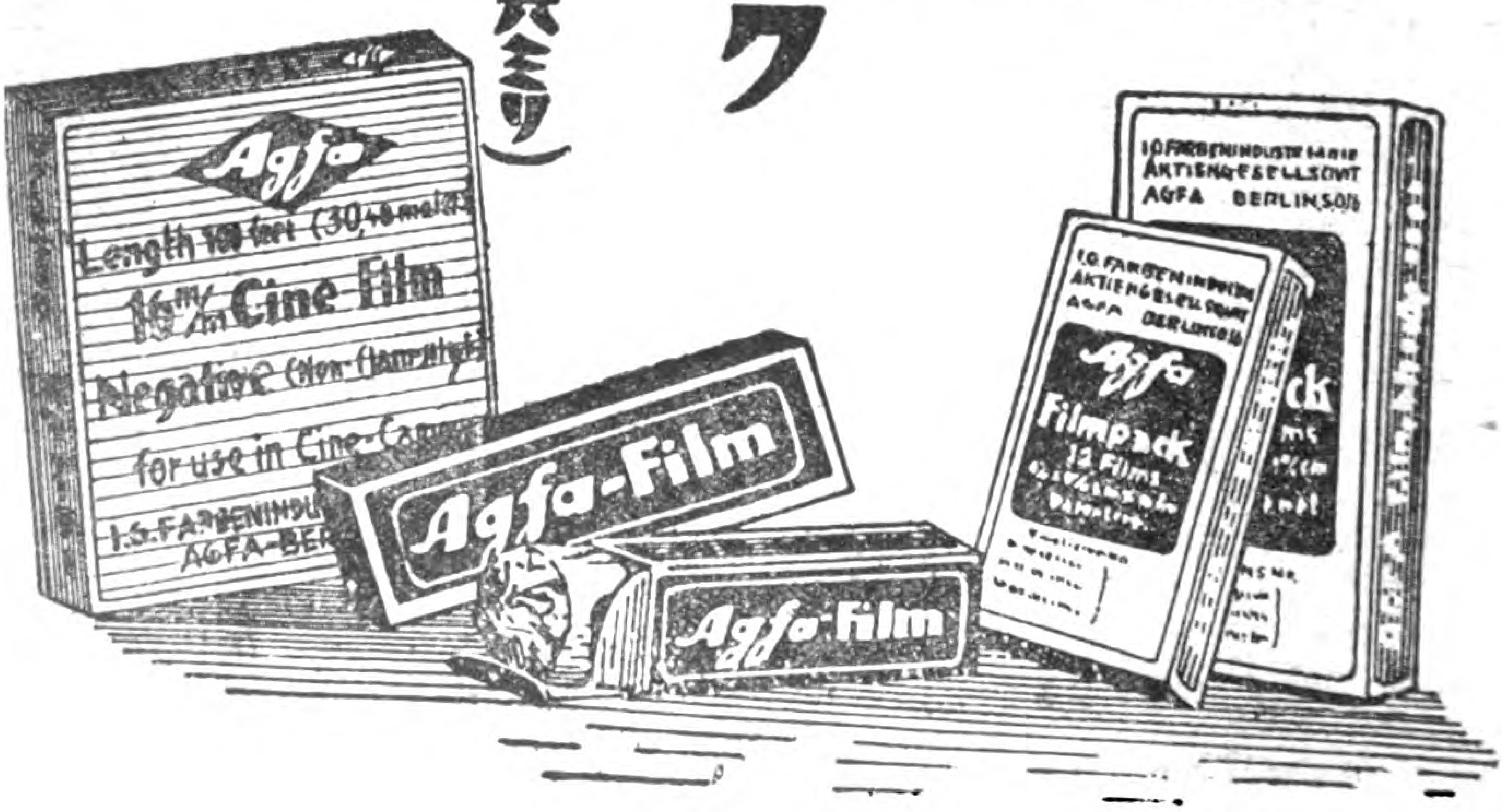
アグファロールフィルム

アグファフィルムパック

アグファキネフィルム（十六ミリ）

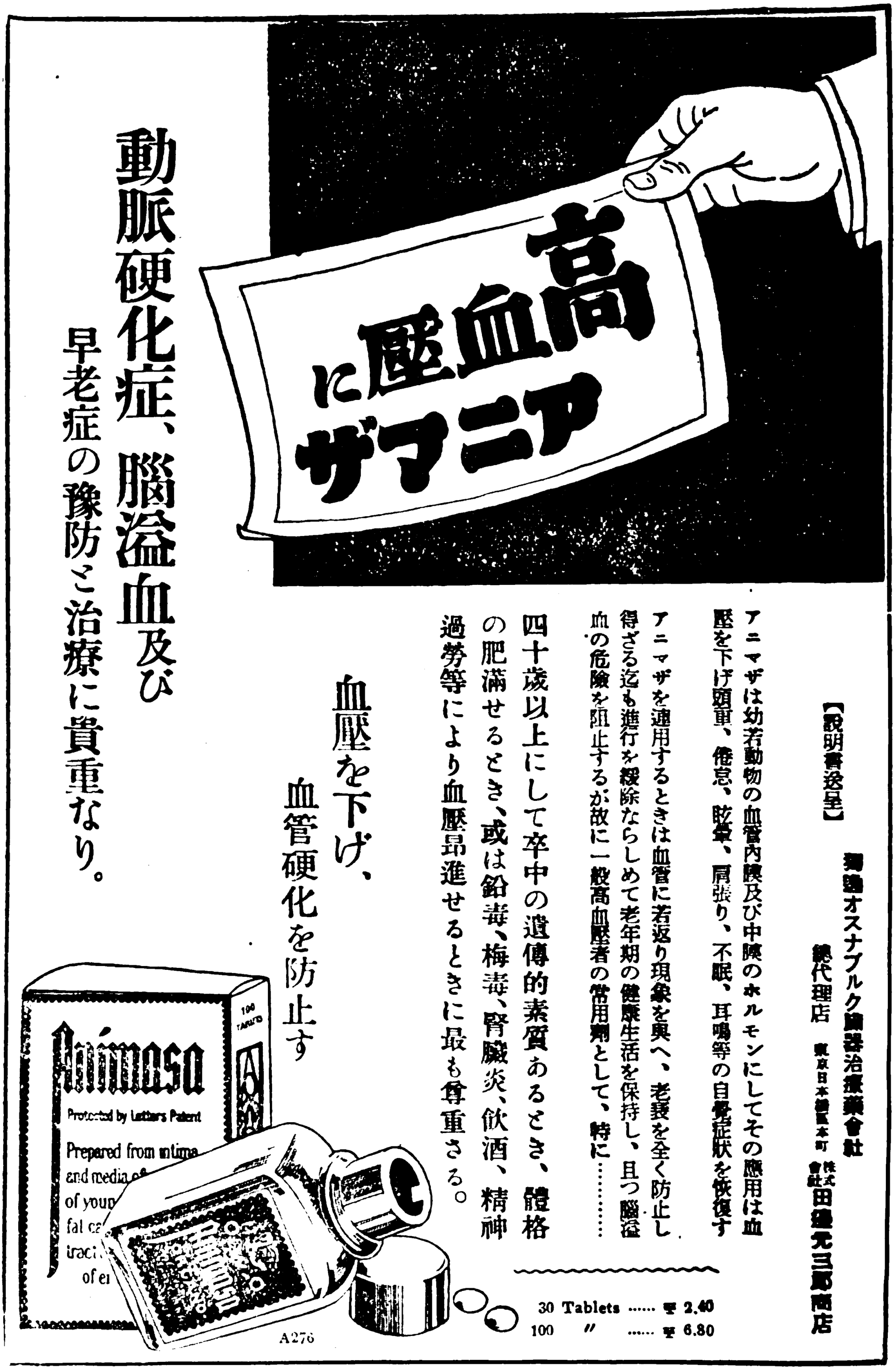
東京・大阪

アグファ合名会社





良夜　　小林古徑筆



高血壓にアニマザ
動脈硬化症、腦溢血及び
早老症の豫防と治療に貴重なり。
血壓を下げ、
血管硬化を防止す
Animasa
Protected by Letters Patent
Prepared from intima
獨逸オスナブルク臓器治療藥會社
總代理店　東京日本橋區本町　株式會社田邊元三郎商店
【說明書送呈】
アニマザは幼若動物の血管內膜及び中膜のホルモンにしてその應用は血壓を下げ頭重、倦怠、眩暈、肩張り、不眠、耳鳴等の自覺症狀を恢復す
アニマザを適用するときは血管に若返り現象を與へ、老衰を全く防止し得ざる迄も進行を緩除ならしめて老年期の健康生活を保持し、且つ腦溢血の危險を阻止するが故に一般高血壓者の常用劑として、特に…………
四十歲以上にして卒中の遺傳的素質あるとき、體格の肥滿せるとき、或は鉛毒、梅毒、腎臟炎、飲酒、精神過勞等により血壓昂進せるときに最も尊重さる。
30 Tablets …… ￥2.40
100 〃 …… ￥6.80
A276

露支紛爭の合理的解決を望む

——(卷頭言)——

他國の領土内に廣大な利權を擁有すると云ふは何と謂ても不自然の狀態たるを免れぬ。其國の民人が之を喜ばぬ時に於て最も然りとする。況んや時勢は轉回して今や寧ろ强者を制し弱者を扶掖せんとするに傾けるに於てをや。故に大勢の達觀に於ては、斯種の不自然は終に到底矯正せられざるを得ざるものであらう。

但し他國領土内に廣大なる利權を設定すると云ふ事も元と藪から棒に突如として起つたものではない。多くの場合之には相當の沿革がある。其外よかれ惡しかれ永く之を許容して置いた事實から別に生ずる複雜な既成關係と云ふものもある。之を更に永く放任すれば不自然たりし狀態も遂に自然の狀態と變つてしまふが、否らずとするも、一圖に原狀の自然に復せんと急けば時として事後の既成關係を紛更すると云ふ第二の不自然を釀成せぬと限らない。國際紛爭の解決には兎角斯うした困難を伴ふ場合が多い。

而して斯かる場合には、其儘では兩立し得ざる二つの原則が相對立することになる。一は根本的な抽象的正義の要求に基く主張である、二は既成の秩序の尊重を第一義とする主張である。今度の露支紛爭に於て支那の據るところは第一の立場であり、露西亞のは第二の立場である。本來根本的理論に偏執し現實の顧慮を醜陋と罵り來りし露西亞が、一轉して現狀尊重の主義を執りその平素極力排斥する所の武力對抗策を以て飽くまで支那を强壓せんとするのは、亦近來の一奇觀たるを失はぬ。

この紛爭に於て支那が勝つか露西亞が勝つか。昔なら力の强い方の勝つに間違はなかつたが今日は必ずしも然うばかりは行かぬ。弱い方の言ひ分の通り難きは疑ないとして、流石に時代の進運は强いからとて無理を推通すを許さず、爭の解決に方て道理の口を利ける部分を著しく廣めたことも認めざるを得ぬ。露支兩國が今にも兵火を交へそうにして而かせざるは、必ずしも始めから戰意なかりしが爲めとのみ觀ることは出來ない。

我が日本は這の形勢に乘り、須らく紛爭兩國の解決をして出來るだけ道理の所命に聽從せしめる樣努めなくてはならぬ。單に利害の點から謂ても、我國は支那の此上不當に圖に乘り來るを不利とし、又ソヴィエト露西亞の今日以上東亞に跳梁するを不快とする。滿蒙の天地に深甚の利害關係を有する我が國として此際紛爭國の一方に偏するは、宛も前門虎を防いで後門狼を入るの嫌なしとせぬから、最も有利にして且つ正しい態度は、第一次に完全なる中立であり第二次には道理に由る解決の促進でなければならぬ。東洋平和の擁護者としての地位から謂ても、こは我國の當然の責務であらう。

露支兩國の關係は或意味に於てまた日支兩國の關係である。露國今日の受難を誰か能く他日我國も蒙ることなしと斷言し得よう。私共は寧ろ、我々の近き將來に直面すべかりし難問題を露西亞が先づ處理して呉れることを喜ばなければならない。其意味に於ても露支兩國の關係をして合理的の解決に到達せしむることが必要である。國際問題といへば——就中滿蒙問題の如きに於ては、動もすれば常規を逸した固陋の見に誘はれ勝な我國民に取て、露支兩國の與へた先蹤は確かに對外思想開拓の有力な助けとなるべきを以てである。故に兩國の合理的解決の成功は、我國將來の對支外交の發展の上に必要であり、殊にまた國民思想の正しい開拓の爲に大に必要である。

中央公論

第四十四年第九號
九月號
五百號

勞働の責務と權利と作用

牧野英一

あらかじめことわつておく。わたくしは、クリミナリストとして刑法のことを論じて見たいとおもふだけである。論ぜむとするところは、勞働といふことを中心として國家と個人との責務と權利とを考へようといふのであるが、しかし、刑法の範圍においてこれを爲し、クリミナリストとしてのわたくしの立場においてこれを試みるのである。

◇

率直に結論からさきに述べることとしよう。わたくしは、刑法、なかんづく行刑に關する最近の思想にかんがみて、行刑における三位一體といふことを主張してゐる。第一に、行刑において、受刑者は、すべて人としてはたらかねばならぬのである。第二に、行刑において、受刑者は、すべてその勞働によつて修養せねばならぬのである。さうして、第三に、行刑において、受刑者は、すべてその勞働において經濟上の能率を發揮せねばならぬのである。これを行刑上の三位一體と名づける。かやうに三箇の原則を立て、かやうにこれを配列して見ようとするのは、わたくしのほしいままな仕業である。しかし、わたくしの見るところがまちがひないならば、行刑をかやうに運用して行かうといふことは、諸國におけるクリミナリストの最近の努力の標的であり、さうして、また、實に諸國において實際化されつつあるところなのである。いふまでもなく、わが邦における學説も亦漸次にさういふ方向に向つてゐるのであり、また、實際が大にその方針を採つてゐるのである。

第一に、監獄における人人は、大にはたらかねばならぬのである。大にはたらくといふことは人としての務めである。人としてのその務めを全うすべく監獄においてはすべての人が、はたらくのであり、また、はたらかされるのである。

第二に、監獄における人人は、そのはたらきを愉快とし、全精神をそのはたらきに打ち込むことに因つて、その修養を全うせねばならぬのである。はたらかないで暮らさねばならぬといふことほど人の心を惱ましめるものはない。同時に、自分の好みと技能とにそはないはたらきをはたらかねばならぬことほど、また人の心を暗くするものはない。はたらきに因つて人は修養しなければならぬと同時に、人は修養し得るやうにはたらかしめられねばならぬ。

第三に、監獄における人人は、そのはたらきによつて經濟上の能率を發揮せねばならぬ。そもそも、人の務めであるはたらきは、人の世において意味あるものでなければならぬ。自己の好みと技能とは人の世のために意味あるものたる場合において、それが錬磨され保護されねばならぬといふことになる。されば、監獄における人人は、人の世のために有意義

にはたらかねばならぬと同時に、監獄は、その人人を、人の世のために有意義にはたらかせねばならぬ。この意味において、監獄は、少くとも自給自足を全うしてゆかねばならぬのである。

右のやうな考へを、或る人が批評して、平凡なことだとあざ笑つた。わたくしも、また、これを格別な創意ともおもつてゐないし、特殊な考案ともおもつてゐるのではない。しかし、これは、刑法範圍においては、漸やく、近頃になつて專門家の側に氣づかれるところとなつたものである。

しかし、また、胸に手をおいて考へても見たい。すべての人がはたらくと同時にはたらかせられ、(さうして見ると、そこには失業がないわけである)、すべての人が修養としてはたらき、又修養としてはたらかせられ、(さうして見ると、そこには、勞働が少くとも苦痛をもつて始終するものではないことになる)、さうして、すべての人がそのはたらきに關つて經濟上の能率を發揮し得るものとするならば、(さうして見ると、そこには、極貧といふことがないわけである)、それは果して如何なる社會であるべきであらうか。われわれクリミナリストは、それは監獄であると答へようとしてゐるのである。

◇

甲某が、政治上の見解を異にするといふ理由をもつて、乙某を刺し殺したとかいふ事件があつた。甲某は、特殊の政治團體に屬してゐる者で、乙某も亦、特殊の政黨の人であつたとかいふのである。裁判所は、それが政治上の意見の相違に基づいたもので、私怨の關係に出てゐるのでないからとして、懲役十二年の言渡をしたとか新聞紙が報じてゐる。裁判所が、實質に、如何なる情狀を認め、如何なる理由の下に、その裁判を下したのかは、わたくしは事をつまびらかにしてゐない。しかし、世の中ではさもありなんといふやうな顏つきをしてゐる人が少くないやうである。殺人に對する刑が死刑

か無期刑かでなければならぬといふやうな古い思想は、明治の末に舊刑法が廢止せられてからすたれたことになつてゐる。新刑法が實施せられてからはや二十年、殺人の刑は懲役三年にまで下り得るもので場合に依つては執行猶豫もできるといふやうなことは常識になつてしまつた。懲役十二年といふやうなところは、まづ重くもなし、さりとて輕くもなし、といふくらゐに考へられてゐるのではなからうか。

わたくしはその事件を批評し、殊にその裁判を論議するつもりはない。新聞紙に依つて報道せられたところを基礎として議論をすすめるといふことは、學問上の仕事としては許されない。それで、ただ、わたくしは、新聞紙に書いてあるあのやうな事件の、あのやうな被告人に關し、われわれが一般に想像し得る範圍において、事を考へて見ようとおもふものである。

結果が、殺人といへば特に重大なものであることはいふまでもない。動機が私怨に出たのでないとすれば、それは固よりいはゆる憐い情狀のものに屬するにちがひない。しかし、その外に、わたくしは、被告人の素行といふやうなことを考へたい。日本國民として分相應に眞面目な生業を營んでゐる人であつたらうか。眞面目な交友の間に生活してゐた人であつたらうか。若し、さうでなかつたとするならば、その者に、眞面目なはたらき、眞面目な生活を敎へ込む必要がある。次に、被告人の昂奮性といふやうなことを考へたい。政治上の意見の衝突は、人をして時として異常に昂奮せしめるものである。故に、昂奮性の特に異常な人に對しては、これが政治上の問題に關し正常の程度以上に深入りすることを戒しめる必要がある。固より、國民としては何人も政治に無關心であり得るものでない。しかし、行爲には正常の程度とそれを超えるものとの差別がある。分別のあるべき年齡でありながら、正常の程度を超えて政治問題に沒頭することは、それ自體直ちに社會的に危險性の重いものといふことを得ないにしても、その沒頭がやがて社會的に危險性の重い行爲に機緣を與へることが大きいのである。場合に依つては、その意味において、それは、やはり、社會的に危險性の重い行爲である

といはねばならぬ。さうして、更に、その政治的見解の社會的意義を吟味する必要がある。政治上の意見にに保守的なものと進歩的なものとのちがひがある。その保守的なるは固よりよしとして、それが一歩をあやまるにおいては頑迷となるのであるし、その進歩的なるは當然にこれを承認すべきものとして、それが程度を超えるときは空想となるのである。頑迷と空想とは共にこれを排斥せねばならぬこと勿論であるが、社會の進歩に對する關係について見るときは、兩者の間に大きな差異がある。頑迷なる思想と社會とは、社會の進歩が發展するに從つて互に相隔たるものであるが、空想的な思想に對しては、社會はその進歩をつづけるに從つてこれに近づかむとするのである。故に、語を强めていふときは、犯罪が頑迷な思想に因るときは、その犯罪性は永久に消滅する機會のないものであるが、それが空想的なものに基づくときは、その犯罪性は或時機においては消滅すべき性質のものである。更に、他の語をもつてするときは、頑迷な思想に因る犯罪に對しては、社會は常に鬪はねばならぬのであるが、空想的な犯罪に對しては、社會は、永く爭ひ、これをコントロールすると同時に、これから一種の示唆を受け、一種の刺戟を受け、そこに一種の促進運動を感じ、そこに一種の牽引運動を自覺するわけであるのである。一はいはゆるアタヴィツクな犯罪であるに對して、他はいはゆるエヴォリユーテイーヴなそれである。犯罪の一種を進化的なものとして、犯罪が社會を進化せしめるといふが如きは、語に過ぎたるものがあらうが、しかし、社會の進歩は、多くの場合において若干の犧牲を出すものであるといふときは、それは歷史の明かに示すところであるといはねばならぬ。さて、政治上の動機に出づる犯罪については、頑迷な思想に因るものと、空想的なそれに基づくものとの間に處遇の差異を認めねばならぬものがあるといふことは、かくしておのづから理解し得られるであらう。

なほ、犯人の犯罪後の行動といふことが考慮されねばならぬ。犯人は眞にその行爲を悔悟したであらうか、また、特に被害者に對する損害の賠償に努力したであらうか。これ等の事項は起訴猶豫の條件としてわが刑事訴訟法に規定せられるところであるが、同時に、これは、刑罰量定の基礎にもなるべきものである。

さて、裁判所は、その十二年の刑を言渡すことに因つて如何なる結果を期待し得べきものとするのであらうか。その裁判は、應報思想――これは、わたくしから見れば素朴的な又は形而上的な考へとしかおもはれないものである――を基礎として論じたもので、その殺人といふ不法行爲に對して衡平な分量においての刑罰を裁量したのに過ぎないとするのであるならば、わたくしとしては多くを論ずる必要はない。かやうな趣旨では、國家は、ただ、刑として、應報思想の命ずるところに從ひ、犯人に一定量の苦痛を科することをもつて滿足すべきであるので、十二年ののち、犯人が釋放せらるべき日に、犯人が改善せらるべきや否やは問題とされることがないからである。ただ、その十二年の懲役の言渡に依つて、其の人人が十分に威嚇されたであらうとみづから誇ることにならう。さうして、おそらくは、被害者側に對しても、これに因つて、その不法行爲が國家から看過せられなかつたとの滿足を與へたことであらうとして、わたくしから見れば、甚だ安價な自己陶醉にふけつてゐることになるのである。

敢て問ふ。かやうに考へることは、果して、殺人の刑を單に死刑無期刑に止めなかつたわが刑法の眞の精神と理解すべきものであらうか。殊に、わが刑法には、假出獄の要件を規定して比較的に甚だ寛大なものがあるのである。懲役十二年の言渡に對しては、その三分の一、すなはち四年を經過するののち、犯人に改悛の情あるにおいては、それに對して假出獄を許すことができるのである。假出獄は行政官廳の自由裁量に屬するので、犯人は四年の經過に因つて當然に釋放されるのではないが、しかし、法律は一方においてしかく寛大に規定してゐることを注意せねばならぬ。しからば、他方において懲役十二年といふことは、改悛の時期をもつて刑の終期と爲すべきことを示したわが刑法の運用上果して適當な仕方であつたかと疑ひ得るのでもあるまいか。

わたくしは、刑の教育的效果といふことを考へてゐる。その故をもつて、わたくしはかやうに論じて見たいのである。刑は教育の一種であるといふのがわれわれの主張である。犯人をして、再び社會に復歸し、そこに人としてはたらくこと

を得しめるが爲めに、人としてはたらくことを練習せしめ、人として修養することを練習せしめ、人として能率を擧げることを練習せしめようといふのである。わたくしは、裁判所が言渡した十二年の刑を是非するつもりはない。ただ、それが教育的見地から言渡されたことを希望し、また、其の人人に對しても、それを教育的見地から理解してほしいとおもひ、さうして、しかく希望に堪へない故をもつてしかく疑を述べて見ようといふのである。

◇

說教強盜といふことが、一時世の中をさわがしたことがあつた。說教強盜の本體が如何なるものであつたかは、裁判の結果として、まだ公にされたものがないやうである。しかし、兎にかく、それが甚しく世の中をおどろかし恐れしめたことは疑ひないので、かやうな犯罪に對しては、嚴重な刑が規定されねばならぬ。刑法をそのやうに改正せねばならぬといふことになつた。わが刑法では、強盜は五年以上の有期懲役に處せられることになつてゐるので、それに對しては十五年までの言渡ができることになつてゐる。――最少限が五年であるために、それに酌量減輕を認めても刑の執行猶豫ができないことになつてゐる。――それが若し累犯であるならば二十年に至り得るのである。強盜が婦女をはづかしめたといふのを聞くことがある。そのときは、無期又は七年以上の有期懲役といふことになつてゐる。その強姦が未遂に終つた場合にも原則として刑は右におなじ。ただ、その未遂の理由をもつて裁判所は減輕することを得るだけである。強盜が、現場において逮捕を免れるとか、その他どんなかの動機に出て、人を殺したとき又は人を殺さむとしたときは、死刑又は無期懲役になる。ただ、人を殺さむとして遂げなかつたときには、未遂の理由をもつて、その無期懲役を七年にまで減輕することができる。さて、世の人人は、わが刑法がかやうに規定してゐることを知つてか、知らなくてか說教強盜の類には重い刑が科せられるやうに刑法の改正が望ましいとしてゐるのである。これは、素人の人々が問題にしてゐるばかりでなく、

現に立法府でも問題とされたところである。

さて、裁判所は、世の強盜一般に對して如何なる刑を言渡してゐるであらうか。この點につき、わたくしには統計的研究が十分でない。しかし、世の人々が強盜に對しては重い刑を科せねばならぬとさわぎ立てるところを見ると、裁判所が從來、強盜に對し刑法の規定を適當に適用してゐないところがあるのではないかを疑はねばならぬものがある。尤も、強盜と一概にいつても、その情狀にはいろいろある。それにしても、わが刑法は酌量減輕を爲す場合の外は五年を下り得ないことにしてゐる。重きは十五年、二十年、無期刑、さうして死刑にまで至り得るのであるが、世の人々は、強盜の現在の處分をもつて手ぬるしと考へてゐるのである。

裁判が場合に依つて不當に輕きに失するといふ事實もないではないやうである。しかし、わたくしは、世の人々が必しも強盜に對する裁判の實例を知ることなく、ただ、素朴的に裁判のいかがあるべきかを一應想像し、さうして、その想像のやうでは輕きに失するものと考へるのではなからうかともおもふ。世の人々の心の中には、犯人に對する一種の同情心があつて、輕くさばくのを名裁判とするやうな考へ方がある。さりとて、また、眼前にあらはれた説敎強盜の恐怖から考へて見ると、何とかしてこれに重き制裁をといふ心持にもならざるを得ないのである。

さもあらばあれ、十五年、二十年、無期刑、死刑にまでなり得る制度が輕きに過ぎるとなると、どういふ風に刑法を改正すればいゝことになるものであらうか。こゝに考へつかれるのは不定期刑といふことである。裁判上刑期を豫め確定しないで、犯人に改悛の情明かなるに至るまでこれを監獄に拘禁するといふ制度である。おそらくは、この際、死刑に處すべき場合を立法上增すべきであると主張する人はあまりあるまいとおもふ。一時の昂奮のためにさういふ議論をする人があつても――尤も死刑を主張するところに男らしい强みがあらはれるといふやうに考へてゐる人もあるやうであるが――臨時法制審議會は、刑法改正の綱領を定めてゐるなかに、死刑無期刑を科すべき場合を現行法におけるよりも更に減少せ

しめるべき旨を議決してゐるのである。

死刑論のことは、あとで別に考へることにして、無期刑について考へて見ると、無期刑に處せられた者は、十年を經過したのち、假出獄を許され得ることになつてゐる。それで、實は、無期刑は、十年以上無期までの範圍における不定期刑であるのである。われわれは、無期刑といふ語に代へて絶對不定期刑といふ語をもつてせむと欲する。何となれば、不定期刑といふ語には、無期刑といふのに比して、受刑者に一種の希望を與へる趣旨を明かにしてゐるものがあるからである――わたくしは、おなじく重い刑を意味する場合においても、教育刑論の立場から、常に受刑者に希望を與へるの途を開いておきたいとおもふのである。

さて、説教強盜の類に重い刑を科することにせねばならぬことにして見ると、不定期刑といふことが相當に考へられねばならぬことである。現行の制度では、受刑者が、言渡された一定の刑期を滿了したときは、當然それを釋放せねばならぬのであるから、それでは、危險性の濃厚な犯人に對する社會防衛は甚だ不完全なるを免れないのである。それで、さういふ種類の者には不定期刑を言渡す必要がある。また、現在の裁判所では、被害事實が比較的に輕く見える場合においては法律上規定せられてゐる刑の最上限を言渡すのにためらふことが多い。この點から考へて見ても、不定期刑の制度を採ることにすれば事態の弊を救ふことができよう。

現行法の範圍について見ると、強盜罪の刑は上に述べたやうに、懲役五年以上十五年以下である。その十五年すなはち最大限を言渡すことにして見ると、その三分の一の五年目から假出獄を許すことができる。それでその言渡は、實際において、五年以上十五年以下の不定期刑といふことになつてゐるのである。これは、さきに述べた絶對的不定期刑に對して相對的不定期刑と呼ばれるものである。それで、わたくしは、新刑法制定の際、言渡す刑はむしろ重かれ、さうして假出獄に依つて實際上の調節を全うすべきであると論じて見たことであつた。しかるに、わたくしのその議論は甚しく異端的

にひびいたらしく、爲めに、いろいろの方面から非難を受けたのであつたが、今や、わたくしの議論が承認されやうとすることになつて來たのではあるまいか。しかし、現行法の範圍においての適用として、かやうに考へることは、裁判所に對しても辯護士に對しても、まだ理解を得ることが困難らしいので、この際、率直に不定期刑を認めることがしかるべきであると主張されることになつたのである。

すなはち、臨時法制審議會は不定期刑の言渡を爲すことを得るやうに刑法を改正すべき旨を決議したのである。不定期刑といふ制度は、今日、すでに少年法に認められてゐる。その第八條第一項に、『少年に對し長期三年以上の有期の懲役又は禁錮を以て處斷すべきときは、其の刑の範圍に於て短期と長期とを定め之を言渡す』といふことになつてゐる。これは憲法に違反しはしないかといふ議論もあつたのであるが、兎にかく認められることになつたのである。さうして、少年に對して教育的に刑を行ふについては不定期的でなければならぬといふことになつたのである。

成年犯人に對する不定期刑は、一方において、その犯人に對する社會防衛を全うしようとするのであるが、同時に、それは、その犯人に對する刑の教育的效果を全うせむとするに在るのだといふことも亦特にこれを認めねばならぬ。

不定期刑といふ名稱乃至觀念は、動もすれば甚だ殘酷な印象を與へるものであるらしい。刑を單に懲戒のためのもの、苦痛を與へるためのものとして之を考へるにおいては、まことにさもあらう。さうして、曾て、一九〇〇年、ブリユクセルで開かれた國際刑務會議において不定期刑が問題となつたとき、會議は、刑の性質上不定期刑は許さるべきものでないと決議し、理論上不定期刑は不都合なものとされたのであつた。

それで、法律家は一種の考察を立てた。應報としての刑は理論上定期的のものでなければならぬならば、刑の終了後更に保安處分の名をもつて犯人の拘禁をつづけることにすればいゝ、であらうといふのである。保安處分といふ名稱は、一八九三年のスイス刑法草案に認められた。ドイツ、オーストリヤ、イタリヤ、その他の諸國は、その刑法草案において、い

づれも保安處分を認めることにした。イギリスは、別に豫防拘禁の名稱をもつてこの保安處分を實施してゐる。

一九二五年に、ロンドンで國際刑務會議が開かれたとき、不定期刑が重ねて問題にされた。さきに、不定期刑をもつて刑の本質に反するものとした國際刑務會議は、今度は、態度を全く改め、不定期刑は刑の本質上當然なものだとすることに議決した。二十世紀のはじめ四半世紀の間に、思想はかやうに變化したのであつた。

社會防衞を全からしめるがためには不定期刑を認めることにせねばならぬのである。しかし、同時に、その不定期刑には教育的意味が包含されてゐることを考へねばならぬのである。

◇

或學者がいつた。犯人を別つて二種とする。第一は監獄へ入れてはならない種類の犯人で、第二は監獄から出してはならない種類のものである。この一見奇矯な用語に依つて、刑法上の事物の考へ方が最近に一變したことを想像することができよう。——刑法は、犯罪といふ事實を對象とすることから進化して、犯人といふ人格を對象とすることになつたのである。われ〳〵は、これを、事實主義から人格主義への進化といふのである。

そこで、刑の執行猶豫とか微罪不檢擧とかいふことが、一方において發達した。執行猶豫制が二十五年ばかり前にわが邦で採用されたときは、それは一見甚だ不合理なものとおもはれたことであるし、憲法違反であるといふ議論さへもあつた。今は、それがすでに常識化したといひ得よう。微罪不檢擧又は起訴猶豫と稱せられる制度は、實際には久しい以前から行はれてゐたのであるが、しかし、それが法律違反であるといふことも亦永らく議論されて來たのであつた。曾て大浦事件といふことが世の問題になつたとき、檢事局が特殊の地位に在つた人に對して起訴猶豫の處分をしたのは法規違反であるとして、學者の間にもかきびすしい議論があつた。しかし、大正十三年一月一日から實施されることになつた刑事訴

訟法第二百七十九條は明かに之を認めることにしたのであるし、一九二五年のロンドンの國際刑務會議もまたこれを當然な制度と決議するに至つた。

刑は藥のやうなものともいひ得よう。病人に藥を用ひることは當然のことであるやうなものゝ、醫師は、なるべく藥の副作用を避けるがために、病氣の自然的な治癒を待つことにするのである。それとおなじく、刑、殊に監獄についても、その好ましからざる副作用——監獄における犯罪性傳染の危險の外、釋放後における前科者たる名稱の如き——のことを考へねばならぬ。若し監獄へ收容しないで改悛を期待し得る犯人に對しては、これを監獄に收容しないで適當に處遇するの途を見出すことが然るべきことである。

しかし、他方に於いては、監獄から出してはならない種類の犯人がある。その種の者に對しては不定期的に刑を科することにせねばならぬ。最近に至つて、諸國は慣習的犯人、職業的犯人乃至本能的犯人に向つて、不定期刑乃至不定期的保安處分を行はうといふことにしてゐる。

さあれ、刑は藥のやうなものだと上に述べた。監獄は又犯人に對する病院のやうなものともいひ得よう。監獄は犯人をして社會に侵害を與へることのできぬやうにすると同時に、犯人に對しては再び社會へ出られるやうに改善の途を講ずることに努めねばならぬ。たゞ、われ／＼のさし當りの才能と努力とでは犯人をすべて改善せしめることができないにしても、少くとも監獄内においては、人らしく生きてゆくことのできるやうに仕向けてやらねばなるまい。そこで、監獄のなかで、それ等の者を人らしくはたらかしめ、人らしく修養せしめ、人らしく能率を發揮せしめるといふことになるのである。さうして、不定期的にその拘禁をつゞけるのである。

國家は、監獄といふ施設に依つて、かく、それ等の犯人を適當に世話してやらねばならぬ。しかし、同時に、それ等の犯人は、監獄内において、人らしくはたらかしめられ、人らしく修養せしめられ、人らしく能率を發揮せしめられること

に因つて、國家のわづらひとなり、厄介となることのないやうになるべきである。――これが最近の刑事思想の要點である。

◇

死刑について一言しよう。わたくしは、できるだけ死刑を廢止したいとおもふ論者である。今日のわが邦としては、死刑を廢止し得るものと信ずるのであるし、從つて、我邦では、もはや死刑は廢止せねばならぬと信ずるのである。

死刑が、さきごろ、治安維持法に關聯して問題となつたことがあつた。わたくしは、治安維持法において死刑が新たに規定せられたことを遺憾に考へてゐる。わたくしは、治安維持法に規定せられるやうな犯罪行爲をもつて輕いものと考へるのでないことは勿論である。しかし、わたくしは、第一に、同法に死刑を規定することに因つて一般社會に對する法律上の威嚇が特に十分にされたものとはおもはない。何となれば、あの種類の犯罪を爲す特殊の者は、死刑の威嚇があつてもそれだけではその志をひるがへすものでないからである。さりとて、多數の人々について見るときは、必ずしも死刑をもつて臨まないでも、一定の刑罰の威嚇に因つて十分に影響を受けるものである。

さて、十分重い刑をもつて之に臨む必要はあらう。そこで、わたくしは、絶對又は相對の不定期刑がいゝとおもふのである。かれ等がその持つてゐる一種の反社會的な確信を捨てない限りは之を釋放しないのである。しかし、かれ等が眞にその確信を改めるならば――さうして、われ／＼は、かれ等を適當に處遇することに因つて、かれ等がその確信を改めるであらうと信ずるのである――その時に釋放すべきではあるまいか。

われ／＼から見れば、かれ等の行動は、われ／＼の國家組織社會組織と相容れないものである。しかし、かれ等に死刑を科するとき、われ／＼は、死んでゆくかれ等のことは暫く兎にかくとして、かれ等の兩親、かれ等の子女がどう考へる

なもこれを考へて見たいとおもう。その人々の考へることは、よし道理にかなつたとはいひ得ないにしても、その人々が國家に對して持つべき一種の感情はまた之を察するに難くない。わたくしは、それを察すると同時に、その犯人といへども、やはり、わが國家の一員であり、すなはち陛下の赤子の一人であることを考へねばならぬのである。――死刑が一般社會に對して持つ威嚇力の、案外に如何に弱きかの心理學的及び統計的研究のことは、ここには省く。

それで、わたくしは、國家は死刑をも辭しないといふことに因つて眞に强いのではなく、死刑を科することを避けるといふところに、その眞に國家らしき點があるのであると考へるのである。國家は、犯人の末、そのかくの如き最後の一人にまでに、國家の一員としての人格を承認するとき、その國家としての眞の强さを具有するのであると考へざるを得ない。

死刑に代へて犯人を監獄に收容し、われわれは、そこに、かれ等に人らしくはたらくの機會を與へたいのである。そのはたらきに因つて人らしく修養せしめたいのである。さうして、そこに、人としての能率を發揮せしめたいのである。――まづ、かれ等をして、かれ等自身、かやうな社會を組織せしめたいのである。

◇

刑法學上、新らしく社會的責任といふ語が用ひられてゐる。これには二つの意味がある。

第一に、刑法上の責任は、從來、道義上の責任だとされた。犯人は、その犯行につき道義上責任を負はねばならぬのである。その故をもつて、その者は、刑として苦痛を受け、それに因つて罪を贖はねばならぬといふのである。これに對し、新らしく社會的責任と稱せられる考へ方は、犯人は、その反社會的行爲に因つて社會から反撥を受けねばならぬのは當然で、別に道義的といふやうな神秘的なことをいふ必要はなく、社會生活の保全の上から、當然、刑を受けねばならぬといふのである。

この考へ方からして、從來の思想に對し、二つの點において新らしい或ものが主張されることになつた。その一は、心神障害者や少年やも亦一般犯人とおなじく社會的責任を負はねばならぬといふことである。犯罪狂や、不良少年も社會に侵害を與へるに至つては一般犯人とおなじであるから、やはりおなじく社會から防衛的に反撥を受けるのは當然であるといふのである。その二は、犯罪事實が輕微であつても、犯罪性が執拗であるにおいては、その者は社會から十分に防衛的反撥を受けねばならぬといふのである。

心神障害者や少年に責任を認めるといふことは、考へ方としては異端的であるともいひ得よう。しかし、要するに、一方には、その心神障害者を適當に拘禁し、もつてこれに對する治療教化の方法を講ずると同時に、他方には、その法律的處遇においての人權保障につき、一般犯人とおなじに考へてゆかなばならぬといふことを意味するのである。社會的責任の觀念が異端的に見えるのは、責任をもつて惡報應報の基礎となるものと考へるからである。責任の内容を、社會防衛の必要と人權の保障との調和として考へて見ると、そこには、何の不都合もないはずである。しかし、心神障害者と少年との問題には、さし當り、ここでは深入りしない。

犯罪事實の輕微な場合においても、犯罪性の執拗な犯人に對しては、それに對して十分な社會的離隔が試みられねばならぬといふことは、新らしく考へつかれたところであるのである。從來の道義的責任論では、輕微な事實に對しては輕微な刑をもつて足りるとされたので、執拗性の犯人に對する十分なる社會的離隔といふことは考へつかれなかつた。われわれは、この點については、特に犯人主義を主張するのである。しかし、われわれは、その社會的離隔において、苦痛を犯人に科し、應報を全うしようとするのではない。その離隔されたかれ等の生活において、かれ等に人らしき勞働を爲さしめ、その勞働に因つて修養せしめ、その勞働に因つて能率を發揮せしめようとするのである。

社會的責任といふことの第二の意義は、犯人に對する社會自身の責任の自覺といふことである。

從來、犯罪は犯人の自由意思から産出されるものと考へられた。しかし、犯罪の原因に關する實證的研究が重ねられた結果、犯罪の原因としては社會的なものが特に重要視されねばならぬとされることになつた。いはゆる人類學的心理學的原因といへども、その原因が實際に作用するのは社會的原因がそこに介在し、そこに誘因となるからであるとされることになつたのである。——この點に關する論議の詳細に關しても、茲では觸れない。

それからして三つの事項がみちびかれる。

その一は、社會は、犯人を罰することよりも、犯罪の豫防政策に努力せねばならぬといふことである。社會が社會政策を適當に組織し運用してゆくならば、犯罪は發生せざるべきである。少くとも大に減少すべきである。社會が、自己の方面に社會政策を完備しないで、その缺陷から生じた犯罪につき犯人を責むべきものとするならば、それは本末を顚倒したものである。殊に、最近に特に問題とせられるのは群集犯罪である。群集犯罪における各犯人は、その群集關係解散ののちは良民に復歸するのである。その各個人に刑を科することは全く意味を爲さない。この種の犯罪——見方に依つて甚だおそるべきもので、さうして、他方には、將來ますます多からむとするこの種の犯罪——に對しては、刑は何等の意味もなく、何等の役にも立たないものである。一に豫防政策の效果に事を待つの外がないのである。——しかし、わたくしは、この問題にも茲では深入りしない。

その二として、社會は犯罪に因る被害につき、被害者に對して相當の責任を自覺せねばなるまい。被害者に對して、犯人がまづ賠償の責任を盡うすべきは當然であるが、しかし、多くの場合においてその賠償責任は盡うされないのである。

國家は、固より、犯人を相當に勞働せしめて、その勞銀から賠償を果たさしめるやうにせねばならぬのであるが、しかし、また、社會自身國家自身が、連帶的に、少くとも補充的に、その賠償を全うするの責に任ずべきではなからうか。産業の發達に因る勞働災厄について、事業主乃至國家が、如何に無過失賠償の責に任ぜねばならぬか、またその實際的解決として如何に社會保險を經營せねばならぬかは、理論として、もはや疑ふ人はあるまい。その理論は、當然に、犯罪の損害に對する社會の責任、從つて國家のそれに適用せらるべきではあるまいか。かやうな理論の實行については、實際的方法の細目として大に考へねばならぬものがあるのではあるが、理論としては肯定せねばなるまい。輿論をしてよくこれを理解せしめるやうに努力せねばならぬ時期に到來してゐる。

その三として、最後に、社會は犯人自身に對して一種の責務を自覺せねばならぬ。犯人がしかく犯罪を爲すに至つたのは、社會そのものにその原因が存するのであるとして見ると、社會は、その犯人に對して、それを正しい人たらしめるやうに努力せねばなるまい。ここにおいて、まづ、監獄の改良といふことが考へられねばならぬのである。そもそも、監獄の改良は、元來は素朴的な人道主義からはじまつた。素朴的な人道主義は、沒目的的なものたるの意味において、われわれは固よりこれに賛成することのできぬものではあるが、しかし、犯人に對しても亦人道的な態度を採らねばならぬとした點は、社會がその責任を自覺する第一歩であつたといはねばならぬ。その責任を自覺することからして、その沒目的的な人道主義が教育主義に進化せねばならぬことになつた。教育主義といふのは犯人を人として取扱ひ、人として修養せしめ、人としてはたらかしめることをいふのである。素朴的な人道主義を目的化したものといふことを得よう。

監獄に教育主義が採用され――少くとも、加味され――ることになつてから、いろいろな考案が案出された。まづ、宗教的な立場から獨房主義が採用された。受刑者を獨房に拘禁することに因つて、眞に神の前に悔悟せしめるといふのであつた。次には、晝間は雜居して作業に從事せしめ、夜間は獨房に拘禁するといふことが考へつかれた。これは、一面、獨房

主義を緩和すると同時に、他面、作業に依る改善を目的とすることになつたのである。作業に依る改善に一歩を進めたものが、最近の累進制である。これは、受刑者の處遇に段階を設け、その成績の如何に因つて、一の處遇からよりよき他の處遇へ進ましめるの仕組である。無論、この方法では、作業が教育的に組織立てられること勿論である。

若し、幸に、わたくしの用語が許されるならば、『囚人教育』といふことが、これからの刑法においての主要問題となるのである。從來は、教育は、少年に對するものとのみ考へられた。それが今日では成人教育にまで擴められることになつた。さうして、特殊の人々に對しては特殊の教育がなければならぬので、低能兒に對しては低能兒教育があり、不良少年に對しては感化教育があるやうに、犯人に對しても、また、それに特殊な『囚人教育』があつてしかるべきである。

『囚人教育』については次の三點が考慮せらるべきであらう。

第一に、受刑者に對する教育は、その性質上一種の硬教育であるべきである。犯人をして、自己の不法行爲につき、みづから愧ぢしめ、自ら悔いしめるの方法が講ぜられねばならぬ。この意味においては、苦痛としての刑がなほ永く持續せられることにちがひない。少くとも、拘禁に因る苦痛が刑の中心を爲すものとして續くことであらう。——教育といふことを狹い意味に解する人々には、ややもすれば、われわれの教育刑論に對して誤解があるやうであるが、われわれは、監獄をもつて、今日の小學校とおなじものたらしめるつもりはないのである。それで、いはゆる道義的責任乃至應報刑の理論を捨てるとしても、刑にはおのづから刑に附隨する一種の性質があることであらう。しかし、受刑者は奴隷でない。その人格を無視して勞働に從事せしむべきものでない。若し無用又は過重の勞働を強制することに因つて不當に反抗心を起さしめ、乃至恨みを持たしめるといふことがあるならば、それは刑の趣旨を全うするものとはいひ得ないであらう。

第二に、受刑者は一個の成人である。成人であつて見れば、世の中の人らしくはたらき、又、世の中の爲めになるやうにはたらくことにならねばなるまい。かくして、勞働に關しての種類の選定、分量の決定といふことが考慮されねばなら

ぬのである。從來、監獄においては、例へば、かの米搗きといふやうな作業が科せられた。産業今日の事情において、米搗きは、人らしきはたらきでもなければ、人の世の爲めになるといふものでもない。されば、一派の人々から最も恰好な刑的苦痛とされてゐた米搗きは、數年前、わが監獄では全く廢止せられた。今日では、監獄の作業組織は、できるかぎり最近の科學に依る最近の施設に從はねばならぬものとされてゐる。受刑者は、自己の作業が世の人々の爲す作業とおなじもので、おなじく世の中の爲めになるものたることを知るにおいて、その勞働に因る修養を全うしてゆくべきであらう。監獄にも工場法の規定が適用されねばならぬとされ、工場災厄に關する國家の無過失責任も亦認められねばならぬとさへされることになつてゐるのである。

第三に、監獄の作業は、その效果に因つて、少くとも監獄の自給自足を全うせねばならぬ。まづ、成人たる受刑者が國家の損害において衣食を全うするといふことは不合理なことといはねばならぬ。受刑者は十分みづから自己の衣食をかせがねばならぬのである。されば、同時に、國家は、受刑者をしてその衣食を稼ぐことのできるやうに作業の組織經營を全うしてゆかねばなるまい。單に時間つぶしの目的をもつて爲されるやうな輕易な無意義な作業を科することをもつて滿足するやうなことがあつてはならない。——國家は一方において、受刑者に失業あらしめてはならぬのであるし、他方において、受刑者が十分效果を擧げ得るやうに作業を選擇してやらねばならぬのである。

なるべくは、自給自足に一歩を進めねばならぬ。犯人は被害者に對して賠償の責任を負ふのであるし、また、その家族に對する扶養の義務を全うせねばならぬ。作業の收益に因つてこれ等の責務の果たされるやうに仕向けねばなるまい。——國家は、みづから賠償の責に任じ、みづから扶養を引受けないまでも、受刑者にこれを爲す機會を得しめねばならぬ。

否、更に一歩を進めることが必要であらう。監獄における作業は一の産業として國家的に十分の收益をもたらすものでなければならぬ。成人たる受刑者の幾千幾萬を集めて勞働せしめるといふのに、これをして産業的效果を全うせしめ得な

いといふのでは、國家は果してその責務を全うしたものといひ得るかと批評することもでき得ることであらう。

監獄における作業の發達については、民業壓迫を理由として之に反對する人士がある。わたくしは、現在の監獄の作業がどれほど民業を壓迫してゐるかの實情は知らぬのであるが、よし一歩を讓つて、それがすでに民業に壓迫する程度に進んでゐるとしても、その救濟策は監獄の作業を制限する方面に存しないで、民業改善の側に在るものと考へねばならぬ。もし受刑者が良民として社會にはたらくのであつて見れば、それは當然に相當の經濟的效果を擧げてゐるべきにちがひない。その者をできるだけ良民らしくはたらかしめることが民業壓迫であるといふのならば、民業は、受刑者の怠惰のために漸くにして繁榮してゆくものなのかとたづねても見たくなるのである。監獄は、國家のために、犯人をさへ經濟的に活動せしめようとするのである。一般民業は監獄に向つて抗議を爲すべきでなく、國家に向つて、その民業の指導、向上、組織、經營のために國家らしくはたらかねばならぬことを迫るべきであらう。

◇

われ〳〵は、いはゆる道義的責任の語乃至觀念を避けて、社會的責任の語乃至觀念を高調してゐるのである。

蓋し、從來は、犯人に對しては、應報として害惡刑を科することが、道義の命ずるところであるとされたのである。これが、いはゆる道義的責任論の要點である。これに對して、われ〳〵の社會的責任論は、社會における各自の責務を基礎として考へ、その各にそれ〴〵の所を得しめるといふことを要點とするのである。從來の道義的責任論では、社會と犯人とは相爭ふものであつた。われ〳〵も、亦、時として、犯罪に對する鬪爭といふ語を用ひるのではあるが、しかし、われ〳〵は、犯人が社會を侵害せむとするに對して、社會がこれに向ひ鬪爭を試みるといふことを欲するのではない。國家は、犯人に對して鬪爭を試みるべく、あまりに大きなものであり、強いものであり、圓滿なものであり、絶對なものである。國

家は、犯人をさへ、その一員として自己に包容するものでなければならぬ。われ〳〵は國家はさういふものと考へる。

されば、われ〳〵はわれ〳〵の責任論において、道義的といふことを無視してゐるのではない。われ〳〵は、犯罪乃至犯人に對する應報的反撥をもつて、道義的な國家の行動とは考へないのである。われ〳〵は、その犯人をさへ教育し救濟せむとするところに、國家の行動の道義的意義が成立するのだと考へるのである。それで、われ〳〵は、從來の理論を『いはゆる道義的責任論』とよぶことにしてゐる。それは、その理論を唱へる人々が、自己の理論をもつてみづから道義的責任論と稱してゐるからである。しかし、われ〳〵は、その理論をもつて眞に道義的なものとはおもはない。われ〳〵の社會的責任論を目して事物の道義的意義を無視したものだと批評する論者は、われ〳〵の所見に對して甚しき誤解をしてゐるものである。われ〳〵は、從來の學者が道義的責任といふ語を自己の理論に獨占しようとするのを强ひて爭はない。たゞ、われ〳〵は、いはゆる道義的責任の個人主義的なるものに對して、われ〳〵の責任論が社會連帶論の上に構成せられるものなる意味において、これを社會的責任論といふのである。

いはゆる道義的責任論は、個人主義的なものである。中世の暴虐にして擅斷的であつた刑事制度に對し、個人の地位を確立して、その人權を擁護しようといふのが、人權宣言以後の法律文化の特色である。學者は十九世紀初期の法律文化を稱して『消極的保障の時代』としてゐる。それは、例へば罪刑法定主義に見るやうに、『法律に正條なきものは何等の所爲と雖も之を罰することを得ず』といふやうな規定が法律の基本命題とされ、消極的に個人の地位を保障することが趣旨となつてゐるからである。道義的責任論はこの時代においての刑事責任論を大成したものであつた。

されば、道義的責任論が十九世紀の法律的發展において大きな文化的意義を持つてゐたことはこれを認めねばなるまい。それは、犯人をさへ一の人格として、それを、その人權のため國家の恣意的行動に對立せしめたものであるからである。

犯人をさへ一の人格と認めた點において、それは大きな業績を擧げたのであつた。刑罰は、應報的害惡とされながらも、フランス革命以前の刑罰に比して大に人道化されたものであることは疑ひない。しかし、犯人の人格のために國家の恣意を擬ふといふのでは、國家の任務、その文化的使命に對しては理解を全うしたものといひ得ない。

社會的責任論では、犯人をさへ一の人格と認むることからして、國家の犯人に對する責務を考へようといふのである。國家に對して犯人の人格を消極的に保障するといふことから一歩を進めて、犯人の人格の完成に對し國家をして積極的に行動せしめようとするのである。

されば、いはゆる道義的責任論の個人主義的なのに對して、われ〳〵の社會的責任論の社會連帶論的なのは、その形式においては相反するものがあるのであるが、しかし、その實質においては、從來の道義的責任論を更に發展せしめたところに社會的責任論が成立するのである。思想のおのづからな進化がそこに看取されねばならぬ。

思想がかやうに進化するに至つたのについては、二つの事項が考へ合はされねばならぬ。

第一に、十九世紀の最後の四半世紀以來、犯罪現象に對する科學的研究が著しく發達することになつた。はじめは人類學的研究から、つゞいて、人類學的研究をも包括した廣い意味においての社會學的研究に進んで、最近に至つては、政治的、經濟的、法律的、思想的、藝術的のあらゆる事情が犯罪に對して如何なる關係を持つかを理解するに至つた。犯罪現象に對する科學的實證的研究は、犯罪をもつて必然的な因果關係に拘束されてゐるものと解することになつたのである。この科學觀は、それが實證的なるの意味において、見方に依つては唯物的な觀念であるともいひ得よう。しかし、かやうな科學觀、唯物觀は、おのづからにして、社會に對する犯人の、又、犯人に對する社會の責務の觀念に進化を促がさねばならぬことになつたのである。從來の責任觀は、素朴的なものに非ずんば形而上的なものである。これに對して、われ〳〵の責任觀は科學的であり、實證的である。それが差異の要點である。

第二に、國家の理論が最近に至つて大に動搖することになつた。はじめ、主權學說が完成して、主權の主體たる國家は、圓滿、絕對、無限、唯一の權力の主體とされることになつた。この學說の文化的意義は固より之を否定すべきでないが、しかし、かやうな學說は、十九世紀の末尾以來、深刻な批判を受けつゝあることも亦顯著な事實である。權利の濫用といふ理論が發達したにつれて、ひとり所有權、債權、親權の類ばかりでなく、權利の一種と見るべき主權も亦濫されてはならぬといふことが意識されることになつた。立憲制度は、要するに、主權の主權らしき行動を保持するために案出せられたものであるのである。かくして、主權の合理的基礎は主權が、事實として圓滿、絕對、無限、唯一であるといふ點に存しないで、それが規範的に、圓滿ならしめられ、絕對ならしめられ、無限ならしめられ、唯一ならしめられる點に存するものと理解されるやうになつた。この國家理論の變遷が刑法の範圍にあらはれて、最近の刑法理論になつたものといひ得よう。また、同時に、刑法にあらはれた思想の最近の變遷は、國家理論のこの變遷を促がす一の機緣となつてゐるものともいひ得よう。――わたくしにいはしむれば、國家は、犯人に對し、害惡として刑を科するところに、その強さ、大いさ、絕對性、無限性を發揚するのでなくして、犯人をさへ自己に同化せしめむとするところに、その國家らしさを示し、その道德的に偉大にして合理的に強固なものたることを明かにするものである。

◇

國家は、犯人をさへ自己に同化するの方法として、受刑者に勞働を強制するのである。これは、犯人をして人らしくはたらかしめるのである。**重ねていふが、受刑者は失業といふことのない世界に收容せられるのである。**

受刑者をして人らしくはたらかしめるので、受刑者は自己の技能と嗜好とに適合するやうに仕事を與へられることになる。それは主として科學的な心身考査の上に定められることである。さうして、受刑者は、かく自己に適應する仕事のた

めにはたらくことに因つて、人らしくそのはたらきを續けてゆくのである。そこには、受刑者の意思に反して仕事が強制せられるやうに見える場合があつても、受刑者は、不當に、奴隷らしく仕事を强制されることになるのではない。受刑者は、かく人らしくはたらきを續けることに因つて、その人らしき能率を發揮することになるのである。監獄は一の工場となり、農園となつて、國家の繁榮のためにその責務を果たすことになるのである。

監獄は、今、現在、かやうな施設になつてゐるといふのではない。世の人々が、監獄をかやうな施設にせねばならぬと一般に意識することにならねば、監獄はさうなり得ないのである。しかし、監獄に關する理論は、最近に、ますます、かやうに考へるやうになつたのであるし、監獄に關係する各種の自然科學實證科學も、また、ますます、かやうな思想の實現に助力すべく發達しつゝあるのである。さうして、わが國の監獄についていへば、わが監獄は、最近、かやうな理想に向つて多大の進歩を實現しつゝあるのである。

人が、すべてはたらいて、そのはたらきに依つて修養して、さうして、そのはたらきの能率を擧げるといふことのかやうな理想が完全に實現されるがためには、永劫の時を待たねばならぬかも知れない。しかし、監獄ですら、かやうに理想を定立することになつたのが最近の思想である。さうして監獄からその理想の實現が着手されてゐるといふのが最近の事實である。

勞働が、先づ人の責務とされ、その責務を果たすためにそれが權利とされ、さうして、その作用が全うされるといふこと、受刑者の最後の一人にまでそれが認められるといふこと、それがクリミナリストとしてのわたくしとして、刑法上の改革の最後の標的と考へられることである。いま、世界的の現象となつてゐる諸國の刑法改正事業は、みなこの標的に向つてゐる。この標的に向つてゐることに因つて、眞に、それが二十世紀の世界的現象たるゆゑんが成立するのである。

第二に、國家の理論が最近に至つて大に動搖することになつた。はじめ、主權學說が完成して、主權の主體たる國家は、圓滿、絕對、無限、唯一の權力の主體とされることになつた。この學說の文化的意義は固より之を否定すべきでないが、しかし、かやうな學說は、十九世紀の末尾以來、深刻な批判を受けつゝあることも亦顯著な事實である。權利の濫用といふ理論が發達したにつれて、ひとり所有權、債權、親權の類ばかりでなく、權利の一種と見るべき主權も亦濫されてはならぬといふことが意識されることになつた。立憲制度は、要するに、主權の主權らしき行動を保持するために案出せられたものであるのである。かくして、主權の合理的基礎は主權が、事實として圓滿、絕對、無限、唯一であるといふ點に存しないで、それが規範的に、圓滿ならしめられ、絕對ならしめられ、無限ならしめられ、唯一ならしめられる點に存するものと理解されるやうになつた。この國家理論の變遷が刑法の範圍にあらはれて、最近の刑法理論になつたものといひ得よう。また、同時に、刑法にあらはれた思想の最近の變遷は、國家理論のこの變遷を促がす一の機緣となつてゐるものともいひ得よう。――わたくしにいはしむれば、國家は、犯人に對し、害惡として刑を科するところに、その強さ、大いさ、絕對性、無限性を發揚するのでなくして、犯人をさへ自己に同化せしめむとするところに、その國家らしさを示し、その道德的に偉大にして合理的に强固なものたることを明かにするものである。

國家は、犯人をさへ自己に同化するの方法として、受刑者に勞働を强制するのである。これは、犯人をして人らしくはたらかしめるのである。重ねていふが、受刑者は失業といふことのない世界に收容せられるのである。

受刑者をして人らしくはたらかしめるので、受刑者は自己の技能と嗜好とに適合するやうに仕事を與へられることになる。それは主として科學的な心身考査の上に定められることである。さうして、受刑者は、かく自己に適應する仕事のた

めにはたらくことに因つて、人らしくそのはたらきを續けてゆくのである。そこには、受刑者の意思に反して仕事が強制せられるやうに見える場合があつても、受刑者は、不當に、奴隷らしく仕事を強制されることになるのではない。受刑者は、かく人らしくはたらきを續けることに因つて、その人らしき能率を發揮することになるのである。監獄は一の工場となり、農園となつて、國家の繁榮のためにその責務を果たすことになるのである。

監獄は、今、現在、かやうな施設になつてゐるといふのではない。世の人々が、監獄をかやうな施設にせねばならぬと一般に意識することにならねば、監獄はさうなり得ないのである。しかし、監獄に關する理論は、最近に、ますます、かやうに考へるやうになつたのであるし、監獄に關係する各種の自然科學實證科學も、また、ますます、かやうな思想の實現に助力すべく發達しつゝあるのである。さうして、わが國の監獄について、いへば、わが監獄は、最近、かやうな理想に向つて多大の進歩を實現しつゝあるのである。

人が、すべてはたらいて、そのはたらきに依つて修養して、さうして、そのはたらきの能率を擧げるといふことのかやうな理想が完全に實現されるがためには、永劫の時を待たねばならぬかも知れない。しかし、監獄ですら、かやうに理想を定立することになつたのが最近の思想である。さうして監獄からその理想の實現が着手されてゐるといふのが最近の事實である。

勞働が、先づ人の責務とされ、その責務を果たすためにそれが權利とされ、さうして、その作用が全うされるといふこと、受刑者の最後の一人にまでそれが認められるといふこと。それがクリミナリストとしてのわたくしとして、刑法上の改革の最後の標的と考へられることである。いま、世界的の現象となつてゐる諸國の刑法改正事業は、みなこの標的に向つてゐる。この標的に向つてゐることに因つて、眞に、それが二十世紀の世界的現象たるゆゑんが成立するのである。

第二に、國家の理論が最近に至つて大に動搖することになつた。はじめ、主權學說が完成して、主權の主體たる國家は、圓滿、絕對、無限、唯一の權力の主體とされることになつた。この學說の文化的意義は固より之を否定すべきでないが、しかし、かやうな學說は、十九世紀の末尾以來、深刻な批判を受けつゝあることも亦顯著な事實である。權利の濫用といふ理論が發達したにつれて、ひとり所有權、債權、親權の類ばかりでなく、權利の一種と見るべき主權も亦濫されてはならぬといふことが意識されることになつた。立憲制度は、要するに、主權の主權らしき行動を保持するために案出せられたものであるのである。かくして、主權の合理的基礎は主權が、事實として圓滿、絕對、無限、唯一であるといふ點に存しないで、それが規範的に、圓滿ならしめられ、絕對ならしめられ、無限ならしめられ、唯一ならしめられる點に存するものと理解されるやうになつた。この國家理論の變遷が刑法の範圍にあらはれて、最近の刑法理論になつたものといひ得よう。また、同時に、刑法にあらはれた思想の最近の變遷は、國家理論のこの變遷を促がす一の機緣となつてゐるものともいひ得よう。――わたくしにいはしむれば、國家は、犯人に對し、害惡として刑を科するところに、その强さ、大いさ、絕對性、無限性を發揚するのでなくして、犯人をさへ自己に同化せしめむとするところに、その國家らしさを示し、その道德的に偉大にして合理的に强固なものたることを明かにするものである。

國家は、犯人をさへ自己に同化するの方法として、受刑者に勞働を强制するのである。これは、犯人をして人らしくはたらかしめるのである。重ねていふが、受刑者は失業といふことのない世界に收容せられるのである。

受刑者をして人らしくはたらかしめるので、受刑者は自己の技能と嗜好とに適合するやうに仕事を與へられることになる。それは主として科學的な心身考査の上に定められることである。さうして、受刑者は、かく自己に適應する仕事のた

めにはたらくことに因つて、人らしくそのはたらきを續けてゆくのである。そこには、受刑者の意思に反して仕事が強制せられるやうに見える場合があつても、受刑者は、不當に、奴隷らしく仕事を强制されることになるのではない。受刑者は、かく人らしくはたらきを續けることに因つて、その人らしき能率を發揮することになるのである。監獄は一の工場となり、農園となつて、國家の繁榮のためにその責務を果たすことになるのである。

監獄は、今、現在、かやうな施設になつてゐるといふのではない。世の人々が、監獄をかやうな施設にせねばならぬと一般に意識することにならねば、監獄はさうなり得ないのである。しかし、監獄に關する理論は、最近に、ますます、かやうに考へるやうになつたのであるし、監獄に關係する各種の自然科學實證科學も、また、ますます、かやうな思想の實現に助力すべく發達しつゝあるのである。さうして、わが國の監獄についていへば、わが監獄は、最近、かやうな理想に向つて多大の進歩を實現しつゝあるのである。

人が、すべてはたらいて、そのはたらきに依つて修養して、さうして、そのはたらきの能率を擧げるといふことのかやうな理想が完全に實現されるがためには、永劫の時を待たねばならぬかも知れない。しかし、監獄ですら、かやうに理想を定立することになつたのが最近の思想である。さうして監獄からその理想の實現が着手されてゐるといふのが最近の事實である。

勞働が、先づ人の責務とされ、その責務を果たすためにそれが權利とされ、さうして、その作用が全うされるといふこと、受刑者の最後の一人にまでそれが認められるといふこと、それがクリミナリストとしてのわたくしとして、刑法上の改革の最後の標的と考へられることである。いま、世界的の現象となつてゐる諸國の刑法改正事業は、みなこの標的に向つてゐる。この標的に向つてゐることに因つて、眞に、それが二十世紀の世界的現象たるゆゑんが成立するのである。

小賣商人の運命

本位田祥男

一

昨年以來喧しい、新聞雜誌を賑はしてゐる一の問題は、百貨店への反抗を機緣として起された小賣商人の問題である。打ち續く不景氣の苦い杯を人一倍に飲まされた小賣商人達は同じ商人の中でも新しく進出した百貨店の活躍に今さら乍ら眼を瞠らなければならなかつた。其の賑ましい廣告宣傳に、此の不景氣には珍らしい高率な配當に、幾分誇張された新聞雜誌の報道に驚いて、自分達の不景氣の原因が案外近い所にあつた事を氣附いたのは彼等小賣商人である。昨日迄同じ同業組合に屬してゐて、何かお祭儀式でもあれば一緒に金を出し、提灯行列もやつてゐた百貨店がその敵である事を氣附いた彼等は幾分逆上氣味である。やれ百貨店へのボイコット、やれ商品券の禁止制限等と、色々な智慧を絞つてゐる。

所謂輿論も、どちらかと云へば彼等に味方してゐる。兎角弱い者に味方するのが、江戸ッ子のいや日本人の氣質である。資本金何千萬圓の百貨店と其日暮しの小賣商人との角力では、新聞でなくても後者の肩を持ち度くなる。と片づけて仕舞へば問題は極めて簡單である。學者も商工會議所も、果ては無產政黨迄が我等は小賣商人の味方であると名乘りを上げてゐる。

この味方の多いことには、單なる日本人の美風の他に確かな現實の基礎がある。工業都市でゞもない限り、都市の中で集團的に大きな存在をなすものは小賣商人である。それは町の中を散步しただけで何人も直ぐ感じることが出來る、統計的に見ても東京では六戸に一戸の割合で小賣商人がゐると云ふ。のみならず彼等は非常に利害に鋭敏である、少しでも其損得に關係があると思へ

ば、商賣で鍛へた饒舌を發揮し、一人で他の市民の何人前かの存在を主張する。

さうでなくとも都會中心の現代である。都會の主勢力である彼等のお機嫌を損ずる事は何人にとつても不利益である。商工業者の、殊に數的な關係と現實の必要に基いて中商工業者の利益代表機關である商工會議所が、小賣商人の地位を守るに汲々たる事は不思議はない。新聞社にとつても數軒の百貨店よりも大勢の小賣商人は讀者として比較にならない程重要である。政黨にとつても文化の進んでゐると云ふ都市で殊に陛下のお膝下で多數を占める事は何より大きな宣傳價値がある。そこで有權者として固つてゐる小賣商人を大切にしなければならぬ。市會は勿論議會でも彼等の意見は極端に尊重される。無產政黨が小賣商人を、主として自己の勤勞によつて衣食してゐるからと云ふ理由で、其利益を代表しようと是れ努めてゐるのも、全く此の現實な基礎に基いてゐる。

だが數世紀の間平和のうちに存在を續けて來た彼等が、今更ら聲を大きくして一致協同して、其存在を固守しなければならない事自體が、彼等に對する現實なる批判である。何故彼等は事實によつて批判されなければならないのか、此の批判に遭遇した彼等は如何なる運命を持つであらうか。運命を知るものは神だけであると云ふ勿れ。運命は決して氣儘な神の命令ではない、又神秘な帳の中に隱れてゐるものでもない。凡そ一の社會制度は其機能を全うしてゐる限り其の存續が許され、之を全うし得なくなればより合理的な制度に席を讓らなければならない。小賣商人の運命も、それが經濟的に如何なる使命を持ち、いかにそれを遂行してゐるか、社會的にいかなる地位を持つてゐるかによつて決せられる。小賣商人も之を後援しようとしてゐる人達も其眞の運命を知らなければ、後で臍を噛むとも及ばないだらう。

二

社會的に見れば、各地に散在して生產されたものを集めて、直接に消費者の手に供給する點に小賣商人の存在の理由がある。或は商店街によつて消費者の來るのを待つ場合があり、或は日日消費者の臺所を訪ねて必要なものを配給して吳れる。今日の樣な交換經濟で斯うした役割を演じて吳れるものがなければ消費者はどれだけ其生活が不便であるか分らないだらう。又生產者にとつても小賣商人の存在の理由はある。其製品は結局消費者に賣りつけなければならないが、數多い遠く離れた消費者に直接取引する煩には到底耐える事が出來ないからである。

この重大な役割を持つてゐる小賣商人は、今日の資本主義經濟で一番時代遲れの經營をやつてゐる。一般に資本主義經濟の特徴は經營の合理化であると云はれてゐるが、小賣位非合理的な經營を行つてゐるものはない。尤も小賣店と一口に云つてもピンからキリ迄ある。銀座街頭に店を出してゐる高級なものから、裏町の九尺二間の小さな店がある。こゝで問題とするものは、一番多い傳統的な小さい個人經營である。第一合理化の基礎とも云ふべき經營と家計との分離が未だ小賣店では完成してゐない。まさか大福帳だけによつてゐるものは少いかも知れないが、其經營は數百年來の舊態依然としてゐる。多くは其店の家族と數人の丁稚小僧とで經營してゐるが、其店は住宅と襖一枚か梯子段一つで分けられてゐる。此外形的な生活と經營との密接は、其内部にも具り、生活の爲めの費用と店の經費とは截然と區別はされてゐない。だから素より經營の爲めに幾らの資本を投下して、それがどれだけの利廻りになつたと云ふ計算の出來るものも少い。概して計算をやつてゐる小賣商人は一體何割あるだらう。此うした限界のはつきりしない經營で合理化を望むことは大空を區劃しようとする樣なものだ。

たゞ自由競爭と云ふ資本主義の原理は茲では極端に發揮されてゐる。何人も小賣店を始めるのに妨げはない、加へて店の敷金と相當の仕入れ資金があれば仕事がやれるので、少し小金を持つてゐる失業者が始めるには格向の職業である。だから其の數は殖えるばかりである。其數の增加には小賣店の勞働組織も影響がある。その勞働條件は昔からの「暖簾分け」制度である。小僧連中は十數時間を働き通してゐるが、別に賃銀を貰ふのではない。年期を勤め上げれば暖簾を分けて貰つて店を張る。どんく膨脹する都市では此の新しく出來る小賣店は、人口の增加と調和する事が出來るが、人口の停滯してゐる所では本店も支店もお互に競爭をしてゐる。

此の相互の競爭は、資本主義の學理に從へば、お互に經營を合理化する刺戟となる筈であるが、事實は全くそれを裏切つてゐる。合理化の基礎である仕事の增加がないからだ。僅か數十軒や數百軒のお客を相手に商賣してゐては、經營を合理化しようにも餘地はない。下手に近代的な經營をしてゐれば、却つて能率が上らず、經費倒れになる事が多い。學校出たての若僧が教科書通りの經營をしようとして失敗するのは、此の仕事の分量を考慮におかないからである。

其の經營の基礎が薄弱であり信用も薄いから、彼等は一番高利な金を借りて經營しなければならぬ。仕入れの分量が少ければ、其値段も高く拂はなければならぬ。金廻りが惡くて步積が

雇れへば問屋も高く吹つかけるだらう。賃銀を支拂はない勞働は最も安い筈であるが、事實は必ずしもそうではない。家事と商賣とをつきませて終日働かせられては何處かで油を賣らねばやり切れないだらう。お華客をつなぐ爲めには勝手口で子供や女中を相手に愛嬌も振りまき、少し位のお用事は手傳はねばならぬ。それでは二人の勞働が三人も要るのは當然である。尙ほお客をつなぐ爲めに彼等のしなければならない不經濟は懸賣りである。それはお客の財嚢につけ込んで購買額を增すと云ふ利益はあるが、懸金は何ヶ月もたまる事があらう、それだけ利子も拂はなければならず、遂に懸倒れに終るものも少くないだらう。それだけ澤山の經費が必要となる。

此うして見て來れば、小賣は農業と共に最も不合理を續けてゐる。此の時代遲れの經營が近代的な百貨店の競爭に遭つて、日に〳〵其領域を侵害されてゐるのは決して怪しむに足りない。それは產業革命時代に小さな職人が工場經營に壓迫されて遂に倒れたのと同樣である。商業には機械が利用出來ないから等とすまし込んではいけない。經營の合理化は機械の利用ではない。資本、勞働、運營の方法其他あらゆる方面に實現され、其能率を擧げうる。そしてそれによつて經費の安くなる限り、不合理な經營がそれに壓せられるのは當然の經路である。產業革命當時あらゆる中產階級政策にも拘らず遂に多くが滅亡し去らうとするのと同樣である。より合理的な經營にボイコットする等は、工場を毀つて機械を破壞したと同じ愚を繰返へすものである。小賣商が自己を守らうとすれば、自ら合理化する他はない。

而も小賣商店が經營を合理化し得る餘地は極めて少い。已に述べた樣に消費者と直接し比較的少いお客を相手に經營する事を其本質とするからである。それが大資本を蓄積し百貨店式に經營すれば已に普通の小賣店としての存在を失つてゐる。各地に支店を持つチエーン・ストアでもそれが大經營化して來た限り、も早普通の小賣店ではなく寧ろ其敵として取扱はなければならなくなるだらう。普通の小賣店が經營を合理化する餘地は、小經營としての本質を保ち乍ら其一部の業務を他の同業者と協同して大經營の利益を享受する事だけである。或は協同の金融機關を持ち、或は協同に仕入れ、或は賣出しに就て協同宣傳をする位のものである。所が彼等の間に協同の行はれることは實に困難である。相隣の親しみはあり乍ら、同業の誼はあり乍ら彼等は正しく商賣敵である。同じ地域に住む人達をお互に自分のお客として獲得し合はなければならない、從つて始終相手を出し拔くことを考へてゐなければならない人達である。其お客

を殖やす爲めには値段を切り下げなければならないが、より有利な仕入れをすることが第一歩である。協同に有利な仕入れをしても大して效果はない、他の同業者よりも安く仕入れてより安く賣ることが何より大切な點である。どこ迄も競爭本位である。此うした仲間の間で協同意識の發生を望む事は全く不可能であり、從つて協同動作も永續することは出來ないのだ。

　これ程非合理的な小賣商人も全然存在の餘地がないのではない、百貨店の發展につれて凡ての小賣商店が今にも根こそぎ倒されて仕舞ふ樣に慌ることは全く馬鹿げてゐる。百貨店の發展にも確に一の限界がある。丁度小工業が機械の壓迫にも拘らず自分の範圍を持つ樣に、小賣商も大經營に壓迫されない場面が殘つてゐる。一は流行の外にある消費者の趣味に卽してゐる極めて贅澤な商品に就てであり、他は米味噌の樣な日常の必需品である。此うしたものはどんなに交通機關の發達した今日でも、まさか其度每に消費者が百貨店迄買ひ出しに行けやしない。各街に店を持つた小賣商が常に各家庭と密接して初めて、其需用に應じ得るのだ。だから宣傳の爲めに百貨店が米味噌等を賣り出したと云ふ聲に驚いて、眞に存在を脅かされてゐる吳服商小間物商等のお先棒になつて騷ぎ廻ることは、餘り利口なやり方ではない。彼等は、自分達の地位を十分に自覺しなければならない。

　と云つて、日常必需品の小賣商の地位が全く安泰であるのではない。其の存在は百貨店よりも寧ろ消費組合によつて脅かされてゐる。消費者達はいつ迄も現代の浪費の多い、利潤を目的とする經濟に生活を任せ切ることは出來ない。其の生活費を出來るだけ切りつめる爲めに、より合理的な社會を實現する爲めに直接に消費の爲めに生產分配しようとする。小賣は其運動の出發點であり、關門であると共に、最も浪費の多い業態である。此の配給を完全に征服するだけでも消費者は數割の利益を享けることが出來るから、凡ての消費組合は先づ小賣から始める。消費組合は利潤撤廢と云ふ現實の利益を持つだけに常に新組合員を吸收し得る。其資本の蓄積についても自動性があり、其賣上額の增加其他一般に發展性を自らのうちに藏してゐる。而も其組合は全く他の家計と分離獨立してゐるだけに、經營合理化の基礎があり、其仕事の增加可能性は合理化を促進する。

　此等のあらゆる點に合理的な消費組合に對し、小賣商は到底永い競爭を續けることは出來ない、小賣商は上は大資本の强い壓迫の爲めに、下は消費者自らの自覺によつて日日其の存在の範圍を縮められてゐる。已に經濟困難に陷つた小賣商も尠くないだらうが、其傾向は將來更に一段と强められるだらう。已に

述べた樣に、小賣商は都市で一番大きな集團的存在である。其の存在の脅かされる事は可なり重大な社會問題である。「自分達をどうして吳れる」と開き直られた時、「どうでも勝手にしろ」或は「止むを得ない運命だ」と云ひ切るには現在は餘り强い勢力を持つてゐる。だが、此の社會的に見て非合理的な、消費者に多くの負擔をかけてゐる小賣商の存在を何時迄も其儘承認しなければならないのであらうか。

三

小賣商人を何處迄も保護しなければならぬと主張される根據として、其數が多いと云ふ他に其性質に着眼する人々が少くない。其の一として小賣商人も一の勤勞階級である、種々の社會政策が不勞所得者に對して勤勞所得者の保護を目的とする以上、小賣商人をも社會政策の對象として無視することは出來ないと。社會民衆黨が小賣商人の味方を以て任ずるのは此の理論に基づくものであらう。それが百貨店の壓迫に對抗する限り許されるかも知れないが、全部的に此の主張を容れる事には可なりな危險が藏せられてはゐないか。

其の收入の性質によつて階級を區別することは正しいだらう。而も收入の根據が純然たる勞働と資本とに割り切れない以上、其中に資本と勞働との何れの要素が主なる根源となつてゐるかによつて區別する必要も認めなければならぬ。日本の小農も其收穫を增す爲めに肥料を買ひ入れ米を賣つて其收入を少しでも多くしようとしてはゐるが、彼等を企業家又は資本家とする事は全く當らない。肥料は全く從的根源に過ぎず、其の勞働が所得の主なる根據である。從つて意識的にも企業利潤の追及と云ふよりも自己勞働の實現と云ふ性質を多く持つてゐる。だが小賣商に於ては斯かる性質を持つものは比較的少く、現實に斯かる狀態にある者も斯かる境遇から脫れて、一人の資本家となる事に常に汲々としてゐる。

今小賣商となる場合を考へて見れば、數百圓乃至數千圓を持つてゐる人が、どうすれば最も有效に之を運用し得るかを考量して之を開業する。素より自ら朝早くから仕入れに出かけお華客を廻り、夜は遲く迄其整理に時を費すだらう。然し彼等は必ず數人の丁稚を雇入れて其仕事を助けさせる。即ち配給に關する現實の勞働は多く其雇人により、自らは多くを指揮と經營とに費してゐる。此仕事の分配は其店が盛になればなる程はつきりと區別せられ、それが極度に發展すれば商人は自ら勞働すると云ふよりも專ら其資本を如何に運用するかに精力を使はなければならぬ。此の如き場合に、彼等を主として勞働所得による

ものとする事は全く當らない。寧ろ其反對である。且つ自ら勞働する場合に於ても、農夫或は職人が生產の本質的な勞働を爲し、其所に雇入れられる徒弟があつても、單に之を補助する場合とは其性質を著しく異にしてゐる。商店主の一部が現實に勞働してゐると云ふ點から、之を一般に勤勞階級として社會政策の對象としなければならないとすることは、餘りに一般化に過ぎる。

或は云ふ、小賣商人は社會の中堅である、社會の健全なる發達の爲めには之を保護しなければならないと。彼等が財產的に見て中位にある事は否定することは出來ない。巨億の富を持つのでもなく、又全然無產的ではない。文字通り所謂中產者である、だが中產階級を悉く社會の中堅となるべきものであるとすることは出來ない。要は彼等が果して社會の中堅となるべき意識を持つてゐるか否かにある。其の道德に注意する時我々は、小賣商人の將來に寧ろ悲觀的ならざるを得ない。

なる程彼等は不羈獨立である、一ヶの自由人であり、何物かを持つことに依つて絕望の果て自暴自棄に陷ることなく、破壞的よりも寧ろ建設的であつて、所謂中堅としての性質を可なりに持ち合せてゐる。此等の諸性質は彼等が何人にも雇はれず獨立な經營者であることと必然に結びついてゐる。同時に彼等が商業を營むことから種々の意識が其の中に醱酵して來る。商業は安く買つて高く賣り、其剩餘を求めることを其本質としてゐる。其途中に於て時間的な又空間的な財貨の調節が伴ふこともあるが、倉庫業運搬業等の分化した今日それは商業の本質を爲すものではない。安く買ひ高く賣つて、其値鞘を目的とし、出來るだけそれを多くしようと努力することは、常に他人の犧牲に於て自己の利得を多くせんとすることを意味する。だから商業の發生の頃から金貸しと共に宗教的にも社會的にも、それは最も卑しい危險の多い職業とされて來た。だから商業には種々な積極的な干渉が要求されたのである。

所謂商業道德の發達したと稱せられる今日も、小賣商は普通の道德から見て餘り道德的であるとは云へない。安く買ふ相手は卸商であり、何れ劣らぬ狐と狸だから別に問題はない。小賣商同志の競爭で他の同業者を出し拔いてお客を殖さうとする事も、お互ひ樣である。問題は無智な消費者相手の場合である。それ程お客を殖やすことの出來ない彼等は、お客を大切にすることはあるが、同時にできるだけそれに噛りつき、それから搾り取らうとする。あらゆる口實を設けて價格は引上げられ、品質はごまかされ、甚しきは其の數量さえ僞りのある場合が少くない。頻々として新聞紙上に傳へられる所は所謂不正商人の摘發である。摘發されないごまかしが、法律的には問題とならな

くとも道徳的に恥しむべき事件がどんなに多いか分らないだらう。そして消費者は是等の不正に對して常に自ら眼を光らせなければならない。一等米と稱して二等米を賣られる事も、米の桝目の足りない事も一に消費者の自衛の足りない爲めである。だから常に警戒の眼を見張らねばならぬ。日常臺所にやつて來る人達を常に猜疑の眼を以て見なければならない事は消費者にとつても一の墮落である。

　此うした人の眼をかすめる樣な態度も、決して個々の小賣商の道徳心が特に他の人達よりも低い爲めではない。それが安く買ひ高く賣つて値鞘を獲ることを目的とする、即利潤の追及を唯一の目的とすることから當然流れ出る一の意識である。斯かる意識を此世から絶滅する爲めだけにも利潤は撤廢されなければならない。凡ての社會運動は此利潤の撤廢を理想としてゐるが、小賣商人は此の社會運動一般の理想と對蹠的地位に立つものである。いかに都市に於て多數を占めてゐるとは云へ、自分達の理想と全く反對な立場にある小賣商人を、無産政黨が其の道連れとすることは、決して策を得たるものではない。或は小農小工業者も其製品を賣るから、小賣商人と全然同一であると主張するかも知れないが、前者の場合は自ら生産勞働に從事する所に其の本質がある。その賣却は單に創造した價値實現の具體的手段に過ぎない。之と賣買による營利のみを目的とする小賣商と同一視することは餘りに形式的である。

四

　以上によつて、小賣商人が消費者一般の――從つて社會の負擔となつてゐることは餘りに明かなる事實である。それより能率の高い、合理的な、消費者の負擔を輕減する制度に席を讓らなければならない。素より凡ての社會現象は經濟的能率の點のみから決定することは出來ない。道徳的に見て、或は藝術的にそれが極めて好ましいものであるならば經濟能率を犧牲としても其存續發展に務めなければならないだらう。だが小賣商人を生かさなくてはならない理由は、他の文化價値から觀察しても殆んど發見することは出來ない。寧ろそれは普通の道徳觀念に於ても存續を許し難き社會の機構である。社會の中堅たることは單に其財産に關する限りに於てのみ妥當するに過ぎない。社會運動の側から見れば、當然資本家の陣營に所屬すべきものである。いかに現實的な、漸進的な社會運動も此の正面の敵と提携することは全く困難であらう。

　經濟的に已に存在の理由を失ひつゝある小賣商が日日より合理的な百貨店、チエーン・ストア等によつて其領域を蠶食されて

るるのは、社會の發展の爲めには止むを得ない大勢である。況んやより合理的な消費者自らによつて消費者の爲めに經營される消費組合の發達によつて止揚されることは小賣商人の當然の運命である。其變革の途上に於て一部の小賣商が失業する事も消費組合の發展を喰ひ止むべき根據とは毫もならない。失業した小賣商人はより生産的な生業に就くべきであらう。自分は敢て一部の小賣商と云つたが、それは消費組合の極度に發展した時を考へても、人々が個別的な家庭生活を營む限り、財貨の配給を司るべき勞働者事務員等は必要である。大局より見れば、それが必要な限り、今日小賣業に從事する或種の勞働者は、同時に消費組合の從業員として雇はれるであらう。そこに收容し得ない勞働者は、物品配給の爲めには過剰な人達である。過剰な者が之に從事することは徒らに社會の負擔を增すに過ぎないから、彼等が淘汰さるべきは當然の運命である。其傾向は今日も已に統計に現はれてゐる。問題はその變革の過程を如何にして最も圓滑にし、其犠牲を少くするかにある。

滿洲問題の中核

蠟山政道

如何に考察すべきか

總ての事象に就いて、その客觀的實在は一つであるに違いない。しかし、その實在に就いて抱ける人々の觀念形態は區々であり得る。而して我々にとつて實際上問題となるのは、無限多樣なる認識を可能ならしめる客觀的實在ではなくて、その實在が人の腦裡に反映して觀念形態となれる事象の構造である。

ここに問題とする滿洲と云ふ地理學上の實在に關しても、我が國民の腦裡に反映してゐる觀念形態は、過去二十年の歷史に於いて、多少の變化を遂げてゐる。一般國民の滿洲觀は、大體三つの要素から成立つてゐる。その一は、日清戰爭直後の三國干渉から日露戰爭に至る時期に於いて養得されたる國民的自衞心である。而して十數億の國帑と二十萬の精鋭の犧牲に於いて贏ち得たる勝利の感は、そこに多分の感傷的色彩を加へたのである。その二は、ロシアの敗退によつて國防的危機の去れる後、此時既に國民主義の壤土によつて培れたる産業主義の發達は、滿鮮の地域を植民地視することに依つて海外への發展が可能となることを國民に教へたのである。その三は、最近殊に歐洲戰後に於ける我が國の資本主義化的傾向の確立は、内に人口食糧問題を發生せしめ、工業原料に對する國内資源の不足を痛感せしむると共に、國内に於ける農村人口並びに勞働大衆の購買力貧窮化の徵表を現し始めた。ここに資本主義の發展としての帝國主義は、滿洲に於ける既得權益の擁護を國家政策の缺くべからざる一環として國民の腦裡深く刻ましめたのである。

かくの如き簡單なる分析を行ふも、我が國民の滿洲觀は、內面的には客觀的事情の變化と共に、種々複雜なる面相と內容とを有するに至つたことが判明する。ただ國民各個人の具體的な觀念形態に至つては、古きものが尚ほ依然として主觀的に支配

して居るであらう。又古きものと新らしきものとが、コンフユージョンの狀態を以て存在してゐることもあらう。然し乍ら、今日に於ける支配的な觀念形態は、大體に於いて國家的又は國民的な形式と外容とを具ふる帝國主義の特殊形態であることは否み難い。ここに特殊と云ふは、滿洲が我が國の接讓地域であることから、遠隔の植民地や未開地に對するのとは全く異り、內地そのもの、國境の延長と同視し易き觀念形態を形成せしむることである。かくて滿洲は政治地理學者の謂ふ「國境問題」となり、滿洲に於ける國際的鬪爭は、ニコラス・ルーズベルトの名づくる國境鬪爭（フロンティヤ・ストライフ）を現出してゐるのである。これは帝國主義論一般を以てのみ說くべからざる特異性を構成する事實である。

かるが故に、いま我國に於ける滿洲問題に關する諸研究や諸考察を見るならば、多かれ少かれ一箇の共通な特色を以て貫かれてゐる。それは、專ら滿洲に於ける日本の地位を「日本」及び「日本人」の立場より、內面的に技術的に觀察し紹介すると云ふ方法である。戰略家と資本家と官僚と記者とは、夫々巨大なる調査機關を擁して、その經營の業蹟と計畫の探究に關する調査報告を發表してゐる。それは正に傍觀であり、又從來の成行から見て、當然のことである。而してかゝる方法論的動機に支配されてゐる論策の內容に取り容れられる最も價値ある[illegible]は、部門的事項の組織と技術とに關するものである。そして、その平面的羅列が、我が滿洲經營の大觀となるのである。讀者は試みに、滿鐵の發行する「滿鐵二十年略史」とか、「第二次十年史」とか、或は關東廳の發行する「施政二十年史」とか、「要覽」とかを瞥見さるゝならば、必ずや筆者と感を同うされることゝ思ふ。

この種の考察方法の外に、時に個人によつて非科學的な系統のない感傷的な論策があるが、それは決して眞實の意味に於ける日本の地位を說明するものではなく、又輿論の大勢を左右し得るものでもない。要するに、今日我が滿蒙に於ける論議の最も有力なものは、統計家と技術家と戰略家とに依つて作られつゝある部分的專門的作物と其の集大成であると見てよい。近頃海軍々縮問題の流行語を使用するなら、いはゆる「尺度（ヤードステイツク）」論である。謂はゆる「特殊權益論」すらも、法律的經濟的な「尺度」を現はす通俗的な、手取り早い「尺度」論であると思ふ。

この種の論策に缺けてゐる所は、論理的に言つて必然的に、各種の分析の綜合を爲すことであり、關係諸國の心理と立場とを考察する相對的な建設論を爲すことである。卽ち理論的には社會科學的な系統的考察と、實踐的には政治家的な建設的目標を

缺如してゐることである。簡略に言つて、滿洲の占むる國際的な四圍の形勢を達觀し、その內部に於ける我が經營の組織と技術とが、相對的な變化を遂げつゝある時代の推移に對する建設的な對策に乏しいのである。

少しく歷史の敎ゆる啓示を顧みよう。かのキイール運河を得る爲めにデンマークと戰つたビスマークは、オーストリアを破つてボヘミアの併合に反對した。而して又、フランスを破つて、アルサスに滿足し、敢てローレンの奪取を欲しなかつた彼の見識には、參謀本部の戰略家的心理の外に何物かが存する。ヴォージュの山とマースの流れとは、之を東西にして古來幾多の王朝と采邑とが降替した。このアルサス・ローレンの歷史を、支那人は滿洲に於いて東山の丘と遼河の水とに見出してゐるのである。こゝに覇を唱ふる者は、やがて中原を窺ふものであると心裡深く銘してゐる。この心理的事實を計慮に入れなくては、日支の外交關係引いて極東に於ける國際關係に對する政治家的見識は成立たない。明治大正の先輩政治家には、流石に滿洲經營の爲めにビスマーク流の經略政策を須ひた跡が充分にある。彼等は本能的の直覺さを以て、滿洲に於ける政治的地位の不安定を認識した。卽ちその因由が、その內部に存するよりも、寧ろその國際的外廓に存することを經驗した。華府會議に至るまで、日英同盟と日露協商の外交史を正面的に考察するならば、思ひ半ばに過ぎるであらう。

今日の時代は、既に當代の故智を學ぶべく、全く變化を遂げてゐる。ビスマーク流の合從連衡は、もはや國際政治の政策としても、又テクニイークとしても用を爲さない。今日は、その形式の如何なるにせよ、コンビネーションの時代ではなくてコオオペレーションの時代である。しかも問題の對象は依然として、否層一層、不安定の狀態にある。その解決は時局の問題として、獨り我が國民のみの問題でなく、廣く太平洋の、又世界の問題として要望されてゐる。從つて問題考察の必要は昔日に比して一層痛切である。たゞ新に求めらるべきものは、從來の內部的獨自的絕對的の考察方法に加ふるに、外廓的綜合的相對的のそれを以てすることではあるまいか。今や、北滿に於ては我々の眼前に於て、革命以來ユーラシア政策てふ新規軸を以て被帝國主義者と共產黨との結合を企圖し來れるソビィエット・ロシアが、國民黨の急進的國民主義を以て猪突し來れる支那と衝突し、拮衡しつゝある。この新ロシアの國際政策は、その成敗利鈍は暫く別として、國を建つるに當つて一箇の主義政策を以て臨んだ態度は、我々の一考に値する所であらう。

現在日本の有する國際的地位は、ネワラブジカルな意味に於

て甚だ有利であり、且つ重きを成してゐる。それは人の和であるよりも、寧ろ天の與へたる地の利でしかない。この人の和と地の利とをして、守株刻舟の舊套政策の一本槍で行き或は空しく無爲無策に過さしむる戰略的心意（ステラテジカルマインド）を我々は排斥する。我々は心から現代の我國の指導者に創造的な建設的な大策を冀求する。而して滿洲問題の對策と解決とは、正にその試煉の好題目たるであらう。

何處に問題が存するか

滿洲問題の因由は、前段述べたる如く、滿洲經營の部分的技術的方面に存しない。勿論我々日本人のみにとつては、滿洲に於ける個々の方面に關する、部分的な問題が重大な關心事であるが、「日本」又は「日本人」が主體たる問題は、必ず他國民との接觸の存する外廓に發生する。西洋の言葉に「to join issue」と云ふのがあるが、こゝで云ふ問題と云ふ意味も、卽ちそれであつて、必ず相手がお互に一致しない論點を認めた時にのみ發生する。

卒直に云ふならば「日本」及び「日本人」の滿洲經營がカナダやオーストラリヤの如きアメリカ・インディアンを措いては無人の境で行はれるのであるならば、こゝに謂ふやうな問題は起りやうもない。それは寧ろ、あのエーゲ海を渡つて小亞細亞の地域に植民した希臘人が、やがてペルシャ王國の勃興によつて之と衝突した時に、起つたやうな問題である。この時始めて政治地理學者の謂ふ「海の國民」と「陸の國民」とが、イッシューを有するに至つたのである。曾つて滿洲をロシャの蹂躙に委した滿洲朝廷が倒れて、今や滿洲を有望な植民地とする漢民族が、歷史に遲れ馳せに今日に至つて國民意識に目覺め、政治組織の統一を實現せんとするに至るや、こゝにロシアを驅逐してその跡に經營を始めた日本と衝突することゝなつたのである。卽ち滿洲問題は、假りに之を日支兩國間に限るとしても、今日の如き客觀的狀態が發生した爲めに極めて最近に生じて來たものである。

然らば、この接觸と衝突とは如何なる方面に行はれてゐるか。それを研究することが滿洲問題の所在を知ることになる。それに就て、擧げらるべきものが三つある。その一は、鐵道建設問題であり、その二は經濟政策問題であり、その三は移民に伴ふ人口及び耕地問題である。その他凡百の問題があるが、前述の論題に於ける問題たる意義を有するものは、この三者に包含されるか、又はそれと關聯してゐると思ふ。

鐵道建設問題

植民地又は未開地に於ける鐵道問題は、內地に於ける夫れとは全く異る面相を有する。それは單なる經濟上の意義を有するに過ぎない所の交通運輸の問題ではない。それは重大なる政治的問題の絡る集中點である。第一に、植民地に於ける鐵道は、それが本國と接讓地域たる場合には、國防の第一線である。ドイツの政治地理學者ハウスホーファーが、その著「地理的及び政治的意義に於ける國境」に於て、南滿洲鐵道の國防的意義を考察してゐるのは、學理的研究からであるが、我々は目前に於いて屢々我が軍部の執れる政策からしてこの意義を實際上感得し得る。現內閣は、緊縮豫算を一枚看板として、前內閣の編成し議會の協贊した豫算を變改するの勇斷を示してゐるが、滿洲に於ける駐屯軍增兵に就ては、既定通り實行すると傳へられてゐる。勿論この增兵の決定は、形式的に言へば條約上合法的である。が、支那が華府會議以來、屢々この問題に對して異議を申立てゝゐるにも拘らず、この事あるは、最近の北滿洲に於ける事變に鑑みて、鐵道警備を槓杆とする駐兵政策の必要を益々認めるに至つた證左であらう。猶ほ既設の滿鐵線のみならず、目下懸案行惱み中の吉會線にしても、目下滿洲の經濟的開發の重心が北滿に移れることからして、該鐵道の經濟的價値は北方に向つて將來の可能性を有するに至つたに違ひないが、東支鐵道の地位が不安定の今日軍事的價値からしても相當の重要性を有することには疑ひない。かうした軍略的見地に於ける鐵道の價値が、滿洲の治安維持と關連せしめられる現狀は、滿洲問題の解決に對しては、根本的な障碍であることを銘記しなければならぬ。

第二に植民地に於ける鐵道は、投資の對象物として、或は農業開發の上から、又內地商品の販路の上から、將又資本そのもの、輸出の上から、最も重要な施設である。第三に、これと關連してゐることであるが、植民地鐵道は通常多くの附帶事業を有してゐる。我が滿鐵の法律上の性質は單なる　植民地會社であるが、その經濟上の性質は一種の複合會社であつて、資本主義的に言つて最も合理的な形態を有してゐるのである。滿洲に於ける我が特殊權益は、この複雜なる有機的組織によつて結合され、運用され得ると言つても過言でない。この事實は往々にして內外人の深く注意しない所であるが、この事實を無視して、我が特殊權益を云爲することは聊か机上の空論である。

かくの如く植民地に於ける鐵道經營は一般に政治上の重要さを有するのみならず、滿洲に於ける我が鐵道經營は一切の產

的活動の樞軸である。このことは、然しながら、他方に於て、邦人の活動は租借地及び鐵道附屬地と云ふが如き特定の地域を離れては、全く異る事情の下に立たざるを得ないことを示すことになる。卽ち鐵道建設の場合に於いても、滿鐵と其の地位を異にする支那鐵道と競爭の立場に立つことになるのである。いま、試みに全滿洲に於ける鐵道の哩數及びその經營形態を表示すれば次の如くである。

資本及經營		鐵道線名	哩數	
I	日本の所有及び經營	大連——長春	438.5	678.5
		蘇家屯——撫順	32.9	
		蘇家屯——安東	161.6	
		大石橋——營口	13.9	
		臭水子——旅順	31.6	
II	日支合辦經營	金洲——城子疃	63.4	114.4
		天寶山——圖們江	69.0	
		本溪湖——城廠	12.0	
III	日本出資及支那經營	通遼——鄭家屯	72.0	636.2
		四平街——洮南	195.2	
		洮南—昂々溪—チチハル	159.0	
		長春——吉林	79.0	
		吉林——敦化	131.0	
IV	露支共同所有及び經營	滿洲里——ポクラニチナヤ	920.0	106.7
		ハルビン——寬城子	147.0	
V	支那出資及び經營	奉天——山海關	262.0	830.4
		打虎山——通遼	156.3	
		奉天——海龍	146.5	
		海龍——吉林	100.6	
		呼蘭——海倫	125.0	
		開原——西豐	40.0	
		總計	3356.5	

右表の示す如く、滿洲に於ける鐵道は、その資本及び經營關係が複雜を極め、單に不統一を極めて居るばかりでなく、日・露・支三國間、主として日支間に於て、競爭激烈を極めて居る。第一に、この事態は、滿鐵を中心とする支那に對する借款鐵道政策の行詰りを生じ、日本と協定した未設線を蹂躙して支那自身に依る鐵道建設の趨勢が顯著となつた爲めに惹起されたものである。滿鐵の直接間接の統制下にある鐵道の哩數は約一四六〇哩であつて、滿洲に於ける鐵道總哩數約三四〇〇哩の四四％を占むるけれども、今や支那自身の手に成る鐵道が僅々二、三年間に四〇〇哩も建設され、將來益々その割合が增加して行くのに想到すれば、ここに鐵道に絡る國際戰の發生は極めて自然の數である。なぜなら、支那本部に於ける鐵道建設が多年遲々として停頓の狀にあるに反し、獨り滿洲に於てのみ支那政府は自己の領土の上に獨立に鐵道を大規模に建設し始めたのであつて支那鐵道史の上に新しい一頁を開いたものと言へるからである第二に、このことは、日清善後條約以來の協定に依賴し、絲愛鐵道問題や四國借款團事件に於て力強く主張した併行線阻止政策の破綻を示すものである。併行線禁止協定の效力及びその是非は暫く論せず、打通、奉吉、兩線の場合の如く、その效力が事實上認められざるに至つた今日、日支兩國の鐵道戰が今後如何に展開するかは、寔に注目に値する事象と言はなければならぬ。

惟ふに、鐵道經營問題は、一國内に於てすら、英米の如く大私設會社の手に因つて、國家の統制之に及ばざる場合には、その協調や合同は極めて困難である。況んや滿洲の場合の如く、その立場を異にする數國が、殊に直接間接の國家資本の形態を以てその經營を行ふ時に當つて、その協力は定に困難と言はざるを得ない。しかも、その協力なくして競爭が激化するならば、植民地鐵道の政治的性質の然らしむるところ、何時なりとも國家鬪爭卽ち戰爭爆發し易い危險がある。支那側には、國權恢復の主張の下に一圖にその回收を圖らんとする意圖がある。これ果して戰爭を誘致することなくして止む解決策であらうか。蓋し、滿洲に於ける鐵道建設問題は、所謂滿洲問題として第一に舉げるべき鍵鑰問題である。

投資及び經濟政策問題

鐵道建設問題と關連して、次ぎに考察すべきは、獨り鐵道に限らず、一般に滿洲を投資地とし、產業的開發の目的とする諸國の經濟的活動である。この活動からも亦ここに謂ふ問題が發生すると云ふのは如何なる意味であらうか。

旣に述べたる如く、その謂ふ所の問題は、各國民獨自の問題

ではなく、各國民がその活動を遂行して行く結果として、各國民の意志如何に拘らず發生する所の問題なのである。それは一國内に於ける經濟上の競爭と相似てゐるが、こと滿洲なる一箇の經濟領域に於けるものは、單なる競爭ではない。そこにあるものは、多かれ少かれ民族的な社會制度の相違がある。加ふるに國家的統制が資本的に且つ政策的に及ぼされてゐる經濟集團の競爭である。殊に問題となる要因は、後者の國家的統制の趨勢である。換言すれば、單なる商業上の個人主義的自由競爭であるならば、民族や國籍の相違は問題とならない。經濟競爭が多かれ少かれ、國家資本のトラスト的形態――それが日本の場合の如く資本輸出の形式をとらうとも、將又支那の場合の如く原始資本蓄積の形式に依らうとも、その差異は暫く論じない――をとつて、經濟的に覇を爭ふに至るならば、小資本家や一般大衆は次第々々にその何れかの陣營に統率せられ、經濟活動は全く經濟戰爭と化す可能性が存する。支那農民大衆の犧牲に於いて東三省政府の遂行せるマーカンティリスティックな獨占政策は、滿鐵を中心とする我が國家資本の覇制の下にあるトラスト組織と、早晩大なる衝突を招くに至るであらう。これ筆者の滿洲問題の一内容として注意せんとする所である。

試みに、我が對滿投資の構成に就て一瞥を與へんか、人々が單にその數額のみを注意して、その構成狀態を見ないことの如何に不當であるかゞ判明するであらう。最近滿鐵が主として外國人に示す爲めに發行した報告書（一九〇七年より一九二八年に至る滿洲の進歩）に依れば、我國の對滿投資は凡そ左の如き狀態である。

投資者		投資物	投資額
南滿洲鐵道株式會社	直接投資	鐵道	圓 一四八、一七七、六六六
		港灣及び埠頭	九九、七八九、一〇九
		港灣用船舶	四、〇四四、五三六
		炭鑛	一三六、七三〇、七二一
		製鐵	三〇、七四七、三〇七
		衞生施設	一四、五九〇、六八八
		教育施設	一三、四八九、八四八
		都市經營	一三四、九七九、九三三
		其他	四六、一三一、三三三
		計	六四四、八四一、七三四
	附屬會社特株及び所有公債		五五、二八七、一八一
	支那鐵道借款及び産業資金貸		五九、四五二、八五五
	支那鐵道建設現金貸・豫金及び未還收信用		一五〇、五五八、二〇六
	計		二六五、二六八、二四二
日本政府	支那鐵道借款		九八、七三〇、八三三
	支那政府並びに個人への借款		一〇、二八三、〇八〇

日本會社	會社形式に依る投下資本……	四三八、〇〇三、四一〇
日本個人	個人形式に依る投下資本……	九四、九九一、五六〇
	計 ……	五三四、二七、〇五〇
	總　計 ……	一、五六三、二一七、八四九

右の統計より三つの重要なる事實が見出される。その一つは滿鐵の直接投資額の中鐵道の占むる割合は、約三七%である。が、この鐵道あるが故に、爾餘六三%の事業が動いてゐると云ふことである。その二は、滿鐵を中心とする直接間接の投資が、全投資額の約五八%を占めてゐることである。その三は、滿鐵投資の性質が、諸外國の夫れと異つて、借款投資が僅かに一億二千萬圓であつて、約七・六%を占むるに過ぎず、他の投下資本は大體日本人の統制下にある產業資本の形態をとつてゐることである。從つて、これらの利潤を目的とする產業資本は滿鐵の經營が直接間接に大なる關係を有する事は明かである。

以上三箇の事實は何を語るかと言へば、日本の滿洲經營は滿鐵を中心とする產業的活動であつて、同じ帝國主義と言つても利子の搾取を目的とするものではなく、恰も內地の延長と同じやうな形態を執つてゐることである。滿洲に於ける日本の政治活動が、支那の主權下に在つて、局部的乍ら經濟上の統制力を完全に有する理由は、この內地延長の形態を有する爲である。換言すれば、日本の對滿活動は餘剩資本の移出に依ると言はんよりも、寧ろ內地の產業活動の延長と見るべきである。然らずんば、從來滿鐵や內地銀行が、米國の利子資本の移入を企て、之を利潤資本に轉化せんとする努力を說明し得ないではないか。

翻つて、東三省政府の獨占政策に就て一瞥を與へよう。目下東三省の經濟界を壟斷しつゝある所の官憲、官銀號及び官商の結合體の活動は、初期資本主義のアジア的形體の一として學理上も興味あるものであるが、その活動の影響に至つては、實際上忽諸に附すべからざるものがある。別に準備金を有することもなく不換紙幣の發行を以て、軍事費の調達を行ひつゝある東三省の諸政府、殊に奉天政府は、勢ひ紙幣の價値を維持する爲めに、諸紙幣の强制的流通と通貨の一般的統制を行ふと共に、進んで商品市場に進出し、大連、天津及び上海等の滿洲外の市場に於て、金、銀貨との交換を行はねばならぬ。そは經濟上止むを得ざる必然的政策である。これが結果として、紙幣價値の動搖に苦しむものは、獨り農民大衆と錢業者とのみではなく、日本人にしても特產商を始めとして支那人の購買力を目的としてゐる商人及び銀行業者は直接間接その不利を忍ばねばならぬ。

この獨占政策は、更に進んで生產領域にまで擴張さるべき約束にある。金融、商品の兩市場の統制は、やがて生產市場にま

で及ぼされねばならぬ。滿洲に於ける支那政府が、自己の領土内より出づる生産原料を自國民の手によつて製品化する過程に入り始めたるは、毫も怪むを須ひない。その政策の本質は、後進資本主義國の何れも一度は執り來れる産業保護又は助成政策と一般である。そは又滿鐵を中心とする助成會社の簇生と理論上選ぶ所がない。たゞ兩者の差異は、經濟的テクニィークの發達の程度に存するのみ。今や東三省官銀號の如きは、その生産事業の範圍として、電燈、交通、製材、皮革、印刷等の諸事業を經營してゐる。

斯くの如き經濟活動の獨占化的傾向は、滿鐵の場合に於ても東三省政府の場合に於て、個人の力乏しき植民地に於ては容易に行はれ易き所であるが、同時にその獨占範圍には自ら制限がある。なぜなら、そは政治的支配の確立してゐる領域に於てのみ可能であるからである。卽ち、滿鐵及び在住日本人の場合に於て見るならば、その活動は支那領土主權の直接支配してゐる所に及べば、その活動は勢ひ制限せられ、或は異常な困難に逢はねばならぬ。その證據の一つとして、合辦事業の成立動機とその成績の極めて不良なる事が擧げられる。第二に政治的に制約されたる經濟市場の狹隘なる事實が擧げられる。滿洲に於ける邦人の經濟活動は滿鐵の直營事業を除けば、決して好況でない。第三に度量衡、通貨金融制度等經濟活動の缺くべからざる機關の不統一より來る不便を擧げねばならぬ。この事實は、勢ひ日支兩國ともその經濟活動を擴張せんとすればする程感ぜらるゝに至る桎梏でなければならぬ。然らば、之を打破するものは、果して競爭と戰爭とであらうか。筆者の問題とせんとする所はこゝにある。

人口及び耕地問題

滿洲は地球上溫帶圈に屬してゐる地帶としては、人口比較的稀薄であつて、未耕地に富める唯一の地域である。比較的最近の調査に依れば、その總面積（東部内蒙古を加へて）は、一億一千五百萬餘町歩を有するに拘らず、人口は二千八百餘萬人であつて、その平均密度は一町當り〇、二人强である。その耕地面積は、調査報告區々であるが、可耕地大略二千五百萬餘町歩と計算されてゐるに對して、既墾地一千三百萬餘町歩である。年々三、四十萬町が擴張されるとしても、なほ未墾地として一千餘萬町歩を殘してゐる譯である。日本内地の耕地面積六百萬餘町に比すれば、その二倍に當るものが、なほ處女地として墾鋤の加へられるのを待つてゐるのである。

然し乍ら、滿洲に於ける人口及び耕地問題を考察することに當つ

ては、この大體論を以て止まるは人をして誤らしむる虞がある。即ち、更らに二つの觀點から論究しなければならぬ。第一は、滿洲と一口に言つても、人口及び耕地の分布狀態は非常に差異あるが爲め、右の平均的大體論を以つてしてはその實狀を詳にすることは出來ないが故に、地方別觀察を下す必要がある。そうすると最近の人口數だけ耕地を推定せる右表の示す如く、大體に於いて人口は南滿洲に密であつて、北滿洲に於いて稀なることが分明する。又耕地は南滿洲に於いて既墾地多く、北滿洲に於いては未耕地が多く殘されてゐることが知られる。

地方別	人口	總面積	可耕地	既墾地	未墾地
奉天省	一三、五九一、一〇〇	一三、五七七、九八六町	七、七九七、六六六町	五、〇九七、九九七町	二、六九九、六六九町
吉林省	八、七六六、八〇〇	三一、一七二、一〇一	六、二六三、五六〇	三、四九三、八四三	二、七六九、七〇七
黑龍江省	五、一五四、九〇〇	五五、二四〇、四三一	八、三五〇、一三三	二、九六五、一三四	五、三九四、九八八
小計	二七、五一二、八〇〇	九九、九九〇、五一八	二二、四一一、三六八	一一、六一七、〇七四	一〇、七九四、三二四
東部內蒙古	四、三二六、〇〇〇	一五、八三三、四一〇	三、三三七、三三三	一、五九三、二二四	一、七四四、一五八
滿蒙總計	三一、八三八、八〇〇	一一五、八二三、九二八	二五、七四八、七〇〇	一三、二一〇、二九八	一二、五三八、四〇二
(關東州)	八二四、八八二	三四〇、八〇八	二六三、八〇四	一四八、〇五六	一一五、七四八

第二に滿洲に於ける人口分布を國籍別に從つて、その居住地域を標準として觀察して見なければならぬ。これによつて、人口關係が結局に於いて政治的狀勢を支配する遠因を知り得る。經濟的には複雜微妙なる組織の力によつて少數者の支配關係が成立するけれども、政治的には結局に於いて多數者の支配が容認されねばならなくなる。滿洲に於ける比較を絕した絕對多數者たる支那人と、次に掲ぐる在滿最近の外國人表の示す如く、滿洲經營二十年にして未だ二十萬の少數しか在住せぬ日本人とが將來如何なる關係を保つに至るかを想ふ時、日本人の立場は益々資本主義的合理化の傾向を辿り、少數者にして多數者と同

最の活動をなし得る組織と技術とその金融的方面に集中せねばならぬであらう。しかも、かやうな高度の組織的活動が、支那人の國民主義的自覺に伴ふ政治的運動と果して兩立し得るや否やは、一にかゝつて東三省に於ける治安維持の問題が兩者の側に於ける滿足を買ひ得る制度と方法とによつて解決され得るか否かに懸つてゐる。

國籍別／地域別	日本		露國	英國	獨國	佛國	米國
	內地人	朝鮮人					
關東州	九七、〇〇二	九七三	三三三	五二九	三八四	三二五	一九〇
奉天省	七二、七九二	一九七、三三〇	一、一三六	一三五	一五四	六四	八七
吉林省	一九、七九三	三三七、八〇六	一三、〇四〇	一九九	一七三	一九五	五八
黑龍江省	五九五	四八、二七八	一二五、八四九	二〇	八	一七	二一
總計	一九〇、一八二	五八四、三八七	一四〇、三五八	八八三	七一九	六〇一	三五六

しかし乍らかやうな問題は未だ底流として存在して居り、表面には現れてゐない。滿洲に於ける人口及び耕地問題が滿洲問題の一內容として、今日その重大性を提示しつゝあるは、最近に於ける移民に伴ふ人口及び耕地が共に急激に增加しつゝあることである。その結果として直接に現はれるものは、滿洲農業の開發狀態と經濟重心との推移とである。今から十年前、卽ち大正七年、滿鐵調査部は『人口耕地及ビ農產物ヨリ見タル滿蒙ノ大勢』と云ふ詳密な調査報告を公にしてゐるが、それに依れば、大正四年の總人口數は二千拾一萬二千百人と推定されてゐる。而して明治四十一年から大正五年までの九ケ年間の人口の平均增加趨勢は、每年四十六萬一千二百人と推算される。又耕地增加の狀勢も、南滿洲七萬八千四百四十町步、北滿洲十五萬五千九百町步南北滿洲を通じて二十三萬四千三百四十町步と概算されてゐる。假りに、この推定數を基準とすれば、最近に於ける人口總數は、例へば昭和二年度に於いて、二千六百七拾八萬四千六百人であり、一年の增加數は六拾五萬一千人の割合と數へられねばならぬ。この中自然增加數は、三十二萬一千四百人、移住增加數は三十二萬九千六百人と見積られてゐる。(滿鐵調査部、高久氏『滿洲鐵道の發達と人口に就ての一考察』(調査時報、昭和四年三月號)參照)耕地增加數は、前陳せる大正四年の推定を基準とすれば、大正十六年卽ち昭和二年の夫れは、南滿洲に於いて九萬七千三十二町步、北滿洲に於いて二十四萬六千六百七十一町步、南北滿洲を通じて三十四萬三千七百町步と計算されてゐる。卽ち耕地增加率は既に人口の增加に比例せざる漸減の過程に入つてゐる。然るに、實際に於ては、南滿洲の增加は推定率の如く緩漫なるに反して、北滿洲に

於ける夫れは推定率と必らずしも一致せず、尙ほ漸增の趨勢を示してゐる。北滿洲に於ては、人口も耕地も實數に於いて十年前の夫れの倍數を示してゐる。卽ち南滿洲の耕地開墾度は今やその限界點に近づき、人口の增加は今後主として商工業に依存する都市の發達に待つの外ない。北滿に於いては、未だその限界點に遠く、發展は今後長く續くものと推定せられる。

この事情は、最近に於いて移民の增加があり、その增加を許容する經濟的條件の發達が顯著となれるが爲めであつて、必らずしも永續的な恒常的原因と見做し得ないかも知れない。それにしても、鐵道の發達や地價及び生產物價の騰貴、商工業の勃興及び海外市場との連絡等の經濟的諸條件が具はるに至れば、豫想以上に耕地開墾を可能ならしめる經濟的限界度が低下され移民に依る人口增加を保有し得るであらう。滿洲に於ける人口の自然的增加率も一般に支那本土の夫れよりも高く計算されてゐるやうであるが、最近の人口及び耕地の擴張は、主として年々五十萬以上も定着する移民の原因に依るものと見て差支ない。

山東直隸等より每年滿洲に來る出稼者の出入は、從來見慣れたる季節現象であつたが、最近二、三年に於てその數の夥しく增加したのみならず、その半數が殘留し、永住移民の形態をとるに至つて、著しく世人の注意を喚起したのであつて、恰も民族移動の如き現象として見らるゝに至つた。その原因が、支那本部に於ける戰禍、饑饉、重課或ひは土匪等の壓迫に堪えずして故土を棄て、流離する避難民か、或は相對的人口過剩の爲めに農業移民として新天地を開拓せんとする住民か、その何れであるにせよ、滿洲が支那唯一の秩序ある平安鄕なると、彼等の來つて開墾するに委せられてゐる處女地に富めることがその誘因であることは疑を容れない。いま、その入滿者及び歸還者の總數を比較して差引得たる定着移民の數は、大正十四年より昭和三年の四年間の狀態は左の如くである。

移動＼年次	大正十四年	大正十五年	昭和二年	昭和三年
入滿者數	四七二、九七八	五六六、七二五	一、〇二二、九四二	九三八、四七二
離滿者數	二三七、七四六	三二三、六九四	三四一、八九九	三九四、二四七
定着者數	二三五、二三二	二四三、〇三一	六八一、〇四三	五四四、二二五
百分比	四九%	四三%	六六%	五八%

この一ヶ年五十萬以上を算する最近の移民は、汽車又は徒步にて北上し、各地に分布するものであるが、大體八箇の方面に分散する。(1)奉海線及び開拓線の背後地方、(2)四洮、洮昂線地方、(3)長春の西方及び西北方地方、(4)吉長、吉敦沿線及び背後地方、(5)東支東部沿線及び背後地方、(6)東支西部沿線及び背後地方、(7)松花江、黑龍江の沿岸地方、(8)呼海沿線及び背後地方

これである。而して、大體を見るに、移民の三分の二が東支沿線即ち吉林省北部及び黑龍江省に定著することが知られる。これらの最近の移民によつて實際上幾何の耕地が開拓されたかは定著匆々のことであるから、容易に知るを得ないが、從來の定著者に依る自然增加數と合せて、年々の耕地擴張の比率の大なるを見れば、その幾割かゞ新しき年々の移民の力に歸すべきは明かである。

最後に、この移民增加の社會的結果を考察すれば、先づ考へられることは、滿洲に於ける支那人口の割合が斷然他國民と比較して優勢となり、全人口の九〇%以上を占め、殊に北滿に於けるロシアの地位が全く慘落するに至つたことである。支那が列國に向つて滿洲に於ける經濟的利益を高唱する時に第一に擧げるのは、この移民である。然し乍ら滿洲に於ける人口增加とそれに伴ふ耕地擴張が進展し、次第に南滿に於ける如く限界に近づく時に生ずるのは、滿洲の商工業化問題である。卽ち農村人口の飽和はやがて都市にその人口の疏通口を求めねばならぬ。それに對しては、支那人は滿鐵又は東支沿線附屬地に於ける市街侵入又は自らの手に依つて新しき市街の建設を目圖しなければならぬ。この現象は既に生じつゝある。人は我が滿鐵沿線諸都市に於ける支那商人の進出やハルビンの傅家甸の繁榮を云爲する。又例へば四平街に於ける支那市街の對抗的建設を見よなどと云ふ。しかし乍ら、これらの現象は、何れもその背後に存する滿洲農村に於ける人口壓迫の現象に過ぎぬのである。今や滿洲に於ける諸都市は、從來よりも一層政治的に行政的に民族混和から生ずる諸問題を處理せねばならぬ時期に到達しつゝある。人口及び耕地問題の含蓄する意味は、極めて遠き計慮を要するものと思はれる。これ敢てこの問題を滿洲問題の一内容に數ふる所以である。

滿洲は何處に行くか

上來述べ來つて、いはゆる滿洲問題の何たるかの一斑を明かにしたつもりである。しからば、かやうな問題を包藏してゐる滿洲は何處に向つて進むであらうか。これは容易に豫斷を許さない重大問題であるが、問題の所在を斯々と認定した以上、これに對して解決の大綱を考慮することは、この問題に深い利害關係を有する我々日本人の義務であらうと思ふ。筆者は固より滿洲に對して特別の智識經驗を有しない一學究に過ぎない。この重大な問題に對して具體的の解決を指示する何等の資格を有しないものである。が、滿洲問題の國際的問題となるべき個所をし剔抉、その問題を構成する事實を提示したる以上は、それより論理的に導き出づる問題解決の方向を論究して見ることは

當然の處置と考へる。その案策の內容は筆者獨自の考究に基くものであつて、それが直ちに實際政治家又は一般國民の贊成を期し得るものとは思はない。否寧ろ多くの人々にとつては非現實的な遠國からの童話のやうに響くかも知れぬ。しかし乍ら、時代の歩みと問題の推移とは、意外にそのテンポを早め、やがてそれが一箇の時局問題の日程に上る日が來ないとは誰が斷定し得よう。

從來我國に於ける滿洲問題と言へば、本文の冒頭に述べたる如く、日本の滿洲に於ける地位を內面的に考察するに在つた。從つてそれに對する態度は、その經濟的文化的貢獻を中外に闡明するに在つた。卽ち日本の滿洲經營と施設とが、滿洲全體從つてその大多數の住民たる支那人に與へたる利益を說き、未開地滿洲を今日の文化程度にまで發展せしめた貢獻を述ぶるに在つた。この態度は支那人に對していはゆる「日支共存共榮」の標語となつて現はれ、或は西洋人に對しては「內外人安住の地域」の合言葉となれるものである。

この態度と形影相伴ふ主張は、いはゆる「特殊權益」又は「既得權」の擁護である。前者は主として第三國殊にランシング・石井協定の如く米國に向つてなされる主張であり、後者は對內的消費として好んで主張される所である。そうして、この特殊權益論や既得權擁護論が、如何に現實の我が內治、外交に働いてゐるか、その取扱ひが內閣の相違によつて如何に異つてゐるかも天下周知の事實である。要するに、過去及び現在に於ける我國の輿論を支配してゐる滿洲問題への對策は、この文化的使命の高唱と特殊權益の主張とが、その兩輪を成してゐるものと見て大過ない。

この對策は、果して、筆者の剔抉した滿洲問題の解決策として、果して十善のものなりや否や。これ筆者の眞面目に問はんとする所である。

極めて不完全なる滿洲問題の考察を以てしても、筆者は、今や、この輿論的背景を有する對策に對して二つの點に於いて、その缺陷を痛感するものである。その一は、いはゆる文化使命論に對するものである。この主張は、何人も否認し得ない事實に根據する客觀性を有するものであるが故に、滿洲の實狀を知らざる米國人等をして一度その現實を見せしめば、必らず或る程度まで我が立場を諒解せしめ、その努力に對して敬意を表せしむることが出來る。なぜなら、これは、曾つてレオナルド・ウールフが、その近著『文明と帝國主義』の中で道破したやうに文明の階級を異にせる民族又は地域をして文化的に向上せしむることは帝國主義の唯一の貢獻であるからである。然し乍ら、それは文明史家の筆によつて冷靜に敍述さるゝ事實ではあるがいま現實の國際政治上の問題となれるものを解決せんとする

策として果して策の得だるものであらうか。甚だ疑ひなきを得ない。なぜなら、この主張は、爭點の相手方たる支那人を承服せしむるべく、支那人の心理に充分なる洞察を加へてゐないからである。彼等と雖も、日本の滿洲經營の文化的貢獻を事實として認めない譯には行かない。しかも、それによつて彼等の信服を得ることは出來ないのである。現に、彼等は、この事實を認め乍ら、我々と爭はんとしてゐるではないか。既に爭ひはこの事實を認めた上で戰ひの形式をとつてゐるのである。眞實の戰爭に於いても、敵の心理を知ることは最も肝要である。曾つてドイツの戰略家クラウゼウィッツは、その名著『戰爭論』に於いて、かういふ至言を吐いてゐる。曰く『軍事指導者の不斷に心すべきことは、敵國の人民をして我に承服せしむるやうな氣持に導く術を心得ることである』と。この戰術は豈獨り兵法のみに限らんや。その含蓄する所更に廣く一般の外交に及ぼし得るものである。若し我が文化的使命の主張にして、支那人の國民主義的主張を承服せしめ得ないものがありとすれば、我が國民の主張は更に高處大所より更に一般の努力をしなければならぬ道理である。筆者はこの點に我が日本國民の大なる精神的試練が橫つてゐると思考するものである。

その二は特殊權益論の主張に對する疑問である。特殊權益論は國際條約上の根據と既成事實の基礎との上に立てるものであるが故に、恒常的な和親的な國際關係を保守することを最少限度の要求として主張し得る現代國家にとつては、消極的な強みではある。然し乍ら、これに對しても、そのいはゆる「特殊」なる文字の意義が明確ならざる限り、爭點解決策として積極的標準とはなり得ない。ただ、不法なる手續によつて、その權益を奪はれざることを防衛し擁護し得るに止まる。然るに、滿洲問題の性質は、既に縷述したる如く、滿洲に於ける經濟事情の推移に伴つて必然的に生じ來る政治的問題を內容としてゐるのであるから、單に既得權の現狀維持と云ふことを形式的に主張することは、何等問題解決の根本に觸れないことになる。即ち既得の權益そのものが、周圍の經濟事情の變化によつて相對的に變更を受けつゝあるが故である。特殊權益論は結局のところ現在の國際慣習の容認する正統なる權益と云ふことに落ちつかざるを得ない。この程度のことであるなら、今日列國の國際慣習は嚴くして之を認めて居る。

然らば、文化的使命論と特殊權益論に代るべき態度及び政策が存するか。筆者はこれに對して敢て獨斷を下さんとするものでなく、世の識者の考究と判斷とに待たんとするものであるがなほこの際二つの方向を暗示するを許容されんことを望まざるを得ない。その一は、我が國民の大多數が有する滿洲問題に對する傳統的な感情的態度の奥底に潜む所の心理に想到し、これ

を合理的な政策に具體化せんとする考へ方である。我が國民が眞底から滿洲問題を重大なりと考へ、動もすれば理性を超越したる主張に出づるのは、歴史的經驗の教へたる所によつて、不知不識の裡に恰も本能的に一種の國防的不安を感ずる自衛心の發露である。この生物學的衝動に加ふるに、我國の人口食料又は工業原料の不足に對する民族的危惧心である。この心理的事實を無視しては、如何なる政府も政黨と雖もその滿洲政策を成立たしめ得ない。然し乍ら、この自己保守の本能を如何にして合理的に滿足せしむるかに至つては、問題は自ら別である。從來の積極論者の唱ふるが如き軍事偏重政策が、この目的に添ふ結果を齎らさざるは云ふまでもない。否その反對の結果を惹起することの不可能性が多いことは、恐らく今日多くの人が認める所であらう。然らば殘されてゐる所は、滿洲に關して完全なる平和と安全とを保障する政策と組織とを樹立することに外ならない。この平和組織と安全保障とが、如何にして日支兩國及び關係諸國の間に成立され得るか。それは恐らく、今後十年若しくは長くして四半世紀の外交政策の基調を成すであらう。

その二は、我が國民生活の經濟的基礎と滿洲經濟との關係を仔細に吟味することである。今日の滿洲に於ける特殊權益が、複雜にして巨大なる組織の下に保持經營されてゐることは既に明かにした所である。而してこの權益が國民的利益の名の下に一色に塗られてゐる。今日のあらゆる科學と思想とが、かやう單純な論理をその儘受け容れないに拘らず、滿洲經營に就て充分なる吟味の爲されてゐないのは寔に奇怪と言はねばならぬ。それは資本主義がもはや國民の名に於ては異議なく論ぜられないやうに、滿洲に於ける資本主義的經營も亦、一から十まで國民の名と結びつけられ得ないのである。眞實に於いて我が國民大衆の經濟的基礎を培ふものとして、滿洲の經濟的開發が重要視されねばならぬとしても、そこに支那の政府官憲又は資本家の利益でなく、眞に支那人大衆の利益に對して、協同し提携し行く餘地が存しないであらうか。鐵道建設にせよ、又經濟政策にせよ、將又耕地開拓にせよ、日支兩國民の協働を可能ならしむる方策と經營とが存しないとは考へられない。又第三國の機會均等の主張に基き、又進んでは彼等の協力をも誘致し、資本や技術の輸入に於いて、又市場の統制連絡に於いて、なほ多くが爲され得ると考へられる。我々は安全保障や平和組織に於いて既に事實と先例とを有すると共に、この經濟的協力の點に於いても、一定の技術と經驗とが與へられてゐる。獨り極東の一國境的地域に於てのみ、反感と憎惡と敵對とを存續せしめねばならぬ、と云ふ理由を解し得ないのである。筆者は敢て我が同胞の深甚なる考慮を煩はさんと欲する。

金解禁の經濟界に與ふる影響に就て

井上準之助

金の輸出禁止の我經濟界に與へたる悪影響に就ては世上既に論議を盡し、又當業者の多年經驗し來つた所であるから玆に詳しく述ぶる必要はないが、爲替相場が低落し而も常に動搖して外國貿易の振興を妨げ、一般の産業の採算の基礎を動搖せしめ其の堅實なる發達を阻害し又内外市場に於ける國家の信用を毀損し對外債務の負擔を加重する等財政經濟上弊害の及ぶ所測り知る可らざるものがある。

先づ我國の對外爲替相場は大正九年以來外國貿易の逆調に伴ひ低落の趨勢に轉じ、大正十二年關東震災後其の傾向殊に著しく、十三年九月には遂に對米相場三十八弗半の低位まで落込んだことは世人周知の通りである。而も此の爲替相場は單に低落した許りでなく高低常なく其後の各年に於ける對米相場の最高最低の開きを見るに大正十四年は五弗、十五年は五弗四分ノ一、昭和二年は三弗八分ノ三、三年には三弗四分ノ一と云ふ狀況であつて、建値變更の度數も年と共に加はり昭和三年には九十一回の多きに上つた。此の如き爲替相場の動搖不安が各般の事業經營及通商引取に甚大なる不便不利を與ふると云ふことは寔に當然の歸結でなくてはならぬ。

一例として我國の輸出品工業の大宗たる蠶絲業の立場から之を觀やう。製絲家は晩春から初秋の候にかけ比較的短期間に繭を仕入れ長期に亙りて加工するのであるから、繭の仕入後爲替の激動に依り絲價下落するが如きことあらむか不測の損害を被る危險が極めて多い。固より生産品の一部を先賣約定する等の方法に依り此危險を避くる途があるけれども到底十分の目的を

達し難いのである。又此危險を考慮して買入繭價を不當に低くするが如きことあらむか其の損失は養蠶家が負擔することゝなるのであつて、要するに絲價の如きは左なきだに變動し易いのであるから、其上爲替相場の動搖に依て此變動を助長することは製絲業の堅實なる發達を期する所以でないのである。次に製絲業と匹敵すべき主要製造工業たる紡績關係事業の立場から之を觀やう。紡績は原料たる棉花が輸入品であり生産品の約半分が直接に又は更に加工されて輸出さるゝ關係上爲替相場動搖の影響を受くること頗る大なるものがある。即ち原料の仕入値段が爲替相場に左右さるゝこと多く原料棉花の仕入後に爲替相場が騰貴すれば夫だけ棉花は値下りを招き損失を受けねばならぬ。又製造品の販賣に付ても爲替の動搖によりて損得を來すことゝなる。要するに爲替の動搖は斯業を投機化する危險を多く包含するのであつて資力の優越せる紡績會社は別として二流三流以下の紡績會社の苦痛は非常に大なるものがある。其他の産業に在りても苟も對外的交渉を有するものは大なり小なり同樣の影響を免れぬのであつて、昨年來各種の經濟團體が相次で金の輸出解禁を斷行すべしとの決議を爲し之が促進の運動を起して居るのは關係業者が爲替動搖の弊に堪えず、多少の犧牲は之を忍ぶも解禁に依て爲替の安定を欲すると云ふ希望か期せずして衆人の一致したる意見となつたことゝ思ふ。

斯の如き幾多の不安を除去し行詰れる我財界を根柢より建直し堅實なる産業發展の基礎を作らむとするには金の輸出解禁を決定するより外に根本策の存し得ないことは明である。然るに今日に於ても尙世上徒に解禁の影響を過大視する者尠からざるは寔に意外とする所である。固より爲替相場の低位に在るに當り無準備の儘突如として解禁を行ふが如きことあらば其の影響恐るべきものあるであらう。然しながら適當なる準備を整へ諸般の事情が解禁に適するを俟つて解禁を行ふならば其の影響は自ら緩和せられ結果に於て何等憂ふるの要を認めないのである。歐洲戰爭後今日迄に幾十の國家が金解禁を實行して居る、而して其實行前に政府は財政を緊縮し國債を整理し其他諸般の準備を整へ爲替相場の漸騰を俟て實行したるが故に解禁に依り財界に大衝動を起したと云ふ樣な例がないのである。

併し日本は夙に仍大正六年に金の輸出禁止をなし、大正九年財界の反動後爲替相場は常に低落し、二三の例外を除き常に少くも二三弗位の低位に在り、事業の經營も商賣も大體之を基礎として行はれて居つたのであつて、即ち國內製品の一部に對し

四五分の關税保護を設けて居つたと同樣の作用をなして居つたことは事實である。今之を還元せむとするのであるから經濟界に對し一部的又は一時的には多少の打撃を與ふることは免れぬ。然し爲替相場騰貴の道程に於ける打撃に付ては自ら限度があり又之が對策如何に依つて之を避け又は其打撃を最少限度に局限することを得るのである。

政府は此の意味に於て金解禁の決行に當り先以て各般の準備に遺憾なきを期し金解禁の打撃を極力輕減するに力めて居るのである。而して其の準備として政府は財政の整理緊縮を行ひ、國民に在りては勤儉節約を行ひ、擧國緊張したる精神を以て難局に處し、之に依て物價の調整、貿易逆調の匡正、内外信用の昂上を圖り其他諸般の必要なる準備を進めて居る。此準備の結果として爲替相場が徐々に恢復を示すに於ては經濟界に及ぼす影響は大に緩和輕減せらるゝことを得るのである。爲替相場が相當期間に而も合理的に漸進するならば當業者は原料の仕入及製品の販賣に付き容易に採算の基礎を發見し得る。又爲替豫約先賣其他の轉嫁作用に依り値下りの危險を多數關係者間に分擔することが出來るのである。例へば製絲業に在りては此轉嫁作用が理想的に行はるゝときは絲價低落の危險は養蠶家、製絲家、問屋、輸出商、海外の需要者等の間に分擔せらるゝこととなるのである。現に濱口内閣の出現したる七月二日の生絲相場は百斤千三百三十圓であつて、對米爲替相場は四十四弗八分ノ一であつたから爲替相場は平價に對して大體一割の下落であるが、若し此の時に直に金の解禁をしたならば恐らくは相場は一割昂つて生絲の相場は一割以上下落して千百九十七圓以下に低落したであらう。然るに金解禁の準備として財政の緊縮國民の消費節約を實行しつゝある爲めに爲替相場は漸騰して八月七日には四十六弗二分ノ一となり、生絲相場は千二百八十圓となつて居る。若し相場の騰貴だけ生絲が下落するものなれば、この生絲相場は千二百五十八圓であるべき筈であるが、それを二十二圓高の値段で亞米利加側が買ひつゝある現状である。それは準備をなし相當の期間に爲替相場を上げつゝあるから、爲替相場の回復の損失を賣手の日本側と亞米利加側とにて負擔しつゝあるものと云ふことが出來る。又紡績業に就て見るも原棉及製品の値下の危險は棉花會社、紡績會社、綿絲商、爲替銀行海外の需要者等の間に分擔せられ、或特定の者の受くる損失は之を輕微ならしむることが出來るのである。之は解禁に當り必要なる準備が行はれ爲替が徐々に恢復する場合の特徴に外ならぬのである。

次に解禁の一般物價に及ぼす影響に就て觀察して見やう。輸出入に關係ある品物の相場に及ぼす解禁の影響に付ては以上述る通りであるが輸出入に關係なき一般商品の市價は直接爲替相場の恢復に比例して下落するものではない。只貨幣の對內價値と對外價値と一致すべきものであるとの論者から見れば爲替相場が一割上れば日本貨幣の購買價値が一割上るのであるから我國の物は一割下ることとなる理である。然し我國は世界の中心から隔り居り、又國民の生活狀態も主要物資も著しく他と異るものがあるから爲替相場の騰貴だけ物價が下落するものとは考へられぬ。然し爲替相場の恢復即貨幣の對外價値の增進する以上物價は多少共低落すべき傾向を有することは疑なき事實である。而して公私經濟の節約が行はるるならば其關係からも物價を引下ぐる效果があらう。七月の日本銀行物價指數は九厘六毛低下して居る。同期の爲替騰貴率五分四厘に比すれば程度が少いけれども斯の如く爲替相場の昂騰に伴ひ時期は後れ割合も減じて物價の下落して來るのは最堅實なる傾向として歡迎する所である。

元來物價の高きことは國民生活及產業全般の利益に反するのである。殊に今日の如く生活難の聲が高く社會問題の喧しい時に於ては出來得る限り物價の低下を圖り國民生活を容易ならしむることが極めて緊要となるのである。又產業の見地から云ふても、一般物價の低下に依て生產費を引下ぐると云ふことは事業繁榮の鍵であり、殊に輸出貿易の振興の根本でなくてはならぬ。政府が自ら鋭意財政の整理緊縮を行ひ又國民に對し消費の節約を求むるも、其目的の一半は物價を調整し以て國民生活の安定を圖ると共に產業貿易發展の基礎を確立せんとするものに外ならぬ。又物價の國際的平準を維持すると云ふことは金解禁の實行を圓滑ならしむるの要件である計りでなく、解禁後に於ても金本位維持の爲には必然の歸結であるから、金解禁實行の決意を有する國民としては物價低落の自然的趨勢を拒否する理に行かないのである。

最後に解禁の金融に及ぼす影響に付て考察して見たい。先づ金の流出の關係である。金流出の原因を觀るに其の一は國際收支の決濟に先つに在る。故に國際貸借の實勢を改善することに依て金の流出を緩和し得ることは論を俟たない。本年の外國貿易は今日迄の情勢よりすれば稍改善せられ輸入超過も減少すること略確實である。尙政府財政の緊縮と國民の消費節約の效果が現はれるに伴ひ貿易の狀況は更に一層改善すべく、從て此關

係より來る正貨の流出は國民の努力次第で喰止め得るのである。金流出の第二の原因は資金の移動關係である。此點に付ては解禁の準備時代に於て圓の騰貴を見越した思惑資金の流入多き場合は解禁後之が回收に伴ひ正貨の流出する危險が多いのであるが、今日の如く内地金利が海外金利よりも低位にある場合にはこの思惑所作の行はるる範圍が比較的少ない譯である。此點は大正十五年末より昭和二年にかけての爲替の恢復時代とは大に趣を異にするものがある。

次に解禁後内地資金の海外流出に就て考察するに、昨年以來紐育の金利は異例的に高い。然し之が永續すべきものとは思はれぬ。殊に歐洲より資金の復歸する爲次第に低下の傾向を有するものと思はれる。又本邦資金の海外に於ける投資先は左程無制限のものでない。本邦外債と云ふやうに制限された範圍内に行はるるのである。而して我政府の財政緊縮と國民の消費節約の效果が漸次海外に於ける本邦の信用の昂上、本邦外貨證券の市價騰貴利廻りの低下となつて現はれて來て居る。故に金利の關係から來る本邦資金の流出と云ふことも今日の所憂ふべき程のものでないことを信ずるのである。

世界的興味の壓搾點

露支紛爭の多角的檢討

東鐵を繞る露支の紛爭

長野朗

ハルピン露國總領事館搜索問題は遂に支那側の東支鐵道乘取りにまで進展して露支間の風雲を捲き起した。然し支那が赤化宣傳云々を持ち出して居るのは一つの口實に過ぎずして、東支鐵道の回收は計畫的な從來からのプログラムの連續に過ぎない。支那が今回のやうな手荒い擧動に出たのは、從來から少しづゝ當つて居たが、ロシヤ側では何時も忍從的態度に出で、一向反擊して來る模樣がなく、之れならば大丈夫と見た所で決行したものらしく、始めからロシヤが強く出やうとも戰爭にならうとも豫期して居なかつた。

又國民政府の方の關係はどうであるかと云ふに、蔣介石は其武力統一が思はしく行かず、黨内では左派が多數を占めて其基礎が鞏固でない所から、廣西派討伐後一度右傾して居たのが、再び左派と連絡せんとし、又ロシヤは孫文未亡人宋慶齡の歸國に託して聯露政策の復活を求め、ために國民政府部内でも一時ロシヤと結ぶべきか斷交を繼續すべきかに就き議論二派に分れて居たが、左派の首領汪兆銘は蔣介石の提携要求を一蹴した。之れはもとより當然のことで、蔣が政權を全然汪に渡さない以上、汪が承知する筈はなく、こゝに蔣介石の態度は決定して其右傾的態度は確定しロシヤに對して斷乎たる手段に出づるに至つた。從て今回支那側の行動は國民政府と東三省と話合ひの結果ではあるが、其實行に當つたのは東三省であつて、國民政府が凡てを指揮したとは思はれず、國民政府は東三省の行動に對して充分の保證を與へた程度のものらしい。王正廷は自己の命令でやつたやうに云つてゐるが、王が北平に到着して會議が開かれた朝、既に東支鐵道に對するクーデターは開始されて居たものであるし、東三省では既に六月十五日の最高會議で、外交問題は中央に移すこと、東支鐵道全部の回收を期すること、東鐵沿線に軍隊を増加して取締を嚴にし、ロシヤ領事館を取消すか又は支那の法律に服從せしむ。赤露人の支那旅行及び支

那人のロシヤ旅行を禁ず。東支鐵道の財政收支を監督し、全線の警備權、ロシヤ側職員の人事權及車輛配給權を回收す等の方針を決定し、之に基いて其實行の機會をハルビン・ロシヤ總領事館の捜索に求めたに過ぎない。そこで少しく從來に遡つて支那側東支鐵道回收運動の經緯を述べて見なければならぬ。

東支鐵道がロシヤの東方經略のため敷設されたことは勿論であつて表面は華俄道勝銀行、卽ち露亞銀行が引受けたことになつて居るが、該銀行の出資額は五百萬ルーブルに過ぎず、其後に於ける露國政府の支出は前後通計三億四千五百萬ルーブルに及んで居る。それに支那側の出資は五百萬兩に過ぎない。從て事實ロシヤ政府の經營にかゝり、ロシヤは其目的を達するため東支鐵道の敷設と共に之に伴ふ幾多の利權を獲得し、鐵道沿線に一つの經濟的勢力圏を造り上げた。ためにロシヤ革命のため極東に於ける其勢力が減退するやこゝに支那側の回收運動が起つた。本鐵道は一八九六年支那と露亞銀行間の條約で、「全線の工事完了し、運輸開始の日から三十六年の後には支那政府は之を回收する權利がある。」又「東支鐵道公司が之の鐵道を八十年間管理した後には支那は自由に回收の權利がある」とあり、一九〇一年秋の完成だから、一九三七年には支那に回收權があるが、それには全線の建築總價格約四億萬留を支拂はねばならぬ。そこで支那側では正當な方法によらず、ロシヤ側の隙を見て部分的に回收の方法を講じて來た。支那の遣口は敢て東支鐵道だけに限らないが、喧嘩にならず、世間の注目を惹かない程度に少しづゝ回收して次第に根本に喰ひ込んで行くのである。東支鐵道に對しても、支那は慣用手段により一九二〇年來逐次其歩を進めて來た。之れは二つに分けて說明することが出來る。一つは東支鐵道附屬權利の回收であり、一つは東支鐵道自體の回收である。

東支鐵道の回收としては一九二〇年三月東支鐵道從業員がホルワット長官排斥のストライキを起したのを機會に、疾風迅雷的に、ロシヤ兵の武裝を解除して沿線一帶の警備行政權を奪ひ、同じく一九二〇年九月、支那がロシヤの領事裁判權を回收するや、東鐵沿線でも同年十月にロシヤの裁判所、監獄所を完全に回收し、東省特別區審檢廳と改稱し、鐵道交涉局の露支立會審判廳も亦當然消滅した。

次で一九二四年八月には東支鐵道の附屬地は鐵道用地を除き强制的に之を回收したが、之れは外人にも關係があるので領事團から抗議が出てかなり紛糾した。一九二三年一月二十二日張作霖は東支鐵道督辦王景春に電命し、露國汽船の松花江航行を禁止したが、ロシヤ側は之を承知せず、未解決のまゝになつて居たが、一九二六年九月に至つて支那側は東支鐵道船舶をハルビン八區の倉庫、各事務所及埠頭と共に沒收した。次で一九二六年三月には、ハルビン市會支那側議員は突如臨時自治委員會を組織し、市會のクーデターを行ひ、支那官憲はハルビン市會を乘取つた。列國領事團は之に對して抗議し、問題は支那對列國領事團の間に移つたが、未解決のまゝ今日に至つて居る。其後に至つても教育權の回收、電話權の回收等逐次行はれた。

鐵道の方では一九一八年に帝制ロシヤが沒落し、列國のシベリヤ共同出兵から東鐵の共同管理となり、それが終つた頃から支那側の東鐵回收運動が起り、一九二〇年十月支那政府は東支鐵道の投資者である露亞銀行に迫つて同鐵道の暫定管理に關する協定を結び、こゝに今日の如き東鐵共同經營の端緒が開かれ、双方五人の理事を出して理事會を設けた。次で露奉、露支協定により之の共同經營は確認され、鐵道は純然たる商業的性質のものとなり、鐵道從業員は露支折半とし、又支那が無償で回收し得る期限は八十年から六十年に短縮された。然し當時鐵道の實權は東鐵管理局の手にあり、其職員も主腦部はロシヤ人であつて、支那人は閑職か又は下級從業員に過ぎず、其人數もロシヤ人の方が多かつた。然るに其後支那は依然として回收の歩を進め、露奉協定の骨子たる鐵道利益金の均分保管の問題を解決し、次で東支鐵道の大洋票建の實行等逐次其歩を進めたが、更に最近では理事會に於て支那側の勢力を增加すると共に、從業員の數も支那人が增加して半數以上に達し、之の勢で進めば早晩東支鐵道は支那の手に回收さるゝことは一般に豫期さるゝに至つた。所でロシヤと東支鐵道の關係に就て少しく述べて見なければならぬ。ロシヤがシベリヤを保持するためにはウラジオを有つて居ることが必要である。所がウラジオを保持するにはウラジオから歐露に至る最短距離である東支鐵道の東西線はどうしても之を保持しなければならぬ。そこで支那側の回收運動に對しては出來るだけ之を遲滯さする方法を取つては居たが、結局は歩一歩退却を餘儀なくされ、全般を危くする。所がロシヤの現狀や勞農政府の主義看板からしても積極的の行動は採れないので、一方で日支を滿洲で相爭はしめて東支鐵道に向つて來る支那の鋒先を緩め、最後の案としては日本がハルビン長春間の東支南線に垂涎して居るのを利用して之を日本に與へ、其代償として日本に東支鐵道東西線を確認させやうとする考へもあつたらしいが、現狀はそれも許されなくなり、ロシヤは何等具體案を採り得ずして支那の利權回收の潮に押し流されて遂に今日に至つた。

然し今回の如き支那のクーデター式な東支鐵道回收に對しては、從來の如き態度では結局泣寢入りの外なきことを充分に經驗して居るロシヤは、遂に思ひ切つた強硬手段に出るに至つた。それと一つはロシヤは從來日本の態度に氣兼ねして積極的態度に出で得なかつた。と云ふのは下手なことをすれば却て藪蛇となり、日本に好個の口實を與へ、シベリヤまでも危くする虞れがあつたからである。然るに最近支那の日本に對する露骨な利權回收運動は日本國民に反感を有たしめ、東支鐵道の回收は滿鐵回收の第一歩にして、寧ろ支那の手に置くより現狀を保持した方が宜いと云ふ空氣が濃厚になつたのと、何をするか分らない物騷な田中內閣が倒れて民政黨內閣が出來たことも、ロシヤをして思ひ切つて今回の擧に出でしめたので、もとより戰ふ氣はないが、多少讓歩はするにしても支那をして東支鐵道の經營を原狀に復せしむるには、兵力を以て國境を脅し、場合によつては國境の都市か又はハ

イラルまで佔領する意氣を示す必要があるし、又現在ロシヤの兵力ではそれ位のことは出來る。然るに支那はロシヤがかゝる强硬態度に出やうとは豫期しなかつたので、もとより戰ふ氣はなく、又實際戰へないのである。それは南京政府としては對馮玉祥其他の關係と財政難から兵を動かせず、又それは東三省側が承知しない。南京政府軍が奉天に入れば、其區域だけは南京政府の地盤となり、張學良の地盤が侵蝕さるゝからである。又東三省にしても張の地位は未だ安定せず、これに熱河を保持するため折角灤河の線に進めた奉軍を引揚げることは、張學良としては考へ物だし、東鐵回收を一歩讓歩するか地盤を捨るかは問題だらう。かうして吉林、黑龍江の雜兵で大體間に合はし、急に妥協氣分に入り、不戰條約や國際聯盟を撒き廻したり、赤化文書を發表したり米國にすがつたりして居るが、中にも日本の態度を重大視し東支鐵道の回收には非ずして赤系ロシヤ人の一部に對する彈壓だと云つて居るのは、東鐵回收となれば滿鐵に重大影響を及ぼし、日本が緊張するからである。然しこのまゝ折れる支那でなく、且つ回收の失敗は延いて蔣介石一派や張學良の地位に關するので、支那は何等かの局面打開策を講ぜんとし、ロシヤも策略を廻すので、之の問題は急速には解決せず、尚多少の波瀾と時日とを要するだらうし、何れにしても支那が東鐵の實權に對し更に數歩を進めることは疑ひないことであらう。從て今回の問題の解決は決して東支鐵道問題の解決を意味するものでなく、ロシヤの東鐵保持と支那の回收熱が續く限り之の問題は何時までも殘留し、屢ゝかうした事件が起るだらう從て東支鐵道の根本解決としては、滿洲一般の問題が合理的に解決さるゝ時機が來るまでは存續するのではあるまいか。(七月三十一日)

露支紛擾の意義

藤枝丈夫

最近の四週間に亘つて、北滿に渦卷いてゐる事件——支那官憲の武力による東支鐵道回收事件は、日本の多くの通——支那通、ロシア通、外交通——に對して、かなりに多くの發言の機會を與へた。しかし、それらの通がわれわれに示した意見の孰れを取り上げやうとも、事態の本質は少しも明瞭にされてはゐない。それらの通は事態の本質を語るときに故意に恐るべき無智を示さうとするか、或ひは「囈呻き」であらうと努力してゐるか、に見受けられる。即ち、ある點だけは眞實に觸れながら全體としては極めて見當違ひのものを、臆面もなくわれわれの前に提示してゐるからである。以下掲げたる題目に就いて論旨を展開させながら、それらの「譫言」にも觸れることとする。

露支紛擾の前途は如何?

この疑問が現下の日本に於いて、最も切實要緊なるものである、と言つても、さまで誇張ではないであらう。少なくともヘーグに於ける

賠償會議に比して、より低少なる注意に値するとは考へられない。況んや、戰禍嫌ひである筈のアメリカ人が、珍らしくも滑稽な偉大さを以て、「荘厳なる歴史的シーン」を不戰條約成立のために演じやうと、この切實要緊なる疑問の値ひを、些かたりとも低下させるものではない。このことは各新聞が最もよく證明した。

では、爾かくニユースヴアリユーに富むところの問題を、何人が造り出だしたのであるか？

勿論、支那である。直接的には國民黨政府と東北四省の官憲との協力作業である。そしてその背後には帝國主義諸國の貪婪なる巨手が錯綜してゐる。即ち、ソヴエート・ロシアが誕生して以來、十餘年に亘つて經驗し來つた大手、搦手の、公然、陰然の壓迫の一つである。

此の點に關して、在ハルピンの一消息通は一應受入れられ得べき論說を、七月二十三日の國民新聞紙上に掲げた。そこでは「東支鐵道回收の黒幕には米國があり、日本が構え得ないであらうところの事態を北滿に招來して、日露を開戰、若しくはその關係を惡化させ、將來の日米戰爭に備えんとするものであるから、日本は寧ろ露國と提携すべきである」といふ、一見最も穿ち得たるが如き意見が、種々なる具體的事實によつて論證されてゐる。

しかしながら我々は、此の意見が、「時によると世界大戰の危機をすら孕み、我が對滿政策の一大轉換を劃する此の事件に對し、我が朝野の注意」（原文のまゝ）を喚起した點に於いてのみ、正直であることを認める以外、最も肯綮に中りたるものとは考へない。むしろ事件の黒幕が單一に米國だけに限局して理會することは、眞相を曖昧にする結果となるが故に、かゝる論者とは自ら反對の立場に立たざるを得ないものである。

勿論、國民黨政府の最も有力なる支柱が、米帝國主義であることは、我々と雖も反駁はなし得ない。從つて、南京政權が此の事件に於ける立役者である以上、その支柱である米國が黒幕の蔭にかくれて、操り糸を握つたであらうことも、また充分に有り得ることである。殊に「南京政府の鐵道部長が、米國よりの借款によつて東支鐵道經營に當る用意を有する旨言明した」と報じた新聞電報の如きは、這間の裏付けたるべき材料ではある。

然しながら、かゝる新聞電報の存在如何に拘らず、この事變の最も重要なる作者が、單一に米帝國主義であると斷定するには、なほ甚だ不充分である。何んとなれば、ソヴエート・ロシアに對する南京政府のかゝる武斷的行動は、單に米國のみならず、世界資本主義國家の等しく希望し熱望するところであり、支那に對するロシアの壓力を排除することは、言ひ換えれば「赤化防止」をなすことは、國際帝國主義が國民黨政府より受取るべく樂期したところの最上の贈物であつたからである。しかも、國民黨政府は第一に國內的政治情勢より、第二に對外（對帝國主義）的關係より規制されて、東支武力回收の決行に猪突したものであつて、純粹にアメリカのみの意志で行動したものではない。從つて、事變の經過が我々に與ふる印象は南京政府それ自身の企圖が、先行的直接的原因を成したことの方に、より多くの強さを感ぜ

しめてゐる。以下、その理由を分析して、露支紛擾の基本的問題に立入らう。

一般に、露支關係といふ言葉それ自身は、極めて不確かな內容を持つものといはねばならない。何故なれば、一方、ソヴエート・ロシアが鞏固なる勞働者、農民の國であるときに、支那はその內部に全く融合し得ぬものを包含してゐるからである。卽ち——

一、現在南京に中央政府を持つところの豪紳・ブルジョアジイの聯合政權

二、之と鋭く對立して鬪ひつゝある歷史的階級——プロレタリアートの組織、及び支那赤衞軍との協力のもとに南支、西支の各地方に推持され擴大されてゐるソヴエート政權

勿論、表面的に「統一の大業」が成つた如く見えることは、そして南京政府が革命成功を布告し、帝國主義列强が之を交涉し得る鞏固な(?)政府として認めてゐることは、何等右の分類に變更を加へ得るものではない。事實、日本の新聞雜誌に現れる消息通の意見は、南京政府が決して鞏固なものでないことを屢々立證して居る。たゞ、その內在する矛盾の解決によつて、之が存續を永かれと希望してゐる點で、われ／＼と異つてゐるだけである。

現在、ソヴエート・ロシアが「他國の暴力に對し勞農國民の合法的權利を擁護するに必要なる充分なる手段を有するものである」ことを、强記せられよと求めてゐるのは、明かに南京政府に對してであつて、從つて、露支關係といふ場合、此の事件に於いては南京政府との關係に外ならない。

何故に、南京政府はかゝる事件を捲き起したか？

簡單に言へば、本年初頭の編遣會議にその端緒を見出し得るところの、國內に於ける反動諸勢力の結集、そして、三月の第三次全國代表大會に於いて、完くその全容を整へた國民ブルジョアジイのヘゲモニイの一應の確立、及びその後の封建軍閥との間の二三の小競合を經て、アンチ・ソヴエートの陣營は、それこそ南京政府が大呼するところの「統一」狀態を現出した。しかも、かゝる狀態を出現せしめたものは、單に現在南京政權を形成するところの諸勢力が、主觀的に求心的努力をなしつづけたからではなくて、それは國內に存する他の政治的勢力——勞働者・農民の力の異常な伸展が、それをさせた主要なる一つである。かくて、南京政府のかゝるものとしての統一は、必然に最も武斷的な、張作霖でさへもなし得なかつた程のアンチ・ソヴエートの實踐に、驀進せざるを得なかつたのである。そして、此のことが帝國主義列强の基本的な要望の線に添ひ得るものであり、その何等かの形に於ける支持をかち得られるものである、との確信は、一層南京の將官・大官を勇氣づけた。此の點に關しては、八月八日東京朝日の報ずるところによれば、ブラウダ紙は非常に直截にかう言つてゐる——

『東支鐵道の占領は疑ひもなく、關係列强の承認を豫想して實行されたものである。國民黨政府の鐵道顧問米國人マンテル氏が、東支鐵道占領が國民政府の直接命令により、七月十五日付孫科氏の聲明

によつて實行されたのを、知らずにゐたとは信じ得られない。また佛國政府の行動も決して偶然とはいへない。かつ又米國國務長官スチムソン氏の秘密通牒即ち東支鐵道に關する關係各國の權利確保のため、その各國中から管理局理事を任命せんとする提議は、前道勝銀行株主權にその他資本家團の各種團體にも言及してゐるのであつて、彼等は東支鐵道に對し、種々架空的要求を提出せずには居まい。列國は平和主義の假面の下に、反ソヴエート政策を實行し、極東の大火事の火付け役を始めたのである。」（！）

一方、滿洲官憲が七月十日北京に於ける巨頭會議に於いて、張作霖の爆死後、種々なる形で接近しつゝあつた南京政府と握手し、時局圓滿解決の手打式を擧げた時に。五月廿七日に試みたソヴエート領事館襲撃事件（この事件が、奉露協定に明記された赤化防止のためであつたと稱するのは、ブルジョア新聞も支那通も、口を揃へてゐる如く、單なる揑造に過ぎぬことは言ふまでもない。それはロンドンでなされたジノヴイエフの書翰事件よりも、もつと不手際なものであつた。何故なら、ジノヴイエフの書翰が僞造であつたことは、最近に至つて、ベルリンで當時のスパイが告白してゐるが、今度のことは事件直後に發表された證據書類なるものが、帝制ロシアの綴字法で僞造されてゐることを、日本の支那通でさへも直ちに證明したからである）の、善後處置について協議したことは勿論である。そして、七月十一日、電話局占領によつて事變の導火線に火は點じられた。

然るに事變の經過が示すところは、恐らく滿洲官憲の當初に豫期したであらうところとは、かなりに喰ひ違ひを生じて來た。即ち十三日ソヴエート・ロシアが强硬なる最後通牒を叩きつけてよりの、三日間の猶豫期間内に現れた現地官憲と南京政府との異れる聲明、混亂はこの事を立證するに充分である。例へば、奉天官憲の和平的態度、軟化に對して、孫科氏は飽く迄も「南京政府の執りたる行動（彼はこれを全支那の行動と稱した）が、自衛上止むを得ぬものであり、武力を以て臨まんとするロシアの非法（！）を、列國の公平なる（！）判斷の前に提出する」と言つて、國際帝國主義の共同管理を欲することを露骨にした。かゝる出來事は、全く滿洲官憲竝に之と最も利害の緊密なる日本の、意外にして、かつ困惑を感ずるものである。廿二日、アメリカが此の調停について或種の用意を有することを非公式に發表したときに、幣原外相が「調停については未だ發言の機ではない」と題して、新聞記者に發表した意見、そして同時に掲げられた同男爵の沈痛なる顏は、決して象徴的な意味だけを持つものではない。

而して南京の政治家が、敢てかゝる術策までも弄して、言ひ直せばこの事件を決行するに當つて、國內關係に對する南京政府の主觀的理解をなすものは何であるか？に就いて、多くの消息通、支那通は、次の如き論說を示してゐる。——

一、今回の擧によつて、ロシアがこのまゝ泣き寢入りすれば、滿鐵に對して最も有効なる威嚇を加へ得るし、同時に滿洲に於ける鐵道への外國資本の問題に關して、前途に光明をもたらし得、之が解決上

に前例をひらき得る。

二、萬一、ロシアの反撥が豫想外に強大で、この企てが失敗したとしても、滿洲軍閥の勢力を滿洲から一掃することが出來る。

一見、イズヴェスチヤ紙の言ふところと同樣であるかの如くであるが、前項、後項を通じて、明らかに違つたものを巧みに捏ね合せてあることが看取出來る。卽ち、前項について言へば「外國資本の前途に光明をもたらし得、解決の前例をひらき得る」のは、言葉の表面が示すやうな支那の一般的利權回收とは異つた意味を藏するものであつて、既に我々が見たやうに今回の事が、國際資本主義の調停、干涉を豫期してなされたものである以上、「之が解決」とは、共同管理を意味するものでなければならぬ。從つて、それから日本が滿鐵に感ずる脅威は、それがソヴエート・ロシアのものである時に比して、より少でなければならぬ。後項については、現在の滿洲軍閥の階級性を理解せぬものとして、一蹴し得る。殊に「滿洲から一掃」し得ると考へる程、南京の政治家と雖も狂氣じみては居ないであらう。たゞ、必要なだけにその勢力を弱めることは、希望してゐたに違ひない。

我々にとつて必要なのは、かゝる消息通の分析ではない。殊に如上の言葉が如何なる場合、如何に使はれたかを見るとき、そこには我々への些少な貢獻も見出されず、たゞ、「ロシアの赤化憎むべし、支那の行動は過激なれども止むを得ざるところ」といふ印象のみが筆太に浮み上つて來るのを見出すだけである。

支那は、否その一方の勢力は、一九二四年の態度を捨て、再び二六年九月の張作霖の態度を學び始めた。嘗つて廣東に在つたときレーニンの死に會して、最も眞率な態度で喪に服し「世界プロレタリアートの父、支那革命の親友を失つたことを衷心から哀悼」した國民黨政府は、民族革命の先頭に掲げた旗印、反帝國主義をかなぐり捨て、世界プロレタリアートの根據地を攻擊するために、狗の如く働きはじめた。從つて、事態は前に引用したブルジョア消息通が警告してゐる如く、「世界戰爭の危機をさへ孕む」に至つてゐる。かゝる平和の攪亂者とその背後の國際資本主義の一聯に對して、猛烈なる抗議の鬪爭は既に世界的に捲き起されてゐる。

アメリカ、フランス、ハンガリイ、……そして特に支那に於いて！

國民黨政府がその強盜的行動（ブルジョア新聞も亦、かく命名してゐる）を直ちに中止しないかぎり、是等の抗議はやがて彼等を南京の王座から追ひ出すまでに擴大されて行くであらう。そして歷史はこれらの「戰爭製造人」の一味を、無慈悲に押し挫きつゝ、光明と自由と眞の平和を新しき頁に記錄するであらう。

露支紛爭の印象

杉森孝次郎

「支那といへば屈從によつて生き殘ぐものの例として何人も常に用意してゐるものだ」(China is the stock example of survival by submission)。これは一九二〇年の支那を現地觀察したアメリカのヂュキーが『サ・ニュー・リパブリック』誌上に發表した「支那」のなかの一句だ。某氏が「支那は一つの國民であるか」といふ題で編輯者にあてた書翰内にそれは先づあり、ヂュキーの引用としてまたある。氏の最近刊行の單行本『ソーヰエ・ト・ロシヤの印象』を主要題名とするもののなかにすべてはある。その句はヂュキーによつても一應は裏書きされてゐる。

今回の支那はどうか。すくなくとも一應は右の一句を反證する。對露クーのクーそのものの段階だけが注意される限りすくなくともだ。しかし、それもどうやら、いな確實に、きかなかつたおどしの實驗が早くもすでに成り立つた。して見ると、冒頭の一句は今回の經驗をも「生き殘ぐ」力を持つ。

同じヂュキーは同じ發表のなかで(頁二六八)、從前は列強は爭つて皆な支那を割き取るやうな行動に從事したものだが、大戰以來その形勢は一變した。他列強はそれにかけては到底日本の敵でなくなつたからだ。今日では、支那の崩壞はほとんど專ら日本だけを益するだらう。支那を取りうるものは日本のほかにないだらうといふことは多くの疑ひを容れない。さればこそ戰後急に、日本以外の列強は支那の保全、獨立に非常に肩を持つ親切者となつた、といふ風のことをも言つてゐる。この意見には私として多少の批評と異議を持つが、とにかく支那を取りうるものは日本のほかになく、他列強は協力してそれを妨げることが事實だとするならば、結局、支那の生命は今後なほ長いにきまつてゐる。それや、これやで、支那は今日、世界の支那だ。強大國にして支那に直接、即ち利己的または自衞的に關心しないものはない。ところが、世界はまだ多元だから、かりに支那自身はどんなに意氣地なしだとしてさへも、支那は「生き殘ぐ」にきまつてゐる。

しかし、それはそれとして、今度の支那の籔道は實に支那式だつた。ラスセルは曾つて、かれの一著『支那の問題』(一九二二年)のなかで、あまりにも支那を禮讃して自分ながらすこしきまりがわるくなり、すこしはわる口いな憎まれ口をせねばすまなくなり、「私が支那を立つちき前に、一人の高名なる支那文人が、私が支那人の主もな缺點だと思惟するものを何でも言へと言つてきかなかつた。多少氣がすすまなかつたが、私は三個を舉示した。それは慾ばり(avarice)怯懦(cowardice)それから鈍感(callousness)だ」(頁二〇九)と書いてゐる。今回の對露クーのすぐ次ぎの幕は、この性格概要をおのづから權威づける。ラスセルの相手の文人もその批評には同意したと前者の筆にある。

今回の支那のクーの動機、氣ごころいな下ごころが何であつたかについては世にすでに定評がある。今日のロシヤは列強間に最も蛇蝎視されてゐる。大義名分を赤化退治に求めるならば列強の後援疑ひなし。また從來の近き經驗はロシヤの反撥力の強大ならざることを重ね〳〵示した。その內實を見透かし、且つ、ロシヤの對支率先的無差別待遇の勇邁なる甘い手に感激はかりしてすまさず、そこに商賈氣をおこした。ロシヤの平和主義に乘ぜざるべからざる弱點を見た。また支那は、

およそ華府會議當時以來、いなヹルサイユ會議、國際聯盟以來、即ち要するに戰後、國際的驕兒でも、寵兒でも決してないが、さればとて從前のやうな一定した不遇兒、被虐待兒、ままつ子ではなくなつた。その原因がチュキーがにらんだ通りのもの、即ち日本に對する他列强の睥視にあるか、他にあるか、諸方に多少あるとしておのおのどれほどかはしばらく不問に附する。ただ、イギリス、日本、ロシヤ等々と、今回のクー以前に於いてすでに、支那の正當、不正當のわがままが國際的に、いはばとんとん拍子に成功して來たことは事實だ。日本としては最近に、きかなかつたおどしの近例を支那自身に對してかなりあざやかに呈供したなまなましい歷史がある。イギリスも、ロシヤも、戰前のやうな、不可抗的に、運命的に恐るべき實力あるものでは支那の目から見て着々として實驗を證左としてなくなつた。支那人の性格―勿論例外を持つとしては、どうしても、ただでは措けない情勢だ。すつ込んだ龜の首が、甘い監督と見た試驗場のカンニングの際に、で延びてくる圖だ。勿論、根柢に、もつとまじめな社會力が發達してゐることは事實だ。それは支那の民族的、國民的自覺とも呼びうべきものだ。東支鐵道の回收も、支那の民族的、國民的自覺の前には一つの必然的、必要的プログラム以下のものではない。しかし、いづれにしても、「屈從による生き延び」は、一八四〇年の阿片戰爭から大戰直前までの支那にこそ「ストック例」として關係づけられるが、その後の支那には決して單純に然らず。

深い、永い目で見れば、今日の支那の興味、それがわれらに與へうる興味は、民族主義、國民主義、即ち要するにナショナリズムの光りに照らされた支那の將來と、機械產業主義の光りに照らされたそれとに集注する。現在の支那は、そのいづれに於いても未發達者だ。しかし、その何れもが今日の支那に最も重要なるものとして發達しつつある。東支鐵道の回收行動が直ちに一つのナショナリズムの發現だ。その鐵道そのものがすでに產業革命の一先驅、一段階、一要部だ。

ナショナリズムといへば、ロシヤの反應、支那のクーに對するそれにも、ロシヤ自身のナショナリズムの多少が見られる。そのナショナリズムに、東支鐵道といふ利潤の結合もそこに多少見られることは勿論だ。支那のクーによつて、それを刺激とし、シチュエーションとし、環境としてロシヤの本質が一層判明したと同時に、ロシヤの反撥を刺激として、支那の本質が再び新たに判明した。

チュキーは、大戰後、世界は、日本以外の列强が代表する世界は、日本故に支那の保全、獨立を希求してやまずと見たことは前記の通りだ。その續きとして、かれは「支那の歷史的對外政策は一强國と他强國とが支那自身の利益を目的として相反むかしめるにあつた。今日その支那は日本の侵略に反抗してすくなくとも受け身的助力を支那に與へんとするすべての强大國の一傾向によつて援けられつつある」と言つてゐる。この考察の價値はしばらくこれをあづかる。ただ、今回の事件に當面しても、日本の態度が事實上、干涉、東支鐵道に對する列國または國際共管に反對であつたことは、チュキーの考察と對比して如何なる性質を示すか。一つの興味ある試問であらねばならん。

他の事情が或しかたにあらたまらない限り、日本の態度は、日本のためにはすくなくとも、列强または國際共管には斷然反對することを至當または必要とする。私自身は、この點に於いて、同樣の場合が過去に生じたたびに、同樣の見地を明確に採つたものであることをいまおのづから想ひ起こす。即ち、同樣の事態が大戰後の支那には必ずしもまれならず發生したことは讀者諸君の知らるる通りだ。他の事情——心理を殊に含めて——が改まらないうちに、例へば東支鐵道の列强または國際管理を導き入ることは、支那からいへば支那自身の民族的、集團的、社會的、したがつてまた個人的自由を棄權することだ。支那が明白にその自由を失ふことは、日本がそれの身邊に自由を失ふことだ。日本自身の自由喪失がその論理だ。勿論、支那も、ロシヤも、そして日本も、この論理には、それぞれ自己價値の本能と意識に導かれて開眼を啓示した。

ナショナリズムの確立と產業革命の遂行とが現在の支那の主要プログラムだ。そのナショナリズムを確立するために、强い、責任ある政府の存在が先づ非常に有用であることは勿論だが、生活の物質的及び精神的不自由を外部から强制されるたびに、そのにがき經驗に刺激されて支那にもナショナリズムが發達し、そして國家が發達し行く將來が、すでに多少始まつたことが注意される。また、產業に於いても、支那が產業革命を遂行するためには、先づ責任ある、强い政府の存在が必要だが、不斷蓄積的になされる支那の產業革命的事實は、支那をしてつひにその必要とする强い、責任ある政府を持つに至らしめる必然がある。ヂ、キーにもその考察があるが、この最後の過程がその直前の過程よりも有力にして意義多きものだ。

支那が自身のナショナリズムを持つ必然または必要の將來と、自身の產業革命を遂行する必然または必要の將來は、曲折、波瀾に極めて富んだものであるほかなからう。今回の東支鐵中心の事件の如きものは、その小なる一前兆と見られる。

ロシヤと支那、もしくは支那とロシヤ、現在に於けるこの兩者の離合、合離は、最も興味ある時代的現象であらねばならん。兩者ともに、そして支那の方が遙かに餘計に、大いなる謎の社會だ。兩者は共に大陸に於ける大陸國であり、したがつて資源に富み、人口に於いて大なること、出產率高き社會であることも注意されるが、產業革命の發達段階に於いて、ロシヤはアメリカに比して遙かに低いが、支那はさらに遙かに原始的だ。社會技術、經營、廣義政治をいかなるものとして持つことによつてその產革を遂行するかが最も注意される問題だ。

支那の產革と敎育を組織するものは、そのもののみが支那を所有するに至る。その組織者が支那人自身である時に支那は支那人の所有となる。それがロシヤならば支那はロシヤのものに、それがアメリカならば支那はアメリカのものに、それが日本ならば支那は日本のものになる。ロシヤは瞬間、その組織者たる、たらんとする勢ひを造つた。しかしその瞬間は去つた。

もしそれ共產主義殊に第三國際のイデオロギーが、宣傳が、比較的に原始產業的な社會、したがつて支那の如きに機會を見いだしうるこ

とは十分に考へられる。堪えがたき解放の必要あるところ、それは資本主義の手から、帝國主義の手からのものであることを現代の通則とするが、そこにその機會は造られる。支那の場合に於いて、その資本主義は外在帝國主義の主要素として、または屬性として存するものだけだ。かくして、近き過去に於いて、ロシヤと支那の形影響應的位置が急進的に發達した。しかし、それは瞬間の事象だつたと、今回の事件に及んでいよいよ明瞭化した。今後、支那とロシヤとは、且つ離れ且つ合し、合してはまた離れる經驗を繰り返すだらうが、それはナショナリズムと產業主義が意味する、附帶する利益と名譽、自由の打算によつて常になされるであらう點に於いては原則的、主義的だ。

曾つてアメリカのエルウッドは、世界は今世紀の終りがたまでには、アメリカとロシヤに二分されるだらう、支那が覺醒するならば三分されるだらう。といつた風の言をなした。そのアメリカは、今回、不戰條約の主役として或程度に進出した。國力がそれの背景だ。人類の名に於いて、また民族の名に於いても、エルウッドの豫想の如きものは、最善意思の支持を受けべきものではない。しかし、それは實力を條件として始めて有意義だ。實力の創造はどの途必要だ。露支間の現在の關係も、外部からのそれに對する態度も、實力を十分なる事情とはしないが、全部の事情とはしないが、必要なる、最も必要なる、むしろ必然的な一つの事情とする。支那のクーでも實力があればフィアスコには終はらなかつたのだ。ロシヤにも、アメリカにも、日本にも、それぞれの位置と關係に於いて實力が規定してゐる。しかし、義憤そのものがまた實力の系統に屬する一つのものであることは論理的に明白だ。益と名譽と理性との一複雜劇は今回の露支間事件にも巨細の線をなして露見される。

東支鐵路問題とロシアの態度

嘉治隆一

一

支那側の北滿政策が硬化すべき徵候は既にハルビンのロシア領事館搜索事件の頃から見えてゐたが、具體的に東支鐵路回收の方針が決定せられたのは七月九日北平に開かれた蔣、閻、張の三巨頭會議に於てであつたと察せられる。事件の經過は未だ世人の記憶に新なる所であるから、詳述の必要はないが、極簡單に事態を回顧して見るならば、紛爭は北平會議の翌朝から起つてゐるのである。卽ち、七月十日朝、支那側は突然東支鐵路沿線にクーデターを行ひ、先づ沿線の電信電話を占領すると共に、ロシアの赤色職業同盟、鐵道倶樂部、通商貿易機關等を閉鎖せしめ、次で、鐵路管理局を襲つて局長を罷免し、技師を放逐し、翌十一日朝までの間に同鐵路に關する一切の權益を奪取した。同日、支那側の東支督辦、呂榮寰はこの非常手段の理由を列擧して、

第一にロシアは一九二四年の露支協約を實行しない。第二に管理局長と從業員との露支折半の約束を守らない。第三にこの鐵道を中心にロシアは北滿に共產主義の宣傳を行つてゐると述べ、かるが故に支那は斷然たる處置に出たが、然し、之によつて兩國の平和は破壞せぬつもりである。但し、ロシア側に於て反對的行動に出ることがあれば、支那は最後の手段に訴ふことも辭しないと附言した。

之に對してロシア側では最初は寧ろ平和的方法によつて解決を得やうとしてゐたものゝ如くであつたが、十三日に至つて、「勞農ロシアは他國より暴力行爲を受けた場合、自國民の合法的權利を擁護するに必要なる充分の手段を有する」といふ甚だ强硬な抗議を申入れた。支那は多少狼狽したが、それでも、今度の事件の責任は寧ろロシアにある。何となれば、ロシアは一九二四年の東支鐵路に關する協定を少しも實行せず、又、北滿に向つて赤化運動の手を緩めないからだ、といつて妥協の色は見せ乍らも逆捻ぢを喰はした。玆に於てロシアは翌十七日、對支國交斷絶を宣言し、支那も亦二十日に至つて同じ事を聲明して、兩國の關係は最も險惡なる狀態に陷つた。

この間、列國政府は必ずしも拱手傍觀してゐたわけではない。十九日には米合衆國が日、英、佛の同意を得て調停に立ち、二十日には佛、英、共に調停を申入れたのみならず、二十一日には支那の國民政府自ら國際聯盟に居中調停を要求するに至つた。概して支那は今日ではロシアと和平商議の成立を希望してゐるのに反して、ロシアは無條件に交渉を始めることを欲しない狀態にあつた。然るに二十五日に至つて、米合衆國々務卿スチムソンは日、英、佛、獨、伊の諸國大使と協議して、東支鐵路の露支兩國共同管理を提案するに至つた。之に對して支那側は共同管理には異論なき事を表明し、ロシア側はそのことは兎に角として直接、兩國間に會議を開く事は贊成であると答へた。玆に於て七月三十日以後、今日まで滿洲里に於て、兩國代表の會見が繰返されて居り、大體に於て、ロシアの態度が依然强硬であつて、交渉は必ずしも容易に結末に達する見込のないことも世間周知の事實である。

この度、支那政府が武斷的非常手段に出たことは、かつて、一九二七年四月の始、張作霖が北京に於て、サウエート大使館を强襲して館員と李大釗その他の支那共產黨員とを逮捕し、所謂、祕密赤色文書を押收した際に、ロシア側の態度が案外、穩和であつたといふ經驗によつて、かなりロシアを見縊つてゐたと見られぬこともないが、その動機如何は玆では問題としない。たゞ、支那と交渉を始めつゝあるロシアが、根本方針として、東支鐵路共同管理に眞向から反對し、この問題に第三國の干渉を拒絶し、進んで原狀回復をなした上で新なる協定を遂げやうとしてゐるその態度を考察して見やうと思ふ。

二

問題の露支協定は一九二四年に成立したものであるが、東支鐵路を挾む露支兩國の關係の考察に當つては、更に溯つて一九一九年七月にカラハンの行つた對支宣言を回顧する必要がある。そこには「東支鐵道及び之に附帶する鑛山、森林等の資源開發を支那の手に回復する」こと

が約束せられてゐる。

之こそ、他國領土の不可侵を主張して立つサヴエート聯邦の國是をその儘、對支政策の上に表したものであつて、在來の國際關係を一先づ無視し、改めて、專ら合理的なる關係を成立せしめんと自負してゐた同聯邦の得意察するに難くない。然し乍ら、この宣言には實行に對する約束が明言せられてはゐなかつた。そこで、五年後の一九二四年五月に至つて、カラハンと顧維鈞との間に露支協約が成立したのである。ロシアは鐵道沿線の行政、警察、軍事の一切を擧げて支那側に返還し、其他、各般の特權をも放棄することを決定した。そしてこの協定はやがて東支鐵路の共同經營にまで進むことを約束するものであつた。この點に支那が乘じて來たのである。この協定を親しく直接に商議したものはロシア側にあつてはカラハン、支那側に於ては王正廷であつたが、(調印した當事者は顧維鈞)、更にその後、五年を經た今日、同じ兩人によつて、同じ問題が一見逆樣とも思はれる立場から取扱はれてゐる事實を我々は何と見る可きであらうか。十年前に支那資源を一切支那に返すのはサヴエート聯邦の國是として世界人類の前に誇り得る所であつた。それが、五年前には共同經營に至る可き約束として多少の緩和を見ると共に、又、それだけ現實性を加へられて來たのである。所が十年後の今日、サヴエート聯邦は自國民の合法的權利を擁護するために必要なる一切の手段を辭しなくなつたといふ事實は之を如何に說明すべきであらうか。

惟うに、ロシアは無産階級國家であるから、之を護るために必要と認められる一切の政策は恆に肯定せらる可きものであるといふ素朴る辯護論も成立たぬこともない。然し、それは獨斷であつて說明ではない。說明であるがためには今少し立入つた分析がなければ、他を納得させるわけには行かない。我々はこの十年間に於いて三度激變したロシアの對支政策を回顧する場合に、何よりも先づ兩國の客觀的狀態の推移に注目しなければならない。

一九一九年はロシアの極東迂回政策の直前に當つてゐる。卽ち、所謂、支那赤化の使命を帶びてユーリンが、極東共和國代表として北京に入つた事は一九二〇年度のことであるから、その前年に於てロシア政府が根本的な對支宣言を發表して、永年、世界資本主義諸國の半植民地として搾取に惱まされ來つた支那大陸を自家薬籠中のものたらしめやうとしたのも當然のことであつた。

その後、露支兩國の關係は漸次、密接を加へて行き、一九二四年始には孫文によつて國民黨の組織改造が行はれ、國民黨の共産黨包容、聯露政策が實行せられた。かゝる狀勢の下に於てロシアが東支鐵道問題について支那側の喜ぶやうな協約を結んだのは充分理解出來る所である。所が、一九二五年春に入つて孫文は北京に於て段祺瑞との妥協交渉中に死んだため、形勢は多少變化し始めた。尤も、翌一九二六年夏になつて廣東政府は北伐を始め、着々成果を收めた結果、暫くは國民黨内の矛盾も暴露されずに濟んだことはあつたが、それも翌年に入つて武漢、南京政府の對立、蔣介石一派の覇權が確立するに從つて國民政府の形勢は漸く逆轉して、結局、その本質を包み切れなくなつて了

つた。同じく一九二七年暮には廣東に共產黨のクーデターが行はれて嶺南の地、頓に活氣を呈したが、間もなく彈壓せられ、之が國民政府の對露斷交の原因をなしたのである。南京政府は管下の上海、漢口、廣東駐在のサウエート領事館に對して引揚を要求した、國交斷絶をすら宣言した。茲に於て露支の關係は一變した。勿論、その前にも張作霖側に於てロシアと紛爭を構へたことは珍しくなかつた。例へば一九二六年始に東支鐵路長官イワノフ等の逮捕あり、一九二七年春には前記の如く北京のサウエート大使館搜索あり、時々騷動を起してゐたが、國民政府自身の名に於て對露斷交を宣言したのは、實に此の一九二七年暮の事件を以て最初とする。その後、北伐軍も成功し、國民政府の基礎も堅まり、列國の好意も意外に集つたゝめに、蔣介石の軍閥政治家としての地歩は愈々動かし難いものとなつた。然し乍ら、この過程は列國には好都合であつたとしても、唯一つ、サウエート聯邦にとつてだけは好ましからぬ所であつた。國民政府は合衆國のケメラー一行に重要問題の諮問を行ひ、進んで航空事業を同國に委任した。一方、イギリスからは海軍擴張に必要なる手段の提供を受けた。さうしておいて遂に東支鐵路占領によつてロシアとの確執を惹起した。(同時に日本に對しては日貨排斥の手を控えてその反感を緩和した事も人の知る所である。)

三

かくの如く、支那自身の對露態度が變遷して行つた以上、之に對してロシアの對支政策が、一九一九年、一九二四年、一九二九年と漸次變化を遂げて行つた事も或は當然といへばいへない事もない。然し、相手の出やうがどうであらうとも、勞農聯邦として支那の借欵鐵道に對して掲げ來つた年來の主張に照し合せて見るならば、如何にしても之は矛盾であると見なければならない。勿論、今、ロシアが直ちに東支鐵路を支那側に引渡したとしても、それを引繼ぐものは、必ずや東北の政務委員張學良か、乃至は、反動的になつてゐる國民政府であるのであるから、結局、鐵道放棄が反動軍の財政を豐にする結果となるといふ理窟は一應尤もなやうにも見られる。とはいへ、之によつてロシアが從來、返還を約束して來た權益を武力を以ても擁護しやうとする矛盾はやはり解決せられずにゐるのである。我々も亦、今、ロシアが東支鐵路を支那に無條件に引渡したからといつて、現狀以上乃至現狀維持の狀態がその經營の方面に齎されやうとは信じないが、それにしても、ロシアとしては、確かに矛盾を感じてゐるに相違ない。

此處で想起せられるのは、革命直後のロシアが舊ロマノフ朝時代にロシア領土内に隷屬せしめられてゐた諸民族に對して採つた斷然たる解放的態度のことである。一九一七年十一月の革命によつて、ロシアから解放せられた國は數多あつたが、その中にはポーランド、フィンランド、バルティック諸國等の如く、反動的國家主義者の統治に歸つたものもあれば、小ロシア、白ロシアの如く、直ちに大ロシアに倣つてサウエート制を布いた國もあれば、直ちにさうはならずに、裏カウカシヤ諸國の如く、一先づ社會民主々義の政治を布いた國もある。若し

あの時にロシアが、解放してやつてもやはり反動政治に返るのであるから、其他の大衆の生活は依然として苦しいものであるに相違ない。隨つてかゝる懸念のありさうな國々は暫く獨立を見合せやうといつたならばどうであつたらう。ロシア革命は恐らく世界の弱小民族の支持を得てゐなかつたに相違ない。かの一九一九年のカラハンの對支宣言は要するにこの趣旨を新にしたものであつた。それ故に支那の大衆の心を牽きつけることが出來たのである。

當時の政策をロシアが續けるとするならば、今度の事件はもつと支那に有利に展開してゐたに相違ない。然し、世界の形勢は今日のロシアをして之をなすを得ないまでに安定を來してゐるのである。換言すれば、革命的氣運の暫くながらも著しく減退した今日、ロシアとしては政策の矛盾に惱みつゝ、自己防衛に全力を盡さなければならぬ狀態になつてゐるのである。こゝから、ロシアの反政府派の運動も生れて來れば、所謂トロッキーズムの理論も成立つのである。かくても尙、サウエート聯邦を守りつゝある必要があるかどうか、それを最もよく知つてゐるものは世界の無產階級である。

東支鐵路を中心とする露支の善後交涉は今日のところ、少しく停頓の形勢にある。さり乍ら、それがために兩國が本當に戰端を開くが如き事は萬なからうと信ぜられる。何となれば兩國の共に虞れる所は之によつて第三國に進出の口實を與へることになるからである。恐らく問題は兩國の間に於て案外、簡單に片づけられることになるであらう。それによつてロシアが對支政策上の矛盾を如何に克服せんとするか。誠に興味深い問題でなければならない。（八・八）

社會主義國の權益防衛の爲めに

鈴　木　茂　三　郎

一

社會主義國ソヴイエット・ロシアの强大なる生長と、ゆるぎ無き斷乎たる存在は、國際的ブルジアジーの脅威である。それは現在國際的ブルジアジーの安定を、不安定に導く强力な動因である。「國際ブルジヨアジーは、ソヴイエット・ロシアに對する猛烈な憎惡と敵意に滿ち、ソヴイエット・ロシアを絞殺するためには、何時でもこれを襲擊しやうとして待ち構へてゐる。」（一九二一年のコミンテルン大會のテーゼより）のである。

國際ブルジョアジーの、ソヴイエット・ロシアに對する憎惡と敵意、ソヴイエット・ロシアの國際ブルジョアジーに對する鬪志と敵對の諸關係は、「勢力均衡に基く世界政治の特殊な結合狀態」を續けてきたにしても、現在寸毫の容赦なきほど切迫してゐる。

國際ブルジョアジーは、かつて、ヨーロッパ・ロシアよりデニキン、ラウンゲル、アジア・ロシアよりセメヨノフ、××軍、コルチヤック、

ウンゲルンの反革命軍を攻め上らせたのである。

コルチャック軍は、ウラルを越えヴオルガ河に沿ふてサマラ、カザン一帶に進出した。日本軍がその前衞であつた。此の將軍は、オムスクに政廳を置いて、その一帶の勞働者、坑夫を虐殺して根絶したが、何處からともなく襲ひ來つたパルチザンのために敗慘した。此のときニコライ・レーニンは、コルチャック征服について、全露の勞働者と農民に訴えて言つたのである。

「ウラル解放並に赤軍のシベリア進出についての我々一般の歡喜と喜悅の餘り、我々は安心して了つてはならぬ。敵はなほ全滅されてゐない。……敵をして再びその掠奪的行動を開始し得ざらしめるために、尙一層の奮鬪が必要である」と。するとまもなく、一九二二年七月叛將ウンゲルンが、外蒙古の庫倫に支那兵を主力とする反革命軍を集結して、チタに攻め上らんとしたので、赤軍は賣買城の郊外に迎擊して、ウンゲルン將軍をからめ捕り、さらに庫倫を突いて、ゴビの砂漠に、張作霖の遠征軍を擊破したのである。

私は、かゝる血生臭ひ戰跡を、賣買城より庫倫へ、さらにゴビの砂漠を經て張家口へと、雪月花の旅をしたことがあるが、支那資本主義が、ソヴイエット・ロシアに武力を以て對抗し、國際ブルジョアジーに奉仕したのは、實に之れが最初だつたのである。

そして支那資本主義の國際ブルヂョアジーに對する第二の奉仕は、レーニンの言つた掠奪的行動として、東支鐵道問題の上に卒直に表示されてゐる。支那側は、ロシア共產黨の活動に對する彈壓であると、繰り返へし、國際ブルジョアジーに訴えてゐるではないか。

二

「明日にでもたとへばモロッコがフランスに對して、インドがイギリスに對して、ペルシヤと支那がロシアに對して戰爭を始めるとしたら、その戰爭は正當な防衞戰爭なのである。何人が戰爭を開始したかといふことには係りない。そして何人を問はず××××は、大抑壓者及び搾取者に對する被抑壓的隷屬的國家の勝利に同感を有するに相違ない」(歐州大戰に對するロシア社會民主勞働者黨の宣言の一節、レーニン著作集より)

現在、東支鐵道の武力回收を企てゝ、支那がロシアに對して戰爭を始めんとする、現實的な情勢と、此の宣言との對照は、全く奇蹟的な對照である。だが此の宣言の書かれた一九一四年九月以後に於ける、兩國の質的な一大變革に想到すれば、もとより奇蹟であらう筈が無い。

宣言に言ふところのロシアとは、ツァーリズムのロシアであり、支那とは被抑壓的國家としての支那である。

そして、現在のロシアは、社會民主勞働者黨卽ち××黨の支配する勞働者、農民の社會主義國家であり、支那は、軍閥的勞働者、農民を虐殺して資本主義革命を成就せる後進資本主義國支那なのである。

しかし、資本主義國支那の掠奪的行動は、帝國が國際ブルジョアジーに對する善意にも拘らずそれは結局失敗するであらう。

何故なら、掠奪の直接的行動は、アメリカにとつてはメキシコ其他、

イギリスにとつては印度その他、日本にとつては滿蒙の權益——特に滿鐵——に對する脅威と戒心を與へるからである。次ぎには社會主義國ロシアに對して、支那の背後に、援軍の武力を集中し得るほど、國際ブルジョアジーは統一されてゐない、言ひ換えると支那資本主義の生長を車軸として、先進帝國主義諸國間の利害が、尖鋭に對立してゐるからである。

此の二つの事實は、表裏する交互關係にある。

アメリカによつて、强奪物——東支鐵道の返還が提議されたり、日本によつて露支直接交渉が慫慂されたり、フランスによつて國際聯盟の效能が說述されたりなど、先進帝國主義諸國の姦しき饒舌は、かうした二つの事實の反映に外ならぬのである。

しかも赤ソヴイエット・ロシアは、現在ロシアの勞働者、農民の有する權益を擁護し、社會主義國ロシヤを防衛すべく、斷々乎として、資本主義國支那の掠奪と、國際ブルジョアジーの干渉と戰ふところの準備と決意を有することは、支那の意圖を、尙更ら失敗に終局せしめずには置かないであらう。

三

かゝる國際情勢は、ソヴイエット・ロシアが、斷々乎たる決意を示す、さうしたことだけでも、戰爭を防止し得る情勢にさへある、そして事實は、そのとほりに進行しつゝあるが、だがソヴイエット・ロシアが支那資本主義國の掠奪に對して、斷々乎たる決意を持つたそのことは、もとより當然でなければならぬ。

たとえ露支戰爭に迄、發展したとしても、それは、專制支配に對する國民的解放の所謂「進步的戰爭」でもなく、帝國主義支配に對する被壓迫國の所謂「防衛戰爭」でもない。支那に實例をとれば、日淸戰爭やアヘン戰爭では斷じてない。

それは、コルチヤック、セメヨノフの反革命の將軍や帝國主義國日本にかはつて、國際ブルジョアジーの使徒として、ソヴイエット・ロシアの勞働者、農民の權益を强奪せんとする弱少國ながら後進支那資本主義と、社會主義國との戰爭である。

ソヴイエット・ロシアを圍繞する帝國主義諸國から、不斷に戰爭を强制されつゝ、あらゆる苦難のうちに、赤軍を建設せるレーニンは言つてゐる。

「數十萬の社會主義軍の建設が始つた。そして社會主義軍たるや、何のために彼等が戰ふかを知つてをり、そしてツアーリズムの治下に於けるよりも一層大なる犧牲と缺乏に耐える覺悟がある。といふは、彼等は彼等自身の土地、彼等自身の工場に於ける權力を防衛すること、彼等は勞働者の支配を擁護すること、及び他の國々に於ける勞働者は、たとえ困難且つ徐々であるとは言へ、しかも常に生長しつゝあることを知つてゐるからである」

何んの爲めに戰ふか、を眞に知つてるものは×軍の兵卒である。（八月一日、帝國主義戰爭反對デーの日）

軍備より見た露支兩國

河野恒吉

一、事件の發端

五月廿七日哈爾賓の支那官憲は、突如として露國領事館と東支鐵道副理事長チルキン氏の官舍を警察隊と消防隊とで取巻き、五時間の臨檢を行つて重要書類を押收し、其上に、露國領事メリコフ氏奉天副領事クズネッオフ氏及右のチルキン氏を自宅禁足し、其他居合せたる七十餘人の露國要人を拘禁したが、其後の支那側の發表に據れば、彼等はモスコー第三インターナショナルの對支活動作戰に付き討議したものであつて、押收した燒け遺り(のこ)の文書中より、モスコー本部からの東三省及支那本土の攪亂大陰謀計畫に關する原文を獲た、之れは本年一月十六日から廿三日に亘る間に於て、長距離電話を利用しモスコー本部と哈爾賓浦鹽間に往復せる會話の寫で、當時已にモスコー本部は馮玉祥の反中央的態度を豫見し、本年春開始さるべき支那全土の大動亂に乘じ、赤色恐怖手段を以て一氣に共產革命を支那に出現せんとするもので、其れに要する費用人員の配置内亂誘致の手段爆發物の準備、其他攪亂計畫に付いて、詳細な打合を行つたものであると曰ふて居る。

此事件あつて以後、支那側は更に東支鐵道の機密費を怪しと睨んで翌廿八日夜東鐵收入審査課室及同課長の宅を臨檢した。次で六月九日商工代表部東支鐵道倉庫鐵道學校をも臨檢し、商工部長學校當局者等を檢束した。

此間露國政府は、嚴重なる抗議又は露領各地に於ける支那領事館に對する民衆の示威運動、其他種々の報復手段を以て對抗したが、要するに相互の掛引又は威嚇も、實は東支鐵道を對象としての策動であつて、露西亞は維持しよう支那は回收しようと云ふ所に、双方の本能寺があつたのである。

其處で支那側は遂に鋒鋩を現はして、七月十日朝より活動を初め、冒頭東支鐵道沿線の全部に亘る長距離電話電信を回收し、更に北滿各地に於ける赤色職業同盟及コペラチーブを一齊に閉鎖する命令を發し、其從業員約三百名を即時國外逐放することとした。斯くて支那側は是れ主權擁護と赤化防止のためなりと稱し、翌十一日東鐵管理局長エムシヤノフ副管理局長エス・モント兩氏を強制的に罷免し、其後任として支那副理事范其光を以て宛て、尙各要職全部を支那人を以て任命し、右エムシヤノフ氏以下從業員二百餘名を更に國外に逐放することにした。是に於て東支鐵道の實權は全く支那側に移ることとなつた。斯くて此日督辨呂榮寰氏は聲明を發して、露西亞側は露奉協定以來五年に達するも協定條項を實行せず、返つて赤化宣傳を行ふ故に、自國政府の命令と自己の職權で斷然たる處置に出たのである。但し鐵道の利益に關しては協定の原則を實行し露國との平和關係を破るものではない、然れ

ども露國にして若し反抗するに於ては我に斷然たる最後の手段の用意があると曰ふた。

其處で露西亞側は此支那側の高壓的の回收行爲に對し、遂に從來の隱忍態度を改め、奮然として此支那側の暴力行爲を國内に偏く報導して民衆の民族心に愬へると共に、十三日カラハン氏の名を以て、三日間の回答期限を付したる最後通牒をモスコー駐在支那代理大使に交附した。之に據ると、先づ支那側の非合法的行動を責め、且つ勞農政府は他國の暴力に對して自國民の合法的權限を維持するに必要なる十分の手段を有することを示し、(一)東支鐵道に關する一切の問題解決のため兩國政府間に緊急會議を開催すること、(二)支那官憲の一切の武斷命令を即時取消すこと。(三)拘禁勞農市民全部を即時解放すること並に勞農各機關に對する迫害を即時停止することの三要求をしてある。

之に對して支那側は稍狼狽の樣に見えたが、表面平靜を示し、十六日支那一流の筆法を以て、今回の事は純然たる治安維持擾亂防止の必要に出たもので、萬止むを得ざる臨機の處置である、露西亞側が故なく拘禁したる千餘名の支那居留民は速に釋放さるべきである、支那側は駐露代表朱某を以て一切の解決に當らしむ意思ありと回答したので、モスコー政府は支那側に誠意なきものとなし、其回答を受取ると共に(一)支那に於ける一切の代表者の召還、(二)東支鐵道勞農役員全部の召還、(三)露支間一切の鐵道連絡停止、(四)露國に於ける支那側外交代表者の即時退去、(五)露國は露支奉兩協定より發生する露西亞の權利を保留することを宣言して斷然たる態度を示した。之にて全く兩國の絕緣となつた。

二、何れが勝つか

其後矢繼早にグロデコー(東支の東部國境、露領)に赤軍の集中、赤軍飛行機ポクラニーチナヤ(東支の東端末、支那領)の上空に飛ぶ、露支兵火を交ゆ、ウスリー鐵道(グロデコー以東)運行停止さる、滿洲里(東支の西端末、支那領)方面赤軍集中、赤軍飛行機飛ぶ、支那側亦吉林軍をポクラ方面に增派す、張作相其司令部を哈爾賓に進む、各地人心大動搖、邦人引上に着手す、滿洲里突然露軍に占領さる、滿洲里方面に砲聲聞ゆ等々の諸情報が頻に傳はるので、日本でも愈〻行るだらうか何れが勝つだらうか、と云ふ樣な話題が至る處に持上つた。

行る行らぬは後廻はしにして、假に行るとしたら、露支何れが勝つだらうと云ふ話になると、三宅坂邊りでは、其れは問題ではない、支那は一溜りもないと云ふに所見が一致する。筆者も先づ其通と觀る。

不戰條約を締結した斗りの今日、大戰爭杯と曰ひ出すはチト耳障りかも知れぬが、所謂國家總動員と云ふ樣な場合ともなれば、其勝敗の要素は色々あるから直ぐには判斷は出來兼ぬるが、支那との戰爭なら武力の衝突丈けで濟み、全く花火線香式のものであるから、軍隊の素質丈けで勝敗は大體極まるのである。素質と曰へは、編成武裝訓練將校以下各幹部の能力等の優越如何のことだ。

今露軍と支那軍との素質を比べると、其れはお話にならぬ。露軍は總ての點に最新式である斗りか、軍隊内の緊張味が平常から違つて將

る。支那軍は、師團とか旅團とか乃至は聯隊とかあるが、皆內容が違ひ武器が揃つて居らない、又人員の數程武器がない、大砲の割合も少ない、支那軍の中でも奉天軍と曰へば、張作霖の造り上げたもの丈けに重砲もあり、飛行機もあり、戰車もある、あるが其れは、張學良が阿片飮みながらダンスを行るのと同樣に、幾何ハイカラ振つても、支那式は何處迄も支那式であつて、露西亞軍の武裝に比すれば到底比べものにはならない。吉林軍や黑龍軍になると更に低下すること申迄もない。濟南事件の時、五月三日の事件發生當初は、僅に三・四千の我軍は約十萬の支那軍に對抗し、次て五月八日の武力行爲に出た時でも、我兵は四・五千を以て支那の三・四萬に對抗して居たのである。其日本軍より更に一層武裝の完備した露軍が北滿の支那軍に對抗したら、其歸結は自ら推知の出來る話だ。其處で傳へらるゝ所に據れば、滿洲里方面にあつては、支那軍は逃げ仕度中で、露軍が前進を始むれば、海拉爾若くは興安嶺迄退ると曰ふて居るとのことである。

三、露軍の概要

序に少しく露軍のことを曰へば、大概の人は、革命後の露西亞の軍隊は大したものではないと、早呑込をして居る樣だが、元より今から十年前の革命當初の露西亞軍隊は、曰はば目茶々々であつたが、其後トロツキーが陸軍當局となつて赤衞軍を組織し、其れが一九一九年から同二二年に亙る內亂や波蘭との戰を經て、一九二三年後の有名なるフルンゼーがトロツキーの後を受けて、赤衞軍の改革充實に關する七年計畫なるものを立てた。而かも今年は正に其完成の期に達したのである。總兵力を曰ふと、步兵七十師團(內正規二十八師團民兵三十九師團兩者混成四師團)、騎兵十二師團(正規八師團民兵三師團混成一師團)あつて、其外に特別騎兵旅團が七あるが、上記の者が先づ赤衞軍の主體である。之を帝政時代のものに比較すると、輪廓は正に同一であるが、帝國時代の總兵數百萬に對し、赤衞軍は七十萬である。併し舊軍隊に比すれば武裝が全然違つて居り、特に機關銃の數が非常に多いのであるから、其精銳さに於ては舊時代に數層倍の優越と曰へるであらう。

(露軍の編成は所謂三單位制のもので、之れは大戰後の獨逸軍事界の學說を、フルンゼーが採用したものと曰はれて居る。色々我邦にも採つて學ぶべき點がある樣である。

其他民兵師團と曰ふのが至極面白く出來て居て、字で小隊を編成し村で中隊、數村で大隊、郡で聯隊、縣で師團と云ふ如く編成してあり、幹部は常設してあり、其兵營なり兵員のための武器彈藥其他裝具の格納に要する倉庫等が準備してあつて、農閑期を利用し天幕の野營に召集して訓練を實施するのである。

其外民間には、オソ・アビヤヒムと云ふ國防普及協會とでも曰ふ團體がある。三百萬からの會員を有し、且つ巨額の基金を造つて活躍して居る。此團體は過去數年間に、飛行機二百三十三臺を作つて之を赤衞隊に寄附して居る。先年行はれた訪日飛行の如きも、此協會の事業として行はれたのである。

斯くの如く、露西亞が如何にも軍國的になつたのは、引續きたる大資本家國の壓迫、並に一九二七年ジユネーブの軍縮會議に於ける露國の提案たる軍備全廢案の否決に基けるものであつて、露西亞は之を以て、資本家國が勞農露國を攻撃せんとするものとなし、爾來盛んに軍備計畫の完成を圖ると共に、國民に向つて國防思想の普及を鼓吹して居るのである。今其兵役法を檢するに文字通の擧國皆兵主義であつて即ち男子十九歳になれは、不具癈疾にあらざる限り、二年間の内に必ず二ケ月の軍事訓練を受けねばならぬ、次で廿一歳の適齢に達すると抽籤で正規軍に入り、殘餘は民兵軍に入るか又は隊外現役兵と云ふものに編入せられる。現役が五年、豫備が九年、後備が六年、計二十年の兵役である。正規軍でも兵科により在營年限に長短があり、歸休もある。正規、民兵、隊外現役の各種で又訓練期に長短がある。色々區々ではあるが、兎に角軍事豫備教育二ケ月の外に、長短何れかの軍事訓練を受けねばならぬ様になつて居る。又各大學にも高等準備教育と云ふ規定があつて、日本の其れよりも大分條件が辛い樣である。

赤軍の高等教育機關としては、參謀大學軍事政治大學軍事技術大學航空大學並に各種專門大學等がある。士官學校も其數三十五校の多きに達して居るのである。

赤軍の强味の大要は以上の通りであるが、其反面に弱味もある、其一、二を曰ふと、高級幹部が皆な革命當時の鬪士で、槪ね三十代の若い連中で、此人達は一足飛に師團長軍團長等になつたので、高等司令官としての專門的能力に缺けて居る樣である。又工場が産業本位であるから此大軍に要する軍需品を供給すると云ふことが今日の處至難の樣である。

四、北滿兩軍の現勢

其れ程に怖るべき兵備が露西亞にありとせば、何故奉天側が露西亞に對して、前述の樣な餘りに踏付けた仕打をしたのであらうと云ふ疑問が起るが、其れは、彼の北京に於ける露西亞公使館手入以來、天津の露國領事館手入、哈爾賓の自治權回收、松花江航行權飛行權の回收哈爾賓土地一部の回收、哈爾賓の電話回收等々、今日迄事毎に露西亞が泣寢入を見せて居る、其れに露西亞は金もなし糧食も缺乏して居る、故に露西亞は到底武力に訴へることが出來まい、又露西亞が下手に大事を起せば返つて反革命の頭擡ともなる、と斯樣に支那は露西亞を見くびつて仕舞つたに相違ない、其れに反赤化の大旗を押立つて進めば列國の同情は支那に歸するものと思つたであらう。處が今度と云ふ今度は露西亞政府の要人達も、支那人は一枚上は手だと判つたものか、斷然として最後の强硬手段に出た。其處で、支那は表面强がつて對應的軍事行動を取りつゝあるものゝ、内面では平和解決を望んで居る樣である。今兩軍の現在の配置を略記すると(八月五日)。

露軍側に付て曰へば、西比利亞には合計七師團(三軍團)騎兵二旅團であるが、其中イルクーツク以東の諸兵力即ち四師團と騎兵二旅團其總兵約四萬が、直接此事件に當るものと觀られる。事件發生以來、差當り滿洲里ポクラ兩方面共先づ此騎兵一旅團つゝと飛行機若干臺が第一線

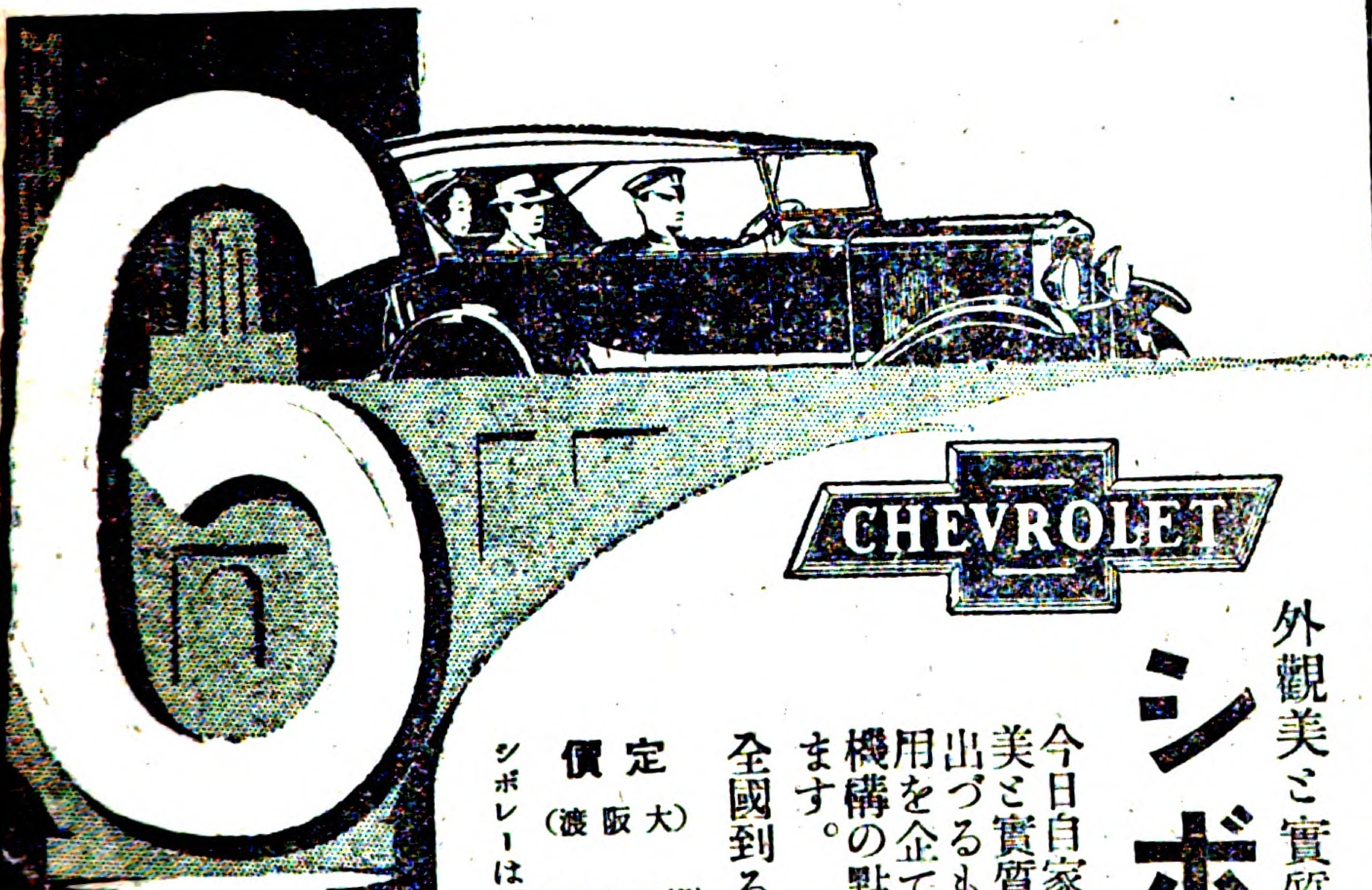
に活躍し、次で逐次其後方に他の諸兵が集中々の樣である。滿洲里方面に於ては、一日五、六列車の軍事輸送をして居るとのことであるから目下では已に一師團近いものが集つて居るであらう。

支那軍隊に就て曰へば、黑龍軍六萬がブラゴエチエンスク竝に滿洲里方面に對抗し、其主力は東支鐵道に沿うて長くなつて居る樣で、滿洲里の第一線には約八千人の一旅團が居るらしい。又吉林軍約八萬がポクラ方面に對抗しなりポクラ哈爾賓間に長く三萬位のものが居り、其他二萬五千位のものが吉林方面に待機の姿勢にあるらしい。奉天軍は約十五萬居るが、熱河と關內にも出て居るから、多くのものを北方に仕向けることは出來ない。各軍總計約三十萬の中愈々の場合、北方に使ひ得るものは其半數約十五萬位だらうと傳へられて居る。

露西亞側が唯だ掛聲丈けで其目的を達し得るか何うか、若し彼が愈々積極的に行るとしたら、何うなるだらうとはよく聽かされる問題たが、其時は結局、鐵道に沿ふて敵を擊退しつゝ哈爾賓に向つて軍を進めねばなるまい。何にしろ喧嘩の對象物たる東支鐵道を支那側に取られて居るから、之を取り戻さねば、けりは付かぬ譯けである。其他コロンバイルの獨立幇助、外蒙や新疆方面の進出、或は色々の報復手段もあらうが、何れも東支鐵道に對しては二階からの目藥だ。斷乎として行れば哈爾賓進出も存外難事ではなからうと思はれる。

五、結局何うなるだらう

處で、露西亞は初めから其んだ積極的のことは考へて居なかつたらう、露西亞としても下手に戰爭を初めて長引かせられると、勢ひ歐露からも軍隊を繰出さねばなるまい、さうなれば尙更軍費も要るし、北滿の物資が永く西比利亞に入らぬとなれば同地方の缺乏も擴大するととなり、北滿物資の浦鹽輸出も永く杜絕する譯となるし、又反革命派の頭擡とでもなれば厄介であるし、支那も眞劍には戰爭し得ないと見越したであらうから、此の處一つウント本氣らしく戰爭氣分を見せ付けてをつたら、支那も存外早く腰が碎けるであらうし、又國際交通線のことでもあり其上に不戰條約の效力も發生するから、何んとか列國の干涉もあつて露西亞のために有利に展開し得るであらうと觀たのではなからうか。其處で最後通牒、國交斷絕、國境閉鎖、兵力集中、飛行機の空中示威、國境に於ける實彈演習、其他何々と、矢繼早に威嚇の手段に出たものであらう。何にしろ露西亞と支那との喧嘩は、狐と狸の化かし合ひであるから、事件の歸結に對する豫測は極めて至難であるが、どうやら露西亞の藥が效いたのか、或は又今度の遣方は列國の間に餘り同情がないから將來のために支那に不利と觀たのか、支那は露西亞の主張たる東支鐵道の原狀回復丈けは已に豫備交涉に於て讓步を示し、露西亞側に相當の成功がある如く察せられるのである。若し之にて露西亞側が成功せば、孫子の所謂戰はずして勝つもので、上の上と云ふこととなるが、今後の成行こそ見物である。(八月廿日)



CHEVROLET

外觀美と實質本位の

シボレー號

今日自家用車としても、營業用車としても、外觀美と實質價値を具備した自動車はシボレーの右に出づるものはありません。殊に初めて自動車の利用を企てらるゝ方々には、經濟的方面からも品質機構の點からも、確信を以て本車を御勸め申上げます。

全國到る處の特約販賣店に御用命を願上げます。

定價（大阪渡）

幌型	金貳千百貳拾四圓
二扉セダン型	金貳千參百九拾五圓
四扉セダン型	金貳千六百五圓
タクシー・セダン型	金貳千六百七拾八圓

シボレーはゼネラル・モータース金融會社による月賦販賣の便あり

日本ゼネラル・モータース株式會社

シボレーはゼネラル・モータースの製品なり

イギリス勞働黨の帝國政策

後藤信夫

――(一)――

歴史家はアメリカが英本國から獨立した一七八三年を以て、英帝國の第一期は終つたものとして居る。卽ち此の時から後を「第二帝國」の時代となすのである。併し英帝國が近代的の帝國主義的發展の意義を持つに至つたのは遙に下つて前世紀の八十年代以後の事に屬する。

それは資本主義國家として他の何れのヨーロッパ諸國よりも先んじて發展し、世界の工場の名に相應しい特惠的地位を享受しつゝ來つたイギリスが普佛戰爭以後に勃興したヨーロッパ大陸の産業の競爭に直面した時とつた一つの方向轉換であつた。啻にイギリスの上下を風靡したのみならず、大陸諸國にもその主張の押賣りをして憚らなかつた正統派經濟學直傳の自由貿易論が、ジョセフ・チェインバレン一派の新帝國主義論にその地位を讓らなくなつたのは正に此の時の事である。

この新しき帝國主義がイギリスを、或は世界を如何なる結果に導いたか。我々は餘りによくそれを識つて居る。ツァーリズムの崩壞による世界資本主義の一堅城の決定的陷落、ドイツ、フランスその他中歐諸國の經濟的瀕死、イギリスの戰前に有りし世界最大の金融資本家たる地位の新興アメリカによる奪取。一言以て之を蔽へば戰後資本主義十年に亙る慢性的經濟的恐慌之である。此くして戰勝國イギリスは今になほ、戰債と失業の重荷の下に苦惱するを餘儀なくせられつゝある。

無事向上の一路を辿りつゝあつた前世紀のイギリス資本主義が、それの挫折に直面して一方に於て新帝國主義にその救濟を見出した時、同じ事情は著しく異つた新しき傾向をイギリスに

於て育みつゝあつた。前世紀の八十年代は社會主義運動の飛躍的發展時代である。帝國主義的思想と同じく社會主義は思想として決して新しい物ではなかつた。而も新しき帝國主義が古きそれとその内容を異にせるが如く、新しき社會主義も決して單なるオウエンやチャーチストの運動の再來ではなかつた。それは近代的プロレタリアの運動であり、近代的社會主義思想の影響を濃厚にうけたものであつた。組合運動の方面に於ては熟練工の鎖國的職業組合を打破する上に此の新しき血液は役立ち、八十年代より九十年代にかけての著しい『新組合主義(ニユーユニオニズム)』全盛の時代を造り上げると同時に、政治的方向に於ては勞働階級の獨自の政治行動を促進する上に偉大なる貢獻をなした。

——(二)——

此くして南亞戰爭がイギリスの資本家階級のために貴重な貢物を齎したその一九〇〇年は、今の勞働黨の前身である勞働代表委員會の成立せる年としてイギリス勞働階級に紀念せられて居る。成立間もない地盤も經濟的根柢も怪しげな勞働代表委員會がその年の總選擧に於て十五名の候補者を立て、二人の當選をかち得たと云ふ事は當時の狀況からしては寧ろ成功と見らるべきものであつたのである。「カーキー・エレクション」と呼ばれるその總選擧の主要なる問題は戰爭問題であり、新しき黨の候補者達は好戰的空氣の濃厚なる選擧場裡に勇敢に非戰論を稱へた。併しその戰爭反對は戰爭の帝國主義的意義を明瞭に把握してこの上の反對と云ふよりは寧ろ單純なる平和主義的立場から出發したものであつた。

此くして各國の帝國主義的發展が止る所を知らず、遂に大カタストローフを招來するに至つた一九一四年迄、勞働黨(勞働委員會は一九〇五年勞働黨と改稱せられた)の活動は黨自體を確固たる基礎の上に築き上げる事と、國中に於ける目前の諸問題に注がれ勝ちであつて、眼を轉じて海外領土に注意すると云ふ樣な餘裕はなかつた。のみならず、四十名内外の小數黨としての限られた機能は自然黨をしてかゝる問題から縁遠いものたらしめて居たのであるが、大戰は勞働階級の地位の上に重大なる變化を齎すと同時に、勞働黨の地位の上にも大きな變化を與へた。それの當不當は別問題として、マクドナルド以下數へる程の非戰論者を除く殘りの勞働黨は擧國一致内閣の下に參じ、戰爭の終結を告げた時勞働黨の勢力は戰前のそれと隔段の相異あるものであつた。此くして勞働黨は全般的に國策を建てるの必要に迫られた。

（三）

併し乍らかゝる表面的黨の勢力の變遷の下にはより根柢的な事實の推移があつた。イギリスに於ける資本主義――卽ち帝國主義なる歷史的段階に置かれたる資本主義の破綻と古き此の組織に代るべき新しき經濟的組織の擡頭とがそれである。イギリスの勞働階級は戰前に於けるが如く單純に凡ゆる資本主義の壓迫に反抗する丈ではならない。進んで之を變革しなければならないと云ふ必要に迫られたのである。『勞働黨と新社會秩序』なる一九一八年に採用せられた勞働黨の綱領は此の膨大なる課題に對してイギリス勞働階級が提出した一つの答案なのである。其處には彼等の立場よりして如何に危機に瀕せる資本主義を處理すべきかが述べられて居ると同時に、當然、それの延長であり又或る意味よりしてそれの礎の一つでもある英帝國の問題が觸れられて居るのである。

併し乍ら新綱領に表明せられたる所は大體に於て漠然たる自治主義及び民主々義の英帝國内に於ける徹底を期し、各領土間の密接なる交通接觸を促進すべきを提唱すると云ふ程度のものに止る。而して實際に於て、此の一節は寧ろ對内政策に對する附錄と云つた樣な意味に於て附加へられて居るに過ぎないのである。又現に一九二二年、或は翌二三年の總選擧に於ても勞働黨側より帝國政策について論ぜられる事は頗る少なかつた。此くして勞働黨は一九二四年初めて内閣を組織する事になつたのである。勞働黨は帝國政策については、少くとも書記されたる形に於ては、何等確固たる具體的綱領なしに此の問題に當面しなければならなかつたのである。そして勞働黨内閣の十ケ月は餘りにも國内の問題並にヨーロッパの諸問題に忙殺せられて何等此の方面に積極的方策を樹てる事なくして終つた。乍併、恰も此の一九二四年の黨年次大會に於て帝國領土内の食料品を大量に購買せんとする政策が採用せられたと云ふ事は注目に値する。之は戰時中の食料管理の經驗よりして提案せられたる、一つの領土間の經濟統制政策であるが、之の採用は勞働黨の對帝國政策の上に一期を劃するものと見なければならない。而して翌一九二五年の大會に於ては遙かに廣汎なる全般的對帝國政策が打建てられた。此の『イギリス聯邦に對する勞働黨の政策』なるものはより簡單なる形に於て、併しその内容に於ては殆んどその儘、一九二八年の新綱領『勞働黨と國民』の内に採用せられて、現在勞働黨の對帝國政策の根本となつて居る所のものである。

——（四）——

かゝる間にイギリス帝國内に於て一つの重大なる變化があつた。即ち一九二六年の帝國會議の結果カナダ、オーストラリア、ニユー・ジーランド、ニユーファウンドランド、南亞聯邦及びアイルランド自由國の諸領土がイギリス本國と全く平等の立場にたち、互に從屬的關係にたつ事なく、それ〲の自治的社會を單位として自由にイギリス聯邦（British Commonwealth of Nations）なる聯合體を形造ると云ふ事が明確に宣言せられた事が之である。勿論かゝる形勢は大戰後著しく發生しつゝあつた。併し、それが完全に明文の上に於ても認められた、或は寧ろ、イギリス本國が之を許認せざるを得なくなつたと云ふ事は、イギリス帝國の上に一つの大きな事件であると見なければならない。所謂『第三帝國』の時代が此處に始る。

尤も完全なる自治領となつたものは六十有餘の政治的單位の内の僅に七つ（本國をも加へて）に過ぎない。殘りの五十餘の領土は依然として、母國對屬領の關係に於て本國に對する以上『帝國』の名は矢張り實を供ふものと見なければならない。人口から云へば四億六千萬餘の全人口の內約七千萬人、即ち約六・五分一のみが代議制を享受し、國內に於ては部分的自治を許されつゝあるインドの三億二千萬を除いた人口は全然イギリス本國政府の支配下に隷屬して居る。人種から云へばインド人、セイロン人、ビルマ人或はマレイ半島香港に於ける支那人、委任統治領に於けるユダヤ人アラビア人の如き西歐に對立的文化を有する人種、或はニゲリアに於けるアフリカ人マレイ半島のマレイ人の如く半開的人種もあり、更に又アフリカの大部分を占めて居る野蠻狀態に近い人種もある。政治的形體に於てもインドの如く自治への過渡にあるもの、インド侯領、ニゲリアの如く獨立の政治を行ひ乍らイギリスの保護監督の下に置かれ居るもの、或はケニアに於ける如く全然專制の行はれつゝあるもの等の差等あり、その地方の產業狀態よりするも、アフリカに於ては原始產業が支配的であり、マレイ、インドに於ては原始產業はより發展せる段階にある。從つて前者は寧ろ原料食料の生產地として本國に對し、後者はその稠密なる人口の故に貴重なる本國生產品の市場となつて居る。從つて同じ勞働者と云つても一週最低賃銀四磅を保證せられて居るオーストラリアの勞働者と野蠻狀態にあるアフリカ土人とを兩極として見る甚しき差等のものがあると考へなければならないのである。

かゝる複雜なる狀態が此の膨大なるイギリス帝國に對する政策を非常に多樣ならしめる事は云ふ迄もない事ではあるが、勞

働黨の政策は第一に自治領及びその他領土間の關係を緊密ならしめる事、第二、各領土の自治を促進し全般的に民主々義の徹底を期する事、第三、領土土着民の幸福を治政の第一主眼として之を本國の搾取の對象たらしめないと云ふ事項に要約せられる。

——(五)——

『勞働黨と國民』の要約には次の如く書かれて居る。

一、イギリス及び自治領間の最も密接なる協力を、全然平等なる關係に於て設定する事。

二、インド人民の自治自決權を承認し、インドをして自治領と同じ立場に於て聯邦に加入せしめる事。

三、ヨーロッパ資本による土着民の搾取を防止し、強制勞働、有害なる又は不正なる雇傭條件を禁止し、それ等土人の土地所有及び公民權行使を保護し、衛生教育施設を發達せしめ、凡ゆる手段によつて、出來うる限り早き適當の時期に於ける完全なる自治を得せしむるために準備せしむる事。

四、國際聯盟委任統治委員會の權限を強化擴大する事。

五、聯邦構成諸國と協力して聯邦內の經濟的資源を開發し、移民希望者のために咨問監督機關を設くる事。

自治領が全然對等の關係に於て本國に對すると云ふ事は、自治領は希望しさへすれば何時でもイギリス帝國の羈絆から脫しうると云ふ事に他ならない。かくして此の自治領間の關係を結びつける何等かの方策を講ずると云ふ事は、帝國領土相互間の團結を維持せんとする勞働黨の第一に考ふ可き事柄である。保守黨は此の問題を特惠關稅政策によつて解決せんとした。勞働黨は之に反對する。但し問題を放任するのではない。進んで此の一大帝國を經濟的に統制し、出來うる限り需要供給の關係に基いて合理的に組織せんとするにある。或は資本の輸出を統制して之を資本の不足せる帝國內の自治領に向ける、而して自治領內の主要生產物たる食料原料を大量に購買して、それの價格を安定せしめる。特に又不要なる輸出入の仲介人を廢止するとか、運輸の便を促進し費用を低廉ならしめるために適當の處置を採る。かゝる計畫が勞働黨の政綱の目論みつゝある所である。勿論之の實行にはイギリスに於ける資本保有者又は工業家との協調を必要とする。而してそれがために勞働黨は政權をとる場合それを有效に行使せんとする。併し自治領の態度を勞働黨は強制する事は出來ない。之は全然相互の協調によるの他はないのであるが、之は決して從來の歷史より見て不可能な事柄ではない。經濟的關係に關して重要なるものに移民がある。人口の

科學的再分配を理想とする勞働黨は、此の點に關し出來うる限りの努力を拂はんとしつゝある。卽ち移民の目的地との交渉、事情報告の蒐集によつて移民希望者の希望に副ひ、旁々移民すべき人々に準備的訓練を與へる。更に又移民人口の移住後の狀態にまでも出來る限りの監督援助を怠らないと云ふのである。

自治領以外の土地に於ては問題は寧ろより困難である。卽ち之等の土地に於ては屢々少數白人の利益がその領土の治政を左右し得るからである。而して同じかゝる事情が、例へば、アフリカに於ける土民の奴隷的勞働狀態を齎した原因でもあつたのである。我々はそれの最も甚しきものとしてチニアを擧げる事が出來る。第三の要綱の對象とせる所は主として此の東アフリカの植民地に於ける土人勞働者問題である。比較的に人口の稀薄である東アフリカに於ては西アフリカに於けるとは全く異つた政策が傳統的にとられ來り、少數の白人（ケニア土人々口約二百五十萬、白人約一萬人）植民者が十七世紀のアメリカ又はケイプ植民地に於いて行はれた如く土地を政府より借受けて、土人をして栽培に從はしめて來た。白人は勿論赤道直下の太陽の下に仕事をしやうとはしないから土人の勞働を得なければならない。此處に於て驚くべき强制が行はれた。土地を土人から奪ひとる事はその生計の道をたつ事である故に勞働を間接に强制する事である。又稅を課し、土人をして稅金たるべき貨幣を得んがために白人の下に勞働するの餘儀なきに至らしむるもその一つの方法であり、更に又、ケニアに於ては法律を以て强制勞働を執行しさへもして居るのである。卽ち此處に於ては白人少數者のために土人は全く奴隷の狀態に陷れられつゝあるのである。勞働黨は土着民の福利と相反する如き手段による如何なる經濟的發展にも反對する。現に東海岸と反對の政策をとり來れる西海岸地方の經濟的繁榮の著しき事は勞働黨の主張の妥當なることを强く裏書する。

併し勞働黨が當面しなければならない帝國內に於ける重大なる勞働問題は之ればかりではない。例へば南亞聯邦に於ける黑人勞働者問題の如きもその一つである。卽ち此處では白人勞働者對黑人勞働者の勞働市場に於ける競爭が、白人勞働者をして白人企業主と相結んで鑛山又は工場に於ける土人勞働者を搾取せしめつゝあるのである。勞働黨は勿論かゝる態度に反對する。併し、南亞聯邦が完全なる自治領なるの故を以て、たとへ政權を得ても之に何等の强制を加へ得る立場にない。從つて微妙なる顧慮が拂はれなければならないと云ふ事は謂ふ迄もない事である。

印度に對しては勞働黨は完全なる自治を傳統的に主張し來つ

た。一九二五年に開かれたる聯邦勞働會議も自治の即時實行の希望を支持して居る。而してインドは現に自治への過渡時代にあり、近き將來に於て之は——勞働黨內閣の成立と否とを問はず——實現せられる狀態にある。既にインドが國際聯盟に獨立して代表者を送りつゝある事、又帝國會議には他の自治領と同じ立場の上に獨立の單位として參加したと云ふ事は人の識る所である。

委任統治委員會の權限を强化する事を主張した頃は、此の委任制の徹底を以て當該國土人の福利を增進せしめる所以のものと考へる所より加へられたものである。勞働黨は此の委員會の强化、それの監督の徹底によつて本來條約に於て約束せられたる委任の精神の實現を、單にイギリスに屬する委任領土に於てのみならず他國の支配下にある委任統治地方に於ても期待して居るのである。之は又たゞに委任統治領自體にある土人の生活を向上せしめるのみならず隣接國の土人の生活をも左右しうるに至ると云ふ事を豫想して居るのである。

かゝる政策の外に勞働黨はなほ重大なる具體的提案を有する。即ち帝國內各地方の政治的經濟的協力を完うせんがために從來の帝國會議を擴大した聯邦會議の開催を提唱し、爲政者側のみならず反對黨の立場にあるものゝ代表者をも參加せしめん事を主張する。自治領の代表者がより近接にイギリス各省と事務上の交涉をなしうるがために政治組織上の變革も同じ目的の下に考へられつゝある。

——(六)——

要するにイギリス帝國が帝國主義の一表現形體として演じ來つた過去の業績の如何なるものであるを問はず、又現在その帝國內に如何なる統治が行はれつゝあるかにも拘らず、勞働黨は單純に此一大帝國の緊帶を切り離す事によつて、世界をより細分せられたる經濟的單位に切りこまざくと云ふ事に反對する。而して白人の下に奴隷狀態にある土人勞働者の地位の改善すると云ふ事によつて責任を果し、此のイギリス帝國を新しき基調の下に組織する事によつて社會主義の實現に資する所あらんとするのが勞働黨の一貫せる方策である。かゝる態度は屢々イギリス一流の僞善なりとして攻擊せられ、又一部論者は植民地の即時放棄を主張して止まない。併し乍ら、勞働黨の政策を一貫して居る所のものを、——好むと好まざるとにせよ——一つの動すべからざる事實として之を認めざるを得ざる以上、その對帝國政策も亦その同じ線の延長として之を勞働黨として相應しき事と考へざるを得ない。我々は勞働黨の對帝國政策だけを抽き出して論ずる事は出來ない。それは勞働黨が如何にイギリス自體の資本主義を處理せんとしつゝあるかと云ふ態度からして自

然に出て來る所のものであるからである。勞働黨がイギリス自體の資本主義、即ち現に帝國主義の段階にありと云はれつゝあるイギリス資本主義に對して如何なる態度をとりつゝあるか、その態度が如何に共産主義者の態度と對立しつゝあるかを我々はよく識つて居る。又勞働黨の對内政策には少からず議論の餘地があると云ふ事、それの決して一部論者を滿足せしむる程に徹底的でない、又革命的でないと云ふ事を我々は識つて居る。勞働黨の對帝國政策はかゝる立場——一つの立場よりすればかゝる不徹底なる漸進的非革命的態度——の反映以外の何者でもない。

（七）

然らば今次の勞働黨内閣は今直ちに如何なる實際政策を行ふであらうか。前述の要綱を一讀する時何人もそれの何れも甚しく實行不可能でないと云ふ事を容易に承認するであらう。尤も勞働黨内閣は目下失業救濟のために全力を注ぎつゝある。國外の問題に於ても對ヨーロッパ、對ロシア、對アメリカの問題がせり合つて居る。此くして帝國内の問題は勞働黨内閣に於て決して第一に重要なる問題であるとは考へられ得ない。

保守黨の特惠關税主義を新内閣が直に放棄すべき事は謂ふまでもない。又失業救濟の意味を以て植民地投資計畫も現に進められつゝある、印度に對しては、現にサイモン委員會に勞働黨より二人の委員が參加しつゝあるのであるから、政府はその委員會の報告の發表せられるまで何等積極的政策を示さないと考へられる。たゞケニアの如く白人專制地方の土人勞働問題の處置については政府は植民地在住の白人並にそれと利害關係を同じうする本國資本家の反對を豫期しなければならないであらう。かゝる中央よりの壓迫を豫想して、彼等は既に『自治』——勿論白人の——を要求しつゝあつたのであるから。植民地省自治領省の組織の變革も何れは行はれるであらうと豫想せられて居る。

勞働黨内閣に何等かの華やかなる改革が奇蹟の示現を要求する事は、勞働黨の何物たるかを識る者は敢て之をしないであらう。勞働黨の何物たるかを知る者は勞働黨の機能が常に一定限度内に限られたものであると云ふ事を、認めないわけに行かない。勞働黨内閣は從つてその限度を超えた機能を有するものではない。之は勞働黨が絕對多數を有するとしても決して取除かるべき制限ではない。

たゞ勞働黨内閣は、イギリスの勞働黨として、イギリスの勞働黨らしくその與へられたる限度の中に於ても、許されたる限りの機會を利用してその理想に近かんと欲するに過ぎない。

帝國政策は、その勞働黨の政策の一部分である。

米國の繁榮と其原因

安部磯雄

米國が今日の繁榮を來したのには種々なる原因がある。多數の人は其繁榮の原因が資源の豐富なるにあるが如く考へて居るけれども、私は他に一二の有力なる原因があると考へて居る。天然の資源は恰も親讓りの財産の如きであつて、若しこれを所有する子孫が無學無智であれば決して繁榮の原因となることは出來ない。米國は實に資源に富んで居る。然し米國人はそれを利用するために必要なる資格を具備して居る。具體的に言へば米國人は巧に人口問題を解決し、同時に外國貿易に關する根本方針を確定して居るのである。殊に米國人が上下を通じて聰明なる理智を有して居ることは何人も認めざるを得ないであらう。

私は先づ米國の資源が如何に豐富なるかを示すために三四の統計表を示すことにする。米國の國土は全世界の總面積に比して僅に五分九厘であり、其人口は地球上の總人口に比して僅に七分過ぎないのであるけれども、其生産と消費と所有に至りては全く驚くの外はない。一九二四年に於ける米國の生産額を全世界の總生産額に比ずれば其百分率は左の如くである。

石炭	、三八	玉蜀黍	、七五
石油	、七〇	小麥	、二五
電力	、三八	其他穀物	、三〇
銅	、五四	綿	、五五
鉛	、四〇	木材	、五三
鐵礦	、四〇	煙草	、三六

更に消費の點を見れば同じくこれによりて米國の繁榮が想像される。即ち左記の品に對する米國の消費額は世界の消費總額に對して次の如き割合を有して居る。

ゴム及びギヤソリン	二分の一
生絲	三分の二

砂糖　　　四分の三

序に電話及び自動車を所有することに於て米國が如何に他國に超越して居るかをも述べて見よう。米國は全世界に於ける電話の約六割一分を所有して居るのであるが、歐羅巴諸國が所有して居る電話の總數は僅に二割八分に過ぎない。從つて歐羅巴諸國は人口百人につき僅に二個の電話を所有して居るのに、米國では人口百人につき十五個の電話を所有して居ることになる。米國が一日に四千九百萬の通話をなして居ることを聽かば何人も驚かざるを得ないであらう。

一九二五年の統計に據れば全世界に於ける自動車の數は約二千四百五十六萬五千臺であるが、其內米國の所有して居るのは一千九百九十五萬四千臺であつて、歐洲諸國の所有數は二百六十七萬六千臺である。更に歐洲諸國に就て言へば、英國は九十萬三千臺を有し、佛國は七十三萬五千臺を有して居る。米國は實に全世界に於ける自動車の八割一分を占めて居るのみでなく人口に對し驚くべき割合で自動車を所有して居る。卽ち英國は人口四十九人に對して一臺、佛國は五十四人に對して一臺の割合であるが、米國は五人六分に對して一臺を所有する割合である。殊に太平洋岸の諸州になると三人半位で一臺を所有する割合であると聞いて居る。實に盛なりと言ふべしである。

然し米國が以上述べた如き繁榮を來たしたことの原因を單に豐富なる資源のみに歸するのは決して正當なる見解ではない。若し米國人が無學無智であつたならば、所謂寶の持腐りであつて、これを今日の如く利用し得なかつたかも知れぬ。然し米國人は概して聰明である。殊に一國を指導する政治家や學者の中には天晴れ國民の行くべき途を示し得る程の卓見家が少なくなかつた。これを具體的に言へば彼等が何ものよりも先きに人口問題の解決を試みたことである。米國は今日も尚ほ廣大なる土地を所有して居るのであるから、何等切迫した人口問題に遭遇して居るのではないけれども、當然來るべき問題を豫想して後日の準備をなすといふ點に彼等の長所がある。文明の程度を計る尺度が各國民の未來に對する準備如何に在るとするならば、米國人は確に高度の文明を所有せる國民であると言ひ得る。人口問題を解決すること一日早ければ其れだけ國民の幸福は增進されることになる。米國民が逸早く此點に注意したことは今日の繁榮を來した大なる原因であると言はなければならぬ。

人口增加の二大原因は移住と自然增加である。言ふまでもなく移住は外國人の轉住を意味するのであつて、自然增加とは出生率と死亡率との差によりて生ずる增加を言ふのである。米國は其國土に比して人口尚ほ稀薄であるに拘はらず、移民法を改

正して絶對に東洋人の移住を禁止し、歐洲諸國の移民に對しても可なり峻嚴なる制限を設けることにした。これがため米國は一時世界各國殊に我日本からの抗議を受けたけれども、彼は頑として其所信を曲げなかつた。然し米國は單に外國人の移住に對して制限を加へたのみでなく、國民は自發的に產兒制限を行ふて大に出生率を減ずることにした。言ふまでもなく產兒制限は米國の國策ではなかつた。米國は今日でも苛酷なる法律を以て產兒制限を禁止して居るに拘はらず、國民は各階級を通じて自由に產兒制限を行ひ、政府も亦これを當然のこと丶して禁止法を勵行しないことになつて居る。勿論多數の米國人は人口問題解決といふが如き國家的立場から產兒制限を行ふて居るのではなく、單に個人的立場からこれを行ふて居ることは言ふまでもないが、それが偶然にも米國繁榮の一大原因となつて居ることは私共が大に參考としなければならぬ點である。

私は以上の卑見を確むるため左に一の統計を示すことにする。

	一八九九年	一九一四年	一九一九年	一九二三年
動力	一〇〇	二二〇	二七八	三三六
生產高	一〇〇	一五六	一九八	二八五
勞働者數	一〇〇	一三四	一六一	一九〇

卽ち一八九九年から一九二三年に至る廿四年間に於て米國全體で使用する動力は二十三割六分、生產高は十八割五分の增加をなせるに拘はらず、勞働者數の增加は僅に九割に過ぎない。これは何を語るのであるかといふに、勞働者の數が漸次不足となつたゝめ、米國の產業には盛に機械が用ひられるようになり其結果動力の割合が著しく增加するようになつたのである。換言すれば米國に於ては勞働力の價値が騰貴するようになつたゝめ、機械力を益多く使用せねばならぬことになつたのである。上記の如く米國が移住制限と產兒制限との二方法により、出來得るだけ人口の增加を防止したゝめ、勞働力の不足を來し、從つて勞働者の賃銀をいやが上にも引上げることになつた。物品の產出が多くなれば忽ち其價値が下落することは經濟界の原則であつて、勞働力も亦此原則を無視することは出來ない。今や米國の勞働者は世界最高の賃銀を得て居る。何等熟練なき自由勞働者でも最低三弗から五弗までの日給を得ることが出來る。工場に働く半熟練職工の日給は五弗乃至十弗である。大工とか煉瓦積職工とかいふ高度の熟練を有する者は二十弗の日給を得ることが出來る。私が米國滯在中シカゴ市の鐵工組合員がストライキを起したのであるが、それは彼等の日給十三弗を十四弗に增加せよとの要求が容れられなかつたゝめであつた。私は興味を以て每日新聞を見て居たのであるが、結局十三弗五十仙と

いふことで妥協が成立したのである。

雇主は勞働者に對して上記の如き賃銀を拂ふことを寧ろ當然のこと、考へて居る。何となれば賃銀が高ければ高き程勞働者の能率が增進することを知つて居るからである。

今一つ雇主對雇人の關係につき私共の參考とすべき點がある。それは雇主が會社の株を雇人にも持たせるといふことだ。これに就ても私は統計表を有して居るから左にこれを示すことにする。或會社に働いて居る勞働者にして同時に株主となつて居る者の數はこれを其會社に於ける勞働者總數に比して極めて少數であるけれども、或會社に於ては勞働者全部が多少の株を有して居るといふ例もある。左に掲げるのは雇人の總數に比して幾割の勞働者が株を所有して居るかを示すものである。

會社名	株主となれる使用人の割合
The U. S. Steel Trust	一割六分
Goodyear Tire & Rubber Co.	三割三分
International Harvester Co.	七割五分
Firestone Tire & Rubber Co	九割五分
Proctor & Gamble Co.	十割

言ふまでもなく、如何なる會社でも其株の半數以上を雇人に所有せしむるようなことはない。若し此の如きことをすれば會社の經營權を全部雇人に奪はれる虞があるからである。然し一部の株を廣く雇人に所有せしむることは君主專制政治から立憲政治に移つたようなもので、凡ての雇人に對して或程度の滿足を與へて居ることは何等の疑がない。斯の如くして會社は雇人の同情を得て居るのみでなく、顧客に對しても株の所有を許して居る場合が少なくないようである。要するに米國の實業は利益獨占主義を排して共益共榮主義を徹底的に實行して居るものと言ふことが出來る。これは無論米國人の聰明といふことに基因して居るのであるけれども、それは勞働者の數が少ないがため、雇主が否應なしに勞働者を優待せねばならぬようになつたといふことが最大の原因であることは私が既に述べた通りである。

我國の人口問題が如何に重大化しつゝあるかに就ては政治家も學者も比較的冷淡であるように思ふが、實際人口問題を離れて政治もなければ社會政策もない。私は先づ米國の人口と他の諸國とを比較して私の立論の基礎を示すことにする。左に示す統計は内閣統計局編纂の昭和四年度「列國々勢要覽」に據つたことを附言して置く。

各國人口の密度　（一平方キロメーターに對する人口數）

白耳義	二五九	和蘭	二三四
英國	一八五	日本	一六三

獨逸	一三七	伊太利	一三一
チェコ、スロヴァキア	一〇三	瑞西	九七
墺太利	七八	佛國	七四
葡萄牙	六四	支那	三九
米國	一六	布哇	一九

これによりて見れば我國は密度の高きことに於て世界中第四位を占めて居る。然し此數字だけを見ては我國が人口問題のため如何に窮狀に陷つて居るかを充分推測することは出來ない。單に一平方キロメーターといふても國土によりては多くの沃野を有する所があり、或は耕作不可能なる山地とか荒廢地を有する所がある。故に各國の耕地面積が全國總面積の幾割を占めて居るかを知らなければ、本當に人口問題の實狀を知ることは出來ないのである。私は今『列國々勢要覽』により各國が有する耕地面積の割合を示すことにする。密度の最も高き白耳義は全國土に對して五割九分といふ驚くべき廣大なる耕地面積を有して居る。和蘭の耕地面積は二割八分、英國は二割五分に過ぎないけれども、我國の一割六分といふに比較すれば遙に有利なる位地に居る。嚴密に人口問題を考へる時には人口の密度は人口と總面積との比較によらずして、人口と耕作面積との比較によりて決定すべきものであると思ふ。若し左樣でありとすれば人口の密度に於て我日本が世界第一であることは毫も疑なき所である。勿論我國に於て尙ほ耕作に用ゆべき餘地のあることは何人も認めねばならぬ所であるけれども、私共は又同時に白耳義、和蘭、英國に於ても尙ほ多少の餘地あることを考へなければならぬ。兎に角我國に尙ほ餘地があるとしても、これが我國の人口問題を緩和するに足るものでないことは明である。

人口の密度に於て(眞實の意味で)我國が第一位を占めて居るといふことの上に更に人口の增加率に於て驚くべき數字を示して居る。左に揭ぐる表は出生率と死亡率との差による自然增加と、往住來住の差による社會的增減とを加算したもので、人口千人に對する每年平均の增加數を示したものである。

日本	一三、七人	ブラジル	二八、九
露西亞	一〇、八	濠洲	二〇、一
諾威	一〇、七	加奈陀	二〇、一
伊太利	一〇、六	西班牙	八、六
和蘭	一四、五	希臘	七、六
米國	一四、五	瑞典	六、七
墺太利	六、三	英國	四、七
瑞西	三、五		

ブラジルを初めとして移民を歡迎して居る諸國に於ける人口增加率の高いことは決して不思議なことではない。唯和蘭が例外を示して居るのみである。然るに決して植民地として見るこ

との出來ない國々の中我國が人口增加率に於て最高位を占めて居ることは何人も愼重に考へねばならぬ問題である。

人口の增加は大和民族の發展であると考へたのは軍國主義旺盛時代が產み出した思想であつて現在に於ては到底實現の可能性がない。米國や濠洲は既に門戶を鎖して居る。ブラジルといへども永久に我移民を歡迎するものではないから、我國の人口問題は當然我國自身で解決すべきである。よし外國移住が可能であるとしても、年々增加する我國の餘剩人口を海外に送り出すことは經濟上から見ても輸送設備から見ても容易のことでない。米國は移住制限と產兒制限とによりて人口の增加率を十四人五分に止めて居る。一平方キロメーターに付き僅に人口一人を有する濠洲に於てすら人口の增加率を二十人一分に止めて居るではないか。德川時代に於ける政治家は鎖國政策を採用した結果人口問題を國內問題として解決した。貧乏人子澤山といふことは必ずしも貧乏人なるが故に澤山の子供を生むといふ意味に解すべきものではない。これは多くの場合原因結果を顚倒したもので、私は寧ろ子澤山なるが故に貧乏すると解釋すべきであると信ずる。これは國家の場合に於て殊に然りである。今や貧乏國、人澤山といふ眞理が事實となつて現はれて來た。私は凡ゆる政治問題も經濟問題も歸着する所は人口問題であることを確信して居るのである。

人々の中には資源の乏しきことが我國貧乏の最大原因であるかの如く考へて居る者があるけれども、私はこれに同意することは出來ない。資源は親讓りの財產の如きもので、有るに越したことはないけれども、ないからと言つて必ずしも其れが貧乏の原因とはならない。要するに各國の身代相應に其人口を調節さへすれば何れの國民でも相當富裕の生活を爲すことが出來る。私は渡米旅行の歸路布哇で二週間滯在したのであるが、布哇の生活狀態はこれを米國本土に比して少しも遜色のないことを見た。然も布哇には耕地の外に何等天然の資源といふものがない。布哇六島を合して其面積尙は我四國に及ばないのであるが、石炭もなければ石油もない。鐵もなければ木材もない。我國は幸にして水力といふ資源を有して居るけれども、布哇には是れすらない。彼等布哇の居住民は單に砂糖、珈琲、パインアップルを生產することにより、太平洋の樂園と稱せられる程の羨ましき生活を營んで居る。これといふのも彼等の人口問題が未だ急を告げて居ないからである。布哇に於ける人口の密度は一平方キロメーターに對し十九人であるから、これを米國本土の十六人に比すれば稍高いのであるけれども、これを我國の百六十三人に比すれば言ふに足らぬのである。又人口增加率から見ても

最近の統計によれば千人につき約十五人位であるから殆んど必配の必要はない。故に人口問題に注意さへすれば、資源に惠まれて居ないでも富裕なる生活をなし得ることは布哇の實例によりて明白にこれを知ることが出來る。

然し布哇の如き小領土に於ては人口の增加によりて影響を受くることが米大陸に比して著しく大であることは私が玆に附言して置かねばならぬことである。私が布哇を訪問したのは第一囘が二十五年前、第二囘が二十年前、第三囘が八年前、第四囘が本年であつた。二十年前に比すれば現在の人口は殆んど二倍に增加して居る。二十年前には住民の生活には何等黑い影は見えなかつたのであるが、人口が二倍となつた今日では多少の不安が見えるようになつた。太平洋上の樂園は單に東洋諸國の人民のみでなく、米國本土からも毎年幾多の移住民を誘致したのであるが、今や布哇は米國人に取りて安住の地ではないように思はれる。此頃米國本土に居る布哇移住希望者からホノルヽ商業會議所に就職の可能性があるや否やを問ひ合せ來たに對し、會議所は次の如き返答をして居るといふことを聞いた。

『現在は過去の如く容易に職業を得ることが出來なくなつたから、布哇に來らんとする人々は少くとも半年位の生活費を持參するか、若くはホノルヽに於て確實なる親戚を有することが必要である』。布哇の人口は前に述べたる如く未だ充分に發達の餘地があるように思はれるにも拘はらず、既に一部に於ては就職難の徵候が現はれて居る。米國の人口は一平方キロメーターに對し僅に十六人であるに拘はらず既に移住制限と產兒制限とを行ふて居る。濠洲の如きは一平方キロメーターに付き人口一人に過ぎないのであるけれども、尙ほ移住制限と人口制限を行ふて居る。我國が朝鮮人の移住に對して何等爲す所なく、產兒制限に對しても極めて煮へ切らぬ態度を取つて居ることは實に憂慮に堪へぬ次第である。

最後に述べねばならぬことは米國が外國貿易に於て殆んど獨立の位地を保持して居るといふ點である。最近の報告に據れば米國は全消費額の僅に七分九厘を外國に仰いで居る。而して每年外國に輸出するものは全產出額の八分五厘に過ぎない。換言すれば米國は國內に大なる市場を有して居るのだから、外國貿易を當にせずとも自給自足でやつて行ける國である。殊に先進國たる歐羅巴諸國との貿易は年々其割合を減ずるといふ有樣であるから、此等の國々に對して何等氣兼ねする必要もない。米國が政治的にも經濟的にも大膽にモンロー主義を唱へ得るのは全くこれがためであると言はなければならぬ。

私は決して外國貿易に反對するものではないけれども、國民

が餘り多く外國貿易を頼むようになれば、それだけ私共の生活は不安に陷らざるを得ないと信ずる。外國の顧客を頼みとするようになれば、詩人が言つたように人生苦樂依他人といふ悲慘な境遇に陷らなければならぬ。現在の如く何時でも關税の墻壁を高くすることが出來る限り私共は餘り外國貿易に頼り過ぎてはならぬ。外國貿易の原理は所謂有無相通ずるといふ點にある。同一物品を生産して無理に競賣を爲さんとするが如きは決して好ましきことではない。寧ろ私共は國民の消費力を增進するために勞働階級の生活程度を向上せしむるために努力すべきであると考へる。國民の消費力さへ增進すれば、私共は市場を外國に求めずとも、これを內地に求むることが出來る。米國の優越は實に此點に在るのである。人口問題の解決を外國に求むるのも間違であるが、外國の市場を當てにするのも大なる失策である。言ふまでもなく私は決して鎖國主義を唱へるのではなく、單に依頼主義を排せんとするのである。此點に於て現在の米國は確に私共に重要なる暗示を與へて居るように思ふ。

社會主義的蓄積

——ソヴィエット・ロシアの財政に就て——

鈴木武雄

一

マルクスは、『資本論』第一卷第七篇第二十四章の有名な『謂はゆる本源的蓄積』の叙述を結んで次のように言つてゐる——

「資本獨占は、その獨占と共に且つその獨占の下に繁榮せる生產方法の桎梏となる。生產手段の集中と勞働の社會化とは、それの資本主義的外殼とば一致し難き點に達する。この外殼は爆破される。資本主義的私有の弔鐘が鳴る。收奪者は收奪される。云々」(『資本論』第一卷改造社版七五六頁)

この言葉は餘りにも有名である。更に、その少し前に於て、マルクスは封建制度から資本制度への推移を述べて次のように言つてゐる。

「これらの方法(植民制度、國債制度、近世租稅制度、保護制度)は一部分は殘虐極はまる强力を基礎としてゐる。だが、それはすべて社會の集積的竝に組織的强力なる國家權力を利用して、封建的生產方法の資本家的生產方法への轉化過程を溫室的に促進して、その推移を短縮せんと計つた。强力はそれぞれ新社會を孕める舊社會の產婆である。强力そのものが一つの經濟力である。」(『資本論』第一卷前揭書七四六頁)

そして、このことからブハーリンは次のように述べて、ソヴィエット・ロシアに於ける社會主義の國家手段による建設を說明してゐる。

「一つの生產構造が他の生產構造に更代する過渡期においては、產婆は××的强力である。この××的强力は社會發展の『桎梏』を破壞しなければならぬ。また他方ではこの××的强力は、經濟的變革の原動力として働き社會の經濟構造を變更するところの、新しい形態の『集積的强力』、卽ち新階級の××をつくり出して、新生產關係の形成を能動的に促進しなければならぬ。このように强力は、一方では破壞的要因の役割をつとめ、他方では結合、組織、建設の力である。……そして國家權力がこの『社會の集積的及び組織的强力』なのである。この理由からして××的國家權力が經濟的變革の最も有力な槓杆なのである。」(ブハーリン『轉形期經濟學』佐野氏譯二三四頁)

で、我々は、ソヴイエツト・ロシアの財政の特質をその國の人達の考へに從つて規定するならば、先づ、資本主義社會から共産主義社會への過渡期に於ける一つの『本源的蓄積』の過程であると理解することはさして困難ではない。

然しながら、『本源的蓄積』とは、マルクスによれば、「資本主義的蓄積に先行する所の『本源的』蓄積（アダム・スミスのいふ『先行的蓄積』）、語を換へていへば資本主義的生産方法の結果ではなく寧ろ出發點たる所の蓄積」（『資本論』第一卷前掲書、七〇八頁）であり、「それが『本源的』たる所以は、資本と資本に照應せる生産方法との有史前期たる點に存する」（同上、七〇九頁）からである。

この歷史的な、資本主義的生産方法の出發點たる『本源的蓄積』は、資本の成立史にとつて絶對に見落すことの出來ない現實的過程であるが、然しそれと共に我々は、一度び成立したる資本の、從つて資本主義的生産關係の存續、發展の秘密をも見逃すことは出來ない。

マルクスは、剩餘價値を資本に再轉化することを單に『資本の蓄積』――『本源的蓄積』と區別して――と言ひ、また『擴大する規模に於ける資本主義的再生産行程』と名付けた。そして、この資本主義的再生産行程に就いて、マルクスは次のやうに言ふ。

「資本主義的生産行程なるものは、これを關聯的の行程として、再生産行程として觀察するならば、單に商品を生産し剩餘價値を生産するといふのみでなく、また資本關係それ自身をも、一方に於ける資本家と、他方に於ける賃銀勞働者との雙方をも生産し再生産するものである。」（『資本論』第一卷前掲書五六六頁）

だから、資本の蓄積は、擴大する規模に於ける資本主義的再生産行程は、資本主義生産關係の擴大再生産に他ならず、剩餘價値を不斷に資本化して愈々益々增大する剩餘價値の搾取を續けて行くところのものである。

若し、ブハーリンの言ふように、資本主義から社會主義への過渡期に於て社會主義的な『本源的蓄積』が行はれるものとすれば、同樣に我々は『社會主義的蓄積』の行程、卽ち『擴大する規模に於ける社會主義的再生産行程』の進行をも見落すことは出來ない。そして或る意味に於てはこの方がより重要である。* 社會主義的蓄積卽ち擴大する規模に於ける社會主義的再生産行程は、擴大する規模に於ける資本主義的蓄積が資本主義的諸關係を擴大再生産するに反して、社會主義的諸關係を擴大再生産する。

* 社會主義的な『本源的蓄積』のみを強調するのは、或る場合には寧ろ誤謬である。この誤謬は、後述するように、プレオブラゼンスキーが犯した。

二

ワグナー以後の『財政學』は、それ以前の『財政學』に比して、財政の職能を非常に積極的に規定してゐるやうである。例へば、ケネーは、彼の有名な『經濟表』の中に君主の收入支出卽ち財政を導き入れることによつて、資本主義的再生産行程中に於ける財政の位置を明確に示し

た。彼の『自然權論』の中には同様の思想が、財政は「社會の富の年々の規則正しい再生產並に分配の秩序に違反することが出來ない」（オンケン編『フランソア・ケネーの哲學並に經濟學著述集』）と云ふ言葉で誌されてゐる。

この資本主義社會の揺籃期に於て宣言せられた財政と資本主義的再生產行程との關係は、それが實踐的には當時に於ける封建的財政に對する新興產業資本の鬪爭の合言葉となつたために、其後に於ける完全なる資本家國家從つて資本主義的財政の確立と、並に現代に於ける國家の、社會に超越し然かもそれを呑み込まんとする巨大なる地位との結果、それに幻惑せられたワグナー以後の現代の『財政學』によつて完全に忘れ去られたのである。だが、それにも拘らず、ケネーは現代に於ても尙生きてゐる。國家の活動從つて財政の範圍がどれほど巨大となつても、財政は資本主義的再生產行程の忠實な服從者たることを止めるものではない。たゞ、自由競爭を生命とする產業資本——かかる產業資本主義的再生產行程から、大規模な獨占資本を基礎とする金融資本——かかる金融資本主義的再生產行程への資本主義的再生產行程の歴史的推移が、財政の職能を消極的なそれから積極的なそれに變ぜしむるのである。現代の財政が積極的な職能をもつてゐるのは、ワグナー以後の現代の『財政學』が殆ど共通に信じてゐるような、資本主義國民經濟の諸々の不合理不公平を『調節』する第三者としてではなく、實はそれがこの金融資本主義的生產諸關係の再生產のための重要なモメントとなつたからである。それは依然として金融資本主義的擴大再生產行程の忠實な奴僕たるに過ぎない。

ところが、現代の『財政學』はこのことに氣がつかない——一般に現代の『經濟學』がその先驅者達のなした粗朴率直な認識の遺産を忘れてしまつたように。そして、財政が恰かも資本主義的再生產行程を『調節』し『改革』し得るかの如き幻想を抱く。ワグナーの『財政學』が租稅の社會政策的職能を强調して租稅による分配問題の解決を主張してゐることは玆に言ふ迄もなく有名なことである。また我々は、イギリス勞働黨の財政理論家ヒウ・ダルトンが「財政は社會の最大利益のために貨幣を移轉することである」（ヒウ・ダルトン『財政原理』第一章）と言ふとき、彼がイギリス勞働黨と共に資本主義を調節し改革する積極的職能を財政に見てゐることを知るのである。そして、同樣な考へ方は、或はヨリ以上の國家主義的色彩を以て、我國の『財政學』をも支配してゐることは言ふ迄もない。

その結果、現代の『財政學』は、ソヴイエット・ロシアの財政——あらゆる大產業が國營化せられ、國家的管理と計畫とが大規模に實行せられてゐるソヴイエット・ロシアの財政、言ひ換へればその積極的活動範圍が曾て見ない程に擴大化せられてゐるソヴイエット・ロシアの財政——をも、その理論の適用範圍に抱擁してゐるかのようである。當のソヴイエット・ロシアの理論家達が其處に大きな區別をおいてゐるにも拘らず、現代の『財政學』は寬大にもこの區別を撤廢する。それ故に現代の『財政學』は非常に保守的であるにも拘らず、また或る場合には非常に急進的たることを妨げない。この點、現代の『財政學』は、現代の『經濟學』とは反對に、超歴史的な生命を惠まれてゐるもののようである。

だが、財政が結局に於てその社會の富の再生產の法則に從ふもの——

あるならば、そしてソヴイエツト・ロシアがその指導者達の言ふように、ブルジョア國家とは本質的に異るプロレタリア國家であるならば、* 彼處に於ける財政は資本主義的（わけても金融資本主義的）諸關係を擴大再生産するモメントであるに反して、此處に於ける財政は社會主義的諸關係を擴大再生産するモメントでなければならぬ害である。かくて現代の『財政學』の超歷史的妥當性は怪しげなものとなる。

＊これに就ては、我々は、レーニンを始めこの國の理論的、實踐的指導者達によつて數多くの説明がなされてゐるのを知つてゐる。例へば、この國の檢事總長であると云ふクルイレンコは、この國の憲法を註釋して次のように書いてゐる。「支配する階級の、敵階級××の階級的機構――これがあらゆる時代における一切の國家の××であつた。それと同様に、しかし壓倒的大多數者による貧弱なる少數者の××を基礎として、プロレタリアートは國家を建設する。最終的勝利まで『人による人の搾取といふことの最終的消滅と、階級的分裂も國家××もなくなるところの社會主義の確立される時まで』建設し防衛する。――ロシア社會主義聯邦ソヴイエツト共和國憲法第九條（改訂憲法第一條）は右のやうに言つてゐる。」（クルイレンコ『ソヴイエト法並國家の哲學的基礎』大竹氏譯一四八頁）

三

それなら、擴大する規模に於ける社會主義的再生産行程とは何であるか。

マルクスは、再生産を說明して言ふ――

「生産行程なるものは、その社會的形態の如何を問はず、連續的のものでなくてはならぬ。換言すれば、週期的に絶えず新に同一の各段階を通過するものでなくてはならぬ。一つの社會は消費することを止め得ざる如く、また生産することをも止め得ないのである。されば、社會的の各生産行程は、これをその不斷の關聯と更新の間斷なき流動との方面から觀察すれば、同時にまた再生産行程ともなるのである。

生産の條件は同時にまた、再生産の條件たるものである。如何なる社會も、その生産物の一部を絶えず生産手段に、新たなる生産の要素に再轉化することなくしては、絶えず生産し得るものでなく、隨つて再生産し得るものでもないのである。・・・・

生産が資本主義的形態を採つてゐるとすれば再生産も亦同樣である。」（『資本論』第一卷前揭書五五三頁）

マルクスは、此處で資本主義的な單純再生産を說明しつつ、同時にあらゆる社會形態に通じて必要な生活條件としての再生産一般をも說明してゐるのである。だが同時にまた再生産は常に生産の具體的形態によつて具體的に規定せられることをも指摘してゐる。「生産が資本主義的形態を採つてゐるとすれば」再生産も亦資本主義的再生産である。だから、生産が多かれ少かれ社會主義的な形態を採つてゐれば、再生産も亦社會主義的再生産である。そして擴大する規模に於ける社會主義的再生産は、かかる再生産が單純な規模で循環せしめられるのではなくて、シスモンデの所謂『螺旋形運動』に、即ちその基礎たる生産の

規模がより擴大化されて行くことを云ふのである。

擴大する規模に於ける社會主義的再生産は、それが社會主義的生産諸關係を擴大再生産するが故に、擴大する規模に於ける資本主義的再生産とは異るものであると云ふことは既に述べた。更により進んでこの兩者の差違を檢討しやう。が、我々は先づマルクスの次の言葉を引用しておかう。

「賃銀をその一般的基礎に、換言すれば勞働者によつて消費せられるところの個人的な勞働生産物の分前に還元して見よう。この分前を資本主義的諸制限から解放し、社會の生産力によつて決定せられ個人の完全な發展と云ふことによつて必要とせられる限度に迄、消費を擴大しよう。追加勞働及び追加生産物をば生産の現狀に於て社會の必要に應ずる再生産の不斷の擴大に必要なる比例に迄減少しよう。最後に、社會の働き得る成員が働き得ない成員に寄與しなければならぬ所の勞働の量をば必要勞働及び追加勞働に加へよう。すべてかうした諸操作の過程に於て、我々は賃銀の特殊資本主義的性質や、剩餘價値や、必要勞働及び追加勞働やを現實に廢除する。そすれば我々の前にあるのは最早これらの形態ではなく、その上にそれらが現はれるところのそして生産のあらゆる社會的方法に共通するところのその基礎である。」(『資本論』第三卷)

社會主義的擴大再生産行程に於ては、賃銀はマルクスの言ふ『資本主義的諸制限』から解放せられるであらう。謂ふ所の『資本主義的諸制限』とは、要するに勞働者の賃銀が勞働力の價値によつて決定せられること、言葉を換へて言へば商品としての勞働力の再生産に必要なる最小の生活資料たらしめらるる傾向のあることを言ふのである。そして資本蓄積の一般的法則は、特に不景氣及び恐慌の際に、産業豫備軍の捉けによつて屢々賃銀を最低限以下に低下する。

『勞働者の個人的消費に歸屬せられる勞働の個人的分前』の大いさは先づ『社會の生産諸力』によつて、次で『個人の完全な發展の要求』によつて決定せられるであらう。追加勞働は『再生産の不斷の擴大』と社會の、『働き得ない成員』の扶養とに必要なる最小限度に減ぜられるであらう。尙、災害に對する保險積立の設置に充てられる追加勞働の一定量も之に加へる必要があるであらう。かくて追加勞働は、資本家の個人的な消費、彼等の尨大な職員(家僕其他)や資本主義的支配の諸制度やの消費に充てられる部分だけ、減少するであらう。そして、擴大再生産の刺戟すらもが、剩餘價値の消滅によつて、制限せられるであらう。

しかし、社會主義的擴大再生産は、その原因が剩餘價値の最大額を獲得せんとする資本家の願望に存在するところの資本主義的擴大再生産とはまさに反對に、『社會の××に應ずる』やうになるであらう。最後に、社會主義的擴大再生産は、全體的計畫に基く生産の合理的統制をば資本主義的無政府におき代える。資本主義的擴大再生産に不可避的に隨伴した恐慌は、かくて廢除せられる。社會は、最早社會的勞働におびたゞしい不生産的浪費を知らなくなるであらう。……以上は大體ソヴイエット・ロシアの經濟理論家ラピツスとオストロヴイシアノフが彼等の共同著述『經濟學提要——經濟學並にソヴイエット經濟の理論』(佛譯、パリ、一九二九年、ビブリオテーク、マルキシスト、第八卷)に於て敘べてゐる所の社會主義的擴大再生産の一般的特質である。(同

書四一四頁―四一六頁)

このソヴイエット・ロシアの經濟學教科書は更に續けてから書いてゐる――

「人は、擴大する規模に於ける資本主義的再生產と擴大する規模に於ける社會主義的再生產との差違が頗る大いなることを見る。擴大再生產の過程にして一とたび資本主義の諸制約から解放せられた場合には、××××××は、勞働者の物質的條件の改善と勞働の成果の增大との宏大なる見透しが自らの前に開け行くのを見るであらう。擴大する規模に於ける社會主義的再生產は、××××の社會に近づきつゝ、全勤勞者の漸次的解放と、並に知的勞働と肉體的勞働との間に存する矛盾や賃銀の資本主義的形態や物質的不平等やの××とを意味するようになる。」(同書四一六頁)

私はここでソヴイエット・ロシアの人達の考へてゐる『社會主義』と『共產主義』との兩概念の區別に就て云爲する餘裕はない――右に引用したラピヅスとオストロヴイシアノフの教科書も社會主義的擴大再生產が『××××の社會』に近づくことを述べてこの區別を立ててゐるのであるが。要するに、ソヴイエット・ロシアの人達の考へ方、從つてマルクス主義に於ては、我々が所謂『社會主義』と呼ぶ所のものは『××××の最初の段階』と考へられてゐるようである。この點に就ては、マルクスの『ゴータ綱領批判』及びレニンの『國家と××』が詳細に說いてゐる。

之を要するに、社會主義的擴大再生產は資本主義的擴大再生產と全く異る。生產手段と勞働者の消費手段は最早×××の所有物ではなく、勞働者の搾取による剩餘價値の生產に役立つのではないから、社會主義的擴大再生產は『資本の蓄積』とは呼ぶことが出來ぬ。強いて蓄積と云ふ言葉を用ふれば、それはさきに述べたように『社會主義的蓄積』である。

これに就ても亦我々はマルクスの次の言葉を想ひ出す。

「啻に單純なる再生產のみでなく、また程度は一樣ではないが、規模の擴大されつつある再生產も、種々なる經濟的社會形態の下に見出される。ますます多く生產され、ますます多く消費され、隨つてまた、ますます多くの生產物が生產手段に轉化されることになる譯である。けれども、生產手段や、隨つてまた生產物や、生活資料などが、資本の形態を以つて勞働者に對立して來ない限り、右の行程は資本の蓄積たるものではなく、隨つて資本家の職分として現はれるものでもないのである。」(マルクス、前揭書五八六頁)

四

擴大する規模に於ける社會主義的再生產或は『社會主義的蓄積』の一般的特質並にその資本主義的蓄積と異る點は右の如くである。社會主義國家の財政はこの社會主義的擴大再生產に從ふところのもの若しくはそれを遂行するところの重要なモメントである。

次に、我々はこの一般的な問題の取扱ひ方から、ソヴイエット・ロシアに於ける具體的な經濟に移らう。

與へられた紙面の都合上ソヴイエット・ロシアの國營工業を例にとらう。其處には擴大する規模に於ける資本主義的再生產が存在するか、

それとも擴大する規模に於ける社會主義的再生産が存在するか、將又再生産の第三のタイプが存在するか。

ラピツスとオストロヴイシアノフは之に答へて言ふ——

「ソヴイエット・ロシアの國營工業には、社會主義社會と同樣に、『生産手段や、隨つてまた生産物や、生活資料などが、資本の形態を以て勞働者に對立してゐない』(マルクス)のである。故に再生産過程は、ソヴイエット・ロシアの國營工業に於ては、資本主義的機能ではない。第二に、我が國營工業に於ては、賃銀は、マルクスの公式に從つて『個人の完全な發展』の必要によつて決定されるには前途遼遠であるが、そして市場の原素的な諸法則の影響から尙免がれてはゐないが廣汎な範圍に於て國家、『社會の生産諸力の條件』を體現してゐる國家によつて、規定せられる。第三に、利潤は決して我々の擴大再生産の目的ではない。我々の擴大再生産は社會の必要を滿足することを目的としてゐる。そしてこの目的は我々の擴大再生産に於て意識的に遂行せられてゐる。資本主義制度に於ては、之に反して社會の必要の滿足は擴大再生産の客觀的結果たるに過ぎない。第四に、擴大再生産は、我々の國營工業に於ては、この國の社會主義的諸要素の鞏固化、プロレタリアートの經濟的基礎の鞏固化、勞働の成果の増大と發達せる社會主義への近づきに相伴つてのプロレタリアートの物質的狀態の改善を意味する。最後に、我々の國營工業に關しては、資本主義的無政府の活動と恐慌とは、全體的計畫を基礎とする合理的統制によつて制限せられ消滅せしめられる。」(ラピツス及びオストロヴイシアノフ『經濟學提要』佛譯四一七頁)

そして彼等は結論する。

「ソヴイエット・ロシアの國營工業に於ては、それ故に、擴大再生産は、その傾向から云つてもその社會的性質から云つても、擴大する規模に於ける社會主義的再生産、或は我々の間に於て言ひ慣れてゐるように社會主義的蓄積である。」(同上、四一八頁)

ソヴイエット・ロシアの國營工業は、既にレーニンによつて『徹底的に社會主義的形態』の企業であると規定せられた時から、その社會主義的性質は明かである。然かも、我々は此處に於ける——この社會主義的中樞に於ける『擴大する規模に於ける再生産』を見逃がしてはならぬ。それは、ソヴイエットの國營工業は結局利潤を儲けてゐるのだと云ふ起り易い誤解に對する有力な抗辯をなす所のものである。先の引用にあつたようにソヴイエット國營工業に於ては、「利潤は決して我々の擴大再生産の目的ではない。」と言はれてゐる。然しながら、このことは決して剩餘生産物や言葉の習慣的意味に於ける經營の『缺損』やに關してソヴイエット國家が無關心だと云ふことを意味するのではない。何故なら、ソヴイエット國營工業社會主義的中樞として殘存する資本主義的中樞の擴大再生産を克服するために社會主義的擴大再生産を不斷に行はねばならぬからである『缺損』せる社會主義工業は崩壞するであらう。そしてその周圍にある資本主義的諸企業に屈服しなければならぬことは當然のことである。

かかる社會主義的蓄積、社會主義的擴大再生産は、ソヴイエット・ロシアの財政に於ては、その收入の部に於ける『非課稅收入』として、その支出の部に於ける『工業化』の費用として、そしてその兩者の増大と

して現はれるのである。

五

レーニンはかつてソヴイエツト・ロシアの新經濟政策を説明する際に新ロシアには尚五箇の經濟形態——僅かしか商品生産でない所の殆ど自然經濟的な農民經濟、商品生産を目的とする農民經濟、私的資本主義、國家資本主義、最後に社會主義工業——の存在することを指摘しソヴイエツト・ロシアの建設的活動に際してかゝる個々の經濟形態間の鬪爭を注意すべきことを力説した。（レーニン『現物税の意義に就て』）擴大する規模に於ける社會主義的再生産は、かかる非社會主義的中樞に於ける擴大再生産との鬪爭であり、その克服である。この意味に於て、ソヴイエツト・ロシアに於ける社會主義的擴大再生産或は『社會主義的蓄積』は、ソヴイエツト財政の據つて立つ所の基礎であり、それを制約する所の法則である。それは恰かも資本主義的財政の原則が『資本主義的蓄積』の法則の上に立ち、それに制約せられるのと同樣である。

このことから、我々はまた、ソヴイエツト財政の本質に『社會主義的な本源的蓄積』のみを見ること、或はそれを强調することの誤謬を理解しなければならぬ。それは一見革命的ではあるが、然し社會主義的建設の長い道程を理解することが出來ずに、ソヴイエツト・財政に全能の力を振舞はしめようとする點に於て、『現代の財政學』の親愛な同志となる。この誤謬を當のロシアに於てさへ、かのブハーリンとの『A・B・C・』の共著者プレオブラゼンスキーが犯した。彼は、わけてもソヴイエツト・ロシアの小農民問題に於て、彼の『社會主義的本源的蓄積』の理論と政策とをばレーニンの『協同組合』の理論と政策に對立せしめたのである。蓋し、レーニンに據れば、ソヴイエツト・ロシアの農村協同組合は、それが單に集産的經營であると云ふ點で資本主義的經營と區別されるばかりでなく、また「それが國家に卽ち勞働者階級に屬する生産手段を以て、國家に屬する土地の上に打ち樹てられる場合には、社會主義的經營と何等差違なきものである。」（レーニン『協同組合論』）からである。社會主義的國營工業の擴大再生産——そこに於て農民の生産手段が資本家的商品としてでなしに生産せられる——が、農村協同組合の社會主義的經營を確保し、この普及發達をば農村に於ける社會主義的中樞の擴大再生産たらしむるのである。

社會主義的蓄積、社會主義的擴大再生産のもつ深奧な意義を理解しない者のみが、早急にも、その基礎の上に立たない財政手段の『全能』を信ずることが出來るのである。

かくて我々は、現代の『財政學』が財政を全能化することによつてそれに超歴史的範疇を與へようとする傾向とはまさに反對に、その一見積極的な財政的活動にも拘らず結局に於て財政そのものを否定する財政の實例をば、ソヴイエツト・ロシアに於て見るのである。何故なら、社會主義的蓄積——それによつてのみソヴイエツト・ロシアの財政は制約せられる——は、この國の指導者の考へによれば、外部からの何等の强制的『調節』を必要としない經濟體制への到達をその使命としてるるからである。

反國民政府運動の結成と其の尖銳化

大西齋

一

國民黨及び國民政府の、革命指導權の把持者としての存在が漸次確實なる安定性を實證しつゝあることは、最近の諸事實に徵して容易に看取することが出來る。その最も華やかなデモンストレーションと見らるべき第三次全國代表大會および孫文移柩祭の執行、もしくは、封建的殘存物の破壞運動として地方軍閥問題の解決の可能性を公示したこと等が、國民政府および國民黨現幹部派の求心力的な政權的基礎の安定を印象せしめる例證であることは或る程度の寛大なる傍觀者にとつて是認される所であらうと思ふ。尤も、革命作業の現段階が極めて鮮明を缺いた而して鈍角化しつゝあるブルジョア民主主義革命の結晶作用であることは否定し得ないが、然るが故に安定裝置の保障がより更に效果的であるとの見解も一個の論理たり得る。

現下の支那の政治傾向が新興ブルジョアジー國家の統一運動としての特質を加速度的に擴大してゐるものであることは、一昨年四月の南京政府建設以後の足跡のすべてが明瞭に物語つてゐる。國民黨および國民政府が建設時代の最高標識を決定せんがために過去二年半の間に開催した三つの大きな全國的評議會即ち財政會議、經濟會議、第三回全國代表大會は、彼等が近い過去において抱持してゐた社會革命的經濟政策に對し飛躍的な訂正を公約したものである許りでなく、支那を繞る資本主義列强に對して極めて普遍妥當なる協調條件を提出せるものであつた。更に、アメリカのケメラー委員會を招請することによりアメリカ型の經濟制度を支那に移植せんとする立案を造らしめてゐることなどは、その傾向を測定すべき最も顯著な傾斜角であ

つて、革命の星雲時代、卽ち國民黨が共産黨と提携してコミンテルンの支配的命令によつて動いてゐた時代の暴風的な行動を回顧して見れば、現在の情勢は餘りに無風帶的な靜止であつて言ひ得べくんば正しく對蹠的な轉換の跡を示してゐる。加ふるに最近東支鐵道（それはソヴエトが繼承せる帝制ロシアの唯一最大の侵略的遺産である）を中心にして發生した露支の紛爭は本質的な國家意識に立つてロシアに對し全面的鬪爭を挑んだもので、これらの潮流が指し示すところを熟視することによつて『支那は何處にゆく』かをほゞ見通すことが出來ると思ふ。かくの如くして、國民黨及び國民政府の政權的地位は漸次安定し現幹部たちの『穩健なる指導！』によつて、支那の國際水平線への進出は極めて豐富なる好望材料を展示するかに見へる。

それなら、現幹部派が築いてゐる王朝には洛陽人のこゝろを戰慄せしめる匈奴の群はゐないのか。その豪壯なオベリスクは全支那の地上を蔽ふほどの投影を彫りつけてゐるのか。彼等の革命指導權の下には支那大衆のマジョリテーを獲得することに成功してゐるのか。これに對する正しい解答を引き出すため、支那に於ける現下の社會思潮の全野を展望して見る時、そこには恐るべき敵の陣營がひし／＼として彼等の身邊に逼りつゝ、あるのを見出すであらふ。

その匈奴の正體は何者であるか。匈奴は必ずしも長城の北からのみは來ない。いふまでもなく地層の底に潛在する無氣味なる思想的地震帶である。

それは二つの類別に分たれる。一は「より支那的な支那の再現の夢を追ふ」ところの「より支那的」な反動派であつて、他は現幹部たちそのものゝ反動を打ち倒さんとするところの曾つては彼等の「僚友」であり今は「追放した政敵」である左翼國民黨、および中國共産黨である。この小論文の目的はその後者について少しく檢討を試みんとするものである。

二

先づ共産黨について說きたい。

中國共産黨の存在は支那において正しく彗星的出現であつた。忽ちにして現はれ、炬の如き光芒を描き、而して忽ちにして消えた。

支那における共産主義の開拓者は陳獨秀および李大釗である。十年のむかし、陳獨秀は北京大學內にマルキシズム研究を目的とする極めて小規模の學術團體を組織し、自らこれを指導した。この微力なる學徒の結社は、陳獨秀が北大を追はれて上海に去つたことにより久しからずして解散してしまつたが、そ

れは揣らずもマルキストの揺籃となつた。揺籃を出た青年等のゆくところ共産主義思想は水の如く隨所に擴がり、そしてその分散的勢力は、一九二二年春、上海において中國共産黨を結成するに至つたが、自己崩壞作用に疲れて最悪なる受難時代にあつた國民黨が再生運動として聯露政策を採用した所謂「政策飛躍」を轉機として國民黨に合流した。一九二四年一月である。これにより共産黨幹部は國民黨の主要なる地位を占め、隨つてコミンテルンは意のまゝに國民黨を指導し且つ支配した。然るに國民黨の長江進出以後、共産黨および共産黨を支持した左翼國民黨と國民黨正統派(自ら斯く稱し、孫文を繼ぐものと宣稱する)との抗爭は當然生ずべくして生じ、南京、武漢兩政府の對立となるに及んで遂に正統派の還元運動を刺戟し、一九二七年四月の上海の反共産クーデター及び同年冬の廣東コンミユーン彈壓の二つの武斷的行動をもつて共産黨の殲滅を敢行するに至り、これと共に聯露政策も忽ちにして抹殺さるゝ所となつた。かくて共産黨は流離四散し、左派も亦た國外に逃亡し、革命指導權は完全に正統派によつて獨占され、其の指導原理は合流以前の不鮮明な色彩に還元して、次第に右傾化を示すに至つたのである。

國民黨および國民政府は、あらゆる方策によつて共産黨の擡頭と再生運動を封じてゐるので、現在におけるその活動は何等見るものがない。唯地層下における潜行運動によつて辛うじて生命力を持續してゐる。

彼等の明日は如何」これは大きな命題である。然し、過去における驚異すべき行動を想起すれば、追放による崩壞が決して無機物的死滅を意味するものでないことは何人にも判斷し得られる。

三

中國共産黨は、その失敗のゝち、過去における指導者のすべてを追ひ、發條の如き彈力性を有つ年若い闘士を幹部として、陣容の立直しを實行した。最近における業績の最も顯著なものは昨夏上海の郊外において開いた第六回共産黨大會である。この大會に決議された重要議案の記錄は「政治決議案」と題した祕密文書として頒布されたが、この議事錄は今日において中國共産黨が抱持する革命戰略及び指導原理を宣明したもので、極めて重要な性質を有する。この小論は不幸にして詳細にこれを紹介し批判する自由を有しないが、左に少しく大要を摘記して見たいと思ふ。

一、先づ支那革命の本質的檢討において、コミンテルン執行

委員會第七八九總會が支那革命の現段階は反帝國主義型のブルジョア民主主義革命であると測定したことに同意する旨を述べてゐる。即ち、支那大衆の上には二つの上層建築がのしかゝつてゐる。一つは列強帝國主義の重壓であり、他の一つは中世紀的殘存物たる封建的軍閥（明らかに主として蔣介石を指してゐる）である。ブルジョアジーはこの二つの障碍に反撥するよりも寧ろその依存的存在たるに甘んじ、進んでこれに迎合し、これと妥協した。今日の革命指導權はこれらのブルジョアジーによつて把握されてゐる。プロレタリアートは必ずこれを打倒してヘゲモニーを達成しなければならない——と主張してゐる。

二、現在の革命工作の實行方法としては、國民政府の打破、外資による事業の放逐その他十個のスローガンを列記してゐる。

三、農民政策に關しては最も、情熱に充ちた言葉をもつて綴つてゐる。即ち國民政府は全人口の八十パーセントを占める農民を獲得することに成功してゐない事は明瞭である。共産黨は全力を擧げて農民をリードし自己の影響下に引き入れなければならない——と述べ而して、如何にして農民を武裝せしめて革命戰線に動員せしめるかの方略について明細なるテーゼを造り、農民委員會の組織による農民の指導と救濟を計るべきことを主張してゐる。

四、勞働運動に對する任務としては、從來の強制主義を、訂正して、共産黨を、勞働大衆の最尖端に立つ僚艦たることを知らしめることにより、この大衆の獲得を計るべき方針を告げてゐる。

傳へられる所によれば近く第八次共産黨大會を支那の何れかの地において開會する計畫を進めてゐるらしい。第七次大會當時に比し國民黨及び國民政府の右傾化の斜角がより顯明となつてゐるだけ、今次の會合において、これに對する敵意と反動が如何に敏感に反映するかは極めて興味ある問題である。

最近十年の支那の思想的戰野は、一九一九年の五四運動と一九二五年の五卅事件の二つの國民運動によつて斷然たる躍進の劃線を畫き、この二つの轉換期によつて支那の社會的諸相はそれ自體が革命的な轉身を試みた。前者は共産黨新生時代の產物であり、後者はその活躍時代の所產である。斯く見るとき、近代支那のあらゆる社會運動の始原を培養し、而してそのトップを切つて進んだものが共產黨であつて、彼が歩いた足跡が若き支那にとり極めて深い意味を有するものであることは何人にも思考される。然るに、何故に斯く脆く崩壞し、見る影もないまで

に叩き伏せられるに至つたか。
　その根本的な弱點は、指導方針が餘りに急進に過ぎ無思慮なる小兒病的行動を制動すべき反省を忘れたこと、及び、指導者に人材を缺き然もその多くが純粹の勞農階級出身でなくて機會主義的もしくは投機主義的インテリゲンツィアであつたことの二つに存したものではあるまいか。共産黨は最近に至つて、この弱點に想到したと聞く。かるが故に、彼等の再整運動による單獨戰線（國民黨に依存することなき）への進出の將來は可なり注目すべきものと思はれる。

四

　左翼國民黨は、共産黨と合流せる當時において共産黨の政策を支持したがため、正統派の武斷的命令によつて共産黨と共に中央の政治圏を追はれ、今尚ほ或者は外國に亡命し、或者は國内に隱れて現はれず、その能動的勢力は強大でない。
　其の主要なる人物は宋慶齡、汪精衞、陳公博、甘乃光等である。今春南京で開かれた國民黨第三次全國代表大會は後の二名に對して永久除名を宣告し、汪精衞に對しては「嚴重なる警告」付で漸く中央執行委員の一椅子を與へた。彼は今尚パリに生活し、あたかも祖國を忘れたかの如くである。宋慶齡に對してのみは、孫文の未亡人の故でか否か、從來通りの資格と地位を與へた。彼女は一九二七年夏以來モスコーに去つて同地に暮し、今年五月、孫文の移柩式に參列するため初めて歸國し、目下上海に在る。
　殘存する左翼國民黨は何等の組織も統制も有しない。各自が小黨を結んで分立し、排多的に獨自の見解を主張することにより自ら高うしてゐる。隨つて、その叫ぶところは同じく現幹部派に對する攻撃であるに拘らず、敵を脅畏せしむべき燃燒力は極めて弱い。
　彼等の諸勢力のうち、色彩が最も鮮明で、ラディカルなものは宋慶齡である。他はその傾向に多少濃度の差はあるにせよ、本質的にプチブルジョア的要素を多量に含有してゐる。就中、第三黨の組織を企圖せんとしてゐる陳公博の如きは「單に僅かなる改良意見を有する」ブルジョア革命家のカテゴリーに入るべきもので、其の指導理論も今に至つては甚だしく鈍角的である。
　左翼國民黨の共通せる缺陷は、理論の根據が薄弱なることである。かるが故に、彼等は國民黨現幹部より敵視されてゐるのみならず共産黨によつて常に冷笑の的とされてゐる。隨つて、若し彼等が、國民黨もしくは共産黨に對抗すべき一個の體系的存在たらんとするには、先づ分散せる諸勢力の結成と、共調的理論の整備を完成しなければならない。然らざる限り、彼等は永遠に「餓えたる思想家」でしか有り得ないであらう。

緊縮政策と農村問題

高橋龜吉

濱口内閣の見解に由ると、我が國現下の「經濟國難」を打開する道は、「國民經濟を立直す」外ないが、その唯一の方法は、所謂緊縮政策を敢行して、平價金解禁を出來るだけ早く實現することである。此のため、國民は、一時（？）不景氣のため少からぬ苦痛を蒙るであらうが、我が經濟の立て直しのため、上下一致して、此の難局に耐え忍ばねばならない、と。

我が經濟の立て直しのためには、果して、濱口内閣の云ふが如き犧牲を、國民の大多數が荷はねばならないであらうか？！筆者は先づこの根本點に於て見解を異にする。しかし、こゝに、特に問題としたい點は、それが、農村大衆に、理不盡極る最大の犧牲を荷はすことゝなり、それでなくてすら已に疲弊の極に在る農村を、愈々破綻の淵に押しやることに就いてゞある。以下その所以を詳叙するであらう。

一、緊縮政策及金解禁と農民の打擊

端的に問題の核心に觸れるため、濱口内閣の緊縮政策及び平價金解禁策の結果が、我が農民に幾干の大犧牲を重課するものなるかを、先づ第一に明かにする。思ふに、その重なるものは、左の諸點である。

(1)平價金解禁のための生産品の値下り毎年約一割半から二割
(2)同上のため農民の借金負擔の重荷すること約一割半から二割。

(3)緊縮政策のため治水、道路、農業助成費等の削減何千萬圓。
(4)緊縮政策のため土木、鐵道その他の中央及地方費中止乃至削減のため、莫大なる農閑期勞働の失職。
(5)以上諸原因のための農村の打撃の結果、地方銀行の資金回收難。從つて起る金融難に基く各種の打撃。

顧るに、我が農産額は、別表の如く年額三十三億圓内外である。然るに、爲替相場四十三弗のものが金解禁の結果、平價(四十九弗八五)に戻るとせば、ために起る不景氣――物價下落と云ふことを算外に置くも、即ち、爲替關係のみの物價下落を見ても、大體に約一割半である。果して然らば、これだけで、農民は年々約四億九千五百萬圓の收入減を強ひられるわけだ。

我が農産品年額表

類	生産全額（單位百萬圓）昭和元年	昭和二年
米	一、八三六	一、七六四
麥類	三〇二	二七四
繭	六六一	四九七
以上小計	二、七九九	二、五三五
食用農産物	二二九	二二八
果實	七八	七五
蔬菜及花卉	二五二	二四九
工藝用農産物	一一四	一一一
緑肥用作物	三五	二八
製茶	三三	三一
合計(其他共)	三、五四〇	三、二五七

(備考) 本表は農林省統計に據る。

尤も、農産品價格の下落と同樣に、他の物價其他の農家支出が低下すれば差引トン／＼であるが、税金その他容易に低下の見込なき支出多き上に、繭、米、麥等（それが農産額の大部分を占むること表示の如くである）の大商品は、金解禁の影響を最も鋭敏に感ずるものなるに反し、農家用品たる農具、味噌、醬油その他の日常品の下落は、最も後れるものである。斯樣なわけで、農産物價下落のために蒙る農民の打撃は相當期間續くものと考へねばならない。

之に關連して農民のために一言注意を喚起して置きたいことは、我が生絲業者が、金解禁の打撃を最小化するために、その斷行を、手持原料繭の無い時、即ち四五月頃に決行されたしと要望し、政府又之れを容れる意向のあることである。しかし乍ら、斯くの如きは、金解禁の我が蠶業に及す打撃につき、その負擔の全部を、夜の目も寢ずに働きつゝある養蠶家に轉嫁して、資本家たる生絲業者の負擔を免がれしめんとするに外ならない。しかも、斯くの如き蟲のよいことが、堂々と、我が經濟界及政界に於て論ぜられつゝあるのである。以て、農民の利害が、如何に公然と蹂躙されてゐるかの一端を伺ふに難くないであらう。

しかも、平價金解禁に由る生絲業者の打撃は一度で濟む。そ

れ以後は、原料繭をそれだけ安價に仕入れることに由つて、その打撃を農民に轉嫁し得る。だが、農民は之を他に轉嫁する途なく、累年その打撃を受けねばならないのである。換言せば僅か一囘の仕入繭だけの損（一年中には春蠶、夏蠶、秋蠶の三つがあるから、その中の一期分だけでよい）に過ぎない生絲業者に對しては、その損害を免がれしむるに汲々たる政府が、毎年永くその損失を負擔せねばならぬ農民に對しては、何等の考慮を拂はざるのみならず、重荷に小附けのやうな氣で、當然受くべき生絲業者の損失まで、農民に轉嫁しようとしてゐるのである。讀者は、之に由つて、政府の農民無視の態度の如何に徹底的なるかの一班を伺ひ得られるであらう。

平價金解禁が農民に及ぼす打撃は、叙上の如き農産品の下落だけではない。その外、平價金解禁は、借金の負擔を一割半乃至二割方重くする。例へば、等しく百五十圓の借金でも、米價が三十圓の時は、米五石で返濟出來るが、二十五圓の時は米六石を返濟せねばならぬ。それだけ、農民の借金の負擔は增大したわけだ。然るに、農民現在の借金の多くは、物價の高價なりし大正八九年頃以降のものが多く、從つて、金解禁のことなくとも、農民は已にその借金の負擔の增大に喘いでゐた。例へば、群馬縣の一農家は、大正八年に肥料（日本人造肥料會社の星印一號）二叺を當時の値段一叺七圓三十錢で掛買し、爾後、最近まで日步五錢の利子で延滯してゐた。かくて、最近に至り、その元利は（利子は少からずマケさしたが）二十八圓に達したが、現在の同上肥料の時價は一叺三圓五十錢である。即ち、大正八年に於ける肥料一叺の借金は、今日は元金だけでその二倍、即ち二叺を返濟せねばならず、之に利子を加へると四倍の四叺を返濟せねばならないのである。斯樣にして、少からぬ借金を荷へる農民は、已に、從來に於て、物價下落のため、その借金負擔の加重に疲弊してゐたのである。

然るに、いま、平價金解禁のため、約一割五分乃至二割方の物價下落を强ひられ、それだけ、借金の負擔が更に增大することになるのである。顧るに、我が農民は多額の借金を背負つてゐることに於て有名である。その金額が幾何に達してゐるか、之を適確に計算した資料に缺けてゐるが、農林省發行の最近の「本邦農業要覽」に由ると、大正十四年末現在の勸業銀行及全國農業銀行の農業貸付總計は四億六千四百五十萬圓である。又全國信用組合の推算農業貸付高は四億五千五百八十五萬圓である。以上明知し得るだけで約九億二千萬圓だ。その外に、農家は各種の方面から借金してゐる。例へば、明治四十五年大藏省理財局の調査せる「全國農家負債調」に由れば、左表の通りで

ある。

借入先別	金額	百分比
勸業及農工銀行、北海道拓殖銀行	七六、六〇一、六七〇圓	一〇・二七%
其ノ他ノ銀行	一三一、三六三、二二六	一七・六三
保險會社	六三八、七一九	〇・〇九
産業組合、報德社其ノ他ノ團體	二一、八二一、九七八	二・九二
貸金會社及個人貸金業者	一五一、一四五、六三九	二〇・二六
質屋	九、三八一、一〇七	一・二六
商業者	一二、三三六、一六六	一・六五
賴母子講及類ノモノ	六三、九一〇、〇〇五	八・四三
私人	二六七、九二四、四七九	三五・九一
其ノ他	一一、九一〇、三一二	一・五九
合計	七四八、〇三二、三二一	一〇〇・〇〇

いま若し、これ等の借金が、何れも、前記の勸業銀行及農工銀行のそれ並みに增大してゐるものと假定せば、現在（大正十四年末）の農家負債高は、實に約四十億圓の巨額に達する。又、全國信用組合のそれと勸業及農工銀行の農業貸付合計なみに增加してゐるものとせば、その增加率は九倍三割五分であつて、即ち農民の負債現在高は六十九億八千五百萬圓となる。之に由つて、大體、農民の負債高は、約五十億圓内外あることが分る。果して然らば、その一割五分の負擔增大は實に七億五千萬圓である。之に前記農産額の損失年額四億九千五百萬圓を加算せば、平價金解禁のため、我が農民の蒙る打撃は、當初一ヶ年のみで實に十二億四千五百萬圓の巨大の額に達する。之を、我が農家數約五百五十五萬戸に振當てれば、一戸平均二百二十四圓餘の打撃である。平價金解禁の農民に及す打撃の尠少ならざることを誰しも認むるに吝ならぬであらう。

然るに、金解禁のため、農民の蒙る打撃は以上に止らぬ。金解禁準備のための所謂「緊縮政策」のため、農業經濟の進歩開發のために必要なる治水、道路費、及び排水事業奬勵費、肥料改善費等等の多くの國家施設を削除せられ、その年額何千萬圓に達した。又、從來、農民の少からぬ數は、その農閑期を、これ等の土木事業、又は鐵道、港灣事業等の勞働に從事し、以て、その家計を助けたものである。現に、農林省調査の「農家經濟調査」に由ると、大正十年に於て、小作及自作農の、農業以外の收入は、全體の一割五六厘に達するが、小作農に於ては、その六割五分四厘までは、勞働賃銀收入である。然るに、いま、財政の緊縮政策は、小農のそれ等の仕事をも奪つて了つたのである。

更に、以上の如き農家の打撃の結果、農村の金融は益々行詰を大にする。已に、今日に於てすら、これ迄の米及繭の下落で、地方銀行、農業倉庫等の貸出は、それ等擔保品價格では不足し

到底、その借入金を返濟し得ざるものが尠少でなく、ために、貸出の回收は異常の困難に陷つてゐる。現に、某縣の如きに於ては、從來、その縣農工銀行の頭取を、政友と民政派と熾烈な競爭をして爭合ひしものが、以上の如き貸金回收難のためか、最近に於ては、兩者互に相手にナスリつけて頭取となるものなく、ために、已に約半ケ年間、無頭取の狀態に在る。以て、地方金融難の狀を推知し得るであらう。ところで、斯かる金融難は、農民にとつては二重の大打擊である。卽ち、一方にはそのため、繭、米その他農產品の賣價が不必要に低落を强ひられ、一方には、肥料其他の掛買が困難、又は割高となり、且つ、借金利子が引上げられるのである。

二、農民を無視した善後施設

以上の如く、平價金解禁、及びその準備行爲たる緊縮政策が、農民に與へる打擊は甚大である。之に對し、政府は、何等かの救濟策、緩和策、その他の善後策を講じつゝありやと云ふに、今日迄のところ、毫も、その意志あることを發表してゐない。

然らば、濱口內閣は、金解禁及緊縮政策の斷行に伴ふ打擊に對し、何等の救濟的、乃至は緩和的善後策を一般に講ぜないのか、と云ふに決してさうではない。現に、銀行家に對しては、公債整理の名に由つて、公債市價の下落を阻止し、以て、銀行家の損失(公債の約半分は銀行所有)を緩和することに全力を擧げてゐる。又、產業資本家に對しては、已に關稅調查會を設けて、金解禁の打擊を保護關稅に由つて救濟すべく、着々と準備を進めてゐる。又、都市勞働者に對しては、國庫から半額を補助して、失業救濟事業を起すことになつてゐる。だが、已述の如く、多大の打擊(金解禁のため、最大の打擊)を蒙る農民に對しては、何等の善後策も施さうとはしてゐないのである。

若しも、濱口內閣が、多少なりとも、農民の立場を考へるならば、財政緊縮に由つて捻出する一億圓內外の金を以て、農村の租稅負擔の輕減に全力を擧げて然るべきだ。現に、民政黨は在野時代に、義務敎育費の國庫負擔と消費稅の減廢とを公約してゐる。これ等は金解禁のことなくとも、農村の租稅負擔を輕減すべく約束したものである。然るに、いま、金解禁のため、農民に、已述の如く最大の打擊を與へながら、農民自らにも多大の犧牲を負はして緊縮した財政の結果を、農村負擔の輕減に振向けず、その殆んど全部を以て、銀行家救濟の公債の整理に當てんとしてゐるのである。

なる程、その名目は、國の借金を減ずると云ふ美名であるが筆者の已に他の個所(經濟往來七八月號參照)に於て繰返し指摘

せる如く、生産事業のための公債増加は、毫も、財政上憂ふるに足らない。又、此の金解禁と云ふ非常の場合に、多數農民の苦痛を犧牲にして迄、至急公債を減少せねばならぬと云ふ財政的理由は毫もない。現に、井上藏相自ら、僅か一年前には、特融に由る遊資堆積の對策として、政府の新規國債市場公募の必要を認めてゐる(日本評論社「現代産業叢書」第二卷一〇頁)。にも拘らず、いま、銀行及藏相等が、切りに、公債整理の必要を力説せるわけは、然らざれば、公債市價の著落のため、銀行が多大の損失を蒙るからである。(例へば、我が銀行は、國債約二十五億圓、地方債約三億八千萬圓、合計約三十億圓近くの公債を所有してゐる。それの一割の下落は三億圓の損失である。)

斯く、此際、公債整理を必要とする第一の目的は、之に由つて、公債市價の下落を喰止め、以て、銀行の打撃を少くせんとするに在る。現に、公債整理要望の聲が起り始めたのは、昨年秋、銀行家が金解禁即行を決議して、公債市價が著落せる以降のことであつて、それ以前は、寧ろ、公債の増發を要望してゐたのであつた。然るに、濱口内閣は、財政緊縮に由つて浮ばせたる財源の殆んど全部を擧げて主として銀行救濟目的の公債整理に振向けながら、農村負擔の輕減となるべき公的の義務教育費國庫負擔は、こゝ兩三年實現困難なりとしてゐるのである。(七月三十日時事新報)。

更に、失業者救濟について見る。政府の所謂「失業救濟」案は、案全體としても單なる謂ひわけ的の子供だましであるが、その上、その施行地は「東京、大阪、神戸、横濱、名古屋の六大都市及び其他の重要都市並にその屬する府縣とする」と限定されてゐる。即ち、徹頭徹尾都市勞働者を目當としたもので、農村地方の勞働者のそれについては一顧も與えてゐない。だが今日、我國失業問題の重點は農村の人口過多に還元される傾向に在る。都市失業者の多くは歸村し、農村自らも多大の失業者を出してゐるからだ。加ふるに、今回の緊縮政策に伴ふ失業者も主として農村地方に在る。蓋し、緊縮のため事業の中止に接した大部分のものは、河川費、道路費、鐵道、港灣等、專ら、地方勞働者の失業を伴ふものであるからだ。されば、一體ならば、緊縮政策に伴ふ失業對策は農村地方に主力を注ぐべきであり、尠くとも都鄙一樣たるべきである。にも拘らず、農村のそれは上述の如く一顧も與へられてゐない。

以上に由つて、農村の利害が、如何に踏んだり蹴つたりされてゐるかを誰しも看過し得ないであらう。しかもその理由は簡單である。都市や銀行や産業資本家は、少しの損失と苦痛でもワイ／＼騷ぐが、農民は鈍感で、默々として苦痛を甘受するか

らである。だが、神經過敏の指先に於ては小傷も痛苦が大である。しかし内出血の如き生命に關する打撃も痛苦を訴ふることは小である。だがその故に、内出血を放置せば生命を奪はれるであらう。いま、農民は、已述の如き大打撃を受けながら、鈍感にして何事も訴へてゐない。その故を以て、之を、叙上の如く放置するに於ては、他日、農村經濟が又立つ能はざる迄に疲弊して、我が經濟は此の點より致命傷を受けるに至るであらう。

三、金解禁と農民の立場

扨て、金解禁は農民に第一項の如き打撃を與へながら、しかも、その打撃に對する善後策は第二項の如く農民を全然ノケ物にしたものである。然らば、金解禁は、此際、特に、農民のために必要であるかと云ふに、決してさうではなく、金解禁未了のため最も大なる苦痛を蒙るものは、銀行家、商工業者の順であつて、(その理由は紙面の制限上之を省く)農民は、特に之と云ふ目立つた不便は感ぜないのである。然るに、その農民が金解禁最大の十字架を荷せられ、金解禁のため最も多く救はれる銀行業者、商工業者は、出來るだけその打撃を小化せられ、且つ、それに對し各種の救濟策を受けてゐる。不公平も又極まれりと云はねばならぬ。

更に、平價金解禁の結果、農民は本論第一項の如き甚大なる打撃を受けるが、然らば斯くの如き苦痛は、國民一般すべてその犧牲を一様に荷つてゐるのであるかと云ふに、之れ又決してさうではない。此間に於て、平價金解禁に由り、却つて、約一割半から二割方利益する階級があるのである。即ち、

(イ)銀行家(金利の騰貴と貨幣價値の騰貴で利益する)

(ロ)各種の貨幣資本家(公債及社債の持主、銀行預金者、金貸業者、その他の債權者)

(ハ)官公吏、將校級の軍人、恩給生活者、その他の月給取階級(但し銀行會社のサラリーマンは、不景氣のためボーナスの減少、昇給の停止等で差引利益はないであらう)

しかも、之れ等の階級は、平價金解禁のため、何等の犧牲をも課せられないのである。加ふるに、その殆んど全部は、直接に産業の第一線に立つて働く階級ではなくて、寧ろ、投下資本の利子に遊資する階級か、又は産業の第二線以下の安全地帶で働く人々であつて、社會的に云へば、何等特別保護の必要なき社會層である。にも拘らず、濱口内閣の平價金解禁及び、緊縮政策に於ては、それ等の階級に利益を與えんがために、産業の第一線に働く、最も社會的保護に値する人々が犧牲に供せられる。とりわけ、我が農民は金解禁に由つて、直接間接殆んど得

るところなくして、しかも、最大の犧牲を荷はされるのである。

我が農民如何に温厚寛大なりと雖、安んぞ、斯くの如き理不盡極る政策を甘受することが出來ようぞ。必ずや、來る總選擧に於て、斷乎として立つて、自己の利益を保護し、資本家偏重の濱口内閣の緊縮金解禁政策を粉碎するに違ひないであらう。

然らば、農民は、金解禁問題に對し、如何なる政策を主張すべきか。若し、平價金解禁ならば、以上の如く、そのため利益を受くる資本家債權者に一割五分内外の一時的資本課稅をなして、それで以て、農民其他の債務者の損失を補償すべし。官公吏軍人(月給百圓以上の)の月給を一割半以上減ずべし。郵便電信鐵道瓦斯、水道、電燈の料金及び專賣局の煙草、鹽、等の代價を各一割半乃至二割方引下ぐべし。農民負擔の租稅を一割五分乃至二割方引下ぐべし。斯くしてのみ、平價金解禁及緊縮政策に基く犧牲に對する公平は、尠くとも政府關係に於て保たれるであらう。

だが、斯くの如き公平をやつては平價金解禁は不可能だ。農民が其の大部分の犧牲を默つて荷つて與れなくては、平價金解禁は到底出來ないのである。ところで、濱口内閣の諸公や、資本家連は、平價金解禁は大した苦痛を國民に與へることなしに出來ると公言してゐる。その意味するところは、思ふに、財界に金融恐慌を起させないと云ふに止り、農民の苦痛なんか、全く眼中に入れてゐないものらしい。彼等は、初めから、農民の利益を踏臺にする計算に於て、平價金解禁を目論んでゐるのである。

兎にも角にも、農民が平價金解禁の大犧牲を默つて忍ばない限り、平價金解禁は不可能だ。然らば、農民が正當に自己の利益を擁護することは、金解禁を阻止することになるか、と云ふに決してさうではない。農民にも誰にも、殆んど犧牲を荷はすことなしに、金解禁を斷行し得る方法がある。それは即ち、平價切り下げに出る金解禁の斷行である。若し、政府が直接間接爲替相場に人爲策を施さねば、我が爲替相場は大體に四十弗内外に落付く筈である。平價切下の金解禁とは、此の爲替相場を基準にして、我が貨幣法を改正し、以て、金の輸出入を自由にすることを意味する。此の方法に由れば、最も公平に、而かも國民に殆んど何等の苦痛を與へることなく、金解禁を斷行することが出來て、しかも、濱口内閣の云ふ「我が經濟の立て直し」が最も效果的に出來るのである。

然るに、濱口内閣や政友會が之に反對し來れる所以は、專ら爲政家の都合及資本家階級の利益と立場のみを中心にして考へ、大多數農民(勞働者及び中小商工業も同樣であるが)の立場

を、殆んど無視してモノを考へてゐるからである。

四、緊縮政策と農民の立場

最後に、濱口內閣の云ふ所に由ると、我國はいまその收入以上の消費をしてゐる。之れが經濟國難の病であつて、我が經濟の立て直しのためには、消費の一大節約に由つて、此の收入以上の消費を克服せねばならない、と。いかにも、我か國がこれ迄、國力以上の消費をして來れることは事實であつて、現に筆者などは、數年前から、我が經濟が寶喰的狀態に在ることを指摘し來つた。しかし、それは、國民一般がさうであると云ふのではない。就中、農民に此の上の消費節約餘地大なりと云ふのでは決してない。

元來、我國がこれ迄、その生產以上の消費をし來つた根源は銀行會社が、利益なきにも拘らず、利益ありとゴマ化して或は蛸配當をやり或は重役賞與をとり、又、政府が莫大の國庫の金をバラ撒いて、瀕死の銀行會社の救濟をやつたからである。(例へば昭和二年の金融恐慌の際、十億圓近くの大金を國民の負擔で出して、銀行を救濟せることは尚ほ世人の記憶に生々しきことである)若し、これ等のことなくば、多くの銀行會社は、一厘の利益配當も重役賞與も出し得る力がないから、從つて、それにつれて、銀行會社の株主、重役、銀行の大預金者等(それ等が有產階級の大部分である)は收入の激減から消費の一大節約をやり、銀行會社自らも、株主への無配、減配の手前、その他の冗費にも一大緊縮をやつて、こゝに、我が國は、濱口內閣の云ふが如き、消費の一大節約を實現し得た筈である。しかも、斯くの如き消費の節約は、濱口內閣の緊縮政策の如く、失業者を出すことなく、產業の生產費を低下して、我が產業の前途の發展を招來するものである。

然るに、濱口內閣は、我が經濟がその收入以上の消費をなす右の如き禍根を涸らすことに力を盡すことなく、依然、蛸配當其他に由つて、實力以上の消費力を許與しながら、已に、消費節約の餘地なき農民に迄、消費節約を強要せんとしてゐる。斯くては、主人自ら借金で藝者遊びを續けながら、家族の者に節約の必要を說教するに等しい。況んや、その誤れる節約論のために、農村の進步發展に必要なる施設を、中央及地方ともに、財政緊縮の名に於て一切中止せんとするに於ては、農民は斷乎として、之に反對するに違ひない。が、これ等、誤れる政府の消費節約論に對する詳細は、紙面の制限上省略し、他の機會に改めて之を詳叙するであらう。たゞ、こゝには、以上に由つて濱口內閣の云ふ消費節約論は、農民の立場から、決して之に贊成し得ざる性質のものなることを指摘し得れば滿足である。

日本大衆黨分裂物語の反批判

淺沼稲次郎

讀者諸君は、前々號の記事と、本文とを併讀されて問題を正當に批判して戴きたい。

一

本誌前々號に『日本大衆黨分裂物語』と題して、日本大衆黨が經驗した最も不祥なる事件——所謂『清黨運動』の怪文書が紹介された。然もそれは怪文書の内容と、それを裏書する樣な材料のみ織り合はし、肯定的立場で書かれて居る。

多くの讀者を有する權威ある本誌を通じて無產黨の正式機關の調査、究明、判決が恰も『黑きを白とし』と云ひくろめたもののやうに云ひなされては、どうしても巷間の『惡たれ記事』として看過することは出來ぬ。そこで私は本文に於て本問題が如何にして發生し、黨は如何に調査し、判決したかをKKK氏の如く多くの私見を入れて作りあげずに黨の文書により、黨員淺沼の責任に於て申し述べる。

二

ブルジョア社會に於ては、政黨でも會社でも、上からの統制で官僚獨裁制であり、從つて罪惡を糺彈する機關を有すると共に、黃金は又それを封ずる。從つて怪文書も一つの不可避的な方法であり、ために眞實性が多い。然し無產黨は下からの統制で民主合議制であり、多過ぎる程の機關が彈劾、究明の大衆的機會を與へて居る。

而して大衆はその糺彈の眞實なる限りに於て、これを支持する。

斯る故に無產黨に於ける怪文書運動は不要なる異常の方法であり、眞實性を有せずして大衆的討議に於てはかへつて駁撃される性質の問題及び場合に用ひられ勝ちである。

三

日本勞農黨を中心に、日本農民黨、無產大衆黨、民憲黨その他の地方政黨を含めての七黨合同が成立し、日本大衆黨が結成されたのは、昨年十二月二十日である。福田狂二君の怪文書——『清黨』と題するリーフレット(本誌前々號一四九頁下段十二行目——一五〇頁下段一行目)が流布されたのは本年一月二十三日である。

その前後に吾々も福田君が幹部を金の問題で攻撃し清黨運動を起すといふ事を耳にしたが(筆者當時全國農民組合の常任委員として在大阪)吾々は一つのヨタ話の種と聞きながして居た。大正十二年頃にも堺利彦氏(鈴木、猪俣君と共に舊無產大衆黨系の人々)に對する反感からそんな難題をもちかけ『封間』なる怪文書を流布したことがある。

更に昨年來舊日本勞農黨で合同問題が起るや、彼は綱島正興君と共に舊無產大衆黨加入絕對反對を主張し、加藤勘十、河野密、田所輝明、三宅正一、淺沼稲次郎の五名は、猪俣津

南華を通じロシアより資金貳千圓を受けて無產大衆黨加入に努力して居る云々と流言し、それ等の人々の除名運動を外部から計畫したことがある。

恐らく福田君のみで『清黨運動』をやったなら、堺氏の場合と同樣に大した問題にならずに終つたに異ひない。所が黑幕があつた。『清黨運動』を一つの黨の指導權掌握の戰術形體として展開する一團、――舊無產大衆黨幹部猪俣、鈴木君等の組織運動があつた。

皮肉にも舊無產大衆黨幹部とその加入反對者とは、戰線を一にして舊日本勞農黨內の舊無產大衆黨加入努力者をも含めた一團に對し、KKK氏の所謂『爆彈』を投じたのである。

四

愈々怪文書が常任中央執行委員會の問題になつた時、舊農民黨系幹部は憤激その極に達し、斯る問題を一蹴し福田君を始め一切の黨攪亂者を懲戒すべしと主張した。舊日本勞農黨の幹部は實際問題として

(一)怪文書責任者、在來の言動に見て甚だその內容が不信用である。

(二)怪文書記載事項中田中首相一萬一千圓事件以外は大衆黨とは無關係のことで眞僞に拘らず、問題にすべきでないではないか。

(三)第一項は黨幹部多數に面識なく、しかも既成政黨の浪人と云はるゝ柴尾某の證言によるものだが斯る二重に不信用なる材料を大問題として扱ふに足りない。

(四)大問題として扱つて了ふと、眞相が判明した時、肯定的立場を取る舊無產大衆黨系幹部の責任問題が起つて黨に龜裂が入る恐れがある。

更に理論的に見て

(一)無條件合同は卽ち舊各黨の代表を幹部とするものであるが、その場合に何れかの舊黨の幹部を清算せんとせば、實踐を通じて、內紛の形を取つて黨の名譽を外にさらす事なくて、正式機關によつて清算すべきである。

(二)黨の指導權は、斯る怪文書運動によらず鬪爭の尖端に起ち大衆の信任を得ることによるのが常道である。殊に『左翼』を自認する舊無產大衆黨幹部に於て然りである。

(三)地方合同未だならず、舊黨意識未だ解消されざる今日、斯る問題を擴大すれば黨の分裂を誘致する恐れあり――この實際理論兩面からの意見により、黨の機關を無視せる點に於て福田を除名し、問題の眞相調査は擴大せず一つの黨內問題として統制委員を通じて處理し、黨執行部としてはかやうな問題のみに沒頭せず、速かに對議會策、東京市會選擧對策を決定し、日常鬪爭に邁進すべきことを主張した。

然し永年ブルジョア新聞記者として、怪文書になれて居る人々を有する舊無大系の戰術は巧みであつて、彼等は勞農、勞農新聞で書きたてるばかりでなく、舊無大系の幹部を結合せる黨內祕密組織戰線統一同盟に祕密指令を發して小怪文書ビラを全國に流布し、問題を益々外部に擴大し、而して

(一)福田君は舊日勞黨の代議士候補の故に信賴すべきである。

(二)問題は階級の問題であつて黨の名譽以上であり合同政策や理論を超越せる問題であるとして、一切の黨の活動政策の協議を停止し本問題の解決を先決すべしと主張した。

一般新聞にも鳴物入で出た。支部は本部の動搖に不安と憤怒を以て照會して來る。こゝ

に於て、一月廿七日の常任委員會は福田君の除名を決議し、一切の眞相を徹底的に究明すべしの意見を附して統制委員會に廻附しその發動を促した。

五

統制委員會は委員長の大道憲次君（舊無大）以下九名の委員に依つて構成され二月一日より九日間に亘つて調査を行ひ、福田、吉川、豬俣、柴尾、平野、河野、田所等を訊問せるは勿論、アミーバ赤痢にて臥床中の麻生君をも取調べ、可能な限りに廣く材料を黨内外に蒐集し、聽取書等一件書類約六十枚の調査報告書を作製し、二月十日左の如き事實無根の意見書を附して常任執行部に移牒した。

意見書——統制委員會の決議によつて左の警告を發す。福田狂二君の主幹するリーフレツト『清黨』第一册、及び九日發行の『進め』號外内容は別紙調査書に明瞭なる如し。然も此の運動は組織的攪亂運動と解すべき諸點あるに拘らず、常任執行部がその取扱ひ少しく怠慢なりしことを遺憾とす。これに對して執行部の斷乎たる決定なき時は益々本問題を紛糾せしめ、黨の統制上由々しき事態を釀成せしむる恐れあるを以て、この際黨を攪亂せんとする分子を嚴重に戒飭し、將來に向つて禍根を殘さざるやう執行部は本件に對する意見を統一し、その態度を決定し、本來の日常闘爭に邁進すべし（二月十日　日本大衆黨統制委員會）。

こゝに於て常任委員會は、統制委員會の意見書並びに一件記録を受取り二月十三日の中央執行委員會に提出し、その裁決を請求した。

十三日の中央執行委員會は、神谷相談役、麻生、三輪、加藤、淺沼、北山、鈴木、黒田（以上東京）山名、坂本（孝）（大阪）坂本勝（兵庫）三宅（新潟）三浦、古市、稻富（福岡）野田（山梨）坂本利（群馬）山崎（北海道）中澤（岐阜）石山（栃木）の中央執行委員二十名、平野書記長河野次長、大道委員長以下五統制委員、田所主任書記以下七書記、淺原代議士に依つて構成され、黨員傍聽の下に行はれたのであるが、議事前淺原代議士鈴木、黒田、三浦の諸君が退席された。各委員は統制委員會の調査報告書のプリントに依つて質疑應答四時間に及び、満場一致を以て左の決議を可決した。

決議——（一）リーフレツト『清黨』並びに『進め』號外に記載されたる事項は統制委員會の嚴重なる調査の結果、事實無根なること明かなり。（二）無根の事實を組織的に流布し黨の統制を意識的に攪亂したる福田狂二を除名す。（三）清黨運動に藉口する一切の統制攪亂運動を禁止すると共に、爾後事の如何を問はず黨の機關を通ぜずに分派的組織に依つて統制を攪亂するものは勿論、苟も黨規を紊亂するものは斷乎として處分す。此の處分權を次期大會迄常任委員會をして代理執行せしむ。（四）各地方聯合會並びに各地方支部は、清黨運動に藉口する攪亂者に對して斷乎たる處置を取る可し（五）本件の調査の結果は詳細なる聲明書として一般並びに黨員に頒附すべし。聲明書の内容には次の四項を記載すべし（イ）怪文書記載事項の反證（ロ）統制委員會の決定（ハ）中央執行委員會の決定（ニ）當該關係者の聲明書（中央執行委員會）。

六

右の決議に關する中央執行委員會の決定理由書は左の如し（日本大衆黨機關紙第三號）

(一)怪文書記載第一項は、昨年十月三日四日に平野、麻生が田中首相邸に於て淺原、永谷、山本、龜井、河上の五代議士をして第五十六議會に對支問題、小作案問題、地租委讓問題にて政府案に合流する條件の下に一萬一千圓を授受せり云々である。それを實證するために柴尾某なる人間の寫眞と證明書を添附せり。

(イ)昨年十月三日四日と云へば、舊日勞黨擴大中央執行委員會直前にして、社民と合同するか、無產大衆黨と合同するかの討論が行はれ、遂に合同打切となつた時で、今回の七黨合同は、勿論舊農民黨との合同の噂すらもなくまた舊農民黨に於ては平野は依然として『農民は農民黨へ』を主張し、これに反對せる瀨澤本部員を除名に附せる頃である。斯る狀勢よりして斯る取引の行はるゝ餘地なし。

(ロ)大衆黨結成以來、麻生、平野は未だ嘗つて前記の問題で政府に合流云々の事なく淺原、河上代議士に提言せることなし、また他黨の代議士を云々するが如きことあり得ず。

(ハ)吾黨の河上淺原兩代議士は、凡ての問題で反政府勢力と合流し嘗つて一度も政府案に合流せる事なし。對支問題では追擊し、不信案には野黨に合流し、兩税委讓にも反對しつゝあるではないか。

(二)更に第一項の中心は、柴尾某の證明書であるが、これは統制委員會の直接調査によれば事實無根であり、單に福田の脅迫によつて書きしものなることが明かにされた。柴尾の調書(最後に彼の署名あり)の一節を拔萃す。

『はつきり覺えて居りませんが、何んでも福田君は麻生君に對して非常に不滿な口吻を洩して、合同に關して何かケチをつける樣な材料がないかと話しを持かけて來ました、……僕は合同に對して福田のやうにケチをつける考へは毛頭ないが、實は自分がやつて居る關門勞働組合も相當の資格を以つて參加し得る樣に、再三、平野、麻生、三輪、淺原に話したが、平野も麻生も鼻であしらつて、大合同が出來るから地方の小組合なんかを問題にしないやうな態度であつたので、僕も内心相當不滿を抱いて居た矢先であつたから、酒飲み話として福田に相槌を打つた樣な話を不本意ながらしたのでした、……福田は圖に乘つて平野の金穴を知らぬかと聞いたので、僕は勿論そんな事は知らぬのだが、例の出鱈目の調子で、福田の好奇心を滿足させるつもりで田中の處へ賣り込んだ位が平野の手だらうといふやうなあてどもない話をしてその夜は別れた。處が十二月二十八日夜九時の急行で歸郷せんとして東京驛で一人食堂で待つて居ると、見知らぬ柄の大きい男が二人來て一寸來て呉れといふので何氣なく行つた。僕は警視廳の高等課の者だと思つたから食堂の出口で『君は誰れか』と問うたら、その時七八人の勞働者風の男と共に顏をかくした福田が俺だ〳〵と云つて僕の手を握つた、……無理矢理に自動車にのせて進め社本部につれて行つた……兎に角二階に上つて呉れと云ふので、二階に行つてみると、三人の暴漢が矢庭に胸倉をつかんで貴樣本當の事を云はぬと絞め殺すと云つて非常に脅迫した……福田は座り直つて、貴樣は先日今度の合同問題に就て平野と田中首相云々の事を云つたが今度俺は、麻生、平野、河野、田所の一派をやつつける積りだ、それに就て新聞材料が必要だ。貴樣はコレ〳〵の證明をかけと迫つた、……拒絕した

ら彼等は益々狂暴な態度を示し殆んど何をするか分らぬ權幕で迫つて來た……傷つけられたりするのも馬鹿らしいし、また、福田のことだから後日どうかなると思つて、左程の事もないだらうと思ひ證明書を書いたのです。あの證明書の内容は全く嘘のことであるばかりでなく、福田がこんな風にまで利用するとは夢にも思ひませんでした。福田は全く無茶な男で、自分のウソカリしたことから斯ういふ重大問題を惹起し、眞に申譯ありません。(統制委員會荣尾調書)。

(二)怪文書の第二項は、舊日勞黨時代に麻生が河野田所と共に福田を、銀座の關西すし屋に招待し、三人で福田に中禪寺湖發電所設置反對運動を古河に五萬圓で賣込んで吳れと頼み、後に麻生は古河から金を取つて反對運動を中止せり云々といふのである。

(イ)銀座のすし屋で、麻生、河野、田所が福田と會食せしこと一度あり、然し福田が自己雇入れの自動車にて黨本部より三人をのせて銀座につれゆき、その費用四圓は福田が支拂へるものである。此の會合は福田と河野、田所の間が不和なりし爲に、麻生が仲介となつて懇談せるのみにて古河云々の話に非ず。

(ロ)麻生は高梨君と共に一度古河本社を訪れしことあり。これは舊日勞黨栃木縣聯合會の發電所設置反對決議を手交して抗議せしなり。怪文書を見て憤激せる高梨の調査によれば、古河本社の受附簿によれば、前にも後にもこの一回よりも訪問せることなし。福田は屢々訪れて居る。

(ハ)反對運動は中止されず益々展開されて居る。この二月五日さへ多數の同志は石山縣議と共に内務省に反對陳情に上京して居るではないか?

(三)第三項は、舊日勞黨時代に麻生君が故高島氏を訪れ、建國會との合同を條件として三千圓の融通を申込み、この事實は當時隣室にありし吉川守邦氏により曝露されたり云々とあるも

(イ)吉川氏の陳述によれば隣室にありしこともなく建國會云々もなし、(ロ)麻生は高島氏とは解放時代からの友人にして時折往復して居たが、たまたまその病床を見舞ひし節、日勞黨の窮乏をかたり『金があつたら少し寄附せぬか』と話せしのみ、また金を受取りしこともなし。(麻生氏の證明書も合せて參照)

七

中央執行委員會に於ては、舊農民黨側は舊無産大衆黨系幹部の除名を要求し、また上京中の二、三の執行委員は、虚構を以て個人を陥れんとする舊無大幹部その他の態度に憤慨し、某の罪狀〇十〇條、某の××輸入事件、某の××事件に於ける裏切行爲等を曝露し爭はんと主張したが、吾々は本問題の最初から一貫した態度——『黨の防衛』の立場に立つてその凡てに反對し、且つは舊無大幹部の自發的辭任によつて最初の分裂の危險を脫した。然し中央執行委員會は、舊無大幹部策動の流言擴大の責任を次の如く判定した。

(イ)統制委員會の調査によれば、昨年十二月三十日に猪俣津南雄は自宅に於て福田、綱島と共に『清黨』運動を論議し、更に一月四日神田の料亭『ときわ』に於て、福田、綱島他四名のものと協議して居る。更に本部の鈴木黑田の二常任は、本部による問題の眞相發表を極力妨害し、その眞相の一部を記載せる黨機關紙が二月三日芝局より發送せらるゝや、鈴

本は大道と共に局に發送停止の交渉を行ひ拒絶されたり。

(ハ)然も二月五日の彼等の『勞農新聞』には怪文書を凡て、事實として煽動を行ひ、黨内の秘密團體戰線統一同盟を動員して全力をあげて僞電を打ち、怪ビラを流布する等、流言の謀議擴大に努力せる事實明かである。彼等の斯る痴態の由來はその實踐的無力と机上戰略の故に合同の指導權もとれず且大衆黨結成後も壓迫され勝ちのためである、此處に於て彼等は稲田と謀つて怪文書を發しそれを擴大して黨内の彼等の戰線統一同盟なる私的團體の強化と黨の指導權を狙つたのである。實踐的鬪爭によらざる凡ての行動は斯くして敗れた。

しかしこれが處分は彼等の辭任を『流言』擴大化の故の『引責辭職』として承認することゝめ、これ以上の處分はその後の態度に見ることにする(機關紙三號)。

八

此の中央委員會の決議並びに理由は、機關紙に全文を發表し、全國聯合會並びに支部に指令を發してその批判に訴へた。一九聯合會、百五十八支部中の十八聯合會百四十三支部は決議支持を表明した。斯くて大衆は公然と怪文書事件を處理した。

その後、黨本部は日常鬪爭を激發し、地方合同を加速度し、以て各黨の大衆を日本大衆黨に統一することに依つて舊黨意識を解消し、以てその鬪爭の過程に於て一切の不良分子の自然陶汰と黨の強力化を企圖し、猛烈なる鬪爭を展開した。然るに、戰線統一同盟は日常鬪爭をサボレと指令し勞農新聞に依つて舊農民黨幹部に攻撃を加へた。こゝに於て本年三月頃より平野君は本部に顏を見せず舊農民黨幹部も足が遠くなり、『日本農民新聞』を刊行して舊無大幹部に對抗し、互に鬪爭をサボリ斯くて黨の發展を阻害しながら果てしなき泥合戰を大規模に展開した。

四月、五月になつて兩者の對立は絶頂に達しブルジョア新聞は連日に亘つて、大衆黨の『紛糾』『分裂』を報道した。折から市町村會戰に奮戰中の地方聯合會及び支部は之等の一般新聞の記事と怪文書になやまされ『一刀兩斷』の進言を續々本部に寄せた。本部は京都、大阪、東京郊外の選擧の終る六月迄公然の鬪爭を延期せんとしたが五月十四日舊無大系幹部はその代表者會議の名の下に舊農民黨幹部の除名を本部に要求し、十五日には全日本農民組合(舊農民黨幹部)は大衆黨脱退を決議するに到つた。

此處に於て本部は餘儀なく十六日兩派の責任者五名を除名した、舊無大系は除名反對運動を起した爲に十四名の追加除名を餘儀なくされた。

之等の決定は六月十五日の中央執行委員、全國府縣代表者聯合會議に於て承認せられた

世人は『日本大衆黨は分裂した』『日勞黨に還つた』といふが、行動するものに勝利は常にある。此度の内紛問題は常に鬪爭をサボル左翼分子の脱退と机上戰略家の脱落したのみで黨の實質組織には變化なく益々強力化しつゝある。

大衆運動は實踐的鬪爭それ自體である――實踐的鬪爭によらざれば如何なることも達成されず。大衆的鬪爭の中に身を投ぜざる指導者は、決してその地位に永く留ることを許さない。

河童の話

折口信夫

私はふた夏、壹岐の國へ渡つた。さうして此島が凡北九州一圓の河童傳説の吹きだまりになつてゐた事を知つた。尙考へて見ると、仄かながら水の神信仰の古い姿が、生きてこの島びとの上にはたらいて居るのを覺つた。其と今一つ、私はなるべく、認識不十分な他人の記錄の奇事異聞を利用する前に、當時の實感を印象する自分の採訪帳を資料とする事が、民俗の學問の上に最大切な態度であると思ふ故に、壹岐及びその近島の傳承を中心として、この研究の概要を書く、一つの試みをもくろんだのである。

この話は、河童が、海の彼岸から來る尊い水の神の信仰に、土地土地の水の精靈の要素を交へて來た事を基礎として綴つたのである。唯、茲には、その方面の證明の、甚しく興味のないのを厭れて、單に既に決定した前提の様にして書き進めたのである。

この話の中にさしこんだ河童の圖はすべて、元熊本藩水練師範小堀平七さんの家に傳る河童の繪卷から拜借した。

○河童の女

河郎の戀する宿や夏の月

蕪村の句には、その繪に封ぜられたものが、極端に出てゐる。自由にふるまうた様でも、流派の傳襲には勝てなかつたのである。彼の心の土佐繪や浮世繪は、俳諧の形を假りて現れた。この句だつて、唯の畫趣きではない。又單に所謂俳諧なるものでもない。男に化けて娘の宿を訪ふ河童。水郷の夜更けの夏の月。ある種の合卷を思はせる閾どりである。かうした趣向は或は、蕪村自身の創作の様に見えるかも知れぬ。尤、近代の河童には、此點の缺けて居る傳說は多いが、以前はやつぱりあつたのである。

私は、二度も壹岐の島を調べた。其結果、河を名とする處から、

河童の本據を河その他淡水のありかと思うて來た考へが、壞れて了うた。長者原と言ふ海を受けた高峯は、があたろを使うて長者になつた人の屋敷趾だと言ふ。其は小さな、髮ふり亂した子供の姿だつた。其が來初めてから、俄かに長者になり、家藏は段々建て增した。があたろが步いた處は、びしよ／＼と濡れてゐる。疊の上までも。其で上つて來る。果ては、長者の女房が嫌ひ出して、來させない樣にした。すると忽、家藏も消えてなくなり、長者の後に立つて居た屛風は、岩になつて殘つた。此は男の子らしい。平戶には、女のがあたろの話をしてゐる。ある分限者の家に仕へた女、毎日來ては、毎晚歸る。何處から來るか、家處をあかさない。ある時、後を尾けて行くと、海の波が二つに開けた。通ひ女はどん／＼、其中へ這入つて見えなくなつた。女は其を悟つたかして、其後ふつつり出て來なくなつたと言ふ。此二つの話で見ると、毎日海から出て來ること、家の富みに關係ある事、ある家主に使はれること、主の失策を怨んで來なくなること、女姿の、子供でないのもある事などが知れる。だが外に、通ひでなく、居なりの者もあつたらしい。殿川屋敷と言ふのは、豐州での豪家のあつた處である。ある代の主、外出の途中に逢うた美しい女を連れ戾つて、女房とした。子までも生んだが、ある時、屋敷内の井へ飛びこんで、海へ還つて了うた。其時、椀を持つたまゝ、駈け出したので、井の底を覗くと、椀の沈んでゐるのが見えると言ふ。此「信川妻」に似た日本の海の夫人の話をあの島でも、もう知つた人が、少くなつて居た。此傳へでわかるのは、井の如き湧き水も、地下を通つて、海に續いて居るとした考への、見える事である。

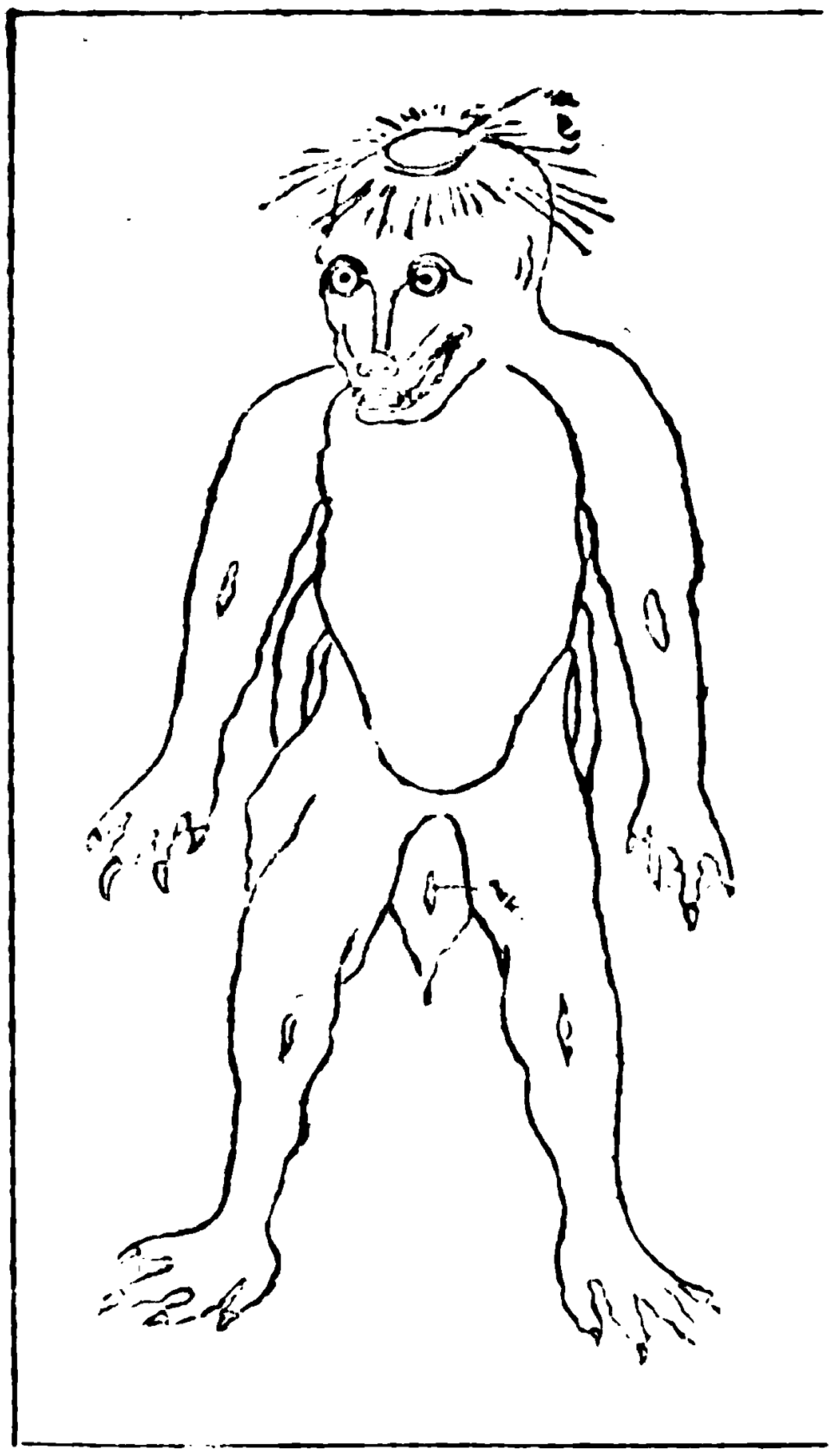
かうした物語を作はぬ、信仰そのまゝの形は、日本國中に殘つてゐる。「若狹井」型の他界觀である。二月堂の「水とり」には、若狹の池の水を呼び出すのだと言ふ。諏訪の湖・琵琶湖・霧島山の大汝の池など、懸け離れた遠方の井や湧き水に通じてゐると言ふ。不思議なのは又龍宮へ通うてゐると言ふ井戶・淸水の多い事である。規模の大きなのは、龍宮は、瀨田の唐橋の下から行けるなど言ふ。だが、龍宮に通ずる水が、なぜ鹽水でないのか、說いたものはない。一年の中ある時の外、使はなかつた神秘の水のあつた事を、別の機會に書きたいと思うてゐる。神聖な淡水が、海から地下を拔けて、信仰行事の日の爲に、湧き出るのだと思うてゐたらしいのである。海からなぜ鹽氣のない水が來るか、此問題は、玆には說いて居られぬ程、長い說明がいる。神聖な地域の湖・池に通じるとする信仰も、實は、此海から來る地下水の考への變形である。

此話には、河童とは言うて居ぬ、が、井・泉から、海に行き來

したもの丶あることは知れる。河童が、とんでもない山野・都邑の清水や井戸から、顏や姿を表した話は、どなたも、一つや二つ聞いた氣がせられるはずだと信じる。

男であれ女であれ、人の姿を假りて、人間と通婚する傳說にも亦、其本體を水界の物としたのが多い。前の股川屋敷のも、此側の型を、河童の中へ織りこんだものらしい。

馬の足がたゞけの溜り水があれば、河童が住んでゐると言ふ分布の廣い譚も、地下水の信仰から、水の精靈は、何處へでも通ふものと考へたのである。厠の下から手を出して、いたづらをしたものは、大抵、狸になつて了うてゐるが、猿や猫とする例も少くない。だが、厠の樣式にも歷史があつた。其變化に伴うて、適當な動物が入り替つて來た。だが考へると、やはり水溜りだつたので、河童の通ひ路は通つてゐたのである。毛だらけの手が出て、臀べたを撫でたゞけでは、よく考へると、何の爲にしたのか知れない。示威運動と見るのが、普通であらうが、人を嫌ふ廢屋の妖怪には、少しとてつもない動作である。何も仰山に、厠屋が語義どほりの川屋で、股の間から川水の見えた古代に溯らずとも說く事が出來よう。だが若し、さう言ふ事が許されるなら、丹塗り矢に化成して、處女の川屋の下に流れよつて、其恥ぢ處に射當つたと言ふ第一代の國母誕生の出來も、考へ直さねばならぬ。厠の下から人をかまふ目的が、單にしりこを拔くばかりでなかつたのかも知れない。



第一圖

雪隱の下の河童の覘ふものは、しりこだまであつた。何月何日、水で死ぬると豫言せられた人が、嚴重に水を忌んだが、思ひも設けぬ水に緣ある物の爲に、命を失ふ話の型の中に、其日雪隱に入つて、河童にしりこを拔かれた話もある。厠の中を不似合として、手水鉢の中から出たことにしてゐる例は、筑前三井郡出身の本山三男さんから報告せられた。

殿川屋敷の井に沈んでゐる椀も、河童と因緣の淺からぬものなのである。他界の妻の殘して行つたもの丶傳へも、段々ある

殘す物にも色々あらうに、椀を殘して去つたのは、水の精靈の舊信仰の破片が、こびりついて居るのである。此は河童の椀貸しの話に寄せて說きたい。

　ある家の祖先の代々、河童が來て仕へた話は、大抵簡單になつてゐる。每夜忍んで來て、きまつた魚を殘して戾る。なぜ、今では來なくなつたとの問ひを豫期した樣に、皆結局がついてゐる。河童の大嫌ひなものを、故意に何時もの處に置いた。其を見て、恐れて魚を搬ばなくなつたと言ふのだ。河童が離れて、ある家の富みが失はれた形を、一部分失うた事に止めてゐるのが魚の贄の來なくなつた話である。家の中に懸けられる物は、魚も一つの寶である。異鄕の者が來て、贄なり裹物を獻げて還る古代生活の印象が結びついて、水界から獻つた富みの喪失を、單に魚の贄を失うた最低限度に止めさせたのである。農村の富みは、水の精靈の助力によるものと信じて居た爲である。家の榮えの原因は、どうしても、河童から出たものとせねばならぬ。だから、河童を盛んに使うた時代のあることを說いてゐる。河童驅使の結果は常に悲劇に終るべきを、輕く解決したのである。昔から傳へた富み人の物語が、今ある村の大家の古事にひき直して考へられたのである。

○河童使ひ

河童が、なぜ人に驅役せられる樣になつたか。此には、日本國中大抵、其惡行の結果だとしてゐる。人畜を水に引きこんだ、又、ひきこまうとしたのが、捉まつた爲とするのである。

　最初に結論から言はう。呪術者に役せられる精靈は、常に隙を覗うてゐる。遂に役者の油斷を見て、自由な野・山・川・海に還るのである。河童の贄を持つて來なくなつたのも、長者の富みを亡くしたのも、皆此考へに基いて居る。

　役者は、役靈を驅使して、呪禁・醫療の不思議を示した。ある家の主に傳る祕法に、河童から敎へられたものとするのが多い譯である。河童の場合は、接骨の法を授けたと言ふ形が、多樣に岐れたらしい。金創の妙藥に河童の傳法をとくものが多いが古くはやはり、手脚の骨つぎを說いたものらしい。馬術の家には落馬したもの、爲の祕法の手術が行はれた。其本緣を說明する唱言も共に傳つた。恐らく相撲の家にあつたものを移して、馬との關係を深めたものと思はれる。河童に結びついた因緣は後廻しにする。

　人に捉へられた河童は、此村の人をとらぬと言ふ誓文を立てる。或は其誓文は、ひき拔かれた腕を返して貰ふ爲にする樣にな

つてゐる。腕の脱け易い事も、河童からひき放されぬ重要な條件をなつてゐた時代があつたに違ひない。其が後には、妖怪の腕を切り落す形になつて行く。柳田先生は、此を河童考の力點として居られる。羅城門で切つた鬼の腕も、其變形で、河童から鬼に移つたのだと說かれた。此鬼と同樣高い處から、地上の人をとり去らうとする火車なる飛行する妖怪と、古猫の化けたのとの關係をも說かれた。其後、南方熊楠翁は、紀州日高で河童をかしやんぼと言ふ理由を、火車の聯想だ、と決定せられた。思ふに、生人・死人をとり喰はうとするものを、すべてくわしやと稱へた事があつたらしい。火車の姿を猫の樣に描いた本もある譯である。人を殺し、墓を掘り起す狼の如きも、火車一類として、猫化け同樣の話を傳へてゐる。老女に化けて、留守を家にこもる子どもをおびき出して喰ふ話は、日本にもある。又、今昔物語以來、幾變形を經た彌三郎といふ獵師の母が、狼の心になつて、息子を、出先の山で待ち伏せて喰はうとして、却つて切られた越後の話などが、其である。さう言ふ人喰ひの妖怪の災ひを除く必要は、特に葬式・墓掘りの際にあつた。坊さんの知識から火車なる語の出た順序は考へられる。江戸中期までの色町に行はれたくわしやなる語は、用法がいろ／＼ある。よび茶屋の女房を言ふ事もあり、おき屋の廻しの女をさしても居る。くわしやを遣り手とも言うてゐるが、後には、くわしやよりもやりてが行はれた。さうして、中年女を聯想したくわしやも、やりてと替ると、婆と合點する程になつた。くわしやの字は、花車を宛てゝゐるが、實は火車であらう。人を捉へて引きこむ樣からの名であらう。おき屋から出て、よび屋を構へたのをも、やはりくわしやと呼んだのであらう。芝居に入つて「花車形」といはれたのは、唯の女形のふけ役の總名であつた。

手を抜ける水妖は、あいぬの間にもあつた。みんつちと言ふ。形は違ふが、河童に當るものである。金田一京助先生は、手の抜け易い事を、草人形の變化であるからだと說明して居られた。藁人形などの手は、皆心は、竹や木である。草を絡んだ一本の棒を兩手としてゐる。其で引けば、兩方一時に抜けて來るとも言はれた。みんつちの語自身が和人のものである樣に、恐らくは此信仰にも、和人の民俗を含んで居ると思ふ。草人形が、河童になつた話は、壹岐にもある。あまんしやぐめは、人の村の幸福を呪うて善神と爭うて居た。土木に關しての傳への多い、此島の善神の名は忘れられたのであらう。九州本土の左甚五郎とも言ふべき、竹田の番匠の名を誤用してゐる。ばんじようとあまんしやぐめが約束した。入り江を横ぎつて、對岸へ橋を架けるのに、若し一番鷄の鳴くまでに出來たら、島人を皆喰うて

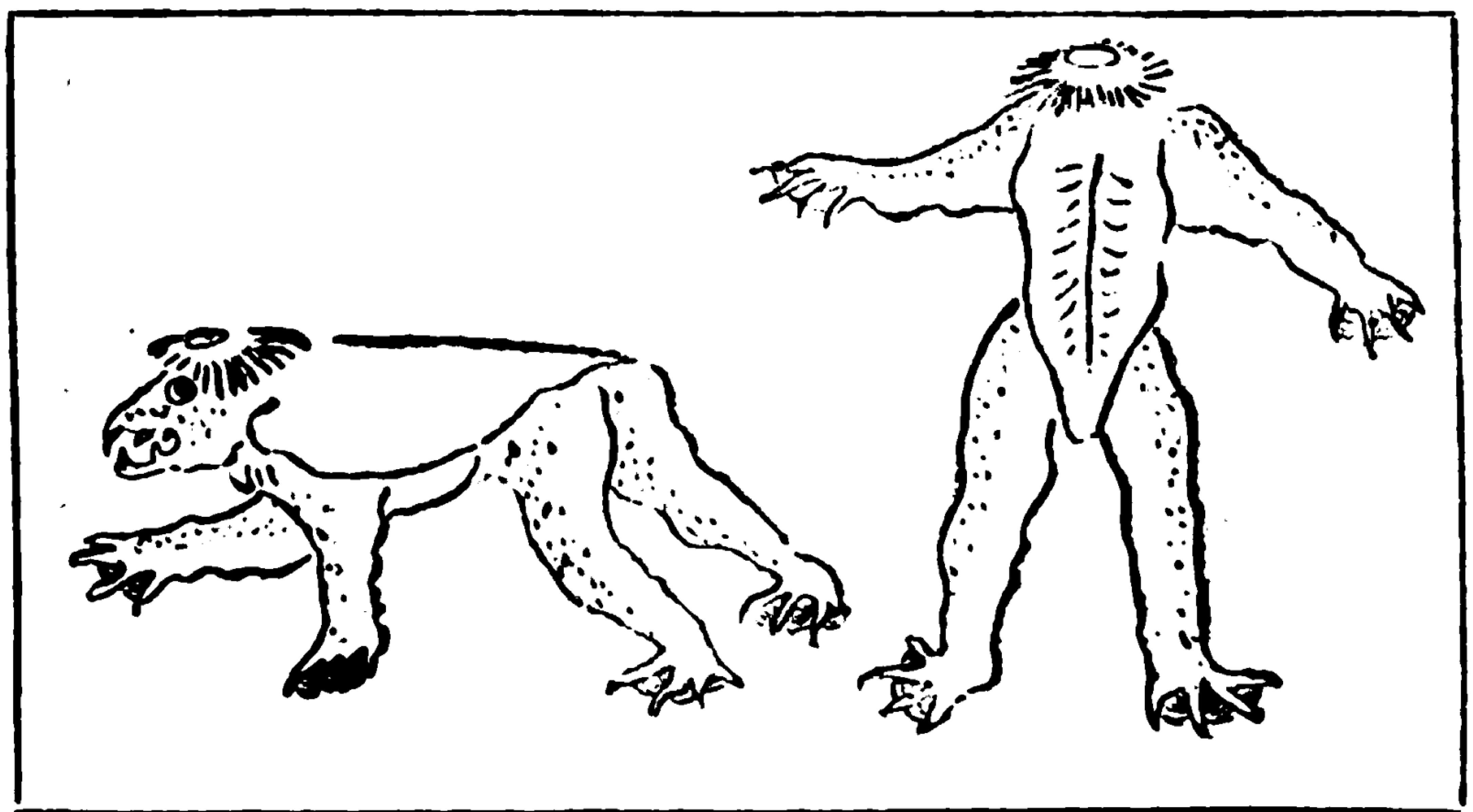
もよい、と言ふのである。三千體の藁人形を作つて、之に咒法をかけて、人として工事にかゝつた。鷄も鳴かぬ中に、川來あがり相になつたのを見たばんじようは、鷄のときをつくる眞似を陰に居てした。おまんしやぐめは、工事を止めて「播曲放擲け(ケイマゲウツチョ)」と叫んだ。其跡が、「けいまぎ輪」と言はれてゐる。又三千の人形に、千體は海へ、千體は川へ、千體は山へ行けと言うて放した。これが皆、があたろになつた。だから、海川山に行き亙つて、馬の足形程の水があれば、其處にがあたろが居る。若し人の方の力が強ければ、相撲とりながら、其手を引き拔く事も出來る。藁人形の變化だからと言ふのである。兩手が一時に拔けたとは言はないが、あいぬのみんつちに似過ぎる程似てゐる。

夏祓へに人間の邪惡を負はせて流した人形(ひとがた)が、水界に生(しやう)を受けて居るとの考へである。中にも田の祓へには、草人形を送つて海川へ流す。夏の祓へ祭りと、河童と草人形との間に通じるものゝあるのは、尤である。而も河童に關係淺からぬ相撲に、骨を脫(はづ)して負ける者の多い處から、愈ゝ河童と草人形との聯想が深まつて來た、と思はれる。古代の相撲は、腕を捩き、肋骨や腰骨を蹴折ると言つた方法さへあつた樣である。中古以後、秋の相撲(すまふ)節(せち)に、左方の力士は葵花、右方は瓠花(ひさご)を頭を插して出た。瓠は水に緣ある物だから、水の神所屬の標らしく、さうして見ると葵は其に對立する神の一類を示すものであらう。必ずしも加茂とも考へられぬが威力ある神なのであらう。瓠花も、瓢も、他の瓜で代用が出來た。だが、なぜ後世渡來の胡瓜をば、水の精靈の好むものと考へたのだらう。恰好稍瓠の小形なものに似て横に割つた截り口が、丸紋らしい形を顯してゐる。祇園守りの紋所だと言ふ地方が廣い。瓜の中に神紋らしいもの、現れて居り、ひねるとなかごが脫けて了ふ。祇園祭り過ぎて胡瓜を喰ふな。中に蛇がゐるとの言ひ習しも、いまだに各地に殘つてゐる。祇園は異風を好んだ神である。此神の爲にはかうした新渡の瓜を擇ぶ風が起つた爲とも考へられる。瓜に顏を書いて流す風もあつた。胡瓜に目鼻を書くと、いぼ〳〵の出た恐しい顏になる。この長い顏した異國の瓜を、他界から邪惡を携へて來た神の形代として流し送る。かうした考へから、夏祓への川祭りに胡瓜が交渉を持つ樣になつたのであらう。其が次第に、水の神への供養と言ふ樣に思はれて行つたのではないか。其で、河童の好物を胡瓜とする考へが、導かれて來たと思はれる。

○河童の馬曳き

馬も牛も、人と同じ屋根の下に起き臥してゐた。田舍では、今も牛部屋、厩を分けないで居るのが多い。かうした人間の感情

を稍理會する畜類に對しては、やはり一種の祓への必要を感じ出したのである。二月頃に、多くは午の日だが、緣日の日どりに從うて、外の日にする事もある。牛馬を曳いて、山詣りをする。此は、御事始めの日から初まる田の行事の爲に、田に使ふ畜類に山籠りをさせる風の變化したものである。牛の方にまづ行はれた事が、馬にも及んだらしい。後には、馬の用途が廣まつて、馬の山詣りが殖えて來、午の日を春祭りの緣日とする社寺を擇ぶ樣にもなつた。田植ゑが過ぎると、牛には休養の時が來る。馬には、其がない。牛の牸が生れると、其足形を漉れ紙にとつて、入り口の上に貼る。旣に祓へのすんだ牛ばかりゐる標である。惡靈の入り來て牸を犯す事を避けたのである。牛は、水に緣の濃やかな獸である。土用丑の日を以て、形式にでも水に浸らねばならなかつた。淵や瀧壺の主に、牛の說かれてゐる處も可なりにある。馬にも、やはり川入りの日があつた。其爲に、馬も亦、水神と交渉を持つ樣になつた。尾張津島祭りも、一部分は、馬の禊ぎを含んで居る。この社の神人が、厩の護符を配り歩いたのは、多くの馬に代つた、神馬の禊ぎの利益に與らせようとするのである。馬は、津島の神馬である。馬の口綱をとつて居るのは、猿である。神人であることもある。猿を描いたのは津島以外の形式が、這入つて居るのである。此は、大津東町に處を移した穴太の猿部屋の信仰である。日吉山王の神猿が、神馬の口添ひとなつて、神の伴をすると考へた爲である。神馬の禊ぎをさせるのも此猿である。此猿の居る處には、神馬に障りがない。其にあやからせようと言ふのが、馬曳き猿の護符であつた。今も、途上で逢ふ事である。馬の腹掛けに、大津東町と染め出したのをつけて居る。其馬の、猿部屋の守護を受け、日吉の神馬の禊ぎに與つたものとの標である。



第二圖

昔は、日本の國中、陸地に於いては、馬ほどの強さを思はせる者はなかつた。其が一歩、河に踏み入ると、水に沒して居る小さな水妖の爲に、引きこまれる事があると考へた。水を頂くが爲に強い河童の力を、以前からある頭の皿に結びつけた。其處にある水をふりこぼされると、河童の力はなくなると言ふ樣にも合理化

して考へられる樣にもなつたのである。

日吉の使はしめの猿は、水の良否をよく見分ける。湖水近くおりて居て水を見て居る。さうして、最淨い水の到るのを待つて、神に告げて、神の禊ぎをとり行ふ。かうした信仰から、惡い水、水の中に邪惡の潜んで居る事をも、よく悟るとせられた。此考へから、屋敷の水を讃めるのを中心にした庭のことほぎには、猿が出て來る樣になつた。其から擴つて、屋敷・建て物の祝福や、屋敷に入り來る邪惡・疫癘退散の爲にも、猿を舞はせる風を生じた。

馬の脊に跨つた神を観じたのは、何時頃からか、細かな事は知れぬが、だが、古代日本では、神の畜類に乘る事は考へなかつた。馬が尊貴の乘り物とせられて後も、さう馬に乘る事を許された神はなかつた。人乘りはじめて、之を神に及す樣になつたのである。宮廷から馬を進められる樣になると、其神の資格は高くなつたのである。祝詞にも、白き馬を寄せられる文句の見えて居り、繪馬を捧げる風の、わりに早くから行はれたのは外に理由はあるが、此方面からも說かねばならぬ。平安朝以後、低い神々は、心から馬を羨望して居た。馬に乘つた人が通ると脚を止めたり、乘りてをふり落したりさせた。唯後世風に考へると、乘りうちしたのを咎める樣に見えるのである。おなじ下座の神と考へられる樣になつた水の神なども、馬を欲しがつて居た。其で、水に近よる馬を取らうとすると言ふ風に、推し當てに、神・精靈の心を考へた。此が、河童の馬を引きこまうとして失敗した話の種である。さうして、人間に驅使せられる河伯と結びつけて、命乞ひに誓文し、贄を獻り、祕法を知らせると言つた說明をつけたのである。

えんこ・えんこうは、猿猴から出たものと言ふ考へは、誰しも信じ易い考へなるが爲に、當分動すことは出來さうもない。だが、何の爲にわざ／＼さるを避けて、耳遠い音を擇んだのか、私には判斷がつかない。或は、井子(かなご)・かごなど言ふ類例から推すと、「井(ゐ)の子(こ)」から出たものが、聯想で猿猴其まゝ「ゑんこう」とも發音したのかも知れない。

若し又、ゑんこを猿猴に違ひないとすれば、水を守る神猿を、やがて水の精靈と見て、猿卽河童として、水界に多くゐる方をゑんこうと言ひ別けたもととれる。

馬曳き猿を、河童の變形とする事は、猿とゑんこうと、關係の說明はついても、まだ／＼出來ない。唯、此護符を貼つて、馬の災厄を除くことの出來るものとした原因だけは、わかつたと思ふ。馬術の家の傳へとしても、やはり猿曳きや、馬曳き猿の信仰を述べた神人等のものと岐れる元は、一つであつたであら

う。

○椀貸し淵

大和の水木直篤さんの作つた柳田先生の著作目録の中にも、一つの重要な項目になつてゐるものに、「椀貸し塚」がある。私一己にとつては、非常な衝動を受けた研究である。今は先生の論理の他の一面に、かうした考へ方もなり立ちさうだと言ふ點だけを述べて、重複を避けたいと思ふ。

椀貸し傳説の中には、河童を言はないものも多い。だが、此は塚の内部に湧き水のある様な場處に移した話が、後には、唯の塚にまで推し及したものと思ふ。私は、やはり水邊の洞穴や淵などの地下水の通ひ路と考へられる處を言ふ方が、元の形に近いのではないかと思ふ。

膳椀何人前と書いた紙を、塚なり、洞なり、淵なりへ投げこんで置くと其翌日は必、註文通りの木具の數を揃へて穴の口や岩の上などに出してあつた。ある時、借りた數だけ返さなかつた事があつて以來、貸してくれなくなつた、と言ふ結末が必ついてゐる。此椀の貸し主は、誰とも言はぬ傳へが多い。中にはつきりしてゐるのは、龍宮といひ、河童・狐を言ふものである、狐でゝもなければ、そんな不思議は顯されないと考へたのは、水に縁のない山野の塚には時々狐の出入りするのを見かけることのある爲である。

今もあることだが、昔ほど激しかつた。一年に一度、數年に一度の客ぶるまひの爲に、何十人前かの木具を揃へて藏して居る家が多かつた。中には一代一度など言ふのさへ、上流社會にはあつたものである。此話の、さう近代出來でない様子から見ても、小まへ百姓などが、木具の膳椀で、客をする夢も見なかつた頃にも、既にあつたらしいことは、鑑定がつく。其では、その前の漆塗りの木具のなかつた時代には、此話はなかつたかと言ふと、其頃相應な客席の食器を考へてゐた事も考へられる。だが、其から溯ると、此が傳説でなく、生活そのものであつた時代に行き當る。

平安朝以後の公家生活には、時々行はれる大饗などが大事件であつた。高官が昇進すると、一階上の上官を正客（尊者といふ）として大規模な饗宴を催したものである。其夕方尊者來臨の方式がやかましかつた。宴席の様子が又、不思議なものであつた。まるで、神祭りの夜に、神を迎へる家の心持ちが充ちてゐた。私は日本の宴會は、都が農村であつた時代から、大した變化もなくひき續いたもので、すべては、神の來る夜の儀式をくり返してゐるたものと信じてゐる。

饗宴用の食器に違ひない朱器(盃)・台盤(膳)を、何よりも大切な重寳としたのは、藤原家であつた。大きな藤原一族の族長たる氏の上の資格は此食器の所在によつて定まつたのである。宮廷における三神器の意義に近い寳だつたのである。此は藤原良房の代に作られたものだと言ふ。私は、其時を食器の歴史に革命があつて、古い物を改修した時だと考へて居る。何にしても食器にさうした意義の生じたのは、氏の上の條件として必行ふべき饗宴があつたことを暗示してゐるからである。

「あるじ」と言ふ語は、饗應の義から出て、饗應の當事者に及んだのである。家長の資格は、客ぶるまひを催す責任の負擔から出てゐる、饗宴は、家族生活の第一義であつた。神聖な食器の保存に注意を拂ふ風は、時代が遷つても、變らなかつた。唯食器にも、推移があつた。どうしても、傳來の物の代りに、近代のを用ゐねばならぬ様になつて行つた。其誘因としては、壞れたり、紛失したりする事と、傳統的な器具を持たぬ新しい家が後から後から興つて來た事である。

客の數は、信仰の上から固定したものが多かつた。だから時代が變つても、多くは常に一定してゐた。一椀一皿が不足しても完全な客ぶるまひは出來ない。食器の數を完備する事に苦勞した印象は、新しい器を採用する様になつても殘つてゐた。椀貸し穴の、椀を貸さなくなつた原因を、木具の紛失で説いたのも此印象が去り難かつた爲であらう。宴席に並んだ膳椀の數を見ても一目に其家の富みが思はれる。此榮えは、農村經濟の支配者なる水の神の加護によつて得たものである。木具の古びを見ても、此家の長い歴史が思はれる。何處にしまつてあるとも家族さへ知らぬ木具類が、時あつて忽然として、とり出されて來る。さうした事實をくり返し見て居る中に、椀貸しの考へは起つて來る。水の神から與へられた家の富み、其一部としては、數多い膳椀。水の神から乞ひ受けた物と言ふ風に考へる外はない。此が稀に出現する様を見たまでは、事實であり、古代式の生活をくり返した農村全體の經驗の堆積であり、疑問の歴史でもあつた。



第三圖

かういふ經驗が、記憶の底に沈み入つて、幾代かを經る。すると、さうした農村の、大家の、富みの標となる財貨を、挿話

にして、逆に、その家の富みの原因を物語る話に纏つてゐた。蓋くは、舊い傳説の型にはまつた說明で、現實を空想化してゐる。膳椀の忽然と出て來る理由を、時をきめて水の精靈から借り出すものと考へた事實に卽した想像と、逆に精靈の助力を受けた者に考へ易い最後の破綻の聯想とが、同時に動いて來る。さうして其中間に器具紛失・損傷の古い記憶が蘇つて來て、傳說らしい形が整ふ。さうすると又、紛失とするよりも、神・精靈を欺く人間の猾智の型で說明する合理欲が、此話を一層平凡な傳說の形に整頓して了つたのである。

……金の網がゝれとてしも波の月(信章)河童の生けどり秋な悲しむ(同)うそ斷聞けばそなたは荻の聲(桃青)地獄のゆふべさうもあらうか(章)飛ぶ螢水は卽て燃え上り(青)熊手島宮勢多の長橋(章)釣瓶とり龍宮までも探すらむ(青)亀は忽下女と現れ(章)……(江戸兩吟集)

河童の聯想が向きれないで、四句隔てた勢多の長橋に刺戟せられて復活してゐる。釣瓶とりの句も其だ。亀の下女も其だ。唯河童の下女を透けたゞけである。私どもから言はせればやつぱり打ち越しである。

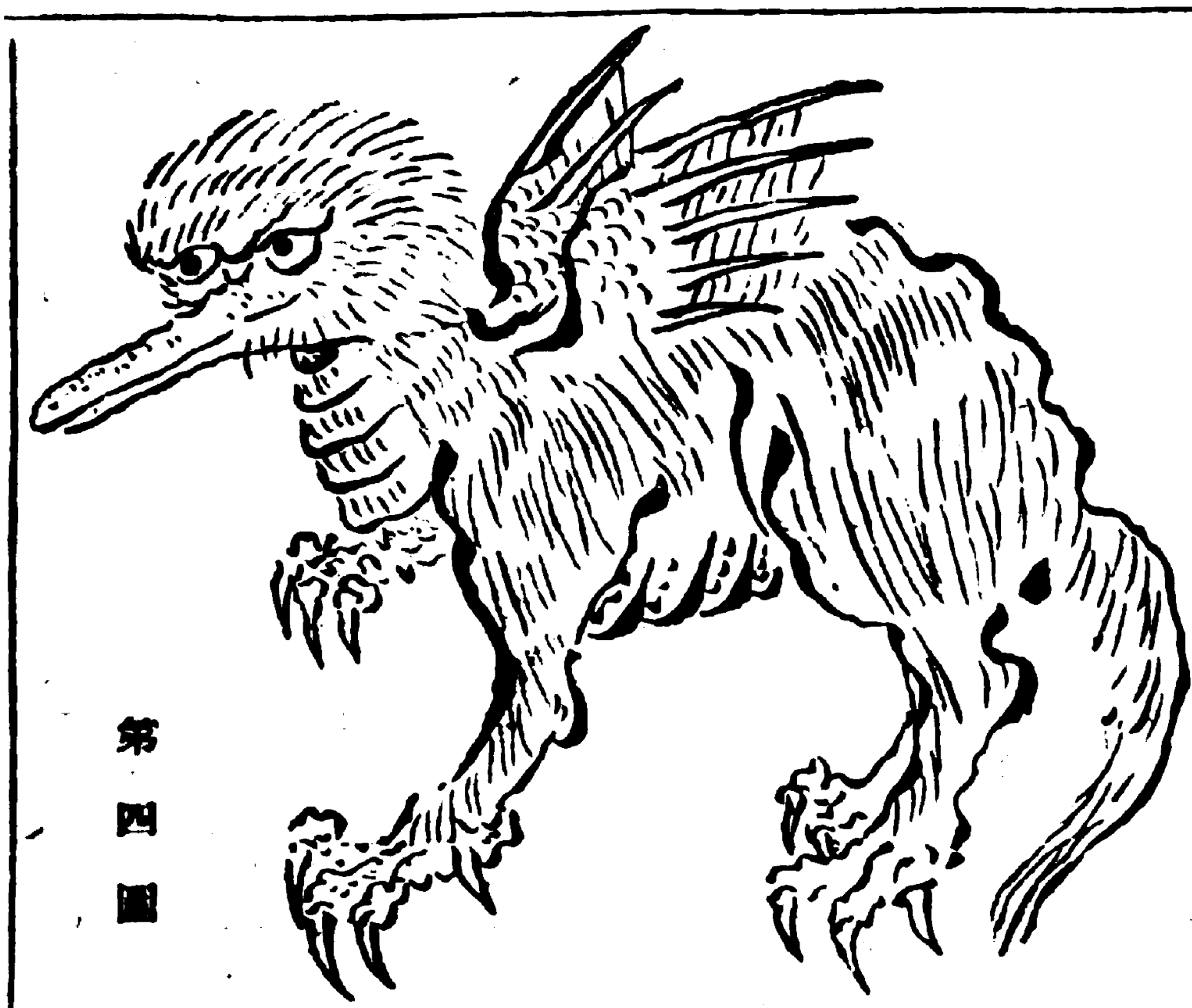
○頭の皿

水の神が、膳椀ばかり貸してくれた理由は、わかつたとしても、どこかやはり落ちつかぬ處がある。客ぶるまひの木具を貸す事になつた隱れた原因は二つあげて置きたい。饗應を受けに來る正客は、水の神自身だつたらしいと。河童の皿の、なぜ問題になるのかといふ事の說明である。農村の饗宴に臨む者は、色々な形に變化はしてゐても、正しい姿に直して見れば常に水の神及び、其一類であつた。尠くとも、ある時代まで、さう考へて迎へもし、招かれても來たのである。勿論水の精靈等は、人の假りに扮裝したものである。其が何時か、唯の人の姿で出て來る様になる。一方又近代では、苗を束ねた人形や、役のすんだ案山子(かゝし)を正客とする程、神を空想化してゐる處もある。水の神の爲のふるまひと言ふ事を忘れて後も、何だか水の神に關聯した行事の様に思ふ心は殘つてゐる。其が、膳椀の貸してに水の神を定めた理由である。話は逆に聞えるであらうが、此か傳說上には、正しい推理なのである。

頭の皿を言ふ前に、まづ椀貸しとの關係の結論を述べて置く。河童とまで落ちぶれない神の昔から、皿を頂いてゐると言ふ傳へがあつて、其で、水の神がさう言ふ器具を持つて居るとの考へが導かれたのであらう。膳椀は、水中に何處にあるか、其とも河童の皿の中の、無盡藏の寶と共に入つてゐるのか、此は後

に說く。ともかく、河童の皿は、昔からあゝした小型の物と考へてゐたか。此も亦、問題である。河童は、水の神であり、又其眷屬とも考へられる。其ほどある時は靈威を發揮し、ある時はふえありいの樣な、群衆して惡戯をする、或は、海の神の分靈が、水のある處に居るものとして、無數の河童を考へたのかも知れない。近代の河童から見れば、さう說かねばならぬ樣である。でも私は、別の考へを持つてゐる。

河童を通して見ると、わが國の水の神の概念は、古くから亂れてゐた。遠い海から來る善神であるのか、土地の精靈なのか、區劃が甚朧げである。神と、其に反抗する精靈とは、明らかに分れてゐる。にも拘らず、神の所作を、精靈の上に移し、精靈であつたものを、何時の間にか、神として扱うてゐる。河童なども、元、神であつたのに、精靈として村々の民を苦しめるだけの者になつた。精靈ながら、神の要素を落しきらず、農民の媚び仕へる者には、幸福を與へる力を持つてゐると言つた。


第四圖

過渡期の姿をも殘してゐる地方もある。

河童の皿は、富みの貯藏所であると言ふ考への上に、生命力の匿し場の信仰を加へてゐる樣である。水を盛る爲の皿ではなく、皿の信仰のあつた處へ、水を司る力の源としての水を盛る樣になつて來たのである。だから、生命力の匿し場の信仰は、二重になる。だから私は、皿の水は後に加つたもので、皿の方を古いものと見てゐる。

皿が小さくてもよい樣に思ふのは、水の方を考へるからである。土地によつては、頭の皿は、芥子坊主の頂の剃つた痕と一つにしてゐる樣である。又其處の骨が自ら凹んでゐるとするものもある。或は、皿は髮の毛の中に隱れてゐるとも言ふ。大體は、此位の漠然とした考へ方である。

北九州の西海に面した地方は、河童の信仰の、今も最明らかな處である。皿がちやんと載つてゐると言ふ處が多い。唯、其皿について仰向いてゐるとするのと、頭の頂に伏せられてゐる

と言ふのと、上下二枚の皿が合さつて蓋物の樣になつてゐる、と說くものとがある。第三のは、水のこぼれを防ぐつもりの物らしく、おもしろいが、一等新しい形だと思ふ。頭の皿と言へば、仰向けか、うつ向きかは、誰にも問題にならない程わかりきつた時代の說明省略のまゝの形をひき繼いだ後の代には、早く皿の据ゑ樣を思ひ浮べる事が出來なくなつたのであらう。其でかう色々に說く樣になつたのである。私は恐らく、皿は伏せられて居たのであらうと思ふ。其も、今まで考へて來た樣な小さな物に限るまいと思ふ。もつと大きな物であつたかも知れぬと思ふ。かうした皿を子どもの時から嫁入るまで被き通した姬の物語がある。「鉢かづき姬」の草子である。此には鉢とあるのは深々と顏まで掩うて居たからである。おなじ荒唐無稽でも、多少合理的にと言ふので、皿より鉢の方を擇んだ傳へを、書き留めたのであらう。其程大きくなくとも、不思議の力が、其皿の下に、物を容れさせたのである。鉢と言ひ皿と言うても、大した違ひはないのである。鉢かづき姬が、御湯殿に勤めて貰ひ男に逢ひ初めるくだりは、禊ぎの役を勤めた古代の水の神女の俤がある。だが、湯殿に仕へるだけでは、此以外の物語にもある樣だ。唯、湯殿で男にあふ點が特殊である。慶應大學生高瀨源吉さんが、鉢かづきの入水して流されて行く處が、殊に水の緣の深い事を示してゐるのではないかと問うた。鉢かづきの鉢がこぼれると、財寶が堆く出て、めでたく解決がつく。かうして見ると、この姬の物語も、やはり、水の神の姿を持つてゐる。

水の神は、頭に皿を伏せて頂いてゐる。其下には數々の寶が匿されてゐると考へたのである。皿が擴張すれば、笠になる、水の精靈なる田の神の神像の多く笠を着てゐるのも、かうした理由を多少含んでゐるかも知れぬ。大阪で育つた私どもの幼時は、まだこんな遊戲唄が殘つてゐた。

頭の皿は、いつさら、なさら。
なゝさら、やさら。こゝのさら、とさら。
とさらの上へ灸(やいと)を据ゑて、
熱や　悲しや　金佛(かなぼとけ)けい。けいや。
……………

何の意味をも失うてはゐるが、皿を數へるらしい文句である。皿數への文句としては、「嬉遊笑覽」に引いた土佐の「ぜゞがこう」の文句が、暗示に富んでゐる。

向河原(むかがはら)で、土器燒(かはらけやき)ば(ヤキハッ)
いつさら、むさら、なゝさら、やさら。
やさら目に遲れて、づでんどつさり。
其こそ　鬼よ。

裁着て　裁着て來るものが鬼よ。

此唄を謠ひながら、順番に手の甲を打つ。唄の最後に、手の甲を打たれた者が、鬼になる。かういふ風に書いて、此が世間の皿數への化け物の諺の出處だらう、とおもしろい着眼を示してゐる。

皿數への唄に似たものは、古くは今昔物語にもある。女房が夫を捨てゝ、白鳥となつて去る時、書き殘した歌

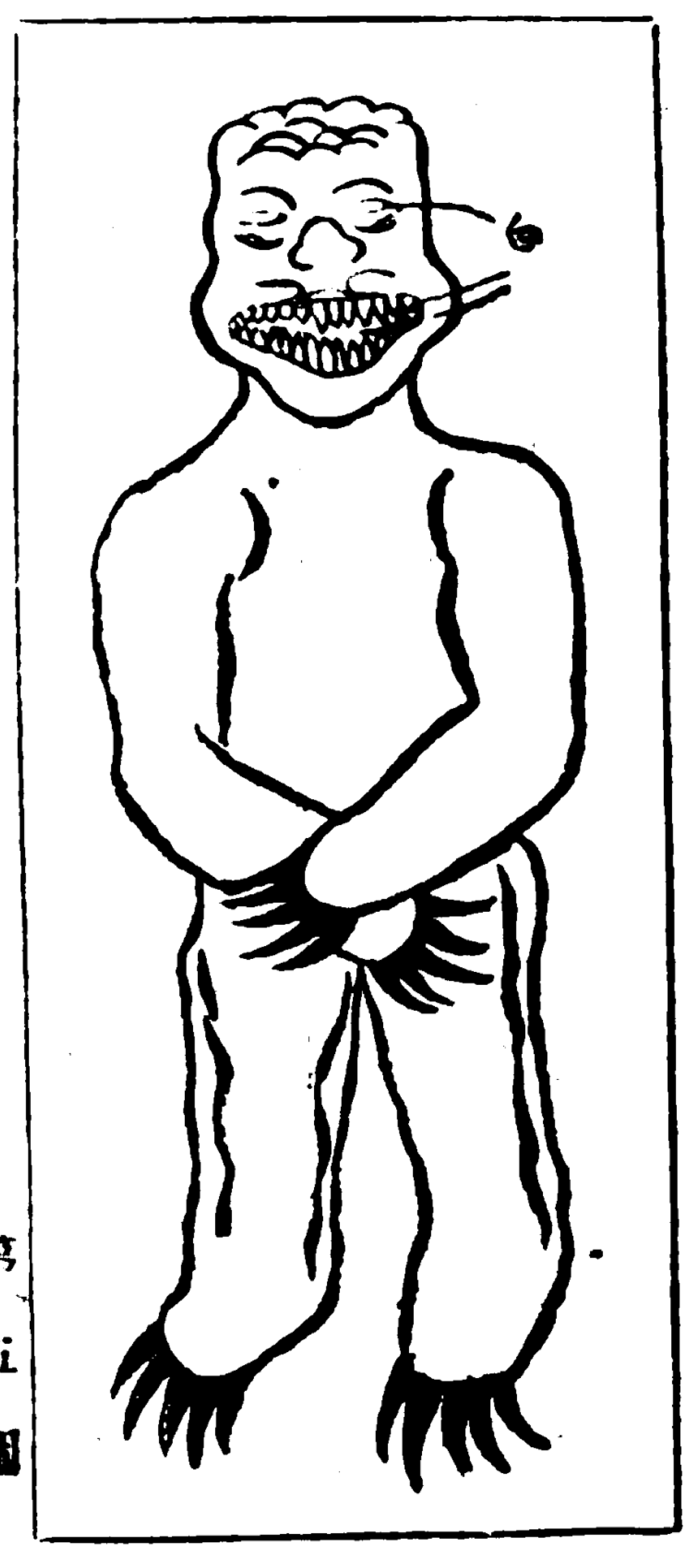
あさもよひ　紀の川とよめ行く水の　いつさや　むさや。
いるさや　むさや

下の句は、何ともわからぬだけに、童謠か、民謠らしく思はれる。だが、「いつさや　むさや」は、「いつさら　むさら」と關係がありさうに思ふ。皿數へ唄が、五皿六皿からはじまるらしいのを考へ合せると、殊にさう思はれる。時代の新古によつて、類似民俗の前後をきめるのは、とりわけ民謠の場合、危險である。だがこの唄では、今昔に俤を殘したもの丶方が古くて、皿數への方が其系統から變化したものと思うてよい樣である。皿數への唄一個が因で、果して皿數への妖怪を考へ出したであらうか。少々もの足らぬ感じがする。尊敬する喜多村氏の爲に其假說を育て丶見たい。「いつさやむさや」時代には、大體皿の聯想のなかつたものと見てよからう。さうすれば、皿數への妖怪にも交渉のあるはずがない。さやがさらとなり、いつが五、なゝが六の義だ、と解せられると、「なゝさらやさら」と、形の展開して行くのは、直であらう。皿數への形が整ふと、物數への妖怪の聯想が起る。壹岐本居の河童の話に、門に出し干してあつた網の目を、勘定してゐるものがあるので、網に伏せて見るとがあたろであつたと言ふ。何の爲に目をよんだかは、說明する人はなかつたが、妖怪は目の多いものを恐れる習性があるとは全國的に考へてゐるから、之をよみ盡せば、もう何でもなく、其家に入ることが出來ると考へたものと見たのだらう。物よみの妖怪に入れてよいものとしては、歌・經文をくり返し讀んだ髑髏の話などもある。

物數への怪が、こゝまで進んで來ると、皿數への唄と、相互作用で變化して行く。皿數へに最適したものは、河童である。これに結びつけて、井戸の中から、皿を數へる聲が聞えるなどゝ言ひ出したのであると思ふ。いづれ、田舍に起つた怪談であらうが、段々河童離れして、若い女の切りこまれた古井の話が到る處に擴つた。河童が、若い女に拘る理由はある。水の神の贄として、早處女が田の中へ生き埋めになつた物語、及び其が形式化して「一の早處女」を泥田の中に深く縛ばす行事がある。又、水に關聯した土木事業には、女の生贄を獻つたといふ傳へ

が多い。此は實は、生贄ではなかつた。水の神の嫁と言うた形で、擇ばれた處女が仕へに行つた民俗を掛れさせたのである。田や海河の生贄となつた處女の傳説が這入りこんで來ると、切りこまれたのは、若い女。皿を數へる原因は、一枚を破るか、紛失したからだと説く。皿を破つたからして、必しも、くり返し／＼皿數へをするわけもない。數とりをせねばならぬ理由は元の河童にあつたのを、唯引きついだに留つてゐる。平戸には又、こんな傳へもあつた。ある大きな士屋敷に、下女が居た。皿を始末させたら、一枚とり落して破つた。主人が刀を拔いて切りつけると、女は走つて、海へ飛びこんだ。其姿を見れば、河童であつたといふ。此話は、皿を落すのが、女河童であつて、其から直に、若い女に轉化したときめて了ふ事の出來ない乏しい例だが、形は單純である。子供の頭の頂を丸く剃り、芥子坊主にするのは、水の神の氏子なる事を示して、とられぬ様にするのである。同様に「がつそ」或は「おかつぱ」と言ふ垂髪も河童の形である。此方は、頂を剃らない。皿の隱れて居る類の形と見たのであらう。

鬼事遊びの中には、子供專門の鬼を中心にしてゐる事が多い。「かくれんぼう」なども、隱れん坊ではないかも知れぬ。薩・隅・日の三國に共通した「かご」と似た形に、「かくれ」と言ふ河童の方言がある。其以前もつと廣く行はれた時分、「かくれん坊」の語根となつたのではないか。



第五圖

目隱しを言ふ「めなしちご」・「めなしどち」なども、目なし子鬼の義であらう。どちはみづちの系統の語であり、ちごも河童或は河童の好物「しりこだま」を意味する、福岡邊の方言である。河童の外にも、「もゝんぐわ」・「かごじ」・「子とろ」・「めかこう」など言ふのがゐる。

○河童の正體

世間に言ふ通り、一口に河童として、混雜を避けて來たが、所謂河童(かはかろ)と謂うた姿の河太郎・河童の姿を、標準と見做しておいた。だが、其外に、河童と言ふに不適當な姿をしたものがあるのである。

あんなに馬の護符を出す津島神社の四方、可なり廣い範圍に亘つて、河童は居ない。「みづち」一類の語が用ゐられてゐる。大抵は龍を言ふやうである。飛び離れた處々にも、此語を使ふ地方で著しい事は、「みづし」・「みんつち」・「めどち」・「どち」など言ふが、大抵水の主(ぬし)の積りで、村人は畏がつてゐる。殆んど人間の祈願など聞き分ける能力のあるものではない。近づく人をとり殺すと言ふ、河童の一性情を備へて居るばかりで、大抵その正體は空想してゐる場合が多い。だから「みづち」は、必しも一定した動物を言はない様である。「みづち」信仰の最高位にある山城久世の水主(ミヅシ)神社の事を考へて見たい。元來地方々々に自然に生じたと見るよりも、此社の信仰の宣布せられた事を考へる方が正しいらしい。だが今では「みづち」には祠のある物すら尠い。「みづち」の中にも含まれてゐる龍の類は、又、「どんがめ」・「どんがす」・「がめ」など謂ふ別の語で、はつきり區別して示されてゐる。

「みづてんぐ」・「みづてん」などは、土佐に盛んに用ゐられ、又今も盛んに活躍してゐるとせられてゐる。正體は、河童と天狗との間を行く様なもので、嘴の尖つてゐる爲に、かう言ふ名がある。相撲を人に強ひ、負ければ水に引きこむと言ふ。「みづち」よりは、稍人間に近いものである。此語、河童の多い北九州にも、合つて行はれて水天狗の字を音讀する様にもなつた。ある大家では、封國の水の神を、江戸屋敷の屋敷神としてゐたのを公開した。其後久しくはやり神となつた。昔の誓文を固く守つて水に由る災ひは勿論、其以外にも、信仰者には利益を下すと言はれてゐる。

ひようすべは、九州南部にまだ行はれてゐる。此も形は、甚、漠としてゐる。河童の様でもあり、鳥の様でもある。此も、水主神と同じく、其信仰を宣傳々播した時代があつたのである。私の觀察する所では、奈良の都よりも古く、穴師神人が、幾群となく流離宣教した。その大和穴師兵主神の末である。播州・江州に、大きな足だまりを持つて居た。北は奥州から西九國の果てまで、殆んど日本全國に亘つたらしい布教の痕は、後世ひどく退轉して、わけもわからぬ物になつて了うたのである。

新勞農黨樹立の提案まで

大山郁夫

一

八月八日、私たち三人――同志上村、細迫、それに私自身を加へて――は、私たちの名に於て、『新勞農黨』樹立の提案を發表した。その大體の趣旨は、翌九日のブルジョア諸新聞に掲載された。

尤も、ブルジョア諸新聞に出たものは、文字通りに『大體の趣旨』にすぎないものであつて、無論、提案の全意義をつくしたものでなかつた。私が茲で、その提案について言はうとしてゐることもまた、よし幾分か、より詳細に亙ることが出來ようとも、しかしそれにも矢張り、當然のことゝして或る限度がおかれてある。で、結局私たちは、提案全部の内容を知らうとする人々に向つては、提案そのものを讀んでいたゞきたい、といふより外はないのだ。

私たちのその提案は、全國幾萬の同志たちに向つての呼び掛けの形で出されたものである。それらの同志たちは、勞農黨時代以來、雨に嵐に、私たちと腕を組みかはし、敵の堡壘から絶えず浴びせかけられて來た彈壓の砲火の下を、互に生死を誓ひつゝ歩みつゞけて來た人々である。從つて私たちは、少くとも外觀上は非常に急角度を描いた轉向の如く見られ得る行動を提議するに當つては、誰れよりも先づ、第一にそれらの人々に、その案を示さなければならない義務を感じるのである。

だが、それと同時に、私たちのその提案は、それらの人々以外の、更らに廣汎なる範圍に亙る戰闘的勞働者農民大衆に對してもまた、一個の重大關心事であらねばならぬ。もとより、それに盛られてある全内容は、私たちが、現在の左翼戰線にとつ

て、唯一の正しき局面打開の道だと考へてゐるところのものに關聯してゐるものである。そして今日、左翼戰線の一進一退について心から喜憂を共にしてゐるものは、單にわが左翼の陣營内のものだけに止まらず、右翼・中間派の陣營内および一般無産市民層の間にも非常に多く見られ、且つ益々その數を加へて行かうとしてゐる。この點から、私たちは、私たちが同志の人々に宛てた提案を、更らに廣く一般的に全國の戰鬪的大衆にも示して、その忌憚なき批判を求めたいとの切なる希望を懷くに至つた。それゆゑ私たちは、その提案をそれらの戰鬪的大衆に向けたパンフレットの形に於て、市場へ出さうと企てゝゐるのである。

で、私は今、本文に於ては、絕對に必要な場合以外、出來得る限り、そのパンフレットと重複するやうな言ひ方を避けつゝ、本誌の讀者諸君のために、主としてその提案に至るまでの經過およびそれに附け加へて提案そのものゝ内容を、出來るだけ簡明に略述しようと思ふ。

二

顧みれば、昨年末、新黨準備會は、「勞働者農民黨」の結黨大會を擧げた際に、十五項に亙る行動綱領を掲げてその前途の闘爭目標を明示したが、忽ち支配階級のために解散を强制され、延いて「勞働者農民黨」も同時に不成立に終つた。

それと共に、結黨大會に參加してゐた全國各地からの數百の代議員たちは、口々に「工場へ！ 農村へ！」のスローガンを叫びかはしながら、各自それぞれの陣地に歸還し、爾來、合法政黨結成の意圖を一擲して、政治的自由獲得勞農同盟の新闘爭形態の下に於て固く結束した。それは主として、その時までに「プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない」といふ一根本原則を新たに學び取つた戰鬪的勞農大衆の熱烈なる要求を反映したものであつた。

その間に、例の水谷長三郎君一派の卑怯なる裏切りがあつて我々に歯ぎしりを嚙ましめた。次いで同志山宣の悲壯なる橫死が起つて、我々の毛髮を逆立たしめた。更らに息をつくひまもなく、四月十六日の嵐が我々の左翼陣營に襲ひかゝり、再び幾百の精銳闘士を奪ひ去つて、我々の眦を決せしめた。

かゝる事變の頻發のために、我々の行く手は、一時、暗澹たる密雲に鎖ざされたかの觀があつた。だが、全國各地に於ける我々の同志たちは、それにも屈せず、否、それがために益々その闘志を鋼鐵の如く鍛ひあげつゝ、層一層その背後の戰鬪的大衆との提携を緊密にして、一圖に闘爭の展開と陣營の恢復との

ために、英雄的に行動しつゞけて來た。

それにも拘らず、三郡に於ける同志山宣の告別式、勞農葬、追悼會、およびその前後に全國各地に展開された市町村會選擧鬪爭を一期として、わが勞農同盟の鬪爭は、忽ちはたと障碍物に行き當つて、各方面に於て二進も三進も動きがつかないやうな形勢を現出するに至つた。

全國の同志たちは、『これではならない』と、あらゆる手段を講じて、ひたすら前途への通路を打開しようと試みた。私たちも及ばずながら、それらの勇敢なる同志たちの驥尾に附し、あらゆる鬪爭場面に進出して、精根のつゞく限り惡戰苦鬪を共にした。だが、我々は、我々が死に物狂ひになればなるほど、我々の手足が益々緊縛されて行くのを感じた。

『何故に？』——

私たちは次第に、私たち自身に向つて、この疑問を發せざるを得なくなつた。

三

『何故に？』——我々がこの疑問を提起する各瞬間に、まづ我々の腦裡にピンと來るのは、四・一六事件である。

四・一六事件は、全左翼戰線の上に、今後の或る期間に亙つて容易に恢復し得られさうには思へないやうな、慘憺たる被害狀態を現出した。我々は到底、燃ゆるが如き憤激なしに、それに見返ることはできない。だが、事實はあくまで事實である。だとすると、それが、事實上さうである通りに、如何に我々の意圖に反することであるにもせよ、我々は決して、それに對して我々の眼をつぶつてはならない。否、いやしくも我々が我々の現實の行動を如何なる幻覺の基礎の上にも置いてはならないとする以上、我々は大膽率直に、それを直視しなければならない。一切はそこから始まるのだ。

更らにまた、全左翼戰線の上に一地位を占めて來たわが勞農同盟も、當然のことゝして、それにつれて空前の一大打擊を受けた。殊に、幾多の又と得がたき一粒選りの百戰練磨の鬪士たちが、踵を接して我々の陣營からも奪ひ去られた。尤も、それに直ぐ引き續いて、新銳の氣を負ふ優秀なる鬪士たちが、次から次へと來り加はつたが、それにしても、それらは少くとも數だけの點からも、前者の空位を充たすには遙かに不足であつた。

だが——然り！あくまで『だが』だ！——かうした凡べてのことを認めても、しかも尙ほ他方、我々の陣營に於ける鬪爭精神は、決して下火になるやうなことはなかつた。否、それは、一つ一つの試錬を經る每に、益々旺盛に燃えさかつて行くばか

りであつた。それに、いはゆる『右翼大衆の左翼化』の傾向もまた、次第に益々顯著になつて行く有樣が、樣々の機會に我々には明瞭に看取され得るやうになつた。それは、それらの右翼大衆の左翼化的傾向が、常に具體的に、我々の陣營に對する彼等の熱烈なる精神的支持となつて現はれるに至つたからである。この意味に於て我々は、少くとも我々の陣營の內部の潜在的もしくは可能的鬪爭力は、寧ろ急速に增大して行つたといふことが出來ると思ふのだ。

それにも拘らず、少くとも表面に現はれて來る我々の活動は我々の必死的努力に頓着なく、段々と行き詰まりの徵候を示すやうになりだした。殊に、大衆的規模に於ける鬪爭は、我々の手に依つて遂行することが刻一刻困難さを增すやうになつた。かくて我々は、折角右翼大衆から我々の陣營に向つて與へられる熱烈なる精神的支持を活かして、それを現實の鬪爭に組織することすら出來ないやうな狀態に陷つた。それどころでなく、我々の主催もしくは參加の下に於ては、演說一つが完全に持てないやうにもなつた。卽ち、我々の演說會か開會後數分にて解散を强制されたり、甚だしきに至つては、開會前に徹底的に蹂躙されたりするやうなことが、最近に及んで益々頻繁に起るやうになつた。しかも我々は、官憲のかゝる露骨極まる蠻壓に對してすら、强力なる大衆的反抗運動を捲き起すことが、段々と出來なくなつて來た。

かくて我々は必然に、『何故に？』の問題に打ッ突かつて行かざるを得なくなつた。

この點に關して、我々は無論、資本家地主の政權に正面から對抗する我々の陣營の弛緩といふやうな、一般的な根本問題に觸れようとしたのではない。我々はまた、現在我々が直面してゐる力關係といふやうな、解かり切つた問題を今更らのやうに取り上げようとしたものでもない。我々は具體的に、我々が曾て精力的になし得た活動を今我々に出來ないやうにしたところの、最も直接的な原因を探求しようとしたのだ。

そして、『それは實に我々が現在取つてゐる政治的自由獲得勞農同盟の鬪爭形態が現下の狀勢に對する適應性を失つたところから來てゐるのだ』といふのが、我々がこの點に關して究極に到達し得た斷案であつた。少くとも、私たちが見たところは、さうであつた。さうであらざるを得なかつた。

四

では、その勞農同盟の鬪爭形態とは如何なるものであるか？

それは、わが左翼運動に關心を寄せられてゐる諸君には夙に

充分に知られてゐることであるが、しかし私は玆で念のため、我々の當面の問題に緊密な關係のある二三の要點の輪廓だけをでも次に、示しておかうと思ふ。

新黨準備會解散の直後、我々はその解散の際に掲げられた十五項の行動綱領を鬪爭目標として我々の眼前に見据ゑ、他方同時に無産階級の刻々緊急の必要に應じて、各種の鬪爭題目の下に於ける臨機應變の鬪爭――カンパニア――を、自由に、敏活に集中的に遂行し得るために、政治的自由獲得勞農同盟に轉形して行つた。かくして出來た勞農同盟は、獨自の指導部をも、さらに組織上正式の如何なる特定機關をも、一切持たない組織――否、組織といふには餘りにも漠然とした外形をしか持たない一個の鬪爭體となつて、各種のカンパニアに動員されて行くべきものであり、しかも鬪爭の過程に於て發展的に解消して行くべきものとして規定された。かくてそれは、その基礎となつてゐた精神的結合の極めて鞏固なのには非常に不釣合ひにも、組織としては極めて不充分なものであつた。

かゝる組織形態の下に、勞農同盟は、或ひは選擧鬪爭に、或ひは各種の暴壓反對運動、自由獲得運動等々に、一時は相當に活潑に動いたのであつた。

だが、そのうちに、勞農同盟は、その組織形態のために、次第に急速に轉換し行く狀勢――特に四・一六事件以後の――との聯關に於て、少くとも大衆的規模に於ける強力なる鬪爭を充分に展開することが出來なくなつて來たことが、次第に明瞭になりだした。しかもその事は、さうした大衆的規模に於ける強力なる鬪爭こそが、當面最も必要となつて來た瞬間に、益々明確に感知されるやうになつた。

理由は簡單である。一體、時々刻々のカンパニアのための鬪爭體は、大衆的に強力に活動し得る別個の何等かの機關の指導下におかれてこそ、始めて敏活にその本來の機能を發揮し得べきものとして理論上規定されてゐるものである。しかるに、當面、勞農同盟を繞ぐる客觀的狀勢は、さうした事の行はれ得る可能性を益々破壞して行つた。とにかく勞農同盟は事實上、時の經過につれて次第に、大衆的規模に於ける強力なる鬪爭を展開することの上にも、各種のカンパニアを全一的な政治的自由獲得鬪爭に統一集中することの上にも、各地に於ける鬪爭を全國的連絡および統制の下に持ち來たすことの上にも、また益々激化し行く彈壓に對して充分なる反撥力のある抵抗運動を捲き起すことの上にも、多くの場合に於て、決定的な障碍に打ッ突かつて、よし全國的に見て多少の例外はあるにしても、その全活動の大部分が可なりの停頓狀態に移つて行つたのだ。

他方、同一事實の別樣の現はれとして、或る特殊の場合に於ては、勞農同盟が或る目的のためにカンパニアの組織を作ると、それが、同盟それ自體を、『鬪爭の過程に於て發展的に解消』しようとする勢ひを示す組織たらしめるよりも、寧ろ逆に、鬪爭の過程に於て發展的に益ゝ恒常化しようとする勢ひを示す組織たらしめるに至つたやうなことも屢ゝ不可抗的に起りだした。さうしたことの實例は、市町村會選擧鬪爭を契機として最も多く示されたが、殊に大阪市に於けるそれは、この一點に於て、最も典型的のものと見られ得る。即ち大阪市會選擧に際して、勞農同盟は「市會選擧無産團體協議會」を組織し、それを主體として選擧鬪爭を遂行したが、それは鬪爭の過程に於て、いつしか今言つたやうな方向への發展を辿るやうになつたのだ。私たちの『提案』は、その經過を詳述してゐる。それは非常に注意すべき現象だと私に思はれるから、私は次にその極々の要點に涉る部分だけを拔萃して掲げよう。

『後者「大阪市での「市會選擧無産團體協議會」」の場合に於ては、それが選擧期間中暫定的に設けた諸機關が、選擧後直ちに解體されずに、次第に地方政黨的特徵を帶びた一個の恒常的組織にまで發展した。少くとも發展しかけたのであつた「傍點は原文による。筆者。」殊にそれは、單純に或る特定のカンパニアの爲の委員會といふには餘りにも恒常的な、しかも餘りにも廣汎な任務を帶びしめられた委員會――それは獨自の指導部といへる程度にまで發展した――を持つた。又持たざるを得なかつた。然り、現實の必要がそれを持たしめたのだ。即ち、大阪市會議員の選擧後、大阪の多くの無産團體――社會民衆黨や日本大衆黨の指導下に身を置くことをいさぎよしとせず、と言つてまた勞農同盟に入ることをも躊躇した多くの無産團體――は、同志小岩井淨の當選を機として、勞農同盟の指導下に大阪地方政治對策協議會を組織した。……

右の場合に、市會を中心に、或ひはそれを契機に、廣汎なる鬪爭を展開する必要のあるといふ事には異論があるまい。またそれがためには一定の組織が必要であるといふことも無論である。更らにその組織は出來る限り多くの無産團體を糾合すべきだといふことも當然の主張である。さうすると、その組織は、或ひは市會議員の統制のための、或ひは樣々の日常鬪爭を展開するための必要なる諸機關として、常任委員會(これは方針を決定する)、それを廣くした協議委員會、その他、調査部、會計部等の諸部門を持つことを、どうしても必要とするのである。で、大阪の同志諸君も、不完全ながら、それらの諸機關を持つた。同地方の同志諸君は、日常不斷の

闘爭を遂行するために、どうしても、それを持たざるを得なかつた。現下の難局を乘り切るためにかくまで惡戰苦闘を現實にしてゐる我々の同志たちの行動を、何人が暴慢にも日和見主義的傾向として漫罵し得るか！（傍點は原文による筆者）

我々の陣營に特有の具體的問題を、これ以上に展開することは、本文が向けられてゐる一般讀者諸君には却て迷惑に感じられることであるかも知れないから、それはこの邊で切り上げることにするが、それにしても、右の如き調子で大阪市に起つた事實に類似點を多く持つ諸他の實例が、全國の諸他の地方にも次々と簇生するやうになつたといふ一事實だけは、玆に一言附記しておかれなければならぬ。

五

かくて、勞農同盟の活動は、客觀的狀勢の異常に急速なる轉換の下に、その本來の任務の遂行に於て、全體的に行き詰まつてしまつた。もとより私たちは、個々の場合に於て、或ひは個々の地方に於て、幾分例外らしく見える諸現象がないでもないことを知つてゐる。だが、さうした個々の場合、或ひは個々の地方の諸現象も、結局は全體との聯關に於て認識されなければならないものであり、そして、さういふ風に認識されるとき、それらの諸現象もまた、決して全體として示されてゐる一般的傾向の埒外に立つてゐるものでないことが明かに知られるのだ。

私たちは無論、我々の陣營の過去を××しようとしてゐるものではない。否！　それとは全然反對に、私たちは、我々の陣營の過去が持つ至深至大の階級的意義を正當に評價することが、私たちに課せられたる一の階級的義務だと考へてゐるものである。

まづ第一に、私たちは、昨年末新黨準備會が自らを解體して勞農同盟に轉形して行つたのは、當時の客觀的狀勢の下に於て、我々としては絕對に×しき道を行つたものだと確信してゐる。更らにまた、勞農同盟の形態に於て展開された各種の闘爭は、よしその直接の具體的效果がその絕大努力に伴はなかつた觀があつたにせよ、我々の闘爭經驗を無限に豐富にし、我々の理解を極度に深めることに與つて大に力があつたものだ。のみならず、本文の筆者の個人的意見では、我々が取つた勞農同盟の闘爭形態は、或る場合に於て、右翼および中間派の大衆をして左翼戰線の闘爭の意義を正しく把握せしめ、延いてそれらの大衆の左翼に對する熱烈なる精神的支持を激成したことの上に於て、我々が他の如何なる闘爭形態の下に於てもなし得ないほど

のことを我々になさしめた。少くとも筆者自身は、さう考へることが決して一片の空想でないことを信じてゐる。いづれにせよ、我々が勞農同盟の下に於ける諸般の闘爭から、樣々の非常に貴重なる教訓を學び取つたことだけは、一點疑ひようのない事實である。

だが、當面の問題はそこにあるのではない。それは實に、現在の瞬間に於て全體的に行き詰まつてゐる勞農同盟の前途を、如何にして無產階級全體の利益の立場から見て正當に打開すべきか？ の上にあるのだ。

だが、この問ひに對する私たちの答へが、如何にして新勞農黨樹立の提案の形を取つて現はれるに至つたか？ 私たちは、次にこの新たなる問ひに答へなければならぬ。

六

『勞農同盟の前途を何とかして打開しなければならない』といふ聲は、最近二三個月間に於て、私たちが至るところで聞いて來たところのものである。

『私たちが至るところで――』

かう言つた私の言葉は、幾分修正されなければならぬ。少くとも、次の一句を以て補足されなければならぬ。――私たちの活動場面は、最近になればなるほど、段々と縮小されて來たのだ。』

事實上、この二三個月は、私たちは東京およびその附近、竝びに京・阪神の間を、あらゆる機會を求めて往復してゐたにすぎなかつたのだ。この事實が持つ意義は自明である。それは一面に於て、他の諸地方に於ける勞農同盟の全國的連絡の下に於ける活動の靜止狀態への推移を、或る程度に反映してゐるものと見るのが當然だ。――もしくは、私がかう考へることが間違ひであらうか？

假りに私のかうした考へが正しいとすれば、――私自身は無論あくまでそれが正しいと確信してゐるのだが――問題は非常にデリケートでもあり、また重大でもある。前に言つた通り、我々の陣營の內部の潛在的もしくは可能的闘爭力は、決して減退してはゐないで、寧ろ大衆の左翼化的傾向、およびその具體的表現と見るべき大衆の左翼支持の熱度の著るしき昂進の徴候と併せ考へるとき、それは非常に增大してゐるとさへ言へるのではないか！ ところが、それの表面上の現はれは、まさに今までに述べて來た通りなのだ！

かくて最近私たちが直接に接觸して來た同志たちの多くは、かうした局面の打開策のために頻りに腦漿を絞るやうに、已む

に已まれない內的衝動を感じだして來てゐるやうに見えた。屢々私は、『勞農同盟を擴大强化せよ』との聲が、如何にしてそれを實現すべきかの具體案を作ふことなしに繰り返されたのを聞いた。時としては、『勞農同盟を解散せよ』との絕望的な要求の叫ばれるのをも聞いた。もとよりその要求は、一つの別個の考慮の上に基礎づけられてゐるものであるが、しかし私たちがその基礎とされたその別個の考慮について推測し得た限りに於ても、それは依然として絕望的な叫びに聞えた。また或る場合には、私たちは、『勞農同盟をして政黨的任務を遂行せしめよ』と欲求する同志たちにも出會つた。しかし、それには大抵、『だが同盟に政黨的形態を賦與してはならない』との制約的な言葉が附け加へられたので、それは結局無理な要求となつた。偶まさうでない場合には、『同盟に政黨としての實質を與へるのも、この際已むを得ないが、しかしそれに黨の名を與へてはならない』といふやうな、一種の名目論までが唱へ出されさへした。これは明かに觀念論の繩張りの中へ落ちて來るものであつて、しかもその中で『政黨としての實質』云々といはれてゐるその『政黨』が、我々が推測する通りに必ずしも合法政黨を意味してゐるものでないとすれば、その議論の當然の歸結は無意識的に、或る意味に於てそれを主張する人々の眞の意圖とは全然反對のものとなるのである。

かうした樣々の意見は、當面の具體的問題の實際的解決には何の役にも立たないもの、やうに、私たちには考へられた。しかも、觀察を私たちの耳目のとゞいた範圍內だけに限つて言へば、それらの意見の提出に於てイニシアティーヴを取る人々は常に我々の陣營の前途に異常の關心を持ちながらも樣々の事情のために、現實鬪爭の場面から比較的に遠退いた地位にあつて我々の運動の進路を論究しようとする『机上の戰術家』たちの間に多く見られたことは事實である。

七

では、勞農同盟の前途は、その自然の成行に放置していゝのか？

この問題は、私等の見るところでは、必然に、大衆的政治鬪爭は、現在のやうな不振狀態のまゝに放置していゝのか？といふ點に歸着する。

かくいふとき、我々の眼前には、我々が曾て勞農黨時代に於て展開した潑剌颯爽たる大衆的日常政治鬪爭の姿がちらつく。だが、過去をして過去を葬らしめよ！　我々は徒らに綿々たる懷舊的情緒に浸つて滿足してゐるものではない。それはたしか

だ。

しかし、我々が我々の視野をたゞ現在だけに限ることにしても、無産階級の立場からは、大衆的日常政治闘爭の必要が少しでも去つたとは決して言へない。否！　現在ほど大衆的日常政治闘爭の必要が痛切に意識される時は曾てなかつた、といふことこそ眞實中の眞實だ。

我々が幾ら聲をからして「政治的自由獲得闘爭」を叫んでもそれが刻々不斷に展開されゆく大衆的日常政治闘爭の上に現實に表現されて行くのでなければ、それは畢竟空語に終るしか途はないのだ。

いかにも、今日ラストヘビーをかけられたかのやうに着々進行してゐる産業合理化、およびそれにつれて益々深化しゆく不景氣の下に於ける生活苦の果てしなき加重のために、大衆が益々自然成長的に闘爭的になりつゝあることは、掩ふべからざる事實である。だが、そのことから生ずる必然の結論は、だから我々が意識的に大衆的日常政治闘爭を組織する必要がないといふのでなくて、逆に、だからこそ我々が意識的に益々大衆的日常政治闘爭を組織する必要があるといふのでなければならぬ。大衆の自然成長的な××××は、絶えず際限なく發展しゆく大衆運動に動員され組織され表現されて行つてこそ、始めて益々冴えに冴えつゝ尖鋭化し行くべきものである。

だが、勞農同盟は現狀のまゝでは、當面の客觀的情勢との聯關に於て、最早かゝる大衆的日常政治闘爭を強力に展開することが出來なくなつた。それは、我々が手をポケットに入れたまま我々の頭腦の裡で客觀的狀勢を分析究明しつゝ知り得た結論ではなくて、我々が力の限りをつくしての惡戰苦闘の過程に於て身を以て學び取つた動かすべからざる活事實である。我々がそれを自己に告白することが如何に心苦しくとも、我々は最早、それに對して自己を盲目にしてはならないのだ。

かく考へるとき、我々がこの際我々の積極的努力によつて、勞農同盟の前途の打開策を試みなければならない必要のあることは、既に自明である。で、問題は再び、その方法如何？　といふ一點に集中的に歸着するのである。

八

私たちは次第に、私たち自身に於ても、現狀勢下に於て階級的に最も正しいものと認められ得る方法に於て、實現可能の局面打開策を講じなければならない責任を自覺するに至つた。それは遂に、さほども強き現實感となつて私たちに迫つて來だしたのである。

そのうちに、私たちは、京都の同志河上から、即時この問題の解決に努力する必要はないか？との激勵的意味のこもつた問ひ合はせを受けた。それを契機に、私たちの眼から最後の鱗が落ちた。私たちの決意は、最終的に作られた。

だが、私たちは同時に、私たちが私たち自身の解決案の作成に取り掛かる前に、尙ほ一つの仕事が殘されてゐることを見て取つた。それは、先づこの問題に關する全國の現實に鬪爭しつゝある同志たちの、およびそれらの同志たちを通じてその背後の戰鬪的大衆の、大體の意向もしくは要求を見究めておかなければならないといふことであつた。それはいふまでもなく、私たちは、それらの同志たちおよび戰鬪的大衆と共にある時のみ強く、それを離れては絕對に無力であることを、勞農黨時代以來の私たちの鬪爭經驗を通じて、泌々と身に占めて知りつくしてゐるからである。

私はさきに、我々の同志たちの一部の間に行はれて來た諸意見の大體の方向について語つた。その際に私は、さうした諸意見が當面の具體的問題の實際的解決のためにさして役立たないやうに私たちに考へられたことをも述べた。そこで私たちは、更らに私たちの視野を廣汎に擴げて、全國に於ける一般の同志たちおよびそれに附け加へてその背後の戰鬪的大衆の——殊に年來不斷に現實の鬪爭の渦中に動きつゞけて來た同志たちおよびその背後の戰鬪的大衆の、同じ問題に對して懷いてゐる眞の要求を探らなければならないと考へて、早速その仕事に取りかゝつた。それに關して、同志細迫は主として關東以北の方面の觀察を擔當した。私たちは更らに、大阪の同志小岩井——この同志は豫てからこの問題に深き關心を持つてゐることを私たちに打ち明けてゐたのだ——に、關西以西および以南の方面の觀察を委托した。

かくして私たちは、全國に於ける同志たちおよびその背後の大衆の間に、當面の狀勢との聯關に於て、自分自身の政黨を持たねばならないとの要求が、一般的傾向としては、暗々裡にではあるが、それにも拘らず非常に強く動いてゐることを確めることが出來た。

無論、さうした要求は、大體上、「自分自身の政黨への要求」とのやうに、さほども明確に言ひ現はされてゐるものではなかつた。だが、それらの同志たちおよび大衆は、現在こそ特に大衆的規模に於ける政治的自由獲得鬪爭を猛烈に進展せしめる必要を痛切に意識し、そしてそのために全力的に鬪爭すればするほど、現在の勞農同盟よりは一層鞏固な、しかも獨自の指導部——現實に鬪爭しつゝある全國の最も鍛錬されたる同志たちを基

礎として築き上げられたる——を持つところの恒常的政治的組織を、それとなく欲求するに至つたやうに見えたのだ。

だが、獨自の指導部を持つ恒常的政治的組織！　それこそまさに、自分自身の政黨そのものではないか！　もしくは、我々のすべてに最も印象の深い一の歴史的聯想によつて同じことを別様に表現することが私たちに許されるならば、「新勞農黨」といふのが、恰度それと同意語をなすものでないか！

自分自身の政黨への要求！　それは、新黨準備會の解體以來、我々の陣營に於けるすべてが、自他共に意識的に抑へに抑へることを、我々の階級的義務として意識して來たものである。そして我々は、或る期間は、その事に完全に成功して來たものである。しかるに、最近——特に四・一六事件以後——に於ける客觀狀勢の急轉の下に、右の要求は、一般の同志たちおよび大衆の間に、再び暗々裡に擡頭するに至つた。それは、それらの同志たちおよび大衆の、自己の階級的義務に對する意識が突如として稀薄化したためか？　斷じて否！　それは實に、他の階級的義務意識——しかも當面、より緊急なるそれ——である大衆的政治闘爭遂行の必要の識意から不可抗的に湧き上がつたものに外ならないのである。

かゝる確信を伴ふ認識を得た私たちは、更らに四圍の様々の狀況から、極度に私たちの解決案の作成に急がされたので、最近約一箇月の間は、互に額をあつめて討論や協議に沒頭した。

私たちはまづ、廣汎なる範圍に亙る同志たちおよび大衆の間に暗々裡に動きつゝある自分自身の政黨——合法的左翼政黨——「新勞農黨」の樹立への要求が、果たして嚴密に當面の客觀的狀勢との聯關に於て階級的に正しいか否かを徹底的に再吟味して、この問題に關する私たちの認識を決定的に確立しなければならなかつた。

この仕事に於て、私たちが右の二人の同志たちと協同して、最後に到達し得た斷案は、無條件的に肯定的のものであつた。私たちは今その理由のすべてを述べつくしてゐる餘裕を持たないが、しかしその一つ一つについての説明——比較的に簡短にではあるが——を、私たちの「提案」が載せられてあるパンフレットに於て述べておいた。で、玆ではたゞそのホンの荒筋だけを、次に記るしつけておくことに止める。

田中政友會内閣の倒潰の後を受けて、金解禁および對支政策の二問題の斷乎たる解決を公然聲明して出現した濱口内閣は、

產業合理化および××××××準備に向つて、田中軍事內閣以上に、まつしぐらに猛進しようとしてゐる。從つてこの××の下に於て、不景氣は益々深刻になり、勞働者・農民・無產市民の窮乏は益々增進し、その自治的自由は益々××されようとしてゐる。か〻る狀態の下に於て、無產階級はその××××××を層一層果敢に進展せしめけなればならぬ。

しかも、か〻る鬪爭は、現在に於て、一體どこに進展してゐるか？

全左翼戰線は、特に四・一六事件以後、慘憺たる被害狀態を現出し、そしてその上に一地位を占めて來たわが勞農同盟の活動が、我々の死に物狂ひになつての奮鬪にも拘らず、全體として殆んど停止狀態に入つてゐることは、我々が自己の體驗によつて、餘りにも痛切に知り拔いてゐることである。殊にこの事が、我々の陣營の內部の潛在的もしくは可能的鬪爭力が決して減退してゐるのではなく、寧ろ大に增進してゐるといへる狀態の下に起つてゐることを考へるとき、それは我々に取つて、あらゆる意味に於て非常に重大なる本質を持つものだといへる。

では、諸他のいはゆる「無產黨」は如何！

社會民衆黨、日本大衆黨、舊無產大衆黨系分子、勞農大衆黨、等々の指導部を構成する一切の左・中・右の社會民主主義的幹部は現段階に於て、陰に陽に、帝國主義ブルジョアジーの意志を、その理論乃至實踐の上に反映して、巧妙なる手段によつて產業合理化および帝國主義戰爭準備に直接乃至間接に參加し、支配階級と完全に協同してゐる。彼等はまた、我等が年來大衆的日常××××××に終始して來たのとは全然反對に、見え隱れに×××に追隨して來た。殊に社民黨幹部はこの點に徹底してゐて、その極、展望し得られる將來に於て聯立內閣主義に赴くべき必然性を示し、しかもそれは遠き將來に於けるマクドナルド政府タイプの單獨內閣への前程と見られる。か〻る左・中・右の社會民主主義者たちに對支配階級鬪爭の遂行を望むのは全然間違ひであるばかりでなく、我々が苟くも勞働者・農民・無產市民・その他一切の×××××民衆の利益を代表してブルジョアジーと生死の××××限り、その片割れである彼等とも全力的に戰はなければならない。たゞ彼等が率ゐる尨大なる大衆の益々增大し行く一部分は、現在滔々として左翼化的傾向を辿りつ〻あるがゆゑに、それは將來我々が共同鬪爭に於て溫き手をさしのべなければならない貴重なる戰鬪的分子だといふべきである。

か〻る狀態の下に、我々はこの際斷然蹶起して大衆的日常政治鬪爭主義に立脚する政治的自由獲得鬪爭を捲き起すことの×

××に××なる理由を明白に看取することができる。が、更らに次の如き諸事實は、我々のこの結論を一層强めないでおかない。

現在ストライキの×が全國的に高まりつゝあるが、それに對する左翼勞働組合の指導權が刻一刻減退しつゝあるやうに見られ、そのために、多くの爭議はウヤムヤのうちに終る傾向がある。まさにこれ、左翼勞働組合の××が極度に×××なければならない秋だ。もとより、左翼勞働組合の××のためには、直接當事者たちの各種の形態に於ける絶大努力がなされなければならないが、しかし支配階級の彈壓手段が完備に近づいて來た今日、それは大衆的政治鬪爭の××の××なしには、その實現が可能だとは思はれない。で、我々の××は、あくまで全力的にこの××を擔當しなければならないのだ。

更らに、帝國主義の現段階に於て絶對に××視されなければならない無産階級の戰線統一の事業もまた、我々の陣營の蹶起を待つてゐる。この方面に關して、社民黨の所謂「大右結成主義」および舊無産大衆黨の所謂「指導精神にこだわらざる全無産政黨の合同方針」は、共に極度に非階級的のものとして排擊されなければならないのである。現在、階級的に見て眞に正しき戰線統一は、我々の陣營が長期に亘る經驗と討論とによつて最後に到達した所謂戰鬪的戰線統一——即ち、いはゆる「×からの共同鬪爭」によつて、左翼的指導精神の下に××××××を渾一融合する方法——を通じて實現を期待され得るのみである。そして、この意味に於ける戰鬪的戰線統一實現のため鐵の如き意志と多少の經驗とを併せ有するものは、全無産階級戰線を通じて、たゞ我々の陣營あるのみだ。

以上に述べた樣々の考慮から、私たちは、現在我々が大衆的日常政治鬪爭を强力に展開することを不可能にしてゐる勞農同盟の形態を一擲して、合法的左翼政黨として公然の舞臺での活動に再進出することが、當面の客觀的狀勢との聯關に於て、我々の陣營に取つて階級的に最も正しき行き方だと確信するに至つたのである。

尙ほ、現狀勢の下に於て結黨は可能か否かの問題に關しては、私たちは『鬪爭を通じて可能だ』との斷案を與へたが、しかし玆ではその說明を私たちのパンフレットに讓らなければならない。

最後に私たちは、新勞農黨樹立への進出は——

(一)「プロレタリアートの黨はたゞ一つしかあり得ない」といふ理論と矛盾しないか?

(二)社會民主主義への轉向を意味するものではないか?

の二つの理論上の疑問に打つ突からざるを得なかつた。

それらの點に關する私たちの解答についてもまた、私たちは私たちのパンフレットに讀者諸君の注意を向けなければならない。

一〇

若し私たちの「新勞農黨」樹立の提案が、全國に於ける同志たちの間に於ける大衆的討論の結果として採用されることになれば、我々は時を移さず結黨運動に入らなければならないが、その際新黨は、如何なる性質および任務を持ち、如何なる組織形態を取らなければならないものであらうか？

私たちの提案は、現在に於ける我々の主體的諸條件および客觀的狀勢に照應して、新黨の性質・任務・および組織形態に關する根本原則は、必然に次の如きものでなければならないと規定してゐる。

すなはち「新勞農黨」は——

(一)勞働者・農民・無産市民・その他一切の被壓迫民衆の利害を不斷に・強力に・現實的に・效果的に××××するために、大衆的××××××主義を全活動の基礎とする。

(二)かくて個々の場面に於ける鬪爭を、政治的要求にその必然的聯關に於て結びつけ、全鬪爭を政治的自由獲得鬪爭に集中統一して強力に展開する。

(三)他方、かゝる立場に即して、戰鬪的戰線統一の決定的實現に努力する。

(四)以上の目的の遂行のために——

(イ)完全なる黨内デモクラシーの上に、

(ロ)獨自の指導部——現實鬪爭の過程に於て、その必要から不可抗的に産まれたる——を持つところの、

(ハ)恒常的政治的組織を確立し、

(ニ)合法的左翼政黨として、公然の舞臺に於ける活動に進出する。

親愛なる全國の同志諸君および戰鬪的大衆諸君！

私たちの提案が幸に諸君の採用するところとなつても、我々のその「新勞農黨」が最終的に樹立されるに至るまでには、我々はおそらく、尚ほこの上幾多の惡戰苦鬪を重ねなければならないであらう。だが、我々は斷じて絕望的態度に陷つてはならない。我々は我々の陣營の内部に於て、相當に長き過去の經驗を持ち、從つて幾多の鍛錬されたる精鋭鬪士を持ち、更らに全國の×××××大衆の熱烈なる精神的支持を持つてゐる。されば諸君！　お互ひに不動の自信を以て、×××通じて結黨へ進まう！　我々が勞働者・農民・無産市民・その他全被壓迫民衆の生活と自由のために、資本家・地主の陣營に向つて進軍するところ、

いかにも我々の結黨への道も荊棘の道であらう。だが、それは我々には覺悟の前だ。更らに將來合法黨として一方に屹立するやうになつても、――否、さうなれば一層――彈壓の砲火は益々繁く我々の頭上に集中されるであらう。それも承知だ。我々の合法的舞臺が決して平和の樂園でなかるべきことは、我々のすべてが敬愛して措かざる我々の同志山宣の壯烈なる英雄的最期がこれを證明する。お互ひにたゞ個人的安逸を求めるものならば、そのまゝ無爲に我々の闘爭力を腐り行くに任かしておくに越したことはない筈だ。だが諸君！　それは我々の階級的義務意識が、斷じて許さないのだ。刻一刻危機に瀕しつゝある×××民衆の利益は、我々に躊躇なき蹶起を厳命する。聞け！　今なほ活けるが如く我々の耳底に殘る亡き同志山宣の聲は、雷の如く響き、我々に號令して、我々を政治的自由獲得闘爭の戰場へと驅り立てる。さうだ！　我等の行くところは、戰場であり、墓場である。

最後に、私たちは諸君に向つて叫ぶ。――

×××通じて結黨へ！

すべての闘爭を政治的自由獲得闘爭へ！

××勞働組合××萬歳！

×××××××××！

新勞農黨樹立運動萬歳！

西部戰線異狀無し

最近初める出版部の計畫については未だ何も話したくないのだが翻譯權の問題から一部世間に洩れてしまつたので、序に茲で披露しておく。

出書は獨逸で今年の一月出版されたもので、五月までに一擧にして五十萬部を賣り盡したといふレコード破りの本で、作者はエーリヒ・マリア・ルマルクといふ一兵卒の手記である。いはば一無名兵士の戰爭物語である。が日記ではなく、小說でもない。丁度、小說が面白くなくて愛想をつかされ。大衆文學やチヤンバラ物が歡迎される現代に至極好適なものだからだらうと思ふが、全くよく賣れたものである。學校の腰かけからいきなり塹壕へ飛込んで、流血と死との中に青春を埋めて了つた一ジエネレーションの壓倒的體驗を血を以て綴つたが爲であらう。

譯は秦豐吉氏に依頼してゐる。氏も非常な興味を以て讀まれたさうだが、最近岩崎昶氏の書かれた物にかういふのがあるから拔いてお見にかける。ちよつと興味のある近來の讀物に相違ないと思ふから……。

……近來、長篇を滅多に讀まない僕、長篇に直ぐ倦怠を感じる僕、スピード狂であり、且つ根氣のない僕、(毎朝新聞で、マクニンジエリーの廣告を見て、どうもこれはテツキリ蛔虫にたかられてゐるに違ないと確信してゐる)その僕をして、最初の一行から、最後の一行まで昂奮して一氣に讀破させた本が一冊ある。それは「西部戰線異狀無し」である………。

『新勞農黨樹立の提案』を讀む

河上肇

一

『新勞農黨』樹立の提案が、大山・上村・細迫の三氏の署名をもつて、大衆の批判の前に投げられた。私は一讀して情理の兼ね具はること此の如きは、政治的宣言として、我國においては稀に見るところであらうと感じた。荒れ狂ふ嵐や寄せては返す怒濤の眞只中にあつて、曾て微動だもせざる巨巖の冷靜さを、私はそこに見る。この冷靜さがあらゆる混沌を通して客觀的狀勢の正確なる把握を可能ならしめてゐる。と同時に、私はその氷の如き冷靜さの底に、やがて燎原の火となり遂には天をも燒くに至るであらうところの・灼熱せる鐵の如き熱情を看取する。いな、かゝる熱情こそが一切の私情を燒きつくすことにより、客觀的狀勢への冷靜なる洞察を可能ならしめ、私の尊敬するこれら三人の同志を驅つて、多くの人々の恐らくは豫想しなかつたであらうところの・從つて一部の人々からは或ひは裏切者の漫罵をすら浴びせかけられるであらうところの・かゝる提案を大膽に卒直に大衆の前に公けにせしめたのである。私はこの提案を讀む人々が、安んじて提案者その人の人格を充分に信用しうるといふ大なる便利をもつことを、何よりも先づ喜ぶ。私の個人的關係からいへば、同志大山は私にとつて古くからの友人である。そして私は近來彼れと益々深く交りを結ぶにあたり、彼れに對する敬愛と信頼との念を益々強くするばかりである。かゝる人々の眞心こめた提案は、最初の一瞥においては、たとひ如何に意外なものであつたとしても、少くとも私は、輕々しくは之に反對しないであらう。

ものを言はんとするにあたつて、私は圖らずも私情を述べた

が、しかし此の如きは必ずしも私一個の感じではないであらう。我國における資本家地主の政黨に對し本質的に對立する無産黨として合法的に結社したものとしては、——たとひ理想的な見地からすればそれが如何に不充分なものであつたとしても、——舊勞農黨をおいて××××。このことは、言葉の上に現はれた綱領や政策においてのみでなく、現實における鬪爭の實踐を通じて、舊勞農黨が大衆の眼前において證明したところである。それゆゑにこそ舊勞農黨は、立黨以來絶え間なく強力的な彈壓に面しつゝ、遂には解散の運命を免れず、その後再起のための新黨準備會もまた解散され、かくて宣言起草者たちの言葉によれば、全國の同志たちが『勞農同盟において精神的結合と不充分極まる組織とを持つに止まれる』今日に至るまで、その鬪爭の過程は、實に加速度的に加重する苦難の歴史であつた。宣言書の起草者たちが斯かる過去を顧みつゝ、全國の同志に向つて、『いま我等は、かゝる難局の上に一條の血路を開いて尚ほも前進を續けつゝある諸君の痛ましくも雄々しき姿を眼前に髣髴するとき、敵には一滴の涙をも、曾て見せたことのない我々も、そゞろに眼底の熱してくるのを覺えないでゐられない』と言つてゐるのも、無理ではない。だが斯かる名狀すべからざる苦難のもとにあつても、多くの大衆かなほ散じつくさず、過去の傳統にあこがれつゝ、不充分極まる勞農同盟の組織のもとにすら未だに一種の精神的結合を維持してゐるのは、全く舊勞農黨が過去の實踐において證明した階級的忠誠のためにである。今かゝる傳統を有する陣營の代表者たち——その階級的良心については疑ふべくもなき人たち——が、こゝに眞心こめて言ふことは、たゞにこれらの人たちと特別な個人的交際を有する私にとつてばかりでなく、あまねく左翼的運動に關心を有する總ての人々にとつて、一應は充分に傾聽すべきものであらう。

二

尤も如何に善良な意圖をもつてゐようとも、そのことが人をあらゆる誤謬から救ひうるものでないことは、もちろんである。むしろ吾々の活動の社會的效果は、動もすれば吾々の意圖や豫期と異なり、あるひは之に反することあるを免れない。だから吾々は、宣言者たちの意圖如何に拘らず、それからは全く離れて、そこに提唱されてゐる案件そのものの當否如何を充分に吟味せねばならぬのであり、またそのことは、現に宣言者たちが吾々に向つて熱心に要求してゐるところである。

だから吾々にとつては、この提唱に對する反對論を聊かたりとも控えねばならぬ理由も義務もない、——それが全運動の發

展を忠實に愛ふるといふ見地に立つて純眞な動機からなされる限りにおいては。だが私にとつては、この提唱は正に私の言はんとしてゐたところを言はれたかの如く感じたかゆゑに、私は直ちに之に向つて全幅的な賛意を表明することを躊躇しない。宣言書にいふが如く、「我々の陣營の内外の狀勢は、刻一刻、あまりにも顯著に變化してゆき、特に四・一六事件を契機として、急轉直下に一大轉換を劃するに至つた。すなはち四・一六事件は、わが國の無産階級の前衞がそれまでに萬難を排して築きあげた全陣地を殆ど潰滅に歸せしめたばかりでなく、更にわが全左翼戰線の上に容易ならざる一大打撃を蒙らしめた。そして、かゝる事態のもとにおいて、勞農同盟の活動もまた、不可避的に、はたと行き詰つた」。左翼陣營の一兵卒として入營したばかりの私は、かゝる狀勢に面して、實際のところ、ものを考へざるをえなかつた。唯物論者たる――または唯物論者たらんとする――私は、この際、現實の狀勢を「先入見的な觀念に囚はれてゐない人々の誰でもの眼に映ずるがまゝに把握しようと決心した」。それ以來、私は、私が最大の關心を有する對象に關係ある現象を、できうるかぎりの注意をもつて見守つた。私はこの際、自分の鈍き視覺をできうるかぎり鋭敏にし、そして眼に映ずるがまゝの現象のうちに、自分がかねてから持つてゐる理論の論理的結論の證明をのみ期待することなく、むしろ斯かる理論が現實的に把握された事實と一致しないならば、しかるかぎりにおいて躊躇するところなく理論を現實に適應せしめねばならぬと覺悟した。これは理論を無視する意味ではない、ただ理論によつて事實を無視する代りに、事實によつて理論を――公式的に凝結せしめられた抽象的な理論を、屈伸性あるものたらしめんと志したにすぎない。かくて百餘日をすぎた。その間私は、私が最大の關心を有する事象につき、屢ゝ幻想を抱きうる機會に接したが、私は遂にそれに囚へられずに濟んだと信じてゐる。そしてその結果、私は期せずして、今私が手にした宣言の起草者たちと、殆ど同じ結論に達してゐたのである。多年の鬪爭に經驗を重ねてゐる・私の信頼する・これらの人々が、偶然にも私と同じ結論に達してゐるといふ事實の發見は、わづかに殘つてゐた最後の不安を一掃するに充分であつた。かくて私は何等躊躇する所なく玆にこの提唱に贊成するのである。

三

如何なる理由から如何なる見透のもとに私は宣言の起草者たちと同じ結論に達したか？　今はそれについて悉しく述ぶべき機會ではない。こゝにはたゞ私が過去において唱導してゐた理

論の或るものとの關聯において、若干の所見を添えておかう。

新たに生まるべき『新勞農黨』が、眞實のプロレタリアート黨に代位すべきものでもなく、また代位しうるものでもないといふことは、提唱者自身がすでに述べてゐるところであるが、しからばこの『新勞農黨』は果して如何なる種類の政黨であらうか？

『プロレタリアートの黨はたゞ××××ない』といふとき、吾々はこれによつて、×××以外の黨は、たとひ無産政黨を名のるとも、それは結局において、資本家地主により無産階級を籠絡するために派遣されたる社會民主主義者の黨に外ならざることを、意味するのである。ブルヂョアジーの陣營は矛盾に充ちてゐるがゆゑに、公然たるブルヂョアジーの黨であつても、例へば政友會と民政黨等に分裂してをり、また隱然たるブルヂョアジー黨の變種に外ならざる社會民主主義者の黨も、無産階級欺瞞の必要に應じ、多くの國々において右翼と左翼とに分裂してゐる。すなはちブルヂョアジーの黨は、決してたゞ一つにはなりえないのである。かゝる可能性は鎖されてゐる。これに反し、プロレタリアートの黨は、眞實にプロレタリアートの階級的利益を全面的に徹底的に代表する黨であるがゆゑに、それは渾然として一體を成すことをその本質とする。それがブルヂョアジーの黨の如く四分五裂して、諸黨對立の狀態を持續するといふことは、ありうべからざることである。吾々は、かゝる意味においてプロレタリアートの黨はたゞ××××ないといふのであり、且つ××のプロレタリアート黨が嚴存してゐるかぎり、これに對立してその排擊を事とする政黨は、たとひ自ら無産黨と號して如何に×××な言辭を弄しつゝあらうとも、それは間違ひもなく社會民主主義者の黨であり、かゝるもの以外の何物ともなりえない、といふのである。

『プロレタリアートの黨はたゞ××××ない』といふことは、以上の意味において眞理である。だが如何なる眞理もその妥當性は一定の領域に限られる。『しかるにもし吾々が、それを斯かる領域外においても絕對に妥當なものとして適用せんとするならば、』――エンゲルスが吾々のために懇切にも注意したやうに――『對立の兩極はその逆に變はる、眞理は誤謬となり、誤謬は眞理となる。』私の見るところによれば、日本における刻下の客觀的狀勢は、かの公式をそのまゝに適用すべく餘りに特殊的である。宣言書が『眞理はつねに具體的である』といふ辯證法的認識の原則を繰り返してゐるのは、そのためであらう。

新たに成立すべき『新勞農黨』は、私の見るところによればもちろん眞實のプロレタリアートの黨ではありえないが、しかし

それかと言つて、それは必ずプロレタリアート黨に對立するところの社會民主主義者の黨たらざるをえないと速斷すべきではない。いな、それは斯かるものたらざることが可能であり、またプロバブルである。エンゲルスもレーニンもすでに繰り返し注意してゐるやうに、自然界および人間社會における一切の差別は、可動的であり條件づきである。例へば、動物と植物との區別は決してはつきりとしてはゐない。また「吾々は今日、産卵する哺乳動物を知つてをり、もし報告にして誤りなしとすれば、匍匐する鳥をすら知つてゐる」。實際には蟲と鳥との境界は決してはつきりしてゐるのでないから、完全型の鳥でないものは總て蟲であると斷定するのは、多くの場合には差支なくとも、ある特殊の場合には妥當を缺くのである。プロレタリアートの黨は、××××大衆の眞實の利益を×××に代表するものでなくてはならぬ、いな、××××大衆の眞實の利益を×××に代表するものであればこそ、吾々はそれを名づけてプロレタリアートの黨といふのである。だがそれ以外のものは總て反プロレタリアート黨であると斷言するわけにはゆかない。何故なれば、全被壓迫大衆の眞實の利益をたとひ××的には代表しえずとするも、なほ幾分かでも之を代表せんとしてをり、これを阻害する傾向を有せざるかぎり、それは反プロレタリアート黨と看做すべきものではないから。

すべての對立は單に相對的な妥當性しか有しないものだとの認識は、辯證法的な見方の核心である。」しかるに「――と宣言書にはいふ――『完全型におけるプロレタリアート黨でないものは皆な社會民主主義の黨だ、白でないものは黑だ、といつた論法で今尚ほ私等に詰め寄るものがあつたとしたら、それは唯物辯證法をどこかの棚の上に置き忘れた甚だ愛すべき（！）觀念論者たちだけであらう』。私は今この見方に完全に一致する。

『新勞農黨』は、その尊き過去の傳統を失はざるかぎり、「その理論と實踐とにおいて、勞働者・農民・無産市民・その他××××大衆の利益の擁護伸張とその自由の獲得とのために必要な鬪爭」を、合法政黨として可能なかぎりにおいて、必ずや果敢に勇猛に××ゆくに相違ない。それはもちろん全被壓迫大衆のための要求を徹底的に全面的に代表しつくすだけの力あるものとはなりえないけれども、現在の瞬間における客觀的形勢は、かゝる形態の鬪爭組織をも、剩すところなく全力的に利用することを必要ならしめてゐる。總てか然らずんば無かといふ戰法は最も愚かであらう。「吾々は、最小の例外もなしに、社會的活動の一切の諸形態または諸方面を支配することを、心得ねばならぬ」のである。

レーニンは言つてゐる。「もし或る××が、すでにその敵が有つてをり又は有ちうるやうな・總ての種類の武器や總ての闘爭手段や總ての闘爭方法やを使用することを用意してゐないならば、その態度は解すべからざるものであり罪惡的ですらあるといふことは、何人も承認するであらう。だがこのことは、軍事におけるよりも政治に關しもつと適切にあてはまる。如何なる闘爭手段がこれやあれやの事情のもとで吾々のために利用しうべき有利なものとなるかは、政治においては、軍事におけるよりも、もつと前知しがたい。……經驗のない××××はよく次ぎのやうに考へる、——合法的な闘爭手段は日和見主義的である、何故なら、ブルヂョアジーはかゝる領域において特に屢々(非××的な「平和」の時期において特に)勞働者を××してゐるのであるから。だがこの考は正しくない。……××××な闘爭形態を一切の合法的闘爭形態と結びつけることを理解しないやうな××××は、極度に劣悪な××××である。」

彼れはまたいふ、『世にはいくらも妥協がある。吾々の心得ねばならぬことは、一々の妥協の・一々の種類の妥協の・諸事情と具體的な諸條件とを、分析することである。吾々の知らねばならぬことは、賊の犯す害惡を少くし・彼等が吾々を逮捕したり射殺したりするのを少くするために、賊に金や武器を投げ與へる人と、彼等と贓品を分けどりするために、賊に金や武器を與へる人とを區別することである』と。この場合、前者も後者も、敵に金と武器とを與へるといふ點においては、外形上全く區別しがたい。たゞ異なるところは、その心術でありその窮極目的である。何れが味方の眞實の利益を敵に賣りつける裏切人であるかは、それらのものの過去における經歴および將來における實踐によつて、これを見分けるの外ない。私が本文の冒頭において、一見マルクス主義者に似合はしからざるが如き口吻をもつて、宣言起草者たちの心術について云々したのは、今の場合その點が提案の批判のために實は重要な一基準となると考へたがためである。

私はなほ××××の××から若干の言葉を引用しよう。『明かに不利な戰ひを避けるために、遁廻し策を講じたり協定したり妥協したりすることを理解しないやうな×××階級の政治家は、三文のやくにも立たない』『「妥協なしに進め、岐路に迷ふな!」このスローガンは明白に誤りである。それは丁度、一萬の軍隊が、十萬の援兵——それは必ず來るには來るが、しかし今すぐに出發することのできない援兵——を待ち合はすために、立ち留つたり、岐路にそれたり、また妥協を結んだりすることをせずに、五萬の敵軍の中へ躍り込むやうなものである。それ

はインテリゲンチャにふさはしい兒戲であるが、決して×××階級の眞面目な戰術ではない』。吾々の結局における勝利は疑ひない、『だが、吾々がより確實により速に勝利に達するために缺けてゐるものが一つある。總ての國々における總ての×××××が、彼等の戰術に最大の屈伸性を與へることの必要について、明白に考慮されたる自覺に到達すること、すなはちこれである』。

レーニンが彼れの晩年に著はした『××××における小兒病としての極端主義』は、以上の如き種類の教訓に充ち／＼てゐる。それは早くから邦譯されてゐるに拘らず、我國ではまだまだ決して充分に實踐へ活用されてゐない。私はかゝる問題に關心をもたれる讀者が重ねてこの×を××されんことを希望する。――なほ私は以上の言葉を決してでたらめに引用したわけではない。私は今私の前に與へられてゐる提案に對する贊否を、私自らの立場から決定するに際しても、これらの言葉が私にとつて導きの絲となつたことを、讀者に告ぐるの義務ありと信じるのである。

四

さて左翼的大衆の總てが擧つてこの提唱に贊成したとしても『新勞農黨』の結成は果して可能であらうか？　私は最後にそれについて、一言する。宣言書は、『我々の新勞農黨が最終的に樹立されるまでには、我々はおそらく、この上幾多の惡戰苦鬪を重ねなければならないであらう』と言つてゐる。このことは更生すべき勞農黨が、おそらくは已むをえざる妥協を覺悟しつゝも、なほ本質的には飽くまでも勞働者農民の階級的利益を擁護するための黨であり、從つてまた資本家地主の階級的利益のためには××なる黨たらざるをえざることを、自ら認識しつゝあることを暗示してゐる。だが資本家地主は、彼等の×××××××××が彼等の利益をのみ擁護するためのものであり勞働者農民を×××××××ためのものであることを、可能なかぎり大衆に隱蔽することを極度に必要としてゐる。××××は大衆××の爲に超階級的なものたることを×はねばならぬ。新たに登場した濱口内閣は、前内閣と何等本質的な差異をもつものではないが、しかし極めて不評判なりし田中内閣への對立的關係において、この内閣はできうるかぎりその風貌を進歩主義的自由主義的に×ふ必要に迫まられてゐる。

およそ資本家地主の權力といふ同じ基礎の上に行はれる内閣の更迭なるものは、謂はゆる『民心を新たにする』ことによつて、資本家地主政府に對する大衆の失望を防止するの機能を有

するものである。例へば政友會內閣が惡政を恣にしてゐる間は、民政黨內閣になつたらばとの期待のもとに、大衆の望みを內閣の更迭に繫いでおくことができる。やがて民政黨內閣が出來上がる。今度は善くなるであらうと、大衆は當座のあひだ暫く喜びの色を示す。だがやがて彼等は再び失望させられる。しかしそれまでには、以前政友會內閣のもとで行はれた惡政の記憶が次第に薄らぐ。かくて民政黨內閣に失望し切つた大衆は、今度は『民政黨はやはり駄目だ、もう一度政友會にやらして見たら』といふ氣になる。二大政黨の對立により政權の受授を『憲政の常道』に從はしめることが、ブルヂョアジーにとつての理想制度であるゆゑんは、以上の如くにして舞臺はいくたび變はつても、同じ勸進元が儲かることに變りはないからである。だが勸進元が同じであることをごまかすためには、舞臺が廻はり役者が變はる毎に、それらの役者は決して同じ陣營に屬する味方同志ではなく、むしろ倶に天をも戴きかねまじき敵であるかの如くに、喧嘩をして見せねばならず、――政治上の機構はまた彼等が必然的に喧嘩をせねばならぬやうになつてゐる。――その政策もできうるかぎり對立的なものに××かけねばならぬのである。かういふ事情を考慮に入れたならば、新たに出來た濱口內閣が、合法政黨としては大衆に最も信賴されてゐた・そして田中內閣が解散を命じた・舊勞農黨の更生を、如何に取扱ふであらうかは、極めて興味ある問題である。今や客觀的諸事情は、舊勞農黨解散當時または新黨準備會解散當時と著しく變化してゐる。そのことのために、こゝに宣言の起草者たちが提唱してゐるやうな政治的結社に對しては、それがたとひ徹底的ではなくとも兎も角勞働者農民の利益を代表せんとするものであり、資本家地主の利益のため甚だ好ましからざるものである・との理由を外にしては、之を禁止する理由が見出されえない。憲法の第二十九條には、『日本臣民は法律の範圍內において結社の自由を有す』と規定してある。これすらが全くの××であることを證明することは、『新勞農黨』の結社を許すことのために生じる『害』よりも、より大なる『害』であるかも知れない。だがブルヂョア的政治家は如何に悧巧であつてもその視野は甚しく局限されてゐる。私は新內閣が、嘗て非常な人氣を有した舊勞農黨の更生を、如何に始末するに至るかを、興味をもつて見守らう。

新聞特ダネ物語

小野賢一郎

新聞の話を求められるが、むづかしい。ことに特種――ニユース價値の最も優れた而も他の新聞にない特種な記事――を如何して得たか、といふ内あけ話を求められることが屢々だが、やりにくい、むづかしい。

つい先達も海軍のあるゑらい人が見えて、天皇陛下が、多くの水兵と共に寫眞をお撮りになつた、それが東日のみに出てゐるがドコから此寫眞を手に入れたか、その筋道を聞かせてくれろ、といふことであつた。軍隊に「軍機の祕密」といふものがあるなら新聞にも「新聞機の祕密」といふものがある、お話するわけにはまゐらぬ、と不本意ながらおことわりしたことであつた。

藉すに歲月をもつてしたら――或は話すことが出來るかもしれない、また永久に話されずしまひになるかもしれない。今春、東日に御厄介になつてから二十年になるので、記念に著述をして、その中に特種に關する思ひ出を語つてみた、二十年――十年――も經つと相當に話すことが出來るが、どうしても話せないことも多分にあつた。今、成るべく最近の――と、求められても、一入困難を感ずるばかりで、或ひはホンの輪廓だけに了りはしないかと思はれる不安がある。しかし、まあ、新聞漫談として聞いていたゞく。

特種と失敗話

特種――と一口にいふが、その特種を得るコツがなか〱口ではいへない、新聞記者は生れるもので造られるものでないとよくいふが、全くさうで、專門學校などで、新聞の講義も隨分されてゐるが、取材のコツに至つては一寸いへない、話せば面白さうに聞いてはゐるが唯一場の話柄として聞いてゐるので、

敎へて覺えらるべきものでなく、知つても行へるものでない。

しかし、新聞記者は第六感とか第七感とかの所有者のみに限るか、といへばさうではない。努力の人、根氣の人、大いに必要である。千葉監獄から甘粕大尉がいつ出るかしれない、警戒をしてくれろと頼まれて、いくら第六感の所有者でも一寸ヵフェーにいつて張番をおろそかにする人では困る。――だから、一人一人のあたまの働きも無論いるし、同時に完全な共同動作をとり得る人が必要である。

機會が向ふから押かけてくる場合もある、神樣が特種をもつてきて下さつても「特種だ」と見きはめをつけるには頭がやはり働かねばならぬ、こゝが面白いところで、また新聞記者の最も愉快とし、翌朝新聞をみるまで亢奮して寢られなかつたり、自分の書いた記事を三度も四度も讀み返したり、世界が明るく面白く自動車も街路樹も笑ひかけてくる日が續くのである。

特種の成功したのはいゝとして、われ〳〵は失敗した話をあまり聞かされない、失敗話の方が寧ろ面白く、また參考にもなるのだが、どういふものか求められず又されもしてゐない。今度はいつそ失敗談もさせていたゞきませう。

皇后陛下の御慶事

ニュース價値の上からいつて、最も影響する範圍の廣いのは皇室に關することである。政治、外交、經濟、みな價値が大でまた國際的にも範圍が廣いのであるが、私がこゝに話さうとするのは社會部の仕事に限つてゐるから此點豫めお含みを願ひたい。

皇室に關する記事は宮内省關係から得なければならぬが、その宮内省が昔からの祕密主義で、どうにも齒が立たない御役所である。

今春、皇后陛下の御懷姙を特種として報じたのは東日、大每であつた。宮内省の發表より約二ヶ月も早かつた、萬一これが誤報となつた場合は皇室に對して恐れ多いばかりか、私どもが腹を切つた位ではすまない、東日、大每の信用にも關することであつた。決心してこれを紙上に載せるについては、細心な注意と判斷とを要したことはいふまでもない。

どうして、こんな大きな特種を得たか――それは言へない。しかし宮内省方面を擔當してゐる同人藤樫準二君の頭の働きだけは話せる。

第一報の出たのは二月十日の夕刊であつた。行數こそ少ないが、練りに練つた記事であつた。その前夜藤樫君から宿へ電話で「皇后樣のことは十日ほど前から確信がついてきた、某社が

けふあたり手をつけた樣子がある、朝早く相談して書きたい」といふことであつた。某社――ときいて心配になつたが、藤樫君は未だ大丈夫らしいといふから心配しながらも夜を明かした。

翌朝、藤樫君の材料をもつて幹部とも相談し、夕刊にのせたのである。このニュースは宮内大官達も寢耳に水であつた、大官の一人など佐藤侍醫頭に眞僞を問合せるといふ騒ぎであつた。あまり早過ぎたので一時は誤報とすら評判が立つたが、二週間ほどして第二報を出した、そして御慶事を確實にしたのである。もう、これで特種がすつきりしてしまつた。

第六感といふのだらう。皇后陛下が、あれほどお好きなテニスを近頃お止めになつた？ 御運動の御中止？？？ 藤樫君のあたまはこゝに出發點を置いてニュースを求めたのであつた。正に第六感の働きである、しかしこの第六感たるや神樣が偶然に與へて下さつた？ ではなかつた。藤樫君が宮内省へ詰め切つて、上つ方の御動靜に細かいこゝろのくばりをしてゐた細心な注意と努力の所産であつた。

秩父宮妃殿下

秩父宮妃殿下御決定については大失敗をした。一旦松平節子姬と報じたが、別方面のニュースから一條家の令孃と報じてしまつた。そして程經て朝日新聞によつて松平節子姬と報ぜられてしまつたのであつた。

殿下御渡英前の大正十四年正月頃は各新聞とも妃殿下の候補者について血眼となつてゐた。同業××は某宮家の姬君を、××は某華族令孃を――といふわけであつたが、殿下には、その事について御決定のことなく御渡英遊ばされ、妃殿下の御人選は一時打切りの形となつた。

大正十五年三月中旬、宮内省が松平節子姬について、詳細なる再調査を初めたことを知り、四月三日の東日、四日の大毎及び英文毎日紙上へ此の記事を掲げたのであつた。

ワシントン社交界に咲き誇る櫻の國の女王――秩父宮殿下の第一候補、松平駐米大使の令孃節子姬――と大見出し四段ぬき大々的の記事であつた。七日にはワシントン特電で「多數の米國人から浴びせらるゝ祝辭の雨」と報じてきた。

これほどハッキリ而も大特種を出してをきながら、中途で一條家の令孃を引き入れた點は正に大失敗で、これには又いろいろの成行があるのだが、今日では既に他に嫁がれてゐる事であり、一切を遠慮する。

昭和二年一月、同業朝日によつて節子姬御決定が報ぜられた。何とかして失敗をとり返さねばならぬ、そこで殘された仕事と

してはドウいふ資格で御殿にあがられるかといふことの研究に移つた。今モスクワにゐる馬場秀夫君が、節子姫が松平子爵家に入籍されたニュースを先づもたらして特種としてくれた。これでやゝ氣をよくしたが矢繼早に特種を出す手筈をした。

戸籍謄本をみて不圖感じたことは、私の妻が入籍したときに、妻の名と姑の名と同名で一寸困つたので、妻の方を改名させたことである。私どもの家庭を引合に出して甚だ恐れ多いことであるが、皇太后陛下の御名と節子姫と、讀み方はちがつてゐるけれども同じ文字である。「これは氣をつけてをくことですよ」と馬場君に話してをいた。馬場君は幸ひに「勢津子」と御改名になつた特種を戸籍抄本と共にもたらしてくれた。

高松宮殿下と一水兵

臺灣の大稻埕捌店主の某氏がひよつこり東日にあらはれた。「けふ、靈岸小學校に細民兒童の樣子を視察にいつた、ところが校長が宮家の御用で埼玉在にいつてゐて留守でした」といふ話である。

小學校長、それも特殊な敎育をしてゐる校長が、宮家の御用?――こゝにニュースの中心點が置かれた。果して高松宮殿下の御思召で、一水兵の妹が、淪落の淵に沈まうとしてゐるのに救ひの手が下されたのであつた。この特種によつて婦人雜誌など隨分書き立てたが、實は偶然の機會であつた。

秩父宮の御文章

秩父宮殿下の御文章「山の旅」を奉掲し得たことも或る大きな意味の特種であつた。今日では全國の青年讀本の敎材となり譯文は海外にも傳へられ、英國の山岳家ウォルター・ウエストン氏は今春この山の御文章を發表するなど、全國的に國際的にいい影響をもたらしてゐるが、發表當時は隨分辛らい目にあつた。宮家の人々から手ひどく叱りつけられたものである。

民間へ出るべきものでない、手に入るべきものでないものが新聞に出たといふので、驚き且つ怒られたのであらうか、全文を二回に分け其の「上」を出した日掲載を打切れ！ とまでお話があつた。いゝことにちがひない！ また新聞に出た結果は必らずいゝ！ といふ信念から、前田事務官、松平式部官を通じて、いろ〲御願ひしたところ、快くお許しになつて「下」のゲラ刷を殿下御自身校訂遊ばしてすら下さつた。

民間へ出るべきものでない――それが出るところに、特種の人知れぬ苦心がある。

名古屋の直訴事件

社會部の人ではないが寫眞記者三浦君の名古屋練兵場における直訴事件の特種は、すべてがキチンと理詰めになつてゐて、話の筋もはつきりしてゐる。同君を煩はして、こゝに手記して貰つた。以下三浦寅吉君の手記のまゝである。

昭和二年十一月十九日、名古屋練兵場に於ける昭和御親政最初の特別大演習の觀兵式當日、空は紺碧に晴れ渡つて、實に絶好の日和だつた。この日私は特派寫眞部員の一人として他社の人達と一緒に早朝から練兵場にいつてゐた。

金鯱城下の廣場に閃く指揮刀の冴え。――精鋭十萬の歩調は東方の入口から列を曳いて、正に昭和の國威を象徴する一大威力を示してゐた。

それは丁度、陛下の御親閲開始された時の出來事だつた。私はかなり遠方に設けられてゐた寫眞班席から、次第に前進される御愛馬「初緑」に召された陛下の御英姿を拜していやが上にも厳粛な氣分に、緊張してゐたが、突如、銃劍を持つた儘の一兵卒が列外に離れると見る間もなく、陛下の御馬前へと急ぐのが視野に映じた。それは豆のやうに小さかつたが――

「唯事ではない……」その刹那、愚どんな私の神經にも、何事かの重大事件の突發が感ぜられた。軍規の厳しい軍隊で、いやしくも一兵卒が陛下の御閲兵中に單獨で離列するといふ事は陸軍始つて以來の椿事だと思つた。

他社の人達も、勿論これを見ないわけはなかつた。同時に寫眞記者としての大事な仕事を考へない筈はなかつた。

「さうだ憲兵隊へ行け！」私の腦裏に稲妻のやうに閃いた自己の命令はかうだつた。いづれにしてもかの兵卒は憲兵隊へ引致されるであらうとの考へが、私の足を直に憲兵隊へ向けさせたのだつた。

一二年この方めきめきと肥つて――借金肥りもある――正味二十貫からの私は、まつたく驅足には適さない、その上、兩國邊でなければない十一文甲高に履いた靴の重さは、決して輕快な行動に便宜ではない。自動車はなし、車もなし、練兵場を出た私は、夢中で半里に近い憲兵隊への道を馳け通した。その間にも他社の人達が、同じやうに憲兵隊さして來やしないかと、幾度も振り返つて見た、幸に競爭相手は一人もなかつた。

やうやくの思ひで、憲兵隊の門前に着くと、そこには一臺の自動車が止つて、中から人が出さうな様子だつた。あゝこれだ！」私は思はず口の中で呟いた。が、その喜びも束の間、カメ

ラを持つてゐる私を見た將校は、その儘自動車の進行を命じ左への道を曲つて疾走した。「のがしてなるか」と――丁度映畫の探偵が犯人を追ふやうに私は駈足で自動車の後を追跡した。と、今度は通用門に止つた。一人降りた。私は急いでその近くへ寄つて行つた時は銃劍を持つた兵卒が下りる瞬間だつた。辛うじて一枚シャターを落した。門にゐた憲兵は、私の腕を掴んだ。

「何をするんだ！」

私は突嗟に腕を掴んだ憲兵を怒なり付けた。

「君は何んだ。」

「新聞社の者だ。」

「何ぜ寫眞を撮るんだ。」

「撮つちや悪いのか。」

「悪い。」

「悪い筈はなからう。」

色々問答の末、その憲兵は私を副官のところへ連れて行くといふ。私は仕方なしに、副官室まで行つた。

流石に副官は如才ない人だつた。「君、隨分機敏だね」とか何んとか、人をおだてゝおいて、さて、「時にあの犯人は、まだ調べ中だから寫眞を新聞に出されては困る。一時原板を保管させてくれないか。」と、柔い軍人らしくない口調で云つた。私は暫時考へた後で、

「よろしい。原板をお渡ししませう。唯こゝでは暗室もなし、それに私の職責上、一應このことを支局に知らせなければならないから、御面倒でも私と一緒に名古屋支局まで御同行願へませんか。」

副官はすぐ承知した。そこで名古屋支局に、その副官を伴つた。私は名村支局長に一切の顛末を報告の上約束通り原板を副官の手に渡した。勿論、大毎と東日の分を燒付けた。そのあとの原板だけを。

憲兵隊の門前で憲兵と問答をしてゐる際に、その兵卒の所屬聯隊が、68聯隊であることを襟章に依つて見ておいた。姓名は知る由もなかつたが。68の番號が、それが北原二等卒であることを調べるのに、相當功を奏したやうであつた。

この手記では、三浦君が隨分遺憾してゐられるやうであるがこの行動は青年外交記者にとつて模範的だと思ふので、私の感じた點をつけ加へてをく。

同君は補充か何かで一寸軍隊にゐたことがある、その豫備知識が第一に働いた。「頭右ッ」のラッパが鳴つてからは全軍微動だもする事が出來ない――といふことを知つてゐた。それにチ

ラリとカーキー色が列をはなれた、その瞬間「事件が起つたぞ」と直感したのである。三浦君の周圍には二三百の同業者がゐたのだが、氣が付かなかつたか、又氣がついても直ちに適當な行動に出づる勇氣がなかつたか、判斷がつかなかつたかである。

第一に豫備知識を生かせて「事件起れり」と認めた點、第二に陛下が御通過になる御姿を拜寫するや否や、次ぎの拜寫場へ他の人々と移動すべき任務を帶びてゐるが、それを打ち捨て、「事件が起つた、憲兵隊に行け！」と自分で自分に命令し自分で飛び出したことである。十五六丁練兵場を迂回しての駈足も大努力だつた。そして憲兵隊の玄關で犯人の乘つた車が三浦君を認めて裏門へ逃げた――これを追ふた馬力も忍らかつた。

第三に下車する處を一枚寫して而も襟章の聯隊の數字を見てをいたのも細心で鋭かつた。第四に副官から原板を取りあげられやうとしたのを拒絶し、うまく名古屋支局へ一切の事件を引ずつて來たのも機轉がきいてゐた。第五に支局の二階にあがるや否や暗室に入る前に支局長に號外ニュースとして事件の顛末を語つたのが忍らかつた。第六に原板を渡す前控えを二枚とつてをいた處置も機宜の處置であつた。

このニュースは名古屋支局から專用電話で大毎、東日へ來た。號外にすべきであるが、最高幹部打合せの結果號外にして世間を騒がせるまでもあるまいと取やめになつた。それから二時間して聯合通信の同報電話が鳴り、暫くして其紙から號外として出された。

これは結局は特種として紙面には現はれなかつたが、犯人の自動車から下る寫眞は特種として光つた。この話は、それほど大きな特種ではないけれども、三浦君の行動がはつきりしてゐるし、特種物語として全部をお話することが出來るから、特に引合ひに出したわけである。

千住三人殺し

共同動作といふことをいつたが、昨年の夏の千住の三人殺しの如き刑事々件にはどこまでも共同動作（ナームワーク）によつて、大きな特種を得なければならない。

同人安養寺友一君もその共同探訪に加はつた一人である、共同――といふことの一例として、その手記を引用する。

昨年の八月廿二日東京市外千住町に突如として起つた例の『醬油屋山田角三郎主從三人殺し』事件に對する、われら部員の活動はめざましかつた。

當時の警視廳中村捜査課長が『警視廳初まつて以來の奇怪な

難事件だ……』と嘆息した程、それ程奇々怪々、まるでルパン式の大事件であつた。

千住の山田家で發見された二絞殺死體と、小松川荒川放水路に漂着した行李詰死體とが關聯し、十六才の小僧と五十歳の主人公との死體誤認問題などで、當局の搜査方針は、毎日猫の眼のやうに變つて行つた。この間にあつてわれらは終始、事件發生當時から急所々々をキャッチして常に他社を壓倒的にリードした。

しかしこの難事件もその衝に當る刑事連は勿論であるが、わが部員の熱と努力の奮鬪から、山田主人絶筆の葉書を摑み得て、これを廿五日早朝、搜査に行き惱んでゐた搜査本部の恒岡警部に提示して、急轉直下、慘殺兇行後、僅か八日目の廿六日、先づ主犯自動車運轉手五味鐵雄が逮捕され、續いて二日後共犯のこれも自動車運轉手田中藤太が捕縛されて、明治、大正、昭和を通じての歴史大捕物は最後の幕を閉じた。

わが社の活動は事件の發見された廿二日早朝、前夜の宿直員須田君によつて先づ手がつけられた、それは千住町中組山田角三郎方の二絞殺死體發見である、その日の夕刊締切り間際に小松川署を擔當する穗積君から、荒川放水路に行李詰死體が漂着したと電話で急報して來た。『スワ！』とばかり直に私が荒川放水路の現場へ自動車を飛ばした。當時はこの二つの事件は全別個のものとして、千住の絞殺事件は川多羅警部が主任となつて千住署に、行李詰死體事件は恒岡警部が主任で小松川署に、それぞれ搜査本部を置いてゐた。

腐爛した行李詰死體からは『中澁谷九五四和多利』と鉛筆で走り書きした所持の寶丹袋、千住町吉久屋呉服店のマッチ、そして有力な特長の上下總義齒二個の手がゝりを得た。

この二つの怪事件勃發と同時にわが社會部には直に小野社會部長から動員が下つた。千住署には池田、吉岡兩君が詰切り、小松川署には私と穗積君が頑張つた。更に兩事件を搦手から探査するために楠本、北條、村田、松田といふ一騎當千の四君が加はつて陣容を整へた――これより部員の徹底的大活動が開始され、本職の刑事連のドギモまで拔いた痛快さである。

その一番槍の功名は楠本君である『中澁谷九五四和多利』といふ九字を耳にするや、直に自動車で中澁谷へ飛んだ、血眼になつてその身元を搜査する刑事連が、遂に徒勞に歸して深夜引きあげたが、楠本君の努力は報ひられて苦心の末、和多利の存在を突きとめた。廿三日の東日朝刊を手にして『中澁谷にゐた和多利は私です』と一人の男が警視廳へ出頭した。

この和多利からヒントを得たものと各社記者は同家へ殺倒し

た、わが社からも松田君と私が深夜訪問した。そして固く口止めされた和多利から「塚田味噌店」といふ言葉を耳にし、その足で直に凝雨を衝いて深夜ようやく、塚田味噌店なるものを探し當て、それからそれへと自由探査に狂奔、奮闘した。

下谷區入谷町の味噌屋塚田眞治は山田とは親戚づきあひをした間柄であつた、彼から得たものは山田には小金があり、色々な人達に金を貸してゐたといふ聞込みであつた。

私は『山田の周圍を洗はねばならぬ』と非常な決心で、寢食を忘れて活動してゐる楠本、村田、松田君等と互に連絡をとりつゝ熱と努力で驅け廻つた。苦心の末疲れ果てたからだで雨の中を淺草區千束町一〇自動車運轉手間宮新逸なる男をたぐり當て、彼から山田の十九日に出した絶筆の葉書を得、更に犯人五味の存在を知つたのである。それが廿四日の夕方である。

翌早朝、恒岡警部にその葉書を見せると雀躍して『ありがたう、これによつて兇行は十九日の夜と定つた、大事な手がゝりだ』と非常によろこんだ。この葉書により、梅野、高根兩刑事が更に間宮を訪問、犯人が五味なることをつきとめて五味を追ひ廻し、廿六日夕方遂に逮捕したのである。

廿七日深更から廿八日拂曉へかけての千住署張込みは各社殺倒して眞に物凄かつた。わが部員は一丸となつて要所々々を張り込み、慌しい空氣の中に犯人の自白、共犯捕縛と迅速にしかも正確に本社へ急報した。號外賣りのベルが初秋の朝の帝都へ鳴り渡つた。千住署に最後まで踏み止まつてゐたわが部員は、相擁してうれし泣きに泣いた。

私も千住署附近へいつて、活動してゐる諸君と會つたが、實に涙ぐましい光景で、千住署の内外を水も漏らさぬ警戒し、毎夜安眠どころか寐るところもないといふ有樣であつた。諸君の洋服も埃だらけ、目はくぼみ、ヒゲはのびて、人相まで變つてゐた。

第六感

第六感——といふ。一口に説明しにくいが、こゝに一つの實例をかゝげる。同人北條清一君の手記である。

その頃、大正十五年三月です。大井町から社へ通つてゐた私は、朝九時いつものやうに有樂町のホームに降りて、日比谷方面出口から有樂町の通りへ吐き出されました。日比谷警察署の側へ道路を横切つて、二、三歩あるいた時、私の眼にチラッと映つた——といふよりも何か頭へピンとこたへるやうに感じ

一臺の自動車が、警視廳消防部長官舍の前に停つてゐました。

セダンの高級車です。當時は復興局疑獄事件で、役人や知名の士が、續々警視廳や檢事局へ召喚されてゐる時でしたから、私達の神經も妙に過敏になつてゐたんです。

蟲が知らすといふか、新聞記者の第六感といふか、兎に角、妙に胸騷ぎがするので社へ行かずそのまゝ橫丁へ曲つて、刑事部長の官舍へ出掛けました。

門から玄關までの石疊の上を、そつと足音を忍ばせて、玄關の中を覗いて見ますとフエルト男草履が一足、キツトの黑短靴が一足、チヨコレート色の短靴が一足、きちんと靴脫ぎの上に並んでゐます。傍のステツキ立てにも上等なステツキが二本投げ込まれてゐるのが見えます。

應接間から洩れる數人の話し聲。その場の空氣が何んとも云へない緊張したもの〻やうに感ぜられました。

『誰か偉らい奴が調べられてゐるに違ひない。』

しばらく玄關脇で耳を張つて、應接間の話を聞かうと努めたのですが、極くさゝやかな聲でどうしても完全に聞くことはおろか、片言隻句をも耳にすることが出來ない。マゴマゴしてゐて發見されちやいけない――と思つたので、拔き足さし足で門外に立ち去りホツトしました。

だが待てよ、一體、誰だらう? 考へながら表通りへ出てフト眼についたのは、自動車ナンバーです。

『うん、これ〳〵』洋服とポケツトから手帳を出して、番號を書きとりました。そしてぽつねんと主人を待つてゐる運轉手に、窓越しで『君、どなたの車ですか』と、おついにすまして聞いてやりました。運轉手君は怪しい眼付きで私をヂロ〳〵見てゐましたが、『さア、誰れですかね』ととぼけます。私はそれ以上追及せず、そのまゝ急いで社へ驅けつけて自動車所有者名簿を繰つて、手帳に控えた番號を探しました。

あつた〳〵! あかぢ銀行頭取、渡邊保善社々長渡邊治右衛門――とう〳〵召喚されたんだ。私の神經はゴムまりのやうにはずんだ。

再び刑事部長官舍前に引き返した私は、門前に隱れて渡邊氏の歸るのを待ち、入れ違ひに官舍へ飛び込んで行つた。時の刑事部長は現東京府內務部長の中谷政一氏でした。

『中谷さん、あかぢヶ原事件に火がつきましたね』『いゝえ、そんなことはございませんよ』中谷氏は澄したものです。

『だつて、今朝ほど渡邊が取調べを受けてゐたぢやありませんか』中谷氏しばし沈默。

『あなた、それを御存知ですか、實は確かに呼んで調べました

がね、今は地堅めで素破抜かれると事件がぶちこはれてしまひます。どうぞ、暫く書かんで下さい。他に知つてるものは誰もないのですから……』中谷氏は苦しさうに云ふのでした。

社へ歸つた私は、社會部長に朝からの經過を詳細報告しました。

『中谷君の顔を立てゝ、四、五日なら待つてやらう』部長の言葉に私も贊成しました。

數日後、渡邊氏召喚からおかぢケ原事件に司直の手が伸びたことを、東京日日は特種として讀者の前に提供したのは云ふまでもありません。

自動車をみて頭にピーンとこたへたところが第六感なんでー ー天來のニユースなんですが、實は細心な注意と、豫備知識が生きて働いたのです。豫備知識といふのは、北條君は、社へ通ふのに、毎日二三回近所の警視廳官舍の前を通る。自動車があつても多く警視廳用ので、今日では隨分いゝ車を使つてるやうだが、その頃は見榮えのしない自動車ばかりだつた、そこへ美くしいゼダン型などがあつたものだから、？？？となつたわけです。「珍らしい車がある」といふことは誰でも見るのでせうが、さう見たばかりで通り過ぎるのが普通で、こゝに「記者の眼」が動いたのです。

ガス事件

北條君は警視廳を永年擔當してゐたものだから、多くの捕物式話題を持つてゐる、も一つかういふ手記がある。

東京ガス問題は、市政の癌と呼ばれてゐる。市政の癌を社會部記者の眼から見れば、『疑惑の殿堂』である。

癌の完全なる治療が出來ない限り、我々社會部記者は、ガス問題に對して、絕えず、注意の眼を離すことが出來ない。

昭和二年二月初旬、東京市會議場に於て流血の不祥事を見た報償契約改訂案上提以來ー今日まで、我等は、ガス問題を中心とするニユース報導戰の前衛に立つてきた。

幾度か司直の手にかゝつて、疑雲、なほ晴れぬ東京ガス。

東京日日は、この間、幾度かフレッシユなニユースを速報してゐる。

即ち、昭和二年二月廿四日の紙上で『ガス問題遂に明るみへ謎の十萬株を中心に警視廳いよ／＼動く』と、まづ報じた。越えて、五月十二日附夕刊には『疑問のガス事件に關し、突如警視廳が大活動』と題し、刑事を京都、大分方面へ派しての活動

を報じた。翌十三日の紙上には、警視廳が俄かに活動を打ち切り、事件に關係した主任、刑事を部長室に招致して、
『諸君の御活動を煩つた本事件は、これで打ちきるから、左樣承知ありたい』といふ刑事部長の言葉を、そのまゝ報道した。
時の刑事部長は、その在任二ケ年餘に亘り政黨的色彩濃厚なりとして非難された久保田金四郎氏であつた。
就任したばかりの久保田部長は、この記事を見て頗る狼狽、
『官廳の機密を新聞記者に洩す奴がをる。官規振肅上、甚だ怪しからん。疑ひのあるものを早速、調べあげて處分せい。日日は大新聞だから刑事を買收してをるかも知れんからそんな事實があつたら、刑事部へ出入してゐる記者も容赦なくいゝつてしまへッ』――と部下の主任に命じた。
この特ダネは、久保田部長確かに痛かつたらしい。僕は、この話を耳にしたので、早速部長室に久保田氏を訪ねた。
『僕をくゝるといつてゐるさうですね』
『アッハッハ。それや噓だが、君、あの種は一體、どこから取つたい、刑事だらう、え、え、それを言つてくれないか、どうも刑事を籠絡してゐるやうだなあ』
『日日の記者は、熱と力でニュースをキャッチするが、刑事を買收したり籠絡するやうな手段を講じない、あのニュースをとるのには一週間も努力してゐるんだからね』
刑事部長は、僕の話を聞いて『君の眼は凄い光をもつてゐるなな』といふから、僕は『この眼光か、部長の當惑するやうなニュースを探し出すんだよ』とやり返した。
爾來、久保田部長は『凄い眼の男』として僕の存在を認めた。隨分、無理な質問や訪問をしても、腹を割つて眞相を話してくれた。
政黨臭が濃厚で、帝都の刑事部長としては難點の多い男であつたが、どこか、面白いところがあつて、政變と同時に辭表を出して、辯護士を開業した。
ガス問題は、その後も屢々警視廳の手にかゝつてゐる。
こん度の增資は、目下商工省の手で裁定申請に基き愼重審議してゐるが、これから先、社會部記者が『臭いガス』を筆にしなくなるのは何時であらうか。
ガス問題の火の手をあげながらも、中途で探査を打切つてしまつたので、私どもゝガッカリした。北條君の手記にもある通り隨分努力したのであつた。警視廳には村田、楠本、阿部、須藤、その他老練な記者が二部制又は三部制になつて詰めてゐるのだが、殺人、强盜、放火、詐僞から進察、風俗、營業、交通

等の保安から、賣藥、流行病の衛生、出火、消防まで、微細なことも逸せずに材料をとらなければならぬ、殊に大きい事件の特種を出すことは大變な努力を要するわけで、一人々々のあたまも必要だが、共同動作も亦大切であることを重ねていひたい。

甘粕大尉事件

こんな手記をみせる北條君はまた次ぎのやうな失敗した手記を持つてゐる。それは甘粕大尉が出獄したので、第一に面會してインタービユーをやらうといふ競爭圏に飛び込んで、そしてまんまと失敗した手記である。

ものの見事に失敗したのは甘粕大尉の出獄だつた。

大正十五年十月九日午後六時、千葉刑務所を出獄した甘粕大尉は、そのまま姿を隱してしまつた。

甘粕の隱れ家を突きとめて、彼の所感を聞け――各社一齊に第一線の記者を總動員して、甘粕の行方捜査に全力を擧げた。

勿論、我社でも社會部を擧げて活動した。私は、警視廳官房主事のところへは、思想團體の關係もあるので、きつと憲兵隊から甘粕の隱れ家について情報が入るに違ひない――と睨んだので、毎日、朝から晩まで官房主事の部屋のまはりをウロ〳〵してゐた。時の主事は大久保留次郎氏だつた。

十月、十一日、十二日、十三日――と主事に泣きついて見たが、どうしても『おれは知らんよ』の一言だつた。社へはどこからもまだ吉報が入つてゐない。みんな、多少悲觀し連日の不眠不休の活動で疲れ出してもゐた。

丁度五日目の十四日、主事室で無駄話をしてゐると卓上電話が氣魂しくなつた。受話機を耳にあてた大久保主事が、話を聞いてゐるうちにだん〳〵緊張して、前に腰をおろしてゐる私に聞えやしないかといふ心配と懸念の色が顔に現はれて來たので、私は、大事な電話だなと思つた。で、そ知らぬ顔で煙草に火をつけて、ぷか〳〵やつてゐると主事は

『何？　こごうた！　こごうたとはどんな字を書くのか、うん、うん、ちいさい(小)うし(牛)のたんぼ(田)か……あゝ、わかつた』といつて電話をきつた。話の様子がどうもおかしいので『甘粕の居所は小牛田ですか』とやつて見た、主事は妙な笑ひ方をした。

私は社へ歸つて、先輩のK君に小牛田の話をすると「陸羽東線に小牛田驛といふのがあるよ、そこから先きへ入ると川渡、鳴子なんて温泉がある」その官房主事の言つた小牛田は有力だぞ」と私の情報に力をいれてくれたので、私も急に乘り氣にな

つて、更に心當りを當つて見ると確かに小牛田驛で乘換えて附近の温泉にゐるらしいといふ情報を得た。

『一つ行つて見やうぢやないか』といふことになつて、命令一下、K君と私と寫眞のH君の三人で上野驛を夜汽車で立ち、小牛田へ向つた。

翌朝、小牛田で下車して驛長に、甘粕の話をそれとなくして見たが、いい情報もとれないので、先づ川渡温泉へ行かうぢやないかといふので、三人一緒に川渡へ乘り込んだ。驛前の宿屋で朝めしを食つて、すぐ温泉宿を手分けして探し廻つた。

後になつて判明したことであるが、その時甘粕大尉は川渡の高友旅館に『前川良次』と僞名して隱れてゐたのだつた。我々の一行もこの高友旅館の玄關に立つて、宿帳を見せて貰つたり、番頭や女中に大尉の人相を話して『こんな人は來なかつたか』と質問したが『參りません』と輕く捌かれた。尤も、こんな場合、通り一遍玄關から斬り込んで『はい／＼、をります』と言ひつこのないとは承知してゐるが、川渡から鳴子へかけて温泉宿は五六十戸もある。先を急いでゐるので、附近一帶を一わたりアタつた上で、怪しい宿だけを念入りに手分けして探す方針だつた。

そこで、川渡の温泉宿を一通り探した我々の一行は、その先きの赤湯を探し鳴子に着いたのは夜だつた。晩めしもそこ／＼に鳴子の宿を軒並に探ねたが、どうもゐないらしい。が、しかし、鳴子から三里ほど山へ入つたところに鬼首といふ温泉がある。極めて邊鄙なところで、隱れ家には屈強のところらしいと聞き、もしかしたら、ここにゐるかも知れないと思つた。斯うなると、なんだかきつとそこにゐるやうな氣がしてならないものだ。善は急げ――今から出掛けやう。時計を見ると午後八時半。番頭を呼んで『今から鬼首へ人を探しに行くんだから自動車を用意してくれ』と命じた。番頭は眼をパチクリさせて『旦那さま、とんでもねえことでさァ、自動車なんかとても通れねえ、嶮しい山道でなあ、熊や猿が飛び出すので、陽が暮れると人通りはまるでごぜえません、それにな、この山道で殺された人があつて以來、この頃ぢやいくら金を出しても行つてくれる人足もないですよ』ともみ手をしながら、鬼首へ行く道の恐ろしいことを説明し『惡いことは申しませんで明日にしたらどうです』仔細らしく言ふのだつた。熊が出ても、鬼が出てもこのまま寢てはゐられない、よし、それぢや我々だけでゆくから懐中電燈を三つ四つ買つて來てくれ――といふことになつて、足ごしらへも嚴重に、滑稽のやうではあるが、熊や猿が出たら一撃を喰はしてやらうと手に手に棍棒を持つて宿を立ち出た。

鳴子から荒雄川の橋を渡つて花渕山と荒雄嶽の九十九折の山

道を、根棒と懐中電燈をたよりに登つて行く。夜の深山は森閑として風にゆらぐ梢の音、眞つ暗な山底にごう〳〵と響く物凄い水の音、遠く近くで名の知れぬ鳥の鳴き聲等、等、いまにも熊公が飛び出して來やしないかと戰々恂々。

晴れて星の降るやうだつた空が俄かに曇つて、月が雲の中に隱れたと思ふと、中秋十月だといふのに雪まじりの雨がサラサラと面をうつて降る、心細いこと夥しく足は重くなるし、全く泣くに泣かれぬ苦勞をして、やつとのことに目的の鬼首へ着いたのは十一時過ぎだつた。

山奥の温泉宿は深い眠りにおちてゐる。とん〳〵〳〵、お晩です、(このお晩ですは今晩は――の意味で、我々一行鳴子で覺えたので、早速土地の言葉を使つた次第である)とやつたら、中から返事があつて戸が開く、大尉の人相を話して探したが、何處の宿にも客が殆どなかつた。K君も僕もいささか失望した。

夜を徹して豆の出來た足を引き摺り宿へ歸ると、本社から『甘粕は東京郊外に隱れてゐることを確實に突きとめたからすぐ歸れ』との電話があつたので、私達は四、五日ゆつくりと鳴子、川渡を中心とする一帶を充分に探さうと話し合つてゐたのであるが、この社命によつて、直ちに翌日の汽車で倉皇として歸京した。

ところが、近郊のの隱れ家一件は、我々が川渡の甘粕の隱れ家の門前まで行つたことに驚いた憲兵隊が反間苦肉の策で、我々を呼び戻し甘粕の身邊を安全にするために、出鱈目の情報を洩したものであることが――これも後になつて判明した。

數日後、同業朝日に川渡の温泉宿で甘粕大尉との會見記がデカ〳〵とのつてゐるのを見たときには腦天を玄能で、カチンとやられたほど痛かつた。

『あの時、我々をもう少しあすこに置いて探さしてくれたらな、捕つたものを……』と今でもK君と想ひ出話をしては殘念に思つてゐる。

この通り正に失敗、私が判斷を誤つたのである。憲兵隊が甘粕氏を逃避させるのに努力してゐたので、實は憲兵隊と我々との戰爭であつたが、とう〳〵憲兵隊の反間苦肉な戰術にスッカリはめられて、折角の努力も水泡に歸した。

憲兵隊のづるい手は百も承知してゐたのだが、東京近附にゐる!と掌を指すが如く敎へてきたものがあつたので、とう〳〵北條君とK君に引揚げを命じた、全く私がうまく騙されたので、實は「掌を指すが如く」敎へてくれたのは憲兵隊の間者であつたことがあとでわかつた。

憲兵隊では逃避場所にあまり近づいたのでビックリして苦肉の計を用ゐたのである。

朴烈の怪寫眞事件

裁判所の仕事もなか〳〵むづかしい。檢事局などで、新聞のために種を出してくれるやうな氣づかひはないから、擔當記者の骨の折れることは格別で、第六感も第十感も働かせないでは、大きな特種を拔くことは出來ない。

裁判所關係獨自の特種も隨分ある、また事件が大がゝりになつてくると、裁判所と警視廳との共同動作が密になつてくるし、また警視廳と通報員との共同戰線も細やかになつてくる。

通報員といふのは、各警察署を擔當して、日夜事件の警戒にあたつてゐるのである。東日では約五十名通報員がゐて市の内外を警戒してゐるが、その連絡も極めて密接に迅速にと心掛けて居る。A署管内の事件が、その署で祕しかくしてゐてもB署又はC署で知れることがある、警視廳でこつそりやつてゐても他の警察署の人の動きや手配電報や一寸したキッカケから事件をキャッチすることが出來る。

新聞社の組織は目が荒いやうで、實は細かい、それは神經の目が細かいのである。

こゝに裁判所擔當の安島榮君の手記があるが、この事件は普通の裁判所の事件と一寸風變りなところがあるので引用してみる。

朴烈夫妻の怪寫眞事件は去る大正十五年の夏から秋にかけて、隨分世間を騷がした問題だつた。七月下旬、朴烈と文子が抱擁した寫眞入りの怪文書が、各方面へ配布され、それから一ヶ月ほどたつた八月下旬、突如として、朴夫妻を調べてゐた豫審判事立松懷淸氏が怪寫眞撮影の責を負ふて、職を退いた。これは可成り意外なことだつたので、影響は大きかつた、當時の野黨政友會は、綱紀紊亂の甚だしいものだと云つて、政府攻擊の烽火をあげたので、政府も默つてゐられず、東京地方裁判所檢事局に命じてその眞相調査を開始した。

立松氏が五號豫審廷で撮影したことまでは間もなく明らかとなつたが、撮影の時日とか、どうしてこれが朴の手に入り、そしてあの嚴重な刑務所から搬出されたかと云ふ點に就いては皆目判らなかつた。司法省は狼狽その極に達し前後二回に亙つて聲明書を發表したが、野黨は贋僞であると云つて承知しなかつた、そのうちに怪寫眞を刑務所から持ち出したのは某國家主義者だと云ふ噂が立つた。

その噂の最中――八月廿七日――某事件で東京控訴院へ呼び出された石黒鋭一郎君が、こつそりと地方檢事局へ連れられ平田檢事の取調べを受けたが、まだ調べの終らぬうちに、彼は得意の雲隱れをして了つた。

檢事局としては殘念この上もない、しかし保釋中の身だつたので、逃げたとて別に罪になる譯ではなかつた。怪寫眞事件の鍵を握るものは彼石黒だらうと云ふことになつた。そこで彼れを探し、インタービユーをすれば乾度面白いものが出來ると云ふことになつたが、さて東京に潜んでゐるのか、高飛びをしたのかも判らないし、さうしてゐるうちに保釋取消しにでもなればことは面倒になるので、猶豫してはゐられぬ、この二三日中だと、社會部の事件係り全部で智慧を搾つた末、當時の江東方面の通信員S君が石黒君をよく知つてゐると云ふことを思ひ出し、至急社へ出頭して貰ひ、あの手、この手と考へ拔いた揚句、その夜(廿七日)十時過ぎ、S君と二人で大久保百人町邊にある石黒君の義兄、平岩滅君――怪寫眞事件では黒幕の人――を訪ねた。

門前の路次に三四名の私服が眼を光らしてゐる、平岩君も追はれてゐるなと思つた。S君、名前を告げずに、合言葉みたいなことを云つて、家人を安堵させ、すつと奧へ通る。平岩君は無論ゐない。細君相手に遠廻しに石黒君の消息を聞いて見たがこつちに氣を許さぬためか、さつぱり判らぬと云ふ。止むなくそこを退却し、その足で、中野町打越の石黒君の留守宅を訪ねた。午前零時過ぎだつた。門前に近づくとヌツと三名の私服が現はれた。いゝ加減に敬遠して内へ入る。石黒君の弟が出て來る。S君得意の辯舌を揮つたが、一度電話がかゝつて來て、金と着物を持つて行つたが、それは或る路次あひで、用が濟むとすぐ別れて了つたので、現在の居所は判らぬとの返事、談判は二時間にも及んだが、要領を得ない。しかしわれ〳〵は失望しなかつた。それはこの弟の行動さへ監視してゐれば何時かは石黒君の姿を見ることが出來ると云ふ光明を認めたからである。勿論石黒實弟はS君と知合ひである、故意に妨害をする氣遣ひはなかつた。われ〳〵は希望を抱いて歸つて寢た。

翌日は午前九時頃に出社し、私は電話にかぢりつき、S君は打越と百人町との連絡を取りながら、實弟の行動に注意し、變つたことがあれば知らせて來る手筈だつた。一日待つて夜に入つても何んのこともなかつた。しかも裁判所方面の空氣は一日も早く石黒を見つけて事の眞相をきはめねば、司法部の威信に關すると云ふので、どうやら、保釋を取消しさうな形勢となり警視廳は全國に寫眞を廻して石黒逮捕の網を張つた。その夜、

われ〳〵二人は少なからぬ、失望と焦慮を感じて來た。

翌日も同じ戰法を取つた。S君は根氣よくもまた石黑君の實弟をつけまはした。

午後二時、電話のベルが勢よく鳴つて來た『モシ〳〵A君？ゐたよッ』『S君？　S君？　石黑がゐた？　本當か？　どこに？』『資生堂の人混みの中に』『しめた、あとからすぐ行く、逃がすな』私ははづんだ切れ〳〵な言葉で部長に報告し寫眞班と自動車を走らせた。ゐた！　正にゐた！　しかも銀座の資生堂の煽風器の前に。もう放すものか！　彼が歩けば歩く、自動車はまた老熟したもので、私どものあとをうまくつける。とう〳〵自動車に乘つたところをつけて穴守稻荷さまのうしろの方、海岸寄りのB亭、その奥まつた一室で石黑君に會見した。逃避術にかけては殆んど天才だと云はれるくらゐで、私どもが尾行し得たのはS君の力が預つて大だつた。

この問答では石黑君は、刑務所から怪寫眞を持ち出した人物は、相當知られてゐる男だとばかりで自分だとは云つてゐない。それに、この怪寫眞が材料となつて怪文書が現はれるまでには石黑君の義兄平岩君が、大役をつとめてゐることが判つたので、今度は是非平岩君に逢はねばならなくなつて來た。例によつてS君が根氣よくつけまはした。私は數日社へ泊り込んだ。とう〳〵九月四日平岩君にあふことが出來た。埼玉縣大宮町にゐたのだつた。

それから十日程たつて石黑君自身の手記が本社編輯局へ舞ひ込んだ。彼は初めてこの手記に於て朴から頼まれて怪寫眞を持ち出すまでの徑路を語つてゐた。

かくて兩君は、その後になつて公判に缺席したと云ふ理由で九月廿日に控訴院から保釋を取り消され、十月十八日横濱でつかまつた。逃走後五十日目であつた。

保釋を取消されるまでに會つてをいて怪寫眞の筋道をハッキリすることは特種であり又當然しなければならぬ努力であつた。保釋取消後面會などしては法の上からも德義の上からも問題であるから、その前に會見するといふことに努力した重點があるのである。

安島君の此手記で大要を盡してゐるが、この怪寫眞事件は、豫審判事が法廷で撮影したこと、朴烈に寫眞をやつたかやらぬか、刑務所からドウして寫眞が娑婆へ持出されたか、その寫眞が生んだ怪文書、惹いて政黨の爭ひ、司法當局の聲明書――と問題がもつれてきたので、石黑氏と會見して怪寫眞の出た筋道を辿るといふ事は是非必要であつた。石黑氏は他の事件で保釋

出獄してゐるのだが、萬一保釋取消になるとインタービユーも問題である。そこで事前に會見すべく安島君の苦しい努力がつづいたわけであつた。

賀川豐彦氏のニユース

ニユースを得る、又はニユースの鍵を得る、すぐ書くべきである、すぐ書きたいのが山々である、それを控えて隱忍、時を待ち機會を狙つて特種にすると、一層の確實さと効果があがる場合が多い。一刻一秒を爭ふニユース戰に隱忍久しうするといふことは容易ならぬことである。次ぎに載せる東京府市擔當記者古館三郎君の手記は老練なやり口を語るに恰好の——しかも最近の事實である。

賀川豐彦氏が、東京市の社會事業建直しのため、堀切市長の懇請を容れて「市囑託」として東京市入りをすることを、東京日々新聞は特號四段見出しで、七月二十五日付朝刊社會欄のトツプを飾つた、完全な特種になつた。

たしか六月の二十二三日頃だつたと思ふ、最高幹部のO氏の許に、大阪の某氏からの信書の序に「賀川氏もいよいよ東京市入りをする、しかも局長格の無給囑託で社會事業建直しのためだとの噂だ」との一項が付記されてあつた。

人一倍スマートなO氏は、私を呼んで、

「君、賀川豐彦君が市の社會局に入るといふことを聞いたかい……」

寢耳に水の私は「いや存じません」といふもの、記者意識に燃えて居る私は「さては……」と心にひらめくものがあつた。

私は直に自動車で、まつしぐらに記見場へ駆けつけた。

そこには無産市議で賀川氏と親友の馬島僴醫師が、熱心に乳幼兒の健康相談に應じたり或は脈を執つたりして居た。

私の話を聞いて居た馬島氏は、ニヤリニヤリと薄氣味惡い笑を浮べながら、

「君、どこから聞いたい……」

「或る確な筋……」

「確な筋？　實は、これを知つとる者は東京に二三人しかないのだ、理事者からぢやないとすると關西方面だな」と圖星を指された。結局それは事實で自分も一應相談を受けたが、自分は個人としては賛成だが主義の上からは反對であること、またこの話は前市長市來乙彦氏時代にも、時の内務省社會局長官長岡隆一郎氏の紹介で、話はあつたのだが實現しなかつたことなど一切が明瞭となつた。馬島氏の、

「君、この話を實現せしむるなら、今少しの間記事掲載は見合せてくれ、今素破抜れると一切合財打ち毀しになるから——

私も市の人事行政、殊に賀川氏如きを起用する如きは、堀切市長の大英斷であるから、これは或る時機まで掲載を見合はすことが社會的にも、また個人としても、記者道德に協ふたものと思惟したから「いかにも承知」の旨を明答して飛ぶがやうにして歸社した。

それから早速市來氏に電話で面會を求めたが留守、そこで速達便で面會を求むる要旨を申し送つたところ、數日の後快諾の返辭と時日とを知らせて來た、麻布仙臺坂の邸に訪問、當時の事情を委しく聞いて來た。

それからが問題だ、これを如何に活すべきかがである。いま功名にあせつてこれを素破拔けば、おぢやんになつちまふことは明々白々だ、うつかりして居ると、他紙に素破拔かれやすまいか「小人玉を抱いて罪あり」「新聞記者タネを抱いて煩悶あり……」

うつかり當の堀切市長や、主管の白上助役に打つ突かる譯にも行かず、まして廣瀨社會局長におやだ、思案の末、市の人事行政に對する時機を嚴重に監視する策戰を立て、主として廣瀨社會局長の身邊に滿身の注意を集中した、何となれば廣瀨局長は堀切市長就任と同時に他の一二局長と共に馘首の噂の立つた人で、市の内外でもこれを不思議に思はぬのが多かつたからだ。

一週間、十日、二週間、三週間―― だが何の變哲もない、ところが突如として大河内電氣局長詰腹問題がもち上つた。各社ともこの電氣局長更迭問題で大騷ぎをして居る、私は抱いた玉卽ち賀川氏問題が何時如何なる形で發表されぬとも限らぬ、堪え難き焦燥的氣分は幾回も〳〵も決斷！果斷を促すが、その都度記者的良心は「よい年をして……自重しろ」と私を押へるのであつた。

それからは毎日のやうに市長室や白上助役室に押掛けては漫談の中に人事異動の探りを入れたり、市社會事業建直しの必要を說いて見たり、あらゆる手練手管を使つて見たが結局得るところがない。

しかし市長や白上助役の談話中に、斷片的ではあるが社會事業建直しの必要であること、それには專門家が必要であること適當な人物がなくて困ること等を不用意の間に喋らしてしまつたばかりでなく「人事異動は市會がやかましいから……」との述懷的告白を掴んでしまつたので「こゝだな！」と決するところがあつた。

市會が喧しい！　七月十九日の市會後は當分市會は開かれぬ、それは例年暑中休暇中は市會は開會せぬ慣例になつてゐるからだ、そこだ！　十九日の市會が終つてからだと自問自答しそこで一段と市長、主管助役、廣瀨社會局長の一擧一動に注意し、殊に廣瀨局長には、出勤、退廳時間、訪問者、市長助役室

の出入等、いやしくもこれはと思はるゝ節々は細大洩らさず警戒した。

市會の翌日廿日も何事もなかつた、しかもこの間時期は非常に切迫して居るものと、感ぜられたので、何時でも報導出來るやうに、各方面の材料を蒐集して原稿も書いた。

廿一日の日曜は公休日だが出勤、そつと市役所に行つて樣子を見た、廿二三の兩日も何事もなかつた。廿四日は水曜の參事會常例日だ、この喧しい屋揃ひの參事會が終つた廿五日か或は六日頃だらうと一人極めに極めながらも躍る心を押へてゐた。

廿四日も參事會の模樣を氣にしながらも、至つて平靜を裝ふて漫談を交してゐた。正午過ぎ參事會は終つた。市長、助役、局課長連が續々歸つたが、廣瀨社會局長だけ一人が、參事會室から市長に續いて市長室に入つた、いよ〳〵最後の幕は切つて落されるのかな――と、私は全身の血を沸き立たせて結果を待つて居た。

いやその時間の長さ、十數分を過ぎた午後零時半頃、顏色青く凄味を帶んだ廣瀨局長が市長室から出て來た。やつたな――と直感したので、いきなり市長室に飛び込み、

「廣瀨局長に辭表提出を申渡しましたね――」

「え。」

いつものやうにニコ〳〵しながら、小面憎い程平靜な態度で、否認とも肯定ともつかぬ返辭をする。

「廣瀨さんは申渡しを受けたといひましたよ」探りを入れると、

「そんなら本當でせう、これ以上は勘忍してください」

一ケ月に餘る努力も漸く報いられる。それ走れ、夕刊締切りか日睫の間だと、市役所の階段を橫飛びに本社に走り歸り、O氏並に小野社會部長に事短かに報告すると共に十數分間で「堀切市長市社會事業刷新のため廣瀨局長に勇退申渡し」の原稿をかいて、而して例の賀川氏問題を夕刊に掲載すべきや否について は幹部とも相談の上、時間の都合により朝刊に割愛することになつた。

さて廣瀨局長問題は夕刊に特種とはなつたものの、肝心の賀川氏問題が他紙にも掲載されては、それこそ今迄の努力も水泡に歸するので、どうかこのことだけは他社に嗅ぎ出されぬやうにと心に念じながらも、第二段の活動に入り堀切市長を日本クラブに訪問して賀川氏のことを確め、且つ談話も取り、そして廿五日朝刊報導の記事を物して夜十時過ぎ歸途した。

翌朝新聞の配達を待構へて各紙を見た、ほんとうに見事に他紙を拔くことが出來てゐた。漸く胸を撫で下した、それは自分が特種をこしらへたといふ感じではなく、O氏から與へられたヒントにより、完全に任務を果したといふ責任感からであつた。

EASTMAN BUSINESS KODASCOPE



イーストマン ビジネス コダスコープ（商業用映寫機）

利益增進の＝新方法＝

イーストマン會社製
商業用(ビジネス)映寫機(コダスコープ)で………

販賣員がその商品を、一分一厘違はずに、その事務所に於ても、家庭に於ても、顧客に顯示する事が出來ます。即ち巨大な機械の運轉から精巧な科學的器械の作用に至る迄、細大漏さずに………

これこそ眞に、モダーンの販賣員にとつては、最も進歩した現代式の商品紹介の方法であつて、同時に顧客に、有利にして且つ滿足な印象を與へます。

此のイーストマン ビジネス コダスコープに就ては御買ひ付けの寫眞材料店へお尋ね下さい

イーストマン コダツク會社 米國紐育ロチエスター

EASTMAN KODAK COMPANY, *ROCHESTER, N.Y., U.S.A.*

BK1

晩年のトルストイ夫妻の關係

——トルストイ夫人の日記を讀みて——

米川正夫

晩年のトルストイ、即ち宗教的轉換以後のトルストイの生活が、痛ましい悲劇の連續であつた事は、既に多くの人々によつて說かれてゐる。人生根本の問題に直面して死にもの狂ひの苦闘を潛つた後、自我の否定と他人への奉仕を基調とする基督教的眞理に悟入したトルストイは、過去の文藝作品全部を人間の醜い欲望を美化した邪惡の書として否定し、一意專心に自分の新しい信仰の普及宣傳に努力した。その結果、彼の思想的述作は文藝作品以上の成功を博し、全世界いたる處に共鳴者を得てトルストイの名は現代の豫言者として喧傳せられ、その居住地は第二のメッカたるやの觀を呈したのであるが、しかしその他方に於ては言行の一致しない僞聖者として、世の嘲笑を浴びなければならなかつた。彼はこの恥づべき汚名と三十年間たゝかひ續けた揚げ句、遂に八十二歲の老軀を奮ひ起こして、かの一世を驚倒せしめた『家出』を決行し、放浪の途上に屍を横たへるに至つた。

この偉人の悲劇的運命に大きな役割りを働いてゐるのは、夫人ソフィヤ・アンドレーヴナである。通常彼女はトルストイズムの遵奉者の側から、天才の高遠なる理想を解しないために、その志を思ふ存分伸ばすことを妨げた俗人として、非難の的になつてゐたものである。しかしトルストイの藝術の渇仰者でありながら、その宗教的教義の追隨者たり得なかつた私は、ソフィヤ夫人の立ち場に關しても別樣の解釋をおぼろげながら持つてゐた。ところが、昨年はじめて——夫人の死後十年——發表せられた彼女の日記を讀むに及んで、その解釋が過つてゐなかつたのを確かめる事が出來た。

ソフィヤ夫人の日記は結婚の當年（一八六二年）から一九〇五

年まで、四十二年の長い年月を抱擁してゐるが、その記入日子は比較的僅少で、數年に亙つて杜絶してゐる箇所も少くないし、一箇年を通じて一二日しか記述してない時期も多く、極めて不規則なものである。その上、まづ刊行せられた第一卷には（日記は全體で三卷に分たれるらしい）、一八九〇年までの分しか收錄されてゐないので、トルストイの家庭内の空氣が最も緊張して、險惡になつた家出前の狀況に關して、具體的な事實を知ることが出來ないけれど、私の讀んだ第一卷だけでも、トルストイ夫妻の關係は極めて明瞭に輪廓づけられて、その以後はこの關係が次第に廓大され、深められて行つたに過ぎない事を暗示してゐる。

この日記の我々に與へる興味は實に絶大なものである。今まで我々が種々の材料から漠然と築いてゐた想像は、夫人の記述によつてまざ／＼と目に見、手に觸れるが如き實際性を賦與せられ、人間トルストイの赤裸々な姿が躍如として來るのである。しかし編纂者が序の中で斷つてゐる通り、この日記はソフィヤ夫人が心に不安や悲哀を感じた時、その苦悶にはけ口を與へるために綴つたもので、姙娠時その他の病的衝動の影響を受けた場合ひが多く、全體にヒステリイ的焦燥の痕の歷々たるものがあるから、夫人の記述をもつて、直ちに動かすべからざる眞相として受け取ることは、非常な輕率と言はなければならぬ。それは正に讀者の銘記すべきところである。しかし、トルストイ自身の作品や日記や書簡によつて、その性格とテムペラメントを想像してゐる我々は、たとへ夫人の告白であらうとも、第三者の言說によつて、文豪の價値批判を根本的に變へることは出來ない。彼に對する尊敬を減じることは不可能である。たゞ我々は最も鮮明な挿し畫（イリュストレーション）として夫人の日記を容け入れれば足りるであらう。

結婚當時におけるトルストイ夫妻の愛情が、いかに濃やかなものであつたかは、『アンナ・カレーニナ』の中に描かれたレーボンとキッチイの家庭生活を讀んだものは、たやすく想像することが出來る筈である。トルストイは妻を美と若々しい生命の權化として、ソフィヤ夫人は夫を傑出した才能と理智と、そして男性的力の所有者として、互ひに熱烈な愛を捧げ合つてゐた。殊にソフィヤ夫人の愛は全く獻身的であつた。それだけに、始めて彼女が夫に古い日記を示されて、『今まで曾て覺えないほど惚れ込んで了つた！』といふ一句を發見し、しかもその對象がヤースナヤ・ポリャーナの農婦であつて、現在なほ自分達の傍近く作んでゐる事を知つた時、彼女の絶望は殆ど致命的なものであつたらうかといふ事は何とも言へない憎悪をもつて、匕首や鐵砲を

眺めた。たつた一打ち——遺作はない。まだ子供のない中に』。かう彼女はその時の心持ちを日記に語つてゐる。彼女は夫の過去を呪つたが、それと同時に夫の複雜多端な過去の生活と、それに伴なふ豐富な内的體驗に想到すると、自分の貧しい單純な内部生活と比較せざるを得なかつた。『わたしの住んでゐる世界は、もしあの人を除いて了つたら、小つぽけな狭くるしいものになつて了ふ。しかも二人の世界を一つに合はす事は出來ない。あの人は賢くて、活動家で、おまけにあの恐ろしい長い過去を持つてゐるのに、わたしの過去はけちな詰まらないものだ。』とかう彼女は歎きかつ恐れてゐる。こゝに後年彼らの間に恐ろしい形を取つて生長した、宿命的な不和の萌芽が胚胎したのである。

けれどこの一時の波瀾は、當時の二人を支配してゐた愛の大洋に包和されて、再び平和は新夫婦の巣へ歸つて來た。そして夫人は自分の激し易い性情の發露を恥ぢて、一月ばかり後にはかう書いてゐる。『あの日記は穢らはしいものだつた』『嫉妬はわたしの生まれつきの病氣だ。嫉妬が起こるのは、わたしがあの人を愛する餘り、他の何ものも愛さないためかも知れない。すつかりあの人に身を捧げ切つて、あの人のみによつて、あの人と共にゐる事のにみよつて幸福を感じ、その幸福を失ふことを恐れるからだらう。』このとき以來、彼女はますます自分の精神的資性の微弱や、修養の不足に對して敏感になつて來た。『これまでわたしは大膽に、思ひ上がつた氣持ちであの人を愛してゐたが、今ではあの人の優しい言葉一つ一つにも、有り難さを感じるやうになつた。』しかし、これは必ずしも彼女の心持ちの全體ではなかつた。彼女は自分が夫のみを愛してゐるにも拘らず、夫が自分に對する愛以外に、事業——文學や、農村經營の仕事を愛し得るのがもの足りなかつた。『リョーヴチカ（レフの愛稱）は年取つたのか、それとも不幸な人間なのか。一たい金の事や領地の事や、葡萄酒工場の事よりほか、あの人には何も興味が持てないのかしら？　しじう一人で領地内を駈け廻り歩き廻つてばかりゐる。わたしは淋しい——一人ぼつちだ、たつた一人きりだ。あの人の愛はわたしの手を器械的に接吻することで表現されるばかりだ……』『リョーヴチカは次第にわたしから遠のいて行く。あの人に取つては愛の生理的方面が大きな役割りを演じてゐるのだ。これは恐ろしい……』かうした暗い想念は、當時夫人が身重な體であつたといふ理由で說明さるべきものであるが、しかしこのモチーフが年と共に鮮明になつて、次第に疑惑から斷定に移り、遂に夫人の日記の支配調となつてゐるのは、充分注意に價する點であると思ふ。

かうしてときぐ〳〵發作的に嫉妬や自己嫌惡の苦悶で惱らされながらも、彼女の生活は概して平和に幸福に流れて行つた。殊に後から後からと子供が生まれるやうになつてからは、ソフィヤ夫人の稀なる生のエネルギィは、强烈な母性愛となつて幼い子供たちの上に注ぎかけられ、それによつて彼女は無限の慰藉を汲み取ることが出來た。たゞ自分は理想的な保姆であつて、それ以外の何ものでもないといふ想念が、鳥影のやうに彼女の心にさして、その明るい悅びに小さな陰を投げるのであつた。トルストィ自身の日常生活に關しては、ピアノを彈奏したり卽興曲をものしたりする音樂家としての彼、毎日のやうに森や野へ出掛けて兎や鷸を殺して來る狩獵家としての彼が、最も多く妻の日記に現れて來る。平隱無事な豐かな非園の生活記錄である。

けれども遂にトルストィの生活の轉換期たる一八八一年が訪づれた。それまでソフィヤ夫人の日記に現れてゐた、半ば氣まぐれ、半ば愛すべきエゴイズムの變形とも見られる不安や、疑惑や動搖は、この時期から漸次眞劍味を帶びて行くのである。とは言へ、宗敎的轉向そのものや、それに先立つトルストィの苦悶時代、謂はゆる危機時代については、ソフィヤ夫人は全然これに觸れてゐない。暴風の第一聲は、一八八二年（ソフィヤ夫人三十八歲の時）八月二十六日の記述によつて上げられてゐる。

「二十年前、幸福な若い妻として、わたしはリョーヴチカに對する自分の愛の歷史たる、この日記を綴りはじめた。この中には愛よりほかに殆ど何ものもない。ところが二十年たつた今、わたしは眞夜中たゞ一人でこの日記を讀みながら、自分の愛に哀悼の淚をそゝいでゐる。はじめてリョーヴチカはわたしの傍から逝れ去つて、書齋で夜を送るべく閉ぢ籠もつた。」とかう彼女は筆を起してゐる。諍ひの原因はつまらない事であつた。彼女は夫に向つて、彼が子供の面倒を少しも見ようとしない、病兒を見とる手傳ひをしないから、子供らの着物が縫へないと訴へたのが始まりである。「着物などが問題ではない。」と彼女は續けてゐる。「問題はあの人がわたしや子供達に冷淡になつたといふ事なのだ。あの人は今日大きな聲で、自分の一番痛切な願望は家族から去ることなのだ、と叫んだ。わたしは死んでもあの人の眞劍なこの叫びを忘れはしない。けれどあの人はわたしの心臟を切り離したも同然だ。わたしは神に死を祈る。あの人の愛なしに生きて行くのは恐ろしい。」

これは說明するまでもない明白なことである。新しい宗敎的氣分に浸り切つたトルストィは、自分にとつて不變の眞理と思はれる基督の敎へ——時代の塵を拂ひ落とした正しい基督の敎へを、廣く人類に傳へることを焦眉の急務と感じ、全身的にこ

の仕事に沒頭して行つたのである。それと同時に、農民の勞働によつて安逸を貪る貴族的生活の不合理さを、痛感せずにゐられなかつた。彼は既にこの時分から、領地財産の放擲といふ事を夢想し始めたのであるが、無論それは夫人の贊成を得る筈がなかつた。彼女は子供たちを不自由なく育て上げて、最高の敎養を授けることを、母としての第一の義務と考へずにゐられなかつた。それには恒産を有して、生活の安全を保障されてゐる必要がある。かうして夫妻の間の意見の衝突は、些細な動機を見つけては忌はしい諍ひとなり、さま〲な場面(シーン)となつて深められて行つた。家出――これがトルストイのためには唯一の出口であつた。彼は三十年間この夢想を自己の内部にはぐくみ育てゝ、遂に死の直前にそれを敢行したのである。

しかしこの當時はトルストイに取つて、自己の敎理の完成時代であつたので、家族に對する要求もはつきり具體的な形を取つてゐなかつた。で、長い間の家庭生活の習慣はずる〲に彼を引き摺つて行つたらしい。夫人はその日記をこんな風に續けてゐる。

「わたし達は一晝夜たつて仲直りをした。二人とも泣いた。そしてあの恐ろしい夜哀悼の涙をそゝいだ愛が、まだ死んでゐない事を發見したわたしの悦びはどうだつたらう。何といふ若々しい戀の興奮だらう。」この瞬間のトルストイは夫人にとつて、厳めしい豫言者でもなければ傳道者でもなく、單に懷かしい愛すべきリョーヴチカに過ぎないのであつた。この時、トルストイは五十四歲、夫人は三十八歲に當たつてゐた。翌八十三年の三月には次のやうな言葉が發見される。

「リョーヴチカは落ちついてゐた善良だ。時々以前のやうな讒責や苦い言葉が洩れるけれど、それも段々間遠になり短くなつて行く。あの人は次第々々に優しくなつてくれる。（中略）リョーヴチカは相變らず宗教的なものを書いてゐる。これは際限のない仕事である。なぜと言つて發表の可能がないのだから。それはさうあるべきなのだらう。それは神のみ心なのだ。偉大な目的に役立つために必要なのかも知れない。」この引用で見られる通り、夫人はトルストイの宗教的活動に、眞の價値を認めてゐない。それは無論、夫妻の間の精神的素質と敎養の非常に大きな相違が、第一の原因であることは言を待たずして明かであるが、なほそのほかに、夫人は夫の性格や氣分を餘りによく知り過ぎてゐるために、人並はづれて自我の強烈な愛他的感情の稀薄な人間トルストイと（彼が早く父母に別れて家庭の暖かみを知らずに育つたために、愛情の冷たい人間に出來上がつたのではないかといふ疑ひは、夫人も屢々日記の中に洩らしてゐる

る)、自己否定と愛他主義の使徒となつた。轉換後のトルストイの中に、融和しがたい矛盾をそれとなく直感したに相違ない。多分に抽象的分子を含んだ、窮屈なトルストイの教義に本能的な反撥を感じて、夫の豐富な人間性を完全に生かし得る、廣天無邊な宇宙的意志とでもいふやうなものに、より多くの無意識的牽引を感じた夫人の心持ちは、充分に理解し得るところである。

しかしかうした愛と幸福の時期、平和な無風の時期は、絶えず公然の爭鬪や、暗默の離反の時期と入り代はつたものと思はなければならない。トルストイが家事を一切放擲して顧みなくなつたので、領地の經營の重荷は、子女の教養家事百般の監督のほかに、悉くソフィヤ夫人の双肩に落ちかゝつて來た。それが夫人の病的な神經をいら〱させ、時には暗い絶望の中へ投げ込むのであつた。三年間の中絶後、八十六年十月の日記に彼女はかう書いてゐる。「家の中のものは誰も彼も――レフを始めとして子供たち一同が羊の群れのやうに、わたしに鞭の役割りを押しつけてゐる。子供、家事、金錢上のこと、教育、領地經營、一切の物質上のこと、すべての重荷と責任をわたしに押しつけて置いて、しかもわたしより以上にそれらを利用しながら自分達は善行の衣を着すましてゐる(中略)でわたしは始終一切を擲つて、何らかの方法で生活から去つて了ふことを、どんなに望んだか知らない。あゝわたしは生き、闘ひ、苦しむのに疲れて了つた。最も親しい人々の意識せざる毒念のいかに大きい事よ、彼らのエゴイズムのいかに大きい事よ。」と彼女は絶叫してゐる。彼女の愛する目は豫言者トルストイの中にも、偉大なエゴイズムを見遁すわけに行かなかつたのである。

トルストイは自ら額に汗する勞働生活を實行するために、領地の百姓たちと共に畑を耕作中、過つて車の一部分に足を打ちつけたのが因となつて、骨膜炎を惹き起こし、一時重態に陷つたことがあつた。この二月ばかりの間、夫人は殆ど寢食を忘れ、夫の看護に盡くしたが、それは日記の告白によると、彼女に取つて苦しいけれど、また幸福な時期でもあつた。愛するもののために己れの全部を捧げることが出來たからである。けれどこの幸福は夫の健康恢復と共に去つた。夫人は日記の筆を進めてかう言つてゐる。

『あの人はわたしがもうこれ以上必要がなくなつたといふことを、わたしにはつきり思ひ知らせてくれた。わたしはまたもや不要な道具のやうに抛り出された。しかもそのわたしから私有財産、以前の信念、子供の教育と生活の保障、すべてのものを抛擲するやうにと、力不相應のことを漠然と要求するのだ。

それはまだ精力に乏しくないわたし一人に出來ないばかりでなく、彼の說の正しさを信じてゐる幾千の人々さへ、實行できないものではないか。」この點に於ても、ソフィヤ夫人の側に幾分の眞理を認めざるを得ない。つまりトルストイの要求の漠然としてゐる事が、彼ら夫妻の間に不和を醸し出す主な原因だつたのである。トルストイは生活の單純化を妻から要求したけれどその程度限界については、何ら具體的の指示をしようとしなかつた。さればと言つて、夫が漠然と主張するやうに、一切を拋棄して無一物に歸するなどといふ事は、大勢の家族を抱へた彼ら夫婦として、到底考へることさへ出來ない駭擧であつた。「わたしは家族を統御しながら、出版の事務を扱つて收入の道を講じてゐる（當時領地の方の收入は微々たるものであつた）。ところがレフはわざとらしい無關心な態度で、しかもわたしに對する惡意をまざ／＼と見せながら、自分の氣に入りや貧乏人にやるために、その金をわたしからのべつ要求するではないか。しかも彼らは事實まづしいのではなくて、寧ろづう／＼しいのだ。どんな風に仕向けたら金が絞り取れるかといふ骨を、うまく飮み込んでしまつたのだ。」と夫人の筆は女らしい愚痴とひがみに墮して行く。

說教者としてのトルストイの名聲が高まつて、親しく彼の教へを受けるために、ヤースナヤの邸を訪れる歸依者崇拜者の數が益すに從つて、夫人の不安は次第に强くなつて行つた。彼女は夫の生活の興味と注意が、大部分その方へ割かれるのを見て、自分と夫の間を遠ざける邪魔者として、彼らに對して殆ど盲目的な憎惡を感じた。彼女はこれらのトルストイヤンを「怪しげな人間ども」と稱して、毛蟲のやうに忌み嫌つた。殊にトルストイの教義の熱心な共鳴者であり、その心友であつたチエルトコフを、惡魔とさへ呼んでゐたのは周知の事實である。八十七年三月の日づけで彼女はこんな事を書いてゐる。「チエルトコフの手紙をもう一度讀み返した。彼は自分たち夫婦の精神的融合の幸福を說いて、この幸福に充分價すべき筈のレフがそれを有してゐないのを、心から同情してゐる——わたしへの當てつけなのだ。わたしは讀み終つて胸が痛くなつた。あの鈍感で狡猾な不誠實な男は巧言でレフを迷はして、二十五年間もわたし達二人をあれほどしつかり結び合はせて來た絆を、斷ち切らうとしてゐる（多分これが基督教的なのだらう！）」これなどは愛する夫を獨占することが出來なくなつたために、夫人自身でも認めてゐる持ち前の病的な嫉妬心の言はせた言葉で、公平の立ち場から見て夫人の品位を落とすものであるが、彼女の强烈な愛情の一表白として、同情の點がないでもない。

夫人は單にチエルトコフのみならず、溫和で篤實なビリユコ

フ（有名なトルストイの傳記者）に對してさへ、彼がトルストイズムの信奉者であるがために、令孃マーシヤとの間に生じた熱烈な戀ひをも頑なに否定して、令孃の切なる願ひをも斷乎として斥けた小說的事實がある。これに關する日記の記述は極めて興味の深いものがあるが、今はその一つ〳〵の細部を紹介する餘裕を持たぬのを遺憾とする。

トルストイの崇拜者、乃至世界的偉人の風丰に接せんとする好奇な訪問者は、すべて原則として一切無差別に迎へ招じる事になつてゐたが、それに附隨する諸般の煩瑣な雜用は悉く夫人の肩へ落ちかゝつて來るのであつた。トルストイ自身も萬人との融合一致といふ信念のために、すべての訪問者に接見することを義務と考へてゐたが、それですらその煩に堪へ兼ねて、あるとき不用意に自分の時間を自由に使用し得る閑居生活の憧憬を洩らしたほどであるから、ソフィヤ夫人に取つてこれが堪え難い苦痛であつたのは當然であらう。同じ頃の日記に次のやうな句が見出される。「家庭的獨居ともう少し眞面目な生活と閑が望ましい。客が時間の全部を奪つて了つた、そして奪ひつゝある。（中略）一切の訪問者を無選擇に迎へるのは、何といふ苦しい義務だらう。」

しかしかういふ調子で續けて行く事は、この小文の範圍内に於いて不可能な事である。私はもう結末を急がなければならない。私が言はうと欲する最も重大な事は、ソフィヤ夫人が世間で一般に言はれてゐるやうな沒分曉漢でなく、かへつて反對に最もよくトルストイの眞骨頂を理解した人だつた、といふ事實である。彼女は思想家としてのトルストイを、理智でなくしてその全存在をもつて、本能の叡智をもつて理解したのである。

九十年十二月、夫人はかういふ痛ましい叫びをあげてゐる。「今こそわたしは目があいた。わたしはあの人を理想化してゐたのだ、わたしは長いあひだ理解しようとしなかつたけれど、あの人にはたゞ肉慾だけしかなかつたのだ（以下原書省略）…あの人は愛するすべを知らなかつた――若い時から、それに馴れてゐなかつたのだ。」同年十二月。「リヨーヲチカの日記（青年時の）を淨書したが、「愛はない、たゞ性的結合の要求と、生涯の伴侶を欲する合理的要求があるのみだ」といつてある所で筆を擱いた。もしわたしが二十九年前にこの信條を讀んだなら、決してあの人と結婚しはしなかつたらう。」すべてこれらの言葉は何を語るか？　ほかでもない、あまりに偉大な自我と自我愛を持つてゐるために、廣い意味の愛に缺けるところの多かつたトルストイが、自己の性向と全然相反した敎義を宣傳したために、この自我に對する强制が彼に深刻な苦悶を齎らした事を、端的に我々

に語つて聞かせるのでなくて何だらう。夫人の記述には多分のヒステリイ性な誇張が交じつてゐるにもせよ、彼女は三十年間の最も近しい共同生活によつて、トルストイの性格の核心を握んだのである。次に引用する箇所は更にその間の消息を明瞭にしてゐる。

九十年十二月二十五日。「嫉妬するのが恐ろしい。この恥辱はみんなに知られて、モスクワの社交界で考へ出された警句が、小氣味よささうに繰り返されるだらう。Voilà le véritable "posleslovie" de la sonate de Kreutzer (あれが本當のクロイツエル・ソナタの跋文だ)」

九十一年一月四日。「これはみんな嫉妬の徴候だと思ふとぞつとする。それも不思議はない。リョーヴチカは優しくて、始終わたしがどこにゐて、何をしてゐるかといふ事を覺えてゐてくれる。あゝ、もしあの事がなくてかういふ關係が續いたなら！けれどあの人にはそんな事はたまにしかないのだ！」

小說『クロイツエル・ソナタ』の書かれたのは一八八九年である。人も知る如く、トルストイは性慾を最も兇暴な罪惡と見なして、絕對の禁慾童貞を人生の理想とし、それがためには人類の滅亡さへも恐れなかつたほどである。もつとも、それはたゞ選ばれたる少數の人のみよく守り得る美德であつて、一般人にとつては道德上の高い目標として存在すべきである、とかう斷つてゐるけれど、しかしその主唱者であり、かつ齡六十を越すこと二年の老人トルストイにとつては、充分みづから範を示し得たものと想像されるが、實際は夫人の日記の示す如く、なほ彼の肉體の中に燃え殘つてゐる強い生活慾を、征服する力が足りなかつたのである。そのために彼の偉大な教へは、自分自身にも眞に宗教的な和らぎを齎らす事が出來ず、周圍の者をも心から歸服し同化する力がなくて、遂に最後の悲壯な決裂によつて一切を解決すべく運命づけられたのではあるまいか。トルストイの晩年と死の有する深遠な意味と、崇高にしてヒロイックな美は多くの人によつて讃美された。しかし、それと同時に、偉人の妻たるがための幸福と痛苦を、底の底まで味はひ盡くしたソフィヤ夫人の生涯も、より多くの注意と尊敬を拂はれて然るべきであらう。

Onoto the Pen

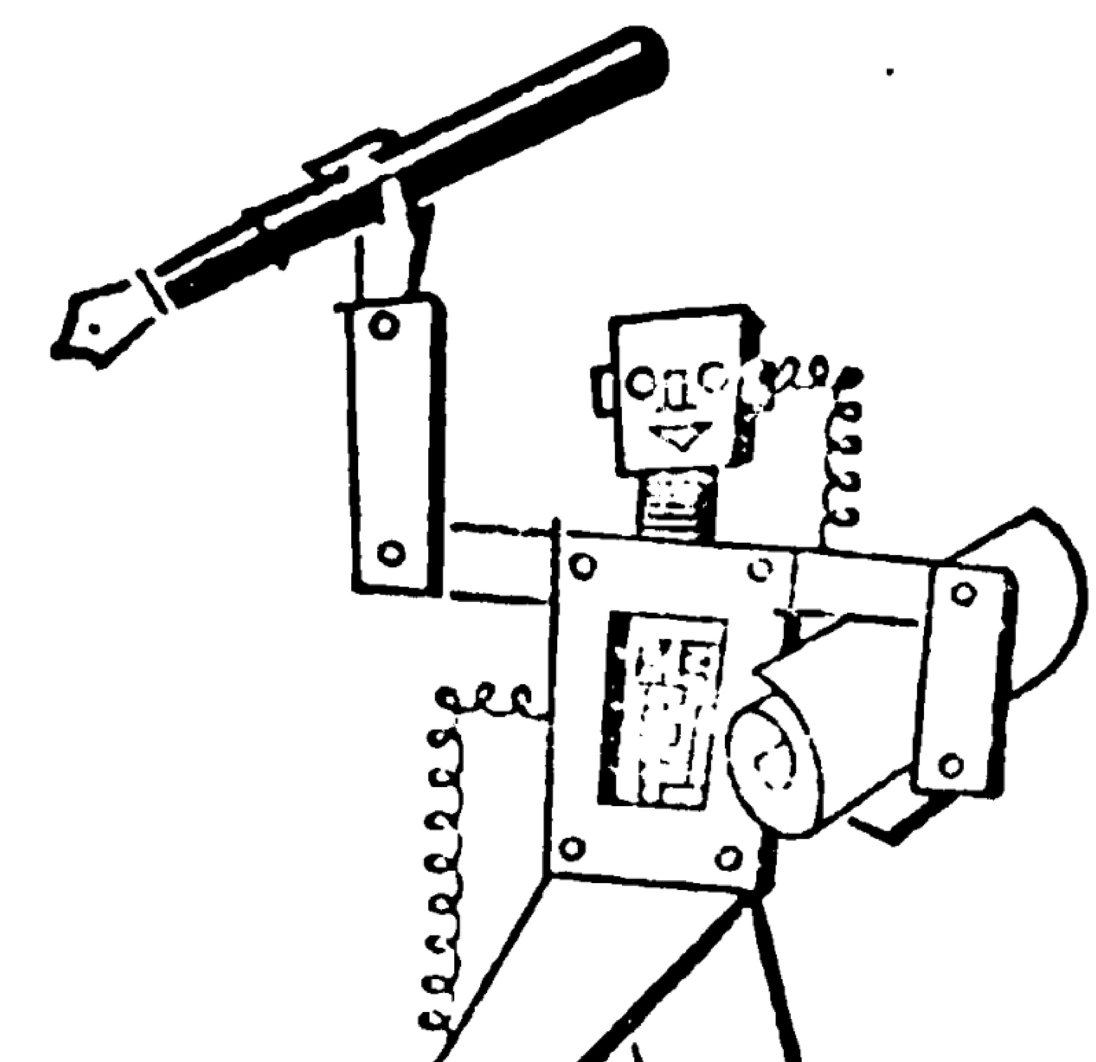
機械人(テレボックス)がオノトを使ふ

時代が聽て來ます。機械人が電氣工學の驚異であるやうにオノトも亦萬年筆界の驚異！ 共に微妙な生命があるやうに自由自在に活動します

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆 七圓五十錢以上
アテナ萬年筆 參圓五拾錢以上
萬年筆用アテナインキ 參拾五錢

送料 各 十八錢（カタログ進呈）



¥1.50

"VALET" Auto Strop Safety Razor

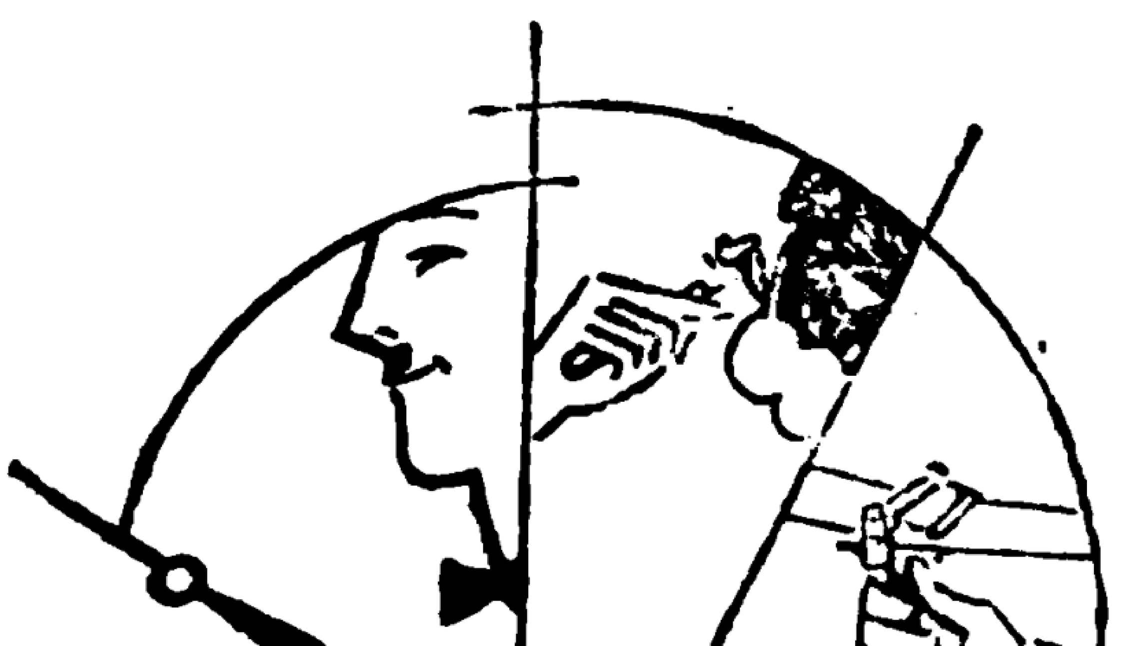
バレー・レビュー

研ぐ——剃る——綺麗になる、其間暇なし五分間この整容術の新演出が近頃バレー・レビユーと言はれて盛に流行してゐます。

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

B型 一三・五〇以上各種（各刃一打革砥一付）
C型 一・五〇 二・〇〇 三・三〇 四・八〇（各刃三枚革砥一付）
替刃利用ナイフ（刃一枚付）・九〇 送料各・一八
販賣所 大百貨店著名洋物雜貨金物店等
取次所 中央公論社代理部



（カタログ進呈）

東京日本橋通二丁目
丸善株式會社
大阪 神戸 京都 名古屋 横濱 福岡 仙臺 札幌
東京＝神田・芝三田・早稲田・丸ビル

幣原喜重郎論

馬場恒吾

支那が暴力に依つて東支鐵道を回收した。露支國境には露西亞と支那の軍隊が集中されて、今にも戰端が開かれんとする形勢になつた。此時若し日本に田中政友會内閣が存在してゐたならば、日本は十中の八九已に滿洲に出兵してゐたであらう。其口實は何んとでも付く。其目標は行當りばつたり。仕事好きの田中内閣は此機會を逸するやうな事はなかつたであらう。

幸に田中内閣は其前に沒落してゐたから、我々は此ドンキホーテ的遠征の負擔を免かれた。現在日本の外交を掌る幣原外相は何をしたか。彼れは露支の國交斷絶すると同時に、東京駐在の露支代表者を別々に招いて、色々の事を話した。其中に露支兩國共に不戰條約に調印してゐる國である事に、兩國の注意を惹いた。一日後れて米國の國務卿スチムソンは列國の代表者を招いて、露支の關係切迫して來た。何んとか列國として採るべき手段はないかと云ふ相談をした。日本の出淵大使も其席に出た。丁度其時日本から電報が來て、日本の外務大臣は露支兩國に向つて、不戰條約の調印國であると云ふ注意をしたとある。出淵大使はその電報をスチムソンに見せた。スチムソンは、それは丁度いゝ、米國も同感である。併し日本が已にさうして呉れた以上は、米國が又それを繰り返へす必要もあるまいと云ふので、その儘になつた。

尤も米國及び英國は露西亞とは現在外交關係を結んでゐない。それ故に直接に外交上の手段を採る方法はない。日本は初めの注意以上に何にもしない。佛蘭西は若し露支兩國の希望とあれば兩國間に仲介の勞を取つてもよいと云つたけれども、それは露西亞が希望しない爲めに、具體化しなかつた。幣原外相は地方官會議で演說して「露支兩國とも第三國の力を借らずし

て、直接交渉により紛爭を解決せんとしてゐるので、日本政府としては其意思を尊重し兩國をして平和的に解決せしめる方針である」と云つてゐる。

他國の意志を尊重する。これが幣原外交の特長である。私は此外務大臣を研究しようと思ふ。

私は駈け出しの新聞記者のとき、外務省詰めの霞倶樂部に屬して、屢〻今の外務大臣幣原喜重郎男に接觸した。幣原は大隈內閣の石井菊次郎、寺內內閣の本野一郎、後藤新平、原內閣の內田康哉が外務大臣であつたとき、其下の次官であつた。そして新聞記者からは難物視せられた。面會を求めても、容易に面會して吳れぬ。私なども、外務省の小使を强要して、名刺を持たせて、次官室に百度參りをさせた事がある。そして自分等は廊下に詰め掛けて面會を求めるけれども、彼れは頑强に擊退する。偶まに面會しても、新聞記者が十も質問して一つ位しか答へぬ。丸々と肥つて小兒のやうに笑ふ顏は無邪氣であるが、問題の要點に行くと、啞の如く默つて了ふ。我々はかなり手古摺つた。

併し私は新聞記者として種を取つて步いた揚句、最後に幣原に會はないと安心が出來なかつた。何となれば、外の外交官の中には色々の事をよく喋べる男もあつた。尤もらしい秘密を聞かして吳れる連中もあつた。だが、それが本當であるか、作り話しであるかゞ見當が付かない。其點になると幣原は安心出來た。彼れは多くを語らない、だが其イエスとかノーとか云ふ一言には決して僞りがなかつた。新聞記者の身としては、如何に愛想よく話されても、確かでない事を確かである如く語られるのが一番危險であつた。迂濶にそれを信じて新聞に書くと、後で取り返へしの付かない失敗になる。其點では幣原のやうに、木で鼻を括つたやうな挨拶をしても、決して新聞記者に嘘を吐かない人が、何の位親切であるか判らなかつた。かうした事で幣原には絕對の信頼が出來た。私は彼れに感謝してゐた。

だから、大正十三年に三派聯立內閣が出來て、彼れが初めて外務大臣になつたときも、私は幣原は日本の外交を委かして安心の出來る男だと思つた。それから約三年間彼れは外務大臣としてゐた。其間に所謂幣原外交と云ふ文字が出來て、彼れの外交は軟弱、追隨、無抵抗主義などの惡評を受けた。殊に此三年間の末期に於て、支那に關稅會議があつて、日本が率先して支那の關稅自主權を承認すると云つた事がある。南京事件の際に某國は二萬の出兵をしてゐるのに、日本は一人の陸兵をも出さなかつた。世間には幣原が列國とも協調せず、然かも自主的に

强硬な態度を取るでもなく、只軟弱と無爲に終始する定石外交であるとの批評が起つた。或人は此批評を元老西園寺公の處へ持つて往つて、幣原外交を非難した。

すると西園寺は非常に不機嫌であつた。公は殆んど幣原を辯護するかの如き態度を採つた。曰く、定石と云ふものは碁盤の一隅の定石であつても、尙碁盤全局の形勢に照らして石を下すものだ。支那に對して政策を行ふとき、それが世界全局に如何なる影響を及ぼすかを考へて政策を立てる。定石外交でよいのだ。幣原は日本の外交に於ける第一人者であらうと。田中外交の行き詰つたときも、幣原は時々西園寺に招かれて、外交上の意見を求められた。今日も尙、彼れは元老の信頼を得てゐる。

對支交渉で西園寺が世論に反して幣原を信用した事情はかうである。關稅會議のとき日本の代表者日置益は率先して支那の自主權承認の演說をした。それは恰かも列國を出し拔いた如く見えたが、實は英米の代表者は北京に行く前に東京に立寄つた。其時外務省で幣原と會見して、關稅問題に關して意見を交換してゐる。幣原は英米の意向を酌んで日置に演說さしたのである。だから、少しも英米を出拔いた事になつてゐない。尤も幣原の考へでは、當時の支那代表の王正廷は華府會議に於けるヒユースの例に倣つて、會議の劈頭に於て、會議の實際問題に觸れる大演說をするであらうと思つた。それに答へる爲めには、日本も只外交上の辭令を述べるに止まらず、具體的内容のある演說をすべきだと思つた。其積りで、幣原は日置と二人で此演說の草稿を東京で作つたのである。此先見が當つた爲めに、日本が先駈けの功名をしたかの如く見えたが、内容は英米代表者と談し合つた事であつた。それ故に英米それ自身は日本に出し拔かれたとは思はなかつた。此演說の爲めに關稅會議の期間を通して支那が日本を信頼する態度が濃厚であつた。英米が日本と交渉し、日本が支那と交渉するやうな事態も起つた。日本は恰かも指導的立場を採るやうに見えた。

英國が出兵するとき、日本にも出兵を求めて、幣原がそれを拒絕し、そして列國の協調を破るかの如く傳へられた。然るに事實はかうである。英國は日本の出兵を求めはしなかつた。日英同盟が已に破棄された後であるから、英國として日本の出兵を求める事は出來なかつた。只英國が出兵するに付き、日本が出兵するや否やを問合せに來た。日本が出兵すると否とに依つて、英國は自分が派遣すべき兵數を決めたかつたのである。幣原は日本は出兵する意志のない事を答へた。英國はそれを考慮に入れて二萬の出兵をした。西園寺は此等の事情をよく知つてゐた。それ故に幣原が英米を出し拔いたとか、列國の協調を破る

とかの說に耳を傾けなかつたのである。

　かうした樂屋の毀譽褒貶はどちらでもよいとして、私は玆に幣原外交にはそれが國際關係の方向轉換を代表する重要なる素質があると思ふ。それが軟弱外交と云つて貶せられるのも、定石外交と云つて褒められるのも、皆此國際關係の方向轉換を認めるか否かに依つて決定される事である。然らば國際關係の方向轉換と云へば何であるかと云へば、それは今迄の國際關係が主に武力の強弱に依つて規定されてゐたものを、出來得る限りそれを道理の支配に置かんとする努力である。國際關係が武力の強弱に依つてのみ規定される間は、露骨に云へば外交は存在する必要がないのである。苟くも外交官たる以上は誰でも多少は此國際關係を合理化せんとする。併し其所に信念の相違がある。弱肉強食主義に何とか尤もらしき理論を附せんとする合理化もあれば、國際關係は道理の上に樹立すべきもの而して樹立され得ると云ふ信念の上に立つて、此合理的外交に努力するものゝ差がある。幣原は此後者に屬するものと、私は信ずる。

　大正十三年七月一日彼れが外務大臣として初めての議會の演說で、彼れは此信念を述べてゐる。外務大臣の演說は閣議の承認を得る必要があるので、彼れが此演說の草稿を閣議に提出したとき、他の大臣は、これは演說ではない、講演だと云つた。それほど彼れの外交演說は外交の原則に觸れてゐた。其中に彼れは

「帝國の外交は我正當なる權利利益を擁護增進すると共に列國の正當なる權利利益は之を尊重し以て極東並に太平洋方面の平和を確保し、延いては世界全般の平和を維持する事を根本主義とするものであります……我々は何等他國を犧牲として非理なる野望を滿たさむとするものでありません。又所謂侵略主義領土擴張政策と云ふが如き事實不可能なる迷想に依つて動かさるるものでありません。自國の正當なる權益を守ることゝ、他國の正當なる權益を尊重することゝが、互に衝突すると見るべき理由は毫もないと信じます。凡そ國際間の不和は一國が他國の當然なる立場を無視し、偏狹なる利己的見地に執着する事に依つて發生するものである。之に反して我々の主張する所は畢竟列國の共存共榮の主義であります。今や世界の人心は此方向に向つて覺醒せんとするの徵候を示して居ります。國際聯盟の制度の如きも此人心の覺醒に根柢を有することは疑を容れません。列國が共に以上の根本主義を認むるに於ては、百般の國際問題は自から解決の基礎を發見するに難からざる事と考へます。」

　玆に國際關係は相互の立場を理解する事に依つて、平和に解決出來ると云ふ信念が現はれてゐる。今迄もさうした類の事を

云ふ外交官はあつたにしても、それは多く外交上の辭令として云はれた。幣原の此演說を讀めば、彼れが眞實に腹の底からさう信じてゐた事が判る。彼れは其信念を外務大臣として議會の演壇から打突けんと欲した。それで關係から、これは演說でなく、講演だと云はれたに拘らず、其講壇的な信念を吐露したのであつた。

其演說のあつた當時、世間は矢張之れを外交上の辭令と思つたらしく、別に大なる注意をも拂はなかつた。併し幣原外交が段々此方針に依つて行はれるに從つて、それは軟弱外交であり追隨外交であると云ふ非難を受けた。南京事件で日本居留民が迫害せられたとき、そして幣原が出兵しなかつたとき、殊に此非難が強かつた。併し幣原は遂に出兵しなかつた。彼れは云つて居る。南京事件は支那國民軍の中に居る共產黨が起したものだ。共產黨は蔣介石を沒落せしめんとしてゐる。外國との紛爭を起して、蔣介石の立場を惡くせんとするのが彼等の目的である。だから日本が出兵して、蔣介石を攻めるのは、日本が共產黨の術中に陷るやうなものだと。其後の事態は幣原の觀察の正しかつた事を裏書きした。

共產黨が支那に勢力を張つてゐたとき、日本には支那が共產化すると云つて恐慌的氣分に襲はれる者があつた。幣原は昭和二年春の議會で左の演說をした。

「支那で何人が政權を取るか、如何なる政策がよいかは同國民自身が決定すべき問題である。支那人の國家生活は數千年の歷史を背景とし、自國特有の環境に刺戟せられて發達して來た。如何なる外國も自己本位に依りて案出したる政治又は社會組織の計畫を支那に強ひんとするも永遠に成功せず、支那も亦到底永久に他國のものを默認し、其指圖に服從するとは考へられない」

と云つた。後に支那の國民黨は自身で淸黨運動を起して、ボロヂン其他の共產系露西亞人を追放するに到つた。此所でも幣原をして徒らに先見の明を傲らしめるやうな事になつた。

支那に對する態度を說明して、幣原は「支那が百般の施設に亙つて改善を斷行する事は寔に容易ならざる事であつて、我々に於ても深く諒察しなければならぬ。我々は同情と耐忍と希望を以て支那國民の努力を觀望し、偏に其成功を祈るのみならず求めらるれば友好的協力を惜しまない」と云つて居る。それは實際政治家と云ふよりは、寧ろ哲學者的の匂さへする。

國際的に相互の立場を理解する。其理解の上に國際問題を平和的に解決する。そして解決し得られると、これが彼れの信念である。これは外交上の辭令としては何の不思議はない。それ

を只の辭令に止めず、實際の外交當局者として、其信念の實現に向つて努力しつゝある所に彼れの特色がある。

併しさうした信念が國民一般の信念となるにはまだ餘程の距離がある。人類發達の歴史に於て、人間が弱肉強食を已めて、國内の法律と秩序を守るやうになつたのも、それが幾千年又は幾萬年の訓練を經た後であつた。國家も國際的に行動する上に、法律と秩序を守るべきだと云ふ思想は歐洲大戰の結果として其戰爭の慘禍を嘗めた國民に共通の觀念となりつゝある。茲に人類の生活が合理化する曙光が見える。然るに故らに此曙光に顔を背け、若しくはそれに逆行せんと欲する連中は國家は矢張武力と利己に終始すべきものだと信ずる。從つて幣原外交を軟弱にして追隨的だと批評する。信念の相違だから已むを得ない。

幣原は何處で、國際問題を合理的に解決すると云ふ信念を得たか。彼れ自身がそれを自覺してゐるか、ゐないかは私の知る所でないが、彼れが華府會議の全權として、殆んど生命を賭しての努力をした事が、彼をして此信念を大膽率直に告白するに到らしめた如く見える。華府會議の主題は海軍制限であつた。此會議で軍縮が實現した爲めに、列國々民は製艦費用の負擔を輕減された。だが、此軍縮が成功したのは、列國間の誤解が解けた結果である。此會議迄は山東問題が、日支の關係を極端に惡化せしめて居り、米國の輿論は日本が恰かも山東領有を企てゝゐるかの如く誤解して、日米戰爭の危機が其所に孕まれてゐると思ふ者さへあつた。此暗礁が存在する間は海軍協定などの出來さうな筈がなかつた。此暗礁を取り除く事に最も多く努力し、そしてそれに成功したのが幣原であつた。華府會議が幣原の生涯の一轉機を作つたと云つても、蓋し大なる誤りはないであらう。

華府會議はそれが正式に開かれる迄に、面白い經緯があつた。大正十年夏の或日駐米大使であつた幣原は何かの要事で國務省のヒユースを訪ねた。將さに歸らんとするとき、ヒユースは呼止めて、

「これは君の含みまでに云つておくのだが、米國は海軍縮少の問題で五ケ國の海軍國の會議を招集したいと思ふ。それに參加して呉れるかどうか、列國の意向を聞き合はす爲めに、今其電信を書かしてゐる。日本に向つては米國の代理大使をして日本政府の意向を探ぐらしめるから、あなたから別に御返事を求めるのではありませんが、御參考迄にお話しておく。海軍問題に加へて、太平洋問題極東問題を議し度いと思ふ。しかし米國が此會議を招集する意志のある事は絶對に祕密にして頂き度い」

海軍縮少は當時世界の問題になつてゐたから、幣原は別に特

きもしなかつた。只それと共に太平洋問題や極東問題を議すると云ふ事は相當問題になると思つた。それ故に太平洋問題や極東問題に關しては一體どう云ふ事を議する積りかと云ふ事をヒユースに反問した。併しそれに關してヒユースはハツキリした考へがなかつた。只東洋の事態が稍もすれば危險な形勢を作ふ。其所に危險のある間は軍縮も不可能であるが故に、それをも付け加へて議したいと云ふ漠然たる希望を有してゐるのみであつた。幣原はかうした談話のあつた事を本國に打電して置いた。

翌日は土曜日であつた。ヒユースから電話があつて急に會ひ度いと云つて來た。幣原が行くとヒユースは、

『例の軍縮會議の事だが、米國政府は祕密にして置く積りであつたが、何處から漏れたか、米國の新聞記者が聞き嚙つてゐる。だから、とても、列國が應ずるとか應じないとかを聞き合せてゐる暇がなくなつた。それ故に列國の意向を聞き合はすのは止めて、米國が主唱者になつて軍縮會議を招集する。其正式の招待狀を發した。それを承知して貰ひ度い』と云ふのであつた。

當時の日本は原內閣が威勢を盛んにしてゐる時代で、內田康哉伯が外務大臣であつた。米國代理大使が急に外務大臣に面會を求めたのが日曜であつた。內田外務大臣は其日差支があつた爲めに、會見を月曜に約束した。約束した時間になると、米國大使館から電話があつて、其日の會見を少しく延ばして貰ひ度い。本國から別な電報が來て、用向きが異つて來たと云ふのであつた。初めは問合せ、後は招待の二通の電報の經緯が反映してゐるのである。

日本には當時また寺內內閣の設置した外交調査會があつた。米國の招待を受けて國難來を叫ぶものもあつた。海軍縮少はまだいゝとして、太平洋問題、極東問題を附議することは、列國が東洋に干渉するものだとの疑惑を起さしめた。それ故に日本政府の回答は軍縮會議には喜んで參加するが、太平洋問題と極東問題には諾否を留保すると云ふのであつた。

ヒユースが會ひ度いと云ふので、幣原が訪ねるとヒユースは不機嫌の顏をした、日本政府は贊否保留を云つて來て居る。其眞意を解するに苦しむと云ふ。

幣原は云つた。それは不思議でも何でもない。太平洋問題、極東問題と云つた處で、何を議題とするのかゞ、ハツキリしないが故に、贊否を明言出來ないのは當然である。今日東洋の事情はデリケートを極めて、日支の關係も紛糾してゐる。併し此形勢を緩和する鍵は米國が握つてゐる。どうしてかと云へば、支那が山東問題で八ヶ間敷云つてをる所の其原因の大部分は、支那人が支那は米國の後援を得て居ると思つてゐる所に存在す

る。それ故に米國が日支の間に立つて、何方をも贔屓をせぬ、完全に公平無私であると云ふ態度を明白にすれば、問題の大部分は解決する。日本は決して米國が特別に日本を支持する事を要求しない。只公平であつて貰ひさへすれば滿足する。

そして幣原は東洋に於ける諸問題を懇切に説明したのであつた。ヒユースは其時自分でも云つた如く、其年の四月に國務卿になつた許りで、外交の素人であつた。だから幣原が二時間餘の説明を耳を傾けて聞いてゐた。

後に聞く所に依るとヒユースは幣原が辭去した後に、直ちに速記者を呼んで、幣原の云つた事を自分で口授して記錄に殘した。そして其記錄の緣に、『これは尤だ』とか、『これは興味ある事だ』とか批評を加へてゐた。

超えて二日ほどしてヒユースはまた會ひ度いと云ふ。幣原が行くと、ヒユースは形を正して、

『先日のお話しの、米國が東洋平和の鍵を握つてゐると云ふ事に關して、米國の關する限り、米國は決して支那に對して依估贔屓をしない。必ず公平無私な立場を守る。それは國務卿として私が約束する。其意味に於て此會議の成功するやうに仕たい』

と云ふのであつた。それならばと云ふので幣原はヒユースと相談して、華府會議にかけるべき議題の編成にかゝつた。そして日支兩國間の懸案であつた山東問題は、華府會議の本會議の議題にせず、英米は傍聽者として出席はするけれども、討議は日支兩國の代表に依つて行はれる事にした。

幣原は本國に打電して、米國の態度がかうである以上は日本は太平洋問題、極東問題をも含む華府會議に進んで賛成すべきである。今迄支那はプロパガンダで餘り多く米國の輿論を動かしてゐた。今米國政府が嚴格に公平無私の態度を採る時こそ、日本の公明正大な心事を世界に知らしめる絶好の機會である。日本は何の惡事をしてゐない。だから事情を明かにさへすれば世界の支持を受けるのだと力說した。そして此說は政府に容れられた。

然るに支那側は山東問題が本會議から除外される事に不平滿滿であつた。本會議の席上で、得意の宣傳をやらうと思つてゐた所の當てが外れたのである。殊に山東から陳情的に、華盛頓に押掛けて來てゐた所の、支那側の有志者は悲憤慷慨して、支那公使館に暴れ込む騷ぎを演じた。

山東會議は日支兩國の交渉になつた。米國からはマクマレー（現在の駐支米國公使）英國からはサー・ジョン・ジョルダンが傍聽者の資格で出席してゐた。支那側は初日から此會議を決裂

せしめんとする作戰を採つた。日本との單獨交渉を決裂せしむれば列國が口を出さずには居られないと思つたのであらう。

ところで、其頃幣原は膀石で重病になつたのである。折角の山東會議に出席出來ない。日本の首席全權であつた故人の加藤友三郎子が枕頭に來て、

『自分は山東問題の今迄の經過を良く知らんのだから、會議に出ても役に立たぬ。君は何うしても出られないか』

と云ふ。醫者は幣原に向つて會議へ出るなどは以ての外だ。今は絶對安靜にしてゐなければならぬと云ふ。併し幣原は押して出席すると云つた。また熱があつて、脈搏も惡い。彼れは何時斃れるか判らぬと思つた。それで醫者に注射器を持つて、會議室の次ぎの室に詰めて居て貰つた。それは寧ろ悲慘の光景であつた。

會議は午後一時から、夜の九時頃迄、水も飲まずに行はれる。それが二十何回も續いた。幣原は絶對に必要でない限り、沈默を守る積りであつたが、何か一言を云つたのをキッカケに、幣原が談判の中心になつた。氣が張つてゐたせゐか、遂に此會議を結末迄勤めた。

此談判を通して、支那側の態度が漸次に變化して行く過程が面白かつたのである。支那は初めは强硬であつた。然るに其强硬なのが、英米の後援が得られると思つての强硬であつた。英米の顏色が淡くなるに連れて、支那は段々に折れ出す。折れ出すと云つても、何にもかも屈服と云ふ譯ではなく、只其主張が合理的になつたと云ふ事である。其點になると日本側の主張は元々合理的である事を基調としてゐた故に、話しが纏り易いのであつた。

專管居留地の問題が出たとき支那の代表の顧維鈞が滔々として居留地の實情を述べた。すると傍聽者であつた所の英國のジョルダンが起つて、今の顧維鈞氏の話しは實際の事情とは違つてゐる。自分は支那に三十年も居たのだから、居留地の實際をよく知つてをると云つた。顧維鈞は自分は傍聽者の發言を聞く事は意外とする所であると答へた。すると今度は米國側のマクマレーが起つて、米國は此際言明して置く必要がある。米國は支那が要求するほど、それほど容易に自國の權利を拋棄するものでないと云つた。

英米の態度が冷靜であるに連れて、支那の態度も冷靜になつた。そして山東問題の取極めが成立した。其取極めを文章に直ほすときは、支那の代表の王寵惠と幣原が差し向ひで作つた。王は有名な學者で頭の良い男であつたが故に、此仕事は一瀉千里、二日も掛らずに出來上つた。

山東問題が解決した事は、米國人をして心の底から喜ばしめた。米國人の中には山東問題から曳いて第二の世界戰爭が起りはせぬかと思つてゐるものがあつた。それが合理的な解決をしたと云ふので、心の底から安心した。それ故に此條約文を印刷したものを幣原の處に送つて來て、記念の爲めに署名して呉れと云ふ。幣原の署名した數が何百通かに上つた。巴里會議後惡化した日米感情が、此時から好轉した事は誰れでも知つてゐる通りだ。それと共に日支の關係も順調に向つて來た。幣原の合理的外交は實驗に依つて、其妥當性を證明されたのである。彼れの外交上の信念は此邊から出てゐるのであらう。

幣原を民政黨將來の總裁に擬するものがある。幣原自身は、彼れの夫人が岩崎久彌男の妹であり、従つて彼れに財閥の背景があると云ふ潜在意識を以て、彼れに向つて政黨總裁になれと云ふのは、彼れ個人に對する侮辱だと云つて居る。私自身の觀察する所では、幣原は政黨總裁にならうと云ふ事は考へてゐない。彼れの心は是れに在らずで、それよりは寧ろ世界を合理的な世界にし度い。利己的國家觀念より一轉して、共存共榮の世界に向つて邁進し度いと云ふ考へにより多くの關心を有つてゐる。一層露骨に云へば、紛々たる黨人生活に沒頭するのは煩さいと云ふのが彼れの本心であらう。それに彼れは飽く事を知らざる讀書家である。大戰勃發當時英國の外務大臣であつたグレー卿の二十五年史が彼れの愛讀書である。文章に何の飾りがなく、率直にありの儘を書く態度が何とも云へない程好きだと云ふ。だから幣原には、政黨人となるよりは、書齋人となる危險がより多く存在する。

併し世界は進展する。若し世界が一大飛躍をして、國際關係を合理化せんとする氣運が熟して來るときには、日本も亦其氣運に支配される。そして政黨總裁若しくは總理大臣として此氣運を諒解するものを要求するであらう。其時になれば幣原の好むと否とに關らず、彼れは其地位に推し上げられる運命を有つてゐる。

文壇カフエ盛衰記

酒井眞人

はしがき

森林のキヤムプ生活を讃美しながら、そのくせ何かにつけて人たちが銀座へ出たがるのは、正直の話、やつぱりそこにカフエがあるからだ。時計の振子のやうに、行つたり來たりしてゐても、結局申し合せたやうに皆なカフエの足元へ來て止まるのだ。堀切市長は若い丈あつて、きつと何處かのカフエの常連だつたのだらう、市長になるとこの近代生活者の核心を美事に衝いて、カフエ稅を卅五萬圓ぬからず目論んだのである。

カフエに入つて、騷々しい飮めよ歌へよのカラ騷ぎをやるのも面白いが、啞をしたやうな自動ピアノの前で、言葉もなく沈思にうち耽るのも、時に中々風情のあるものだ。そして私も、さすがに學校をエスケープまではしなかつたが、坊主が勤行に餘念のないやうに、色々のカフエに腰をおちつけて、長い年月色々のことを考へて來たのである。カフエだからといつて、輕蔑するには當らぬ。何事もある事から超越する爲めには、先づそれに心ゆくまで溺れ耽るのが一番にいゝ方法なのだ。いや、カフエにたとひどういふ危ないことがあるにしても、その値打丈けのことはあるものだ。こんな自信がなかつたら、カフエ盛衰記なんて、馬鹿々々しくて輕蔑で、いくら頼まれても書く氣にはならぬのだ。

東京で最初のカフエとして、そして又東京で最初のウエイトレスを置いて、若い人たちの心を唆つたのは、日吉町にあつたカフエ・プランタンであつた。もう今から十數年前のことで、私はそれを實際には知らぬのだが、主人が松山省三氏であつた爲めか、それとも最初のウエイトレスの魅力の爲めか、文士や畫家や俳優が毎夜のやうに集つて、きのふの酒のつゞきに醉ひながら、お互ひに樂しげな言葉で話し合つてゐたといふことだ。中澤臨川や、押川春浪や、長田秋濤や、吉井勇などいふ人たちがこゝの常連であつたらしい。殊に春浪氏など、いつも醉眼朦朧として、何が氣に食はぬのか頻りに怒鳴る癖があつたといふ。

松崎天民氏の話によると、こゝのマカロニ料理は、新宿の中村屋がライスカレーで賣出したやうに、ひどく評判だつたといふことである。プランタンも今では銀座の表へ出て、私なども是等カフエ先驅者の追憶の爲めに、思ひ出したやうに時折寄つて見るのであるが、繪や詩や俳句が壁に一面樂書してあつた往昔の姿は、今では全く過去の夢がたりとなつて、只々時世の轉變を感ぜさせずにはをかない。夜おそくなつて、僅かにこゝの空氣を陽氣にしてゐるので。

が、プランタンは十二年の震火災で是等の思ひ出を壞すと共に、新らしい姿を神樂坂にも出現させてゐた。電車線路を越した左側の路次にあつて、小さい構へではあつたが、さすがに松山氏の好み丈けあり、入口からして何處となく風雅に出來てゐた。倶樂部的な一種親しげな氣分に滿ちてゐて、女も淑かで、私も佐々木茂索氏によく連れられて行つたが、こゝで過ごした時間はいつも樂しかつた。久米正雄、田中純、廣津和郞、佐々木茂索、片岡鐵兵氏などゝいふ面々が、恰かも自宅にあるやうに振舞つて、酒を飮んだり劃策したり勝負をやつたりした。私は帳場にゐる美人を一人でゆつくり見る爲めに、人におくれて段々を登つて行つたものだ。この美人に氣を取られて、私はそこに厄介になつてゐたといふ松井千枝子や潤子の顏に氣付かなかつた。惜しいことに、この神樂坂のプランタンはその後店を閉めて、銀座の方を專ら固く守ることになつたのであつた。

尾張町の角にカフエ・ライオンの出來たのは、ちやうどプランタンが日吉町に出來た頃だつた。曾にライオンは當時にあつて、地の利を得てゐる東京唯一の大カフエであつた。餘りに堂々としてゐるので、生など氣おくれがして入れなかつたものである。そして又、たとへ大學生などが入つたところで、てんきりウエイトレスに相手にされなかつたものだ。少くとも私が久米正雄氏に連れられてライオンの二階に上つた時など、白線の私は完全にミソッカスであつた。そして銀杏返しだか高髷だかのひどく大人びたウエイトレスたちを、取りつく島もなく見たものだ。島崎藤村氏などがライオンへ出かけたといふのはいつのことか知らぬが、私が物怪(もの)に憑かれたやうにこゝへ通ひ出してからでさへ、こゝの女や客の顏觸れが隨分と變つたものだ。そして私は、こゝで色々の戀愛事件を目撃して、爲めに私自身も細心な修業を積んだものだ。カフエ・タイガーが出現するまでは、何んといつてもライオンが銀座第一の城門であつた。それ丈けに又一種のライオン氣質ともいふべき矜恃を女たちが持つてゐて、着物こそ若々しく派手ではなかつたが、皆んな思ひ上つたやうな風を見せて、女たちが店と一緒になつて、頻りに大老舗の地位を保たうと努めてゐるやうだつた。死んだ安成貞雄氏や辻潤氏や宮島資夫氏の醉眼が、よくそこに見受けられた。二階に入室料四圓のスペシャル・ルームがあつて、よく贅澤な客が三鞭酒などを拔いてゐるので、どうかして私も入つて見たいと年來願つてゐたところ、ひよんなことから友達と喧嘩をして、その和睦の會で私も始めてそこに入つて見、一介の常連と呼ばれる資格を持つた。久米正雄、宇野浩二、廣津和郞、吉井勇、松崎天民などの諸氏が、何處かの歸りでもあらうか、屢々硝子戸を排してのつたり入つて來た。[illegible]

前、築紫の有名な築山王のもとから逃げて來たといふ美人女給がゐて、村松正俊氏と攻守同盟を結んで、彼女が二階の時は二階へ、下階の時は下階へと、凡そ日に二三回宛出たり入つたりして彼女の持番に當らうとしたものだが、結局新劇の俳優に取られてしまつて、以來鬱々と心慰まなかつた。久米氏にしても廣津氏にしても、又最近の尾崎士郎氏にしても皆んな贔屓々々を持つてゐるらしく、決して出鱈目の席へは坐らぬやうだつた。地震後のライオンは、建物がひどく殺風景になつた爲めか、學生なども大手を振つて入つて來るやうになり、それまでのこゝの店の特徴と習慣と常連が一變した。勿論それは、地震後に群小カフエが俄かに異常な勢ひで増加して來たせゐにもよるが、この店の主義として品行のいゝといふことを第一條件とするせゐか、おしなべてウエイトレスたちが、その容姿に於てさへ餘りに平凡で、それかあらぬか往昔のライオン氣質も薄れ消えて、進取的な若しくは野心的な女が、やうやく覇者の位につかうとしてメキメキ擡頭して來た向河岸のカフエ・タイガーに、二人三人と露骨に鞍換へし始めて來たのである。自然ライオンの常連も、それ等のウエイトレスのグレイト・マイグレイションに連れて、ライオンに左樣ならしてタイガーに移つて行くやうになつたのだ。そして最後まで孤城を死守するやうに見えた、室伏高信氏や村松正俊氏や長岡義夫氏までが、惜氣もなく寢返りを打つてしまつたのである。そして私なども、謀反人の張本だ。ライオンが、燦然たる過去の歷史を持ちながら、たうとう麵麭屋と鮨屋の二階に「晝は洋食夜は酒場」の看板を掲げて侘い風情に侘住居するやうになつたのも、なまじつかな大老舗といふ重苦しい引込思案が、却つて折角の常連に、「これが本當だ、我れ先きに逃げろ」と人類の格言を叫ばしたのかも知れぬのだ。

地震前、新橋の袂に新橋カフエとカパレー東京とがあつた。前者はライオンと同じく精養軒の經營で、女たちも粒が揃つてゐたので、中々繁昌してゐたものだ。それに左の道路に面したところにビール・スタンドがあつて、ウエイトレスが交代で詰めてゐてくれたので、屋臺の鮨屋のやうにいつも賑つてゐた。先づこゝでも私たちは一個の常連待遇で、主立つた女たちと點頭き合ふ程の心易さを持つてゐた。いつだつたか歲の市の銀座の、押返すやうな鋪石の上で私に微笑を含んで挨拶する細君があつたので、よく考へて見ると、新橋カフエの當時のプリマドンナだつたので、更に見返つて見ると、傍の子供を抱へた彼女の夫に寄り添つてゐるので、感に堪へて悲しい敬意を拂はなければならなかつた。流落して行く女も可成にあるが、幸福に眺められるこの種の女も中々あるのである。カパレー東京は博品館の樓上にあつたが、ダンス・ホールがあつたりして久米氏などが頻りに出入りしてゐた。將棊會や寫眞展覧會がよくそこに開かれたので、天狗連の作家が倶樂部代りに集つた。

ウーロン茶には私も密接な思ひ出を持つてゐるが、一時こゝは宇野、廣津、久米、谷崎精二氏等の交情のサロンであつた。私は毎晩通つたものだが、こゝに誰れか文壇の人を見ぬ晩は殆んどなかつた。今では大きな派手なカフエの流れに押されて、見る影もなく淋れて、思ひ出

の爲にさへあのウーロン茶を啜るものがなくなつてしまつた。

カフエ・ドラゴンが數寄屋橋の近くにあつたのも、思ひ出の一つだ。有樂座が靜かな空氣の中に立つて小ぢんまりと眺められたこゝの二階で、私は尾崎士郎氏と打切棒に知合ひになつたのであつた。新橋のお饒が毎日のやうに來てゐたので、私も確か口をきく程の馴染になつたが、ズツと後彼女が文藝春秋社に遊びに來るやうになつた時、ケロリと忘れてゐたのには少なからずガツカリした。

古い昔の鴻の巣は、北原白秋氏や吉井勇氏等が集つて懷しいものであつたらしいが、京橋に移つてからでさへ、中々この店は爽かな風格があつてよかつた。女主人も美しければ、ウエイトレスも若く美しく氣品があつた。が、新らしい客に冷淡だつたので、客足が遠退いて、それに主人が死んだりしてたうとう沒落してしまつたのは、惜しいものだつた。兎角、女主人が店に出るのは、相手に依怙贔屓があつてよろしくない。カフエ・ロシアにしてからが、若い私たちを高慢ちきにあしらふ癖があつて、女主人に偶々管をまくやうな醉漢があると、ニユツと奥から主人が牽制に出て來たりして、何んとなくいゝ氣持に醉へなかつた。その証據にはカフエ・ロシアが沒落して、バー・コロネーションに變ると、機會均等の平のバーになつたので、野心のありさうな背廣が盛んにボツクスに蜷局をまいて、相當の繁昌を見せてゐるのである。

銀座の今の上海亭の邊りに清新軒があつて、一部の客を呼んでゐた。新橋驛前の有樂軒も、さういへばこの頃鳥渡高級なカフエとして知られてゐた。

日比谷の交叉點近くには、日比谷カフエを始めとして、カフエ・ユニオンやオデツサがそれぞれ特色を發揮して、人工的な臙紅などをした女たちが、銀座の表通りのカフエのやうに無下にエバらぬといふので、剝出しの常連を相當に吸引してゐた。そして又オデツサなどには、一見チヤブ屋の女かと思はれるやうに近代味豐かなウエイトレスが、夜更かしをした後の遲鈍な表情で、いきなり露骨な冗談をいつたりなどして、私たちは受身な樣子で吃驚して出て來たものだつた。このオデツサであらうか、今では對鶴ビルの地下室に陣取つて、相變らず波止場のカフエのやうな極彩色の情緒を湛へてゐる。ユニオンの女主人はいつも洋裝をしてゐて、何んでもロシアのモスクワにゐたとかいふ事で、それ丈けに中々如才なく、安成貞雄氏や畑耕一氏や邦枝完二氏などが、確かいつもこゝを根城としてゐたやうだつた。日比谷カフエは、私も二三度一人で行つたことがあるが、何んとなくその頃は店に殺伐な空氣が漲つてゐて、濃厚で何處となくヴアルガアに見える女が、お酌をする爲めに卓子にへたばりついて、今にも向ふの柔道の選手のやうな學生の方からナイフが飛んで來さうな一種の薄氣味惡さを感じた。が、かういふ物騷な室内の露も、通ひ慣れるとやがてそれが却つて快樂になり得るのか、店はいつも不思議に繁昌してゐた。廣津氏なども一頃こゝに通つたことがあると聞いてゐるが、「神經衰弱時代」の氏であつて見れば、尤もなことゝ點頭かれるのである。

京橋の第一相互の前に花月本があつて、銀座の中心から外づれてゐたから、閑靜な繁昌をつゞけてゐた。紺絣のウエイトレスなどが評判を呼

んで、誰れもが親身な心持で一度は話しかけたものだつた。それだのにやさしい妹の方は、未だに嫁にも行かずに、今日も淺草のオリエントに物質的な努力の效果を上げようとしてゐるのだ。私はこゝで、廣津和郎氏が宇野浩二氏などと連れ立つて入つて來るのをよく見かけたものだ。今タイガーで一番元老の女も、やつぱりこゝの出身で、又一人一人を吟味して見ても割にこゝのカフエは粒が揃つてゐた。その後銀座の目拔きの方に移つてからは營業が振はず、いつともなく消え失せてしまつた。

今のバッカスのところにカフエ・エビスがあり、何等の特色もなかつたが、客が少いので歡迎してくれるので、村松正俊氏などとよくお喋りをして來たものだ。

カフエ・タイガーが出來ると、美人女給が豐富にゐるといふので、忽ち銀座歡樂郷の中心となつた。赤青紫の三組に別れて、やさしいのや、淋しいのや、藝者のやうなのや、女學生のやうなのや、浮氣さうなのや、お天狗なのや、數十人が色取々に妍を競ひ合つて、ジンの匂ひと煙草の煙と、誠に一夜の歡樂を追ふに相應はしいカフエなので、千客萬來、素晴らしい繁昌振りを示した。それにライオンなどから馴染みのウエイトレスが幾人となく鞍替へして來たので、文句なく私たちは皆んなタイガー黨になつてしまつた。日本酒があつたり、支那料理があつたり、春は觀櫻會、秋は紅葉會と女の衣裳も華やかに揃つて、チップの效果が計量器のやうに目に見えるので、やがて金のありさうな禿げ頭や商人や紳士や請負師が、藝者遊びよりも氣が利いて受けがいいといふのか、どさくさと熱心に通ひ出し、爲めに横に擴張したり奥に引伸ばしたり、遂には大阪の美人座や赤玉のやうにボックスに色電氣をつけて、極彩色に客を導き入れようとたくらんだ。そこにはラブ・アフエアもあれば、アヴアンチユウルもあり、又多くの難波もあつた。永井荷風氏や三上於菟吉氏や中村武羅夫氏や、皆んな贔屓々々を持つてこゝへ通ひ出した。一頃など、荷風氏の顏を上か下に見ない日はなかつた。於菟吉氏が惜氣もなく三鞭酒を拔けば、武羅夫氏は最大級のチップをはづみ、三上宗の女が日々新聞のお組の明日の運命を訊けば、中村宗の女は朝日新聞の百合子のそれを尋ね、女に持囃されては惡い氣は致さぬ、二人の作家はそれぞれ較べることの出來ぬ類ひの快さに醉つてゐるやうだつた。さうかと思ふと荷風氏は、一碗の支那茶を啜つて、前に佇立してゐる三四人の女たちを笑はせてゐた。計らずも荷風氏とは、同じ女を贔屓にしたといふのでゴシップなどにのり、それを女は私の宣傳だといつて私に喰つてかゝり、結局いつも私は貧乏籤を引いてゐたのだが、荷風氏は私の中學校の大先輩であり、又私の父が「花月」に漢詩を書いてゐたこともあつたりなどしたので、會ひたいと前から思つてゐたのだが、ひよんなことで名乘らぬ前から物別れをするやうな破目になつてしまつた。久米正雄氏や菊池寛氏も、あれで中々隅には置けぬのだ。タイガーには小説家が多勢やつて來るので、自然割に本なども讀んでゐるらしく、いつだつたか近藤經一氏の「戀愛經相聞」を女が持つてゐるのを手に取つて見たら、所々に「近藤さんらしいわ」とか「まあ嫌だ」とか鉛筆で感想が書いてあるのに、思はず私は

苦笑した。タイガーでゆつくり腰を落着けて飲んでゐると、色々の文壇人がやつて來るのに驚く。先日もチラとボックスの上に見えた顔が山本有三氏らしいと思つたら、やつぱり山本氏だつた。近頃では、横光利一氏とか石濱金作氏とか犬養健氏とかが、いよいよカフエに進出し始めて、私などより數百倍こゝのフアンになつたので、私は鬪士を得て賴母しく思つてゐる。私はこゝの惡口を松崎天民氏の「食道樂」に書いたので忽ち受けが惡くなつたが、石濱金作氏は「大カフエ時代」を書いてこゝを烏渡いゝ意味でモデルにしたので素晴らしい人氣を博した。しかしタイガーが、低劣の惡臭を發散して來たことは、こゝの初期を知つてゐるものなら誰れでも點頭く筈だ。それにしても里見弴氏は、噂通り本當にあの目玉の大きい、阿佐ケ谷の方から來た女を確保したのであらうか。まさか。

クロネコは、惜し氣もなくあの特徵ある建物を取壞してしまつて、今改築中なので、どんなのが出來るか見當がつかぬ。例の部屋の構造で大分睨まれて以來、こゝのカフエは恐ろしく不評判になつたので、よつぽど努力しないと名譽を恢復出來ぬかも知れない。私はあの珍奇な建物が割に好きだつたのだが、あべこべに店の無愛想には反感を抱かずにはゐられなかつた。タイガーなどのマネイヂヤアは、誰彼の差別なく愛嬌を以て迎へるのだが、そして一つにはそれが客足を心易く呼んだ譯だが、こゝのマネイヂヤアは幾度行つても挨拶一つしないのだ。私はこゝで立候補してゐたので、可成通つたものなのだが、それでゐて知らぬ振りをしてゐるのである。今度隣りに出來る、同じ經營の、イナイイナイ・バーにしても、こんな所に細心の注意を拂ふ必要があると思ふのだ。私はこゝの主人が同じ小學校の同期卒業生だと聞いて、いつか私が烏渡した喧嘩をやつて破落戸と間違へられた時手紙でこの旨を進言してやつたのだが、こゝの主人は女たちをつれて飲みに歩くことはやつても、一向私に敬意を拂ふことをしないのだ。こゝへは畑耕一氏がよく蒲田のシナリオ・ライターらしい部下をつれて、冬などストオヴを圍んで長い間爽かに喋つてゐた。恐らく淋しい氏のことだから、立候補してゐたのだらう。一頃樂燒をやつてゐたので、それかあらぬか里見氏が時たまやつて來た。そして吉井勇氏なども、何んといふことなく人と連れ立つてよくやつて來た。菊池寛氏も思ひ出したやうに近藤經一氏などとやつて來た。概して女たちが振はないので、あれ丈けの堂々たる構へを備へながらカフエ的魅力に缺けてゐた。この點バーの新設と共にすべてを一新するらしいのは賢明である。樂燒の代りにやつてゐる高速度寫眞は面白い思ひ付だし、事實又便利だし、この店でもつと賣物にしていゝものだ。

カフエ・キリンは、ビールが新らしいのと、女たちが揃ひの服裝で嫌味がないのとで、一部の人の好評を博してゐる。煙草の煙が立ちこめて少し鬱陶しい氣がするが、遠慮や氣兼ねが要らなくてビール黨には持つて來いのカフエである。私もよく〳〵寄り一人ぽつねんとビールを飲んで、微醉の下で色々空想するのを樂しんで來るが、關口次郎氏もこゝの大のフアンである。皆んな陶器でビールを飲んで、珈琲を飲んでゐるものがないといふことが何んとなく愉快である。

パウリスタやゴンドラが一種のヴアルガリテイを賣物にしてゐれば、エー・ワンや松月は大小の相違はありながら乙に取り澄ましてゐる。カフエが、いや女が、やつぱり銀座の美學の眞打ちなのであらうか、二三年この方銀座界隈の新らしいカフエやバーの續出したことは眞に驚くばかりである。そして人々は、やうやく單調な表通りのカフエに興味を失つて、一途に裏通りの酒場へ進出し始めたのである。大カフエの矜に滿ちた女たちの氣質が荷厄介に思はれて。

フレーデルマウスはドイツ人の經營で、さすがに室内の配置や裝飾が渋く落著いてゐて、銀紙の貼つてあるドイツビールを飮ませるので、忽ち一家をなしてしまつた。私もよく出かけて一本一圓廿錢のビールを飮みながらモボらしく氣取つて來るのだが、長田秀雄氏や池谷信三郎氏などのドイツ贔屓が、時々こゝの空氣を慕つてやつて來るのにぶつかることがある。

松坂屋の横にあるユング・フラウは、まだ新らしい頃は夜などいつも一杯の盛況であつたが、あんまり他に澤山同類が出來たので、今では前程の衆望を負つてはゐぬやうだ。一時は久米氏など上京すると、歸るに淋しくマンハツタン・カクテルか何か飮みながらこゝで數刻を過ごしたものである。山内義雄氏が「モンテ・クリスト」の印税で毎晩湯水を使ふやうにしてお札を減らしたのもこゝだつた。

サイセリヤも近代風のバーなので、色々の人が押しかけてゐた。一頃は横溝正史氏、甲賀三郎氏などの探偵作家の根城となつてゐたらしかつた。山内氏もこゝの女に人氣があつたので、ユング・フラウと掛持で通つてゐた。

アホヒは女將が中々怜悧なので、紳士連を專ら顧客にして利益を上げてゐるやうだつた。久米氏がこゝの若い女を推賞してゐたのは、有名な話である。モンマルトルへは、中村武羅夫氏、岡田三郎氏の一派が、一時疾風的に勢力を扶植してゐた。直木三十五氏の艶物語は、私はこゝへは餘り出かけぬので聢か本當か知らぬのだ。

メーゾン・ヤへは、一見水谷八重子が愛嬌を振り撒いてゐさうに思はれるが、事實は彼女は何等直接の關係を持たぬといふことで、しかしこゝの二階など支那趣味があつて鳥渡珍奇である。池谷、横光の諸氏が案外こんなところに手を伸ばしてゐるのに一驚した。つひ先夜、聊か酩酊して戸を引きかけると、菊池寛氏が斷髪の婦人と來てゐたので、私は敬意を拂つて引き返しジユン・バーに飛び込んだ。

ジユン・バーは女主人の渡瀬淳子がお世辭がいゝので、この頃私もぽつりぽつりと行き出した。二階の部屋は倶樂部會員に限られてゐるとかいふ話だが、一度私も堀口大學氏に連れられて一見する光榮を持つた。開店當時貰つた和田三造氏畫伯世話係が、淳子をひるまず勵ましてくれたので、今日の繁華を招いたといふ話だ。常連には中村吉藏氏や堀口大學氏を始め、時には前田河廣一郎氏とか長田秀雄氏とか吉井勇氏とかゞやつて來る。始め私の行つた時、淳子も出て來ず客もゐず不愉快になつて酔つた紛れにお經を唱へたので、忽ち認められて先日中元の扇子を一本貰つた。如才がない。

花柳はるみのサンチヤゴは遂に沒落して、その代りに松竹の女優だ

つた佐々木清野がバー・キヨノをやり始めた。開店早々私も出かけたが佐々木清野が乙に氣取つて、愛嬌を振り撒かぬので、心慰まなかつた。近藤經一氏が清野目がけてやつて來る。贊成。

龜屋の角のカフエ・ラムールには、三上於菟吉氏が一黨を引き具して儀式のやうに痛飲してゐた。大佛次郎氏などゝ一緒になると、三上氏はこゝを振出しにタイガー、アホヒと暴風のやうに飲みまはるらしい。向ふの裏通りのスウリールには谷崎精二氏が人知れず根を張つてをり、バー・フアーストへは時々菊池寛氏や石濱金作氏などが前衛戦を試みに出かけるらしい。

あゝそして、ジヤポン、セレクト、太平樂、コンパンワ、タンチヨト、ボントン、スペイン、ライト、ナイト、白樺、マネキン、ゴンラ、エトワス、パンドーラ、ベル・ヌイ、オララ、ハリウツド、パンコク、マーヂヤン、等々々と渡り歩いたら、たとひ千手千足の姿であつても、きつとこの獵場に向ひ切れぬに違ひない。そして酒を飲まぬ人たちの爲めには、不二屋、モナミ、エスキモー、オリンピック、富士アイス、三角堂、等々々とお菓子と珈琲の掬ひ網が張つてある。銀座ばかりではない、淺草にも神田にも新宿にも、カフエやバーが無數に殖えて來た。カフエで一生獻身的に金を使つて來るのも、これまた私たちの避け難い天命だ。（完）

貧乏線上の彷徨

賀川豊彦

1

資本家が貧民を救うてくれる量と云ふものは高が知れたものです。

資本主義の性質上、そんなに思ひ切つて、貧民救濟の爲に金を出すものではありません。彼等は儲けることを考へてゐるので、出すことは考へてゐません。

出す時には必ず、そこに賠償が付いてゐます。男爵が欲しいとか、位が欲しいとか、まあそれ位の所が相場でせう。

然し、それでも出す方は出さぬよりましです。カーネギーは五億弗以上吐き出して、死んだ時には二千五百萬弗しか殘してゐませんでした。そしてカーネギーの殘したものは米國の津々浦々に、實によい記録を殘してゐます。

近頃ロックフェローも世界的に善い仕事をしてゐます。資本主義は悪いには違ひありませんが、取込む資本主義に比べて、吐き出す資本主義の方は、悪い方の中でもまだ善い方なんでせう。

ですけれども、少数の金持の金を當てにしては、永久に貧乏人は救へないやうに私には思へます。

さればと云つて、お役所の金で、慈善事業することも、之また頗る制限のあることで、決して萬全を期することは出來ないことだと思ひます。

第一、税金には限度があります。その限りある税金で救貧防貧の凡ゆる仕事に手を付けるといふのが、早間違つてゐます。東京市は、一年の豫算が、三億二千萬圓から支出してゐるのですが、その中、社會事業に使ふ金は、僅かに經常費で二百萬圓足

らすであります。勿論、公設食堂とか、公設質屋、公營住宅、等を入れると、約七百萬圓位の會計になりますが、それは、質を置きに來た金額も入つてゐますから、社會事業に使つた金とは考へられません。

實際、國營や公營の社會事業と云ふものは、限度のあるもので、さう完全に發達すべき性質のものでないと私は思ひます。どうもお役所の仕事と云ふものは能率の上らぬもので、たゞ官僚的にのみなる傾向があり、判をべた〳〵つかなければ承知が出來ない心理がありますから、民間でやる迅速さと、親切さを缺くやうになります。

これからの社會事業はどうしても、協同組合を基礎にせねばならぬと私は思つてゐるのです。

斯ういへば、左翼の若い人々は、「お前は何を云つてゐる、革命をやりさへすれば、社會事業などいふものは全く要らなくなるのだよ。」と主張する者が相當にあらうと思ひます。

それはもつての外のことで、私は斷言します。社會事業の不必要な時代は絶對に來ないといふことを。

2

「馬鹿なことを云へ、革命をやれば貧民は無くなるし、無產者は消滅するし、社會事業や救濟事業は全く不必要になるではないか」と、左翼の人々は云はれるでせう。

それなら私は、それらの左翼の人々に、一九一七年十一月ロシアのソヴヰエット革命の後、レニン夫人が何をしたかと云ふことを第一に訊きたいのです。レニン夫人の第一の仕事は、勞働婦人の爲に託兒場を作つたではありませんか。託兒場を作る仕事は社會事業ではないでせうか。

餘りに狹義に解されては困ります。人間が自然的災厄と人間的災厄とにいつも直面しないものなら、社會事業の必要はやゝ感じなくなるかも知れません。然し、人間の力でどうにもならない自然的災厄と、人間として必然な生病老死の四つの苦しみと、白痴、發狂、低能、變質の心理的缺陷と、飲酒、放蕩、犯罪、怠惰等の道德的缺點の少しの影でも人間に付き廻る以上、たとひ共產主義の時代が來ようと、無政府主義の時代が來ようと、社會事業が絶對に無くなるときは、永遠に來ません。

要は、個人的に之を救濟するか、官僚的に之を救濟するか、社會保險と稱する互助組織を營利化した方法によるか、或ひは全く營利主義を離れて協同組合運動によつて之を救濟するか、その手段方法を相對的に變へて行くだけのことであります。日本の統計表を見ても、子供と老人の數は約總人口の半分に當つ

てゐます。死亡者は一年間約千の人口に對して二十、病人は千の人口に對して二十人から四十人位あります。姙婦は人口千に對して約三十二人、犯罪者が人口千に對して約三人、發狂者が千に對して一人、不具癈疾者が千人中約十人、白痴低能が約五人、飲酒癖のある者が千人中約十人、放蕩するものが男子壯丁人口百人の中約二人、斯ういつた比例で拾つて行くと、なかなか貧困者の消滅する時は來ません。

3

一九二六年のロシアに於る勞働者生計調査を見ますと、最近ロシアでは、また〱ウヲツトカ酒を強烈に飲み出したやうです。ブリス氏の調査によれば、世界各國の貧困調査を細かに研究して見ると、貧民の一割一分位は酒の爲に貧乏線以下に落ちてゐるやうです。

いくら共産主義が來ても、酒と放蕩と、賭博と、梅毒を退治する力を持つてゐなければ、恐らく永久に貧民を無くすることは出來ますまい。その上に我儘で反社會的な行動を喜ぶ發狂的な犯罪者が、社會に殘らないといふことを絶對に保證し得られませんから、誰かゞそれらの人達を世話しなければなりませぬ。

4

社會事業を經濟的にのみ解決しようと思ふのが大きな間違です。

私は經濟そのものは、人間能力の發展性を基礎にしたもので人間能力を考へないで、唯單に唯物的な經濟組織を考へることは出來ませぬ。マルクス派の人々は、凡てを直線的に亦平面的に考へて、既に組立てられた社會を唯物的にのみ考へてゐるやうですが、私は、さうした組上つた社會を唯物社會とのみ考へられません。それらは欲望の型を勞働の型の固形化したものであるといふことが出來るかも知れませんが、液體空氣が隙を見てすぐに蒸發するやうに、人間の個人的また社會的心理活動によつて、蒸發もすれば亦固形化もするのだと思つてゐます。私は、法律制度――所有權、相續權、特許權――などを唯物的にのみ考へる勇氣を持ちません。それは欲望の型の固形化したものだと考へてゐます。そんな理窟は別として、他愛的精神が濃厚にならなければ、社會運動も社會事業も決して完全なものにすることが出來ません。

マルクス主義の倫理的缺點は、階級利己主義一點張で行く處です。その階級利己心も經濟的利益本位ですから、頗る人間味

の少いものになります。人間の欲望には、利の他に、眞善美の衝動もあり、神聖なるものに對する憧憬心もあります。マルクスが、利だけを基礎にして社會を作つて行かうといふことは、頗る無理な考で、マルクス理論だけで行けば、金さへあれば社會に不幸は無くなると考へねばなりません。資本主義はさういふ考を持つてゐますが、マルクス主義が資本主義を攻撃しながらそんな氣持を持つてゐることは、全く滑稽なことです。

5

金が山ほど積まれる時代が來ても、みんなが富裕になつて無産者が一人も無くなる時代が來ても、盲目者や唖者や、梅毒患者や、道徳的缺陷のあるものが簇出する間は、感化院も要れば、保健運動も要り、盲人保護組合も必要なら、癈疾者慰安組合も必要です。

社會事業と云へば、たゞ貧乏人を救ふだけがその目的だと思へば大きな間違です。それも一つの大きな目的であることは違ひありません。然し、社會事業は、貧困の外に、生理的、心理的、道徳的不幸を他愛的精神によつて、助け合ひ、慰め合ひ、救ひ合ひをしようといふのです。

いや、社會事業の本質には、社會的能力を高める爲に、惡より善に、善より最善に、それを合衆の力と、相互扶助によ押し進めて行かうといふ要素が含まれてゐます。

6

盲人とゐざりが川を渡つた話をイソップ物語で讀みますが、社會事業は、盲人の足を利用して、ゐざりの眼に連絡させ、盲人の肩に眼あきのゐざりを載せて川を渡らせようとするのが、その本質です。

いくら金があつて、ゐざりと盲人が生活に困らないとしても困難を感ずる點に於ては全く元通りです。社會事業には斯うした人間本質の問題に關する或ものが含まれてゐます。

それは本質的に他愛主義を基礎にせねばなりません。子を産むやうな衝動、陣痛を恐れない氣持、母が子を愛するやうな本能的他愛心、それらのものが一般化しなければなりませぬ。この内部的衝動なくして、いゝ社會を作ることは出來ません。

貧乏は悲しみの一つに違ひありませんが、貧乏の外に凡ゆる悲しみを取り除いて行かうといふのが、社會事業の必要な理由です。

そして、いくら貧乏が取除かれても、後迄殘つて行くやうな人間の不幸が、矢張り貧乏の大きな原因を爲してゐることを思

へば、貧乏そのものを取除く爲に、それらの不幸をも取除く必要があるのです。

そのために保健組合を設けて疾病の悲しみより脱かれ、信用組合を設けて、高利貸しの魔の手よりのがれ、保育組合を設けて保育の苦勞をより少しでも荷を輕くすることが、新しい社會事業の中に含まれてゐます。

7

私は、もう彼れ是れ滿二十年間、救濟事業に携はり、どん底の悲しみに遭つてゐる人達を出來るだけ明るみに連れ出したいと思つて努力してみました。

そして、二十年間の經驗によつて、無産者と貧民の間に、全く性質の異つた點のあることを發見しました。どん底に居る人人は、云ふと氣の毒ですけれど、技倆に於ても一般無産者とは全く異つた處があります、私は、その人達に内職をさせてあげようと思つて、歯ブラシの毛植ゑを教授したのでしたが、全く不成功に終つてしまひました。不注意と、不熟練と、學習力の鈍いこと、製品のまづいこと、全く市場に出せないやうなものばかり出來たので、私は一萬数千圓を損して止めてしまひました。その當時、私と同じやうな者で状袋貼りの内職をどん底の人々に試みてくれた人もありましたが、之亦私と同樣な成績で失敗に了つたのでした。つまりどん底に居る人々の間には、一般無産者とちがつて、能率が上らぬ素質を持つてゐられるやうに見えてなりません。つまり、人種改良學者のタウヤーダベンポーの云ふ通り、貧民窟に落ちて來た人達は、心理的缺陷を持つてゐる人が頗る多いといふことに、私はその時からはつきり氣が付き出しました。

その反對に、經濟的原因で貧乏してゐる人をお助けすれば、一圓の投資で十圓に返つて來、十圓投資すれば、百圓、千圓に返つて來るのが普通です。それで、無産者の世話はする程面白いが、どん底の人々の世話はする程暗い感じがしてなりません。經費もどん底の方が數等倍多くかゝります。そして、すればする程獨立心を失はさせ、依存的欲望が募るやうです。その反對に無産者の世話はやればやる程面白く且つ元氣が出て來ます。

無産者が今日貧乏線に彷徨してゐるのは、經濟的壓迫と、彼等相互の間に組織を持つてゐないからです。それで、一方では勞働組合を作り、他方では信用組合、購買組合、共濟組合、生産組合、利用組合等を作つて行けば、無産者の地位はめき／＼よくなつて來ます。

で、これからの社會事業は、防貧運動を基礎にした協同組合

がその中軸にならねばならぬと思ひます。これ無くして、眞の社會運動も達成出來なければ、救濟事業も完成することが出來ません。

8

社會事業は階級意識を鈍らすと云つた時もありました。然し、階級對立の無くなつたロシアで協同運動をしきりに奨勵してゐるところを見ると、社會の建直しに協同組合事業を差し置いて效績を舉げることが出來ないことは繰返して云ふ必要はありますまい。

米國では階級對立の時代が過ぎて、協同運動を基礎にした勞働銀行が、投資と金融の手段によつて工場管理の新しい時代に入つたことを告げてゐます。

ロシアとアメリカが殆ど同一方向をとつてゐることに我々は注意しなければなりません。問題は社會單位を何處に置くかといふことにあるのです。社會單位は唯勞働組合だけに置かないで、凡ゆる斷層に適應させる必要を認めるのが私の云ひ分です。私は、多くの細胞が人體を組織してゐるやうに、また多くの生理的の器官が人體の各種の系統の中に含まれてゐる如く、勞働組合ばかりでなく、資本家的搾取をまぬがれ得るものであれば凡ゆる方面に凡ゆる協同組合を起す必要があると私は思つてゐます。そして、勞働階級を搾取しないやうな完全な協同組合が出來上れば、ブルジョアがいくら地だん駄踏んでも、無産階級を搾取する餘地がなくなつてしまふと思ひます。

社會事業は、この方面に協同運動をその眼目にしなければなりません。

で、これからの社會事業は、個人的救濟事業でもなく、官僚的社會事業でもなく、民衆の相互扶助運動でなければならぬと思ひます。この形の救濟運動は永久性を持つてゐます。そしてこの形の社會事業は永久に無くなることはありますまい。

或一部の人々が、小兒病的にこの種の社會事業までを反革命的だといふことは大きな間違です。革命をした後にも、この方法をとらなければ社會は構成出來ません。結局、協同運動を通しての相互扶助の事業は、革命前でも革命後でも、その價値に於て何等の差はありません。

9

プロレタリアの悲しみは、生活不安と從屬性と、不信用と失業の四つから來ますから、階級鬪爭による資本主義の打破と共に、社會單位運動によつて、消費組合を作り、消費組合に助長

して生産組合を作り、その生産物を多くの組合に賣り渡す爲の販賣組合を作り、金融のために信用組合を作つて行けば、物價は安定し、收入は一定し、失業の憂は減じ、資本主義に從屬する悲しみは無くなり、不信用を嘆く必要がなくなります。火災保險も傷害保險も、疾病保險も教育保險も、凡て組合化し、互助をもつて營利的な資本主義に置き換へて行くなら、社會は比較的明るい處になると思ひます。之を努力しないで、個人個人で、ばら／＼になつて居り、その隙に乘じて資本主義が搾取を欲しいまゝにするなら、それは搾取せられる方に落度があると云はねばなりません。

新しき社會事業は、斯うした協同運動を基礎にすべきものです。

衣食住の凡てのものを協同的に、その協同運動を自治團體が援助する、斯うした順序で社會は發展すべきものだと考へます。

たとへば、住宅問題です。

東京市は、住宅の悪いことに於て他の文明國に類を見ない位です。燒け殘つた小石川などは、疊十疊敷以下の小さい家に住んでゐる世帶數が六千戸あると云はれてゐます。中流階級で、疊數十三枚ある家はよい方なのです。大正十一年九月、東京市社會局の調査したものは、中等階級で平均疊が十三枚になつてゐます。これを見ても如何に、東京市民が住宅問題に無頓着であるかゞ判ります。

その市の一般死亡率及び乳兒死亡率は、一世帶に對する疊數及び部屋數に大體反比例するものです。疊數の少い家には死亡率が高く、部屋數の少い家に於ても死亡率は、著しく增加する傾向を持つて居ります。東京市の乳兒死亡率を見ても、同居人の最も多い、住宅の不潔な淺草、深川、本所などに於て非常に高いのは、注意を要します。大正十四年度の乳兒死亡率は、出生千につき、淺草區一七二・九、深川區一六二・三、本所區一五六・八となつてゐます。同年度に於て、東京市の平均は千に對して一三〇人であります。麴町區や赤坂區は平均より少く前者は九二・〇、後者は一〇〇と云ふ數字が出てゐます。

一般死亡率及び乳兒死亡率が、たゞ住宅問題だけによらないことは解つてゐますが、麴町と淺草の間に殆ど二倍の死亡率の差があるといふことは、唯單に營養問題だけでないことに氣付かねばなりません。卽ちそこには住宅に就ての大きな難問が横つてゐることを考へねばなりません。

この住宅問題を解決するために公營住宅なり、住宅組合の必要が起つて來ます。

日本に於て住宅組合はあまり成功してゐません。それにはい

ろ〳〵な理由もありませうけれども、中心人物がしつかりしてゐないことがその根本であると考へねばなりますまい。實際今日家賃を拂つてゐるだけの費用を住宅組合に拂つて行けば、住宅問題も容易に解決出來るものだと私も考へてゐます。

食物問題に就ても同樣です。然し今日の政府は、一種のヂレンマにかゝつてゐて、個人的企業と、協同運動の間に挾まつてゐるのです。協同運動を押し進めて行けば、大資本家の產業を攪亂することを恐れて、大いに遠慮してゐる氣味があります。そこが、プロレタリア派と既成政黨の爭ひでせうが、然し、社會の趨勢から見て、互助組合に落着くことが必然的なものだと私は考へます。

10

救濟が互助に變り、個人的及び官僚的社會事業が、協同組合的社會事業に移つて行くことによつて、社會事業は勞働組合と殆ど同一の水準にその必要さを感ぜられるのであります。セツルメントの運動が、最初救濟的セツルメントから教育的セツルメントに變り、最近は協同組合セツルメントに移りつゝあることも全くこの傾向を語るものにしか外はありません。

いくら救濟事業をしても限りがない、そこで盲人とゐざりを連絡させて、互助的に救濟をやらうといふのが、セツルメントの事業が協同組合に中心を置き換へるやうになつた大きな理由であります。

即ち今日の大都會には、社會といふものが存在せず、「金」といふ賤社會の勢力の表象を流通させて、個人と個人とをつないでゐるから、眞に淋しい社會が出來上つてゐます。隣同志が物云はず、町內に誰が住んでゐるかさつぱり判らないのが今日の都會です。

町內に責任が出來、互ひに信用し合ひ、互助的に發展すれば現金がなくとも信用だけで仕事が出來て行く筈です。

この金の社會に置き換へるのに近隣の愛をもつてしようといふのが、セツルメント運動の根本原理になつて來ました。勿論最初のセツルメントは、さうした社會的本質を持つてゐませんで、上流階級のものが下層階級に這入つて行くといふ縱の關係でしたが、今日では、縱の關係より橫の關係が重んぜられ、協同組合の計劃本部がセツルメントになりました。

英國ロンドンのトインビーホールなどでも、每月百に近い勞働組合がそこに集合なし、九つ以上の內職勞働組合が出來、旅行組合、教育組合などが本部をそこに置いてゐます。之を見ても今や、最も新しいセツルメントは、近隣を社會化し、組織化し

互助愛を實現せしめることにその焦點を置くやうになりました。

失業保険なども、英國では國家でしてゐるものと、勞働組合でしてゐるものと二重になつてゐますが、正しくさうあるべきものだと私は思ひます。大體組合でやる方がずつと成績がい、やうです。

獨逸の健康保険などでも、組合を基礎にしないときには、隨分浪費があつたやうです。それが組合を基礎にして政府が援助するやうになつてから、民衆の間に一般化するやうになり、今迄、中產階級で保健組合に這入らなかつた者までが、之に參加するやうになつたやうです。

社會事業と云へば、古き時代の慈善事業だけだと思つて居れば大きな間違です。今日は社會單位の運動によつて、個人的に救濟して來たものを互助的に救濟しようといふ形をとつて來ました。

されぱと云つて、昔の犧牲的精神、他愛的精神か永久に不必要になるとは考へとれません。この他愛的精神の上に互助的精神が加はり、社會保険を凡て組合的に實行し、經濟的活動までを組合的にやるやうになれば、社會は餘程よくなります。

東京市には、細民の世帶數だけでも、昭和四年七月末現在二萬五百一といふことになつてゐます。之等の人々を助けるために今迄のやうな無料診療、無料託兒所の形式で行けば、同胞の人格を無視するのみならず、彼等の公民權までを奪ひ、折角の社會事業によつて、自治獨立心を傷けるやうなことになつてしまひます。

もしもその反對に互助愛組織を基礎にする社會事業を發展させて行けば、別に多くの慈善資金を使はなくとも、大事業を完成することが出來ると思ひます。

之は恰も、昔の帝王が爲し遂げ得なかつたことを、現代の株式會社が完成してゐると同樣に、救濟事業の資金を解決する上に於ても、また階級的對立を破壞する上に於ても、根本的な運動であります。

私は、こんな考をもつて日本の社會事業を發展させて行きたいと思つてゐます。(一九二九・八・八)

谷譲次氏よりの私信

本月の中央公論の丸木氏の「谷譲次論」拜見しました。

私ごとき末輩が中央公論誌上で論ぜられるなど、はなはだ恐縮してをります。

が、あのなかで、丸木氏は、私が家内同伴で旅行したゝめに、妻に對する「道德的怯懦」さから、賣春婦に戯れる「機會」がなかつたと言つて、それを非常に殘念がつてをられます。

勿論これは、「賣春婦」といふ言葉を、「巷の暗さ」ぐらゐの概念に解釋すべきでせうが、そして、全體が、例の丸木氏の西洋好色趣味から出てゐるのでせうが、細君を殘してひとりで行つたなら、大いに活躍して「期待にそふやうなもの」を書いたらうに、「合夫人同伴」であつたゝめに、「折角の手腕家」が得意の方面を封じられて惜しいことをしたと言ふやうな丸木氏の書き方は、私として近頃大いに迷惑に感じます。私は、たとへ一人で丸木氏のいはゆる「無宿谷」として放浪しても、賣春婦に接してそれを原稿に書き、日本へ通信することは出來なかつたでせう。

その點で、丸木氏はじめ、氏と同好の士を失望させたとすれば、その失望は、私にとつて滿足です。

海外で賣春婦に接し、歸りに裸體寫眞をしこたま買つて來ることは、從來のいはゆる「日本紳士」の外遊の目的のほとんど全部でした私たちの新時代の公明な旅行を、これと同一に見たとは、丸木氏も、ひつきよう一時代前の「日本紳士らしい日本紳士」であると苦笑に耐へません。私たちの旅を御賛同下すつて先生がおつけになつた「新世界順禮」の名の新と順禮を考へれば、「新しい明るさ」と「夫婦二人で旅行する清潔」さとは、私共の企劃として、はじめから解つてゐたことではないでせうか。そして、すくなくともこの二つでは、標望したとほりに貫くことが出來たとひそかに感謝してゐるものです。

とにかく、馬鹿なことを、不潔なことを言はれたものだと、私は非常に不愉快に感じてをります。

私の場合、家内同伴はご存じのとほり當然しごくなものでした。手足まといどころか、大小の旅行プラン、切符買入れその他の交渉時間表の調査からホテルとの交渉等、私が月一度の執筆中はすべて家内がひとりで處理して吳れました。だから私は、どこにゐても或る期間締り切りで毎月のお約束を果すことが出來たのです。他の先輩たちが夫人同伴で旅行して、あんまり書けないでゐるのとは、つまり逆なわけです。私は一度、身邊雜記的になだらかに今度の旅行を書いてみるつもりですが、この妻の活躍ぶりは、正直に大いに書いてみたいと思つてゐるくらゐです。

それをしも何ぞや——と言ひたいのです。

要するに私は二人で行つたから書けたのです。あんまりむしやくしやしますので、讀過後ちよつと先生にまで。

御笑讀のうへ御破棄下さればは幸甚です。

谷　譲　次

嶋中雄作先生

＊　＊　＊

當世豪奢物語

胡髯郎

一

岡辰押切帳といふ本を廣告に吊られて買つて讀んで見たら、金儲けの祕訣は一つも無くて確實に一圓八十錢損をした。考へて見るとみんなが一律に金が儲かるといふ理屈はないのだ。一方で損する奴があればこそ儲かる者も出來る道理で、成程岡辰押切帳なども發行元と著者が大儲けして、それ丈の分を本を買つためい〳〵が損をして、それで十呂盤がキチンと合つてくる。

世間が不景氣になると、詐欺、强盜、首縊りがふえて來るといふ。けれども詐欺强盜首縊りは好景氣時代だつて無いわけではない。實際は警視廳の統計によると其の種の事故はいつでも餘り變りなくあるのである。要するに好況時代だつて、金持は極くの少數で、國民の九分九厘は貧乏人だ。世間に幾ら金がダブついてゐたつて結局金持の懷中へ吸ひ込まれてしまふのだから、貧乏人は永久に浮かぶ瀨はない。それと同じで、近年のやうに不景氣〳〵と云つて騷いでゐるが、世の中に金持が無くなつたわけではなく、金持は依然として存在してゐる。

人間は食へなくなると、智慧のある奴は詐欺を働き、度胸のある奴は强盜になり、意久地のない奴が首を縊ると大概相場がきまつてゐる。それと同じやうに金持は贅澤をするのが當り前だ。それがみな普通人の生活だ。渴しても盜泉の水を呑まなかつたり、千萬長者になつても爪で火をともしてゐるやうな人間は、極くの利口か大馬鹿かである。

人は極く普通の事をする者に對してかへつて興味をもつものだ。それはさういふ事をする者の心持は直ぐに理解が出來るからである。失業をした結果詐欺を働く者、女に入れ上げる爲に强盜になる者、病と貧に迫られて首を縊る者、みな當然の經路である。詐欺强盜の新聞記事を面白がつて讀む人の心には、詐欺强盜に對する幾分の共鳴があるからだ。

非凡な人間も少ないが、大馬鹿といふものもさう澤山あるものではない。金持になつたからといつて贅澤や豪奢をする者は、貧乏なるがゆへに泥棒を稼ぐ者と同じ程度に恕さるべき人間である。

泥棒や首縊りの話は近來見飽きたから、今度は一つ反對に馬鹿々々しい贅澤や豪奢な話を書いて見ないかと云はれたので、これは岡辰押切帳を買つて讀むのと異つて的確に原稿料の儲かる話だから、二つ返事で引き受けた。

二

大正七八年の好景氣時代は、成金が四方八方に簇出して、一介の素寒貧が一夜のうちに百萬長者になつた話も珍らしくなかつた。何千萬といふ大金持がヒョイ〳〵生れる時代だから、素晴らしい豪奢な話が澤山あつた。成金の豪奢は無茶苦茶でべらぼうな處に面白味がある。成金になまなか教養が出來たり、趣味が加はつたり、風流を解したりして來ると詰らなくなる。

北濱銀行の名古屋支店長で親分の岩下清周と共に沒落した中西萬之助といふ男などは、小成金ではあつたが、さういふ意味では甚だ愉快な男だつた。玄關で靴を探すのに百圓札に燐寸で火をつけて蠟燭の代りにしたといふ逸話がある。彼は白晝公然と藝妓を俥に乘せ自分は車夫になつて名古屋市中を曳き廻したり、某旗亭の大廣間へビールの池を作つて『淺い川なら……』を藝妓に踊らせたり、する事が萬事下品で氣違ひじみてゐた。故鄕の伊賀の上野に宏大な別莊を作つて、土曜日から日曜へかけて馴染の藝妓や新聞に取り卷かれて遊びに行くのを誇りにしてゐたが、元來支店長風情でそんな贅澤が出來る筈はないのだから、北濱破綻と同時に監獄へ拋り込まれてお陀佛になつた。

虎大盡山本唯三郎は成金の好典型であつた。彼が成金になりたての時分、八幡製鐵所から影島丸をチャーターすると、直ちに二十萬圓の保險料を政府の手で附けることになつた。と、萬事拔け目のない彼は、政府の手以外に自分で同時に九十萬圓の保險を附けて置いた。ところが、天なる哉運なる哉、自然か偶然か、何處までも天は彼を成金にしやうとするのであらうか、航海中敵國獨逸艇のために撃沈させられたので、甘々と九十萬圓の保險金が手に入つた。すると政府ではその金を彼に寄附して呉れと嘆願した。

「宜ろしい。」

と彼は全部投げ出して氣前を見せた。唯三郎が朝鮮虎狩の一條は餘りに有名だが、其の彼物を携へ歸つて在京の名士を招待して舌皷をうたせ、米國大統領ルーズベルトに虎の皮の褥を贈つて豪傑ぶりを發揮したりした。更に虎の餘威を藉りて朝鮮から支那へ旅行し、行く〳〵招待會を催して到る處の名士の荒肝を取りひしいだものだ。その天津に着するや、彼は先づ大旗亭に英佛其の他諸外國の天津駐屯軍の指令官以下を招待したが、客が到着すると咄嗟に用意の浴衣を着せ掛け、會場に案內し、牛を屠り、羊を割き、正宗を酌み、三鞭を拔いて盛んに虎狩式の饗應をなし、宴酣なるに及んで號令一下すれば、數百の藝妓が何れも揃ひの衣裝で片肌脫いで音樂を彈奏し、唯三郎自身は太鼓を打つて興を助け、天津聯合軍慰問組合へ卽座に十萬圓寄附して大に外國將校を喜ばせたので、人々は其の豪快振りに恐れ入つたものだつた。

此の時分が唯三郎の絕頂だつた。彼は其の歸途京都へ立ち寄つて祇園で評判の團子といふ舞子を落籍した。かう云ふと甚だ簡單に團子を自分の物にしたやうに聞えるが、朝鮮の虎まで征服した唯三郎だがこれには可成り苦心した。當時祇園では富菊團子の二人が全盛だつた。何しろ本人の團子は唯三郎を本物の虎以上に恐れてゐて、いくら呼んでも顏を見せぬので唯三郎は焦れて虎の如く咆哮する

が、漸く團子が可憐な風姿を現はすと忽ち海鼠のやうになつてしまふ。唯三郎の遊び振りは亂暴で、銀貨や札を座敷へバラ撒き、大勢の藝者舞子を腹這ひさせて腹へ着いたゞけ持つて行かせるといふのだから、女に好かれる柄ぢやあない。が何しろ金の力は恐ろしいもので數萬金を投じて團子を身請した。女は身請された後も依然として唯三郎を嫌ひ拔いてゐたが何の因果か其の胤をやどしたので仕方なく辛抱してゐるうち、幸か不幸か其の子が死んだので漸う虎の口を脱れて意中の戀人杵屋六左衛門の許へ走つてしまつた。

唯三郎は晩年殆ど沒落して悶々のうちに千駄ケ谷の邸宅で病死したが、團子は今も六左衛門の世話女房で子供も出來圓滿幸福な生涯へ入つてゐる。

三

借金王石井定七が全盛の時分、一日に書畫を二三百萬圓買つて南禪寺の別莊へ運んだ話がある。其の定七は四千圓の茶椀で飯を食ひ、箸はプラチナだといふ、がそんな事は屁でもない話だ。借金も王と云はれる程人の金を踏み倒した代りに、定七は相當人も助けたさうだ。大柄で澁い顔をした男で、いつも靜かな調子で口を利く。鳩山一郎が法廷の辯護を引受けて到頭無罪になつて出獄し、今でも可成りの金を持つて暮らしてゐる。一寸晝飯を食ひに寄つても五十圓位の茶代を置く、不都合な男の割りに世間の氣受けが惡くないところを見ると餘程利口者らしく思はれる。ついでだが鳩山が辯護料の名目で石井から卷き上げた金も莫大なものだ。

贅澤とも違ふが、山下龜三郎が全盛時代の大正七年頃、社員に出したボーナスが、頭株の林武平に百萬圓、三十萬宛の者が四五人、十萬圓宛の者が七八人といつたわけで、合計五百五十萬圓だつたから眼醒ましい。其の頃彼は飛行協會へ百萬圓寄附した。

世界大戰當時は何しろ氣違ひ風が吹いてゐたから、當時の成金にはいろんな奇聞がある。宴會に一流どこの藝者を丸裸にしてお酌をさせるとか、呼ばれた客が半玉を硝子の箱へ入れて手土產に持つて行くとかいつたやうな趣向があつた。

いつの戰爭でも戰爭は成金を生むが、日露戰役後の好況時代に成金の名を得た鈴久はけだし成金の元祖だらうが、末路は見る影もなく零落してしまつた。彼は初め鐘紡を買つてゐたが、轉じて、東株、街鐵と買ひ進み、買つた株は必ず騰るといふ勢ひ、殊に東株は連日暴騰其の年の暮れには七百圓になり、やがて千圓にもならうとした。

當時鈴久と云へば鳴らしたもので當人も夢中になり、連夜新橋赤坂柳橋と泳ぎ廻つて、新橋では名古屋の瀧兵右衛門と一緒に遊んで銀貨を撒き、藝者を眞つ裸にして口で紙幣を拾はせたり、明治四十年の春は鈴久買占めの藝者幾十人かに自分の紋所の附いた晴着をきせ、時價八百圓の東株を一枚宛御祝儀に與へた。其の時鈴久から東株を買つたばかりに、茅町の百尺の爺などは、料理屋がばか〳〵しくなつて止せばいゝに株に手を出すと間もなくガラを食つて一ぺんでへコ垂れてしまつた。旭日東天の株は其の年の一月十八日を最高として暴落した。鈴久に向つて『資金なら

幾らでも貸さう』と云つた安田善次郎から土増場で斷られ、その三月には流行の成金も歩になり、あはれや兜町に顏も出せなくなつてしまつた。

同じ頃米相場で名を成した松辰將軍こと松村辰次郎は、蠣殼町で一千萬圓の富を得た。此の人は賣り方專門の相場師だつた。當時新宿將軍と云はれた濱野茂の所謂『新宿御殿』を買つて納まつたが、其の翌年松谷天一坊の計略に乘つて初めて米の買占めをしたばかりに到頭奈落の底へ突き落された。併し此の人はなか〳〵奇特な人で全盛時代に各種の慈善事業に寄附したり、多くの學生に學費を貢いだりした。當時帝大の醫科だけにも松辰から學費をうけてゐた學生が十數名あつた。松辰豪語して『俺の死ぬ時は十幾人の博士に圍まれて死ぬんだ』と云つた。賣り屋だから農民には恨まれたが、世間一般からは憎まれなかつた。それが天一坊に計られたとは云ひながら多年の節を屈して米の買占めをして沒落したなどは、天魔が魅入つたと云ふか皮肉極めて妙だ。

栗生武右衞門も日露戰爭が生んだ株式の當り屋だつた。其の頃彼は大阪へ行つて有名な傳法屋旅館に泊つた。其の時一箇のボロ鞄の中へ紙幣を一杯詰め込んで出掛けると、それを凄腕で有名な女將が見て、鷲づかみに紙幣を出す樣子から、萬一のことがあつては旅館の信用にも關すると思ふので

「鞄をお預り致しませう」

と云ふと、武右衞門が

「なアに、これは紙屑だから心配しなくてもい〻」

と大きく出て涼しい顏をしてゐる。

「それでは……」

と女將は素なほに引き退つた。數日滯在して歸る時女將を呼んで茶代を二百圓出すと、女將はその紙幣を見向きもしないで

「そんな紙屑はいりません」

と一本喰らはした。これには武右衞門タジ〳〵となつて

「では何うすればよいか」

「其の鞄を頂戴いたします」

と云ふ。で渋々二千圓ばかりつかひ殘りの入つた鞄を女將に與へて、流行は有名な逝だけのことはあると舌を卷いて引き上げた。

四

桃中軒雲右衞門が、一聲千兩と云つて、その全盛を極めた頃は隨分豪奢を盡したものだ。京都の祇園下河原の松の家を定宿にして、大石内藏之助を眞似て一力で豪遊し、常に二つ巴の定紋つけた羽織袴で、藝者や幇間を伴れ、四條大橋から東山の方へ練り歩いたり、黑縮緬の裏へ十圓札や百圓札を縫ひ付けたのを其の儲幇間に與へて一座の者をあッと云はせたりした。

煙草屋から銀行屋になり、近年沒落した村井吉兵衞が日野西家の娘山茶花の局を後妻に迎へた話は有名だが、お局の入室以來、村井家ではすつかり宮中の樣式をのつとり、正月などは、吉兵衞は衣冠束帶し、局は十二單衣を着用したといふから呆れたものだ。永田町の邸宅は華美を盡し、豪奢を極めた上に内外蔵写局が巻圖に奏せ・先生殿は小さくなつて恐れ入つてゐるといふ塩梅・それやこれやか

ら村井家もケチがついて到頭銀行もあの始末になつた。

今比叡山延暦寺の本坊は、もと村井が山茶花の局の御殿として建てたもので、京都の山王にあつたのを寺へ寄進したのだが、元型の儘山王山上へ移すために二十三萬圓の費用が掛つたといふことだ。當年の局の豪奢を偲ぶ建物である。

村井は沒落し、山茶花の局は今洛北鷹峰稀なる里に忍んでゐるが、それでも大に節約して女中を七人に減じたといふのだから、盛んな時の事が思ひやられる。

女の贅澤もかうなるとなか〳〵馬鹿に出來ない。昭和二年五月のパニックの口火を切つたあかぢ銀行の渡邊治右衛門の細君なども悉夫人の標本と謳はれた。此の妻君は購買慾が強く、三越、白木、松坂屋と百貨店を廻つて歩く。お供の女中が大勢に百貨店の番頭が附き隨ひ、シヤナリ〳〵と店内を歩き乍ら、何か眼にとまる物がある毎に、

「お買ひ、お買ひ」

と云ふ。値段を訊くだの、考へるのといふことはない。反物などは買つたばかりで仕立てないのが箪に何杯も溜つてゐた。それが沒落の時邸宅もろとも差押へられて、其の反物が方々へ賣りに出たが、一軒の問屋では買ひ切れぬ程の數だつたといふから驚く。銀行が潰れたのもむべなる哉だ。

大橋新太郎の後妻は元紅葉館の女中お須磨の後身だが、此の夫人は衣裳道樂で、娘や自分の着る物は自分で圖案をして誂える。贅澤と云へば贅澤だが、富豪の趣味とすればこれ位は何でもあるまい。

澁澤篤二の妻君で納つてしまつた元新橋で鳴らした玉蝶は恐ろしく贅澤な女だ。犬が好きで現に十何匹も飼つてゐるが、犬にめい〳〵一人宛女中が付く。女中は完全に犬の家來だから、犬を呼び捨てにするわけにはいかない。「クロ様かう遊ばせ、シロ様あゝ遊ばせ」といふ具合に敬語を使つてゐる。犬の居る處は華族のやうな物を造りそれへ絹布の蒲團を敷いて寢かす。上野の犬の展覽會へお出ましの時は大勢の女中が犬に供奉して行く。五代將軍綱吉が生きてゐたら早速御感賞に與るべきところだ。

玉蝶が始めて新叶家清香の家からお披露目をする時、清香が四千圓の帯を作つて遣ると、玉蝶はそれが氣に入らないといつて鋏でズタ〳〵に切つてしまつた。普通の女なら立腹するところだが流石は清香だ、早速懇意な新聞記者を呼び集めて此の話をして新聞に出させた。これが大評判になつて玉蝶の人氣は全新橋を壓倒した。

澁澤篤二が玉蝶のために家督を棒に振つたことは餘り有名すぎるから略す。

加賀様は百萬石前田家の一粒種、パリーで死んだ漾子夫人の日常生活の豪勢さは當然の事ながら、大概の者は聞いたゞけでも目を廻さずには居られなかつた。伊香保へ避暑に行く時なぞは長持に幾棹となきお荷物がお供をする。日常すべて、顔を洗ふにも、髪を梳るにも、おしろいをつけるにも、決して自分の手ではしない。すべて侍女達にやつて貰ふこと全く幼女と等しかつた。食べ物はいつでも冷たい物ばかり食べた。それは幾人もの係りが眼を通した後でなければ食べることが出來

ないので、どんな熱い物でもすつかり冷めてしまふのだつた。

或時「卵は丸い物か四角い物か」と尋ねたといふ話がある。

又或る時金澤の品評會に臨んで初めて大根を見て「一本五圓位するものか」と云つたといふ。

前田家の財産はどれ位あるか分らない。お家重代の寳物を賣り出したら日本中の書畫骨董の相場が狂つてしまふ。一寸四方何百圓の蜀江の錦が鋏も入れぬ卷物の儘で藏に一杯もあるといふのだから驚く。先年一寸埃が棄てる位の賣立てをしても百萬圓以上あつた。漾子夫人がパリーで豪奢な振袖を着てダンスをしたことが當時新聞に出てゐたが、これ程有り餘つた身分でも盛りの命を取り留めることは出來なかつた。

大倉組の高島小金次の今は未亡人となつた大倉喜八郎の娘、芝居が好きで大勢の役者を贔屓にするが、月々のお小遣ひは宛がひ扶持だから盆や暮に役者に遣るお金が無い。其の金を作るため盆前と節季にはきまつて衣類持物を賣りに出す。現金は持たないが衣類や物は三越でも白木でも好きな程買へるから、高價な反物を仕立てたばかりで一遍も手を通さないのを山のやうに持ち出して赤坂邊の花柳界へ二束三文に賣り飛ばす。それが例になつて近年は赤坂の藝者屋や待合では「今年は高島さんからどんな物が出るかしら」と首を長くして待つてゐる。

其の親の大倉喜八郎は、妾に子供が一人出來ると必ず一萬圓遣つた。これなどは神妙なところ。

麥酒王馬越恭平は日本一の大箒で、決して一人の女に拘泥しないが、丁度百人目々々々の節々に當つた者は、誰によらず立派に世話をして遣るといふ變な道樂があつた。藝者なら自前にして遣り、女郎は身請し、素人なら嫁入仕度をして遣るといふ風に立派に世話をする事を心願とした。今から十五六年前に十七人目の節に當つた者がゐたから、其の後無論二十人以上其の幸運の籤を引いた女がゐるだらう。何んにしても恐れ入つた話だ。

近年兜町の仲買人で羽振のよかつた○○といふ男は、妾が東京市内に十七人あつた。一人に對して月々五百圓の手當を遣ることにきめてゐたから、其の額が締めて七千五百圓かゝる。それで毎晩各所の花柳界を押し廻つて一夜に數千金を散じて豪遊をした。

調子のいゝ間はどれ丈大きくなるかと思はせたが、間もなく曲り始めて、最後に三百萬圓の詐欺横領事件を引き起して店は破産し、自分は收監されるといふ羽目になつた。一年近く未決にゐて出獄してからいろ／＼整理をつけ、妾を淘汰する段になつて、七人だけは暇を出したがあとの十人は子供があるとかヤレ親があるとかいろんな因緣があつて手が切れないで弱つてゐた。けれどもそのうち全く首が廻らなくなつたので自然に解決がついてしまつた。

五

そんなに有名でなくても贅澤や奢侈をする者は澤山ある。

本郷の或る齒科醫に、其の娘にはかせる下駄の鼻緒のためにある一流處の畫家に下圖を

附けさせ、そしてそれを縫取屋に誂へて刺繍にさせると、鼻緒の代金は八圓だつたといふが、下駄の値は幾らしたか聞き漏した。それが下駄だから他はおして知る可しだ。

某豪商に落籍されて木挽町に料理屋を出した新橋藝者の何とかいふ女は恐らく贅澤の標本だらう。帶の價百圓とだけ云へば少しも贅澤には聞えぬが、これが全部紙製で、而もたつた一度締めれば二度と締められなくなる代物。柄は伊左衛門の紙衣の趣きを見せ、紙と紙とのはぎ合せ目に縮緬のはぎを入れてあるのださうだ。

ある東京の呉服屋の話に、大阪の成金に頼まれて作つた丸帶は金の綴れ錦に總刺繍の模様をつけたものだが、値段は二千圓だつたと云ふ。これが前の紙衣の帶に比べたら東京人と大阪人との贅澤の仕方が違ふ。大阪人のは夥しい金をかけるが出來た品物は何處へ持つて行つても元價で通用し、且つ永く持つても價格の落ちない處を狙ふが、東京の贅澤は一度きりで無くなるやうな物を選ぶ傾向があると、江戸ッ子がつて話すのを聞いたことがあつた。

同じ贅澤といつても大名となるとおのづから格が違つて來る。小笠原長幹伯が時々行く待合の女中が、伯が何時も同じ柄の大島紬を着てくるのを可笑しいと思つた。小笠原伯ともあらうお方がいつも〳〵一帳羅の筈がないと思つたので、或時試みにそッと目印を着物につけて置き、次に來た時に調べて見ると其の目印は何處にか消えてゐる。しかも同じ柄の着物である。そこで又その着物に目印をつけて置き、その次ぎ來た時調べて見ると又新たな目印も消えてゐる。かくすること十回に及んだが一度も目印のつけてある着物は出て來ない。で、女中はよく〳〵怪しいと思つて其の理由を探つて見ると、伯爵は同じ柄の衣服を幾つも持つてゐてそれを取りかへ引つかへしては着てゐるといふことが判つたので、流石は伯爵樣だと呆れたといふ話がある。

これは、小形光琳の逸話の中にも同じ樣なのがある。光琳は何時でも黒羽二重の紋付を着用してゐたので、人は彼が一つの衣服を着てゐると思つた處が、光琳は同じやうな衣服を數十着こしらへてあつて何時も新らしいのを取り出して着てゐることがわかつた。竹の皮に金蒔繪をほどこして嵐山の川へ投げ棄てた光琳の花見辨當の逸話も有名である。此の事から彼は官憲に睨まれて一時京都追放の仕置に行はれたのだつた。

小笠原伯が彫刻にかけて玄人裸足である事も人が知つてゐるが、大正七年頃建てたそのアトリエも伯の趣味を發揮してゐる。其の室は全然成金式を避け、平家造りの頗る清楚な趣向で、柱は全部手斧けづり、天井は杉材、羽目は燒杉、電燈は總て埋行燈や丸行燈で強い光を柔かに受ける趣向、萬事從來の茶席といつた風である。下突き壁も右の作同樣手斧けづりで、障子は一切すり硝子、球戯場には眞白の木の香高き板の間に縄で編んだ莚を敷いてある。これなぞは謂はゞ反動主義的贅澤とでも云はうか。

家の話が出た序でに前遞信大臣久原房之助の邸宅を御紹介しやう。芝白金今里町の同邸は元横濱倉庫の淺澤善作の所有だつたのを懇望して讓り受けたもので、結構極めて莊麗だ

が、中にも表正門は總檜破風造り茅葺きで間口七間奥行二間半、中央は通路、兩側に門番部屋があつて都下に珍らしい構造だ。處が茅葺きであるため警視廳令の屋上制限に牴觸し、絕對不燃質物を以て葺替へねばならぬので、警視廳から高輪署をして其の旨を諭達せしめたが、久原家では斯かる雅致ある建物を如何にしても保存したい希望から、遂に防火の設備として十五馬力電機モーターを据へ付け、水道栓を引用し、一朝出火若しくは近火の場合には螺旋一つの作用で棟の頂上から兩側一面に瀧の如く水を流し、一方屋根裏にはホースを備へ共に強度の射水の出來る設備をし、以て屋上制限の御免を蒙り度しと願ひ出た。そこで高輪署の警部と警視廳技師とが現場に出張して、親しく實地檢分を遂げたところ防火の效果充分なりと認められ直ちに願が許可された。此の設備費は約五千圓程であつた。

これは贅澤と云へるかどうか知らぬが、德川家達公はあれでなか〳〵平民主義を買つてゐる人だが、屋敷に居れば矢張り十六代の上樣だからさう手輕にはいかない。應接間で客と對談中に煙草が吸ひ度くなると、公爵がポン〳〵と手を鳴らす、三太夫が恭々しく入つて來ると公爵が、

「煙草をもて」

と命じる。三太夫は畏まつて退くと今度は銀製の皿の上に敷島を一本載せて目よりも高く捧げながら持つて來るのである。

「お客樣にも持て」

と云ふと、又々別の銀の皿に一本きり載せて捧げて來る。敷島一本もかうなるととても有難く見えるさうだ。

これは近頃のことであるが、澁澤子爵家に竹内栖鳳畫伯から一双の屛風が届いた。それは子爵令孃愛子と、女婿明石照男君（今は第一銀行取締役）と結婚した時、その媒酌が岩崎久彌であつた。が何しろ日本一の金持の岩崎であるからどんな珍品をもつて謝禮にしたところで喜びさうもない。そこで協議の結果、栖鳳に屛風をかゝせて贈ることにして、一萬圓を前金にして依賴に及んだのであつた。それが今年の春やつと出來上つて届いたわけである。で、其の屛風を一應近親の者に披露したところ、その一つは櫻、一つは楓の圖の一双である。すると或者が

「これは時價二萬圓がものはある」

と云つたので、それでは氣の毒だといふのであとから六千圓を栖鳳に謝禮に呈し、屛風は岩崎へ贈つた。かうなると仲人の禮も大したものである。が、あとの禮を六千圓とキザンだところは、さすが十呂盤高い實業家だけのことはある。

雨宮敬次郎が還暦の祝ひを行つた時、その邸内に富士山の模型を作つて朝野の名士を招待し、その料理の、口取につく蒲鉾の緣を金箔にし、一人前一切れ其の當時二十圓のものを使用したといふので評判であつた。

光村利藻が全盛時代に箱根へ遊びに行つて座敷へ豆腐を敷いて大勢で田植の眞似をした話なぞも有名だ。

死顏に化粧する

原田讓二

一

社會部長さま。

B温泉の安宿の二階から、おたよりいたします。

なんといふむし暑い所でせう。山を脊負ひ、海を控へた風景の、緑と藍とで塗りつぶされたポスター。そんなものは、てんであてにはなりません。もつとも私は、快速力の、白色の、デッキの籐椅子で海風を滿喫するやうな、そこでは白の制服のパアサーが番頭のやうにお辭儀をする、あの最新式遊覽船の一等船客としてやつて來たものではありません。さうであれば、この海岸の防波堤から望まれる、嵐氣につゝまれた、朝は朝靄の涌き立つ、山脈のひだの中のバンガローにでも納まつてゐたことでせう。

西日をいつぱいに受けた室の中で、天井の蠅の糞と睨めつこをしてゐるのが私です。今、重ぐるしい午睡から覺めたばかりのところで、フランネルの汗ばんだやうな肌ざわりのいら／＼しさが脊筋を走ります。いらだたしい、もの憂い、それでゐて、冷藏庫の銅張りの扉に浮いた雫のやうなものが、心の底に落ちるのです。

私は眠つてゐても、彼ら二人の夢を見ました。覺めてゐても考へてゐます。どうしてあの二人は、自ら生命を絶つ氣になつたのでせう。妹が死なうといつても、兄が止めたらいゝではありませんか。さう簡單にはいかない。さうかも知れません。では、何者がさうさせたのでせう。不思議な力が、人生の不可解が、……。生きるのが強いのか、死にうるのが強いのか。

二十四の青年と、十九のその妹。彼らが四十、五十、または六十

歳までも生きのびたとして、それがどうであらう。彼らはそこまで考へたであらうか。伸びきつたゴムは切れやすい、その切れる瞬間に、すばらしい緊度の音を發する。彼ら二人は、青春を斷つ間ぎわに、一瞬にして人生のすべてを生きのびたのかも知れない。でなければ、あゝやすく／＼と死を樂しめるものではない。それにしても、私には出來ない、おそろしいことだ。私の頭の中の哲學者は、說敎者は、いろいろの事を說いてくれましたけれど、元來が貧弱な思索の持主なのですから、何らの解決をも與へてくれません。けつきよく私は、卑怯な私といふものは、この嚴肅な問題の鐵扉に直面して、自分だけは遠のいて、二人の死を讃美するよりほかはありませんでした。若い二つの魂が私をさし招いて、さうさせたやうでもありました。「死の勝利は老人には來ない、若きが故に死は生に勝つのだ」こんなわけのわからぬことを心の中でいつて、私は胸の上で合掌するとやつとうつら／＼したやうでした。

社會部長さま。

お詫びはあとでさせて下さい。

とにかく、私達一行は今朝B港につくなり、おわただしい半日――以上をすごしました。自動車で警察署へ、共同墓地へ、現場の溫泉宿へ、それから火葬場へ。法律上の手續といふ一つのビズネスを遂行しながら、かつて自分のものとしては經驗したことのない、驚愕と傷心と怪奇との灰色の境を私はくゞりぬけて來ました。私がかういふ事件に對して全くのアマチユアであつたなら、その處理の上になほ多くの時間を要したことでせう。しかし、幸に私は新聞記者でした。だが、また不幸にも新聞記者でした。

私は今日まで、數多い悲慘な事件を取扱つて來ました。それは、紙の上の事件でした。鉛筆を走らせる際に、原稿紙の上に淚をぽたつかせたことが、かつて一度だつてあつたでせうか。いや、そんな場合に私は私自身を叱らなかつたでせうか。他人の不幸を、自分の不幸として考へるだけの心の餘裕をもつたでせうか。或る一つの事件の經過をたぐりながら、その結果の大きくなつて行くことを望まなかつたでせうか。實にはづかしい次第ではありますが、今にしてドキリと胸にこたへます。

でも、未練がましくはあるが、私だつて、全然無神經であつたとはいはれません。終電車がぐつたり疲れた私を郊外の小さい家へ運んでくれる時にぼんやりとその一日の自分がかへりみられたこともあります。何といふ無感覺の私だらう。すり切れて、すり切れて行くばかりではないか。かうつぶやいて、自分で自分をつねつて見ようとさへもしました。私を成長させるには、

この泥田から早く足を拔かなくてはならぬ……靴のカヽトの減つた、ズボンの膝の帽子のやうに飛び出た、みすぼらしい私の姿を自分の頭に描きながら、私は歸宅を急ぎます。一ぱいのあつい番茶と、妻との無駄ばなしとで、幾分氣が樂になつて、グッスリ寢込んだと思ふと、どうでせう、その翌朝は。私はまるで獵犬が草原に放たれたやうに、露で鼻先をぬらしながら、太陽の光線を嗅ぎ〳〵、勇躍してあなたのデスクの前に起立してゐるのです。「何か、御用は？」

あなたは、よくいはれます。

「安い涙をこぼすな、センチメンタリズムは新聞記者には絶對禁物だ」

「泣いてゐて仕事が出來るかい、めそ〳〵と泣く外科醫を見たことがない。檢事の眼から涙が出たことがあるか。お經を讀む坊主だつて、泣いてはゐないだらう」

かうして、勇壯活潑に私達の尻をどやされます。

「新聞記者には、科學者の冷靜さが必要だ。感情に動かされてゐては、適確な判斷は出來ない。たとへ、泣くなといつたところで、それは冷酷な人間、無感覺な人間になれといふ意味ではない。感情の豐かな、センシブルな人間でなくては、仕事は出來ぬ。溫かな心を持つてゐなくては、ヒューマニチーには觸れられない。宗教家が、哲學者が、藝術家が、感情の戰ひにどれほど苦心をして來たことか。新聞記者だつて、同じことだ。統制された感情、沈潛した感情、そいつが光るんだ、物をいふんだ。そこまで行くには、お互に骨が折れるよ」

あなたは、またかうもいはれました。

しかし、今度の事件だけは、どうにも私には調子がちがひます。私を職業意識から切り離させようとして、私を苦しませます。私の過去の職業的經驗を一蹴して、私を嘲笑してゐるやうです。お前達は、お前達の肉身、知己、友人の間の不幸や悲劇からでさへも、お前達の生命とするニュースを取るだけの勇氣があるかいと挑戰します。私はたゞうなだれて、昏迷せざるをえません。

社會部長さま。

私は出發に際して、電話で簡單に、友人の家に不幸が起つたので、その始末に溫泉に行く、三四日暇をいただきたいとのみ申して、詳しいことは述べませんでした。それを打ち明けたところで、よし、では、それを通信せよ、とおつしやるあなたであるとは思ひませんでしたけれど、「私情のために、ニュースを抹殺するが如きは、甚しき記者道の冒瀆だ」といつて、日頃叩き込まれてゐる私としては、談話口で顏をまつかにせずにはゐ

られなかつたのです。

あの朝、私は新聞をひらいて、何心なく「兄妹の心中」といふ二號活字の標題に目をとめました。讀んで行くうちに、青年の遺留した夏帽子にS・Mといふイニシャルが打つてあるとあつたので、はつと思つて、聲を立てたものです。妻も驚いて、新聞をのぞきこみました。まだ身許も原因も判明してはゐませんが――B市の淋しい溫泉宿で毒藥自殺を遂げた兄妹らしい男女がある、男は學生らしく金ボタンの制服を着け、女は明石の單衣をきて、美しく化粧をして死んでゐた、相當の家庭の育ちらしい。これが、その全部でした。あなたも恐らくその小記事はお讀みになつたことでせう。

私の友人のMの家で、弟と妹とが家出したらしいといつて、騷いでゐるといふことは、前夜私の妻から聞いたのですが、まさかこんなに早くその結果が現はれようとは思ひがけませんでした。私は朝飯もそこ／＼にして、その新聞をポケットにねぢこむなり、阪急沿線に住むMの家に馳けつけました。Mは會社を休んで、妻君と末弟とを相手に、やはり今朝の新聞を取圍んで、ただ／＼ため息をついてゐました。私の顏を見ると、いきなり握手をして、何とか智慧をかしてくれといふのです。

これほど適確な條件が揃つてゐるにかゝはらず、Mの一家はなほ一縷の望みをつないで、廣い世間には似通つたものもあるからといふのです。親近の身になつて見れば、かうも迷ふことでせう。だが、私は斷然それを否定して、B市の警察署にあてて、「心當りあり、すぐ行く、身許祕密に賴む」といふ至急報を打つてしまひました。それから、午後三時にK港を出帆するM丸を捕へたのです。

M丸の船室――二等室は雜居。Mは晝間から枕して、デッキへは出ない。私の方をのぞき込んでは、「君が新聞社にゐてくれて、助かつたよ。君の新聞にだけでも出ないからね」といふではありませんか。私は、それを聞くのがつらくてならない。Mは私と同郷で、同じ中學を出て、東京でも二人自炊しながら勉強しました。二つの乏しい財布は、いつも一しよくたでした。彼も今は一個の社會人ですから、一家の祕事が公けにされることを好むはずはありません。たとへ、私がこの際、時代の病氣は、思想的傾向は、一般の社會現象は、人を選ばず誰の家庭の上にも現れるものだ、これを靜視するだけの勇氣がなくてはいけない、隱さうとしたところで、隱しおほせるものでもなく、隱すことに正しさも價値もないと、彼に說き聞かせたところで、それが何になるでせう。いたづらに彼を失望、昂奮させるばかりではありませんか。私は舊友として、少しでも彼の魂の痛手

をやはらげてやらねばならぬ。かう考へて、私は彼に誓ひ、あなたに尽くすことに決心しました。

かうなつては、お叱りはいくらでも受けます。

船の一夜は幻想の一夜でした。私達はそれ〴〵給付された白毛布にくるまり、人いきれと煙草の煙とでもう〳〵と曇る電燈を見上げながら、三人別々の、或ひはどこかで交叉するらしい思念の中に沈んでゐました。私はまた隣りの席が氣になつて、時々その方へ目をやりました。それは若い夫婦の旅行者でしたが、夫は浴衣の肩のほそ〴〵とした、顔に血の氣の乏しい、見るからに病人とうなづかれます。いづれは温泉に保養にでも行くのでせうが、その若い妻君の親身の介抱ぶりを見てゐると、ある運命の暗示を投げられるやうで、悲しみを誘はれずにはゐられません。妻君はちよい〳〵目をさまして、夫の着てゐる毛布の裾を叩いてやるのです。かういふ時には、人間は他人のためにも神に祈りたい心になりますよ。

かと思ふと、また私は好奇の心で、船窓寄りの仕切りの中にゐる男女の一組の方に向つても、寝返りを打ちます。眉ずみをつけた、口紅の濃い女の寝顔はあまりよいものではありません。けれども、興味はあります。その女の起きてゐる間の人もなげな行動を知つてゐる者には、無言と靜止と弛緩とが彼の女の肉體の全部を覆うてゐる時の姿態をながめうることは、一つの復讐でもあります。憎悪はやがておかしみにも變る。想像して見て下さい、洋裝の女のいぎたなく寝込んでゐる肢體を。太い〳〵ストッキングスの脚が、二本によきつとのぞいてゐるところを。彼の女の一つの大切な荷物は、大きなハット・ケースでした。彼の女は最初それを音樂家がサック入りの樂器を抱へるやうにして、この船室に入つて來ました。疊の上にあがる時には、彼の女をエスコートして來た青年が靴を脱がせてやりました。その從順な愛人は、今彼の女の裾のあたりに小さくなつて、騎士の夢を見てゐるわけです。

何と船室の中の生活のカクテルの、幸福と悲哀と、歡樂と憂鬱とのミクスチュアが、混沌として淀んでゐることよ。ジンの強さと、何かの甘ずつぱさとを舌先に感じながら、私も今は仕事をはなれて、旅をしてゐるのだなとしみ〴〵した氣持になりました。

機關の音、スクリユーの音、船尾に曳く潮騒の幻像。夏ではあるが、内海の夜の航行は、一室に閉ぢこめられてゐても、ひえ〴〵とします。

船體を揺す響音は、いつしか私に輪轉機の音を感じさせました。なつかしい音です、街頭への活きた行進曲です。霧散する

インキのにほひ！健康者の嗅覺を息づまらせます。ナイヤガラ瀑布の俯瞰圖を見るやうに、折疊機の上に湧き出る新聞紙の流れ！文明の生命が、分秒、分秒に誕生を謳ひつゝあるのです。その中にわれら青年記者の神經が、感覺が、才能が、血を引いて走つてゐます。

私、いや私達リポータアは、あの南京蟲の出る宿直室を呪ひました。殊に明け易い短夜は、まどろむひまもなく輪轉機の騒音に貫かれます。私達はそこを油臭い三等船室だと罵りました、神經衰弱製造所だともいひました、だが、一度あの室から離れて見ると、故鄕を慕ふやうな心持にならずにはゐられない。輪轉機のもつ魅惑！それは私達だけが誘ひかけられる特權なのです。軍馬は砲聲を聞くと、ぢつとしてゐないさうです。私達も輪轉機の響きを聞いては、全身を感覺にして勇み立ちます。

こんどの旅行は、「不幸」を道連れにしてはゐますが、いろ〳〵の意味において、感謝したい氣持を起させました。

二

社會部長さま。

地方の警察はのんきなもので、書類も遺留品もまだ本署へは廻つて來てゐません。兄妹の死んだ場所は、K地獄とよばれる溫泉のある村ですが、そこの駐在所へ直通電話をかけてもらつて、死體發掘、檢分などに立會つてくれるやうに頼んで置きました。死人の顏を見なければならぬといふことが、私にはのがれられぬ恐れでした。私もこれまで死體は澤山見ましたが、それは職務意識に驅られてのことで、案外安易に、一個の物體として取扱ふことが出來たのでしたが、今度ばかりは、まだ見ぬ先から心におびえて、面を反けてゐます。

自殺したMの弟は、よい青年でした。彼は來年春にはO醫科大學を卒業することになつてゐました。年に似合はず世間なれた、むしろ實業家にでもしたいほどの綿密さと、事務的才能をもつてゐました。一例をいへば、彼の兄が住宅を新築する時など、一切普請の監督をして、建築のプランを補正しながら完全にそれを實現させたのは彼でした。また一と夏、休暇を利用して、或る醫院の助手を勤めたことがありますが、患者の應對、醫務室の整理などに見事な手際を見せたので、院主が卒業後は是非自分のところへ來てくれといつたほどです。彼は美しい眼をもち、男に不似合なきれいな指をもつてゐました。專門は婦人科だつたのです。

私はその妹の方はよく知りません、いや一度も逢つたことさへありません。ごく最近に郷里から出て來て、長兄の家に厄介に

なつてゐました。私の妻は一二度逢つたことがありますが、無口な、眼だけで物をいふやうなさびしい處女だつたさうです。生前にはかつて見たこともない若い女に、しかもその死顔に今私は初對面しようとしてゐるのです。不思議な緣もあればあるものです。

彼の女は、國からお友達が來るので、ステーションへ迎へに行くといつて出たまゝ夜になつても歸つて來ませんでした。どうもおかしいといふのでMの家では騷ぎ出して、人を弟の下宿に走らせて見ましたが、彼もまた朝出たまゝ、歸つてはゐません。Mの弟は近頃獨居を欲して、郊外の家に一間を借りてゐました。彼の樣子が變であつたといふことは、この時はじめて下宿の主婦の話でわかりました。「人間はどうすれば一番樂に死なれるだらうか」、彼は口癖のやうにかういつてゐました。「今の若さで、あなた、何を御冗談おつしやるのです」、いつも主婦は笑つて打消したものださうです。或る時は近所の草原で野犬を捕へて、彼は藥物の注射を試みました。犬は忽ち生命を絕たれました。また一羽の鷄を買つて來て、これにも試みました。醫學生の殘忍な行爲が近所の評判となつたので、主婦はこんなことはやめさせようと、彼に勸告しますと、彼はモルモットや猿や幾多の家畜が、學問の研究のために哀れな犧牲となつてゐる話をして、動物試驗の學的價値を說明して聞かせました。――かういふ斷片的の消息を聞くと、Mは心當りの問題もあることだから、二人がしめし合せて、死の旅に急いだものと直覺しました。

妹の衣類を入れたカバンも、手筥類もキチンと處理されて、何らの形跡をもとどめてゐませんでしたが、たゞ一つ――書物のページの間に挾まれた一通の手紙が有力な手がかりでした。兄と妹とは、しば〳〵逢つてゐたにかゝはらず、手紙の往復をしてゐました。妹はそれらの手紙の悉くを燒棄したのでせうが、これだけがどうした拍子か、そこに紛れ込んで或はまた忘れられて、若い人生の苦悶の痕跡を、血の滲んだ爪のあとのやうに殘してゐました。それは兄が妹の急きたてる死を、今はまだ時期でないから、も少し待てとなだめてゐる手紙でした。一たん兄が愛する妹のために誓つた以上、決してお前だけを死なせはせぬ、お前よりも餘計に人生を活きてゐる兄には、それだけ餘計に死に對する準備が必要だ、それは生の執着であるか、未練であるか、とにかく兄の心にもなつて見て、氣を落ちつけてゐてくれと書いてありました。これによると、死なうと持ちかけたのは妹の方からであるらしいのです。

社會部長さま。

私は小說を書かうとするのではありません。トルストイにし

ても、ドストイエフスキイにしても、チエホフにしても、彼らは實に巧みな人生の複製家です。いや、複製といつては活版刷のやうに聞えます。活寫でもなく、それは創造です。私が不思議に堪へないことは、これらの藝術家がどうして微妙な、複雑な、流動的な、靈活的な人間の心理を透見するかといふことです。見抜くといつても、そんな巧妙精緻な心眼のレンズが存在するものでせうか。さういふ眼鏡なら、モノクルで結構ですから、新聞記者に一つもらひたいものです。しかし要するに、一箇の藝術といふものは、現實の人間の躍るがまゝを忠實に描くといふことではなく藝術家の頭腦の中に、それ〲の人間が生れ出るものなのでせう。彼の生活經驗が、人生觀照が、分析となり、歸納となつて、藝術の釀成となるのでせう。だから藝術は人生の再現ではなくして、人生の創造です。偉大なる創作の中には、新らしい人生が躍動してゐるのです。そして、それが既成生活に働きかける時に新生活の黎明がほのめきます。

　私は新聞記者の態度は、一面藝術家の態度でなくてはならぬと信じてゐます。あなたはよく、文學青年の變裝した新聞記者ほどやくざはないといつて惡罵されます、私も耳が痛いのです。だが、私からいへば、卷取紙を皺くちやにしたやうな、さら〱した感情のあなたを見出した時、今少しあなたに藝術的情操があれば、近代的の名記者だがなと思ふのですよ。とんだところで氣焔をあげますが、例のあなたの苦笑で蹴飛ばしておいて下さい。とにかく私のいはうとするところは、記者が一つの事實に當面した場合には、藝術家の態度のやうに謙虚であり、誠實であり、眞摯であり寛容でなくてはならぬ。さうして物の見方の深く、廣く、それはもとより主觀の燃焼の度合によることであるが、あだかもマグネシユームのフラッシユの照明と熱度とを伴ふ觀照的態度をもつてしなければならぬ。表現の方法については藝術の形式と報道の形式とは別物であつて、時間と分量との制約を受ける新聞記者が、藝術家の眞似をしてゐては笑ひものではあるが、眞實を目ざして表現に苦心する態度は、藝術家と寸分變りのあらう道理はない。いな、この二つの物の接近が必ず來るであらう。新聞雜報記事の新形式が今に生れる。それは、ガソリン臭い新聞藝術といはれるものかも知れない。私のいひたかつたのは、このことです。

　それよりもほんとうのことは、「兄妹の心中」といふ實在の事實に逢着して、私が手も足も出ないでゐるといふことです。力ある藝術家を讃嘆しつゝ、我れの微力を悲しんでゐるといつた方が正直でいゝのです。

では、新聞記者としてはどうか、それも私は落第點です。私

はかなり廣い範圍において、この事件の内容に通じてゐるのですが、さてこれをいかに報道すべきでせう。問題に解決が與へられるでせうか。眞の原因は何であると斷案しうるでせうか。事件の輪廓を忠實に正直に描くとしても、讀者の或るものは、この特異的な悲劇を普通の男女の情死だと解釋するおそれはないでせうか。

そこへ行つて、私は全く行き詰つてしまひます。世の中には外觀的には解決のつかない事件がいくらでもある。又科學的手段によつてならば解決するであらう事件でも、強いてそれが解決を求める必要のない事件も少くはない。それを新聞は、何事にかゝはらずどうしても解決のついたやうに報道せねばならぬのでせうか。辻褄を合せて、無理にも筋を通らせる必要があるのでせうか。微力な人間が、人間以上の力に向つて、ペン先を突き廻して見たところで、血さへ出ないやうな場合もあるだらう。しかもなほ解つたふりをして書かねばならぬとは、あさましい職業ではありませんか。今日の新聞記事は、あまりにも首尾が一貫しすぎてゐる。その裏面には、事實が曲歪されてゐるだらうことを思はせる。こゝまでは明白なる事實であるのだがそれから先はよくは解らない、といつた風に、濃淡の分界を明らかにした、正直な記事の書き方があつてもよいはずではありませんか。その方がむしろ忠實な報告書だ。かう私は考へるのです。こんどの場合だつて、まさにさうです。

私はB警察の署長に面會して、なるべく本人たちの身許も公表しないやうに、やむを得なければ假名に願ひたいと依頼して置きましたが、かういふことは絶對に祕しおほせるものでなく隱されるとなほほじくりたくなるものですから、いづれ新聞に現はれることでせう。私は地方の記者諸君が、この事件をどういふ風に書き現はすか、それに興味をつないでゐますが、また恐しい氣持もします。Mにだけはそれを見せてやりたくありません。

三

社會部長さま。

では、私は不掲載の記事として、私の知れる限りを、ありのまゝに不秩序に報告することにいたしませう。

M等兄妹は平和な家庭に順調に育つたのではありません。Mの父は官吏でしたが、いつまでも窮屈な役人生活にあくせくすることを好まず、いつしか實業界に身を投じました。しかし幸運に惠まれることも少く、今では郷里に隱棲して、實生活への慾望は、全く冷灰にしてしまつてゐるらしいのです。M等兄妹

は父の轉任先で次々に生れました。その間に母も變りました。第一の母は、一人きりの妹が生れると間もなく病死したのです。その次からの弟は、第二の母の腹に生れました。現に今私がMと共に同行して來てゐるのは、その子です。それからあとになほ弟があるかどうかは、私は知りません。とにかく、今度悲しい運命をたどつた妹は、M等兄弟に取つては、たゞ一人の女けふだいであつたのです。

その妹は生れ落ちると、里子にやられました。そして、小學校、女學校もすべて預けられた家から通ひました。彼の女がほんとうの兄や、腹ちがひの弟だちと、一つ廂の下に住むやうになつたのは、ほんのこの二三年來のことです。彼の女は、眞に生みの父の愛を感じえたでせうか。違つた母乳で育つた兄と妹とが、青年期に達してはじめて、肉身の生活をし合ふ時に、その感情の交錯はどんなぐあひのものでせう。それらの心的交渉については、私は何ら知るところがありません。

鄕里の父の家、そこには第二の母も同棲してゐます。さういふ家庭的環境の中に、女としての意識に燃えそめた――しかも畸形的の養育を受けたMの妹が、住みづらく思つたことは想像されます。それに、その頃彼の女には一つの緣談がはじまつてゐました。この結婚には彼の女は絶對に反對だつたさうです。かうした彼の女の心持が、長く別れてゐて親しみの薄い長兄に對してよりも、年齢の相違の近い次の兄の方へ打ち明けられたのは、きはめて自然のことのやうに思はれます。

M自身の告白によると、かあいさうな妹だとは考へたこともあるが、その妹の始末まで自分が引受けなければならぬなどと、眞面目に考へたことはなかつた、自分の一家のことが精々だつたといふのです。ところが弟は――Mの言葉を借りていへば――生意氣にも、妹の結婚問題にまで手を出して、いやな結婚なら、父が何といはうと振り切つて、逃け出して來い、自分が適當な男を探し出してやる。かういつて、彼は妹を鄕里から誘ひ出しました。その時、Mは學生の分際でお前に何が出來るか、家庭のトラブルを一層深刻にするだけのものだといつて、散々弟を叱つたさうです。

それでも弟は、妹のために一人の配偶者を彼の友人間からさがしてやつて、二人を交際させてゐましたがそのうちに妹もその青年とならば結婚してもよいといふことになりました。さうなると、Mも內々それに承諾を與へて、父を說き伏せる役目に廻りました。難問題が一つ片づくことを、彼自身も望んだのでせう。さていよ〳〵正式にまとめようとする段になつて、それは實に意外な問題が持ち上りました。相手の青年は不可思議なこ

とをいひ出したのです。彼は性的不具者であることを醫師の診斷によつて確めたから、自分には結婚の資格は全然ない、この悲惱な事實を隱蔽してまで、結婚を遂行することは罪惡だから進んでこの結婚から手を引くといひ出しました。一人の男性の祕密を打ち明けられて、Mの弟は愕然としました。次には、少からず疑惑をもちました。生理學には全くの素人である私ですらも、これだけ聞いただけでは、當然に疑はざるを得ません。これは結婚回避の遁辭ではなからうかと。

しかし、この話をも少し自然的に話す必要があります。この求婚青年は、最近或る機會に、それは彼に取つては最初の機會に彼れ自身が完全な男性でないといふことを發見して、驚き、嘆き、悲しみ、悶え、遂に恥を忍んで、彼の通學してゐる大學の某教授に診察してもらつたといふのです。それからなほ彼は、Mの弟に向つて、「嘘だと思ふなら、まあ、僕の乳を見てくれ」といつて、胸をひろげて見せました。二十歳を越えた青年の胸！誰だつて想像することが出來るのですが、しかしそこには一本の毛も見ることは出來ないで、女のやうな白さとふくやかさとをもつた乳が二つ盛り上つてゐました。

Mの弟は、自分が醫者の卵(たまご)ではあるが、それ以上冷靜に友人の體格を檢査する勇氣はありませんでした。さういはれて見ると、彼との交際はかなりに長いが、一度だつて彼の肌を脫いでるところを見たことがなく、また錢湯に誘つても、決して彼の應じたことのなかつたのを思ひ出しました。「かうなると、疑ふ餘地などなくなつてしまつて、慰めてやりたい心で一ぱいだつた」と、Mの弟は兄に報告してゐます。

こゝで問題は一轉して、婚約の破壞に對する責任をMの弟が一身に負はなければならない羽目に立ちいたりました。妹を失望させ悲しませたことが第一、次に前にあつた緣談を拒絕させ、父に反いて妹を呼び出したこと、それから兄に對しても差し出がましい態度を取つたこと等々。すべてが不結果になつて見れば、それらの原因はみな自分が作つたのだと、Mの弟は考へたらしいのです。さういふ突きつめた氣持になるのも無理のないことではありませうが、死をもつて、その責任を決濟しなければならぬとは、どうしても私には考へられません。

彼の父がたとへいかに頑固で、いかに嚴格であつたにしてもまだ青年である我が子の世俗的過失を許さないといふことはありますまい。いはんや、彼の兄は無論のことです。しかし、かういふことは大ざつぱな常識的推理のみでは斷ぜられません。一つの悲しい結果に逢着した時に、よくその周圍の者は、死ぬるまでの覺悟でゐたのなら、あゝもしてやればよかつたに……と譯のないことのやうにいひます。あなたも知つてゐられる、あの大學教授の息子が、東京の白山藝妓と琵琶湖で情死したこ

とがありましたね。あの時も、死體を受取りに來た老教授が、眼鏡の玉を拭き〳〵申しました。「今の青年の心は私どもにはわからない。かうしてくれと打ち明けて話せば、親はそれほど頑固なものではないですよ。私は子供の死を見るよりも、大學教授の肩書を捨てゝ、子供に藝妓を妻にすることを許したでせう。」――これも、やはり後の祭でした。教授の肩書と藝妓上りの嫁とを天秤棒にかけるやうな人が、果してさういふ寛大な心になり得たかどうかは疑問ですが、こゝでも、「まさかそんなことを…………」といつたやうな、見くびつた上層判斷が禍ひのもとだつたのです。

Mの弟の場合でも、彼の苦惱は潛行的だつたでせう。誰一人彼の眞の心持をつかむことは出來なかつた。彼もまた人に話して解決のつく問題であるとはしないで、たゞ一人暗がりの中に喘ぎ〳〵自分の世界を掘つて行きました。現實の鬪爭の壓迫が息ぐるしくなつて、現實の境界線がだん〳〵狹められれば狹められるほど、自己を主體とした純一無雜の生命の世界は、反對に明るく廣く永遠に擴大されて行く、これが自殺者のたどる心理だといひます。Mの弟は苦しみぬいたあげく、やはりその道の方へ一人の妹を道づれにして、魂を抱き合せて進んで行つたことでせう。

その妹は、兄のMの口からいはせると、「謎の女性」でした。結婚といふものについても、さほど興味も新らしい希望をも持つてゐなかつたやうです。たゞ父や兄の經濟的庇護から早くのがれたいといふ考へが、結婚へと急がせたらしいのです。彼の女は年の若さにも似ず、朗らかな心で聲高に笑つたことも、胸を打ち割つて話すといふこともありませんでした。Mの一家が夕食後にゆつたりと話し合ふ時でも、彼の女だけは一座からはなれて、默つて壁の筋目を見てゐました。一度だつて、自分の甥である赤ん坊をあやしたこともありません。郵便配達夫は、紙人形のやうな娘が夕暮の門に立つてゐるのをよく見ました。それが彼の女でした。Mはかういふ妹であるから、よけいにふびんに思ひました。何とかして彼の女の意志を聞いてやらうと、問を重ねれば重ねるほど、石のやうに默つてしまひます。Mの方で腹を立てゝしまひます。だが、沈默の塊の中から、彼の女が顏を上げて、チラリと兄の眼を見ます。「兄さん、いはなくたつてわかつてゐるでせう」といふやうに。Mはぎくつとして身を引きます。その顏が、彼の女の死ぬる際の顏ではなかつたか、Mはさう思へてならないといつてゐます。

ある時、Mの妻が同性の溫かい理解のある心で、結婚問題について彼の女に話しかけました。「姉さん、心配しないで下さい。私は兄さん達のいふ通りになります、兄さん達はお父さんよりも私の心をよく知つてゐてくれると思つてゐますから。そ

れに私は生れてから幸福といふものを知らない女なのですから、今更幸福を求めようなどとは思ひません。結婚が幸福であつても、不幸であつても、私には同じことなのです。……」

かう答へて、彼の女は嫂を呆然とさせました。

かうした妹でしたが、相手の青年がかういふ理由で破約して來たといふ話を聞くと咽び泣きに泣き入りました。さうはいつても、結婚に何かの希望をつないでゐたのに相違ありません。それは絶望の悲しみだつたことは明かです。それになほ、彼の女の未知の世界——神の悪戯である人間の生理上の缺陷、怪奇な恐ろしい一つの實在が、性的生活にはまだ幼稚である彼の女に激しい衝撃を與へたことでせう。不幸を背負うて生れた女には、悪魔がまた同じ運命の男を誘うて、からかひに來ると思ふたかも知れません。それとも、彼の女はすでにその青年に戀愛を感じてゐたのでせうか。

私の友人に、見合ひ結婚をした男があります。婚禮間際になつて、邪魔が入りました。君の結婚しようとする女は僕の親友の女なのだから、思ひきつてくれといつて、一人の男が嘆願に來ました。すると、私の友人は、或はさういふ關係があつたかも知れないが、二三度逢つてゐるうちに、僕もその女に戀して來たから、本人が嫌だといはぬ以上、結婚は斷念しないといつてはねつけたものです。かういふ實例もあることですから、Mの妹の場合だつて、彼の女は戀愛については全く白紙だつたと斷定出來るものではありません。

社會部長さま。

コーテーションのみによつて、事實の輪廓を浮き出させることの困難をしみ〴〵と知りました。鋭敏なあなたのことですから、どこまでが私のノォトで、どのあたりが私の臆測であり、私の詠嘆であるといふことを察知されるでせう。しかしこれから書くところは、この眼に燒きつけた影像なのですから、さう水つぽくはないだらうと思ひます。

四

社會部長さま。

私達の自動車は、海岸線に沿うて白いドライヴ・ウェイを走ります、かなりのほこりを立て〳〵。右方の緑の半島は、よく耕されて、山の中腹まで畑の縞目を見せてゐます。そこから名産の西瓜や新鮮な野菜類が和船に積まれて、この港の市場の朝を色どるさうです。海岸の埋立地には、住宅會社がクリスマスのお菓子の家のやうな小別莊を建ててゐる。そこをはなれると一面の萱の原で、葉はもう強ばつて、五月の頃のうぶな緑の流れは味はれません。

いつしか自動車は鐵道線路を突き切つて、山の方へと目ざし

てゐます。いづれは別莊でせう、新築の家がちよい〱畑中に見られます。そこには山から湯を引いて、自家用の溫泉を設らへてあるのださうです。海へも遠くないから、海水着が干してあります。何といふ、丈の高いカンナでせう、南國の夏の光を力一ぱい吸つて、深紅の花瓣を唇のやうにそらしてゐます。一と夏をこんなところに寢ころんで暮らす家族もあるのです。昨日までタキシーの流れを縫うて、街頭を驅けずり廻つてゐた汗臭い男が、そこを通りかゝつてゐるんです。何とか考へようではありませんか。

タイヤの音におどろいて、蝗が溝の草かげからぱつと飛び立つ。だん〱山に近づいたので、溝の中からは湯氣がもう〱と沸いてゐます。流れる音も、湯の音だ。溫泉地、溫泉地。

運轉手は私達の旅の目的は何であるかは知つてゐるはずなのですが、つい遊覽客案内の癖が出て、ハンドルを廻しながら、山麓の宏壯な建物の方に眼をむけて、あれが陸軍の療養所だとか半官半民會社の社員クラブだとかいつて敎へます。その療養所には、私の知つた幹部候補生が收容されてゐたことがあります。彼は大學のラグビー選手でしたが、あの猛烈な競技のために脊椎を痛めて、入營はしたが背囊も負はれぬ始末に、とう〱そこへ追ひやられました。私も今ではブルジョアの仲間入りをしてゐますなど〻、彼は繪ハガキを寄越したこともありましたが、なるほど〱とうなづかれます。

自動車は坂路を上つて行つて、村落やゴミ〱した鱗のやうなB市の市街、その向ふに藍色に刷かれた灣、岬の上の精煉所の煙突までが一と目に見わたされると思ふと間もなくカーヴになり、山の懷ろのやうなところに入つてしまひました。私たちの第一の目的地に着いたのです。私でさへ、「いよ〱こゝか」と下車する際に足に力が入らなかつたのだから、M兄弟の鼓動は俄に高まつたことでせう。

自動車を待たせて、私達はそこから細い側路へ下りて行きました。共同墓地はすぐ目の下に、いも畑につゞいた荒蕪の一地域でした。

本署からの命令で、駐在所の巡査がもう來て待つてゐてくれました。警察を通じて、村の葬儀屋へも依頼しておいたので、葬儀屋も四人の人夫を連れて來てゐました。私達の眼を最初に射たのは、荒繩でしばられた二つの新らしい寢棺と、銀と白と靑との粗末な造花——蓮華の一束とでした。人夫たちは四挺の鍬をそこらに投げ出して、樹かげに寢轉んで、笑ひ話しをしてゐました。

私達が一應巡査に挨拶をしをはると、待ち構へてゐた人夫達は、それ〱鍬を取つて、すぐ仕事に取りかゝらうとするのです。少くとも私は、一と息入れたい、煙草に火をつけて落ちつ

きたい、とおもひました。M兄弟も同じ思ひであつたにちがひありません。しかし私達はそのひまもなく、ずるずると人夫の方に引かれて行きました。

こゝは共同墓地といつても、村の人を埋葬するところではありません。行路病者や自殺者や、身許のわからない他國の者が假りに葬られたまゝ、永久の安息所とするところです。そここゝに、土が盛り上つて、雜草がまばらに生えてゐる。塔婆一本も立つてはゐない。Mの弟と妹とは、どこに埋めてあるのか。えらい遠方へ來て、假りの寢床を求めたものだ。

人夫の群は自分達の丈よりも高い萱の叢の中に押し分けて行きました。そこが、新たに開拓された埋葬地なのです。萱の葉のざはつく音がします。鍬を打ち込む音が聞えます。M兄弟はその中に影を沒してしまひましたが、私だけはそこへ近寄る勇氣が出ません。Mはさぞ私の友情を疑ふことでせうが、私は心で詫びることにし、死者に對しては合掌して眞言宗のお經の一とくさりを唱へることにしました。

社會部長さま。

笑つてはいけません。私の祖父は非常な信心家で、また大酒家でしたが、いかに大醉した夜でも、寢床の中で光明眞言を繰ることだけは忘れませんでした。あの熟柿臭いといはれる、あの何ともいはれない息を嗅ぎながら、私は幼い時祖父に抱かれて寢たものですから、光明眞言は私の子守唄でした。そして、いつの間にやら、それを覺え込んでしまつたのです。それからまた、わけのわからぬ經文をも丸呑みにしました。忘れつくしてゐた祖父の讀經の妙な音調が、私の頭の中に蘇へつて來ました。

私はふと扇子を使ふ音を聞いて、あたりを振り返りました。夏羽織を着た中年の實直らしい人が立つてゐました。

「お若いのに、惜しいことをしましたな。お心落しでせう」

「え、ありがたうございます」

この人は村役場の吏員で、立會に來たのでした。

私はこの人と悔しみを破らない程度で話し合つてゐる間に、たへがたい日光の直射を感じました。足もとには、一面に蔽ひかぶさつたいもの葉の照り返しが燒けつくやうです。前にも後ろにも、森林帶らしい濃緑色の傾斜が迫つてゐるのですが、正午近い太陽はこの山間の空地を目がけて、強烈な光線を注ぐのです。暑さを避けるためには、畑を縁どつた山際まで退ればわけのないことでしたが、私も吏員もそんな無作法な眞似は出來ませんでした。

私は向ふの山裾の灌木の間に交つて咲いてゐる鬼百合を見てゐました。それは野生とは思はれぬほどに、すくすくと高く、數多くの花をつけてゐます。私の故郷の路には、秋になると彼

てゐます。いづれは別莊でせう、新築の家がちよい〳〵畑中に見られます。そこには山から湯を引いて、自家用の溫泉を設らへてあるのださうです。海へも遠くないから、海水着が干してあります。何といふ、丈の高いカンナでせう、南國の夏の光を力一ぱい吸つて、深紅の花瓣を脣のやうにそらしてゐます。一と夏をこんなところに寢ころんで暮らす家族もあるのです。昨日までタキシーの流れを縫うて、街頭を驅けずり廻つてゐた汗臭い男が、そこを通りかゝつてゐるんです。何とか考へようではありませんか。

タイヤの音におどろいて、蝗が溝の草かげからぱつと飛び立つ。だん〳〵山に近づいたので、溝の中からは湯氣がもう〳〵と湧いてゐます。流れる音も、湯の音だ。溫泉地、溫泉地。

運轉手は私達の旅の目的は何であるかは知つてゐるはずなのですが、つい遊覽客案內の癖が出て、ハンドルを廻しながら、山麓の宏壯な建物の方に眼をむけて、あれが陸軍の療養所だとか半官半民會社の社員クラブだとかいつて敎へます。その療養所には、私の知つた幹部候補生が收容されてゐたことがあります。彼は大學のラグビー選手でしたが、あの猛烈な競技のために脊椎を痛めて、入營はしたが背嚢も負はれぬ始末に、とう〳〵そこへ追ひやられました。私も今ではブルジョアの仲間入りをしてゐますなど〻、彼は繪ハガキを寄越したこともありましたが、なるほど〳〵とうなづかれます。

自動車は坂路を上つて行つて、村落やゴミ〳〵した町のやうなB市の市街、その向ふに藍色に刷かれた灣、岬の上の精煉所の煙突までが一と目に見わたされると思ふと間もなくカーヴになり、山の懷ろのやうなところに入つてしまひました。私たちの第一の目的地に着いたのです。私でさへ、「いよ〳〵こゝか」と下車する際に足に力が入らなかつたのだから、M兄弟の鼓動は俄に高まつたことでせう。

自動車を待たせて、私達はそこから細い側路へ下りて行きました。共同墓地はすぐ目の下に、いも畑につゞいた荒蕪の一地域でした。

本署からの命令で、駐在所の巡査がもう來て待つてゐてくれました。警察を通じて、村の葬儀屋へも依賴しておいたので、葬儀屋も四人の人夫を連れて來てゐました。私達の眼を最初に射たのは、荒繩でしばられた二つの新らしい寢棺と、銀と白と靑との粗末な造花――蓮華の一束とでした。人夫たちは四挺の鍬をそこらに投げ出して、樹かげに寢轉んで、笑ひ話しをしてゐました。

私達が一應巡査に挨拶をしかはると、待ち構へてゐた人夫達は、それ〳〵鍬を取つて、すぐ仕事に取りかゝらうとするのです。少くとも私は、一と息入れたい、煙草に火をつけて落ちつ

きたい、とおもひました。M兄弟も同じ思ひであつたにちがひありません。しかし私達はそのひまもなく、ずる／＼と人夫の方に引かれて行きました。

こゝは共同墓地といつても、村の人を埋葬するところではありません。行路病者や自殺者や、身許のわからない他國の者が假りに葬られたまゝ、永久の安息所とするところです。そこここに、土が盛り上つて、雜草がまばらに生えてゐる。塔婆一本も立つてはゐない。Mの弟と妹とは、どこに埋めてあるのか。えらい遠方へ來て、假りの寢床を求めたものだ。

人夫の群は自分達の丈よりも高い萱の叢の中に押し分けて行きました。そこが、新たに開拓された埋葬地なのです。萱の葉のざはつく音がします。鍬を打ち込む音が聞えます。M兄弟はその中に影を沒してしまひましたが、私だけはそこへ近寄る勇氣が出ません。Mはさぞ私の友情を疑ふことでせうが、私は心で詫びることにし、死者に對しては合掌して眞言宗のお經の一とくさりを唱へることにしました。

社會部長さま。

笑つてはいけません。私の祖父は非常な信心家で、また大酒家でしたが、いかに大醉した夜でも、寢床の中で光明眞言を繰ることだけは忘れませんでした。あの熟柿臭いといはれる、あの何ともいはれない息を嗅ぎながら、私は幼い時祖父に抱かれて寢たものですから、光明眞言は私の子守唄でした。そして、いつの間にやら、それを覺え込んでしまつたのです。それからまた、わけのわからぬ經文をも丸呑みにしました。忘れつくしてゐた祖父の讀經の妙な音調が、私の頭の中に蘇へつて來ました。

私はふと扇子を使ふ音を聞いて、あたりを振り返りました。夏羽織を着た中年の實直らしい人が立つてゐました。

「お若いのに、惜しいことをしましたな。お心落しでせう」

「え、ありがたうございます」

この人は村役場の吏員で、立會に來たのでした。

私はこの人と悔しみを破らない程度で話し合つてゐる間に、たへがたい日光の直射を感じました。足もとには、一面に蔽ひかぶさつたいもの葉の照り返しが燒けつくやうです。前にも後ろにも、森林帶らしい濃綠色の傾斜が迫つてゐるのですが、正午近い太陽はこの山間の空地を目がけて、強烈な光線を注ぐのです。暑さを避けるためには、畑を緣どつた山際まで退ればわけのないことでしたが、私も吏員もそんな無作法な眞似は出來ませんでした。

私は向ふの山裾の灌木の間に交つて咲いてゐる鬼百合を見てゐました。それは野生とは思はれぬほどに、すく／＼と高く、數多くの花をつけてゐます。私の故郷の谿には、秋になると彼

岸花が、毒々しいが美しく、田の縁を染めて眞紅に咲きます。

ふと、それを思ひ出しました。

この時、鍬の先の強く物にあたる音がしました。人夫たちのわめく聲。私の注意はむしるやうにその方へ振り向けられました。乾いた荒土の土ほこりが、草叢の中からむく〳〵と立ち上ります。あゝ、もう、いたましい場面の開展するのも間もないことでせう。

それは、鍬で打たれるむざんな棺の音でした。めり〳〵と棺の蓋の裂ける音でした。私の兩手は、はたと耳を掩うてゐました。指先にしびれを感じました。咽がぐきつとつまりました。靴足がいも蔓に取られさうでした。

と同時に、何とも形容の出來ぬ、泣き叫ぶ聲が起りました。號泣です。それはから〳〵に乾いた空に、樹木の欝茂した四邊の山々に、谺をよんで響きわたりました。私はかういふ痛切な嘆きの聲をいまだかつて聞いたことがありません。Mの末弟が棺の蓋が開くと同時に、空を仰いで悲嘆したのでした。たとへ母親を異にしても、兄弟の情に變りのないことをつく〴〵と感じて、私は五體の底までもゴリ〳〵と掻き廻はされました。

思はず馳けよつて、萱の葉をかき分けた私の眼に、土まみれの一つの寢棺の中に、折り重なつた死體の一部がはたと映じました。太い堅縞の明石の着物！もうそれだけで、私は後へよろめきました。

Mとその弟の涙と汗に濡れた顔は、土ほこりで赤茶けてゐました。堪へられぬ臭氣で、私はハンカチで鼻を掩ふたのは、それから餘程あとでした。

兄と妹との死體は、人夫の手によつて、別々の新らしい棺に納められました。私は山の裾まで行つて、手當り次第に百合の花をへシ折つて來て、一と抱えの花をMに手渡しました。Mはそれを等分して、棺の中を飾りました。これが彼のせめてものの手向けでした。

やがて、私達は小さな谿流に下りて、手を洗ひ顔を洗ひ、やつと淸々した氣分になつたのです。だが、M兄弟は一言も語りません。

棺は間もなく人夫達にかつがれて、村の火葬場へ。私達は立つて目送しました。木蔭の路に、白布に掩はれた棺は消えて行つた。蕭條たる野邊送りです。私達は、これから駐在所へ行つて、遺留品を受取り村役場で火葬許可證をもらひ、更に例の溫泉宿を訪ねて挨拶をして來なければなりません。それから火葬場へ急ぎます。

五

社會部長さま。

K地獄といふのは別に取り立てゝいふほどのこともないB溫泉めぐりの中の一名所なのです。それは名所といふもおかしい位で、足もとの蟹の穴ほどの穴から湯氣が噴出してゐたり、一坪ほどの窪みの中に、泥土がふつ〳〵とたぎつてゐたり、遊覽客はそれを不思議な自然の現象として見て廻るのです。もちろん、入場料は取られます。そして、道ばたの穴の蒸氣でうでた玉子を買はせられたり、非美術的の繪ハガキを押賣りされたりします。

そのすぐ側に數軒の溫泉宿が立ち並んでゐるが、古びた建物で、さびれきつてゐます。物好きな客か、病人ででもなくては、こんな所へは來ないでせう。たとへば、宿の二階からはつい近所の農家の裏庭が見えて、大きな柿の木には青い實が鈴なりになつてをり、その陰に牛小舍があつて、あの特有な、むれるやうな臭氣が流れて來ます。また井戸端の絲瓜棚の下では、腰卷一つの女が洗濯をしてゐます。かういふ野趣的景物は都會人にはめづらしく、下の街の溫泉宿よりも、この方が原始的で安易で、ほんたうの避暑にはなるかも知れません。そしてこの高臺は南の方に向つて開いてゐますから、森閑とした山間ではあるが、汽車の汽笛の音もかすかに響いて來るし、下界の市中生活とも多少の交渉が感ぜられます。

Mの弟は死場所としてはよい隱れ家をえらんだものです。

彼の泊まつたのは、これらの宿の中でも最も高等な部類の一軒でした。私達がそこへ靴をぬぐと、宿の者はそれと察して、Mの弟妹が最後の場所としたその部屋へ通してくれました。みしり〳〵と廊下を渡つて行くと、六疊敷ぐらゐの離れにつきあたりました。二方の障子が開け放たれて、石炭酸のにほひがぷん〳〵と匂ふ。傳染病患者がゐたわけでもないのに、かうして消毒されてゐるところを見ると、宿の者はこの部屋で起つた凶事を恐ろしい惡疫を、藥でもつて追つ拂ふつもりだつたのでせう。

私達三人はそこに座を占めましたが、何となく薄氣味わるく感じました。疊の上にも床の壁にも、何の影をも見ることのできない、明るい晝中ではありましたが、動くもの、聲するものが、どこかにあるやうに思はれてなりませんでした。

私は一方の障子の外を見ました。廣い池が明礬色の水を湛へてゐました。崖には臭木が深々と茂つて、空の色と一しよに影を落してゐるが、その莖に紫色をおびた白い花の死骸の群れが水際に一列に吹き寄せられ、たまたま水面にこぼれ落ちる花をごぼ〳〵と音を立て、鯉が呑むのです。時にはすばらしい音を立てて、鯉が跳ね上ります。私はM兄弟の注意をもその方に向かせて、しばらくこの光景に心を移してをりました。

茶をくみに來た女中が、悔みをのべて、死んだ泊り客の話を語り出しました。この女中も二人が兄妹だとはいつたが、よも

やと思つてゐた風でした。

「ほんたうの御兄妹でございましたか？兄さん、兄さんとおつしやつて、ちようどお亡くなりになる夕方でございますよ、お妹さんがあのお稲荷さまのところからお呼びになつて、二人揃うて大きな聲で樂しさうに唱歌をおうたひになりました。私どもは、お仲のいゝことだといつて、羨やましがつたのでございます。それがその夜、あんなことになりませうとは？お二人とも氣ぶりにもお見せにはなりませんでした。……」

女中はかういつて、涙をふきました。Mの弟もうつむいてしまひました。

女中の指さした崖のずつと上には、稲荷の祠があつて、小さい赤の鳥居が幾つも〳〵、傾斜をなして列つてゐました。あの高い所から、宿の浴衣を着た妹のこゝへ呼びかけた姿がありありと浮び出ます。耳の底に、何の歌であつたか、リズムを立てて遠鳴りに鳴ります。

Mは忘れてゐたものを思ひ出したやうにして、さつき駐在所で受取つたスート・ケースを開けにかゝりました。私もその中が氣にかゝつてゐたのです。しかし、雑誌が二三册と、手提げ袋と聽診器一つ、それにこま〳〵したものがあるばかりでした。

Mも私も必ず遺書があるものと思つて、鞄をはたくやうにして探したのですが、それらしいものは見當りません。では、制服のポケットにでも入れたまゝになつてゐるのではないかと話したことですが、やがて雑誌と一しよになつてゐる一册の筆記用ノートを見つけ出しました。

それでした、それでした。三人は頭をこすりつけるやうにして、ノートの上にのしかゝりました。新らしいノートの第一ページには、鉛筆の見取圖が現れました。無氣味な「死の床」のスケッチです。ノートを開いてゐるMの手がぶる〳〵とふるえました。

二つの床はL字形に敷いてあつて、蒲團の上には藁人形のやうな形の人間が寢てゐます。そして頭と頭を突き合せて、その枕元には、それ〴〵位置を示して、畫でなく文字で、煙草盆、水差し、ハンド・バッグと書いてある。ハンド・バックを枕元に置いてゐるのが妹であることは、いふまでもありません。兄の方は夕食の膳に一本の酒を求めたといふことですから、へいぜい酒を飲まない彼は、醉ひもし渇をも覺えて、水差しを運ばせたのかも知れません。

このプリミチーヴの畫は、この部屋を死の床としたものゝ、最後の自畫像なのです。私達は或る力が室内を見廻はさせるやうに、無言で迫つて來るのを感じました。――それにしても、彼が自殺の直前において、部屋の見取圖まで書かうとする心境にあつたことが、私を一層恐れさせ、また悲哀させました。

次のページ、また次のページ。……：

社會部長さま。

ノートを讀んでゆく私の心の衝動は、こゝに書くことをやめます。それよりも直接あなたに讀んでいたゞくことにしませう。

僕は遺書なぞかく意志は少しももたなかつた。死の理由を他人に告げる必要がどこにあるだらう。死ぬる者に取つては、默つて地球の表面から消えてさへゆけばそれでよいのだ。それが一ばん靜かで、また最も自分をして死をたのしましめることになるのだ。

友人へも、兄弟へも、親へも、誰にも書かぬと決心した。だが、今となつては、それらの僕の決心は非實際的のものだつた。かういふ場合には、人間はいはずにはゐられない、書かずにはゐられない。

僕はかく。僕自身が毒を飲む前にかく。毒を飲んだのちでも、意識があれば書きつゞける。

妹はもう冷めたくなつてゐるのだ。

お前の死顏、いやお前のやすく〳〵と眠つてゐる顏を見ると、兄の心は波を打つ、悲しみがこみ上げてくる。

なぜ僕はお前を死なしたか。お前は兄よりもまだ若い。活かしておけば、生きてゆけるお前だつた。不運な女、かあいさうな妹よ。誰も泣いてくれるものがないのだから、今兄があとからお前に追ひすがつてゆく兄が、泣いてやる。

ぐちだ、ぐちだ。

お前はあれほど死を待ちこがれたではないか。兄とならば死を生きること以上に愉快がつたではないか。

僕が注射器をお前の白い腕の青い靜脈の上にあてがはうとした時に、お前は「兄さん、早く〳〵」といつた。僕の手もとがかへつて狂ひさうだつた。

僕はお前の若さを永久に美しくしてやるために、また僕がお前のそばで樂しく死んでゆくために、お前の死顏に化粧をしてやる。お前の使ひなれたコムパクトを取り出して。

きれいになつた、生きてるやうだ。紅をもつけてやるぞ。

氣になるのは、この小さな鏡の上に、お前の指紋が殘つてゐることだ。これだけは活きてゐる。消さうか、とは思つたが活かしておくことにした。僕の聽診器にも、僕の指紋が殘つてゐるのだから、これだけは活かして置かうではないか。

僕たちは夕食の時に少しばかりの酒を飲んだ。妹には僕がすゝめて飲ませた。食後は部屋にこもつてばかりゐた。妹には死んだ母の話を聞かせてやつた。それからわれ〳〵の幼い

時のおもひで、それも愉快だつたことばかりを語り合つた。うつとりした。

妹は眠い〳〵といひ出した。僕は眠らしておいて注射を試みようと思つたが、氣丈夫な妹をだまし討にするやうになつてはすまぬと考へてやめた。

時間が早くたつ。時が僕たちの死を急ぎ立てゝるやうだ。十二時が打つた。妹が急ぎ出した。

僕は用意しておいた○○○○○の致死最少量××を溶いた五瓦(二十五分の水)を先づ妹に注射した。妹は恐ろしいほど落ちついて、眼を閉ぢたまゝじつと仰向けになつてゐた。僕はその手を取つて、靜かに脈をみてゐた。

少しばかりの醫學の知識が、僕を極度に冷靜にした。試驗臺にある妹もまた驚くべきほど冷靜だつた。

内服の場合は、十五分乃至三十分にして症狀が現れるといふことだが、注射の場合には、五分、いやそれよりも早かつたであらう。妹の皮膚は、まるで酒に醉ふたやうに、見る〳〵うちに眞赤になり、汗ばんで來た。

僕は彼の女の精神が發揚狀態にあることを認めた。注意も動作も漸次利かなくなりつゝあることを察知した。妄想や幻像が彼の女の腦裡を虹の如く渦の如く急轉してゐるやうに思へた。

僕は乾いたタオルで輕く妹の額の汗を拭き取つてやつた。そして、いつた。

「すぐだ、すぐだ、安らかに、安らかに、兄さんも、今あとから行くよ」と。

熟睡が來た。失神が來た。もう、いかにしても彼の女を醒ますことはできない。皮膚は冷めたく、蠟のやうに白くなり顏はだん〳〵紫色に變つて來た。

いよ〳〵末期が來た。脈搏も弱い、呼吸はしばらく止まつて、また大きな息をした。それがだん〳〵小さく淺くなつて、來て、また止まつた。シエイヌ・ストークス型である。

僕は電燈の紐を下げて、妹の瞳をじつとのぞいて見た。小さく小さくなつてゐた。體溫が急に下つて、遂に呼吸ははたと止んでしまつた。

この時、僕は俄かに寒さを感じた。それはもうこの世界に僕一人が殘されたと思つたからだ。

泣くべきはずの僕は泣かなかつた。何の苦痛もないらしく死んで行つた妹が羨ましかつた。それからまた僕は科學に感謝した。僕は乏しい知識によつて、これまでしば〳〵死の實驗を動物に行つたのであるが、遂に人間に試みて成功した。

僕自身が滿身に冷汗をかいてゐることがわかつた。それを拭き取つてから、コップに一ぱいの水を飲んだ。

端座して、妹の冥福を祈つた。
次はいよ〳〵僕の番だ。
妹にも家を出た時の着物に着かへさせて、ちやんと帯をも結ばせて死なしたのであるから、僕も制服を着る。僕らの死體を片づけてもらふ時に、ぶていさいであつてはいけない。

宿の御主人へ。座敷を汚して相すみません。偶然がこゝを死場所に選ばせました。おゆるし下さい。宿料はガマグチの中から取つて下さい。

卑怯な僕だ。僕は今はのきわになつて、自分で自分に注射する勇氣がない。妹に注射を試みた時のやうに、さうした張りつめた心で死を見守ることは、もう二度とはできさうもない。
注射はやめる。定量を服用する。
では、…………
眼が見えなくなり、耳が聞えなくなつてから、どれくらゐ時間が經過したらう。時計は見たくない。
覺めて來た。恐ろしい。もう一ぷく定量を。藥はこれきりだ。

どうぞ、どうぞ。…………
ああ、また覺めた。汽笛が聞える、鷄の鳴聲が、鯉がとぶ音。
妹は先に殺した。このまゝ僕が生き返ることはできぬ。
最少量〇・×、普通量〇・×――〇・×。
すでに〇・×を服用した。なほ覺醒する。どうしたことだ。皮下注射と内服の場合とは、こんなに效果がちがふのか。定説と實際とは異る。こゝに書きのこす。多少の參考……
醫學の學徒として、はづかしい。やむをえぬ。かうなつては、かうなつては。
聴診器のゴム管で、
縊死する。……さ、よ、な、ら。

社會部長さま。
遺書はこゝで終つてゐました。最後は字が亂れて、力も弱く心の混亂が千鳥足のやうに印せられてゐました。切斷したカーボン線の尖端に、ほの青く閃めく弱い〳〵電光の粉末のやうに、遺書の文字はそこで消えてしまつたのです。
誰へとも宛名のない遺書！それを讀む肉身の兄や弟の心……

してやつて下さい。

六

社會部長さま。

明日の早朝、Mの父親が汽車でこの地に着くのを待受けて、私達は背上げに行きます。それから今度は汽車で歸るつもりです。

歸ると、きつと彼を――Mの妹に結婚の破約をした青年を私は訪ねてやります。殘された謎のカギは、或は彼が持つてゐるかも知れません。新聞記事を作るにしても、私がこの男への訪問を忘れて來たなら、あなたはきつと怒られるに相違ありません。

夏の日が暮れかゝります。また繰りかへしますが、夕風にほてる海岸街の署さはありません、全くの無風ですから。狹い街路に、軒並みの宿屋の男が打水をはじめました。子供だちが店先に造つた箱庭のおもちやの家に灯を入れました。小さい噴水がきら〳〵と光つてゐます。

私はさうした光景を宿屋の二階から眺めてゐるところです。すると、街のあちらから三味線と歌聲の流して來るのが聞えました。

「おい、Mよ、やつて來い」

私は氣の靜してゐるMを、少しでも引き起たせてやらうと思つてよびました。M兄弟はやつて來て、欄干にもたれて、ぼんやり見下ろしました。

三味線をひいてゐるのは、手拭をかぶつた婆さんでした。二人の小娘――大きい方が若衆姿、小さいのが振袖姿で、せりふを渡したり、踊つたりしてゐます。

どの宿屋の二階からも三階からも、浴衣がけの客が多少の興味をそゝられながら見物してゐます。そして、白銅を半紙にひねつては、ぱら〳〵と投げてやります。一と踊りすんだところで、女の子は小犬が物を嗅ぐやうなふりをして、それを拾ひ上げました。

一人の女の子が、祝儀の集りを婆さんに手渡す前に、すばやくその一つを帶の間にねぢ込みました。これを見て取つた、婆さんは撥でもつて、音のするほどその子の頭を打ちました。子供は泣きもしません。

かういふ女の子は、どこから拾はれて來て、これから先どうなつて行くのだらうと、私は考へました。

「女の子はまつたく生みたくないよ」

これが、Mの言葉でした。

いつしか、また横町で三味線が聞えて、踊が繰返されてゐるやうです。（をはり）

新著月評

最も權威ある批判であり推薦である

杉森孝次郎著
綜合倫理學

長谷川如是閑

『人心も、精神も、社會も存在以外のものではない。感情も、意思も、本能も衝動も想像も自然、廣義の自然の一部、一種以外のものではない。……物の世界と心の世界との間に根本的原則別は勿論ない。人間認識、隨つて社會認識の世界に實驗を原則的に不可能視する、隨つて理想の科學的構成を原則的に嗤笑する心は幼稚なる物心二元觀を反映する』といふ杉森氏の倫理學に於ける立場は、先驗主義的、理想主義的、論理主義的等々の思辯哲學的倫理學の流行する今日の日本に於ては所謂倫理學者の間には餘り歡迎されない性質のものであること疑ひないが、それだけ社會的に十分の存在理由をもつものである。

杉森氏の傾向は、以前は可なりに觀念主義的の、また英雄主義的のそれであつたやうに觀られてゐたが、この『綜合倫理學』に於ては、氏は倫理學の『科學的』方法を高調し、論理主義を排して心理主義をとり、科學者的一元論の立場をとられたことはわれ〳〵の大に敬意を表せねばならぬ點である、而かもそれの基調を生産組織に置いて、道具時代より機械時代への轉化について詳說し、資本主義の發達を生産手段の變化に基け、さうしてそれに對して可なり有力な批判を下してゐることは、氏の倫理學に特殊の地位を與ふる點であるが、氏の倫理學の內容は、氏の方法上の立場、並に氏の根本概念に比べて聊か徹底を缺くやうに想はれるのは遺憾である。

氏は倫理學を『綜合善』の學と定義としてゐるので、やゝ觀念主義のそれに似てゐるやうに見えるが、然し、更らにそれが理想主義哲學者の立場といかに異るかを縷說し、氏の倫理學は『各の一人に於ける、一人としての、諸慾望の綜合的、統一的滿足を、それの價値、條件、可能等のすべての關係にしたがつて、十分に認識する努力としての意味に於ての綜合善の學であるのだ』といひ、且つその善とは『第一に一つの心理的事實だ』と叫んでゐる。その表現は杉森式ではあるが、それは善を心理的事實卽ち慾望充實の一形式と見、その充實が個人的關係に於てゞなく、社會的關係に於けるものが『倫理的善』だといつてゐる。その點はなか〳〵徹底した『實驗主義』立場と見受けられるが、さういふ意味の倫理學であるに拘らず、氏の所謂『個人基準の倫理』に於て『良心』『創造』『進步』『勇』『敬』『同情及び愛』『正』『自由自治及び權利』『責任及義務』其他の從來理想主義倫理學に於て『超驗』的に取扱はれてゐる信仰個條に對する氏の檢討は遺憾ながら、氏の方法論に於て說いてゐる徹底ぶりとは寧ろ一致しないほど『科學的』方法から離れ勝ちである。たとへば『良心』とか『本能』とかいふものに對しても、氏の倫理學は、一般にこれらの用語が使用される場合に豫斷されてゐる何物をか、氏も同じやうに豫斷してゐるかのやうに見へて、充分に『科學的』に說明されてゐない。氏の『方法論』からいへば、先驗主義的の斷定を伴ふ良心とか本能とか意識とか衝動とかいふ語の如きものに對して先づ氏の所謂『科學的』『實驗的』檢討を加へてからかゝられねばならぬ筈であるのに、氏は『良心』とか『理由意識』とか『理由本能』とか『理由

意識化的本能及び衝動』とかいふ甚だ難解の用語をまるで『科學的』に耳馴れた術語であるかのやうに使用してゐるのは『科學的』に親切とはいはれない。

氏が『社會組織の倫理』に於て現代の『機械時代』の組織的缺陷を批判してゐるのは氏の倫理學に於て力のある點であつて、それは批判の方面では可なり有力であるといへる。然し倫理學は氏も行動の科學と稱してゐ、また『將來主義のものだ』と斷じてゐるのであつて、この意味に於ける倫理學の『評』の研究は、要するに實踐的性質のもので、理論と實踐との二言的見地は許されない筈であるが氏は批判的見地、卽ち缺陷の認識に於て優れてゐる割に史的進化過程の意識に乏しい感がある。

氏の立場が、やはり個人的自由主義にあるらしいことは、氏が道具時代の人間的創造を高調し、道具時代の諸原則を、今日の機械時代に『再生産』することが何よりも大切であると主張する。つまり個人的創造が氏の倫理學に於て竊かく高調される所に、氏の以前の英雄主義——氏自身の表現によれば『英雄主義』——の立場が殘存してゐるわけである。倫理學を行動法則の認識の科學とするならば、自由とか創造とかいふ『範疇』はもつと現實的の心理的事實に還元され『理想』は觀念的絕對から、具體的の人間的慾望にまで單純化されれ、行動法則の科學的意識にまで單純化されればならぬのであるか、氏の方法論は、殆んどそこまで行き相な勇氣を示してゐるに拘らず、內容がその勇氣の表現と一致しないのは恐らく、氏の倫理學の將來に於ける發展の餘地を殘してゐるものではなからうかと善意的に推察する次第である。何れにしても形式論理の遊戲以上の意味をもつ倫理學としてわれ〳〵はこの『綜合倫理學』を推薦せざるを得ない。(早稻田大學出版部)

山內得立著
現象學敍說

三　木　淸

我々は山內氏に於て現象學のよき敍述者を期待させられる。氏がこの方面の研究に從事せられるのは十數年來のことであり、また氏は親しくフッサールについて數年間勉強された人であるからである。そこでこの書が出版されるのを知つたとき、我々の期待は甚だ大ならざるを得なかつた。いまそれを通讀することを得て私は、一方では私の期待の滿足せられたことを喜ぶと共に、他方では多少とも失望させられたことを告白しなければならない。

讀者はここにフッサールの現象學の究明に丹念に、周到に解說されたところの勝れた參考書をもつ。敍述は凡て忠實であり、綿密である。說明の仕方はまことに手に入つたものであつて、誰でも著者がこの學に多年習熟してゐる人であるのを感ずることが出來る。從つてフッサールを原書で讀み得ぬ人、若くはこれから讀んでみようとする人に對して、我々は山內氏の著書をよき解說書、よき手引として安心して勸めることが出來る。この點で我々は山內氏の勞を多として感謝すべきである。

然しながら一步を進めて考へるとき、氏のとられた敍述の仕方そのものについて既に問題が起つて來る。その解說の忠實さは原書に對する非獨立性を意味することともなり、從つてフッサールを既に讀んだ者、若くは讀んで相當にこなし得る者は、この書からさほど多くを學び得ないといふ結果になる。著者をして一層自由な獨自な活動をすることを許さなかつたのは、この書物が最初近代社刊行の哲學講座のための講座に書かれたものをもと

として出來たことにもよるであらう。山内氏がフツサールの著作のうちでも『論理研究』を主として敍述されたことは正しきことに相違ない。なぜなら此著作は後の『イデエン』が構成的であるに比して著しく分析的であり、それ故にカント的な構成主義に對して「物そのものへ還り行く」(auf die Sachen selbst zurückgehen)ことを目差す現象學本來の趣旨に一層よく適合してゐると考へられるからである。しかるに山内氏はこの『論理研究』に重きをおかれながら、その解說を見るに、構成的、說明的、理論的であつて、分析的、敍述的、開示的傾向があまりに少くはないかと私には思はれる。簡單に云へば、氏の遣方はあまり理に落ちてゐる。一般に現象學についてはこの學問の本來の性質上「解說」といふことはあり得ず、しかもこれを企てられたところに少くとも山内氏に於ける無理があるのではなからうか。『イデエン』の解說にあり得るとしても、『論理研究』の解說は不可能であらう。私は嘗てハイデツガー教授の處でこの『論理研究』の演習に列したときのことを想ひ起す。教授はこの書物の一定の部分を學生に自宅で讀ませて來ておいて、そこに何が書いてあつたかを問ふのをつねとした。そして學生がその部分の要領を說明すると、教授はいつでも「物はその通りの關係にあるか」と必ず問ひ直した。そして教授は『論理研究』は暗記すべき本でなく、「仕事の本」(Arbeitsbuch)であり、實にその名の如く「研究」であると每時間のやうに繰り返して云つた。我々は現象學とは何であるかと尋ぬべきでなく現象學的に物を見るとは如何にすることであるかを學ぶべきである、と云つてその書を書き始められた山内氏から我々の期待したことは、氏が『論理研究』をもつて仕事し、研究されたことの分析的敍述であつたのである。しかるに我々に與へられたものは「解說」ではなかつたのであらうか。ヘーゲルがその辯證法について考へたやうに、方法の解說でなく方法の遂行のみがそれについての眞の知識を與へることが出來る。

尤もかく要求するのは著者がみづから現象學そのものの立場に立つ學者である限りに於てのみ意味を有することであらう。しからざる場合解說はもとより重要な意味をもつてゐる。しかしこのときには批判の契機がこの解說そのもののうちに含まれてゐなければならない。山内氏は、私自身については今はより多くの關心をハイデツガにつないでゐる、と

新刊紹介

神道の批判(岸一太著)　日本神道の概觀と批判である。(四六判二二八頁、定價一・七〇、東京小石川區江戸川町一八、交蘭社)

唯物史觀(岡田宗司譯)　理論と實踐とによつて全勞働者階級のために革命的マルクシズムを擁護せるメーリングの「史的唯物論に就いて」其他を收む。(四六判一七五頁、定價・七〇、東京牛込神樂町二の一一、叢文閣)

新帝國主義論(不破倫三譯)　ゾンダーの「新ドイツ帝國主義」の全譯、「新ドイツ帝國主義の經濟的基礎」他四章より成る。(四六判二八〇頁、定價一・〇〇、叢文閣)

處世新道(增田義一著)　新時代に適應せる處世道を說く。(四六判四〇八頁、定價一・五〇、東京京橋南紺屋町一二、實業之日本社)

薄暮の都會(廣津和郎著)　大震災後の東京を背景として、享樂的な有閑知識階級の一を描く。絢爛たる内容、洗練された筆觸が心根く。(四六判四五〇頁、定價二・〇〇、東京麴町三年町二、大森書房)

國法及び國法史の研究(中野登美雄著)　行政權に關する諸論說を收む。卽ち「緊急命令の史的淵源」「佛國憲法に於ける統帥權と國務大臣の責任」「憲法と國民外交の保證」「行政權に關する理想型態と實證型態」其他三章。(菊判四〇二頁、定價三・五〇、東京牛込早稻田、敬文堂書店)

云はれる。それにも拘らず我々は氏の書物のうちにフッサールに對する批判の契機が顯はにされてゐるのを見出し得ないのである。氏はフッサールをブレンターノ、ボルツアーノ、トワルドウスキーその他の學者と關係せしめられる。著者のかかる解說によつて讀者は十分に利益を受けるに相違ないが、しかしそれは要するに解說であつて、讀者は現象學が何であるかを知り得ても、現象學的方法の習練を受け得ない。我々は氏が當體的な問題の研究に進まれるや否や、多くの場合現象學的にでなく、純粹論理的に進まれるのを見るのである。

然しながらこのことは恐らく山内氏のためでなく、卻つて現象學がフッサールにあつてもともと純粹論理と最も密接に關係してゐることから由來するであらう。彼はライブニッツの流を汲む人であるが、彼の關心のかかはつてゐるのはつれにライブニッツの謂ふ「理性の眞理」(vérité de raison)であつて、それから區別された「事實の眞理」(vérité de fait)の問題はこれに反して殆ど全く無視されてゐるといつてよい。ここに既に現象學のひとつの限界があり、そしてその點に關して我々はなほフッサールに對するカントの優越を依然として信ぜざるを得ない。固より私の謂ふのは新カント學派のことでない。新カント學派も感性的なもの物質的なもの、事實的なものを顧みないことでは、現象學と同一の轍を履むものである。そしてそこに現代哲學一般に對するマルクス主義的唯物論の批判の契機のひとつがある。

けれども山内氏の著書に於ける學術的なもの、それに關聯する現象學の若干問題を學問的に詳論することは他の場所に讓らう。ともあれ、我々にとつてもフッサールについての我々の見地からの「仕事の本」が邦語によつて現はされたことは大なる喜びでなければならぬ。(岩波書店刊、定價參圓)

世界經濟と金解禁問題

鈴木武雄著

本誌記者

大正六年九月七日、米國が大戰參加と共に金の自由輸出を禁止するや、對印度との取引關係上我國亦同十二日大藏省令第二十八條によつて、金の自由輸出を禁止した。現在論議

祭禮と風俗(中山太郎著)　祭禮を地理的に見た書で、國學の基調をなす神道も祭祀なしには論ぜられないこと、祭祀の統一など沙汰の限りであること、又其必要もないこと、などを讀者はこれによつて暗示される。(四六判一三四頁、定價一・〇〇、東京神田南神保町一四、地平社)

聽けよ人類との聲を!(山本俊一著)如何にせば懷疑なく生活し得るやを目途せるもの(菊判四二一頁、非賣品、東京府下玉川村瀨田上ケ原三一二、山本眞理研究所)

國體起源の神話學的研究(堀岡文吉著)著者は日本古代民族の民俗文化が汎太平洋民族のそれと深い關係を持つて居ると見る一人である。本書は「上津日嗣の原義に就て」「大嘗會式と南方土俗に就て」「神話と土俗」の三篇より成る。(菊判五〇〇頁、定價四・五〇、東京神田錦町三、培風館)

晴れ後曇り(細木原青起著)　大衆味のまされるユーモア文集である。(四六判五〇二頁、豫約品、東京神田表神保町六現代ユーモア全集刊行會)

帝國之前途(大谷光瑞著)　日本を憂ふる倪翁の所說聽くべき所多い。(菊判一四一頁、定價・六〇、東京京橋築地三の一六、大乘社東京支部)

邦譯歌詞問題の前後・轉機・反響篇(永井郁子著)(四六判一五七頁非賣品、東京市外北品川御殿山三一九、頌泉堂)

詩集・日本の胎盤(山戸顯之介著)(四六判

の焦點をなす金輸出解禁の源は乃ちここに發するそして留來この問題未解決なるがために我國民經濟はどの位ひの壓迫を蒙つたか分らない。何故に未解決であらればならなかつたか。また何故に最近殊更やかましくならればならなかつたか。私たちはそこに金融資本乃至産業資本の貪慾に躍る姿、及びこれと或ひは關聯しての帝國主義日本の觸手を見逃すわけにはいかない。

が兎に角、問題は今や「何を」ではなくして「いかに」である。展望すれば米國瑞典英國和蘭瑞西などは既にオールド・パリチーを以て、白耳義伊太利佛國などはデバリユエーションを以て、夫々通貨の安定をはかつた。金未解禁の狀態にあるものは實に西班牙と日本だけである。然らば我國に於ては、金解禁決行方法として舊新平價の何れを擇ぶべきであるか。抑々金解禁の社會經濟的な根本的意義はいかん?

茲に、有産者的のそれと無産者的のそれとによつて大體四種の態度を見ることができる。卽ち、金融資本への打撃を回顧することによつて、又貨幣制度の更改を疑問視することなどによつて、舊平價解禁を主張する自重論者——濱口内閣をはじめ牧野杉山森田などの各新聞經濟部長——不景氣への危惧と卽時斷行とを思念することによつて、特に産業資本を顧慮することによつて、平價切下を主張する人々——石橋小汀山崎の諸氏及政友會はこれに傾く——物價の下落が勞働者、農民、中商工業者に及ぼす負擔を慮り、主として無産階級的見地から新平價解禁を主張するもの——高橋鈴木赤松氏など——及び無條件的デバリユエーションは實質的勞銀の減却を意味し、無條件的平價回復は勞賃の低下を意味するの故を以て共に之に反對するものの、そのいづれかを擇ぶべく強制さるるとき、階級對立をより明白たらしむるために平價回復に贊成し同時に失業其他に對する社會政策的施設を要求するマルクシスト——節田氏など——この四つである。

茲に紹介する本書の立場は、恐らくこの第四のカテゴリイに屬すべきものと思はれるが兎に角、金解禁問題を以て、世界經濟に於ける一般的な或る概要な社會問題として取扱ふて居る所に、たとひもられた材料から古びた感じをうくるにせよ、時代の心臓にふれた生々しい息吹を感得することができる。

六〇頁、定價一・〇〇、東京市外野方町上沼袋七三、詩集社)

不景氣と其根本的對策(田中仁三郎著)(定價・一〇、金澤市上牧野一六、萬國經濟同盟促進會)

或る農夫の家(中西伊之助著)　「或る農夫の家」「農夫喜兵衞の死」「武左衞門一揆」の三篇を收む。共にロシア語に譯されたもののみである。(四六判四七九頁、定價一・五〇、東京牛込山吹町八、共生閣)

善き隣人(村島歸之著)　方面委員の既往十年間に於ける足跡を辿れる「方面委員の足跡」と、方面委員の協力によつて生活の向上を見た人々の實例を示せる「方面委員のカードより」の前後兩編より成る。(四六判三一五頁、定價一・五〇、大阪西町靭上通一丁目、創元社)

世界食糧資源論(賀川、藤田共譯)　コロンビヤ大學の經濟地理學教授ラツセル・スミスの著。現實世界の食糧資源全般を論じてその凡てを科學的に記述討究し、立脚する所マルサスやクロポトキンの如く局部的ならず、所論は而して樂天的である。(四六判六六三頁、定價二・三〇、東京牛込矢來町、新潮社)

西洋十夜(丸木砂土譯)　シユニツレル獨特の繊細嫋々哀切なそしてむせるやうなエロチカル・レヴユーをここに見ることができる譯筆は好當。(菊半截二四五頁、定價一・七〇、東京日本橋本小田原町二三、文藝春秋社出版部)

本書第一篇は即ち、金解禁問題をかかる世界史的問題として把握せる見地を示す一般論である。著者によれば、金本位制恢復の事實は、資本主義的世界經濟の破局的震動狀態より或程度の安定化に至る過程中の一現象であり、隨つてプロレタリアトにとつては、金解禁の問題は全く志向を異にした對立の現象である。——私は然しかかる理論的把握を固執することの、實際的にはいかに危險なものであり、或は無力なものであるかを恐れる。——著者は更に、現代世界に於て恢復せられた金本位制は、戰前の金貨流通本位制とは根本的に異なれる姿容を持つた金爲替本位制度なるを指摘し流通より消滅せる金貨が、中央銀行に集中せられて、世界貨幣の準備金となり、そして世界に於ける其半額をアメリカが占有する事實を示して居るが、この事實は、實に、各國の金解禁がその舊平價によると平價切下によるとを問はず、少くとも金融經濟の關する限り全く米國に隷屬して居ることを示すものであつて、世界貨幣の弗化現象を茲に見る事ができるのである。

第二篇では、デフレーションをとつて整調恐慌をおこせる英國、アメリユエーンションをとつて安定恐慌を起せる獨、潜在的安定恐慌を起せる佛の概況を説き、是らが凡て產業合理化への第一歩であり、資本主義經濟安定化への第一歩であつたにも係はらず、それらの經濟自體に內在する諸々の問題はついに解決されて居ないのを解明し、資本主義を豫兆するとともに暗に日本の狀態を豫定して居る。

第三篇はかかる資本主義世界經濟の安定化に伴ふ必然的傾向としての金本位制への復歸に、未だ合流し得ない日本の、金解禁問題を、史的に明細に敍述したものであるが、第三章「恐慌後に於ける金解禁問題を中心として」が就中興味深い。最後の第四篇は、高橋氏の「金解禁と無產階級」を駁したものであるが理論に於て福本的鋭どさを見せて居りこそすれ、實際的見地より見てそれに幾干の價値ありやは疑問である。かくして、著者は抑々當面の具體的問題としていかに之を取扱はんとするか。金解禁問題に關する大學教授らの無力な解説や沈默乃至理論を私はとらない。關心する所は「いかに」といふ實踐的分野の問題である。(定價一・二〇、新興科學社)

——雨宮——

可感界並に可想界の形式と原理とに就て(武田信一譯)　本書はカントが形而上學に對する豫備學の一つの試みとしてものせるもの。クリチーク・デア・ライネン・フェアヌンフトの萌芽はここに見られる。(菊判一三五頁、定價二・〇〇、東京神田南神保町一六、岩波書店)

近世英文學史(小日向定次郎著)　本書に於ては、紀末文藝を除いての、十九世紀後半の詩、小説、評論壇が一望の下に取扱はれてをり、テニスン、ブラウニング、ディキンズ、サッカリ、メリディス、カーライル、ラスキンをはじめとして當代の人々が靜かな筆を以て平易に學的に紹介解説されて居る。有益と興味とを兼ねたものである。(菊判七〇〇頁、定價六・〇〇、東京神田錦町一の一・文獻書院)

戰爭と硬貨(上山滿之進著)　國勢と硬貨との關係を知るに便利な書物(菊大判三八頁、挿圖一二、定價三・五〇、東京麹町丸ノ內昭和ビル・日本評論社)

支那に於ける農民運動と農業問題(產業勞働調査所編譯)　(四六判二六〇頁。定價・八〇、東京牛込神樂町二の一一、叢文閣)

民謡と新開田(竹見竹雄著)　(ポケット型一七七、頁定價・一二〇、神奈川縣足柄下郡中村、純情詩社)

靑朽葉(窪田空穂著)　國民文學叢書の第十六篇(四六判二八三頁、定價二・〇〇、東京牛込新小川町二の四・神谷書店)

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルディング五八八區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。御註文の際は郵税をお忘れなく。宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

浩壮

――無臭ニンニク錠――

ニンニクの効力は世人のよく知る所、然しその臭氣は十人が九人まで嫌やがる。

効力は認めるが服むのは嫌や、服み度いが服めないと云ふ人は、このニンニク錠浩壮をお用ひ下さい。ニンニク特有の臭氣を無くした所が本劑の特徴で服んだ後も何等口中に臭氣を殘しません。

原料にはニンニクの原質そのまゝに、數種の高貴薬を配し、肺結核、肋膜炎、氣管枝加答兒、喘息、胃腸弱、神經衰弱、貧血症、腎臓病による浮腫、蛔虫條虫の驅除等には驚く程の効力を持つてをります。

定價　十日分　二圓　三十五日分　五圓
送料東京市内十二錢、内地十八錢、領土四十五錢

脚氣特効 純良胚子

脚氣はヴイタミンBの缺乏によつて起ると云ひ米の胚子の中には多量のヴイタミンBを含んでゐると云ふ事を識りながら、純良胚子を手に入れる事が出來なかつた爲に非常に不味い米糠を服むのでなければ、高價な製劑に頼るより外に道がない状態に鑑み、特別な方法で、胚子ばかりを集める事に成功致しました。

脚氣豫防には晒布の袋に入て毎日の飯と共に炊き込めばよく、脚氣に罹つた場合は、一日十匁以上をなるべく少い水で煎じ、其煎汁を一日三回に分け食間に飲めば、大概二週間以内に全治致します。

定　價　半ポンド罐入　六十錢
送料東京市内十二錢、内地十八錢、領土四十五錢

古本賣買のお取次

主として地方在住讀者諸氏の御便宜を計る目的で特設いたしましたのが弊社代理部の「古書案内部」です。どうぞ御遠慮なくどし〳〵御用命下さい。古本御購入のお取次はもとより御賣却御希望の古本古文書、和本、綿繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次をいたします。お問合せだけで御返事いたしかねるやうな種類のものならば、一應御送附下さいますれば早速市内一流の專門家に鑑して正確迅速に評價して御返事を差上げます。

古本賣買お取次規定

(A)紹介は往復葉書又は返信料添付のこと。(B)註文はなるべく振替で、但送品は着金後一週間以内。(C)評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月、發行所、汚損の程度等詳細御報のこと。但古文書、綿繪等の如きは現品拜見の上ならでは正確に評價できない場合がありますからその旨お含みおき下さい。御郵送の場合の送料は申受けます(D)宛名は中央公論社古書案内係と明記のこと。

アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國產第一の優秀品です。

定價　三圓五十錢　四圓　四圓五十錢
(回轉吸入式)　三圓五十錢
送料　内地　十八錢　領土　四十五錢

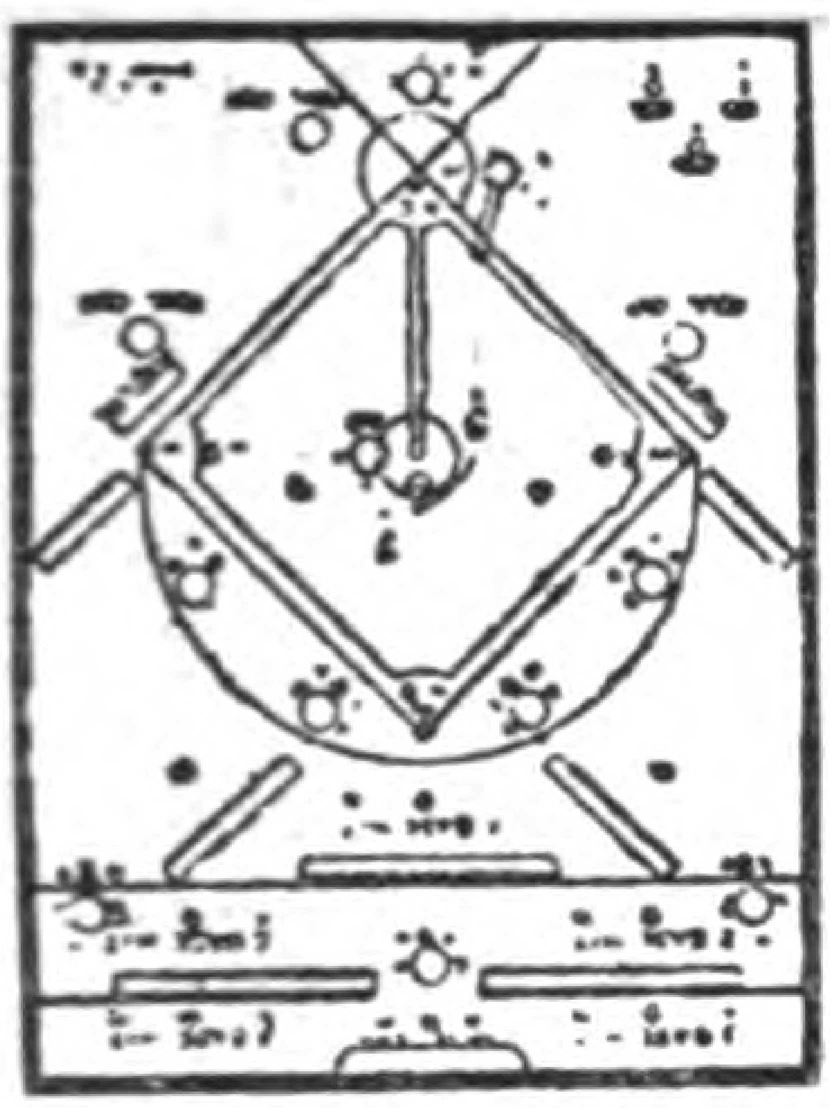
誰にも愉快な
野球競技盤

約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのが、この高樂式野球競技盤です。

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に出す事が出來、打手も亦選手がボツクスに立つた時以上の緊張した氣分で、バツトの振り方で美事本壘打を飛ばす事も出來れば油斷をすれば投手に好く計られて、三振「アウト」にされて了ひます。

實戰に臨む人はもとより、野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戲として、一般の家庭におすすめ致します。

定價　小型　一圓三十錢
中型　三圓八十錢
送料　東京市内十二錢、内地小型は十八錢、中型は二十七錢、領土小型は、四十五錢、中型は五十五錢



ユトマポマード

毛髪の榮養を兼ねた純良なポマードを棒狀輕便な容器につめたものです。使用法は、蓋をとつて、容器から直接に毛髪に塗りつけるだけで、少しも手に脂がつかず使はれた丈の脂は常に表面の網を潜つて出て來る裝置の、一抹の無駄もない至極重寶な殊に外出前の急がしい髪の手入れや旅行先での使用には一層便利を感じます。

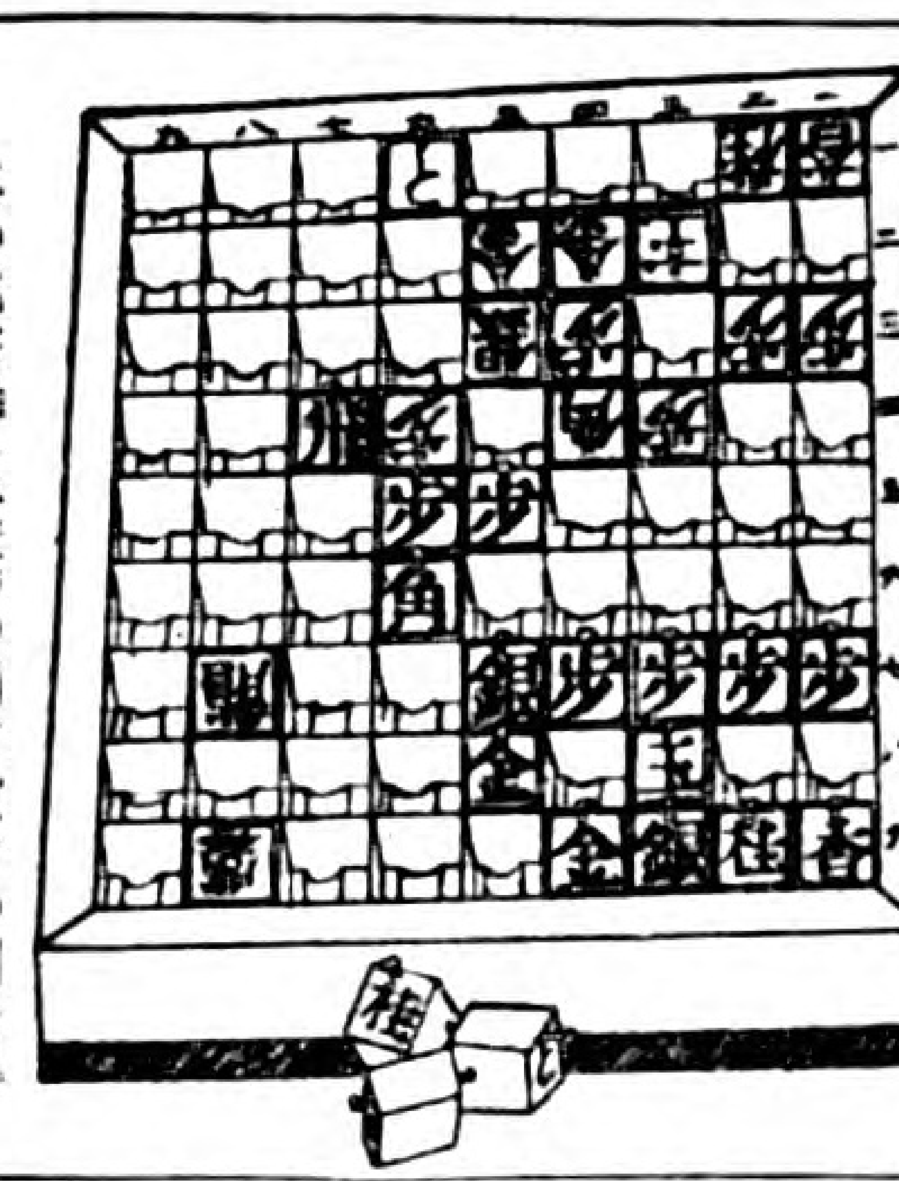
定價　六十錢
送料　東京市内十二錢、内地十八錢
領土　四十五錢

最小型將棊盤

縦三寸七分横三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個蟲針が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。

駒は標準文字を用ひ、盤には縦横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。



其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價(駒全部附)　一圓八十錢
送料　東京市内十二錢、内地十八錢
領土　四十五錢

除毛劑タキー

顔に危險な剃刀を用ふる時代は過ぎました。このタキーは、手足、腋の下、襟髭等任意の所に塗つて五分乃至十分後に水で洗へば、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかりと除毛する事が出來ます。

これを何回か繰返へして使用する間に次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂には全く發生しなくなつてしまい、又腋臭を除く效果があります。

皮膚に害はないかと云ふ問合せをよく受けますが、一個毎に添附の說明書に反した使用法をせざる限り、全く無害で效果は一層確實です。

定價(マスクリーム付)二圓二十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土　四十五錢



新發明の產兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿樣纖維質の部分と絶對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄から成つてゐる新發明の產兒調節器です。

このオクルサトルに添附の殺菌用錠劑を挿入して使用すれば、錠劑は内部で溶解してカーボニツクホームを形成致します。この泡は隙間なく擴り、細菌はみな殺されて了ふもので、オクルサトルの海綿樣部分はこの殺菌錠溶液を吸收して約一ケ月間保存いたします。

オクルサトルは、非常に簡單で且巧妙に工夫されてをり、實際使用中でも本人自身氣が附きません。これは永久的使用に堪へるものですから、二回目からの御註文のために、別に錠劑だけが用意されてあります。

一度お產した人までは　〇番
三度お產した人までは　一番
四度以上の人は、二番を使用
定價(錠劑十二錠附)　六圓
錠劑のみ十二錠　二圓
送料東京市内十二錢　内地十八錢
領土　四十五錢。

経濟と實用とを兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記の特價で提供致します。

茶縞スレン學生用　二圓十錢
紺綿綾セル執務用　二圓四十五錢
黒　セ　ル　五圓　錢
上等黒綾セル　五圓八十五錢
紺セル黒・紺セル　七圓
紺フラノ(霜ラシヤ)　六圓
夏物白地縞綿セル　二圓三十錢
白綿ギャバジン　三圓十五錢
純毛白綿セル　八圓八十錢

寸法　胴廻　股下
大體約　二、五尺　約　一、九尺
中　二、三尺　一、八尺
小　二、二尺　一、七尺

送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

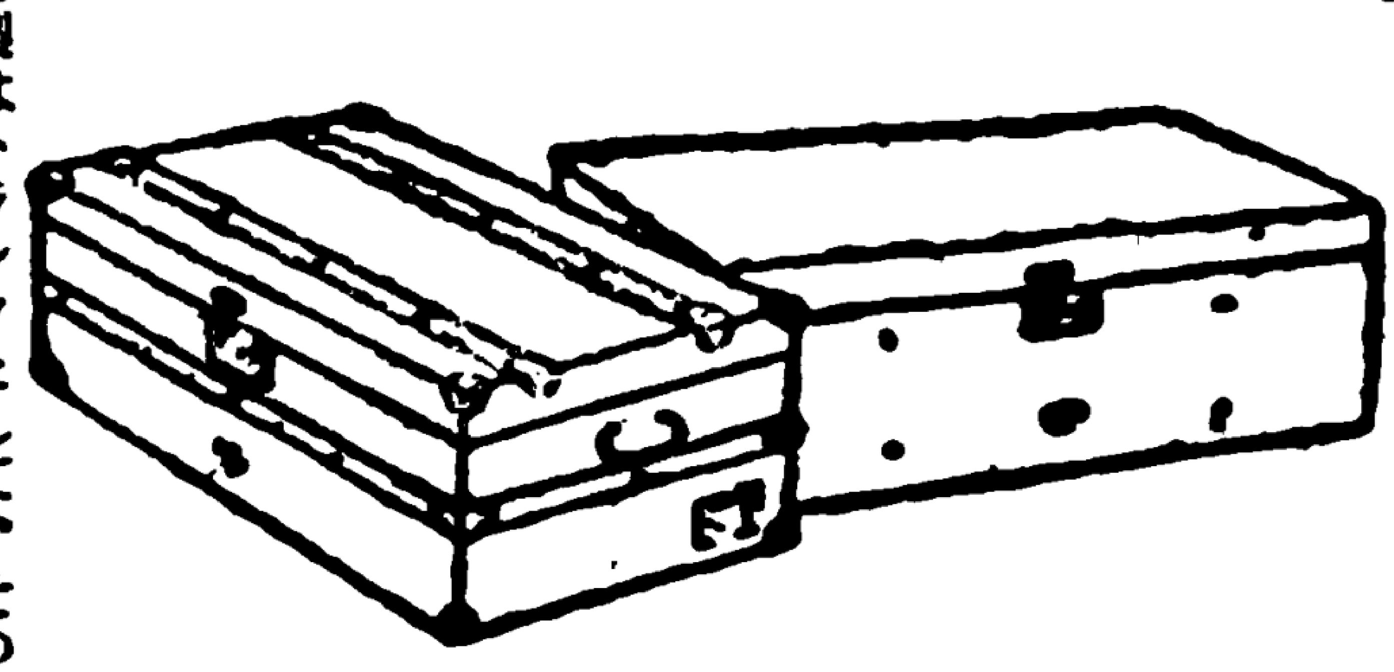
洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大一圓　小六十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、厚サ八寸五分の堅牢な容器で、内壁の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦入れを備へ、外面には漆の焼附けを施して立派に仕上げ、絶對に外氣の侵入を防ぐ樣工夫された、毛織物又は貴重書類等をしまつてをくのに必須な品です。



特製はトランクとして、そのまゝ送り出す事が出來、帳簿や支拂綿より遙かに便利です。

定價　特製　九圓八十錢
　　　並製　六圓八十錢
送料東京市内二十錢　地方運賃先拂

最新艶出布

このフレッシユマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、器物固有の光色を損ずる事は決してありません。

この布は、從來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く、蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價(金屬製容器入)　一圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニューヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髪後や朝夕に數滴を毛髪の根元に振りかけて、指頭で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには他も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髪は絹の樣に軟くなり、日々漆黒の美を増します。

定價　婦人用　紳士用　特大瓶各二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

スマドレ シヤンプー

理想的洗髪液スマドレ、シヤンプーは短時間に頭肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髪にする一方、ちゞれ毛や縮毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレヘヤトニックと共に、ニューヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界的特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、何時もさつぱりとした髪で、自他共に氣持ち良く會談する事をおすゝめ致します。

定價　特大瓶　二圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅乃夏の鈴ばの二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

此の外に秋のヘクオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも常に用意してありますから、お好みのまゝにお注文下さい。

定價(春、夏、秋、冬)各二圓
(四季組合せ、又八四個)七圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢
領土四十五錢

オプチサナ

獨逸新藥品の偉力は世評の認める所ですが特にこのオプチサナはせきを止めるに著しく效果があります。甘くておいしいので百日せきの子供も喜んで呑み、一週間服用すれば效目があらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

御所々から醫家の揃つた註文がありましたが、今後十個以上揃つた御註文には多少の割引をいたします。

定價　二圓　送料東京市内十二錢
内地十八錢　領土四十五錢

中央公論社出版部新設豫告

中央公論社はこの五百號記念號發行を機會に、その記念事業の一つとして新たに出版部を增設します。

中央公論社は、從來の方針として雜誌事業でやつて來、また今後もその方針で進む考へでありましたが、茲に飜然として出版部を併設した所以のものは、今度記念號を發刊するに當つて、四十四年築き上げられた中央公論社の信用と地盤と使命の上に彌ヶ上にもその責任の重大さを感ぜしめられたに他ならないのであります。

本來、雜誌の發行と書籍の刊行とは一にして二ではないのであります。之を二と見誤るものは、出版事業が特に投機的射利的事業であるかに考へられた結果に他ならないのであります。さうして今日事實に於て此種の事業がいかに一攫千金的スペクレーションに墮してゐるかは諸君の齊しく識認せらるるところであらうと思ひます。出版事業と雖も一つの事業である點に於て他と異る筈はないのでありますから、徹頭徹尾奉仕的犧牲的事業に終始することの不可能な事は申すまでもないのでありますが、然しながら、出版の如き文化的使命を帶びた特殊事業が今日の如き混亂喧噪の渦中に委しておいていいものでせうか。

惟ふに中央公論社の多年の信用と獨自の境地を以てすれば、わが出版界に一新地歩を占むること易々た

るのみであります。而もこの混沌晦暝の出版界を救ふの義務と責任と名譽とを感ずるものは、わが中央公論社を措いて他に無いと信ずるものであります。

ですから、吾々は多くの利潤を貪らうとはしません。多年築き上げた中央公論社の信用はまた決してそれを敢てさせないでありませう。若し假りに今日の出版界を是正するものがありとしたら、恐らくそれは繋つて中央公論社の任務であると言ひ得るのであります。

それなら、吾々は如何なる新機軸を此出版界に投げかけ得るかが大きな興味と疑問として殘された問題であります。着々その理攻めの計畫を進めてはゐますが、それは今發表の時機に達してをりません。いづれ諸君の批判と後援とに俟たなければならないのでありますが、今において吾々の言ひ得ることは、讀者を欺くやうな出版をしないことであります。買つて馬鹿を見た感じを起させないやうな書物を作ることであります。政治、經濟、文學、哲學、部門はいづれの部門に分れても、飽くまで中央公論社式社是をモツトーとして、先づ堅實な歩武とささやかな地歩をわが出版界の一隅を占めたいと思ふのであります。やがてそれが諸君の贊同と熱烈な應援とを得て、雜誌界に於ける中央公論誌以上の地歩を、わが出版界に占め得るであらうことはまた吾等の私かに信じて疑はざるところであります。

わが幼稚なる出版事業の發足に好意ある眼をかけられんことを切望して止まない次第であります。

編輯者雜記

◇

本誌の讀者層への滲透は、月を追ふて深まりいく。堅實に搖ぎなく！　われらは、涙ぐましき歡喜の戰慄を以て、この事實を嚴肅に凝視して居る。

◇

現代は、イデオロギーの混戰時代である。記者の第六感は、然し、そこに動く底流に、尖鋭流に、敏感にタッチせずには居ない。そして、記者の時は、時代文化を正しく强く明るくリードせんとする意慾に燃えて居る。百パーセントの興味と實益とを兼れ備へた、どこへ出しても恥づかしくない雜誌、諸兄の机上に飾に月々なくてはならぬ雜誌を、編輯せんとして居る。

◇

本誌の構成は、其の結論である。然し、常に時代の先端にたち、大衆にアッピールする所あらんとすればするほど、それだけ受難の斷崖に近づくことであらねばならぬ。

かかる極限的輪廓を描きつつ、かかる意企と内容とを以て、現實社會に迫る本誌が、今や鐵柵的の支持と激勵とをうけ、壓倒的に加速度的に翕然として、天下大衆視聽の中點たらんとして居るは、故なきに非ずとひそやかに誇負する。旋風は、げにや本誌をめぐつてめぐるであらう。

◇

この必然的贊助に應ふべく、この九月號も今夏の酷暑猛熱と共に燃ゆる意氣もて、ダイナミックな世界の波乘り切りつつ編輯された。今日は校了の日である。刷りあがつた目次を手にせる瞳は熱い。

◇

露支紛爭に疑惑をもたるる人、その興味ある眞相を知らんとせらるる方は、本誌にこられよ。必ずや滿足なる答を發見せらるるであらう。又、合法的勞農黨の樹立の新聞紙上で明確にされたるは實に〳〵切後に屬するも、本誌の潛行的努力は、事前に之を探知し、大山、河上兩巨頭の意見を並置するを得た。

小野氏の興深き事實談、牧野、本位田、蠟山氏らの文字、それから「勞働黨の帝國主義」など、其他凡てこれ時代をキャッチせる見のがし得ないもののみである。創作欄亦珍らしくも豐島氏の傑作、林氏の才筆、前田河氏のエネルギッシュな最終編を得て、不振な文壇に一脈の淸風を送るを得た。事實こそ雄辯である。先づ店頭で本誌の堂々たる香氣に接せられんことを希望して已まない。

◇

かくして編輯部は、九月號を產み出せる陣痛の惱みをも克服して記念號十月號に、すでに力を注ぎつつある。そこに盛らるる內容の、いかに精彩なものであり、興味あるものであるかは、讀者諸賢の等しく刮目して待つて戴きたいことである。そしてそれは頗る尨大なものとなる豫定なるも、恒常の親愛なる愛顧にむくゆるがために、犧牲的廉價版を以て、世に出だす心算である。

必ずやそこには讀者と本誌との紐帶的親愛の提手があるであらう。

乞ふ！　心からの愛讀と、より一入の支持とを賜へ。（Y・A生）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「一つの時代」と「南京六月祭」

（貝殼追放）

水上瀧太郎

數年前の事である。或る雜誌の編輯者の訪問を受けた時、自分の雜誌は當代一流の大家の作品を載せる事をほこりとして居るが、これからは大に新人の作品を紹介し度いと思ふ、若しあなたが編輯者なら、今賣出の作家の中から先づ誰を選ぶかといふ質問に接した。私は即座に犬養健氏の名をあげて答へた。その時編輯者に、私の說に從つてどうしようといふ考の毛頭無かつたのは勿論の事で、たゞ座談のついでに訊ねたに過ぎないのだが、たまたま私の答はその人の腹案と一致し、間も無く此のすぐれたる若き作家の作品はその雜誌を飾つた。

その癖當時の私は、氏の作品をそれ程多くは讀んでゐなかつた。否、その當時ばかりで無く、その後も氏の作品を、人に先んじてむさぼり讀むやうな事は無かつた。私の怠慢には違ひ無いが、ひとつには氏の作風が、讀者の熱情を煽る性質のもので無い爲でもある。第一小說集「一つの時代」さへ、親戚の若者に借りたまゝ、長く机上に埃を浴びさせた。それにもかゝはらず、時々雜誌で讀む作品には愈々感服の度を增し、將來の大成に深い望をかけつゞけて來た。かくれたる愛讀者の一人であつた。

その頃私は犬養氏にあつた事も無く、その後もおつきあひは無い。先年芥川龍之介氏が自ら命を絕つた時、お通夜の席

で挨拶をかはしたのが初對面で、最近氏が支那へ行く前に、私の勤務先へ立寄つてくれたのが二度目で、それつきり御目にかゝつた事は無い。

私が彼の編輯者と話をした當時の氏に關する知識は、犬養木堂先生の息子で、新潮社發行の日記帳のしまひについてゐる文士録に名の出てゐる人の中で、最も年少だといふ事しか無かつた。

犬養木堂先生は私の好む型の政治家である。これ亦度々風貌に接した事はないのだが、先年大阪在住時代に、同窓會の席上講演を聽いた事がある。歐羅巴大戰がもたらした好景氣に醉つてゐる國民に對して今後の日本の多難なる事を說き、思想問題に及んでは當時流行の民主々義や、露西亞革命の根本思想の透徹した批評があつた。痩つぽちで脊中が曲つてゐて、本來ならば貧弱な見かけの筈なのだが、素晴らしく鋭い眼光で、それ丈でも充分人間力を見せ得るのが、頭腦の冴えと莊重な辯舌で、よき藝術に對する時のやうな緊張感を與へた。よくある政治家型の誇張や感傷調の微塵もないのもこゝちよかつた。

健氏の小說を讀む時、私には嚴父の印象を忘れる事が出來なかつた。ひとつには、その人を知らずに作品に感心し、どんな人かしらと想像する心の隙間に、大阪ホテルの川に面した露臺のやうなところで、多數の人間を嚴しくいましめる態度で、時々拳骨を突出して話した木堂先生の傴僂が浮ぶのであつた。

しかし、健氏の作品には、嚴父と同じものわかりのよさ、解釋の正しさはあるが、老大人のそれの如き鋭さや凄みを作はない。聞くところによれば木堂先生は、事物に對する味到力の強い人で、刀劍硯書畫の如き、何れもすぐれた觀照力を持つてゐるさうであるから、賦性は同じでも、生ひ立の相違が二者の風格にへだゝりを生んだのかもしれない。若し木堂先生をして艱難辛苦の政治家の生涯を踏ませず、偉い父を父とし、貴族富豪の子弟の通ふ學校に通はせたならば、あゝいふ凄味のある政治家とならず、情緒豐かな小說作家になつたかもしれない。若し健氏をして嚴父の如き生ひ立ちを運命と

したならば、鋭角の度はもつと著しいものであつたかもしれない。

いづれにしても「一つの時代」「南京六月祭」の作者は、よき家に育ち、正統の教育をうけ、世の嶮しさに觸れずに成人し惠まれたる才能はすこやかに延び、年若くして作家生活に入つた人である。その純情につゝまれた作品は、くもり無くほがらかに澄んだものである。

よき意味に於て、無色の若い心の上に強い影響を與へたのは、同志の先輩が經營した雜誌「白樺」一派の作家達である。人の一生のうち、一番強く人を崇拜し、その影響をうけ、内部革命を遂げるのは少年期から成年期に移らうとする頃であらう。大人になつて感受性が鈍くなつては、他人の影響をうける事は少なくなる。恰も「白樺」が若い魂に藝術愛好の熱情を與へたのは、犬養氏の心の攝取力の最も旺盛な時代だつたに違ひ無い。その時代の感激は、肉體の組織となつて殘るかと思ふ程強いものである。

一口に「白樺」派の人道主義といふが、「白樺」が廣く若者の心に與へた影響は、人道主義的精神よりも、むしろ藝術愛好の熱情を湧き立たせた所にある。西洋文明に早く觸れる機會の充分惠まれてゐる境遇に育つた人達だから、いちはやく西洋藝術の觀照の道を開き、ロダンに感激し、トルストイに驚き、ストリンドベルヒに打たれ、セザンヌに醉ひ、ゴッホに參り、「隨分感心した」とか「隨分驚いた」とかいふ流行語をつくり出した。正確なる批評をもつて紹介するよりも、淡然とした以心傳心的感激で、善良無垢の若い魂を、底からひつくりかへしてしまつたのである。「白樺」流の陶醉は、さかんなる勢で彌漫した。このつかまへどころの無い、しかし力強い感激は、事細かに事物の詮索をしなければならぬ文學青年よりも、遙かに頭の働きの單純な素學生に影響するところが多く、世人がいふ人道主義的精神よりも、藝術愛好の熱情を煽る方に結果があらはれた。

その「白樺」のひと粒種とも見る可きのが犬養健氏である。一時は、志賀氏の亞流、武者小路氏の亞流、有島氏の亞流、

里見氏の亞流がかなりはびこつたが、何時の間にか姿を消して、しつかりと根をはやしたのは犬養氏一人だと云つても差支へあるまい。氏には——殊に「一つの時代」當時の氏には、「白樺」派のすぐれたる諸作家の特徴が、その持味の中に融合しながら、なほ且分離して指摘する事が出來るのであつた。小說の構成法、文體、觀察、理解、反省力等に志賀直哉氏の影響が著しく、文壇一般の常識として、犬養氏といへば直ぐに志賀氏に學ぶ者と見做すのもあながち無理では無いのである。たしかに此の作者の神經質は、志賀氏の餘波を受けて鋭くなつたものと考へられる。たゞ、志賀氏に見るやうな極端な氣むづかしさ、時には病的とも見え、意地惡とも見えるあの氣むづかしさは無く、もつともつと朗かである。此の二作家の作品を比較する時、レムブラントとルウベンスの繪を想ひ浮べる。

人道主義的精神は有島武郞氏の遺產とも思はれるが、武者小路實篤氏の人生哲學の影響は更に深く刻印されてゐる。たとへば或事件に當面した時の解決のつけ方は、あく迄も武者小路式である。恐らくは無意識のうちに、武者小路哲學をもつて生活上の規範としてゐるのではないだらうか。例を作品にとれば、第一著作集「一つの時代」の卷頭を飾る「愚かな父」は一人稱で書いてあつて、談話者は作者とは年齡の甚敷く違ふ老人であるが、事件に對する解釋は、作者自身のものと見てよさゝうである。愚かな父は、自分でも無學な凡人だと思つてゐる實直な老人だが、娘を文學者肌の若者の嫁にやる。娘は一時に境遇が變つたので、身邊の事が一切氣にかゝり、それが重荷となつて居たゝまれなくなり、逃げ歸つて來る。先方でも自分達のしうちが惡かつたと思ひ、良人がつれ戻しに來るが、最初から氣に喰はない婿に對し、老人はつゝけんどんに拒絕してしまふ。だが娘は次第に良人が戀しくなり、置手紙をして嫁入先へ逃げて行つてしまふのである。

その出來事の登場人物は、すべて武者小路式の自己肯定に近い解決をして、すくなくとも動的の悲劇を生まずに濟ませてゆくのであるが、文學者肌の若い良人が妻を連れ戻しに來て、玄關先で愚かな父と對談する會話や態度は、完全に武者小路哲學の影響を證明する。又娘の置手紙にも、愚かな父の述懷にも、同じ事が明白にうかゞはれる。そんなら、何が武者

小路式かといへば、事件の解決にあたつて、迷ひ無く、單的に、明るい方へ進んで行く事である。父と良人と妻と、此の三人の主役の示す明快主義は、やがて若き作者自身の心であらう。

ついでにいへば、志賀有島武者小路三氏の影響は明かに見られるが、「白樺」の生んだもう一人の名作家里見弴氏の影響は、此の人のうちに見出す事が出來ない。趣味の相違が全然うけつけなかつたと見る可きであらう。たとへば里見氏は、山の手の屋敷育でありながら、町方の趣味を多分に持つてゐるが、犬養氏は全然その方向に追隨して行かない。又里見氏は、ひとつの思想を尊重し、それに捉はれ、その發想に專らなる作者ではなく、どんな世態人情でも書きこなさうとする文人作者だから、他人へ影響する力が、客觀描寫の絢爛なる場景の中に散在して、單的に人に迫らないといふ點も考へられる。尤も此の頃は「まごゝろ」を說く事しきりであるが、あれは主として自分或は作品の主人公の行爲を是認する場合に役立ちこそすれ、「まごゝろ」をもつて他人の心に觸れる力は存外弱いから、これも亦影響を及ぼす方向には働かないものと見て然る可きであらう。

「一つの時代」の作品の多くは、大正十年から十二年迄の間に制作されたのであるが、たゞひとつ「弱い生徒」は大正七年の作で、年少の作者が純情を以て語る少年時の追懐詩である。その中には、その後の作者の心の芽が純粹無垢に見出される。正義感、友情、傳統的敎養、理智と感情の均衡のとれた美しさ――それは犬養氏の作中に登場する人々の人格をかたちづくる要素である。この作について何よりも驚く可きは、此の作者の育つた階級の少年達が、いかにおとなしく、素直で、上品で、浮世のいやな事に無智であるかといふ事だ。大きい屋敷の奧深く育ち、家々にはやかましい掟があり、それを疑ふ事なく守り、みだりに街頭の塵にまみれない美しさは羨む可きだ。若しすべての人が斯程に善良であるならば、その人々は永久にしあはせであるが、世の中はもつと不都合に出來上つてゐる。此の境遇に育つた人が大人になつてどうなるか、世上の實際に照らして見ると、結局しあはせかどうか疑はしい。よき保護者があり、よき指導者のある限り、しあはせは續き、

美しさは保たれるが、一人立ちになり、複雑多岐な世の中のこすつからい人間に伍して、浮世の荒浪を乗り越えて行く力を缺いてゐる。「弱い生徒」の主人公「私」は、子供のくせに利巧過る、才があり過る、早熟でいけないと先生に訓戒される少年だ。彼は自分でも、小利巧といふものがどんなものかを知つてゐて、何故自分は先生の氣に入るやうなおつとりした品のいゝ少年になれないのかと寂しく考へる。何も知らないでゐろ、上品であれといふ訓戒の下に育つのだから、早くから嫁ぐ事、儲ける事、人のきげんをとる事に心を向けねばならぬ境遇の者とたゝかつて、どつちが生存力を持つてゐるかは説明する迄もあるまい。少なくとも處世の上、世渡りの上に於て、一騎打をする力は比較にならない。さういふ人形のやうに脆く、手ぎれいに育つた少年の一群の中に、友情と正義感を求むる「私」がゐる。かなり強く、彼は正しき事に憧れてゐる。けれども、此の作者には純粋浪漫派が持つてゐるやうな狂熱が無い、昂奮が無い、宣傳が無い、絶叫が無い。他人に迄も正義に對する共感を强るところが無い。あるものは、それによつて只管自分を磨かうとする事丈である。そこに犬養氏のよき持味があり、純一にして多岐なき弱味があり、やがて聰明なる作者をして、自らの進む可き道が何處にあるかを迷ひ悩ませるみなもとゝもなつたであらう。

もうひとつの學習院物「朧夜」も、上流子弟の育てられてゐる生活が、吾々に未知の小世界を展開して見せる。私には一種の異國趣味を覺える程だ。先生も生徒も、吾々の經驗界の外の存在だ。他人を傷つけず、自分の品位を汚さない心持、同情深く、己れをつゝしむ行儀のいゝ人々である。意地が惡くなく寛容であり、且自分が寛容である事を認めて、自分の行爲を是認する立場に在る人々だ。この人々は、年齢と、地位と、職業と容貌こそは各々異なるが、共通の美點と弱點をもつて「一つの世界」の隨所に登場する。

かういふ善良な人物が登場する舞臺は、それにふさはしい靜かな、長閑な風景に圍まれてゐる。その代表的なものは「眼白」である。郊外の小春日和に上氣したやうな家庭が描かれてゐる。極めて育ちのいゝ若夫婦の善良な結合は、まことに

羨望に堪へないものがある。嫁いで來て、未だ子供の無い細君——それはまだ子供の無い事を寂しがるところ迄も行かないうぶな細君で、犬を飼ひたがり、小鳥を飼ひたがるのを、學生々活から遠く離れない良人が、おだやかに、しかし注意深い眼をもつて見守り、時には輕くたしなめ、からかひ、よき友達のやうに暮らしてゐる。その細君に對する愛情のみちた觀察、小動物や植物に對する觀察は、充分のゆとりを持ち、何等の誇張を伴はずに柔かい照明を投射してゐる。此の良人の姿は直ちに作者の姿を彷彿させる。正しき眼、親切な觀察は、此の作者に惠まれた天賦のものだ。その眼は、單に物の姿を正しく見てとるばかりでなく、同時に素直な心に反映し、反省を呼び起す。一本の草のそよぎさへも、あだには見過さず、何かを心に與へる。あらゆるものに觸れて、心の糧を攝取する。明鏡が、作者の胸にいだかれてゐる。犬や眼白によつて引起される小事件に當面して、よき夫婦が取替はす會話、一擧一動、ふれあふ心、すべてがこまやかに、柔かく取扱はれ、描寫されてゐる。作者の濁りなき心境は羨しく、自分の險しい心に引きくらべて、あまりの相違になさけなく思つた。それは望んでも行かれない遙か向ふの國だ。「山の彼方に國作りて、さいはひ住むと人のいふ」といふ有名な詩を想ひ浮べる程、私の經て來た年齡と、多事な經驗は、氏の描く景色に憧れながら、しかも其處に住む資格を私から奪つてしまつた。手の屆かない理想鄕として、一層此の善良なる人々の住む世界を尊く思ふ。

「姉弟と新聞配達」も、「眼白」と同じやうな善良な若夫婦の家庭が描かれ、あらゆる事が善意に解釋されて行く朗かさは甚だ氣持よく、まとまりのいゝ、含み味のたつぷりある好短篇で、「一つの時代」の中で最も愛好すべき作品である。

「冬の出來事」は集中異色のあるもので、羨しいやうな一家團欒の中にありながら、不圖した事から地球の壽命、人間の死といふ問題に恐怖を感じ出した學生が描かれてゐる。だが、その心を脅かす底知れぬ恐怖感には、讀者を引摺つて行く丈の力が無い。おもふに、此の種の變態的心理は、明朗なる作者の心境にしつくりと融合しないのでは無いだらうか。その中心興味よりも、寧ろ主人公のあたゝかい家庭、殊に若い妹の姿などは、明色ばかりで描いた繪畫のやうに柔い階調で、

正統派の確實な手法で描寫されてゐる。

「何よ。兄さん。」

後ろの、一段高い階段から夏子は兩手を兄の肩にあて〻、優しく彼にのしかゝりながら、かう縋つて尋ねるのだつた。――紫の矢がすりの銘仙の袖が、柔かく彼の片頰を包んだ。

「何といふ、自分と血を分けた、親しい間柄なのだらう！」

彼女の輕い身體をしつかりと、兩肩で受けとめながら、そんな考が唯一の頭をかすめて通つた。

かういふ名描寫が隨所にある。階段を下りてゆく兄のうしろから、紫の矢がすりのきものを着た妹が全身の重みをもたせかけながら甘つたれた口をきく肉身の情愛の中に、文字を以て體温迄も描き出した。性慾的で無い肉感を、此の作者は屢々のびやかに描寫する。

假に「弱い生徒」と「朧夜」を學習院物として、「眼白」と「姉弟と新聞配達」を若夫婦物とすれば、「初夏」と「二人兄弟」は兄弟物と呼んで差支へないであらう。

私は犬養氏の家族の事を知らないが、此の二作によれば、或點迄は氏と氏の兄なる人をモデルにしたものと想像される。「初夏」には、兄と弟の美しい心持が丹念に描かれてゐる。尤も、同じ美しい心のあらはれを捉えてはゐるもの〻、兄の場合と弟の場合とは全然別の軌道を走つてゐる。要助と充造は同じ腹に生れ、二人とも養母の手に育つたのだが、兄は結婚問題から廢嫡され、その後は生母とのみゆき〻してゐる。世間並の眼から見て、兄は出來のよい方でないが、弟は全く反對の性格で、學者風のほめられ者である。一方はあくせくとみすぎよすぎにうきみをやつし、一方は大きな商家の若旦那として不自由なく暮らしてゐる。いかなる點から見ても、兄は弟と肩を並べて立つ事が出來ないのだ。それにも拘らず、兄は何のひがみも嫉妬も持たないばかりか、かへつて弟を尊敬し、美化し、英雄化し、偶像化して滿足してゐる。彼は弟の如

き知識人ではない。學問は出來ない。いゝ息子では無い。偉い人間になり得る性格は微塵も惠まれてゐない。しかし、何といふよい人間であらう。自分の弱點、過失は充分知つてゐて、一切の事をいゝ意味で見ようとするまごゝろの人間だ。

弟は兄よりも複雜な、氣むづかしい性質で、彼は兄の心の底の美しさは知つてゐるが、いろいろの事に對する批判的の氣持から、そのまゝ是認する事は出來ないのである。兄弟は言葉づかひさへ反對で、兄が弟に氣兼しつゝ叮嚀な口をきいてゐる。だが、此の弟とても、教養と境遇から生れる矜持をかなぐり捨てれば、兄と手をとつて理解しあへる人間なのだ。

母は母で善良であり、兄の妻も、弟の妻も、養母も、みんないゝ人ばかりだ。

その弟が結婚し、はじめて妻を連れて、兄夫婦實母達をたづねる日の場景が、此の一篇の主要なる頁を占めてゐる。新夫婦を迎へる生母や兄の心づかひは、あまりに善良過ぎて讀む者をほろりとさせる位だ。

此の作者の、善良なる人ごゝろの讃美は廣く深くゆきわたつてゐる事斯の通りであるが、その一方に卑賤、低能、下品等を嫌ふ心持は相當强い。しかしそれは、世俗の貴族階級に見るやうな無反省におもひあがつた心持から來てゐるのでは無く、よき人格を求むる心の强さの反對面として現はれるのである。したがつて、露骨にそれを罵りさげすむ事などは無く、時々朗かなる心境に陰影を投げて、瞬間的に不機嫌にする程度に止まるのである。

「二人兄弟」の兄と弟は、「初夏」の兄と弟の名前と、そのあらはれる場面とをかへたものに等しい。兄は、極端から極端に感情が移りかはり、學問嫌ひの不良兒で、やがては養母に刄物をつきつけるところ迄行つてしまつた。その性根を直す爲め、或る教育家にあづけられ、遂には遠く四國の私塾に入れられてしまふ。弟は頗る出來がよく、萬事が兄とはうらはらで、二人の相違は東京と四國の距りのやうに遠ざかつて生育する。ところが或日、兄は突然私塾を逃出して實家へ戻つて來た。けれども、嚴格な父親に叱責され、忽ち四國へ連戻られる。十數年たち、兄は相變らず親に迷惑をかけつゝいけてゐるが、弟は大學を卒業して創作家になる。その二人が銀座で邂逅する。弟は兄に對し優越感を持ち、時には叱りつける

正統派の確實な手法で描寫されてゐる。

「何よ。兄さん。」

後ろの、一段高い階段から夏子は兩手を兄の肩にあてゝ、優しく彼にのしかゝりながら、かう寄つて尋ねるのだった。――紫の矢がすりの銘仙の袖が、柔かく彼の片頰を包んだ。

「何といふ、自分と血を分けた、親しい間柄なのだらう！」

彼女の快い身體をしつかりと、兩肩で受けとめながら、そんな考が良一の頭をかすめて通つた。

かういふ名描寫が隨所にある。階段を下りてゆく兄のうしろから、紫の矢がすりのきものを着た妹が全身の重みをもたせかけながら甘つたれた口をきく肉身の情愛の中に、文字を以て體温迄も描き出した。性慾的で無い肉感を、此の作者は屢々のびやかに描寫する。

假に「弱い生徒」と「朧夜」を學習院物として、「眼白」と「姉弟と新聞配達」を若夫婦物とすれば、「初夏」と「二人兄弟」は兄弟物と呼んで差支へないであらう。

私は犬養氏の家族の事を知らないが、此の二作によれば、或點迄は氏と氏の兄なる人をモデルにしたものと想像される。「初夏」には、兄と弟の美しい心持が丹念に描かれてゐる。尤も、同じ美しい心のあらはれを捉えてはゐるもの丶、兄の場合と弟の場合とは全然別の軌道を走つてゐる。要助と充造は同じ腹に生れ、二人とも養母の手に育つたのだが、兄は結婚問題から廢嫡され、その後は生母とのみゆきゝしてゐる。世間並の眼から見て、兄は出來のよい方でないが、弟は全く反對の性格で、學者風のほめられ者である。一方はあくせくとみすぎよすぎにうきみをやつし、一方は大きな商家の若旦那として不自由なく暮らしてゐる。いかなる點から見ても、兄は弟と肩を並べて立つ事が出來ないのだ。それにも拘らず、兄は何のひがみも嫉妬も持たないばかりか、かへつて弟を尊敬し、美化し、英雄化し、偶像化して滿足してゐる。彼は弟の如

き知識人ではない。學問は出來ない。いゝ息子では無い。偉い人間になり得る性格は微塵も恵まれてゐない。しかし、何といふよい人間であらう。自分の弱點、過失は充分知つてゐて、一切の事をいゝ意味で見ようとするまごゝろの人間だ。

弟は兄よりも複雑な、氣むづかしい性質で、彼は兄の心の底の美しさは知つてゐるが、いろいろの事に對する批判的の氣持から、そのまゝ是認する事は出來ないのである。兄弟は言葉づかひさへ反對で、兄が弟に氣兼しつゝ叮嚀な口をきいてゐる。だが、此の弟とても、教養と境遇から生れる矜持をかなぐり捨てれば、兄と手をとつて理解しあへる人間なのだ。

母は母で善良であり、兄の妻も、弟の妻も、養母も、みんないゝ人ばかりだ。

その弟が結婚し、はじめて妻を連れて、兄夫婦實母達をたづねる日の場景が、此の一篇の主要なる頁を占めてゐる。新夫婦を迎へる生母や兄の心づかひは、あまりに善良過ぎて讀む者をほろりとさせる位だ。

此の作者の、善良なる人ごゝろの讃美は廣く深くゆきわたつてゐる事斯の通りであるが、その一方に卑賤、低能、下品等を嫌ふ心持は相當強い。しかしそれは、世俗の貴族階級に見るやうな無反省におもひあがつた心持から來てゐるのでは無く、よき人格を求むる心の強さの反對面として現はれるのである。したがつて、露骨にそれを罵りさげすむ事などは無く、時々朗かなる心境に陰影を投げて、瞬間的に不機嫌にする程度に止まるのである。

「二人兄弟」の兄と弟は、「初夏」の兄と弟の名前と、そのあらはれる場面とをかへたものに等しい。兄は、極端から極端に感情が移りかはり、學問嫌ひの不良兒で、やがては養母に刄物をつきつけるところ迄行つてしまつた。その性根を直す爲め、或る教育家にあづけられ、遂には遠く四國の私塾に入れられてしまふ。弟は頗る出來がよく、萬事が兄とはうらはらで、二人の相違は東京と四國の距りのやうに遠ざかつて生育する。ところが或日、兄は突然私塾を逃出して實家へ戻つて來た。けれども、嚴格な父親に叱責され、忽ち四國へ連戻られる。十數年たち、兄は相變らず親に迷惑をかけつゞけてゐるが、弟は大學を卒業して創作家になる。その二人が銀座で邂逅する。弟は兄に對し優越感を持ち、時には叱りつける

やうな口さへきいてゐる。だが、反省のうらに、兄をおもふしんみの情愛の深い事がわかつて來る。

「一つの時代」全部を貫くものは作者の倫理感である。此の年少の作者には、己れをよくしよう、正しくあらしめよう、意地悪でなく、卑屈でなく、他人を傷つけず、おとしめず、理解と同情をもつてひとにのぞみ、練磨と反省をもつてみづからをいましめようとする熱情がある。しかしそれを他人にも強る心は毛頭ない。純一に統整した自己を中心として、町時に自然人事を觀察し、自らが正しいと信ずる判断をもつて一々解釋を下して行く。その態度に狂ひが無く、自分の殻を守る事は極めて堅固で、かりそめにも浮調子にならないから、作品の特徴として格調の正しい均齊の美が生れ、それが此の作者の生命となつた。そこには韻律を崩さない典雅な詩が在る。デッサンにごまかしのない繪畫がある。その美は人を打つて敬服させる。けれども、決して魅惑的でなく、溺れさせ、痺れさせ、或は狂氣させ飛躍させる力を持つてゐない。智情意がめいめい三分の一の持ち分を守つて爭はず、他の領域を侵さない。奔放不羈な情熱や、一本氣の主張の強さは、觀察のみだれを招き、手法の破綻の因となつて、作者を冒險の渦巻の中に陷れ、靜閑の中に求めた品格を突崩すであらうから、それは意識的にも避けたと見られる節もある。作者と雖も、自分以外の世の中の闘爭喧嘩邪悪混亂に全く盲目なのではない。しかし、自分の倫理を以て統一した世界を求める爲に、さういふ複雑多岐、善と悪との紛糾してゐる眞只中へ突入する事はしないのである。だから「一つの時代」の中には、善人ばかりが登場し、無理解や不公平が生む悲劇は起らない。稀には、兄弟物の中にあらはれる兄のやうな、やくざな人間もあるにはあるが、しかもそのやくざな半面は僅かに暗示されるにとゞまつて、他の半面の善良性が甚だ多く示めされる。時には一つの意志が他の意志と衝突しさうになる瞬間もなくはないが、忽ち同情し、理解し、握手する。齟齬確執をなるがまゝにならせ、絶交しやうと格闘しやうと御勝手だといふ純客觀の殘酷な態度は此の作者のものでは無い。適度の主觀をもつて調味料とし、鋭い刺戟は柔らげられる。

「一つの時代」は、或る意味に於ての完成品である。よく聞く「玉の如き作品」といふ言葉のしつくりあてはまるものであ

る。柔軟性があり、適度の色彩があり、確實な表現力を持つ文章、賢明なる構成法、殊に效果ある省略のうまさは、心憎いものがある。

けれども、吾々讀者は貪慾である。作者のうでを信じれば信じる程、その作者のたてこもつてゐる小世界をのぞく丈では滿足しない。もつと廣い、複雜な社會に視野をひろげ、もつと重量のある材料を手がける事を切望する。經驗の豐富を望み、觀察の深く徹する事を希ふ。掌中の珠でなく、鐵の如き力を求める。

ところが、聰明なる作者は、自分自身夙に此の要求を內部に持つてゐた。自分が確立した小世界を、習得した手法で描寫するあぶなつけのない仕事の繰返しでは安んじて居られなくなつたらしい。自分のうちたてた倫理道德をおとなしく守つてゐる人間を集めた溫柔鄕に、ひとりで口笛を吹いてはゐられなくなつたらしい。年齡と經驗とは絕えず新しい刺戟を生み、常に進行推移を止めない社會の展開に直面して、今迄きづいて來た心境にはゐたゝまれなくなつて來たに違ひ無い。犬養氏の作品に迷ひの跡があらはれ、破綻が生じ、新しい藝術境に到達しようとする意力と惱みが歷然として來た。「南京六月祭」の中に收められた諸篇は、此の過度時代の所產と見る可きものが多いやうに思はれる。

「一つの時代」の中で一番新しいのは大正十二年十一月の作であるが、「南京六月祭」の中で一番古いのが大正十三年六月の作で約半年のへだたりがあり、以後昭和三年度迄の所產が集まつてゐる。便宜の爲め年代順に見ると、「硝子玉の存在」は前の分類を踏襲すると若夫婦物に屬し、此の集に入るよりも、「一つの時代」に入れらるる方が似つかはしい愛すべき小篇である。上品なヒユウモアが作品を際立つて明るくし、色彩をはつきりさせる效果をあらはした。いつたい「白樺」の人達は、武者小路氏にしろ、里見氏にしろ、あの氣むづかしい志賀氏にしろ、みんなすぐれた機智と諧謔を多分に持合せてゐる。融通のきかない馬鹿正直だといはれた有島武郞氏——私は全然此の說に服さないものであるが、假に世間の言葉を借用する——さへ、樂々と機智を弄し得た。私自身子供の頃遊んだ友達の經驗によつても、東京育ちの者は田舍者よりヒユウモ

やうな口さへきいてゐる。だが、反省のうらに、兄をおもふしんみの情愛の深い事がわかつて來る。

「一つの時代」全部を貫くものは作者の倫理感である。此の年少の作者には、己れをよくしよう、正しくあらしめよう、意地惡でなく、卑屈でなく、他人を傷つけず、おとしめず、理解と同情をもつてひとにのぞみ、練磨と反省をもつてみづからをいましめようとする熱情がある。しかしそれを他人にも強る心は毛頭ない。統一に統整した自己を中心として、可時に自然人事を觀察し、自らが正しいと信ずる判斷をもつて一々解釋を下して行く。その態度に狂ひが無く、自分の殼を守る事は極めて堅固で、かりそめにも浮調子にならないから、作品の特徴として格調の正しい均齊の美が生れ、それが此の作者の生命となつた。そこには韻律を崩さない典雅な詩が在る。デッサンにごまかしのない稱讃がある。その美は人を打つて敬服させる。けれども、決して魅惑的でなく、溺れさせ、痺れさせ、或は狂氣させ飛躍させる力を持つてゐない。智情意がめいめい三分の一の持ち分を守つて爭はず、他の領域を侵さない。奔放不覊な情熱や、一本氣の主張の強さは、觀察のみだれを招き、手法の破綻の因となつて、作者を冒險の渦巻の中に陥れ、靜閑の中に求めた品格を突崩すであらうから、それは意識的にも避けたと見られる節もある。作者と雖も、自分以外の世の中の闘爭喧騒邪惡混亂に全く盲目なのではない。しかし、自分の倫理を以て統一した世界を求める爲に、さういふ複雜多岐、善と惡との紛糾してゐる眞只中へ突入する事はしないのである。だから「一つの時代」の中には、善人ばかりが登場し、無理解や不公平が生む悲劇は起らない。稀には、兄弟物の中にあらはれる兄のやうな、やくざな人間もあるにはあるが、しかもそのやくざな半面は僅かに暗示されるにとゞまつて、他の半面の善良性が甚だ多く示めされる。時には一つの意志が他の意志と衝突しさうになる瞬間もなくはないが、忽ち同情し、理解し、握手する。齟齬確執をなるがまゝにならせ、絶交しやうと格鬪しやうと御勝手だといふ純客觀の殘酷な態度は此の作者のものでは無い。適度の主觀をもつて調味料とし、鋭い刺戟は柔らげられる。

「一つの時代」は、或る意味に於ての完成品である。よく聞く「玉の如き作品」といふ言葉のしつくりあてはまるものであ

る。柔軟性があり、適度の色彩があり、確實な表現力を持つ文章、賢明なる構成法、殊に效果ある省略のうまさは、心憎いものがある。

けれども、吾々讀者は貪慾である。作者のうでを信じれば信じる程、その作者のたてこもつてゐる小世界をのぞく丈では滿足しない。もつと廣い、複雜な社會に視野をひろげ、もつと重量のある材料を手がける事を切望する。經驗の豊富を望み、觀察の深く徹する事を希ふ。掌中の珠でなく、鐵の如き力を求める。

ところが、聰明なる作者は、自分自身夙に此の要求を内部に持つてゐた。自分が確立した小世界を、習得した手法で描寫するあぶなつけのない仕事の繰返しでは安んじて居られなくなつたらしい。自分のうちたてた倫理道德をおとなしく守つてゐる人間を集めた溫柔郷に、ひとりで口笛を吹いてはゐられなくなつたらしい。年齢と經驗とは絶えず新しい刺戟を生み、常に進行推移を止めない社會の展開に直面して、今迄きづいて來た心境にはゐたゝまれなくなつて來たに違ひ無い。犬養氏の作品に迷ひの跡があらはれ、破綻が生じ、新しい藝術境に到達しようとする意力と惱みが歴然として來た。「南京六月祭」の中に收められた諸篇は、此の過度時代の所産と見る可きものが多いやうに思はれる。

「一つの時代」の中で一番新しいのは大正十二年十一月の作であるが、「南京六月祭」の中で一番古いのが大正十三年六月の作で約半年のへだたりがあり、以後昭和三年度迄の所産が集まつてゐる。便宜の爲め年代順に見ると、「硝子玉の存在」は前の分類を踏襲すると若夫婦物に屬し、此の集に入るよりも、「一つの時代」に入れられる方が似つかはしい愛すべき小篇である。上品なヒユウモアが作品を際立つて明るくし、色彩をはつきりさせる效果をあらはした。いつたい「白樺」の人達は、武者小路氏にしろ、里見氏にしろ、あの氣むづかしい志賀氏にしろ、みんなすぐれた機智と諧謔を多分に持合せてゐる。融通のきかない馬鹿正直だといはれた有島武郎氏——私は全然此の說に服さないものであるが、假に世間の言葉を借用する——さへ、樂々と機智を弄し得た。私自身子供の頃遊んだ友達の經驗によつても、東京育ちの者は田舎者よりヒユウモ

アを解し、東京育ちの中でも殊に學習院と高等師範附屬中學に學んだ者は頓智が働いた。何故か。恐らくはその家が代々の智識階級であり、社交性をおのづから持つてゐる爲であらう。犬養氏にもそれがある。だが、里見氏のやうに達者なものでなく、志賀氏のやうに鋭いのでなく、武者小路氏のやうに突拍子もないものでもなく、極めて內氣に、上品に、控目のヒユウモアである。

「Kamerad」と「正義と烟草」も機智に富む好短篇で、後者には稍皮肉な形をとつてあらはれてゐるが、決して人を刺すやうなはけしさはなく、結局はおだやかに心地よい心境におちついてゐる。

いつたい此の時代に此の作者は、どういふ態度で創作してゐたのだらうか。全くの推測であるが、既に一人前の作家として認められ、原稿市場に於る需要が生じ、註文によつても書くやうになつてゐたのではないだらうか。恰も文壇はコントの流行を見、諸雜誌が小氣轉のある短篇を求めた時代だ。原稿を賣る生活は、作者にとつて一つの新しい社會との接觸だつたに違ひ無い。さういふ事も、創作態度に影響し、ひいては作風にも變化を來す原因のお手傳ひになつたであらう。自己の心境を語る境地から、廣い世の中を見る境地へ出て來て、人生を客觀的に見る方向へ道を開いて行く楔となつたのでは無いだらうか。さういふ進出があつたとして、既に體得した技法で書きこなす事は大した苦心を要さなかつたに違ひ無い。之等の小篇は、それ丈巧妙に、或は輕妙にさへなつたが、同時に氏の持味の純眞なる詩情的傾向には次第に遠ざかつて來たのである。

その適例として「松吉の場合」がある。それ迄、犬養氏の作品の大部分は、作者自身を主人公と見て差支へないものであつたが、松吉を作者その人と見るのは些か無理である。勿論松吉の心持には作者の息がか丶つてゐるし、例の兄弟物の中に類別しても不都合の無い作品であり、或は例の兄弟を町家風に飜案しようとするのが本來の目的であつたかもしれないが、廣く世の中の姿を描かうとした客觀的立場に立たうと努力したもの丶やうに考へられる。少年時の詩をうたひ盡した

作者が、次第に世間智を加へて、制作の分野を廣めんとする道程の第一歩を踏み出したものと見てい丶のであらう。それ丈力作であるが、手馴れた作品とは勝手が違ふ爲か、構成上に均齊を缺いてゐるやうに思ふ。「アリストテレスと語學教師」は極めておだやかな農家風景を描いた作品で、強ひて分類すれば若夫婦物に入る可きものである。これも亦構成上に間のびのしたところがあつて、讀者の心に迫る力は稀薄だが、犬養氏の故郷の唄と見る可き、愛す可き作品である。短篇構成の技法は、志賀氏に學ぶ所が多く、人にすぐれてゐた作者が、時々破綻を見せるやうになつたのは、先人の影響の外に脱出しようとする努力の結果と見てもい丶のではあるまいか。

信濃の高原の避暑地に家を借りて、字書の編纂仕事をしてゐる語學教師の一家と、隣の一家とのおつきあひは、英國風の繪畫の主題を、佛蘭西風の色彩で描いたやうな、丹念な趣がある。育ちのよさ、適度の教養、浮世の暗黒面には觸れた事の無い兩家の人々は、現實の存在としてよりも正に畫趣である。その人々の中で、隣家の次男が、一番心に動搖を持つ人物である。

自分の才能の範圍を今からきめてしまふのが淋しいのだ。彼は哲學にも音樂にも科學にも自分に適した一部分があるやうに感じてゐるのだ。信二はそのために志望を定める——彼の心持から云へば志望を一つに限る——ことが出來ずに迷つて居る譯だつた。私はその焦慮を美しいと思つた。その焦慮は個物の才能を信じかねないのだ。死者の復活を信仰するにも劣らない。これこそあどけない信仰ではないか。このやうな信二の焦慮は、丁度すべての枝から新芽を一面に吹き出させようとしてゐる樹の努力を私に聯想させた。

これはその次男に對する語學教師の理解であるが、一部分作者その人にもあてはまるべきことばである。又知識階級に共通の特徴でもある。ものわかりがよく、ひとつの事に執着し兼ね、あれもこれも理解出來るので、自分が果して何に一番向くか。何を選んで一生の仕事としようか、如何なる主義方針によつて自分を指導しようか、狹く強く立場を決定する事

はむづかしいのだ。自分をあざむく事が出來ないのだ。だが、作者はたしかに此の迷ひを切抜けて、「新芽を一面に吹き出させようとしてゐる樹の努力」を盡しつゝあるやうに思はれる。

「黄色の花」にも描寫領域開拓のあとは見られるが、特に作者の求めてやまない心の要求を表徴する作として「牧歌」をあげ度い。

どうしたものか短篇集「南京六月祭」の中には、大正十五年度の作品はひとつも無く昭和二年度の作品も僅かに「牧歌」がある丈である。しかもこれは十二月の作だから、凡二年間制作は中止されたのであらうか。又は書く事は書いたが、作者のきびしい選擇の篩にかけられて除外されたのであらうか。どつちにしても、此の時代に、作者は旺盛なる制作力を一時的に失つてゐたのでは無いだらうか。初期の時代の完成を終り、次の時代に移る迄の休息を欲したのか、疲勞に襲はれたのか、新しい進路に迷つたのか、恐らくはいろ〳〵の事がいりまじり、作品の制作力を奪つたのであらう。

「牧歌」は私の最も好む作品である。假に上述の休止時代を經過したものとして、こゝには張り切つた制作力が、捲土重來の意氣で私を打つ。

遊んでばかり居られなくなつた年ごろの、學藝にこゝろざす少年の、何か心にしつかりしたよりどころを把みたいと願ふ時代の一記錄である。彼は、ゴオガンの描くタヒティ島の土人のやうに日に燒けて水泳場で友達と騷ぎながら、矢張心の空虚に惱んでゐる。二里の遠泳に卒業して歸京したが、直ぐに鎌倉の禪寺へ出かける。それには學校の英語教師に禪居士があつて、その人の影響もあるのである。少年は、頑固猛烈な坊さんの御寺で、まづい飯を喰ひ、曉に起きて掃除をし、坐禪堂に坐る事もする。何かを求め何かを考へ、それが何であるかは彼自身にもわからないが、十餘日は斯くして暮れる。そこへ、赤城山へ行く友達から誘ひの手紙が來る。その山には先輩の小說家松峰順一が居る。彼は心が動いて寺を去り、友達と一緒に赤城へ行く、たつた二週間、人工的な課目の勉強に努力した彼は、山上の無拘束な空氣の中に、想像

したとは違ふ名作家を見出した。少年は人生を抽象一點張に考へてゐた。ところが、「さぞさうだらうと思つて居た松峰は、たゞ眼の前のありのまゝの現實生活を叮嚀に扱つてゐる人だつた。」

此の小說は、たゞ何かを求める少年の心持と、如何なる環境に彼があり、如何なる風景の中で動いたかを、模範的のうまさで描寫した丈で、それ以上の發展には及ばないが、新鮮なる若者の心持は、適確なる表現によつて遺漏なく盡された。その若者の求むる如く、作者も藝術上の立場を求める心を持つ事が、まざ〳〵と窺はれる。その意味に於ても、今日迄の作者の作中、最も重要なるものゝ一つに違ひない。

「女優」は量的に力作であり、こゝにも在來の型を拔け出ようとする意力が認められるが、餘りに事實に捉はれ過ぎて冗長に陷つた。そのくだ〳〵しい話の展開よりも、私にとつて興味があるのは、作者自身と見る可き主人公が、何もしないで安樂に育つた自分にひけめを感じ、とにかく働き鬪つてゆく女優に尊敬を持つ心持である。「一つの時代」の頃には無い、積極的活動の萠芽である。

「南京六月祭」にも冗長感がつきまとふが、これも作者の進歩成長を記念する作品である。

「聖ピノツチエツト」は、私にははつきりと理解出來ないものであるが、恐らくは作者の迷ひが破調を試みさせたのであらう。どう考へても、此の作者本來のものではない。

私は、犬養氏が「一つの時代」の小規模の完成品にあきたりなくなり、どこかに進展の道を打開しようと努力してゐるものと見て來たが、第一の到達點として「亞剌比亞人エルアフイ」を發見した。此の作は「牧歌」よりも更に力の充實した物である。作中の人物の言葉をかりて、作者は自分がこれから求めようとするものをいひあらはしてゐるのではないだらうか。

マラソン競走の優勝者エルアフイは、小說家アンドレ・ジツドによつて自分の力を發見する。ジツドはいふ。

「君は亞剌比亞馬に喩へられたのは不平かね。どうしてだらう。僕に云はせれば君が三年前に見せたのは、あれは美し

い動物力だ。あれこそ僕たちの先祖傳來の力だよ、文明はあれから溢れて來たのさ。(略)僕は神のかはりにこいつを信じて居るんだ。こいつを信じて快活になるのだ。(略)」

エルアフイはジッドの言葉を忘れず、「祖先代々の人間の一番の強みだといふ、限りない動物力を胸一杯に感じて、それを呼吸して、砂漠のなかでこの上なく傲慢になる」のである。たぶん、作者は長い間惱まされたヂヤアナリストの御都合主義的批評や、政爭用具としての藝術論を踏破つて、自分の體內に潜在する祖先傳來の動物力に信賴し、新たなる努力に進まんとするものではないだらうか。

「正直のところ私は「一つの時代」と「南京六月祭」を比べて、前者の方を多く好むものである。それは集中の全作品を貫く純一無垢の感情と形式上の完成美が、私の鑑識にぴつたりとはまるからである。だが、私は二つの集を比べて、「南京六月祭」の方に作家的努力の尊とさを見出す。作者自身が跋文の中で斷つて居る通り「この木から出る聲はひと色でない」。そこには在來の型を破り、先人の影響を脱し、將來に大きい希望を置いて、新境地へ到達しようとする息詰る程の努力がある。若し私の推測するやうに、曾ては靜かなる溫柔郷に美を求めた作者が、動物力を振ひ起して、廣い人生の眞只中に突進しようといふのならば、成敗を別にして喝采し度い。私は、藝術を政黨の實行目的の爲に利用しようとする說をも是認する。たゞ、それこそ藝術價値の高いものだといふ宣傳は否定する。一輪の薔薇の花を描く丈でも、巧みを盡せば立派な藝術だ。私は此のすぐれたる天分を惠まれてゐる若き作者に對し、廣き新領域の開拓を切に望むのであるが、同時に氏が今日迄に錬磨して來た、一木一草を描いても眞と美を表現する自己の腕力に、あらゆる確信を置かれん事を同時に希ふものである。(昭和四年八月四日)



傷痕の背景

豊島與志雄

一

比較的大きな顔の輪廓、額のぶあつい肉附、眼瞼の薄いぎよろりとした眼玉、頑丈な鼻、重みのある下唇、そして、いつも櫛のはのよく通つた髪、小さな口髭……云はゞ、剛直といつた感じのするその容貌の中で、斜に分けられてる薄い頭髪が微笑み、短く刈りこまれてる口髭が社交的に動くのである。むろん、肩幅が廣く、背が高い。前陸軍少佐……。

陸軍少佐の職を弊履の如く捨てた、彼である。退職將校といふよりも、落選代議士といふ感じの方が強い。

酒に醉ふと、右の膝をまくつて見せる癖がある、膝頭より上、大腿部の外方に、

長さ七八センチの、可なり深さうな傷痕がある。

　有吉の例の武勇談……さういつた微笑で、親しい友人等は眼を見合つた。

「天保錢」をねらはず、語學の勉强に力を入れ、外國語學校、大使館附武官、教育總監部、陸軍省……と、さういつた方面を重にめぐつてきて、實戰は勿論、實地兵科の方に緣の薄かつた、そしてそれを一面得意とした有吉祐太郞のことだから、その「武勇談」といつても、ごくつまらないことだつた。然し……。

「君たちだつたら、美事に、横つ腹をぶすりとやられるところだ。それを……その時まで全く冗談だつたが……冗談にせよ、はづみで……ぱつと拂つたのが、腿にきた。彼奴案外眞劍だつたらしい……。」

　そして、そのぎよろりとした眼付に、心をこめて、遠く、上海にゐる杉本浩の面影を、追ひ求めるのだつた。

「不德漢で……卑怯者で……。」

だが、口で云ふほど實は憎んではゐなかつた。何としても、憎惡の念なしに對抗意識が自然とその方へ向いてゆく、親しい對象だつた——感情的にも、思想的にも。

　彼の交友仲間——彼が中立候補として立つた代議士にも落選後、ひそかに結束の機運が醸成されかゝつてる少數の一團——の中には、日本的ファシズムの氣分が多く支配してゐた。その原動力の一つは、彼が大腿部の傷痕にあることは事實だつた。

「彼奴が、日本に舞ひ戻つてきたら……。」

　一種のなつかしみと力の自負とを以て、有吉祐太郎はさう思ふのである。

二

杉本浩は粗末なアパートの一室に住んでゐた。そして彼の生活は、飜譯と、雑文執筆と、讀書と、漫歩と……。

淺草、銀座、新宿、その表通りや裏通りの雑踏の中に、彼の茫漠たる風貌がよく見られた。

いつも一人。古ぼけた帽子の下から、蓬髪の縮れが少し覗いてゐる。肉の豊かな赤みの濃い頬に、そして凹みのある顎に、黒いこは髯が、根強く、芽を出しかゝつてゐる。鼻が目立たず、口が小さく、強度の近眼鏡の下に、底深く眼が光つてゐる……。その眼が、鋪装道路の上に踊つてる衆人の足先を見る。そして彼は考へるのである。——人は次第に、ダンスや靴の影響よりも先んじて、踵より足先に力を入れて歩くやうになつた。これは生活が背立つてる證據だ。もし體重の百パーセントが足先にかゝるやうになれば、その時は、生活が狂ふだらう。——そんなことを、全く沒我的に考へながら彼自身は、踵と足先とに體重の五十パーセントづゝを托して、のつそりと、漫歩するのだつた。太いステッキを引きずつて、和服の襟をはだけ加減に、そして時々朝日の煙を吐いて……。何かしら、茫漠としてゐる。

高層建築、自動車の疾驅、燈火、器械音樂、騒音、色彩、蟻の巣をかき廻したやうな、人、人、人……。

「おい、杉本!」

通りすがりに、聲のした方へ振向いて、足を止めて、相手の顔を見て取る——その眼には、人なつこさうな笑ひが浮びその顔には、よくいろんな男に逢ふものだなといふ表情が浮ぶのだつた。

「どうだい。」

「うむ……。」

漠然と答へる時には、もう眼の笑ひも顔の表情も消えて、掴みどころのない顔付になつてゐた。

「どつかで、いゝだらう、一寸……。」

その先の、酒かお茶かを索しながら、にやりと彼は笑つた。

「駄目だ、今日は……。」

「急ぐのか。」

「いや。……ないんだ。」

「少しなら、持つてるよ。」

「少し……。」そして眼が揶揄的に光つた。「だが、腹が空いてるわけでもなし、喉が渇いてるわけでもなし……。」

酒を飲んでは止度のない彼だつた。また、飲むことにさほど興味を持たない彼、相手の議論を聞くことにも興味を持たない彼だつた。

「いやに、はつきりしてるね。……この頃、何かしてるのか。」

「何にも……。」

その、仕事の上に就ての彼の口癖の返辭だけで、友は滿足して、それ以上は徒勞だと見た。

「ぢやあ、また……。」

「失敬……。」

赤みの多い顏に、蒼白い笑みを浮べて、杉本は、また、雜踏の中の孤獨な漫歩を續けるのだつた。光と色と音との錯雜した卑俗な渦巻きの中に、何を見るでもなく、何を聞くでもなく、背はさほど高くない肉附のいゝ身體を運んで、そして心には、周圍と全く別な、朗かな而も何かしら退屈なものを湛へて……。

倦きてくると、歸りは、バスで……。

金はなくとも、バスの切符はいつも用意があつた。

なぜなら、彼は市街電車が嫌ひだつた。市街電車は、どこから云つても、箱の感じだ――出入口の小さな踏段と、扉と

窓と、堅牢さうな車體と、前後につゝ立つてる制御機の鐵の圓筒と……を以てして。それが人間を一杯つめこんで、二本のレールの上を、のろのろと走るのである。牢獄的交通機關……。だが、バスの方は、フォードの古型でも、まだよい。電車よりも、輕快で、自由で、危險な愛嬌があつて、速力が早い。速力……汽車や高架地下の電車のことを思へばこれが最も肝要な點……。

杉木はぼんやり考へながら、バスを待つのだつた。

そのバスに乘つた或る時——

晝間の散歩の歸りで、沒しかねてる夕日に、慌しい街路がぱつと照らされてゐた。さういふ時刻に、時折、妙にすいたバスが通ることがある——一寸息をついたといふ形で。不安なせかせかした夕方の、ひと時の隙間なのだ。

杉本は一層茫漠たる樣子で、五六人の乘客を、ぼんやり眺めてゐた。

「……賴みますよ。」

聲に氣がついた時、バスは上野廣小路から、切通下で一寸停つたのが、もう動きだしてゐた。車外に、白シャツ半ズボンの、商店の若者らしいのが、ちらりと見えた。

田舍の街道を走る、自動車や馬車や電車などには、殊に夕方など、私用の傳言や品物を車掌に賴むのが、よくある。賴む方でも賴まれる方でも、無償で、親しげに笑つてゐる……。

その、ちらと頭に沈んだ印象に、杉本はうつすらと微笑みかけたが、見ると、女車掌の習慣的な掌で背を支へられて、五六歳の女の子が、ひよいと、入口近くの席に坐つた。

おかつぱの、しなやかな髮。怜悧にませて見える、整つた顏立。金と黄との、胴のつまつた上衣。桃色の短いスカート白の靴下。リボンのついた可愛い、黑靴……。宙にういた足をきちんと揃へて、五十錢銀貨を差出した。

「まさご町……。」

そして、車掌から渡された、切符を右手に、つり錢は、紐のついた赤い小さな金入と一緒に、左手に握つて、肩を斜めに、首をねぢつて、窓から外を見てるのである。

その利發さうな顏、柔かな白い皮膚、支那めいた服裝を、夕日が赤く反映で染めて……。

杉本は、やさしい眼付をその少女から離さなかつた。せめて、つり錢をあの金入に入れてやるくらゐの親切が……と一種の公憤を、疲れてぐつたりしてる女車掌の背中に投げながら、それとは全く別な、少女の可憐な姿を見守つた。

停留場を二つ過ぎて、眞砂町になると、少女はすぐに、切符を渡して、金と金入とを片手に握つたまゝ、車掌の機械的な掌に送られて、バスから降りた。

杉本も慌てゝ立上つて、降りた。

電車通りを少し、それから左へ横丁……。手を振り振り、飛びはねるやうに步いてゆく、少女の後から、のつそりした杉本の姿が、ついていつた……。

三

輕く、形式だけのノックをして、扉を開いてはいつて行くと、待ち受けてたらしい英子の顏と、ぱつたり出逢つた。尋ねるまでもなく、見合せた眼色で、互に、何か變つたことがあつたこと、話があることが、分つた。

「今ね……。」

だが、杉本は氣を變へて、帽子を釘に投げかけると、橫倒しに坐つて、云つた。

「腹が空いた。飯にしよう。」

「え、おきよ。……なあに?」

いつも、自分のことを先に、快活に、話してのけて、けろりとする彼女だつたが、それが、妙に愼重に、尋ねかけてきた。

「何よ?」

杉本は苦笑した。そして變に憂鬱な調子で、バスの少女のことを話した。

無雜作に束ねた若々しい髮、細く長い眉、下眼瞼の圓く開いた眼、理知的に尖つた頤、口角の頰にある贅肉のふくらみ……そのふくらみを中心に、彼女は可愛い笑ひを浮べた。

「それから……。」

「それきりさ。いくら待つても出て來ない。何だかうまさうな料理の匂ひがしてきた。犬にでも吠えられさうだ。急に、腹がへつたのを思ひ出して、歸つてきた。」

「……」

「あれが、自分の家らしい。遊びに行つて、戻つてきた……。待つたつて、出て來やしない。」

「それが、初めから分らなかつたの。」

「ばかな。そんなこと、そんな時に、初めから考へる奴があるか。」

彼女は笑はなかつた。眞面目に、つんとして——多少眞劍な時はつんとなるのが癖で——彼の方をぢつと見た。

「あなた、そんなに子供が好きなの。」

「好きか嫌ひか、分らないが、兎に角、いゝよ、可愛いのは……。」

「そして、御自分には、可愛い子供が出來ないと思つてるの。」

「自分……僕に……？」

「……」

下眼瞼の圓く閉いた眼が、一脈の皮肉を湛へて、光つてゐた。

「ばか……ばか……そんなことを、云ふ奴があるか、そんな……。」

だが、彼女は云つてゐた。

「生殖と、性慾滿足と、性慾享樂……。第一のに立戻ることは、人間の生活が許さない。第三は、頽廢階級のことだ。第二だけが、生活的に正しい……。君は……君は……子供を産んぢやいけない……。また、浪費的に……。」

記憶の奥を見つめた眼付で、舞臺で臺詞を云ふやうな調子で……。

「ばかなこと、止せよ、そんな……。」

彼は立上つて、彼女の肩を捉へ、笑つてゐるその兩の頰を押へ、仰向かして、接吻してやつた。彼女は靜な息をついた。

「どうしたんだ、今日は……何か……。」

「變に見えて？　自分でも分らないわ。いろんなことを考へたの。おかしいわ。ばか、ばかつて、自分に云つでも、ひとりでに、頭の中に、いろんなことが浮んでくるのよ。……あたし、隨分、なまけ者になつちやつたわ。特別にして貰つてゐるけれど、いくらなんだつて、場錢を出す時なんか、おかみさんの前に、顔が擧げられやしない。みんなにも、極りが悪くつて……。そりやあ、そんなことをして、何になる……さう、あなたと同じことを、自分で云ふこともあるけれど、それだつて、生活のためぢやないの。……いゝえ、さうよ。だけど、やつぱり、生活つて、一體、何だらう。ばかげてゐるわ。……女の仕事といふものは、結局、百パーセントの媚を呈しなければならなくなる。男からそれを要求される。要求されてさうなる時には、百パーセントの媚が、百パーセントの犠牲になる。そして……その……百パーセントの

犠牲を拂つて、少しの……十パーセントの生活を……。あ、面倒くさい！　でも、よく覺えてるでせう。あなたが云つた通りよ。あたし、女優になればよかつた。立派に臺詞を云つてみせるから……。頭がいゝんだわ。……安心して、大丈夫よ。よく覺えてるわ。決して、百パーセントの媚なんか……。いえ、五十パーセントの媚も……。それこそ、斷じて！　だけど、あたしが、あんなことしてるのを、やはり、女給なんかに出てるのを、あなたは嫌なんでせう。あたしも嫌。……だと云つて、どうすればいゝの、働くことがいゝんだ！　何をして働いたらいゝの……。そんなこと、頭がくしやくしやしちやつたわ。自分で考へるわけぢやないけれど、いろんなことが、變に……。」

どこか甘へたやうな、笑ひをさへ含んだ調子で、彼女は口を利いてゐた。頭と心とがちぐはぐになつてるやうな樣子だつた。その顏を、彼は見守りながら、底にあるものを探りあてやうとした。

「何か、何かあつたのか。」

「……。」

暫く、眼を見合つて、ふいに、彼女は快活に叫んだ。

「あれがいけないんだわ。」

「何？」

「軍人……將校よ、立派なり、襟に赤と、肩に金線の、軍服をきて、サーベルの背をさして……。あたし、帽子をぬいで、丁寧にお時儀をされて……びつくりしちやつた。」

「誰だい。」

「……アリヨシ……。」

「え、有吉……有吉が來たのか。」

「知つてるらつしやるの。アリヨシと、さう云へば分るつて……。そしてまた、丁寧にお時儀をして……。あの人、なあに？」

「少佐になつたばかりの、なかなかやりてだ。何か云つていつたのか。」

「何にも。たゞ、また來ると……。」

「うむ……。」

「どうした人なの。」

「そら、僕が大變世話になつた田代さん、その親戚なんだ。」

「あら、田代さんの……。あたしが逢つて、惡かつたかしら……。」

「ばかなことを……。」

「あなたと、懇意なの。」

「うむ……一寸した知り合ひで……。」

それ以上、彼は有吉のことを云はないで、口を噤んでしまつた。眼鏡の奥に眼の光を沈めて、心を遠くに走せて……。

二人の生活では、饒舌と沈默とが急に移り變つた。それが、いつしか習慣のやうになつてゐる。

窓硝子越しに、戸外はほのかに暮れてゐた。電燈の光が増した。英子は、有吉のことが氣にかゝりながらも、それを聞くには時機を待つがよいことを、本能的に感じて、と同時に、何だか薄ら淋しく、食事のことを思ひ出した。

粗末な餉臺の上で、じやが藷の煮たのと、鮭の燒いたのと……。

「御馳走はないのよ。」

「斷るまでもないさ。だか、こんなのは、滋養分が多い……。」

「カロリーに富んでる……。」

「また、臺詞か……。」

二人は笑つた。が言葉少なに……。

食後、英子が俗謡を口ずさみながら、元氣よく後片附けをやつてる時、扉が開いて、小林の、日燒けのした、にこにこした額が、そつと覗いた。

「お邪魔ぢやありませんか。」

「やあ、はいれよ。」

杉本の眼は、いつもより、急にやさしく輝きだして、小林を迎へた。

隣室に、二人の大學生と一緒に住んでる、年の若い自由勞働者だつた。一日働いて疲れきつても、仕事にあぶれて時間をもてあましても、平氣でゐた。金はないか、と大學生から云はれると、持つてるだけのものをすぐに出してやつた。大學生が外をぶらついて、自分は仕事がなくて、困りきつても、平氣で水ばかり飲んでゐた。餘り腹がすくと、飯を一杯食はしてくれと、杉本のところへやつて來て、二三度分を一度に平らげて、けろりとして、親方のところへ、仕事を貰ひに出かけていつた。勉強しなくちや駄目だ……といふので、杉本の書物を借りていつた。日々の簡單な手記を、杉本に添削して貰つた。

その一種の日記――二枚の紙を、小林は杉本の方へ差出した。

「これ、今日(けふ)んです。」

「ほう、早いね。」

「今日は、つまらない仕事なんで……。」

だが顔付では、別につまらなくもなかつたやうな……その様子を、杉木は、頭から足先まで一度に抱き取る眼付で、ぢつと見ながら、前日の、赤字で一杯になつてる原稿を、返してやつた。小林はそれを丁寧に讀み分けて、腑に落ちないところは質問した。それを少し寫し出してみれば――

――鐵筋の運搬だ。五メートル物の束を、前方に一人、後方に一人、二人でかつぐのだ。この仕事、力の不公平は、隨つて勢力の不公平は、寸分も許されない。同じ重量が、二人の肩にかゝつてゐる。だが、一種の義俠心と名譽心とから、強い方が前方を受持つ。前方には、重量を支へる以外に、注意が必要だ。鐵筋の頭を、物にぶつつければ、その反動で、肩にずつしり喰ひこんでるやつが、着物越しに、肩當越しに、肉を破る。而も、ぶつつかる危険物は、足場の粗雑な組立のために、隨分多い。かういふ狹いところを、人間の肩で運ばせるのが、間違つてるんだ。だが、狹いから、機械や馬車で運べないから、人間がやるんだ。重い鐵棒に向つて、俺の力で、といふ氣持から、誰も皆、責任感が強い。重量の下に、死んでも、膝を屈ける者や、肩から投げ出す者は、ゐない。たゞ、不注意だけだ。うかと、物にぶつつけて、その反動で肩の肉を破る者は、時々ある。人間には、機械的な注意は……。

そんな風に、まだ續くのを、小林は讀み終つて、首肯いて、出て行かうとした。

「まあいゝぢやないか。」

「隙なんですか。」

「うむ……。あの、例の先生たちは？」

「ゐませんよ。」

「また、君から金をまき上げて、酒を飲みに行つたんだらう。」

「……………」

小林は默つて、薄ら笑ひをしてゐた。

「まだ君は、あゝいふ連中と別れられないのか。」

杉本の鋭い視線を、小林は意外に感じたらしく、暫くその眼付を窺つてから、云つた。

「別れられるとか、別れられないとか、さういふんぢやありませんよ。同縣人で、あゝして一緒にゐる……。だから、一緒にゐるだけです。金のことなんか、向ふにない時、僕にあることが多いんで、それで、持つていくんでせう。あの連中は、酒が飮みたいんです。僕は飮みたくない。だから……。それに、これは僕の修養です。隣人愛といふものが、どこまで持ちこたへられるものか、神といふものが、窮極まで信じられるものか、どうか、そんなことが、やはり問題になつてゐるから……。」

「そんな個人主義は、駄目だ。」

杉本は叫ぶやうに云つて、相手を遮つた。そして、小林がまだぬけきらないでゐる、トルストイ主義のことに、話を進めていつた。――トルストイの凄いのは、隣人愛でも、無抵抗主義でもない。彼の偉大な個性だ。その個性は、結局、個人主義の行きづまりである。彼は個人として、凡てのものにぶつかつていつた。信仰が人を生かすものかどうか、神が正しいものかどうか、そんなことに、個人的批判を下さうとした。人間は如何にあるべきものか。さういふ問題を、個人的に解決しようとした。それは、云はゞ、自然そのものに對する巨人の爭鬪だ。その爭鬪に、あくまで突進したところが、彼の偉大な點だ。然し、そんな方法では、愛も、神も、見出せるものではない。益々影が薄らぐばかりだ……。

杉本はいつになく熱心に、自說を主張し續けた。それに、小林は注意深く耳を傾けてゐた。奇矯にわたる說に出逢つても、驚きもせず、腹も立てず、神妙に聽いてゐるのである。

そしてこの、短く刈りこみ、日焼けの額に老けた筋が通り、善良な眼付と口付……骨格は頑丈だが、營養が不良らしい肉附の、若いトルストイヤンと、茫漠たる風采の杉本との對話……その傍で、それには一言も口を出さず、強ひて理解しようともしないで、英子は、しきりにリリアンを編んでゐた。

赤や黄や紫や白や桃色の、艶やかな絹絲が、サファイアの指輪をはめたしなやかな白い指先に、やさしく戯れて、編臺の上に、留針に刺されながら、單調だが微笑ましい模様を、形づくつてゆく……。

それにも倦きると、彼女は、リリアンの長い一筋を取つて、その切口の、細かな絹絲が無數に亂れてゐる中の、一つを探りあて、すーと引張る。絹絲がほぐれて、長く伸びて……。屈托が晴れてゆくやうな感じだ。ほぐれた絹絲は、絢りの力で、縮れてぼけて、ふうわりと、綿のやうに……。それを彼女は、掌で柔かく圓める……。新鮮な色彩の入り亂れた、宙に浮きさうな絹絲の球が、次第に大きくなつてゆく……。その子供らしい、何か底に熱をもつた、無邪氣な遊びに、英子は眼を光らしてゐた。

杉本と小林との對話は、落付いた足取りで進んでゆく……。

四

有吉が杉本を訪れてきたのは、晩、英子がカフエーに出て不在の時だつた。

杉本は物を書いてゐた。さういふ時の癖で、書き損じの原稿紙を、机の左右に散らかしてゐた。それを無雜作に、室の片隅に拂ひやつて、彼は有吉を迎へた。

有吉は和服の着流しであつたが、當時まだ現役で、短く刈つた頭髮と長い口髭、外氣に曝された皮膚、軍帽に鍛へられた額の肉附、ぢかに露骨に對象へ向けらるゝ大きな眼玉……などを以てして、明かに軍事的なものを一身に帶びてゐた。

そして主客顏を見合した瞬間、その軍事的なものが、互の頭にはつきりと映つた。——杉本は學校を卒業した時、在學中の徵兵檢査で第一乙種合格のため、兵役についての境界線に立つてゐたので、何等かの便宜を望んで、有吉の助力を求めに行つた。すると意外にも、國民皆兵主義の理論にぶつかつた。其後彼は徵集を免除されはしたが、そのため、つまらないことをしたものだと思つたのである。——有吉は其後杉本に逢ふと、彼に後ればせの好意を示すためか、或は世界的思潮に共鳴してか、國費全體と軍備費との數字的比率を持出し、軍備制限の必要を說き、最小限度の軍備に就ての自說を主張した。すると意外にも、極端な軍國主義か全然の軍備撤廢か、初期マホメット教國かイワンの國か、どちらかを選擇すべきだといふ意見にぶつかつた。そして、つまらないことを云ひ出したものだと思つたのである。

「君とは隨分、議論を鬪はしたが、其後……。」言葉を切つて有吉は室の中を見廻した。「相變らず勉强のやうですね。……僕も、この頃、軍事の中だけに籠らないで、一歩ふみ出したいと思つてるから、君に教へを乞はなくちやならんことも、いろいろ出てきさうで……。」

變な挨拶である。その裏の氣持を讀み取らうとして、杉本は、相手の顏色に眼をつけた。有吉は眼を外らして、書棚に並んでる、和洋雜多な書籍を物色し初めた。

バラックとも云つてよいほどの、粗末なアパートの、和洋折衷の室である。四角な區劃、それが、入口の控室で切取られ、押入で切取られ、下が三尺の戸棚になつてる床あきで囲み、奥の室に通ずる襖、硝子戸の六尺の窓……。片隅に机を据ゑて、その横で……。主客とも、何だかその處を得ないやうな樣子である。杉本は、不器用な手附で、茶と菓子とをすゝめ、有吉は、書棚の方へにぢり寄つてゐた。

「ほう、隨分多方面なものが……。クロポトキン……明快な論理ださうですね。」

「少し集めてゐますが、隙が出來たら讀んでみるつもりです。」

「アナトール・フランス……面白いですか。」

「それも、まだ讀んでゐないんです。」

「マジー……と、魔法ですか。これは愉快でせう。」

「それも、實はまだ……。」

「……」

ちぐはぐな問答が續く……。

有吉は坐り直して、澁茶をすゝつた。

「君は、自由に研究が出來て、羨しいですね。僕なんか、隙がないものだから……。それで、ロシア通の話を聞けば、勞農政府に同感してくるし、イタリア通の話を聞けば、黑シャツに同感してくるし、去就に迷ふ始末なんで……は、は、はつ……。」

突然笑ひ出した。が、案外眞劍で……。

「君はどう考へるですか。」

「え?……」

そして二人の間に、全く觀念的な會話が展開していつた。要約すれば――

杉本は云ふのである。――ファシズムには、それ自身二つの矛盾を含んでゐる。ファシズムは元來、ブールジョアジーの攻勢的武器であつて、その對敵目標は、ブールジョアジー以外の凡てにある筈だ。それが、發展の道程に於て、廣く大衆に――小ブールジョアジーのみならず、小農民階級やプロレタリアートの或る層にまで、立脚しようとする。そこに機構的矛盾がある。また、ファシズムは、それ自身の獨裁を目的とする。隨つて、議會政治の無用――立法權に對する執行權

の優越を、肯定するものである。然るに、それを議會政治の基礎の上に獲得しようとする。そこに手段的矛盾がある……。

有吉は心持ち眉をひそめてゐた。が敢て抗辯はしなかつた。杉本はその肉の厚い顔付に、かすかな笑ひを漂はしてゐた。

杉本は云ふのである。――ボルシェヴィキは假面によつて成立つ。彼等一派は、民衆の假面をつけた簒奪者である。民衆の手に政權を戰ひ取つたと稱しながら、實は民衆を戰ひ取つたのだ。十パーセントの讓歩をして、九十パーセントの權力を掌握する。そしてこの權力の獲得と維持のためには、手段と目的とを置換することさへ辭さない。マルクスの理論は正しからうとも、それが彼等勞働政治家の手に渡る時には、そこに反對物への轉化的飛躍が起る。近代の政治は、權力の豫想なしには成立しない。權力の豫想を失ふ時、それはもはや政治ではなくなる。この思想を彼等は理解しない。なぜなら、それは彼等の政治的權力と矛盾するからだ……。

此度は杉本が、かすかな背立ちで眉をひそめてゐた。そして有吉は、薄笑ひを含んで、髭をひねつてゐた。

二人の視線が逢つた時、有吉は云つた。

「君の說は獨特で、なかなか面白い……。」

それが、一閃の光みたいに、杉本の顔を輝かした。思想の底に觸れない相手の微笑が、自然と、彼をも微笑ました。

「なあに、みな受賣りです。」

「受賣り……。」

そして、杉本の微笑につりこまれて、突然聲高に笑ひ出した。

「はつはつは……さう韜晦せんでもいゝでせう。意見は意見だし……。」

云ひかけて彼は、忘れてたものを急に思ひ出したやうに、眼玉をぎよろりとさして、あたりを見廻した。

「一體君は、韜晦癖があつていかん。あの……今日は、どうしたんです。僕に紹介してもいゝでせう。」

「誰のことです。」

「この前、誰か、女のひとが、ゐたやうですが……。」

彼の揶揄的な微笑に對して、杉本は直截に答へた。

「あの女ですか。今日は……出勤してゐます。」

「出勤……。」

「カフエーの女給です。」

「ほう……。そして君と……。」

「共同生活を、一時、してゐるんです。そのうちには、また、別れることになるでせう。」

有吉は、此度は本當に眉をひそめた。下唇の厚いその口から、强い語氣が洩れた。

「いかん、それはいかん。」

有吉は云ふのである。――くらうとの商賣人と遊ぶのは、男として、場合によつては恕すべき點がある。然し、しらうとの女を弄ぶのは、斷じて排斥すべきだ。ヨーロッパの大都市では、男女關係に於て、くらうと、しらうととの區別が、一般に殆んど無視されてゐる。それは、德操が頽廢してる證據だ。日本人はまだ、兩者の區別をはつきりつけてゐる。そこに、日本の立派な德操がある。その德操こそ、日本の善良な風俗を維持するものだ……。

杉本は平然としてゐた。そして云ふのである。――さういふ說は、女に對する封建的な奴隷制度を是認する、誤つた立脚點からのみ出發するものだ……。

有吉は、大きな眼玉を心持ちほてらして、相手の顏を見据えてゐた。長い髭がしやちこばつた。

「理屈と實行とは別だ。君は、そんな……不德な心でゐるから……この頃、川代さんのところにも……。」

「…………」

「自分でやましいと思ふから、顔出しが出來ないのならば、まだ取柄があるが……。」

「それは別のことです。」と杉本はあくまでも冷かだつた。「時々伺ひたいとは思つてゐますが、何だか、共通の話題もないし、餘りに生活の距りが大きいので、たゞお邪魔になるばかりのやうな氣がして……。」

「ばかな、それは君の方のひがみだ。田代さんとは、よく君の噂が出る、君のことを聞かれる……。だいぶ左傾してるやうだが、どうだらう、少し意見を闘はしてみたいものだと、そんなことも云はれてゐた。時々顔を出すくらゐのことは……。」

「それはよく知つてゐます。父が死んでから、ずつと學費のお世話になつてきたんですから、影で、感謝してゐます。僕が、個人的に感謝していゝのは、世の中に、あの人一人くらゐなものです。」

云ひすぎたかな……といふ氣持で、杉本は相手の顔色を窺つた。が有吉は、何か別なことを考へてゐるらしく、煙草を吹かしながら、窓から夜の空を眺めてゐた。やがて、その眼を手首の時計に落しながら、ふいに云つた。

「君のさういふ氣持が確かなら、こんど、田代さんのところに來ませんか。」

「……………」

杉本は、自分の皮肉な言葉が、逆の效果を持つたらしいのを感じた。

「實は、來月、十月の一日に、暑氣のため一月くり延して、震災の思ひ出……といつたやうな主旨で、內輪の者だけが集る筈です。毎年やつてきたので……君も知つてるでせう。……昨年は、君はたしか來なかつたが……今年は是非出たらどうです。」

杉本は、奧深く、眼を光らした。

「昨年も……一昨年も……通知が來なかつたものですから……。」

「手落だな。今年は僕が通知を出す筈だから……。」

「出席しませう。」

その後の沈默に、何かしら敵意らしいものが感ぜられた。有吉は俄に坐り直した。

「長くお邪魔してしまつた……。ではその時までに、こちらも、論鋒を研いておきますよ、はゝゝ……。」

有吉はも一度室の中を見廻して、悠揚たる樣子で歸つていつた。

杉本は、立つたまゝ、灰皿に堆くつもつた煙草の吸殼を眺めた。それから、窓際に腰を掛けた。

「スパイめ！」

だが、變に憂欝に、膝頭に兩肱をつき、兩手に頤をもたして、考へこんだ……。

長くたつてから、彼は顏を擧げて、室の中を見廻した。有吉の來訪が、不思議なものを齎して、彼は自分の住居を、初めて見るやうに眺めたのである。

向ふの隅の、英子の小さな机、婦人雜誌、鳥の羽をさした筆立、電燈の笠にかゝつてる、涼しい色どりのリリアンの編物……。更に、奥の室との仕切が拂はれて、そこに、大きな鏡臺、無數といふ感じの雜多な化粧壜、化粧刷毛、バスケット、派手な衣類が取散らされてる、仰向けの甲李の蓋……。

あの晩、夜更けに、彼女は破れるやうに扉を叩いて、彼のところへ飛込んできた。

「あたし、あたしだつて……意趣返しをしてやる。」

視線を空に据え、下眼瞼と黒目の緣と、二つの圓弧の間の、純白な一線から、大粒の涙を、ぼろぼろとこぼした。それから突然、笑ひ出して、彼の茫然とした顏を、不思議さうに眺めた。いきなり彼の首に飛びついてきた。

「さあ、キスして頂戴、キスして……。それだけ。それ以上は求めないことよ！」

…………………………

英子が歸つてきた時、杉本はまだ瞑想に沈んでゐた。彼女は靜に歩み寄つた。

「どうしたの？」

彼の顏に、苦笑の波紋がゆるやかに擴がつていつた——徐々に夢からさめる者のやうに……。

彼女は急に、彼の肩と頸とに取縋つて、木像をでも抱くやうに、抱きしめた……。

五

座敷には煌々と電燈がともり、障子を取拂つた緣先には、岐阜提燈がまたゝき、庭の芝生には、あちこちに、高張が白面をそば立てゝゐた。それから先は植込で、初秋の星空の下に、高く、黑々と蹲つてゐる……。

座敷の正面、床柱のわきに、主人の田代芳輔は、老いた……といふより、歲月に磨かれた澁い顏を、屈託のない微笑に和らげて、人々の談話よりも、その上を流れる戸外の夜氣を樂しむ樣子で、言葉少なに控へてゐた。縫紋の絽の羽織が上布の單衣の肩をすべつてゐるのは、膝をくずしてゐるからであらう。葉卷の煙が、ゆるく立昇る……。周圍には、年齡の意味でなく仕事の意味での、少壯の、代議士、實業家、官吏など、和服や洋服が、置き並べた食卓を取卷いてゐる。食卓の白布に、水盤の盛花がはえて……料理は質素で、銚子の數が多く……。そして賑かに、だがどことなく落付いて、互に獻酬したり、或は手酌で……。食卓の列の、半ばから後は人がなく、卓布と花と陶器とが淋しさう……。

その、座敷をすてた人々は、庭に散在してゐた。二三ケ所に、卓子の寄合、椅子、長椅子、木のベンチ……。花も卓布もないが、大きな皿に堆く、サンドウヰツチ、菓物、そして、サイダー、ビール、ウヰスキー、コニヤツクなど。和洋

種々の煙草……。強いリクールの、とろりとした液體が、煙草の煙にくもつて……座敷よりも造に、高燈の光と高提燈の光との差を逆に、元氣で粗野で騒々しく……。そしてあらゆる意味で少壯の、或は未完成の、型の出來てゐない人々だつた。

座敷では、時々、銚子を運ぶ女中たちが、酌はしないで往き來するだけだが、無言の色彩を添へてゐた。彼女たちが、提燈の蠟燭を取代へたのは、もうだいぶ前のことだつた。

この、田代家の、大震災紀念の宴は、おかしな集會だつた。料理が粗末で飲物が豐富なのは、多少その名にかなつてゐたが、さうした集りに當然あるべき、婦人や少年の姿は、少しも見えなかつた。そしてたゞ、田代芳輔が、昔の活動範圍内の——今でも一派の絲を引いてる範圍内の、縁故の深い、重立つた、男子ばかりであつた。彼等は、何等かの意味で、田代芳輔が再び起つ——或は新らしく起つことを、信じてゐた。世間には發表されずにしまつた或る對宮中問題の責を引いて、今ではたゞ、餘生を樂しむらしい風をしてゐるが、精力や富力からして、それで終るべき人物ではなかつた。で、この集りでは、大震災の思ひ出も、話の主題となり得ないで、時事を中心とする政治經濟の談話の、隨伴物たるに過ぎなかつた。而も、その政治經濟上の問題も、斷片的に、諷示的に、暗默の理解のうちに取扱はれて、言葉で語られるよりも、言外の氣味合で觸れられることが多かつた。外見、一夕の宴は、世間的な談笑のうちに過ぎていつた。賢明な田代夫人は、早めに形式的に飯を出してしまうと、後の酒宴からは席をさけて、女中たちをも侍らせなかつた。

その全體とは、少し調子がちがつて、露骨に、辛辣に、詭辯的に、だが多少鈍重に、鈍感に、憚りなく談笑してる一群が、庭の一方にあつた。強いリクールの瓶は多く、彼等の手に奪はれていつた。多くの漫畫が、時には田代芳輔自身の漫畫までが、或は細密に、或は横顔だけ、漫談のうちに描かれていつた。哄笑が起つた。さういふ時、彼等の辯として、座り直したり、立上つたり、一二歩あるき出したり……。その中に、有吉祐太郎が、愉快さうに鼻をひねつてゐた。軍服

で、勤五等の旭日章を一つ、胸につけてゐた。赤い太陽と白銀の光線とが、笑ふたびに、光の反映を受けて、茶褐色の服地の上に浮出した……。

時間が過ぎて、夜空に、星の光がました。露の結ぼれかけてる氣配の、植込から向ふは、しんと靜まり返つて……。

やがて、坐敷の方の人數が、少しづゝ減つていつた。田代芳輔は席を立つて、袴なしの細そりした身體を、庭の方へ、一巡、靜に運んでまはつた――居間に引込む前に。

有吉等の一群の横に、高張の柱の影を受けた暗がりに、杉本浩は、卓子に肱をついて、ウイスキーの瓶を引寄せて、無言で、夢想に耽つてゐた。異邦人といつた氣持の、孤獨感の中で、その夢想は幻覺的な形を取つていつた――

――田代さんは、夫人を相手に、夕食の膳に向つてゐる。膳――黒塗りの大きな飯臺、その横手に、彼杉本も、同じ料理を前に、膝を正してゐる。夫人の手で、二人の杯へ、九谷の銚子から、燗のぬるめの白鶴が、代る交る注がれる。その杯と、生物の多い新鮮な料理の箸との、合間合間に、田代さんは、杉本へ言葉をかける。最近の動靜……未來の抱負……日常生活……それも、何をしてるか……何をするつもりか……どんな風か……といつた調子の輕い問ひ。杉本は出來るだけ、當らず觸らずの返事をする。話が、夭折した杉本の父親のことに及ぶ。豪い男だつた、と田代さんは云ふ。君も父の子だ……と。どうにか生活出來るか……と。酒がうまさうである……。年齢の澁みのかゝつた艶のいゝ皮膚、半白の髪、毛の長い眉、底の見透せぬ老成した眼付、意志の頑強さうな口元……。そして、それを包んで、好々爺らしい鷹揚な態度……。酒がうまさうである。が杉本は、酒がうまくない。鼻のつんと高い、怜悧な、勝氣な、瘦せた夫人から、一擧一動を見て取られてる、といふ意識ばかりではない。話が、杉本の身邊のこと以外に、一歩も出ないのである。學費を無條件で支給してくれたばかりでなく、卒業後のことは全く放任してくれてる。有難い恩人ではあるが……。

——俺はたゞ、この人にとつては、酒の肴になるだけのことだ。俺がかうして、御機嫌をとつてるそのことが、俺の犠牲にどれだけの犠牲を要求するか。俺が貰つた學費が、この人の富に、どれだけの犠牲を要求したか。兩者のパーセンテージは……。恩義は、與へる方では、與へることの享樂で償はれ、受ける方では、受けることの感謝で拂はれてる筈だ。……この人は俺に、學費を與へることによつて、奴隷根性を押付けるつもりではなかつた筈だ……。

生活の距りが大きくて、話の接穂がないだけに、杉本は、そんなことを考へるのである。田代さんに、自慢話をするだけの老いこんだ自惚か、杉本に、氣焔をあげるだけの輕薄な自信か、それが少しでもあつたならば、その場は救はれるのであらうが、生憎……。

だが、床柱を背に、後輩の代議士や實業家に圍まれてる田代さんも、やはり、杉本を晩酌の相手にしてる時と同じやうに、話頭の及ばない高みにあつて、にこにこしながら、うまさうに酒を飲んでるのである……。

旋風の中の、そこだけ靜かな、中心點……。この人は今に何かやるな……とさう杉本も思ふのである。——

杉本は顔を擧げた。田代芳輔が通りかゝつてゐた。杉本は立上つた。

「やあ……。」眼にちらと、微笑の閃めきがよぎつた。「ゆつくりしていつてくれ給へ。」

それだけで、彼はもう次の人へ眼を向けてゐた。

杉本はその後姿を見送つた。最初の挨拶の時は兎に角、こんどは何か……。と思つてゐたのが、「ゆつくり議論を闘はしてみたい」どころか、まるで違つてゐた。肩の少しこけた、肉附はよいが小柄に見える、なみの老人にすぎないが……。

田代芳輔の姿が奥に引込むと、元氣な一團の中から、聲が起つた。

「さあ、これからが吾々の世界だ。」

大きな西瓜が一つ、宙に投り上げられた。

「早いぞ、西瓜は。」
「まあ見てろよ。」
先の尖つた大きな三角ナイフを取つて、ずぶりと二つに割つて、中身をえぐつて、ウイスキーを注いだ。
「こいつ、うまいことをしてやがる。」
四方から、大匙でしやくひ取られて、西瓜の一つは見るまに皮になつた。
杉本も、いつか、さういふ仲間に引入れられてゐた。が、多くは默つて飲食するだけで……。手入の屆いた頭髪、口髭、ネクタイピン、勳章、胸のポケットから覗いてるハンカチ、折目の正しいズボン、とも絲の縞紋の羽織、軍服、絽の袴……さういふものゝ中にあつて、彼の皺の多い古い合服が、變に目立つてゐた――それが、彼自身の意識にもうつゝて……。
「西瓜で思ひ出したが、」と杉本の側で聲がした、「震災の時、河岸線を、西瓜を一つ抱へて、一生懸命に走つて行く小僧がある……。走つても走つても、どこも火事だ。息が切れて、立止つたとたんに、思ひついた。西瓜を割つて、中身で喉をうるほして、その皮を頭にかぶつて、大河につかつた。そして生命を助かつたさうだが……。これなんか、恐らく東京中で、一番賢明な奴だつたらう。」
「初めは、夢中で抱へ出したんだな。とかく、智慧は後から湧くつて謎か。」
「後から智慧が湧くどころか、終始一貫、あの時は誰も夢中だつた。君なんか、外は歩けなかつた組だね。」
言葉を向けられた、背の高い、大陸的な風采の男は、昂然と笑つた。
「ばかな、大手を振つて出歩いたさ。そして警戒線にぶつかると、アイウエオやいろははおろか、逆に、すせもひゑしみめゆきさあてえ……。どうだ、云へるか。」

「す……せ……も……。はゝゝ、ばかだなあ。」

「あの時だけは、有吉、君たちの軍服も、感謝の光榮に浴したわけだね。」

「なあに、たゞ、辻々に立つて……街路樹みたいなものさ。」

有吉は事もなく云つて、微笑してゐた。

「街路樹よりも、もつと本物らしいのがあつた……。」

先程から、有吉の軍服と旭日章とをぼんやり眺めてゐた杉本が、ふいに口を開いたのである。皆の視線がその方を向いた。

――九月三日の夜……といへば、戒嚴令が布かれた直後のことである。流言浮説は深刻の頂上に達してゐた。自衛團や避難民で街路は湧き立つてゐる。……が、その間に、まだ電燈のともらない裏通りなどに、變に薄暗い、人氣の少い穴みたいなところがある。そんなところが最も危險だ。特に、廣い墓地を控へた寺の入口など……。その或る寺の入口に、石の佛像が一つあつた。すると、三日の夜、誰かゞ、氣轉を利かして、在郷軍人の、軍服の上衣と帽子を、その石の像にかぶせた。そして、軍服をきた石の像が、四日をすぎて、五日の朝まで、そのまゝつゝ立つてゐた……。畑の中の案山子なんかより、もつと有效に……。

「ばかな！」

有吉が一喝した。

その時になつて、話のおかしな感銘を一同は感じたらしかつた。それが、杉本の口を噤ました。

「愚弄するのか……。」

「………」

杉本は腑に落ちない顔付で、ぼんやり立上つた。その腕を、有吉は掴んだ。

「案山子とは何だ、案山子とは……。」

「然し、街路樹よりも……。」

杉本は突き飛されたのを感じた。それをふみこたへた瞬間、顔の前に、大きな拳が突出された。

「こい！」

醉つてゐた。何のことかよく分らなかつた……誰にも。好奇の色を帶びた眞劍な眼が、幾つも光つた。

大きな拳が、有吉の鼻の頭をこすつて、ぬつと、も一度前に出た——極度の侮蔑で卓子の上に、尖つた三角ナイフが光つてゐた。それを掴んで、杉本の顔に皮肉な笑ひが上つて、どうだ……といつた調子で、つきつけたのが、手首をぐつと引かれた。はづみをくつて、よろけながら、握りしめた手先の力が籠つて、全身の重みがかゝつた……。

杉本は、前のめりに、ばつたりと倒れた。

瞬間の出來事だつた。

次の瞬間、杉本は飛び起きて、顔色を變へて、震へる手にナイフを握りしめてゐた。その腕が、人の手に押へられた。

眼の前に有吉はつゝ立つて、頰に微笑の影を湛へてゐた。が、その右の大腿部の、軍服が裂けて、血が……。

「ば、ばかなことを！氣をつけろ！」

そして彼は、一歩よろめいて、卓子につかまつた。顔をしかめた。眼を落して、腿の血を見た。

「出て行け！」

杉本は、歯をくひしばつて、憎悪に燃ゆる眼を、相手の眼に据ゑた。が有吉の眼は、自若としてそれを迎へた。蔑すんだ色が動いた。

「歸してやれ。」

命令的な、逆ふ餘地のない語氣だつた。杉本の腕を捉へてゐる手は放された。杉本は、ナイフを取落し、首垂れて、歩み去つた。

その時、人々に取圍まれながら、有吉は、急に腿の傷口を押へて、椅子に倒れた……。

六

靜かな、そよとの風もない、星の光の强い深夜だつた。

杉本は古い洋服のまゝ、半身を机にもたせて、坐つてゐた。その額に、今まで見られなかつた皺を刻んで……。口のあたりの頰が、かすかに震へてゐた。

「別れるのは、嫌だといふのか。」

「…………」

無言で、英子は脣をかんでゐた。頰の贅肉がいつもよりふくらみ、顎がいつもより尖つて、自然の媚と我執との、ちぐはぐな顏付だつた。

「僕たちは、互に、奴隸にはならなかつた。それが、僕たちの夢の取柄だ。」

「夢……。」

「……ぢやあない、といつて、生活でも……。」

皮肉な色が、さつと彼女の眼に浮んだ。

「では、何……何なの？」

「何か……僕にも分らない。今になつてみると、間違つてたやうだ。」

「あなたは、後悔してるの？」

「いや、そんなことぢやない。君は、あの男に對する嫉妬心だけで、あんな狂氣じみたことをしてしまつた。嫉妬心の腹癒せ……そんな、ちつぽけな、個人的な心がいけなかつたんだ。もつと怒るんだ、もつと、本當に、腹の底から、怒るとよかつたんだ。」

「怒つたからこそ、……分らないのよ、あなたには。」

「それが、實は本當に怒つてゐなかつたのだ。僕にはそれが分る。今も云つたやうに、僕は今夜、有吉に對して、初めは冗談のつもりだつた。ところが、その後では、本當に憎んだ。もし腕を押へられなかつたら、卽座に刺し殺してゐたらう。……向ふはさうぢやなかつた。初めはわりに眞劍で、後ではもう僕を憎んではゐないやうだつた。それが、有吉との本質的な違ひだ。今になつて分つたのだ。そして僕は、あゝいふ人物に對して、あゝいふ存在に對して、腹が立つた。本當に怒つた……。」

「だから、あたしとも別れようといふの。」

「本當に怒つて、それから、分つてきたのだ。僕は一人だつた、一人ぽつちだつた。向ふは、大勢……あゝいふ階級全部を背負つてゐた。……君だつて、嫉妬心にかられた時は、一人ぽつちだつた。だが、向ふは、あの男は、あゝいふ人間共……あゝいふ生活、それ全體を背負つてゐる……。」

「…………」

彼女は無言で、彼の顏を見つめた。その眼から……下眼瞼の固く開いてる緣から、しみ出すやうに、涙が……。それがこぼれかけた時、急に、彼の頭に縋りついてきた。

「いや、いやよ、別れるのは。」

「淋しいのか、一人ぽつちなのが……。」
彼女はなほ強く、彼の肩を抱いた。
「それを、一人ぽつちでなくなすんだ。」
「では、別れない？」
彼は彼女の手を靜に離して、その額に接吻してやつた。白粉のついた冷い額を、差出して、彼女は眼をつぶつてゐる……。
「分るだらう……こんなことをしてゐては、いつまでたつても一人ぽつちだ。二人できつく抱き合つたところで、やはり、一人ぽつちの淋しい氣持は、無くなりはしない。」
彼女は強く頭を振つた。
「それが、男と女との違ひだ。」
云つたあとで、彼の眼の底は、熱くうるんだ。
「僕は、いつか云つたことを、いさぎよく取消さう。女は、子供を産まなければいけない。子供だ。男は……。僕は、久しぶりに、母のことを思ひ出した。僕がまだ小さい時に死んだ母だ……。」
開いたまゝの窓から、冷い夜氣が流れこんできた。彼は立上つて、窓のところへ行つて、空を眺めた……。
いつのまにか、その後ろに、彼女も立つてゐた。
「どうするの、これから……。」
「澤山仕事がある。先は遠い。ゆつくり、あせらずに歩くんだ。君と別れて、僕は却つて、君と強く結びつくやうな氣がしさうだ。」
「…………」

見返すと、彼女の若々しい髪が、肉體が、電氣の光を滑らして、息づいてゐた。それ全體が、一の抗辯のやう……。

彼はいきなり彼女を捉へて、胸に抱きしめた。

「許してくれ。それより外に、仕樣がないんだ。」

「自由になりたいのね。」

「…………」

「いゝわ。あたしも……自由に……。大丈夫よ。自暴(やけ)は起さないから。」

「誓ふ？」

「…………」

彼女はたゞ笑つた。彼も憂欝な微笑を浮べた。

…………………

隣りの部室には、晝間の勞働に疲れた、若いトルストイアンの小林が、深い寢息を立てゝゐた。

七

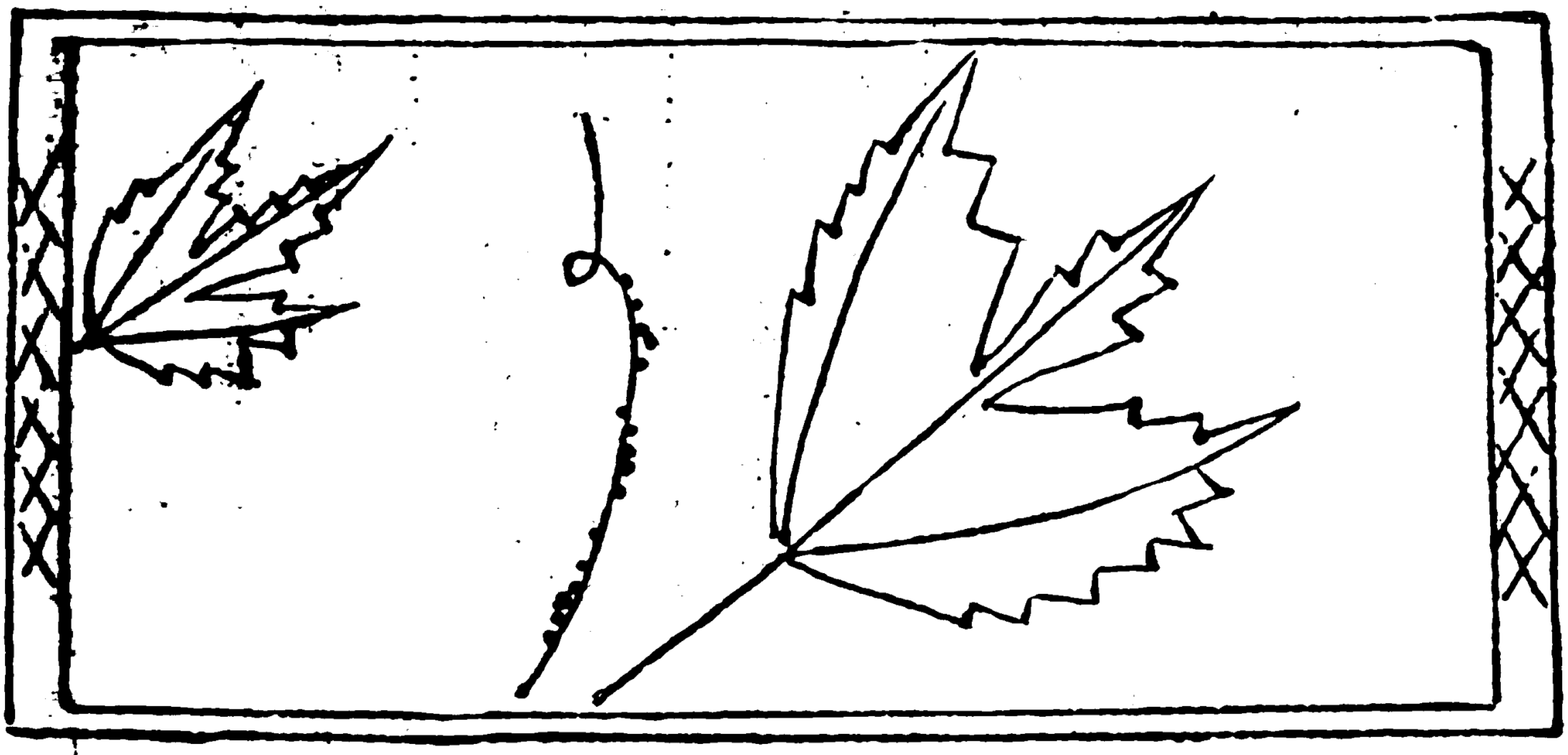
有吉祐太郎の大腿部の傷は、快癒までに二週間を要した。彼はその間に、休職を願つた。そして一年ばかり過ぎて、免官の許可を得た。蔭で、田代芳輔の口添があつたのは勿論である。

有吉は軍服をすてゝ、背廣にかへた。頭髪を伸して、代りに、口髭を短く刈りこんだ。

その頃、杉本はもう上海に行つてゐた……。その斷片的な消息を、有吉は警視廳の内部から得た。

「彼奴(あいつ)……。」

さう獨語しながら、有吉は、やはり憎惡の念を持ち得ないのである。——



S半島の輿論

（十景よりなるメロ・ドラマ）

林　房　雄

序　景

S毎日新聞社の窓は砂丘に向つて開いてゐた。――砂丘を越えれば海だ。

遠淺の砂の色を青々と透かせた波の皺。その一つ一つから、七月の海の光の矢が、鋭い午後の風の中に音をたてゝはねあがる。矢は風に乗つて、甘くむせつぽい海草の匂ひにまじり、松林の赤い幹を斜に縫つて、窓の硝子を直角に射る。……

この外景の透明さにくらべると、編輯室の内部は、花やかな書割を、そのまま裏から覗いてみた、あのごた〳〵と埃つぽく汗つぽい舞臺裏の殺風景さであつた。

壁は破れて、その割れ目から黒く雨の痕が、壁一面に不得要領國の地圖をひろげてゐる。床のアメリカ杉は白髪のやうな鬚をたて、鳶色の節目を頰骨のやうに尖らせて、記者達の哀れな天華靴の穴を、彼等の女房の悲哀にまで、擴大しやうと努めてゐる。その猛惡な床の上には、お定りの椅子と卓。ぼろぼろでがたがたの手と脚をして。――卓の上には紙屑。椅子の上には、紙屑よりはいくらか上等の、若しくはいくらか下等の、主筆を含めて五人の記者。

しかし、これらの紙屑の中でも一番傑作だと考へられる紙屑は、入口に近い壁を占有してゐる×政黨總務某の製造にかかる「衣食足而知禮節」といふ金ピカの大扁額であらうか。なにしろその額の眞下で、夏羽織の袖を肩までまくつた禿頭の主筆――數條の汗と二條の朝鮮鬚を沛然と垂らしながら、一日中腹の減つた蜂のやうにぶうぶう唸つてゐるその姿が、扁額の儀禮的な文句の「逆も亦眞」であることを身をもつて證明してゐるようといふのだから。

主筆が一日中唸つてゐる原因は、彼の前に山のやうに積まれてゐる無慮三十種の新聞紙の中にある。少くとも五六十時間は過去に屬するこれらの中央のニュースは、近村の漁夫の伜である善良な給仕によつて毎朝主筆の卓に運ばれる。それを元郡視學の履歴を持つ主筆は、彼の朱筆を靈感的に斜にかまへながら、隅から隅まで音讀するのである。音讀が突如として途絶える時は、記事の一つが、彼の明敏な頭腦中樞を見事に刺戟し得た時である。その時、彼の鋏が活躍し、糊壺の蓋がとられる。つまり「貴重なる紙面」を埋めるための記事が、糊と鋏と元郡視學の靈感によつて瞬間に速成されるのである。――かうして毎日、午前十一時から、午後四時にかけて、腹のへつた蜂の勤勉な唸りがつゞくと、四六半裁四頁新聞の各面が大半埋まつてしまふ。あとの餘白は、「敏腕な」四人の記者――前小學校教員、前繭仲買人、前×政黨院外團その他が足或は腕を用ひて兎も角も埋めてしまふ。

それがS半島の輿論である。――右のやうな手工業過程によつて製作されるS每日新聞が、半島唯一の文化機關として、全半島の全階級――廻船問屋、網元、地主、小銀行家、旅館業者、芋燒酎釀造家、私營鐵道株式會社、養蠶業者、郡

教育會員、竝びに輿論の被害者としての半島中部の農民、沿岸三千の漁夫、また例へばS毎日新聞社の階下全部を占める印刷工場の職工によつて代表される小工業の勞働者從業員――の輿論を、兎も角も生産するのである。そしてこの輕便輿論作成器の持主といふのは、どこにもある型の如く、×政黨代議士であり、K鐵道會社重役であり、橋本銀行頭取であり、郡教育會の名譽顧問であり、兼ねてその他等々である橋本久六氏であつた。

この橋本代議士の東洋的に悠長な肩書は、編輯室の選ばれたる記者達にとつて、大きな誇りであるに相違なかつた。何故なら、彼等はすべて悠長にして儀禮的なるものに、敬意と誇を感じ得る充分に東洋的な記者達であつたから。

この編輯室の事大主義は、同時に半島全體を支配してゐる氣分であるといへないこともなかつた。繪畫的に寫していへば、つまり光琳風の傳統の波に周廻三百哩を洗はせて、半島は靜かな綠色の眠りを眠つてゐる、ともいへるのである。

第二景

編輯室の八角時計は二時をまわつた。

窓の外では、太陽と波と潮の香が、それぞれその高度を增したが、部屋の中の空氣は、その溫度に逆比例し、堪えがたく弛緩して、記者達の眠りを誘つた。

「ああつ、あつ！」

こらへかねた記者の一人の、思ひきつた大欠伸。禿の主筆は、蜂の唸りをぴたりととめて、眼鏡越しにちらりと、不埒な記者の方に習慣的な睨みを送つたが、その瞬間、自分の眠氣に急に氣のついたといふ顔をして、ああつと背のびをすると、出かけた欠伸を齒の缺けた口に含んだまま、あたふたと便所の方に立つて行つた。

「おい、印刷屋！」

主筆の中座が作り出した空氣の弛みを巧みにつかんで、さつきの大欠伸を見事に皮切りした新井といふ前院外團——これも主筆に眞似て絲のほころびかけた絽の羽織を、毛蟲のやうな肩までまくりあげた、頤髯の赤い反齒の記者——が、はるか末席、といはふか、つまり主筆の椅子から遠く、一番窓に近い、だから實は夏向きの特等席に座つてる若い記者の方に呼びかけた。

「おい、植字屋。ひどくめかすぜ。机の上に鏡なんか立てて。…………三面の艶種を自分でこしらへようとでもいふのかい。」

聲にふり返つて一同は窓際の椅子をみた。そして意地の悪い笑ひをふふつと笑つた。

通稱「印刷屋」の山本啓助は、つい二月ほど前、階下の工場から拔擢された、つまり前小學教員、前繭仲買人、もしくは前院外團等の正常な經歷を有してゐない變態な記者である。その上彼は「渡り鳥」である。生れだけはどうやらこの土地らしいのだが、都會から都會を流れ歩き、烈しい近代の氣風を身にしませた敏捷で油斷のならぬ渡り者である。第一の資格に於いて、彼は知識階級の中の勞働者階級であり、第二の資格に於いて、彼は田舍に於ける都會、故鄕に於ける異鄕であつた。當の拔擢者である主筆を除く、編輯室全體の、身分的並びに地域的排外主義（ショービニズム）が何かにつけて彼を目の仇にするのも、また半島の新聞社らしい牧歌的當然さであつた。「印刷屋」または「植字屋」といふ蔑稱は、その敵意の端的な(少くとも記者達にとつて)表現であつたのだ。その「印刷屋」が、机の引出しからとり出した小鏡を、部厚な漢和大辭典の上におつ立てゝ、面皰（にきび）でもつぶすやうな妙な格好をして、しきりにそれを覗きこんでゐようといふのだから、院外團の新井としては、主筆の中座を機會に、全編輯室の意志を代表して、おい印刷屋、とどなつて見たくもなつたのであらう。

しかし、啓助はそれに答へなかつた。淺黑い顔の中で、やや釣りあがつた太い眉を一寸よせ、ひどく横着な眼差しで一同の顔をぢらりと輕く撫ぜまわすと、ふんと鼻を鳴らさないばかりの表情をして、また机の上の鏡をじつと覗きこんだの

であつた。
「妙な笑ひ方をするぜ。」と新井はからんで行つた。「そんな笑ひ方が東京ではやるとでもいふのかい。」
「結構な御身分だよ。」と前小學校訓導がまづくひきとつた。「仕事の最中に鏡を覗こうなんて、女でいつたら、日髮日化粧といふところで、さしあたり港新地のあれだなあ。」
どつと一同が笑つた。が、それにも啓助は答へなかつた。顏色さへも動かさずじつと鏡の中を覗きこんでゐる。
しかし、彼の剛腹な態度よりも、もつと奇妙なのは、問題の鏡の中に映つてゐる風景であつた。三寸四角の光りの湖の面に浮いてゐるものは、彼の、ちよつと田舍まわりの二枚目くらいにはふめさうな、淺黑い、威勢のいい顏ではなくて、窓の外の眞蒼な空、その下の圓つこい砂丘の肩、砂丘の肩の赤い小松の幹の間を白く斜に走つてゐる、町に通ずる小路であつた。
「リリリン！」
壁の上で電話が鋭く鳴つた。
外からの電話は、啓助の受持である。しかしそれにも啓助は立ちあがらなかつた。ちよつと立ちあがるわけにはいかない變化が、鏡の中に起つてゐたからである。――眞蒼な空の下、砂丘の肩の白い路の上に、血の色をした薔薇の花辨が一つ、ぽつりと現はれてきたのである。眞赤なパラソル！……松の緑の間をくるりくるりとまわりながら、鏡の右の端から左の方へ鮮から朱線をひいて移動してゆく。
「リリリン！　リン！」
たまりかねたらしく、そしてさつきの默殺の腹いせをも含めて、前院外團がどなつた。
「電話だぞ。聞えないか、馬鹿！」

「今行くよ。」

のつそりと立ちあがつたが、それでもすぐには歩きださず、ちよつと窓の外をふりかへつて、現實の砂丘の肩に現實のパラソルがくる／＼動いてゐるのをゆつくり見極めてから、さて唇の隅でにつと笑つて鏡を倒し、癇癪を起して痙攣してゐる電話の方にのろのろと歩いていつた。

第三景

電話は、S町の町長であり、私設K鐵道會社の社長であり、兼ねてこの新聞社の株主でもある山崎茂兵衛からであつた。

「はあはあ、例の埋立地問題について、……は、承知いたしました。」

啓助は筆記の用意をしなければならなかつた。役目柄である。彼の横着も電話口までは通用しなかつた。

「はあはあ……今後の生活を保證されざる限り、現在の漁場竝びに住居を放棄することは出來ぬ、といふ漁夫側の主張。……それではK鐵道の延長は不可能となり、ひいてわがS半島發展を防害する。……はあ、わかりました。……で、會社側も讓歩して、なるほど。……先づ埋立工事中は人夫としての優先權を與へ、埋立完成後は、向ふ一ヶ年間の地代を免除する。……漁夫組合の代表者は、一應考へてゐるといつてひき下つた。……は、確かに書きとりました。で、なんですか、これを新聞にはどんな風に書けばいいのですか。……はあはあ、今次の埋立工事は、土地の發展と國家的見地から見てあらゆる犧牲を忍んで決行さるべき事柄であつて、……しかも會社側はすでに最大の讓歩を行つてゐる。漁夫側も目前の利害に左右されることなく、會社と一致協力することによつて埋立完成のために努力すべきである。……縣當局もその意見であり、漁夫組合の有志の間にもその意嚮がある。……と、そんな風に。は、わかりまし

た。」

啓助が電話を切ると、便所から歸つて來た主筆が、人のいい禿頭をふりたてながらたづねた。

「埋立問題かい。――どう、うまく行きさうかな。」

「どうですかね。兎に角國家的見地からいやでも成功させなければならぬといふ町長の電話でしたが。」

「それはさうだらうよ。無理にでも成功させたいだらうよ。成功すれば、うちの社長にも山崎さんにも、輕くみて五十萬ばかりの金が轉がりこんで來るのだからな。」

「主筆、五十萬どころじやありませんよ。三百萬です。三百萬。」

と、横から前訓導が、自分のことのやうに昂憤して口を入れた。

「どうして〳〵そんなはした金ぢやありませんよ。」と、今度は前院外團がのり出した。「政府の鐵道買上は、一哩百萬圓あたりでせう。それにどうです。口ノ津から蛙子岬へかけてずつとあの邊りの土地は、みんな社長と町長の土地ぢやありませんか。政府の買上を見越して何哩か鐵道を延長しておき、地價の騰りをかすらうといふのだから、大仕事ですよ。それに口ノ津は噂によれば、縣の築港豫定地だといふぢやありませんか。」

埋立地問題は、ここ數日間編輯室の話題であつた。俗に口ノ津と呼ばれてゐる同じ名前の漁村を懐に抱いた三哩餘りの美しい入江、それはS町から二哩ほど南にあたる、半島有數の漁場である。土地一帶がいつのころからか、橋本家と山崎家の共同所有といふことになつてゐるところから、當主の橋本代議士が、升黨内閣への鐵道賣込みを策畫し、その豫備行動として口ノ津埋立を計畫したのだが、迂濶にも鐵道延長についての主務省の許可を得ない先に埋立の計畫が漁民側に洩れ、思ひがけなく激しい反對運動を惹き起したのであつた。

「だが、結局漁師側の負けでせうな。」金の話しから急に話頭を轉じて、前小學訓導は政治論に移つた。「何しろこつち

には縣廳があるし、それに吾黨內閣だし、我がS毎日新聞の力だつて馬鹿にはならぬし、……さう〳〵、この前のM郡の同じやうな問題の時だつて、漁師側が結局騷ぎ損の泣き寢入りでしたね。」

「だけど、主筆。」と新井が口をはさんだ。「今の電話の樣子ぢや、漁師側も今度はひどく腰が强さうぢやありませんか。」

「そりやさうさ。」主筆は胡蝶に火をつけながら答へた。「何しろ口ノ津村四百戶の漁民の死活問題ぢやないか。……いくら人夫に使つてもらはふと、向ふ一ヶ年の地代が倍にならうと、暮しの根をきられちやそれこそ陸の上の漁師で、あがつたりだからな。騷がぬ方が間違つてゐる。第一、一ヶ年過ぎたあとの地代はどつから出る。埋立地から魚の石炭が堀り出せるわけぢやあるまいし。……それに會社側にも弱みがある。早く縣廳を抱きこんで主務省の許可をとつてしまはなかつたといふね。」

「ぢや一つ、そんな風に――主筆の意見通りに、記事をつくつてみちやどうです。」

橫から啓助が、いきなりさういつた。

「うう、冗談いつちや困る。」主筆は唸つた。「今のは俺個人の意見ぢや。個人の意見と新聞の意見とは違ふ。新聞は天下の公器ぢやから。はは、……さうぢやないか、君。」

「ぢや書きませう。山崎町長の國家的見地に從ひましてね。」と啓助はとぼけた調子でいつた。「何行くらいです、主筆。」

「たつぷり百行。――三段に拔いて、三面のトップだ。」

「そんなにはのばせないでせう、實地調査でもやつて、漁師側の委しい樣子でも調べてこない限り。」

「なあにのばせるよ。」主筆は得意さうにいつた。「さつきの電話筆記をよこし給へ。重要記事ぢやから、今度だけは、わしが書いてやらう。」

主筆は、筆記を左手に持つて、例の音讀をやりながら、ザラ紙の上に鉛筆を走らせた。だが、五六行書いてから、ふと

筆をとめ、啓助をふりかへつて彼はいつた。

「ぢや、君。君にはね。これからすぐ實地調査の方を頼もう、口ノ津村の様子を委しく探つてくれ給へ。どうせこゝ半月餘りは、三面はこの問題で埋まりさうぢや。俺一人で書くわけにもゆくまいから、一つ君にその方の擔當といふことになつてもらはう。」

「承知しました。」

啓助は、壁の上の上着をつかんだ。つかむ拍子にちよつと身を沈めて、窓の外を見た。が、砂丘の上の赤いパラソルは、もう空に消えて、あとは午後の陽炎にゆらめく烈しい砂地の色ばかりであつた。

第四景

S町は古い港町である。だから日が暮れると、川千鳥の群が笛笛のやうに鳴いて飛ぶ。月の遅い夕闇の底で、ひたノ＼と潮の滿ちてくる、あの懷古的な氣配も感ぜられる。内海航路の汽船の赤いシグナルの灯が、港の外の闇に搖れて、碇泊船の船底から抜け出して來た水夫達が、派手にめかして、暗く花やかな提灯の間を歩きもする。――古い港町の定法としてS町の半分は色街である。

「下手な網を引くよりか女の子を生んだ方がよつぽどましぢや。」といふ諺ともつかないものが、この半島の漁村には生れさへしてゐる。漁師の娘達は、小學校にあがらない先から、踊の稽古に通はされる。

海岸にはずらりと藝者の屋形が並んでゐる。船の上から見ると、海に開いたその窓々が、何か艶めかしく祕密な花に見えると、水夫達はいふ。――

今晩の啓助の氣持も、どつちかといへば、その水夫達の氣持に近かつた。いや、もつと積極的でさへあつた。例へば星

根の上を忍んで渡る牡猫の幸福、そんな種類のいくらか道化た幸福が、胸の奥に、温い蜜のやうにねつとりとたまつた感じであつた。

査問、實地踏査なるものを主筆に命ぜられて、殊勝げに編輯室を出るには出たが、問題の漁村の方には足さへ向けず、そのまゝ下宿に歸つて、彼はごろりと寢ころんでゐた。日が暮れるのを待つて、一風呂浴びて浴衣に着換へ、海岸の藝者街の方へ、ぶらり〳〵と彼は歩いてゐるのである。

そこにはお英が待つてゐた。お英は啓助の幼なじみである。潮風に乾いた眞赤な髪をした小さい彼女と、波打際の白い貝殼の上で、むかし二匹の小犬のやうに、ころび合つて遊んだ思ひ出を啓助はもつ。そのお英が今は、港新地の「名妓」であり、名前も偉らさうに英龍といふ。

お英の屋形の、港のみえる二階で、二人が向ひ合ひになると、お英はいつた。

「どうしたの、今日は窓から顔を出さなかつたぢやないの。」

「うん出さなくつたつて見る法はいくらでもあるさ。何しろモダン・ガールでもさしさうな眞赤なパラソルなんだからな。」

「ぢや窓の中からこつそり見てたつてわけなの。」

「なあに、ちやんと机に座つてさ。……種をあかせば、机の上に鏡をおいてそれに寫してみてゐたのさ。」

「相變らず惡がしこいのね。」

ちらりと白い齒を見せ、お英は啓助のコップにビールをついだ。ぐつとほしてから、啓助は思ひ出して聞いた。

「だが今日は、丘を越へて先きの方に行つてしまつたぢやないか。どこへ行つたんだい。また一人でこつそり泳いだわけぢやなからうな。」

「家に歸つて來たのよ。」

と、お英は答へた。

「どうして、珍らしいことがあるもんだな。」

「うん、少々お金をもつて行つてやつたのさ。ほら、埋立問題で、村は大騒ぎでせう。みんな八幡樣の社に集つて、わい〳〵やつてたわ。そこへあたしも飛びこんで行つて、皆さんしつかりやつて下さい。あたしは女でこんな稼業をしてゐるけれども、もとをたゞせばこの村の漁師の娘だ。聞けば町長と橋本の旦那は、今度の埋立でしこたま儲けるといふ話。向ふが儲けてこつちの千人近い口が干上る。そんなわけのわからぬ話はない！」

「ようよう、女辯士。」

「厭や、あんたは！」お英は子供のやうに、本氣に、啓助を睨んだ。「醉つぱらつてるんぢやないわよ。眞面目に聞かなきや駄目。……それからあたし、いつてやつたのさ。あたしや、この問題が片付いて村の人達が勝つまで、町長や代議士や、そいつ等の一味のお座敷は、片つぱしから斷つてやる。もしも村の人に意久地がなくて負けるやうなことがあつたら、もうあたしやこの土地なんかにゐやしない。支那にでも南洋にでも飛び出してやる。――とそういつてやつた。」

「偉え元氣だ。ぢや俺はどうなるんだ。俺は橋本の新聞社の記者ぢやないか。」

「そうよ。あんたは記者よ。橋本の一味よ。」

「一味どころか、俺あ今度の事件の報道主任だ。」

「報道主任？……何、それ？」

「埋立事件に關してさ、嘘でも本當でも構はないから、兎に角社長に都合のいゝ、漁師側に都合の惡い記事をデッチあげるその主任さ。」

「どうせそんなことだと思つてゐた。……だからあんたを呼んだのさ。」

「え？」

「だから村の方へ歸る時に、恥かしいのを我慢して、わざわざ合圖の赤い日傘をさして行つたのさ。今晩なんか、大して食ひたくもなかつたのだけれど、どうせあんな新聞社にゐる限り、碌な役割は引受けないだらうと思つてさ。それで呼んでやつたのさ。」

「贅澤をいふない。畜生。」

「贅澤どころぢやないわよ。……でなんなの、あんた、その報道主任とかを引受けて、社長の御用をつとめるつもり？」

「どうせそうだよ。昔は漁師の子でも、渡り者の植字工でも、今は立派な新聞記者様なんだからなあ。今更漁師や鹽者の味方なんかする氣はさらく\ねえよ。」と、ちやぶ臺に手をついて腰を浮かせ、眞顏になつたお英の顏を覗きこんで、にやりと笑ひ、「と、いふわけで、今夜はこれであばよといふことにしやうかな。」

「ぷつ！」

お英がふき出した。啓助も一しよにはつはと笑つた。

「まあ座つてお飲みなさいよ。あばよと歸れさうな、思ひ切りのいゝ顏でもないわよ。」

「ビール一杯で、新聞記者買收か。」

と腰を下ろす。

「どうせ印刷工上りの安記者ぢやないの。いくらお高くとまつても、人が買はないわよ。」

「うるせえ、俺あ歸る。」

「えゝ、さようなら。お歸んなさい。」

とお英は立つて來て、啓助の横にぴたりと座る。

女の、白く通つた鼻筋を上から見下すやうにしながら、

「やい、英公。こう見えても俺は……」

「わかつた、わかつたわよ。」

膝の上から白い腕がのびて、啓助の言葉の續きは、女の唇の中にそのまゝ吸ひとられてしまつた。

第五景

沖は靜かにないでゐる。南の海に特有なコンクリート色の岩雲が、水平線の上に堅く積み重り、空はその上に銀板を磨いたやうに展がつて、鋭く人の瞳孔を刺す。

蔭を許さぬ眞晝の風の中を、社長橋本代議士、昨夜到着した若い測量技師、それに記者の啓助を、窮屈に詰めこんだ古い箱型のシボレーは、汗ばみながら走つて、松林の間の砂の上でガタガタと止つた。

自動車のウヰンド・グラスには、藁屋根の一聚落を深く懐に抱きこんだ、砂の白い入江の景色が映つてゐる。兩側に長く突き出た岬には、鬱蒼と葉のこまやかな木の色が繁り、少し離れた沖合には、これもこんもりと緑の小島が一つ浮いてゐる。魚群は岬と島のあの青い影の中に密集するのであらう。——問題の口ノ津入江の景色であつた。

「なるほど、ちよつと勿體ない眺めですね。」

東京者らしい若い技師は、測量機械の入つた黒い鞄を車の中からかつぎ出しながら、啓助に向つてさういつた。

「だから漁師も騒ぐんでせうよ。——名勝保存の見地からね。」

啓助はさう答へて、底の曲つた白靴の先で、砂の間の眞白な石をぽんと蹴つた。

「水の底まで、眞白なんですね。」

石の行衛を眼で追ひながら、技師は今氣がついたらしく感歎した。

「それはね。」と、橋本代議士がひきとつて、博學に説明した。「今から約四五百年前のこの海岸は、俗に白山といふ眞白な石と土で出來た山だつたんだそうだ。それが半島名物の地震と海嘯とで、だんだんに壞れ、遂に大陥沒をやつてこの入江が出來たのだ。砂の白いのはそのせいだといふ。——なにしろ昔は山だつたんだ。だから今、吾々がそれを埋め立てたからといつて、別に名勝保存の主旨に反するわけでもなからうぢやないか、はつはつは！」

「ほゝう、なるほど。……ぢや漁民の反對も歴史的にみて成立しないわけですね。」

お追従にうなづきながら、技師は松の根元の小高い場所に三脚器を立て、その上の測量器を、機關銃のやうに口ノ津村に向けて廻した。

啓助は上衣をぬいで松の上に腰を下ろし、白い陽炎の中でぎらぎら燃えてゐる村の藁屋根を眺めてゐた。——村は死骸のやうに靜まつてゐた。砂濱には、底の乾いた舟が並んで、その廻りには灘のぼやけた網が、汚れた屍衣のやうにひろげられてある。

問題が起つてから今日は十日目であつた。漁夫側は會社の條件を拒絶して、埋立絶對反對を聲明した。會社側は、しかし、平氣で計畫を進め、今日は代議士自身のひそかな下檢分といふところまで漕ぎつけた。

「おい、君。」

啓助が振り返ると、橋本代議士が榮養のいゝ顏を變にしかめて、立つてゐた。

「どうかしましたか？」

とぼけた聲で啓助は聞いた。

「何だか妙だな。」籐のステッキの先きで村の屋根をさしながら、代議士はいつた。「海にも渚にも人影がないぢやないか。どこかに集つて不穩な相談でもやつてゐるんぢやないかな。」

「おそらくさうでせうよ。」輕く笑ひながら啓助は答へた。「なにしろ死活問題ですからね。だけど毎日毎日八幡様に集つて、小田原評定をやつてゐる間は大丈夫です。たちの悪い指導者でもゐて、暴動てなことでもやられたら、ちよつと問題も大きくなつて、自然縣當局の態度にも影響し、主務省への上申の手加減も變つて來ませうがね。しかし、漁夫側がその奥の一手を知らない限り、まあ勝利はこつちのものでせう。それに社長の手廻しは何しろ早いし、縣當局の諒解はもうすつかりこつちのものでせう。内務部長は明日來るんでしたね、社長。」

先刻自動車の中で小耳に挾んだ社長と技師の會話を確めやうといふ啓助の腹だつた。

「あゝ來るよ。その點萬事ぬかりないさ。」

社長は心から得意らしかつた。

俺はまだ忠實な社員だつた。――啓助は心の中でニヤリとしながら、また續けた。

「何しろ政治は力ですからね。例へば現在漁師側に味方する反對派の新聞があつたとしても、漁師自身に力がないんだから、つまり團體行動で押してこようといふ智慧も氣慨もないんだから、折角の輿論も役立たずです。しかも、この半島の文化機關はわがS毎日新聞だけだときてる。」

「待てよ。」代議士があわてゝ眼鏡をかけなほした。「ありや何だ。あいつ等、こつちにやつて來る！」

代議士が指差す方向には、なるほど、一つの奇妙で重要な變化が起りつゝあつた。午後の陽炎の中に死んだやうに靜まつてゐた日ノ津村の藁屋根の間から、眞黒な河が海岸に向つてどつと流れ出して來たのだ。鋭い光の中で裸の肩や胸が青

銅色にぎら／＼光る、それは不氣味な人間の河であつた。

「俺達を見つけたのだ。こつちに押しよせて來る！」

明かに代議士は度を失つてゐた。

「なるほど、こつちにやつて來ます。」

啓助もぴよこんと立ちあがりながらいつた。

「おい君、技師君。」少し離れて熱心に三脚器をのぞいてゐる技師の方に代議士は叫んだ。「引き上げるんだ。今日は下檢分だから、これでいゝ。」

群衆の流れは、砂濱の上できら／＼輝きながら近付いて來た。怒鳴つてゐる聲が聞え、先頭の男がふりまわしてゐる太い棒切が黒々と不氣味に光るのが見えた。

代議士は行儀の惡い鞠のやうに、方々にぶつゝかりながら自動車の中に轉げこんだ。

「早く早く。——馬鹿共の相手になつちやをれん。」

啓助に續いて、三脚器を擔んだ技師が乘りこんだ。車が爆音を立て始めると、代議士は漸く威嚴を取り返した。

「あいつ等は、我輩に暴行でもしやうといふつもりかな。——ふん、笑はせるよ。」

窓の外の松の木が動き出した。遠くうしろの砂濱から、わつといふ歡聲が湧き起つた。が、それも自動車の速力と共に次第に遠ざかつて行つた。

車が丘を登りきつた時、啓助は大きな聲を出した。

「社長。一寸降ろして下さい。奴等の行動をもつと探つて來ませう。たしかに、不穏な暴行行爲ですからね。」

「うん、そうか、よろしい。」

ブレーキがギイッときしつた。啓助は砂の上に降りた。ガソリンの煙を殘して車は丘の下に走り去る。振り返ると、四五丁離れた彼方に、棒をふりまわしてゐる勇敢な追跡隊の前哨が見えた。啓助はとつさに身をひるがへすと、波打際に續く萱と野茨の繁みの中に飛びこんだ。

第六景

うしろに、獰猛な追跡者さへゐなかつたなら、そのまゝ芝生に寢ころんで、野茨の白い花の間から、眞蒼な空を大きくふり仰いで、啓助は胸の底のぬけるほど笑つて見たいところだつた。

誰に敎はつたのか、漁師達は政治は力であるといふ原則を體得した。この新しい原則の前に、代議士は蹴飛ばされたフットボールのやうにころんで逃げた。

さて、この次に必要なものは！——しかし、そこまで考へてゐる暇はなかつた。何よりも先づ逃げなければならぬ。追跡者はもううしろの丘を登り始めたかも知れない。行手はぐみの木の繁つた小さな崖であつた。彼は白ズボンの濡れるのもかまはず、ひらりとその崖を、波打際までとびをりた。そして砂地を一散に走つた。

が、砂の上を十分走れば、漁師さへも息を切る。新聞記者の啓助はやがて疲れて、貝殼の上に、べたりと座つてしまはなければならなかつた。振り返つてみると、幸ひに追跡者の姿はもう見えなかつた。

「俺がここでつかまると——却つて面白かつたかも知れないんだが。やれ／＼。」

心の中で、冒險家らしくそんなことを思つて、啓助はズボンの砂をぱたぱたと拂つた。

しかし、氣がつくと、そこはもう、丘を一つ越せば港新地の見える地點であつた。

「さあて、これから一つお英に逢つて來ようかな。」

彼はまた崖をはひ登り、入江に沿ひながら町の方にぶら〳〵と歩き始めた。

「どう見ても今度は端役だな。」歩きながら彼は考へた。「やつぱり新聞記者なんか、俺には似合ひの役柄じやなかつた。……だから端役は端役らしく、輕くさつぱりと演じのけて、それでこの土地にも、さようならといふことにしようかな。」

ひどく走つたので、息があがつて頭がぐらつく。崖が切れて大きな岩が海中に突き出し、松の木が、水に紫色の影をつくつてゐるところまで來ると、彼は風をとるためにまた腰を下した。

腰をおろした瞬間に、しかし彼は妙なものを發見した。眼の下の波の間に見事な拔手を切つてゐる眞白な人間の身體である。女だ！　素裸の女が泳いでゐる。麥藁帽こそかむつてゐるが、身體には文字通の一絲もまとはぬ素裸である。尤も女がすべて漁師の娘であり女房であるこのあたりとしては、素裸の女はたいして珍らしくない。しかし、——女の泳いでゐるあたりは、岩に抱かれて水が淀み波の動きが小刻みであつた。だから伍體の色が眞青に透けて、ちやうど飛行機からみる魚の腹のやうに、女の身體はきら〳〵と光つた。片腕が水を離れてさつと拔き手を切ると、胸と腰の線が彈力的にもり上つて、長い兩脚の色が、水中の太陽を斜めに青く照りかへした。

啓助は岩の上を探した。女の着物を探したのである。——天女の羽衣は、しかし、松の梢ではなしに、彼のゐるところから五六間離れた小さな石の上に、圓く束ねておかれてあつた。鮮かな模樣の手拭地の浴衣。このみでは藝者より外に一寸着さうにない派手な模樣である。

啓助は、急いで水の中の女の方に目をかへした。女はちようどくるりと身體を空にかへして背泳ぎの姿勢に移つたところであつた。今度は女の瞳の色まではつきり見えた。

「やつぱり、あいつでやがる。ようし。」

彼は火を移したばかりのバットをぽいと岩の上に放ると、砂に汚れたズボンのバンドを急いではづした。

「いけないつたら、馬鹿！」

水の上から、やや甘つたれて、だが歯切れのいい、お英の聲が響いて來た。

聞き流して、猿又一つの身體を岩の端まで持つてゆく。さつと快い海風にはねて、立ちのぼる水煙りの中に、啓助は身體を投げこんだ。身體は瞬間水底の冷い潮をくぐり、眞白な泡と一しよに水面に浮いた。

「いけないつたら、馬鹿！」

浮き上るのを待つて、お英の聲であつた。

「待てつたら、河童の子。」

湧き上つて來る泡におされて輕々と潮に浮き、啓助は大きく拔手をきつた。波の小さな觸手の先きに赤くふくれた太陽が見え、その太陽の眞下に、ぽつかりと、ぐみの實のやうにふくれて、女の笑つた顏が浮いてゐる。

「行くぞ！」

「厭やつ！」

瞬間、啓助の兩脚が高く天を蹴つて、水しぶきの中に消えた。――急にあわてたお英の眼が、子供のやうな眞劍さで足許を警戒しはじめた。

「馬鹿！　馬鹿！」

くすぐられる時のやうに身悶えしながら、水の中の見えない襲撃者にお英は悲鳴をあげた。

ひよつこり、お英の腕から三尺離れて、啓助の首が浮きあがつた。

「馬鹿やい。」

お英はその首に水を跳ねかけた。

「なんだ、こいつ！」

啓助も兩手で水を叩いた。

やがて二つの馬鹿な首は、仲良く並んで沖の方に泳いで行つた。泳ぎながら二人は、間つ辛い會話を始めた。

「あれから、ずつとお座敷には出ないのかい？」

「出たわ。」

「この嘘つき。」

「それがどうしたの。商賣柄よ。あんただつて社に出るぢやないの。」

「だから嘘つきだといつたのさ。――英龍が座敷を休んでゐるといふことは、たしかな筋から知れてゐるんだよ。」

「じや、そこがあんたとちがふところでせうよ。」

「何んとでもいはせておくよ。だが明日は一つお座敷に出てもらひたいんだがな。」

「いやだ。」

「明日は內務部長が來る。橋本か山崎の名前できつとお座敷がかかつて來るから。いやか。」

「出てどうするの。」

「今晚、ゐるかい。」

「ゐる、……」

「ぢや今夜ゆつくり話す。何しろ明日は大事な日なんだ。……さつきなんかも面白かつたぜ。橋本代議士が村の連中に追はれてね、自動車で逃げた。お前の親爺なんかきつと先頭にゐたんだらうよ。――うふつ。そして俺も追はれて、こ

こまで轉けながら逃げて來た。」
「へつ、それがどうしたの。——それでまたなんで、あたしが明日お座敷に出なけりやならないの。」
「うるさいな。今晩話すといつたぢやないか。もういいから先に上つて家に歸つてをれよ。」
「さう、ぢやさよなら。」
波に切られながら、まあ、さうした筋の會話であつた。
さう、といつて、海豚のやうに、岸の方に泳ぎ出したが、二三間泳いで、お英はくるりと振りかへつていつた。
「今晩でなくつていいぢやないの。今すぐいらつしやい。」
「何でもいいから、先に歸つてをれつたら！　ぐずぐずしてると人が來るぜ。」
「さう。」
と、素直にかしげた顔に、さつと波頭がしぶいて——水は陽氣な涙のやうに、さら〳〵と流れて落ちた。

第七景

來島した縣内務部長の歡迎會は、豫定の如く、第一次會場から第二次會場の清松亭に流れた。知事代理としての單なる視察旅行の途にある内務部長の歡迎會としては、誰の眼にもそれは少々念の入りすぎた歡迎會であつた。
清松亭は、海を見晴す一流の料亭である。橋本代議士の子分、山崎派の町會議員、K鐵道會社重役、S警察署員、S每日新聞社員一同、總動員された港新地の藝者。入り亂れて、座敷は、それこそ蜂の巣のやうな亂れやうであつた。——騷ぎの途中で、啓助は、主賓の内務部長が何時の間にか姿を消してゐたのに氣が付いた。
「出し拔かれたかな。」

見まわすと、階段に近い、金地に泥繪具で松を描いた趣味の悪い大衝立の側に、お英が立つてゐるのが見えた。何か合圖をしてゐるやうな眼つきであつた。啓助は上着をとつて何氣ない風で、衝立の側に近づいた。

「出かけるらしいのよ。」

すれちがひざまに、お英はさうささやいた。

「ようし。」

何んの意味だかよくわからないままに、ようし、と答へて、とんとんと啓助は玄關の方に階段を降りた。

玄關前の打水に濕つた玉砂利の上には、自動車が二臺、はづんだ息をついてゐた。式臺には女將が二三人の女中をひき連れて前膝をついてゐる。――なるほど、と思つたので、啓助は急いで靴をはいた。

階段に足音がして、お英が降りて來た。そのあとを追つて橋本代議士の鹽辛聲が聞えた。

「おい待て、待てつたら。」

「まあ、危ない！」

續いてゆで章魚みたいに赤く熟した大男の山崎町長の姿が見えた。どかりと階段を踏み外して、彼は、スリッパの片方を式臺の上まで蹴とばした。女將が愛嬌よく上つて行つて手をかした。

「大丈夫だ。まだ〳〵これしきの酒で。……老いたりといへども、山崎は！」

と、女將にすがつて、よろ〳〵と下まで降り、お英の姿をふと見つけると、

「ああこいつ、ここにゐたのか、馬鹿奴！一しよに來い。」

ちよつとためらつてふりかへつたお英に、靴の紐を結びながら、いいから行けと、啓助は目でいつた。お英は素直に町長の身體を肩で支へ、ていねいに下駄をはかせると、後の方の自動車に這入つて行つた。

ゆつくりと女中に靴の紐を結ばせてゐる橋本代議士の方は、大して醉つてる風には見えなかつた。自動車の側には、例の新井元院外團が待つてゐる。

さて、機會の前髪だ。どうつかんだらいいか？――すばやくあたりを見廻す。式臺の上の女將が大きな黒鞄をうやうやしくささげてゐるのが眼についた。これだ――。

「いやどうもありがたう。」と啓助は女將にいつた。「私が持ちます。」

自動車の踏臺に足を掛けた橋本代議士は、鞄を持つて小走りに近付く啓助をふり返つた。

「やあ、君か、ご苦勞。」

「いいえ、どう致しまして、さあどうぞ。」

啓助は鞄はしつかり小脇に抱へたまま大きく頭を下げた。

「君も來るのか。」明かな當惑の色が彼の顏をさつと流れた。が、剛腹に代議士は、いひきつた。「さうか、ぢや乘れ。」

啓助に續いて、大きなステッキを持つた新井が乘つて來た。

「海風樓へ！」

運轉手臺に代議士が命じた。――海風樓とは、内務部長の宿舍の名前である。

啓助は腕時計をのぞいた。十時をまわつたばかりのところだつた。――暗い海沿ひの道を車は拔けた。小高い丘の上の松林の奥に、海風樓が遠い城のやうに明るく浮いて見えだした。

大玄關に自動車がつくと、代議士は啓助に向つて命令的にいつた。

「や、ご苦勞。君はもう歸つてよろしい。」

「はつ。」

さすがに次の言葉は出なかつた。

啓助のかかへてゐた鞄をひつたくるやうにし、適度な威厳をもつて、女中と番頭が平伏してゐる玄關の方に、彼は足を運んだが、ふと思ひ返したらしく、ふり返つて自動車の中の二人にいつた。

「もし用事がないんだつたら、下で一杯やつて行き給へ。今度のことでは、いろ〳〵お世話をかけたからな。」

啓助はほつとした。

「ぢや社長、下でお待ちしてゐます。」

代議士のあとから、町長に肩をかしながら、階段をのぼつて行くお英に聞えるやうに、充分大きく、啓助はどなつた。

第八景

内務部長は、山羊鬚を生やした痩せ型の男であつた。――松林に包まれた離れ二階の床柱を背負つて、天神様のやうに座つてゐた。

橋本代議士の一行が到着すると、豫て用意されてあつたらしく、酒と料理が部屋一杯に運ばれ、特に内務部長のためにであるらしい時奴といふ若い藝者も姿を現した。隨行の屬官達は二次會場にでも居殘つたのか、こゝには姿を見せなかつた。

「いや、これはこれは。今日は誠に手厚いおもてなしで全く痛み入りました。」

部長も少々醉ひ加減であつた。

「いやあ、海老名さん。」町長は兩手をひろげて部長を扇ぐやうな格好をしながら、「わしは橋本君とちがつて田舍者だから、お世辭つてことはまるで知りませんがな、いや全く今度の埋立問題は、つまりその生かすも殺すもあんたの胸一つ

といふところで——つまりそのあんたの主務省への上申の仕方一つで萬事決定するといふわけで、全くわし等にとつて、あんたは神樣ぢや、このとほり、このとほり。……」

町長は兩手を揉み合して本當に拜む格好をした。

「まあ、町長さん。」

時奴が大袈裟に背中をどやしつけた。

「何だお前か、お前なんかが出る幕ぢやない、ひつこめ〳〵、わつははつは、……いやあ部長閣下、時奴と申します。なか〳〵可愛い奴で。まあそつちのお英こと英龍と竝べて、この町の一流といふところですな。何ならお取換へいたしませうか、え。」

「おい町長。場所柄だぞ。」

見兼ねたらしく代議士がたしなめた。

内務部長は、しかし盃を含みながら、にやにや笑つて、町長の油の浮いた橫顏を眺めてゐた。我黨内閣といふことが、こういふ小つちやな町の町長までをこうまではしやがせるとは、ふふん面白いものだ、とでも考へてゐたのであらう。

「いやあ、部長閣下、このお英もその時奴もどつちも生え拔きの土地の女でしてね。」

だが町長は、なか〳〵止めさうになかつた。

「そも〳〵わがS半島は、世界有數の女の產地であつて、東支那海、印度洋、太平洋を越えて——支那、滿洲、ヒリッピン、南洋諸島、印度、アメリカにまたがつて、わが海外發展の先驅をなす、かの日本娘子軍の七割は、實にこの半島の女であります。」

「するとお英ちやんも時奴も、日本に殘つた賣れ殘りといふわけになりませんか、町長。」

内務部長も如才がなかつた。

「いや内は内、外は外です。殘りものがすたれものとは決して限りません。しかし、何しろ海外にある彼等が――いや彼女等が、年々この半島に送る金額は、實に本半島の農産海産の總額を合したよりも大きいとさへいはれてゐるのであります。かるが故に、かの口ノ津埋立問題に於ける漁民の反對の如きは、かかる經濟的事情を無視した無用の暴擧であつて實に……」

「はつはつは、女の話しがとんだ方向にとびましたな。まあそこらでちよつと一杯といふことにしませうか。」

内務部長がいつた。

「さう〳〵。」と橋本代議士が巧みにひきとつて、「なに、主務省の許可さへ下れば、それから先きは土地收用法といふ法律もあるし、漁民の反對なんかものの數でもありません。――で、ちよいと海老名さん、お顏を拜借いたしたいので。」

「何ですな。」

と、心得て、部長は膝を浮かした。部長と一しよに代議士は、廊下の向ふの隣りの部屋の方に立つて行つた。だが、障子をたてようとして振り返り、時奴とお英に向つて、代議士はいつた。

「おい、お前達は、ちよつと遠慮しろ。」

「はい。」

と、二人が立ちかかるのを、町長がおさへていつた。

「いや、お英だけはちよいと待て。お英はこつちで話しがある。」

二人きりになると町長は、好色に目を細めて、お英の手をとつた。

「どうぢや、お英、今晩俺のいふことを聞くか。何なら藝者なんか今晩限りやめてしまへ。身代金は俺がひき受けた。い

くらか。二千圓か、三千圓か。」

「まあ。」

意味もなく職業的にさう感歎して、お英は町長の手を輕く拂つた。

「ぢや五千圓か。それとも六千圓か。內務部長は五千圓だが、お前のためになら、六千圓だつて惜しくないぞ。」

「まあ內務部長に五千圓!」

お英は思はず大聲を出した。

「しつ!」

あわてて、町長はお英の口を手で抑へるやうにし、內務部長と代議士が去つた方向に眼をやつたが、それが廊下を遠く距てゝゐたことに氣がついて、はつはと大きく、腹をゆすつて笑つて見せた。

「馬鹿な奴ぢや。五千圓が珍らしいか。だが、內務部長でさへ、五千圓でころぶんだ。どうぢやお前も、うんといへよ。お前のためなら、俺は五千圓が六千圓だつて惜しくはない。」

「まあ、それほんと?」

眞面目にせきこんで、お英は訊ねた。

「本當だとも、何でこの俺が、噓をお前にいふものか。」

「內務部長の五千圓はほんと?」

「それもほんとだ。しかも現なまだぞ。橋本さんのあの鞄の中に、手の切れさうな札束が唸つてゐたんだ。俺の銀行の金庫から出して來たばかりのだ。」

「まあ!」

「どうぢや！　聞いただけでも嬉しからう。嬉しいか、おい！」

「ええ嬉しいわ。聞いただけでもすつとするわ。ぢやその意味で改めて一杯。ほんとに豪勢なのね、今夜の町長さんは。」

お英はひどくはしやいだ風に、ぱん／＼と手を鳴らした。町長はあわてゝ、その手を握り、

「馬、馬鹿。手など鳴らしたら女中が來るぢやないか。大事な時だ。靜かにしてゐろ。」

「ほほ、失禮。ぢやあたし、ちよつと行つてとつてきますわね。」

「馬鹿ッ、待てつたら！」

聞えないふりに、お英はさつさと立つて、階段を降りた。降り口にゐ合せた女中の一人をつかまへ、

「ちよいとあのね、二階に行つて山崎の旦那をよろしく。あたし直ぐ來るから。」

と頼んで、帳場にゆき、そこで訊ねて、新井と一しよに盃をなめてゐる啓助を探し出すと、

「ちよいと山本さん、社長さんの御用。」

心得て出て來る啓助を廊下の端まで連れ出して、お英は小聲で早口に、二階の様子を説明し、そして結んだ。

「内務部長へ五千圓。たつた今現金で渡したところ！」

「ようし、確かだな。」

啓助もさすがにきつとなつた。

「ええ、たしか！」

「さうか。」

さういつて、何を思つたのか啓助はいきなり腕時計をみた。十一時十分前であつた。

「ようし、ぢやお英ちやん、これでさようならだ。後でお前、ちよつと詮議されるかも知れまいがね、その時は知らぬ

存ぜぬで白つぱくれるんだぞ、いいかい。」

「ええ、やつてみるわよ。――そいで、啓さん明日逢へる？」

「うん、出來たらな。」

いひすてて、啓助は、ぱた〱廊下を走り、新井の部屋をちよつとのぞいて、

「ちよいと社まで歸つて來る。もう今晩來ないかも知れないから、後はよろしく頼むぜ。」

玄關に待つてゐる自動車の一臺に飛び乘りざま、運轉臺に彼は叫んだ。

「急用だ。――うちの社まで全速力！」

第九景

社の裏門で、自動車をすてる。まつしぐらに階下の工場に飛びこむ。そして兩手を高く擧げると大聲で怒鳴つた。

「ストップ！」

時刻はかつきり十一時。下版時刻はとつくに過ぎてゐた。製版部には居殘りの職工が二人と若い校正係が臨時宿直で殘つてゐるぎりであつた。

「何です？」面くらつた校正係は朱筆を斜めに構へたまゝ、振り返つてなじるやうに聞いた。「また、何か特種なんですか？」

機械部ではもうコツピイが熱くなり、紙型を叩くブラシの音が騒然とし、廻轉を始めたロールの音が天井に響いてゐた。

校正係の問ひには答へず、啓助は上着をぬぎながら、製版工のそばにゆき、校了の試刷を上に載せられて、今下版するばかりになつてゐる版面に手をかけるやうにしていつた。

「これは二の面だね。」

「これを壊せつていふんですか？」

やつと仕事を終へて、手を洗つたばかりの製版工は、ねむい眼をこすりながら、ひどく佛頂面をして答へた。

「いや、いいんだよ。君達はそのままお歸りよ。」愛想よく啓助はいつた。「ほんの少しばかりだから、俺一人でやるよ。ひどく急な事件なので、原稿はまだ俺の頭の中にあるといふ騷ぎだ。だから、いやでも自分で拾はなければならないといふわけさ。」

兩腕のワイシャツをくるくるとまくしあげ、文選場のケースの間に立つて、カチリと電燈にスヰッチを入れた。さつと百燭光が天井の蜘蛛の巣を照す。光と一しよに不思議な電氣に似たものが、ぴりりと身體を走るのを、啓助は感じた。ケースの前に立てば、まだまだ田舍の文選工なんかには決して負けないといふ自信が彼にはあつた。

「いいから歸んなよ。どうせ俺あ、今まで社長のところで呑んでゐたんだからな。」

校正係と製版工とは、もじ〱しながらも、喜んでかへつて行つた。急ぎの特種がある際に、啓助がケースの前に立つのは、前にも度々あつたことなので。——

「三の面はまだ下りねえのか！」

鉛版部の方から一人の職工がじれてどなつた。

「ちよいと待つてくれ、兄貴。」これにも愛想よく笑ひかけながら、彼は文選箱を高くさしあげて振つてみせた。「もう二十分。また特種でね。俺が今拾つてゐるんだ。後から編輯の方にそばでも買はせるよ。」

原稿を紙に下してゐるひまはない。——いきなり彼は三十二ポイントの大活字の方に手をのばした。

「縣内務部長五千圓を受取る。——埋立地問題にからむ怪事實。——漁民の生命は風前の燈。」

三段拔きの標題を先づ作つた。

口ノ津村一千の漁民の生命を脅威する蛭子岬埋立問題は、政府の鐵道買收問題とからんで、裏面に醜怪なる一派の策動があることは既に一部の噂に上つてゐる所であつたが、果然昨××日縣內務部長の來島を機會として恐るべき醜事實が暴露するに至つた。一千の漁民の決死的反對を蹂躙して、×政黨代議士橋本久六、S町町長山崎茂兵衛が口ノ津岬埋立を決行せんとする所以は、鐵道賣渡しによる莫大な利益に加ふるに、埋立地並びに新延長地域が、前記兩名の所有地なることを奇貨とし、その地價高騰による數百萬の利益を狙つたものであつて、……」

ケースの中の細かい活字のつらがみな一つ一つ鋭い小さい眼になつて、彼をにらんでゐるかのやうに思はれた。十年來の古馴染にも似合はぬ、今晩の活字のよそ〳〵しさ！

「だいぶ昂奮してゐるらしいな。おちつけおちつけ。」

しかし、啓助は何とはなしに唇のわきに湧き出て來る微笑を禁ずることができなかつた。十年間彼は活字を拾つた。しかし自分の意志から出た自分の言葉を拾ふのは、今夜が全く始めてだ。何だか可笑しい。

「……昨夜午後十時」と彼は拾ひ續けた。「橋本、山崎の兩名は第二次會場、浩松亭から自動車二臺に分乘、海風樓に內務部長を訪れ、祕かに五千圓を手交。……」

文選箱の底で九ポの活字の一つ一つが、ぽつんぽつんと妙にくすぐつたい雨だれをたたく。

六十行ばかり拾つたと思つた時、文選箱は一杯になつた。彼は次の箱をとりあげた。

「かかる醜事實が暴露された以上は、漁師側の反對は更に火の手を擧げるに相違ない。もしも內務部長の手によつて主務省への勝手な上申が行はれ、埋立及び鐵道延長が萬一許可されたる場合に、漁夫側は當然延長及び埋立による利益の折半を、漁業權賣渡の名に於いて主張するであらう。……」

それに二三行の結びをつけ加へて、記事が出來あがると、彼は手早く組版の上の版面を解いて、上三段の活字を、内容もみずに全部引き拔き、手早く今拾つたばかりの活字を組みこんだ。

「さあよし。」と、先づバットに火をつけ、そして大聲に彼はどなつた。「下版だ！」

鉛版部の職工が勢ひよく走つて來た。

三臺のロールで印刷される新聞は、五千部餘りにすぎない。が、その五千部がこの地方全部の輿論であり、センセーションである。そして、その中の五分の一ばかりは縣内各地、並びに遠く大阪東京の方面にも發送される。

「さ、俺の役目はこれですんだ。あとは當事者同士が解決する。――どうせ、今度は始めから俺の立場は、端役だつた。」

そんなことを考へながら啓助は一本のバットをすひつくし、そして氣がついて、手の空いてゐる職工の一人をそばの注文に走らせた。

「さあ、みんな急ぐんだぜ。縣下のどの新聞にも先を越されてはならぬ特種だ。」彼は印刷部の男達を見廻して、督勵的にいつた。「發送がすむまでは、俺も歸らないぞ。」

ロールは唸り出した。刷り上りの紙が、水のやうに奔騰し始めた。十二時がすぎた。――一時になつた。――二時である。その間に啓助は絶えず裏の出入口の方を警戒せねばならなかつた。が、海風樓の社長の方からは電話さへもかかつて來なかつた。新聞記事の内容を無視することに慣れてゐる職工達は、特種だといつても別にそれを讀もうともしなかつた。――ただ一人、鉛版部の若い職工が見出しを讀んでニヤリと笑つて、啓助を見たが、何も口には出さなかつた。

暁の光が波に乘つて沖の方から押しよせて來た。松林の輪廓が明るくなつた。工場の窓が青磁色に透きとほつた。夜明けの砂をふんで、配達夫達がぽつぽつ集つて來た。――新聞は刷り上つた。

午後四時。――砂丘のかげに青く立つてゐるペンキ塗りの箱の中から、十人の若い配達夫達に押された二臺の車が、イ

ンクの香りの高い新聞紙を蹴散して、道の白砂を蹴散しながら、露を含んだ風の中にかけ出して行つた。

終景

艀舟が、波の間を小犬のやうに轉がつた。汽笛が、港らしく澄みわたつた空氣に、眞白な蒸氣を吐き出した。荷揚人夫の歌が、古い海港らしく、汽笛に消されながらも、蜂の翅音のやうに唸つて聞えた。

煙突の傾いた内海航路の汽船が一隻、港外の波に意久地なくもまれながら、靜かに身體を捻らうとしてゐた。甲板の客の間にまじつて、トランクをさげた啓助の姿がみえた。

船からみるS町はまだ寢呆けてゐた。雨戸を半ば閉ざした藝者町の軒並も見える。お英の家もその一つだ。

「あいつ、昨夜は無事に歸れたかなあ。内務部長の時奴と一しよに、案外、町長の人身御供なんかにあがつたんぢやないかなあ。」

とそんなことを彼は考へてゐた。

船は次第に舵を廻した。S町は船のしつぽになつた。眞白な泡が、港までずつと續いて殘つてゐる。

「俺がゐなくなつたのを知つたら、あいつ泣くかな。」

も一度そんなことを思つた。

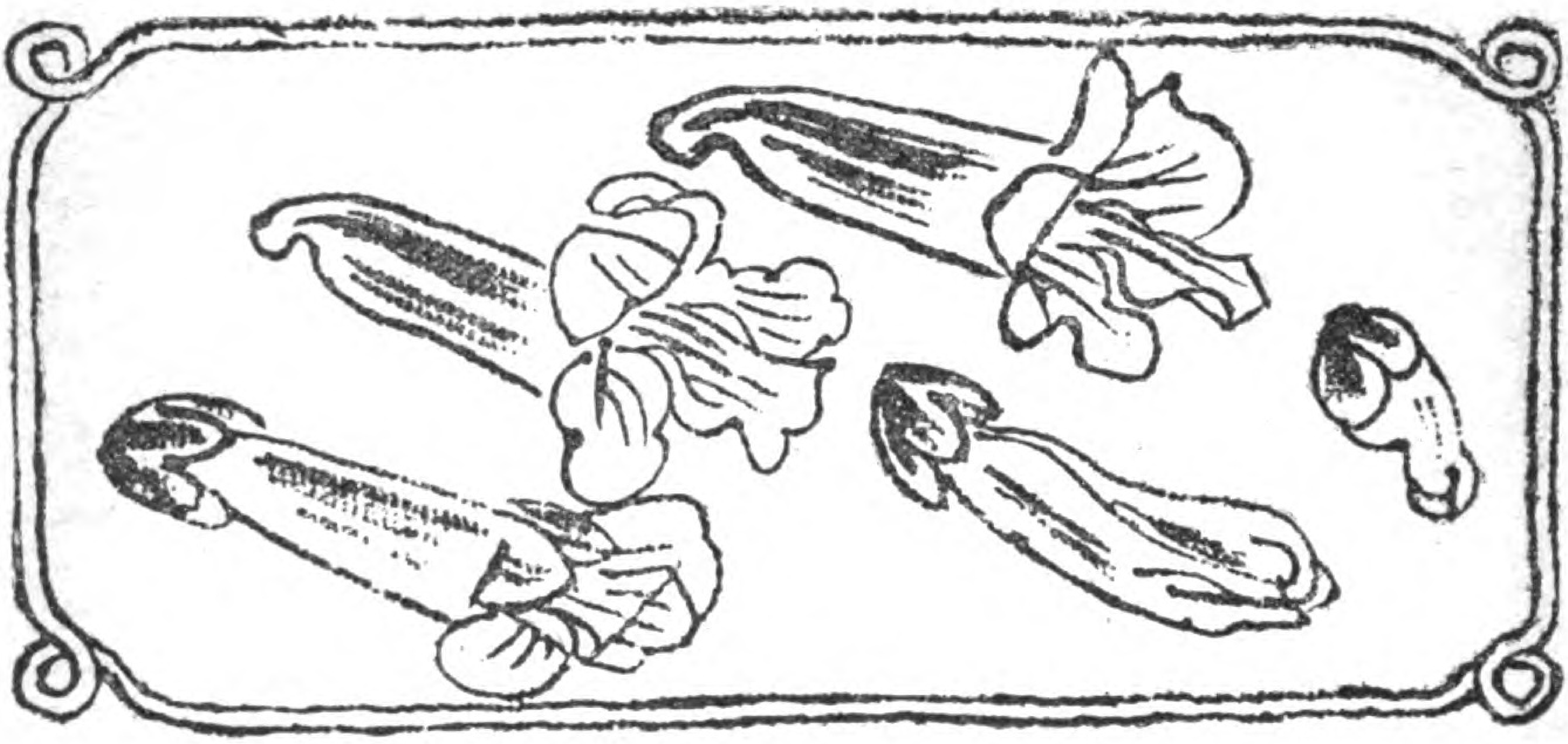
「泣かれちややりきれない。」

啓助は、バットの吸ひ殻を口からもぎとつて、船尾の風の中に高くほうつた。吸殻は渦巻く水の中に落ちて瞬間に消えた。

「さあ、またこれからしばらく當てのないほつつき歩きだ。」

彼は胸をそらして口笛を吹かうとした。――強い海の風が斜めに顔をふきつけて、口笛は音にならずに空に消えた。

（終）



長篇小說

支那（終）

前田河廣一郎

二十一

富豪王資平の邸宅は、奥へ通れば通るほど間數が多くなり、人間の數も殖えて行くのであつた。これは、普通の洋館ではない。

青桐の上衣のボーイは、鴨の翅のやうに兩手をひろげ、指先で空氣を切りながらさつさとひろい石廊を、先に立つた。

かうなると、客といふものも窮屈なもので、他人の家へ來て、途中で無遠慮に、おい、おい、俺達はどこへ通されるんだい？――とも訊ねるわけに行かず、結局先方の案内どほりに、運び入れられるところまで歩行を冒險せねばならない。李刀達は、再三踏み留まつて、廊下のまわりの部屋々々を油斷なく見まわした。一つの部屋には、淺葱の服に金釦をつけた樂隊が、脚を中央へ投げ出して、室をシガレット

の煙でいつぱいにしてゐた。これは、葬式や婚禮の行列に常傭になる、市内のありふれた樂隊である。富豪の邸宅はどこかちがつてゐる。こんなものにまで休憩室をあたへるといふのは、どうしたものか？　もう一つの部屋では、泣き男と泣き女とが、麻の上衣を脱いで、汗を拭きながら熱い茶を啜つてゐた。廊下が二つ曲つて、曲り目に突きあたつたホールには、鼠色の衣を踵まで引摺つた坊主どもが、雲南軍の捕虜のやうにうろうろしてゐた。これらの、あきらかに、喪に集まつたらしい群集は、いつもは、意地汚なくがやがや騷ぎまわつてゐる連中なのだが、この家では、ひつそりとして、まるで祈禱にでも熱中してゐるとしか受取れなかつた。ほんたうに死を哀しむでゐるやうなのが、かへつて怪しい。

『――どうも、變ですね、先生。』

猫脊になつて先を急いだ王英老人にすがりつくと、彼は、持前の猜疑的な表情を顏にあらはした。

『まア、誰かの葬式だらうよ。この家には、妾手かけがうようよしてるんだから。』

老人は、醫者が患者の脈をみたあとのやうに、快活な聲で答へた。

三人は、一つ建物を、來るところまで來ると、支那風な外廊でつながれたもう一つの建物へ出てしまつた。本來、支那建の邸を、外側だけ洋館にして繕いだものらしい。頭上には、梧桐の葉ずれがした。

ここまで來ると、流石に、老人も不審になつたらしく、

『おい、君、二階を忘れはしないかね？』

とくしやくしやの顏を手巾でぐるりと撫でた。

『二階――には、第四、第五、第六の三人のお妾が居ります。只今、階下の第二夫人の喪で、皆いそがしいのです。すべて、この混雜の際、緣者以外の御客樣は、第三夫人の別宅の方へ御通しすることにして居りますので。』

ボーイは、象牙のやうな顏に、青い眉毛をぴくつかせながら、やや氣色ばむで答へた。

『第二夫人の葬式かね、』

老人は、折衷式な家の門官へ足を踏み入れながら、呟いた。

『可怪しいな？……』

中庭があつて、硝子天井の下に、水族館のやうな巖や海藻のやうな芭蕉が、どこかにひそひそと、囁く水のけはひとともに、屋内ながら、こころよく汗を撥ねた。書院を通つて、客廳に招ぜられると、二人ははじめて、客席らしい物に腰をおろすことが出來たわけである。ボーイは一揖して去つた。

いろいろな聯句が壁に下げてある。ひとわたりそれらを見まわしたのち、王英は、わざとらしくあたり構はずかう大聲で話し出した。

『この燕飛芳といふ女は、有名な淫婦だよ。わしの考ひぢや、どうも混血兒らしいが、當人でさへ、どこで生れてどんな親を持つてるかを知らんといふ代物ぢや。大概の金持で、一度はこの女の手にかからん奴はないのさ。無論、西洋人も。あの恰好ぢやろ、あれで飛行機へも乘るし、貧民窟へ時折千や二千の金をポンと投つて行く。おまけに、云ふことが揮つてる。──孫文は社會主義者だが、わたしは富の平均分配を實行する革命家だつてさ。富んだ者から奪ひ還へして、貧しい者へ與へる、鄭毓秀女史でさへわたしのやつてることは出來ますまいと、さ！ 笑ふなよ。近代支那の生んだ吸血鬼だね、いや、女魔だよ。云ふことはちぐはぐだが、腕は凄い。上海から南方支那へかけての大莫蓮ものだな！……何、構ふことはあるもんか、わしは、眞實のことをしやべつてるんだ。いや、誰が聽いてるようが、燕飛芳そのものが聽いてるようが一向にこちらは困りやしない。──しかし、あんな馬鹿女のことだから、わしの云ふことなんか、とても耳が痛くて聽いてるわけにァ行かんだろて。』

李刀達は、話半ばで、誰かが入口のカーテンの向ふへ、靴の爪先だけをあらはしたのに氣づいて、老人の肘を小突いた

り、居ずまゐをなほしてみたりしたが、さうすればするほど、老人は聲を張りにげてがやがや吹鳴り出すので、冷や冷やしながらも、これには何か魂膽のあるものと見て取つて、カーテンの下の靴と、老人の南瓜のやうな横顔を半々に見戍つてゐた。

靴の爪先は三遍ほど背立たしげにダンスのステップを踏んだが、にうつと鞣皮の全身をあらはすと、氣取つた女優のやうに陰で誰かが笑ひ出した。そつと押分けられたカーテンの奥から、二つの黒い瞳が、笑ひとは關係のないほど鋭い光で一瞬間、室内の模様を寫眞機のやうに取り入れた。

『隨分ね……あたし、これぢや這入らうつたつて、這入れおしないわ！』

瞳の持主はそのまま西洋婦人のやうに濶歩して來ると、二人の前へ挑戰的な嘲笑を投げた。まだ先刻からの乘馬服のままであつた女は、そのお俠な身振りや動作から、氷の表面でもあるかのやうに、爽かな何かの花の薫りを發散した。

『ほほう、聽いとつたか！　結構。結構ぢや。聽かれて惡いやうなことは云はぬ筈だからな。——時に、御主人はどこに居るか？　わしは、あんたのやうなろくでなしに會ひに來たのぢやァないでな——。』

王英老人は、眉間の皺一つ動かさずに、斜ひに將几へ腰を托した女を、まじまじと見戍つた。李刀達は、急に眼の眦らむ物にぶつつかつたやうに、視線をそちこちへ轉じて、やつとのことで燕夫人の方へ顔だけは向けてみても、その實、彼女のどこをも見てゐるではなかつた。

『今日のお對手は、あたしよ！　相憎と主人は、シンガポールへ參りましたの。』

『嘘をつけ！　昨日の朝、高等法院の廊下で會つてるっ。こちらは、急用ぢやー！』

老人はにべもなく彈ねつけた。

そこへ、先刻のボーイが茶菓を運んで來た。しづかは靜かであつたが、邸内のどこかには、絶えず何かのざわめきが從

れてゐるやうに思はれた。ぞろぞろと揃り足で大勢の人間の歩き廻はつてゐるやうな。ボーイが退くと、夫人はタイプライターでも敲くやうな指先で、レースの手巾を卓へ捨てた。

『――あたしの御對手では、物足りませんの？』

『困つたな。困つた。しかし、この葬式は……一體、何の騒ぎかね？　新聞にだつて、第二夫人の葬儀のことは載つてゐなかつたが？』

老人は、ちよつと内懐のポケットをもぢもぢさせながら、二三度同じ手を出したり引込めたりした。

『お弔ひ？　でも、これは、既の昔に亡くなられた艶夫人のですわ。一と月前ですの。あのまま、ずうつと納棺してあつたんですが。――博士、もう、貴老お忘れなのね？　その頃、「デリー・プレス」に大きく出てゐたぢやなかつたの？　まあ嫌ですこと、お年齢は召したくないものですね。』

『それを、どうして、今日に限つて葬式を出すなんて？』

『まあ、なんて、呆れるわね！　――他人の邸へお出になつて、そこの葬式の混雜の最中に、何故その日に葬式を出すかなんて、訊ねる方がよほどどうかしてゐはしないの？　でも、ね、貴老のことですから云つてあげますわ、人夫がないの！　この間からのホンコンでは、もう満足な葬式一つ出せないぢやありませんか！　随分と防腐劑は施してあるらしいんですけど、この溫氣でせう、とても邸内へ置いとくわけに行きませんの。ですから、主人も出發前にちやんと廣東から電報で人夫だけは呼寄せて行つたのです。……あんな西洋人かぶれのした人でも、やはり支那人ですわ。ちやんと墓地だけは白雲山の麓の先祖代々からの土地にきめてあるのですよ。』

李刀達には、輪船でいつしよになつた、俄かづくりのスパイのやうな男の謎がここで解けたやうに思はれた。この時、邸内のどこかで樂隊の物音がしはじめた。老人は、その音に耳を貸してゐたが、やがて、

『——ふむ、些か腑に落ちぬ節もあるが、折角あんたがさう云ふからには、その邊で話は打切るとする。偖て、王資平さんは、何の用でシンガポールへ出向かれたのかな？　いづれ、急用にはちがひあるまいが——？』

と、せき込んで訊ねた。

『わかりませんわ、主人の用件なんぞ。あたし達女どもには！』

『…でも、大概、王資平さんは、この春から寵愛のあんたといつしよでなけりや、どこへも旅行はせぬことになつとるやうだがの。——今朝も、あんたが、わしのホテルの下を通るんで、はゝア、先生まだ在宅だな、と思つて急いでやつて來た始末だ。——どうぢや、ほんとのところ、そのカーテンの背後にでも、やはり立聽しとるんぢやないか？　王英の奴、法律家の稱號を肩に着て、何か金でも強請に來たんぢやろ、位に考へて！　はッ、はッハ…。』

およそ客として、他人の家へ來て、しかもその主人の愛妾を摑まへて、これほど無躾にがみがみ云ふ老人もあるまい。一體、この富豪と王英先生とはどんな關係に置かれてゐるのか、かう考へてみると、李刀遂には、目の前の二人が何かの利害關係から途方もない騙し合ひの競爭をしてゐるかのやうにしか思はれなかつた。

『諄いね。——お歸へんなさい！』

女の手巾を取り上げた、きやしやな拳は、はづみで、とんと大理石の表面を敲いた。

『歸へらない。わしの直感では、確かに王資平は、在宅な筈ぢや。主人がここへ出るまで、從者とわしとは、ここで待つとる！』

燕夫人は、うるさいもののやうに、漆黑の切髮を一と振り振ると、唇を閉ぢて、きつく老人を睨めたが、咄嗟に、その石のやうな表情を、見事な急回轉でやわらかな笑顔に挿すと、朗かな、銀の樂器のやうな聲を立てた。

『——幾何欲しいの？』

ほとんど女の紅をさした唇が、老人の鼻先を掠める近さまで接してゐた。

『五千萬弗！』

もう一度老人の操り猿のやうな拳が、ポッケットに這入る。

『何、ボイコットの基金？』

『いや、これから大ストライキになるんだ！』

ポッケットからは、やや皺ばむだ一封の手紙が出る。意外にも、それは、不思議な廣東の老人が、李刀達を紹介して寄越した封書であつた。

『お待ちなさい――』

女はすうつと手を伸ばして、壁の釦を押した。纖い指が、おはただしげに、その釦を三度ほど押した。席へ戻つたときには、女の殘忍なうすら笑ひが、客の頭上に閃めいてゐた。

『お前、第一夫人は――？』

同じボーイが、音もなく這入つて來ると、夫人は短かく言葉を切つた。

『つい先刻、御葬式に御出掛けになりました。』

『もう、行列は出て？――』

燕夫人は、自分の腕首へ眼を投げた。そこには小型の白金の時計が蝶のやうに留まつてゐた。

『はい、十五分ほど前に。』

『よろしい。別に變つたことはないね？　用があつたら、呼びます。』

と、追ひ返へしたボーイの後ろ姿に眼を遣つたと思ふと、彼女は、再びおはてて、それを呼び留めた。

「あの、別室へ晏晝の仕度をして！　御客さまがお二人と、あたし。それでよろしい。」

王英先生は、つと立ち上りざま、部厚い唇を夫人の方へ突出した。その唇が、炭酸の壜をあけたやうに、何かの言葉を迸らせかけると、もう一度、夫人の手巾からのすがすがしい香水の匂ひが彼を滿面に揶揄つた。

「五千萬弗は、もう遲いのよ、博士！　――あたしが、すこしお先に失禮してるの。今は葬列が、碼頭から出發してる頃よ！　お仁良の妾が四人。棺は、あたしの友人の馬伯堯と呂雲卿、陳景山の三人が、九龍から汽車で――どこかへ運んで行つてますわ。まあ、おゆるりと、點心でも濟ましていらつしやい！」

夫人の手巾は、婉曲な線を描いて、しきりに老人の顏を煽つた。

「――ふむ、さては、お前は、廣東から南へかけて近頃のさばり出した人攫ひ團の手引だつたのか？」

「いいえ、あたしはね、王英先生、笑つちやあ駄目よ。近代支那の生んだ吸血鬼、女魔よ、淫婦！　云ふことはちぐはぐだが、腕は、これでも凄いんですつてさ！　おほほほ、ホ……。」

老人は、器械體操に疲れた人間のやうに、がつくり將几へ上半身を戻した。

「偉らい、たしかに。やりやがつた！　畜生ッ！　わしは、お前を、ただの莫蓮女だとしか思つてゐなかつた。――では唯一つ聽きたいことがある。お前も惡黨なら、打明けろ。――王資平はどうした？　どこへ持つて行つたんだ、彼奴を？……あの革命の仇敵を？」

「まあ、まあ、王英博士、それで貴老は、二十年前にケンブリッヂを出た法學者だなんて仰白るの？　――疾くホテルへお歸へんなさい。もうそろそろあたし達も引上げる時分よ。窖へ押籠めてあるこの家の下僕達が、大聲で喚き出したら、英國のお邏りに氣づかれないとも限らないわ。――おや、ほんのちよつぴり、お土産に云つて驚かしてあげるわ。人質王資平は、あの棺の中に魔醉劑で正體なくなつてゐるのさ。お金は、この家の太太が拂ふんだよ、老爺！」

云ひ終ると、一歩飛び退さつた燕飛芳は、後ろ手で呼鈴の釦を邪險にぐいぐいと押しこくつた。李刀達はぎらりと瞠る女賊の瞳を、口をあけておつけらかんと打戍つた。

影のやうに、竹布の長衫を着た二人の大男が、カーテンの向ふから、長い袖口の兩手を合はせて、音もなく室內へ迫つて來た。客廳の入口にも、同じ恰好の二人が、うつそりといつの間にか立ち塞がつてゐた。云はずと、その袖口の下には兇器が潛んでゐるにちがひない。――その一人は、たしかに、昨夜の輪船で、李刀達を揶揄つた、手の白い勞働者であるのを、彼はたしかめた。

「お客さまのお歸りだよ。粗忽のないやうに――お送りして！」

燕飛芳は、男のやうに、乘馬ヅボンへ兩手を突込むと、鞣皮を鳴らしながら大股に床の上を步るきはじめた。

「では――」王英先生は、手紙をポッケトへ收めながら、饅頭のやうな鼻を聳やかして云つた。

「一言だけ、わしも土產に云ひのこして置いてやらう。――いゝかの、燕飛芳、貴樣、火をやたらに玩弄しちやいかん。危いよ。手を燒くぞ。支那の民衆運動は、烈々燃えて熄まざる火ぢやよ！　四億の民が――完全に自由を獲得するまで、燃えつゞける火ぢや！　わかつたかの？　李刀達、戻らう！」

かう云つて、女の斷髮の下に、かすかにダイヤのペンダントの顫へるのを見て取つた老人は、悍漢達を押除けながら、空惚けた顏をして、中庭へ降り立つた。

二十二

廣九鐵路の火車頭を出ると、葬式の全線が、それの續つて行く長堤の長さによつて證明された。先頭の赤旗や緋の錦幟を立てた旗持の一團が、陽ぼてりに、水底を潛る紅い魚のやうに遠く見え隱くれした頃でも、ま

だ會葬者の一群は、火車頭の廣場で、列もつくらずに立話してゐた。すべての道具や樂器や人間や車輛が腰をあげて歩き出すと、行列はほとんど二哩近くもあつた。

白雲山の麓の墳墓を指して行くといふこの行列が、わざ〳〵、それを反對の税關方面へ練つて行つたのはどういふわけか？――それが、殆んど行列と絲を曳いたやうに珠江の黄濁した水面を、如何にも氣樂さうに滑走して行く一隻の大型帆船との聯絡によることは、慧眼な觀察者には、帆船に翻へされた旗を、行列の先頭に立つた一人の肥大な勞働者の持つ旗とが奇怪な合圖を交はしてゐることによつてわかつたであらう。旗の色は、近頃の廣東の流行色である、赤であつた。更に、もう少し慧眼な觀察者には、同じ帆船の上空はるかに、一臺の水上飛行機が、下界の修羅場を俯瞰する女王のやうに、ゆるやかな翼を伸して飛翔してゐたことによつて、如何にこの葬列が水、陸、空の三線を連ねて、不思議な目的にまで向つてゐたのであるかを知つたであらう。

時しも、燃えるやうな炎熱下の廣東は、この葬列とは無關係に、巨大な人間で拵へた城を築いてゐたのである。

八萬八千人の男と、八千人の婦女子とが、互の腕と腕を組み合せて、隋の煬帝も、秦の始皇も思ひ付かなかつたやうな人肉の大櫓を築造してゐたのである。

この人間と人間を積み重ねた城砦は、ほんとうのところ、歐洲大戰後の最新式武裝を施した超弩級艦よりも精巧に、はるかに戰術的に、より偉大なる脅威を持つところの伸縮自在な近代支那勞働者の一大組織、「省港罷工人代表大會」であつたのである。

この陸上の無形な軍艦は、鋼鐵板の代りに强烈な××××××を持ち、砲彈の代りに民國創立以來の弱小民族的愛國心に燃え、それを構成するひとりびとりの支那人は、生きて、貧乏して、×××られて、涙を流し、がり〳〵と齒を喫ひしばつて「打倒帝國主義！」と泣き叫んだ工場の、農村の事務所の、ありとあらゆる商店の、碼頭の、英國人の家庭に奴隷の

如く驅使された平凡な支那人であつたのだ。

彼等は曩に、憤慨のあまり、支那に於ける英國の侵略主義を驅逐する一つの手段として、在來までの×××××部分的なボイコットに××せず、六つの事項を決議した。それが、そもそもこの人間の××で築いた陸の軍艦の攻撃の、最初の一彈であつた。——英國人と××するな！　英國銀行の××を使ふな！　英國人に××を賣るな、××××を貸すな！　英國人に使はれてゐる人間はみんな××××××××！　英國系の學校病院と××を×て！　最後に、英國人と××、或は×さへもするな！　この六ケ條の禁止事項を勞働者が各自の間に嚴守する爲めにこゝに×××の役割が決められねばならなかつた。さういふわけで、罷工工人代表大會はその執行機關を持ち、補助機關として勞働學校、勞働者病院をさへ造ることゝなつた。××は、鐵のやうな鬪爭意識によつて緊縛された戰鬪的な決議機關である。その下には、五人の首席團が選出されて、法政局の椅子に着いた。大會その者は五十人の×××が一人の××××××して、この中華民國始つて以來の國際的ストライキに必要とされる××を、微に入り細を穿つて討議した。

××××は、罷工委員會の牛耳るところで、それには二つの部門があり、×××と、×××××の二つを持つた。特設機關部には、勞働者法廷があり、財政委員會があり、糾察委員會があり、工商檢驗貨物處があつた。

×××××は、××した××××××から成立つてゐて、一班十二人、三班が一小隊、三小隊が一支隊、四支隊が一大隊、大隊が幾つか集つて總隊になる。そして總隊は糾察委員會を持つ。——糾察委員會は、大會から選出されたもの六人、軍事委員會から選出されたもの一人、その七人が構成委員で、それには三人の常務委員を置いて執行機關とした。

この尨大な××は何をしたか？——

××は、毎週、火木土の三日間十二時から午後四時まで召集されて、一切の議案を討議した。法政局は毎日午後三時から常務會議を開いた。罷工委員會は、毎週一回、各機關部の代表を召集して聯席會議を開き、經過報告や、帝國主義反對

のための諸事項を討議した。勞働者裁判所は判事五人、各方面から廻はして來る犯人を審問し、二十四時間内にプロレタリア的法の執行を行つた。財政委員會は毎週一回開かれ、それに直屬する會計と書記とが、數人の事務員と共に、代表大會の收支の數目を毎日算盤で彈いた。×××は、總部から供給された銃砲やピストルを擁ぎ、ヘルメットや竹笠を被りながら、毎日隊伍を組んで街掛場、碼頭、水上、商館、税關、鐵道、その他目拔きの場所で犯人の檢束に力めた。その××の主なる事は、秩序の維持、食糧品の差押へ、ブルジョアの走狗を×へること、勞働者の裏切者を×へること、英國の物貨を××へること、ホンコン、アモイと沙面の××を××するその五つの××であつた。それから、罷工委員會と廣東商會の聯合形態で、工商檢驗貨物處が組織された。これはストライキ勞働者が、事實上、××を占領したことになるのである。

この大きな××の××の爲めに、どんな費用が誰によつて負擔されたか、このことは支那の××上に看逃し得ない原動力として何人もが好奇心の目を睜るところである。沙面事件の起つた當時、國民黨と罷工委員會とは、直ちに××の××××××にアッピールを送ると、莫大な×××が南洋の華僑から到達した。英國から一萬五千元、米國から五萬元、フイリッピンから四萬一千元、シャムから六萬七千元、ジャバから六萬一千元、泗水から三萬五千元、バタビヤが五萬元――といふ風に五十萬元からの巨大な額が本國へ××された。それに國内の諸團體が續々と寄附金を送る。歴史の表面に現はれただけでも、×××××××××と×××××××××から、約二十三萬元の寄附が集つた。

今、この××××××××の大軍の歩哨兵であるところの、一小隊が、舊廣舞臺の横丁を長堤の大通へ切れ込まうとしてゐた。三十六人の武裝した勞働者憲兵を率ゐた小隊長は、沙面中國人組合の書記から榮轉した長定耷青年であつた。

この一小隊は、炎熱の廣東に、妙な聯想からきわめて喉の渇く任務に就てゐた。彼等はその朝の委員會の指令によつて士敏土廠側に碇泊した民船に、ホンコンからのウヰスキーが滿載されてゐるといふ報告に基いて、糾察隊の任務を果すべ

く活動を開始したところであつた。さて、英國製と否とに拘らず、酒類を差押へる役割は、差押へようとする商人達の心理狀態に何かの影響を與へないわけはない。若い小隊長は、カルト・ブランシュで受取つたこの命令の、最も魅惑的部分をその部下に匂はせてしまつたのである。事實上、喉の渇く太陽の下で、重い鐵砲を擔ぎながら進行して來た三十七人の勞働者は、各自の任務以上に、その民船拿捕の結果手に入るべき貨物の内容に就て想像力を煽られてゐたのであつた。

一小隊の糾察隊は、長堤を練つて行くものものしい葬列とT字形に行きあたつたのである。

時代錯誤的な、青い服をした、赤い龍が、銅箔の鬚をはね上げながらうねうねと群集の頭上を匍匐して行く。次には、乾した無花果のやうな乞食の子達が葬儀會社の揃ひの服だけを、鍍金のやうにひらめかせながら、今にも行き倒れさうな足取りで、古めかしい佛具を捧げて行く。無意味な旗がつゞく。旗の下には、めちやくちに汗を流した乞食どもが大口を開いて泣くやうに笑つて行く。それから、白い天幕を大事に押し立て、行く喪主達の行列がある。黃包車に乘つた女、自動車に乘つた野菜物のやうに汗みづくになつて塊り合つて行く一家族、葉卷をだらりと啣へて行く商人らしい紳士、聞えよがしに大聲で泣きながら、涙一つ流さぬ妻さん……それらは四隅を勞働者によつて揭げられた白い幕の内側に、激昂した廣東市民とは關係のない古い支那の幽靈のやうに腹立たしいテンポを以て、何處かへ一日がゝりの行列を曳いて行くのである。

行列の向ふには珠江が流れてゐて、總部の直轄下にあるライターが靑天白日旗を翻へして三十七人の糾察隊を待つてゐた。狡猾な民船に乘つた買辦達は、そのライターに氣附かぬわけはない。祕かに何處かの岸へ陸揚してあとは貨物自動車で河南の八百八街の何處かへ紛れ込んだなら、それだけ罷工大會の軍備金の取立てが缺乏するわけである。——長定奎は汗を拭きながら、心のうちでその馬鹿げた葬式を呪つた。

「これは、いつたい、誰の葬式かね？」

と、横手に立話しをしてゐる女達に訊ねた時には、長の片手は腰のピストルの柄を握つてゐた。尤も、この腹立たしげ

な表情に出る迄に、三十七人はもの、三十分もそこに立待ちしてゐたのである。

「誰かね――なんでも、ホンコンから來た葬式ださうだ。」

「よほどな金持ちださうですよ。」

「わたしは、さつきから樂隊が通るのを見かけてゐるんだが、今とほるのは支那の樂隊だ。」

かういふ噂を耳にしながら、小隊の中でも氣の早い四五人は、列から離れて、手眞似で小隊長に、行列を遮斷しようぢやないかと薦めるのであつた。

長定奎は、碼頭に繋がれてゐるライターのことを考へた。對岸にうろついてゐるウイスキーやジンを滿載した怪しい船のことを考へた。そして、その刹那的な焦燥の途中に、この若い小隊長は急に喉の渇くのを感じたのである。

「よし、行け！」

かういつて、彼はヘルメット帽の廂（ひさし）を衝動的に動かすと一發の銃聲を石疊に反射させた。

比較的訓練されたこの一小隊は足並み早く葬列をめがけて突進した。

すると、こゝに最も不思議な現象が、三十七人の前に突變的に展開されたのである。

十六人の擔昇きによつて運ばれてゐた、古代の王様の靈柩のやうな、でこでこに飾られたが彼等の前に、ぴたりと停ると、喪服をつけた五六人の紳士が、直ぐ手前の白幕から逆戻りして來て、手に手にピストルを翳しながら、糾察隊に蒼い顏をして對峙したのであつた。

「隊長、怪いしぞ！」

「こりや、只の葬式ぢやない！」

「一應、止めて調べたらどうですか？」

すべての印象が、その葬式に取つては不利であつた。長定奎は、聲を張り上げて、ピストルを頭上にひらめかせた。

「この葬式、待て！――われわれは省港罷工工人代表大會に屬する糾察隊だ。一應取調べる。」

五六人の紳士の一人が、それには答へずに、血眼になつて三十七人に向つて發砲した。勞働者憲兵の一人が、足を射拔かれて縛られた鷄のやうに仆れた。

その同僚の一人は、矢庭にモーゼル銃を構へて、射つた男を狙撃した。廣東クラブのボーイ長であつた陳景山は、脆くも胸板を射拔かれて柩の向ふ側に土甕を墜としたやうに仆れた。

「反動だ！　おまへ達、手を擧げろ！」

長隊長は、何かの拍子にヘルメットを脱ぐと、尖つた聲で誰何した。やゝ不規則な隊伍に塊つた三十五人は、鐵砲やピストルを柵のやうにお互の肩越しに構へた。二哩に近い行列は楔を打たれた長い樹木のやうに、中央を目がけて、後と先とが蹈み込むかに見えた。樂隊は、樂器だけを抱へて、行列から離れてしまつた。彼等の奏する軍艦行進曲（マーチ）は、二發の銃聲を聽き止むべくあまりに高調子であつたのである。赤い旗と旗で聯絡を取つてゐた沖の帆船はぴたりと船脚を止めた。上空にプロペラーを鳴らしてゐた小さな飛行機は、コルク拔きのやうな旋回運動をやつて、近く近くと廣東の陽ぼてりのした部會前へ舞ひ下つた。機上には機關士と操縱士とが、飛行服に身を固めて、潛水眼鏡のやうなゴーグルの下から陸上の混亂を觀察した。その一人は、明らかに、王資平の第三夫人と云はれる女賊燕飛澇にちがひなかつた。

混亂は混亂を生んだ。もう二三發の銃彈が彼我の間に交はされた。見物人は雪崩れを打つて、銘々の店先や、門口や、横丁露地の奧へ逃げ込んだ。そして、この時若い長定奎は糾察隊員としては、寧ろ軍事的な機敏さをその行動に示してゐた。第一に、彼のマヌヴァーの最も時機を得たものは小隊の一人をして中法處へ電話をかけさせたことであつた。次には狙撃の標的を抵抗するもの、頭上はるかの場所に置いて、彼等を傷けなかつたことである。最後に、彼はその陰しげな企

びかの柩を捕獲して、直ちにその錦の飾りを引き剥ぎ、重い自然木を刳り抜いて柩蓋をこぢ開けたことであつた。その間彼れの部下は、いさゝかなりと抵抗の意志を示したやうな葬列の一味を、容赦なく武装解除してゐた。

黒塗りの柩は片身を削がれた鯨のやうに、白い中味を曝け出した。――中からは、巧みな換氣裝置を施した狹い空間に、長い間麻醉劑のほとぼりから醒めて飢えに飢え通した富豪王資平の、人質の隱れ家へ送られる途中の浅ましい姿が躍り出た。鼻血を流して、その迹を嘔汁で塗りこくり、拳や膝頭を血だらけにしたホンコン一二の大富豪が、墓から蘇つた死人のやうに烈しい日光に黒と白との凹凸を見せてゐる長堤の大通りをぼんやり見据ゑながら、起き上つては轉がり、轉がつては柩の縁に船暈に惱む女のやうに凭れかゝつた。

『君は、誰か？――』

王資平は、しばらく人間の言葉に不感性になつたやうに、この質問に對して、白い眼を瞬るだけだつた。やゝあつて彼は長定奎の引金に指をかけたピストルに、その視線を轉じた。

『こゝは、いつたい、何處なのか？わしはホンコンには居ないのか？わしの名は王資平だ。燕飛芳は何處にゐる？……』

この時、部下の一人が、小隊長の傍らへ立つた。

『小隊長、あの一人が自白するところによれば、これは雲南軍系の殘黨の陰謀團らしいのです。恐らく、この男を人質にして、大金をでもせしめようとする誘拐團の一味なのでせう。――只今、本部の方からは、一大隊の糾察隊が至急こちらへ特派されるさうです。』

『はゝあ、さういふことなら、尙更、この男は鄭重にしてやる必要がある。事件の發展によつて、こりあ、我々一小隊がウイスキーよりも大物を捕つたことになるぜ！』

このドラマを、大部分は無智と放心から、口を開けて見惚つてゐた棺舁きや、泣き男、泣き女の一群があつた。それか

二十三

李刀達は、自分の方へ飛んで來る蹴鞠を、どうしても蹴かへさずには居られない學童のやうな焦燥を感じた。ただ、この場合、蹴かへすべき當の對手は、檻禁されてゐる、人間の百萬長者であつた。彼は、いけぞんざいに詰つた。

「阿片？——べらぼうめ、俺に阿片なんかあるもんか！今どき、廣東で阿片なんぞ嚥んでる奴は、反動か、ブルジョアだよ。——さつさと食つたら、そこへころがつて寢てるんだ！」

彼は、取り縋がる王資本を邪慳に拂ひ退けながら、ただ一つのテーブルの上へ、飯と一品の料理とを置いた。

王資本は、しばらく兩手で輪を描くやうに空中にもがいてゐたが、扉を閉めきつて李刀達が去らうとするのを見てとると、いきなり飛びかかつて肩の上へ咬みつくやうに囁いた。

「……金は、金ならいくらでも出す。……わ、わしは、阿片がないと死んでしまふんだ！ね、お前、助けると思つて一服惠んでくれ！　こ、この通りだ！」

李刀達は、高い所から見下すやうに、その底光りのする、獸のやうに黃色い瞳と、陰つぽい兩頰の肉と、わなわなと震へる脣と、まばらな顏の半分に植つた粗髯とを見返へした。これが、ホンコン有數の富豪なのだ。彼れの輕蔑には憎みが混つてゐた。

「阿片を嚥まないで死ぬほど中毒してゐるなら、誰も止めはしない、勝手に死ぬなりどうなりよるがいいや。——放してくれ、俺は用のあるからだだ。」

だが、人間の病的な衝動は、李刀達が放言したほど淡泊なものではなかつた。次ぎの瞬間、彼は、猛然として檻の破目を發見した野獸のやうに、自分を押しのけ、飛び越え、蹂躙し、咬み殺しても室外へ出ようとする阿片中毒患者の狂暴な

襲撃に、手と云ひ足腰と云はず、鐵のピンサアで掴み立てられてゐる自分を見なければならなかつた。襲撃者の眼は、廊下の薄明りに、狼のやうに、それだけが光つた。それは死と格闘してゐる眼であつた。對手は李刀達ではなかつた。深刻な怖れが、番人の全身を襲つた。

一枚の扉の把手を中心に、青年と老人とは、二匹の猛獸のやうに、單純な、殆んど狂暴さのための狂暴をたがひに示し合ふやうな闘爭を開始した。襲ふ方は、無言である。李刀達は、何かしら對手の觀念に訴へようとする本能を持つてゐただけ、稍不利であつた。鐵の萬力のやうな二本の手が、最後に、彼れの咽喉首を四方八方から締めつけるやうに思へた。それは、決して二本の手、腕ではなくて、奇怪な六本、八本、十人分の魔力のやうに思へた。彼はその力の壓搾の下に栗のやうに縮んでしまつた。無感覺のうちに、何をどうしたか知らないが、急にその力から自分が解き放されて、綿弓のやうな音を立てながら廊下の壁へうち當つてゐた。空氣は熱した液體のやうに、大きい音を立てて咽喉へ這入つた。彼は、口といふものの小ささを感じた。飛び出したやうな眼で、第二の襲撃を待ちながら、對手の方を見ると、意外にも、あれほど狂亂した王資平は、誰かに兩足をひつぱつて内側へ吸ひ込まれるやうに、扉へ片手を掛けながら、するすると自分で扉を締め切つてしまつた。その海藻のやうな顔は、たしかに癡者の斷末魔であつた。

「水だ！――」

彈き返へされるやうに廊下を走り出した、窓の下で、一つ曲ると、階段を下りようとするはづみに、彼はばつたり一人の老人に突き當つた。

「水だ、大變だ！」

「李刀達、慌てるには及ばん。王資平は、これからわしが放免してやるんぢや。」

何かの長い柄で、ぐいと片腕を掴へられたので、向き直つた彼は、窓の反對の下に脊丈の高い、鶴のやうな風格の老人

を振り仰いだ。何よりも老人の透き通つた聲と、貴族的な鼻と練り絹のやうな長髯とが、腦天から劍を打ち込まれたやうに、彼を萎縮させた。

『おツ、貴下は……？大變です、富豪王資平は死んでしまひました！』

『まあ、よい。――それも大事ないことぢや。これさへあれば、あの病人はすぐ蘇生するよ。』

老人は眼を細めてほくそ笑みながら、手にした銀製の長いパイプを、重みをはかるやうに持ち直して見せた。

『阿片の、これお、又、どうして？――』

それに答へる代りに、豫言者のやうな白衣の老人は、まだ李刀達の慌てた跫音の殘つてゐさうな廊下を、百萬長者を檻禁してある室へと取つてかへした。本來、この老人に對しては、宿命的に服從しなければならぬやうな自分を、今更李刀達は一種の神祕性をさへもつて考へねばならなかつた。

室内では、泡を吹いてうち仆れてゐる富豪の殘骸を、やつとのことで寢臺の上へ運ぶと、老人は、もの慣れた手つきで、テーブルの上へアルコールランプを點じ、銀の小函からパイプに移した藥脂を、ちりちりと燻し始めた。かすかな呼吸をしてゐた王資平は、やがてその銀のパイプから呼吸すべく、李刀達の指で齒と齒がこぢあけられた。

ちりぢりと、螽の焦げるやうな、阿片の燃える音がした。見るかげもなく富豪の正體を剝ぎ去られた王資平は、深く唸るやうな吐息をした。

『よし、かうして置けば、あとは自由だ。それから、この扉は開けつ放しにしておくがよからう。――』

老人は、かう云つて、もう一度寢臺の上をかへり見ながら先に立つた。

『先生、又妙な所でお目にかかりますな。――いつたい、貴下はどなたですか？私は、貴下の仰せの通り、ホンコンの王英先生のホテルへ參りますと、殆んど息をつく間もなく妙な事件にかかり合ひになりました。それやこれやで、私には

何か何やらまるっきり迷宮の中を歩いてるやうなもんです。……先生、どうぞ、明して下さい！ 私は、自分が何處にゐるかを知りたいんです。何のために、こんな事をしてゐるかを？」

階下へ出て、狭い壁の間から、眼かな、眞っ白い日覆ひに覆はれた、象牙細工の店や藥品店のある横町へ出る扉口まで行くと、李刀達は眼をしばたたきながらかう訊ねた。たしかに、二人は同じ家の別な入口へ出てしまったのだ。始め張宅達ともう一人の市黨部の役人と、三人で這入って來た入口は、そこではなかった。門衞がゐて、暫く王資平を見戍ってゐる間、いろいろな事に李刀達の便宜を計ってくれる筈であったのだ。昨日の事件以來、富豪王資平は廣東政府の珍客として、何かの調査が濟むまであの一室に監禁されて居ったのである。

『わしか、わしはお前の考へるほど不思議な人物でも何でもないのぢや。――まあ、その邊まで歩いて行って、ゆっくり話すとしよう。』

かう云って、老人は長い髯を扱くと、音もなく大股に歩いた。

二十四

その老人の話によると、李刀達は、たしかに自分も無意識ながら、支那の解放運動に從事してゐたことを悟った。彼にとっての、この驚くべき發見は、大東酒店（グレート・イースタン・ホテル）の風通しのいいルーフ・ガーデンに、棕梠の葉蔭に巧みにあんばいされた食卓の上で、吳友仁老人のゼスチユアの多い手によって展開された。

『――での、あんたは、つまり、わしに驚かされたんぢやよ！ それが、そもそもの事の始まりさ。――わしは、何というのかの、謂はば何でも知っとる老人ぢやよ。探偵、といふか、それとも洒落れてインタアナショナル何とかいふか――――それは御推察にまかせるか、たいがいの廣東ホンコンのことは、一度はわしの耳を通ることになっとる』と、云ふ丈

場に居る老人ぢやよ。

「あんたは、あの晩十八甫の人毛賣買業者の表二階へお出でぢやつたろ。あそこは、何だと思はつしやるか？ 表向き、人間の髪の毛を賣買しとる――それは看板、實は南支那の最も惡辣な反動的軍閥の弗箱を勤める人攫ひ團の巢ぢやよ。あの二階な、わしが電氣仕掛でピストルが四方八方から覗いとると、あんたを嚇かし申した、あの部屋はほんとは倉庫なのぢやが、ちよつとの間、わしが無理に借り受けたものぢや。實は、あそこへ持つて行つて、書畫の展覽會を催したよ。夜は、その書畫を入れる唐櫃へ、わしらが歸つたあとでも、ちあんと重役連の祕密會議の會話が、梅蘭芳の歌詞のやうに、蓄音機のレコードになつてそのまま殘るといふ奴、アメリカ製の自動探偵機、デクタフオーンといふのが仕掛けてあつたのぢや。これこそ、ほんとに電氣仕掛よ。はッ、はッはあ――。つまり、わしの方で睨むとこがあつたわけさ。といふのは、この人攫ひ會社は、元來、馬、王、呂、湯、林、陳の五人の惡漢共が下仕事をやり居るが、社長といふものが顏を見せない。いつも、其奴は「上海郵務管理局、私函第3號」ちう名で仕事の手配をさせるのぢや。――いろいろと上海方面をたぐりよせて見ると、電報はいつも上海で中繼ぎされて送られよる。仲繼ぎ人を擧げて見ても、此奴泥を吐かぬ。まあ、そこが直感とでもいふかの、わしは上海からかけて、電報の利く大都會の、目星しい金持ちといふ金持ちをすつかり內偵して――やつと臭いなと思つたのは、その社長、ほら、お前さんが、つい今の今まで摑みあつて喧嘩し居つた王資平ぢやよ！ 此奴は、表向き銀行家と名乘つちよるが、あんたも見て來た通り、あんな手廣い邸を三つも四つも抱へとる。關係筋の銀行をさぐれば、大した株主でもない、取引もほんの言ひ譯ばかり。そこで、わしも考へた――。

「一つ此奴の弱點からつけ入らうとな。人間、どんな鋼鐵の甲冑を着てゐても、どんなに宗教道德で氣持ちを固めても、元來が凡間ぢや――動物ぢやよ。そこで、色情、な、これが十中の八九まではトランプさ。と云つたわけで、わしは、腕利きの女探偵をこの春から王資平の第三夫人、といふことにして入り込ましたのさ。純然たる細工だ。何仕掛けだ。常

人、その方は達者なものだ。死んで行つたよ。どこから見ても、あの通りの妖婦ちやから、惜しいもんだ、あれにはほんとの戀が出來れば探偵なんぞはさせて置かんのぢやがのう。美しい、それこそ、これも何かの電氣仕掛けみたいな女よ！　：：でな、間もなく通牒があつた。によると、やはり、電報は王資平から出て居る。で、確證を得ると、わしは、五人の惡漢が親方を知らぬを幸ひ、一つ面白い芝居を打つて、奴らを一網打盡に自滅させてしまはふと思つたのぢや。わしの方がどうかするとよほど惡黨かもしれんて。――王資平の最後に打つた電報は、わしが南京蟲のやうに捻り殺したのぢや。そして、その代り五人の惡漢あてに、やはり同じ暗號で、五人を王資平に向はしたのぢや！

『……さあ、五人は躍起となつて、自分達の親方を誘拐しにかかつた、その手筈を、わしが壁一重の所から聽いとるといふ次第さ。こんないい氣持ちなものはない。王資平をやつつけるなら、きつと親方は共產黨だらう――などといふ意見も出をつたよ。まあ、わしはその黨には屬せぬが、ともかく現在の廣東政府には、何かのつながりで列席しちよる筈ぢや。さうかうしてゐるうちに、妖婦燕飛芳、即ち、わしの女探偵、かの女と惡漢の一人の間に乙な提携が出來上つたわけよ。どうかして王資平を、英國の官憲の手の屆かぬ場所へ誘き出さうといふのが、惡漢共と、こちらとぴつたりうまの合つた話さ。ただ、惡漢共は、それを自分の親方とは知らずに實行するといふ皮肉が、一つの景物ぢや。といふ矢先に、あの沙面事件！　ああいふ突發事件になると、われわれ天啓に乏しい動物ではどうとも出來んものぢや。世の中には、探偵出來得るものと出來んものとがある。世の中に謂す探偵の役割なんぞは、まあ、淺墓なもんぢやよ。――ところが、あの事件で、五人は急ぎ出した。こちらもそれをいいしほに、やれるところまではやつて見ようと燕飛芳へ傳へてやつた。恰度、そこへ、網にかかつたやうなのは、失禮ぢやが、李刀達さん、あんたぢやよ。わしらは、あのどさくさの最中にも、あるどさくさであればこそ、かなりこの廣東を見張つてゐたんぢや。その見張りのいい目星になつたのが、至極小說的な空想を抱いて居られるあんたぢやつたのぢや！　さつと、まあかい摘んで云へば、あんたがわしらの最も巧な手先を勤めてく

れたのはさういふ次第ぢや。

『あんたがホンコンへ立たれてからも、わしは英國の官憲が、どれほどあんたを知つとるかを調べに、妙な交換條件を持ち出して、それとなく内意を探ぐつたこともあるのぢや。いや、もう、この商賣は四方八方に氣を配らんと、一方だけの見方では、魚が網から洩れるでのう。それからあとの話は、大部分あんたの御經驗どほりぢや。ホンコンの王英先生といふのは、これもわしの同僚で、昔は孫文や黄興君などと、同じ中興會の仲間さ。さきほど、王英君から通信があつて、燕飛芳とあんた方二人の對決などは素晴しい芝居であつたと來居るが、まあ、そのへんまで手の込んだ仕事をせんと、何せ先方は、大仕掛に三百五十人もの人數を驅り集めて出かけたんぢやから、發覺したら、奴等の道德として殺すのは慈善事業ぐらゐに考へとるからのう。眞劍だ。ただ、惜しいことには、張定奎君が少しやり過ぎて、帆船の梁鴻楷の手先を逃がしてしまつたことぢやよ。彼奴らは現在の廣東政府にとつても兎角の邪魔者なら、英國側の金で動く獅子身中の蟲ぢやよ。これだけは惜しかつた。――さうして、折詰にしてここまで運んで來さして置いて、さつきあんたが王を介抱しをつたらう、あすこへちやんと運び入れて、それから奴等を擧げるつもりぢやつた。ところが、ここに又探偵の仕事の淺墓な事實を證據立てる突發事件――あの糺察隊との衝突ぢやよ。もう、かう民衆運動が烈しくなつて來ると、わしらの仕事は小さな頭腦の中の計畫だけに終るも同然ぢや。しかし、一面、張定奎君のおかげで、こちらはさほど警官を動員せずとも濟んだわけぢや。それに、馬、陳の二人は、わしらの手を經ずに死刑になつてしまつたといふ便宜もあつた。――そこで、わざわざホンコンから變裝してまで、王英君の云ひつけ通り、奴等を送り込みに來られたあんたの、終始一貫、多方面に亙つてかくも盡力して下された人攫ひ團事件は、人攫ひ團の關する範圍だけでは目覺ましい大團圓を結んだといふわけぢや。……そこでこの事件に、間接ではあつたが、最も功勞のあるあんたのために乾杯しませう！ 乾杯に次いで、わしは、あんたをどういふ風に出世させて上げたらいいものか、それを篤と考へたいのぢや。――』

話の大部分に就いて眼を圓くしてゐた李刀達は、この時、むつくりと頸を擡げた。
『僕は、××××になりたいです！』
ここで、呉老人は、棕梠の葉を戰かすほど高く笑つた。
『稚氣、實に愛すべき人ぢやよ！』と云つて、彼は銀髯の間に一段と言葉を低めた。
『――したが、それは、階級意識の問題での。まあ、その方はその方で、調べるところではちやんと調べて居るだらうから、むしろむきになつて、掛らぬ方がよろしからうて。ともかく、わしは、あんたの階級的直感を、現在の省港罷工工人代表大會の幹部へ推薦して置かうよ！』
と云ひ終つて、呉友仁老人は、もう冷えきつた老酒のコップを、多能なしなやかな右の手で、西洋人流に差し上げた。

二十五

いつの間にか、支那は、英國と戰爭を挑んでゐた。
世紀を通じて、この戰爭だけは、宣戰布告なしに開始された。
白手套に、燕尾服を着たブルジョア外交官の、社交舞踏會のはねのやうな、形式的な入り替りと、婉曲に自國の非を掩ひ、敵對國の權利侵略が――その存在が、自國を一切の武斷的侵略にまで導いたのだ、といふ、それ自身に於て矛盾した宣戰布告の發布がなかつたと云つても、この珍らしい戰爭には、殆ど他のどんな戰爭にも見受けられぬやうな新鮮な偉大なものが閃めいた。
それは、世界一のブルジョアジーを誇る、最尖最鋭に、帝國主義者と、始めて國際的に目醒めたプロレタリアートとの、決定的な戰爭であつたからだ。

そこに意義づけられる近代的特色は、プロレタリアート國は、ブルジョア帝國のやうに、巨億の軍費と、軍艦と植民地と軍隊と、最も科學的に敵國を震駭せしむる武器とを持たなくとも、猶よく一年半の戰鬪を持續し得るといふ、一つの戰法であつた。

支那は、然らば、××××英國に敵對したであらうか？

消極的戰鬪方法である！

單元的に、在來までの戰爭の持つ政治的意義を、經濟鬪爭から切り離して、經濟戰は經濟戰をもつて鬪ひ、しかもなほ新しい政治的意義を贏ち取つたのである。——もう一言、別に云ふと、それは、敵國の政治家が戰爭に與へるブルジョア・イデオロギーを剝ぎ取つて、プロレタリアの戰爭として、それを鬪つたのである。——明かに、この消極的戰略には、積極的なものがあつた。尠くとも、敵の戰鬪方法に非常な番狂はせと、口實のつけやうに困らしめた、一種のパルテイザン的戰爭が、この廣東の對英經濟絶交であつた。

英國が海軍と軍隊とを差遣しようが、そこには支那の群集がうようよしてゐるだけである。そして、領土侵略の、いかに古めかしい戰爭であるかは、英國の海陸軍の首腦部は、歐洲大戰の苦がい經驗によつて良く知り盡くしてゐた。しかし、さうかと云つて、默認して置けば、これらの群集は、南京條約以來英領土となつたホンコンの利權を奪回し、東洋から英國の根據を根こそげ顚覆しようとするのだ。——××××？

海外への××、アッピールによつて。經濟力の××によつて。根強い排外思想の鼓吹によつて。半植民化されて來た群集の間に、一切の外國人は×××××であると×××××ことによつて。支那に資本主義なし、ただ在るのは海外輸出資本を中心としたブルジョアジーのみであると、群集を教へ込むことによつて。これらの××とアッピールとが、英國々内のプロレタリアートによつて××されぬわけはない。どんな保守的な英國の政治家と雖も、他民族の階級鬪爭への武力的

勞働者と地方農民の大衆は、さういふインテリゲンツィアの高等政策とは無關係に、各自の××した××を擧げて、絶對に大會の意志に××して××した。組織に慣れるまでにはそこに多少の干犯もあり、過失もあつた。しかし、本來が彼等の間から生れた、××××××である。自分の階級を前後左右に發見する時に、あまりに甚だしい飛躍的な過失は犯し得ないのである。各部門は大會の現定した機關を通じて雜然としながらも、軌道を滑る惑星のやうに回轉した。

一個月、二個月――かうして彼等の運動が進出して行く間に、ホンコンを經由しない汽船や河船の數が非常に殖えた。又二百五十艘しかない支那全體の船が俄かに噸數を増して行つた。それだけ英國の海運業に打撃を與へたのである。廣東政府は、前年よりも、罷業を開始してから四千八百萬元の貿易が増したといふ表を揭げて、廣東地方の生産加工業の進行を報告した。中央銀行の紙幣は、全社會の支持を受けたゝめに、今までの地方政府の紙幣價値から一轉して、殆んど全國的價値をもつて光り出した。今までホンコンで行はれた、海産物、綿、石炭、雜貨、セメントなどの取引市場は、海を越して廣東へ移つた。國民黨は、この罷業を一契機として、孫仲山の遺訓に基いだ新國家の建て直しにまで見透しをつけた。黄埔軍官學校は、ロシアから歸つた蔣介石を校長として、赤衞軍的組織のもとに、在來までの傭兵や民軍のだらしない集團を、國民革命軍に改組した。今まで四十五の勞働團體しかなかつた廣東は、急激に百以上にも増して二十萬からの勞働者がこれを支持した。

これらの事柄、明かに英國人の認めない戰爭に對して戰爭を挑んだ支那人が勝つたことを物語る數字なのである。この無形の大戰爭が、ホンコンと廣東を戰線にして、靜かな灰色の大暴風雨がひたひたと地平線を壓迫して動いて來た最中、もう一つの、呉友仁の先見し得なかつたやうな事件が突發して、鮮かに革命支那は二つに分裂する最初の龜裂を見せたのである！それは、八月十九日の夜の廖仲愷の暗殺事件である。

私は、この小説を通じて、讀者にいろいろな人物の存在を報告した筈である。支那の革命が、われわれ日本人の考へる

やうに單純でないことを知らしめるためにも、それらの實在的乃至は架空的人物の存在理由は動かすべからざることであつた。すべての小説の作家のやうに、私もこの小説の中に出沒する各種の人物の決定的な方向の暗示に對しては、ある程度までの責任を負ふと思ふのである。

そこで私は、廻轉椅子のスミルノフが、どういふ關係から、彼れの友廖仲愷の死を知つたかを述べる必要に迫られる。

その夜の情景はざつとこんな風であつた。――

夜になると、巨漢スミルノフは、廣東市の革命的方角に向いた。鸚鵡の頭のやうに擦り減つた、廻轉椅子の上を離れる習慣を持つてゐた。それは、椅子に必要がなかつたからではなくて、夥しい電燈の數を誇りながらも、さすがに夜の暗黒は、廣東の市街面から、大部分の彼れの觀察對境を奪ひ去つたからである。椅子を離れた彼は、夕飯を濟ますと、亞洲酒店の三階を陣取つてゐる自分達の同志將校や、新聞記者、技師、事務員などと、何處の室何處の隅とはなしにいろいろな世間話に興ずるのであつた。支那人側の宴會でもあれば出るし、特別な名指しの訪問客でもあればその人間に會ふ。そしてどういふ形の啖壺に唾を吐いて居ようとも、彼れの唇の間には、いつも同じ大型のパイプが挾まれてゐた。

最近の廣東には、スミルノフには、一晝夜を二十四時間だけしやべり續けても話切れぬほどの話題があつたのである。――それらの無數のエピソードの發生は、主として廣東市民の間に旺溢する革命的情勢にあつたことはむろんである。その情勢をいろいろなエピソードに發見するには、別々な觀點を必要とはしなかつた。いつものスミルノフの體驗的な批判が、大部分の觀察の規準をなしてゐる。八月十九日の夜、小男の廖仲愷は、いつものやうに大股に歩きながら、一人の不思議な老人を同伴して、スミルノフに引き合せた。

『これは、同志ユーヂン・ウー君です。ウー君は、私達の間にはなくてならぬ物識りです。凡ゆる事を知つてゐる――犯罪學のエンサイクロペディア、未來の警視總監です。同志とは云ひましたが、ウー氏は實はわれわれの大先輩なので

す。」

アメリカ仕込みの廖仲愷の英語は、スミルノフをしていつも自分のシカゴ時代を思はせるやうな、どこかひなびた活動的のものがあつた。それに反して、今紹介されつゝある白髯の老人は氣取つた外交官のやうな、圓滑な英國訛りを持つてゐた。三人は握手して、めいめいの椅子へ腰を下した。その晩は、都合よく、スミルノフはその部屋で近着の「プラウダ」の束の皺を伸してゐたところであつた。

「今、役所からお退きですか？」

スミルノフの問ひに對して、廖仲愷は、てかてかコスメテイックを塗つた頭をふつた。

「いや、今夜はちよつと招待されてゐましてね。――これから、御覽の通り、宴會へ行くところです。どうです、私のタクシード姿は？これでも、アタミでヨツフエ氏にお會ひした時は、自動車社會主義者と綽名された好男子ですよ！」

いつになく上機嫌な彼は、その東洋流にとゝのつた顔に、健康さうな血を漲らして、出來るだけ自分を諧謔的に取扱はふと努めるのであつた。見れば、いつもの大きい鞄がない。

「廖仲愷君は、これからある親しい若い、美しい、婦人同志の宅へテタ・タートに行かれるところです。それで、この老人が、途中まで護衛の役とは、人間老人にはなりたくないものですな。」

與老人も、こんなことを云つて笑ひ興じた。

「それは危い、外の宴會なら兎もかく、さういふ種類の宴會はつとめて避けられた方がよくはありませんか？」スミルノフは眞顔でかう云つた。「――つまり、貴下の奥さんに暗殺されるかもしれない！」

と云つて彼は、河馬のやうに笑ひ出した。と、續いて、この間廖仲愷を財政廳へ訪問した歸るさの、不思議なもとの城内の苦力達の行く酒場へ迷ひ込んで、いろいろな名前を支那語で呼び上げると、その都度苦力達の表情が變つた事を話し

て聞かせた。

『――で、どうして蔣介石すら、あんなに勞働者の間に味方がないんでせう？何か、かう憚るところのある人のやうに……？』

『さあ――』

廖仲愷は、時計の微妙なぜんまいのやうに、黑い瞳をまはした。スミルノフは、不意にこんな質問を出した自分を後悔した。苟しくも、表面では同志を裝うてゐる軍人に就いて、その同志らしく思はれる人から意見を聽取することは、それだけでも誤りであるに相違ない。答へは吳友仁老人によつて、より確定的にされた。

『どうも、私共中華國民は、未だに大部分の封建主義から解放されてゐないんです。いつも、三人の人間が集まると、そこに權力が生じます。わしは蔣氏を反動だとは思ひません。しかし、貴下を同志としてお話すれば、蔣氏は御覽の通り軍隊以外の政治部員をあまり好んで居りません。――稍もすると、それを排斥するやうな。ぢやて、勢ひ貴下がたの勢力の、いや御免なさい、組織の力の行屆いてゐる廣東大衆にとりましては、むしろ、軍部に於ける統率者としての力倆や、市街戰のマヌヴァーなどに於ける彼を信賴するとしても、最近よく政治に干渉したがる彼を好まんのですよ。――實際わしの見ましたところでは、政治家としての彼は古い北方軍閥の亞流を出ないものですよ。』

かういふ國民黨内の個人的批判に就いては、支那語の解らないロシア人はただ好奇心そのものであることに止まる以外には能はなかつた。スミルノフは、やたらに煙草をふかして、その不潔な煙が煽風機によつて、對手の顏へ吹きかけられるのを目擊しただけである。さうしてゐるうちにも、廖仲愷は、急にそはそはし出して歸り支度になつた。

『急ぎますか？――』

『ええ、ちよつと、實は少し重大問題で會見する人があるので……』

呉老人は人の好ささうな諧謔を續けた。

『この老人がそろそろお邪魔になりかけたのですな？』

それに對して、廖仲愷は、猝としてちよつと吃りながら眞顏で打消した。

『重大問題で――ちよつと私でなくては解らん事柄なのでしてね。』

『よろしい、同志廖仲愷、行つてお出でなさい！だが、この間御忠告したこと、あれだけは忘れられんやうにね。』

ここで三人は、あとから考へると、必要以上の强い握手を交はした。呉老人は、それから約二十分も話し込んで歸つて行つた。

その三十五分過ぎぐらゐに、慌しくスミルノフの室の前の廊下が、誰かによつて踏み鳴らされる音と、衞兵の誰何する聲とが聞えた。ブハーリンの雄辯から眼を上げたスミルノフは、思はず新聞をテーブルの下へ押し退けて居つたのである。

扉口には呉友仁老人と、もう一人の若い支那人とが、二本の劍附鐵砲によつて胸へ十字を組まれながら、這入らうとしてあせつてゐる姿が眼についた。スミルノフは、衞兵に、通してもよろしいと命じた。

『廖――廖仲愷同志は、そ、其處の大通りの角で暗殺されてゐます！――早く、早くおいでなさい！』

沈着な老人の表情が、殆んど暴風雨の下を潜つて來た人のやうにかき亂れてゐた。

スミルノフは、老人の頭上の鎌と槌の紋章に眼をやつた。

『暗殺――』

彼は、自分の言葉を口からふさぐやうに拳をそこへ持つて行つた。思はずテーブルから轉がり落ちたパイプは、エボナイトの乾き加減でぽきりと二つに折れた。その上を、無雜作に踏んでスミルノフは廊下へ飛び出した。外の支那人二人も

彼に續いた。

その夜は、暗く、生あたたかく、市街の間に珠江の呼吸苦しい水蒸氣が溜つてゐた。導かれて行つた町角には、三人の警官と十五六人の勞働者によつて、黒い花束のやうな輪を造られた死骸が、うつ伏せになつて轉つてゐた。大きいロシア人が、群集を掻き分けて抱き起して見ると、貴公子のやうな顔立ちをした、英國紳士風な口髭の廖仲愷だつた。手足はすつかり冷え切つてゐる。脊中からの貫通した彈丸らしいものによつて胸のホワイト・シャツは、熟した茘枝の果のやうな斑點で赤らんでゐた。

『同志廖仲愷！』

スミルノフは、思はずロシア語で叫んだ。誰も、その孤獨な言葉に應ずる者はなかつた。次ぎに、彼はきつと顔を上げて、取り圍んでゐる群集を疑はしげに睨めまはした。彼れの若い眼に映じたものは、抽象的なイデオロギイ『親愛』の表情としての、勞働者達の涙と悶絶するやうな手振りであつた。しまひに、スミルノフは、吳老人の同伴した便衣服の若い男を顧みた。

『これは誰です！』

かう英語で訊ねると吳老人は、片手で空氣をきりながら、淡白に答へた。

『これは、御心配いりません、糺察隊支部長の李刀達といふ革命青年です！』

（丁）

定價		
	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年八月十八日印刷

昭和四年九月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

印刷人　竹内喜太郎　東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ内ビルヂング五八八區

中央公論社

電話丸ノ内二〇六番

振替東京二三四番

同長野三二〇五番



ギバ体温計
新マツダランプ
内面艶消
内面艶消は最新最良の特許電球にて
絶對に他に比類すべきものなし
平型

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly

Terms of Subcription: Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.